

野々市町御経塚遺跡

野々市町教育委員会

野々市町御経塚遺跡

野々市町教育委員会

序

御経塚遺跡は、野々市町の文化のあけぼのを示すもので、繩文時代の大集落跡であります。近時、野々市町は都市化の波をまともに受け、県内唯一の人口急増地帯として発展してまいりました。遺跡周辺部もその例にもれず、昭和40年代中頃には、現国道8号線が、また、石川広域農道が相次いで完成いたしました。このころから、遺跡の重要性が研究者の方々を中心に叫ばれるようになりました。

申すまでもなく、土中に眠る埋蔵文化財は、先人の貴重な文化遺産であります。保護、保存の万全を期し、後世に承継していくかなければならないことは、わたくしたち現代に生きる者にとって当然の責務であると存じます。

このような見地から、野々市町は、先に史跡公園として完成した末松庵寺跡と同様、遺跡を調査し、緑地保全も加えて環境を整備する方針で、地元御経塚町の皆様の賛意を得て、昭和48年度から、国庫補助金ならびに原費補助金を受けて、緊急発掘調査を実施してまいりました。調査は従来の成果をふまえて、石川考古学研究会会長高尾勝喜氏にお願いし、石川考古学研究会会員の方々のご協力を得て実施いたしました。また、調査に際しては、現奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏をはじめ同研究所職員、文化庁記念物課職員の方々のご指導ご助言を得ました。そして、地元御経塚町の皆様には、調査のみならず、史跡指定ならびに指定地の公有化に際しても、多大のご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

また、この調査報告書の作成にあたっても、第1次調査より終始調査の陣頭指揮にあたられた高尾先生を中心にしてスタッフの方々が膨大な出土品の整理をはじめ、原稿執筆から校正まで献身的なご尽力をいただきましたことを、かさねて深謝申し上げるものであります。

この報告書が、学術書として活用されるとともに、広く一般の埋蔵文化財に対する理解を深めひいては、貴重な遺跡の保存に資することを願ってやみません。

今後、これらの成果に基づいて、史跡指定地の保存整備ならびに活用と出土品の保管展示施設の建設に全力をあげてまいる所存でありますので、関係各位の皆様の尚一層のご指導とご支援を賜わりますよう謹んでお願ひ申し上げる次第であります。

昭和56年3月

石川県石川郡野々市町長 西 尾 修

例　　言

1. 本書は石川県石川郡野々市町所在御経塚遺跡の第2次調査から第13次調査までの報告である。
2. 本遺跡の第1年次調査（通算第5次調査）から第8年次調査（通算第13次調査）までの発掘調査は、野々市町教育委員会が実施した国庫補助事業である。
3. 石川県教育委員会が実施した第2・3・4・8次調査出土の遺物整理については、昭和54年石川考古学研究会が石川県立埋蔵文化財センターから委託されたものであり、昭和55年度の整理事業は石川県埋蔵文化財協会に引き継がれた。
4. 本書の編集は高堀勝喜が担当し、滋井真と山本直人が協力した。なお、御経塚遺跡保存会会長市村正規氏から格別の理解と支援を得た。執筆分担は次の通りである。

高堀勝喜	第1・2・3・4章、第5章第1節1～5、第5章第2節(共)、第8章。
川端敦子	第5章第1節6。
河村裕子	第5章第2節(共)。
山本直人	第6章第1節1～7・13。
吉田裕雪	第6章第1節8～10。
辻森由美子	第6章第1節11・12、第6章第2節。
藤 則雄	第6章第3節(共)、附章1(共)。
平元悦子	第6章第3節(共)。
滋井 真	第7章。
丹羽千枝子	附章1(共)。
渡辺 誠	附章2。

5. 御経塚遺跡のうちの14,897m²は昭和52年3月8日文部省から史跡として告示され、同年末公有化された。
6. 第5～7・9～13次調査の出土遺物は、史跡に隣接する野々市町埋蔵文化財取蔵庫に保管され、一部は展示されている。
第2・3・4・8次調査の出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターに保管されている。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査の経過	(高堀勝喜) 1
1. 既往の調査	1
2. 今次の調査	2
第2章 立地と周辺の遺跡	(高堀勝喜) 12
第3章 遺跡の範囲と集落の形態	(高堀勝喜) 15
1. 遺跡の範囲	15
2. 集落の形態	21
第4章 繩文時代の遺構	(高堀勝喜) 23
1. 住居址	27
2. 炉 址	30
3. 土 坡と配石遺構	35
第5章 繩文土器と土製品	51
第1節 繩文土器	(高堀勝喜) 51
1. 北陸の縄文後・晚期土器型式編年研究	51
2. 住居址出土の縄文土器	58
3. 炉址出土の縄文土器	74
4. 土坡出土の縄文土器	82
5. 調査区出土の縄文土器	99
(1) 潟見式土器	99
(2) 御経塚I式(井口II式)土器	105
(3) 御経塚II式(井口II式)土器	118
(4) 八日市新保I式土器	127
(5) 八日市新保II式(八日市新保式)土器	136
(6) 御経塚III式(御経塚式)土器	147
(7) 中屋I式(中屋式)土器	159
(8) 中屋II式土器	169
(9) 下野式土器	177
6. 底部と圧痕	(川端牧子) 195
第2節 土製品	(高堀勝喜・河村裕子) 210
1. 土 偶	210
2. 土 版	222
3. 土製耳飾	222
4. 環状土製品	224
5. 瓢面土製品	224
6. スタンプ形土製品	224
7. 有孔球状土製品	224
8. 球状土製品	227
9. 土製円盤	227
10. その他の土製品	227
第6章 石器と石製品	229
第1節 石 器	229

1. 打製石斧	(山本直人)	229
2. 石 剣		240
3. 磨 石		241
4. 敲 石		244
5. 石 斧		250
6. 磨製石斧		253
7. 円盤状石器		253
8. 石 鍤	(吉田裕雪)	254
9. 石 鑿		267
10. 石匙及び不定形刃器		268
11. 砥 石	(辻森由美子)	269
12. 摺切石器		269
13. 小 組	(山本直人)	271
第2節 石製品	(辻森由美子)	274
1. 御物石器		274
2. 石 級		274
3. 鏽節形石製品		277
4. 石錐形石製品		277
5. 石棒・石劍・石刀		280
6. 装飾品		280
7. 砥石状石製品		283
8. 岩 版		286
9. その他の石製品		286
第3節 遷文後～晚期御経塚遺跡の石器圈	(藤 則雄・平元悦子)	287
緒 言		287
1. 遺跡の立地環境		288
2. 御経塚遺跡の考古学的編年と文化的背景		288
3. 御経塚遺跡出土石器の石材		289
4. 御経塚周辺の遺跡の石器圈		295
5. 総 括		298
第7章 弥生時代以降の遺物	(溢井 真)	304
附章1 御経塚遺跡の古環境解析	(藤 則雄・丹羽千枝子)	315
緒 言		315
1. 地形要説		315
2. 遺跡とその周辺の現植生		317
3. 遺跡の花粉学的研究		320
4. 遺物包含層の礫の存在		336
5. 結 論		337
附章2 織布およびカゴ底圧痕について	(渡辺 誠)	339
1. 織布(アンギン)圧痕		339
2. カゴ底圧痕		341
第8章 総 括	(高堀勝喜)	347

図 版 目 次

1. 上 遺跡遠景 西から.....	361	14. 上 第216号土塙.....	374
中 第5次調査区全景 西から.....	361	中 第205号土塙.....	374
下 第5次調査区近景 南から.....	361	下 第202号土塙.....	374
2. 上 第6次調査区全景 南西から.....	362	15. 上 土器検出状況.....	375
下 第6次調査区近景 南から.....	362	中 第1号配石遺構.....	375
3. 上 第7次調査区全景 東から.....	363	下 第3号配石遺構.....	375
下 第7次調査区全景 南から.....	363	16. 上 東区大溝土器出土状況.....	376
4. 上 第3・4号住居址.....	364	中 土器出土状況.....	376
下 第5号住居址.....	364	下 西端晚期土器出土状況.....	376
5. 上 第2号炉址.....	365	17. 土器出土状況1.....	377
中 第14号炉址.....	365	18. 土器出土状況2.....	378
下 第20号炉址.....	365	19. 土器出土状況3.....	379
6. 上 第6号炉址.....	366	20. 土器出土状況4.....	380
中 B第3号炉址.....	366	21. 土器出土状況5.....	381
下 B第1号炉址.....	366	22. 土器出土状況6.....	382
7. 上 第21号炉址.....	367	23. 土器出土状況7.....	383
中 第19号炉址.....	367	24. 上 御物石器出土状況.....	384
下 B第2号炉址.....	367	中・下 石棒出土状況.....	384
8. 上 第5号住居址炉址.....	368	25. 上 石劍出土状況.....	385
中 第3号住居址炉址.....	368	中・下 石刀出土状況.....	385
下 第4号住居址炉址.....	368	26. 上 石鏗形石製品出土状況.....	386
9. 上 第71号土塙.....	369	中 石冠出土状況.....	386
中 第3号土塙.....	369	下 土偶出土状況.....	386
下 第1号上塙.....	369	27. 酒見式土器.....	387
10. 上 第9号土塙.....	370	28. 御経塙I式土器1.....	388
下 第56号土塙.....	370	29. 御経塙I式土器2.....	389
11. 上 B第64号上塙.....	371	30. 御経塙II式土器.....	390
中 B第14号土塙.....	371	31. 御経塙II式土器· 八日市新保I式土器.....	391
下 第63号土塙.....	371	32. 八日市新保I式土器.....	392
12. 中 B第9・10号土塙.....	372	33. 八日市新保I式土器· 八日市新保II式土器.....	393
下 B第17・18号土塙.....	372	34. 八日市新保II式土器· 御経塙III式土器.....	394
13. 上 B第13号土塙.....	373		
中 B第10号土塙.....	373		
下 B第12号土塙.....	373		

35. 御絆塚田式土器	395	61. 石鍤	421
36. 中屋 I 式土器 1	396	62. 上 破打石鍤	422
37. 中屋 I 式土器 2	397	下 円盤状石器	422
38. 中屋 II 式土器 1	398	63. 磨製石斧	423
39. 中屋 II 式土器 2	399	64. 上 砥石	424
40. 下野式土器	400	下 砥石状石製品・擦切石器	424
41. 橢文土器	401	65. 上 御物石器	425
42. 条痕文土器	402	下 石冠	425
43. 底部压痕と同モデリング陽像	403	66. 石冠	426
44. 土偶 1	404	67. 石製品	427
45. 土偶 2	405	68. 上 鹽節形石製品	428
46. 上製品	406	下左 石鐘形石製品	428
47. 打製石斧 1	407	下右 石劍	428
48. 打製石斧 2	408	69. 石棒・石劍・石刀	429
49. 打製石斧 3	409	70. 土師器・須恵器	430
50. 打製石斧 4	410	附 1 - I. 花粉 1	431
51. 打製石斧 5	411	附 1 - II. 花粉 2	432
52. 打製石斧 6	412	附 1 - III. 花粉 3	433
53. 打製石斧 7	413	附 2 - 1. 上 編布压痕と同モデリング	
54. 打製石斧 8	414	陽像	435
55. 石皿 I 類	415	下 韓國製カゴと	
56. 石皿 I・II・III 類	416	カゴ底压痕第 1 類	435
57. 石皿 IV 類	417	附 2 - 2. カゴ底压痕と	
58. 磨石	418	同モデリング陽像	436
59. 敲石 1	419		
60. 敲石 2	420		

第1章 調査の経過

1 既往の調査

御経塚遺跡は、石川郡野々市町御経塚（旧石川郡押野村字御経塚）の集落東寄りに位置し、明治末年に実施された耕地整理で発見された遺跡である。若干の遺物は同区の荒川敬長氏方に保管されていたが、発見以来、相当の年月を経過しているため、遺物の出土地点は関係者の間でも忘れられていた。

押野村は、昭和30年、町村合併により金沢市・野々市町に編入・合併することになり、永い村の歴史に終止符を打つことになったので、解村の記念事業として村史を刊行することが決定され、翌年、石川郡押野村史編集委員会が組織された。筆者は、その前年に同村教育委員会の協力で、八日市新保遺跡（金沢市新保本町 チカモリ遺跡）を発掘した関係から、村史の編集を委嘱された。よって「石川県五学会連合」にはかかるて『押野村の調査』を「五学会連合」の共同調査として実施することとし、その結果を「五学会連合研究発表会」と『押野村史』に発表することとした。

御経塚遺跡の第1次調査は、「五学会連合、考古班」の事業として筆者が担当し、昭和31年3月、補充調査を含めて3日間実施した。きわめて短期間の調査であったが、これまで伝世品または表面採集品として伝えられたにすぎなかった「御物石器」を埋納した遺構を検出するという大きな成果をあげた。それと伴出した縄文土器は、筆者によって「御経塚式七器」と名づけられ、北陸の縄文時代晚期前葉前半に位置つけられた（高堀1969）。これにより御経塚遺跡は、「御物石器」を発掘によって確認した唯一の遺跡であること、北陸の晚期前葉前半の「御経塚式土器」の標式遺跡であることで学界に知られ、やがて国の「重要遺跡」に登載されるに至った。

第2次調査は、昭和43年秋、「金沢バイパス」（国道8号線）の側溝開削工事中に遺物が出土していることが注意されたことにはじまる。野々市町教育長中田 哲氏は、工事を一応中止させて県教育委員会と協議し、路線部面の発掘調査を行い、工事の続行如何は、その結果によって判断することにした。この調査は、両教委からの調査依頼により、第1次調査を担当した縁で筆者が次の条件で調査を担当せざるを得なかった。すなわち、バイパスの路面は北陸線を陸橋で通すため、既に0.5~2mの高さで土盛りがなされているから、路線構造に沿って幅2mのトレンチを設けて発掘調査を行い、これと並行して遺跡の範囲確認調査を行って遺跡のひろがりを追及することにし、これに基づき納得できる遺跡保存計画案が示されば、工事はトレンチ調査終了後ただちに再開することで、調査團を編成することができるとしたのである。この条件が合意されたので、県出身の早稲田大学3年の谷内尾智司君に連絡し、柳沢清一君ら7名の同大学考古クラブ員の来援を得ることができたのである。調査團は御経塚公民館に7日間合宿した。

この調査では御経塚遺跡は、半径約200mの円形に近い集落跡で、平地に営まれた遺跡としては全国稀有の大集落跡であること、集落は中央に広場とみられる低地を挟んで二つに分かれ、馬蹄形に近い形態をとっているらしいことなどを考えられるに至った。

遺跡の周辺は、第1次調査の頃は、まことに牧歌的な農村風景であった。ところが、10年余りを経過した時点では、かつての農村は都市化へと大きく姿容しつ、あった。金沢市は西南部へ急激に膨張発展をとげ、遺跡周辺はその影響を直接的に受けている。この状況から推測すると、10年後には、この周辺はほぼ都市化され、遺跡は住宅建築の下に埋没してしまうことが十分予測されたのである。ここにおいて県、町両教委と筆者が代表幹事となっている石川考古学研究会、それと地元御経塚区有志（現御経塚遺跡保存会会長市村正規氏）らの三者の間で、本遺跡に対して史跡として指定保存する方向で、緊密な連絡を保っていくことが話し合われたのである。

第3次調査は、遺跡の北側にあたる金沢バイパス取り付け農道（現石川広域農道）を両側に各2m拡幅することに伴うもので昭和48年8月に実施した。

第4次調査は、金沢バイパス西側車線を供用することに伴う調査で、昭和48年7月～8月に実施し、8月は第3次調査と一緒に並行して行った。

第3、4次調査は、石川県教育委員会が実施し文化財保護課の専門職員が現場発掘責任者となつたが、両次とも第1次調査以来の関係で筆者が調査主任を委嘱されている。

第8次調査は、上記大規模農道の国道8号線（旧金沢バイパス）乗り入れ道整備に伴う調査で、石川県教育委員会文化財保護課の専門職員が発掘責任者となり、筆者が前例にならい調査主任を委嘱され、昭和50年11月から3月にかけて実施した。降雪時にあたっているので、発掘部にビニールハウス用の鉄パイプを建て、ビニールで覆って雪を防ぐ状況の中の調査であった。

第3・4次調査団

調査主任 高畠勝喜 調査指導 楠本澄夫係長 現場主任 高橋 裕主事
調査員 荒木繁行 安村律義 清水庄吉 安村敬学 清水茂樹（以上石川考古学研究会）
協力員 米沢義光 御経塚区有志 金沢市稚日野町・北塚町・南塚町有志
幹事 河崎与志雄主事

第8次調査団

調査主任 高畠勝喜 現場主任 湯尻修平主事 芝田 智技師
調査員 清水庄吉 安村敬学 西野秀和 宮岸久司 塚野秀章 米沢義光（以上石川考古学研究会）
調査補助員 古口則夫 原田 勇 小林 博 伊藤隆延（以上金沢大学）西田啓一 辻本 駿
調査協力員 御経塚町、金沢市北塚町・稚日野町有志
幹事 崎川義雄主事

2 今次の調査

今次調査は、昭和48年、御経塚区民が遺跡内の所有水田を町教委にはかることなしに土盛りしたことを契機とし、昭和41～42年に史跡末松庵寺の寺城確定調査を実施し、その公有化を行い、昭和45年に全国に先がけて史跡公園として整備した経験をもつ町当局が、昭和43年の第2次調査における県、町教委と石川考古学研究会ならびに御経塚区有志の三者による御経塚遺跡保存に関する了解事項に基づき急進する都市化の中で遺跡を可能な限り広範囲に保存し、緑地として保全する基本方針のもとで、保存区域とその整備策定を目的に、国庫補助金の交付を受け、3ヵ年継続事業として調査を行ったことにはじまる。これが昭和48年度の第1年次（通算第5次）、昭和

索引
調査次 調査年 備考

[Solid black square]	第1次調査	昭和31年 押野村史編集委員会
[Horizontal hatching]	第2次調査	昭和43年 金沢バイパス新設に伴なう調査
[Cross-hatching]	第3次調査	昭和48年 大型農免道路拡幅部調査
[Vertical hatching]	第4次調査	昭和48年 国道8号線拡幅部調査
[Diagonal hatching]	第5次調査	昭和48年 野々市町直営国庫補助事業
[Horizontal hatching]	第6次調査	昭和49年
[Cross-hatching]	第7次調査	昭和50年
[Vertical hatching]	第8次調査	昭和50年 国道8号線拡幅部調査
[Diagonal hatching]	第9次調査	昭和51年 野々市町直営国庫補助事業
[Horizontal hatching]	第10次調査	昭和52年
[Cross-hatching]	第11次調査	昭和53年
[Solid grey square]	宅地	



図1-1 御経塚遺跡発掘調査図

49年度の第2年次（第6次）、昭和50年度の第3年次（第7次）調査である。

この間に御経塚区民の遺跡に対する理解が高まり、昭和50年春、御経塚区全戸（50戸）をもって御経塚遺跡保存会が結成された。会長は市村正規氏である。保存会は、祖先の生活の跡である遺跡を永く後代に伝え、また一方、将来、新たに遺跡周辺に居住するであろうところの新区民に学習の場、憩いの場を提供するため、遺跡の国指定と史跡公園化の促進に協力することを目的とした。御経塚遺跡保存会は、町当局の指導によってつくられたものでもなく、石川考古学研究会などの働きかけで結成されたものでもない。全く自主的、自発的なものであることを特色とする。遺跡保存会の積極的協力のもとで、指定ならびに整備範囲をさらに明確にするため、3ヶ年事業を2ヶ年延長したのが、第4年次（第9次）、第5年次（第10次）調査である。

御経塚遺跡は、昭和52年、文部省指定史跡として告示され、52年指定区域内の民有地全域が公有化された。続いて昭和54年度から史跡公園としての環境整備事業が始まり、史跡地南側に隣接して埋蔵文化財収蔵庫を建設することも定まった。第5年次の発掘調査により、当初の予想をはるかに上回る膨大な遺物が出土した。これを整理して発掘調査報告書の刊行と収蔵展示に備えるため、出土遺物の整理作業を主目的として、調査事業をさらに3ヶ年延長したのが第6年次（第11次）、第7年次（第12次）、第8年次（第13次）の調査である。

第1年次調査（通算第5次）にあたり、下記の如き御経塚遺跡調査委員会と御経塚遺跡調査団が組織された。調査は、昭和48年9月15日～11月30日であるが、12月1日～昭和49年3月8日の間に数回の補足調査をした。調査区域は、遺跡の北部を東西に貫通する大規模農道（現石川広域農道）北側の水田で、倉庫裏水田2枚を完掘したほか、一部その東にあたる金沢バイパス（国道8号線）に隣接する水田に及んだ。

石川県における縄文時代遺跡の発掘調査は、遺構としては竪穴住居址の検出につとめるぐらいで、竪穴住居址の落ち込みや炉址を発見した場合に限り、周辺の精査を行い遺構として報告する程度であった。しかるに、今次発掘では、土層の微妙な変化に注目し、土塹、柱穴などは余さず検出するという発掘方法を基本としたから、莫大な数量の土塹、柱穴等が検出され、集落構造の解明は大きく前進し、以後の縄文時代遺跡調査のモデルとなるに至った。しかし、その一方では発掘日時が当初計画を大きく上回ることになったのである。発掘面積は1873m²で、その概要を「石川県御経塚遺跡－第5次調査概報－」と題して昭和49年3月に刊行した。

この間に顧問坪井清足氏、文化庁記念物課の小林遼雄調査官から現地指導を受けることができた。記して感謝の意を表する次第である。

御経塚遺跡発掘調査委員会名簿（昭和48年度～55年度）

顧問	坪井 清足	奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部長）
委員長	中島 栄治	石川郡野々市町長
副委員長	中田 哲	野々市町教育委員会教育長
委員	高堀 勝喜	石川考古学研究会会長
同	坂本 一雄	野々市町議会議員
同	米林 勝二	野々市町文化財専門委員
同	橋本 劳雄	御経塚町内会長

事務局指導 橋本 證夫 石川県教育委員会文化財保護課係長
 同 河崎与志雄 同 主事
 事務局長 塚本 松男 野々市町教育委員会教育課長
 係 増山 了昭 同 社会教育課主事
 委員長 黒保 衛（昭和49年度～54年度）西尾 修（昭和55年度）野々市町長
 副委員長 鈴谷 博（昭和51年度～54年度）東谷 弘（昭和55年度）野々市町教育長
 委員 塚 進一（昭和50年度～54年度）塚本勝男（昭和49年度～50年度）
 北 正信（昭和51年度）塚本幸之（52年度）庄田公義（53年度）
 川 賢二（54年度）塚本敏夫（55年度）
 事務局指導 河崎与志雄係長（昭和49年度～52年度）円山尚二係長（昭和53年度～55年度）
 高橋 格（昭和49年度～52年度）湯尻修平（昭和53年度～55年度）
 事務局長 佐久間由孝（昭和49年度～54年度）宮崎昭男（昭和55年度）町社会教育課長
 係員 高木 実（昭和49年度～55年度）中川保夫（52年度）町社会教育課主事

御経塚遺跡発掘調査団名簿（昭和48年度～52年度）

団長 高橋 勝喜 石川考古学研究会会長
 副团长 沼田啓太郎 石川考古学研究会副会長
 調査主任 高橋 勝喜
 副主任 西野 秀和 石川考古学研究会会員
 調査員 安村 律義 石川考古学研究会顧問
 同 荒木 順行 石川考古学研究会副会長
 同 霧 刑雄 金沢大学教育学部助教授（会員）
 同 浅井 啓郎 石川考古学研究会幹事
 同 清水 庄吉 同
 同 河村 義一 同
 同 安村 敏学 同
 同 谷内尾晋司 同
 同 滋井 宜 同会員
 調査主任 橋本 浩夫（昭和49年度～52年度）
 調査員 浦 茂樹（昭和48年度～49年度）塙野秀京（昭和49年度～50年度）
 小林一之（昭和49年度～50年度）宮岸久司（昭和49年度～51年度）
 福田与盛（昭和49年度～50年度）浅田耕治（昭和51年度）
 大庭雅男（昭和51年度～52年度）以上石川考古学研究会会員

第2年次調査（第6次）は、遺跡の国指定、公有化の気運が関係者の間で高まってきたことを踏まえ、その基礎作業として遺跡の範囲確認のグリッド調査を全面的に実施した。昭和43年度の調査結果と照合することで、遺跡のひろがりの全容をほぼ把握することができた。あわせて、第1年次調査（第5次）区と国道8号線（旧金沢バイパス）間の水田2枚を完掘した。この区域には幅約2～5.7mの溝が南北に走っており、後期中・後葉の土器埋めであったらしく、溝内には大量の土器が埋没していた。時間の関係と団長の調査経験不足から、時間をゆっくりかけた分層発掘が十分に行えなかつたことが反省される。

調査期間は、昭和49年9月13日～11月29日で、総発掘面積は1035m²で、その概要を『石川県御経塚遺跡－第6次概報－』に報告した。期間中に坪井清足顧問と小林達雄調査官の現地指導を受けることができた。

第3年次調査（第7次）は、昭和50年9月10日から12月10日にかけて実施し、第1年次調査の西

側、遺跡北西部の水田3枚について発掘を行い、うちの1枚を完掘した。発掘面積は1164m²である。調査概要是『石川県御経塚遺跡－第7次概報－』として昭和51年3月に刊行した。期間中に坪井満足顕・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター田中琢調査研究部長の現地指導を受け、文化庁記念物課の小林達雄、阿部修平氏から数々の助言を受けた。

第4年次調査（第9次）は、昭和51年9月20日から12月28日にかけて実施した。御経塚区の積極的協力のもと、遺跡のうち、東は国道8号線乗り上げ大規模農道、西は御経塚区集落の東を限る用水、南は集落と県営アスナロ団地北端を結ぶ農道、北は大規模農道（石川広域農道）で囲まれた長方形区画内の水田24枚、約15000m²を史跡として永久に保存することが了解され、昭和50年3月、文化財保護委員会は文部大臣に国指定を答申した。この情況のもとで調査事業はさらに延長されることになった。すなわち、今次調査は大規模農道北側の用水に接する水田1枚と、指定地の南に接する水田5枚につき、580m²を発掘したのである。第1年次から第4年次までの発掘調査補助員は下記の如くであり、氏名を記して感謝の意を表す。

昭和48年度 京田三千雄 米沢義光 田口光春 坂口則夫 宮本哲郎 小林 博 大野秀己
上野 健 中田晴彦
昭和49年度 林 俊信 原山 勇 上野 健 伊藤隆延 小林 博 後藤 明久 宇野千枝子
昭和50年度 坂口則夫 小林 博 木村裕二 原田 勇 田口光春 後藤 明久 宇野千枝子
米沢義光
昭和51年度 高橋 弘 棚橋 正博 山路 晴隆 安達賢吾 高橋公彦 宮田 瞳

第5年次調査（第10次）の発掘区域は、指定地の西を限る用水西側の水田4枚で、遺跡の西部のひろがりを確認することと、公有化に伴って話し合われた御経塚区民の住宅新築の事前調査を目的とした。発掘調査期間は昭和52年9月14日から11月1日まで、発掘面積は150m²である。

その一方、農道建設会社から無料借用していた倉庫裏のプレハブ小屋の内外に山積している出土遺物の洗浄と選別に努めた。35×58×12cmの木製魚箱に収納した出土遺物は、素文・粗製の胸部・底部小片を収納したケース約500と復元可能品・口縁部片・胴部有文片・大形粗製片・底部を収納した1,600ケースに大別され、前者は現地に設けたプレハブに仮保管し、後者は金沢市出羽町の県収蔵庫内で石川考古学研究会調査團に貸与されている収蔵兼整理室に運んだのである。この膨大な出土土器・石器類を整理員を訓練しながら再水洗・換合・記名・採択・実測図・トレースの手順で作業を進めるのは、すこぶる難事業である。ここで調査事業の再度見直しがなされ、以後は出土遺物の整理作業に重点を移し通計8次に及んだ。

第6年次調査（第11次）は、昭和43年の第2次調査で住居址の一部を検出した水田でトレンチの東側を調査したが、遺構の確認にとどめた。期間は昭和53年12月1日から12月13日まで、発掘面積は208m²である。

第7年次調査（第12次）は、第6年次調査区の東側、大規模農道の延長農道とアスナロ団地間の水田で、範囲確認の分布調査を実施した。期間は昭和55年3月19日から3月21日である。

第8年次調査（第13次）は、第7年次調査の北側水田の分布調査、特に指定地東側で北東方向をもって指定地を貫通する大溝の位置確認を目的とした。期間は昭和56年3月19日・20日であり、今次をもって8年に及ぶ長期の発掘調査を終了した。ここに地元発掘協力員の氏名を記して永く

記念と致したい。

御経塚遺跡発掘調査協力員名簿

- 第5次 塚本省吾、塚本継次、塚本綾子、北川弘子、塚本しょん、塚本友枝、荒川たか、木村玉子、塚本房子、塚本俊子、本田典子、橋本富代子、市村ツネ子、塚本静子、北和子、川正子、塚本千代子、塚本美智子（以上御経塚町）中川長作、松村了、角納文子、鳩弓子、宇野敏子、中村美枝、中根千代子、安村喜美子（以上稚日野町）加藤一男、岡本初三郎、菅原仁徳、菅原正四郎（以上北塚町）篠野弓三松、塚野静子、前田美代子、篠野繁子（以上南塚町）村北次吉、西村清子、田辺文子、村北きくえ（以上赤土町）中川千松、中川こと、中村長太郎、中村おそ（以上横川町）
- 第6次 市村ツネ子、塚本綾子、塚本友枝、塚本俊子、新宅美代子、北和子、北川弘子、橋本富代子、塚本美智子、塚本しょん、木村玉子、塚本千代子、塚本きみい、本田典子、川正子、塚本房子（以上御経塚町）宮田澄子（二日市町）中川千松、中村長太郎、中川こと、中村おそ（以上横川町）中川長作、中村美枝、安村喜美子、鳩弓子、宇野敏子、加野幸子、安村よしえ、田村治、松村了、中根千代子（以上稚日野町）塚野順清、塚野静子（以上南塚町）加藤一男、加藤初枝、岡本初三郎、菅原正四郎（以上北塚町）村北きくえ、西村清子、田辺文子、西村善太郎、吉野百香子（以上赤土町）清水正夫（八日市出町）
- 第7次 橋本富代子、塚本友枝、北川弘子、新宅美代子、荒川たか、木村玉子、塚本きみい、塚本省吾、庄田義栄、塚本俊子、塚本綾子、塚本しょん、塚本房子、塚本美智子、市村ツネ子（以上御経塚町）
- 第9次 北村照子、塚本友枝、橋本富代子、塚本しょん、塚本綾子、塚本俊子、新宅美代子、塚本美代子、塚本信子、塚本房子、北川弘子、塚崎咲子、塚本美智子（以上御経塚町）
- 第10次 塚本友枝、塚本しょん、北和子、本田典子、橋本富代子、北村照子、塚本俊子、木村玉子、塚本信子、荒川たか、新宅美代子、塚本誠二（以上御経塚町）
- 第11次 市村正規、北川正雄、塚本綾子、塚テツ子、川正子、塚本信子、塚本千代子、北村照子、木村玉子、塚本美智子、塚本友枝、橋本富代子（以上御経塚町）
- 第12次 木村敬一、庄田義栄、橋本秀雄、塚進一、北村照子、木村玉子、川正子、荒川たか、橋本富代子、塚崎清子（以上御経塚町）
- 第13次 宮前一夫、中川泰宏、西野充、坂田雄彦、中塚正（以上学生）

遺物整理作業は、昭和52年、現地で遺物の水洗と大別を行い、52年から年間を通じて金沢市山羽町の県収蔵室兼整理室で作業を続けたことは前述した。昭和54年4月、県立埋蔵文化財センター設立に伴い石川考古学研究会調査団も同センターに移り、県教育委員会の発掘した第2次～第4次・第8次調査の出土遺物の整理も委託された。調査団は55年、石川県埋蔵文化財協会に発展改組され、御経塚遺跡出土遺物の整理は同協会に引き継がれた。遺物整理員の氏名は次の如くである。

御経塚遺跡遺物整理員名簿

- 第9年次（昭和51年度） 荒木繁行、西野秀和、滋井真、大藤雅男、小嶋裕子、藤井尚子、中島昌子
第10年次（昭和52年度） 荒木繁行、西野秀和、滋井真、大藤雅男、坂口剛夫、米沢義光、平田三枝子、小嶋裕子
第11年次（昭和53年度） 荒木繁行、西野秀和、滋井真、大藤雅男、小嶋裕子、樋見敦子、藤井尚子
第12年次（昭和54年度） 荒木繁行、吉岡康輔、滋井真、小嶋裕子、樋見敦子、小尾玲子、小嶋みち子、山岸寅知子、上庄山美子、尾田裕子、平田三枝子
第13年次（昭和55年度） 荒木繁行、滋井真、大藤雅男、勝島栄藏、山本直人、小嶋裕子、樋見敦子、上庄由美子、尾田裕子、小尾玲子、宮本洋子、齊藤和代、松田智恵子、小谷紀美子、仁科洋子、浅野豊子、森岡かぎり、宮崎けい子、浦照子、米沢富士枝、小嶋みち子、上田亮子、平田三枝子

（高畠勝喜）

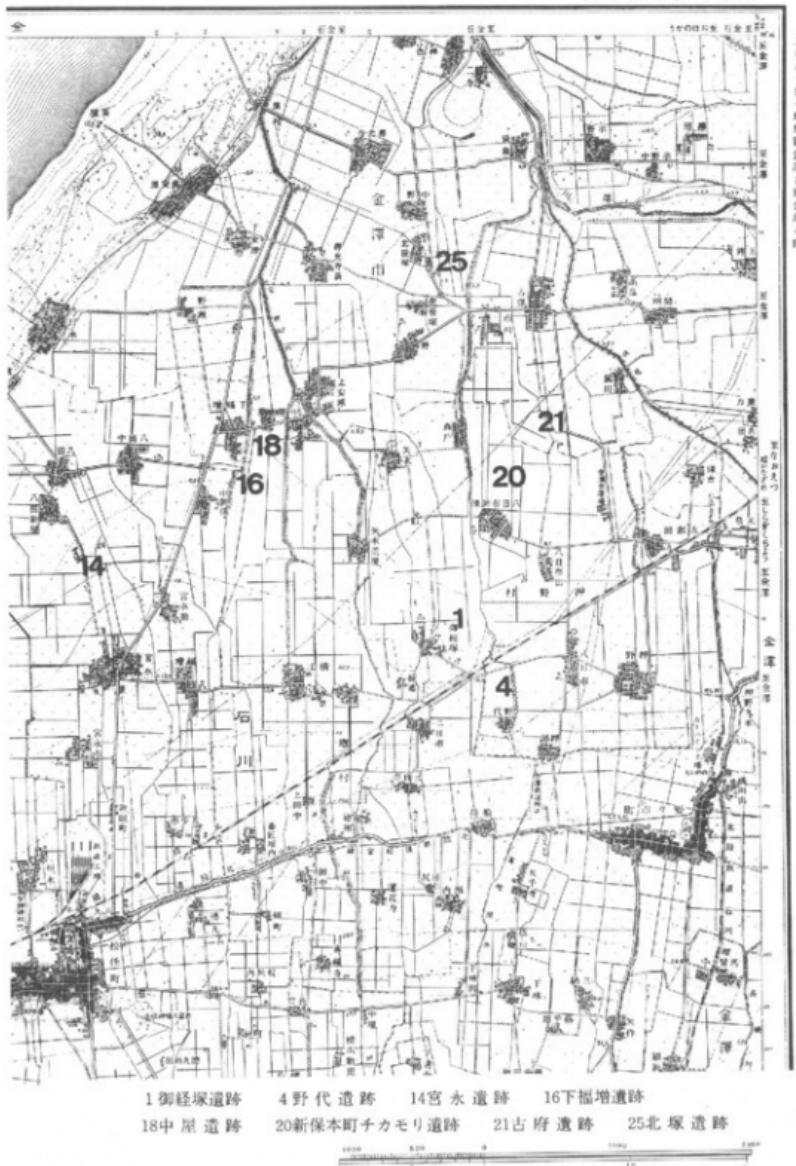


図2-1 昭和30年頃の御経塚遺跡の周辺遺跡

第2章 立地と周辺の遺跡

遺跡の位置 御経塚遺跡は、縄文時代後期中葉から晩期後葉前半に至る長期間の大集落跡で、石川県石川郡野々市町御経塚町（旧石川郡押野村字御経塚）の集落東に隣接して存在する。国道8号線と石川広域農道の交差点に設置されている信号標識を目標にすれば、遺跡は国道8号線と御経塚町集落の間に広がっている。国鉄北陸線野々市駅、または北陸鉄道バス南松任線（横江経由）野々市駅からは、御経塚町を経て7～8分の距離であるが、いずれも野々市駅停車の本数が少ないので惜しい。これに対し、兼六園下発片町経由北陸鉄道バス上荒屋住宅線は20分毎に発車する。森戸または矢木バス停下車、南行7～8分で遺跡に達する。

遺跡の立地 遺跡は金沢平野の大半を占める手取扇状地の扇端に立地する。手取扇状地は、北陸の靈峰白山を源とする石川県最長の河川、手取川によって形成された標式的扇状地である。その傾斜は、扇頂に近い鶴来町道法寺町付近で50分の1、扇央に近い松任市中心部で120分の1、扇端に近い野々市町御経塚町付近で270分の1であるから、遺跡付近は緩傾斜地域といえる。この緩傾斜地は、明治末年に施行された耕地整理によって美しく区画され、水田として耕作されていたから、遺跡周辺のかつての景観は、低平、単純の語句につくされていた。

しかし、この一見単純、低平な地形も仔細にみると、いたるところに小起伏をもつ微地形的変化を示し、激しくローリングしていることが観察されるのである。低湿地と微高地と微低地の組合せによる繊細な地形の変化が、御経塚遺跡周辺の地形の特色であるといえる。遺跡は低湿地と微高地を避け微低地に立地している。このことは地下水利用と深い関係をもつものと考えられる。

手取扇状地は、他の沖積扇状地と同様に、扇端地域に到ると地下水位が高くなっている。遺跡周辺では、遺跡の北を東西南に弧を描く10m等高線から北が、戦後しばらくまでは地下水の自噴地であった。古来からの聞き取りによると、耕地整理前は、遺跡の南にあたる15m等高線近くの野代町までが自噴地であったという。御経塚遺跡の形成は自噴水と深くかかわりあっていたのである。

遺跡の立地する微低地に対する微高地は、耕地整理前は畠地に利用されていたが、その一部には「野」と呼ばれる原野が残っていた。このことは、明治22年の作成にかかる耕地整理前の地籍図で確認できる。

「野」は、時代を過れば、さらに大きなひろがりをなしていたであろうことは、遺跡周辺の集落に「押野」「野代」「野」（旧石川郡二塚村字野・現金沢市神野町）、「中野」（旧二塚村・現金沢市稚口野町）、「示野」（旧石川郡戸板村・現金沢市示野町）などの「野」集落が少なくないことからも推測されよう。そして整理前は、この「野」や、手取川の旧河道にあたる用水（手取川七ヶ用水とその分流）に沿うて繁茂する樹木のため、隣り部落への見通しは十分でなかったという古老の言からすると、「野」は単なる草生地ではなく、樹木の繁茂する林相をなしていたことが知られるのである。すなわち、旧手取川分・支流の氾濫で形成された自然堤防にあたる微高地は、原始時代

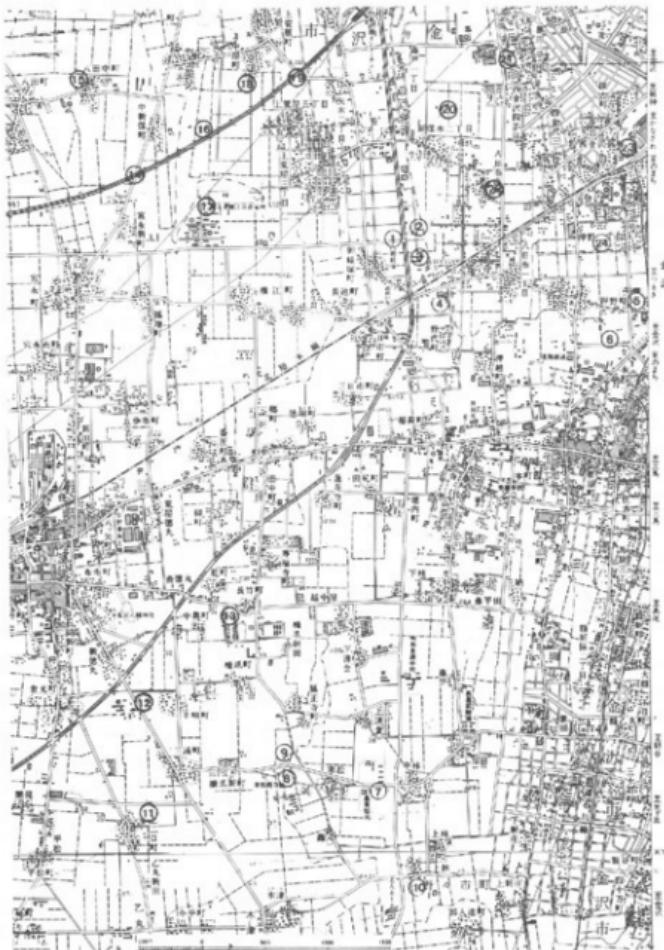


図2-2 御経塚遺跡周辺の主要遺跡

1	御 経 塚 遺 跡	7	末 松 農 短 遺 跡	13	長 竹 遺 跡	19	上 安 原 地 下 道 遺 跡
2	御 経 塚 ツカグ 遺 跡	8	末 松 寺 跡	14	宮 水 遺 跡	20	断 僧 本 司 チカモリ 遺 跡
3	御 経 塚 アスナロ 遺 跡	9	末 松 ダイ カン 遺 跡	15	田 中 ガンダ ハ 遺 跡	21	古 府 遺 跡
4	野 代 遺 跡	10	上 林 遺 跡	16	下 楢 増 遺 跡	22	八 日 本 北 ヤスマル 遺 跡
5	押 野 大 塚 遺 跡	11	上 二 口 遺 跡	17	横 江 荘 々 家 遺 跡	23	西 金 沢 新 町 遺 跡
6	押 野 タチナカ 遺 跡	12	三 浦 遺 跡	18	中 屋 遺 跡	24	押 野 コウムラ 遺 跡

太字は後・晚期または晚期遺跡

の狩猟採集生活において、植物・動物質食料を供給する経済基盤としての林野に成長していた。このこともまた、ここに縄文集落が占位された一要因であったのである。

周辺の遺跡 御経塚遺跡の周辺遺跡で、戦前から知られていたのは、金沢市北塚遺跡（旧石川郡二塚村字北條塚、縄文中期後葉～後期初頭）だけであった。それが現在では、かなりの数の縄文・弥生・古墳・律令時代の遺跡が「遺跡地名表」に登載され、県内では、遺跡分布の濃密な地域の一つに教えられている。このような情況に至ったのは、昭和20年代後半から30年代はじめにおける沼田啓太郎（元石川考古学研究会副会長・故人）を指導者とした安村律義（元顧問・故人）、清水庄吉、市村正規氏並びに押野中学校の南吉一（故人）、竹井正男教諭と、両教諭が顧問であった押野中学校社会科クラブの生徒諸君の調査活動に負うところが大きい。縄文中期中葉後半の金沢市古府遺跡、後・晚期の新保本町チカモリ遺跡（八日市新保遺跡）、晚期中葉の中屋遺跡、晚期後葉前半の福増遺跡、御経塚遺跡、晚期の野々市町野代遺跡は、すべてこの時期に発見された新遺跡である。

御経塚遺跡の存在する手取扇状地の縄文遺跡は、標高10m等高線前の扇端部を占位する御経塚遺跡を中心とするグループ、5m等高線以下の末端部低地に位置するグループ、標高30m前後の扇央部に立地するグループの3グループに大別できる。扇端グループは自噴水のはじまる地域であることは前述の如くであり、末端区域は、昭和30年代末まで自噴水が見られ、金沢旧市内と金石港（藩政期の宮腰港）を結ぶ金石往還の自噴水は、往来人士に長く親しまれ愛されていた。また、扇央部の野々市町末松町、上林町付近は、金沢市の泉野扇状地南西扇端にあたる一方、手取川最東端の旧河道「三十刈川」に沿う富樫用水灌漑地域に属する複合扇状区域で、伏流水が比較的高い所を流れていた。

扇状地最古の縄文集落は、御経塚遺跡北東約1.3kmに位置する金沢市古府遺跡で、中期中葉中頃の古府式土器の標式遺跡である（高堀1954b・1974、沼田1967・1970）。これに後続するのは、北陸高速自動車道金沢西インター近くの北塚遺跡で、中期後葉前半から後期最初頭までの北塚式土器の標式遺跡である（高堀1952、南1976）。この遺跡は、後期前葉前半で廃絶し、扇状地一帯は無人の原野となったようであるが、このことは縄文海進、海退と深い関係をもつものと考えられている。

扇状地の集落は、後期中葉後半の御経塚の集落をもって復活した。金沢市新保本町（八日市新保）チカモリ遺跡は、後期後葉から晚期中葉まで（高堀1964、宮本1976、南1983）、中屋遺跡は晚期前葉前半から中葉後半まで（沼田1956、出越1981）の集落跡でそれぞれ八日市新保式、中屋式土器の標式遺跡であり、御経塚式土器の標式遺跡である御経塚遺跡と約1.2km内に並立していた。末端の金沢市松村遺跡は晚期中葉後半（米沢1969）、近岡遺跡は同時期（藤・四柳1970）の集落跡であるが、いずれも集落規模は小さい。扇端部の福増遺跡（高堀1953・1954a）、扇央部の長竹遺跡（中島1977）も晚期後葉前半の集落跡であるが、これまた、集落規模は小さい（参考文献は第3章末尾）。

扇状地の後期以降の縄文集落は、後期中葉後半から晚期後葉前半に至る長期間、3グループに分かれながら御経塚集落を中心として展開していた。扇状地平地後・晚期の中核集落としての御経塚遺跡の意義は、すこぶる大きい。

（高堀勝喜）

第3章 遺跡の範囲と集落の形態

1 遺跡の範囲

昭和31年の第1次調査を担当した筆者は、小試掘を実施したA・B・C3区の位置と、御経塚町農家の聞き取り調査とを勘案し、遺跡の範囲を南北約100m、東西約80m、面積約7000m²の楕円形をなす集落跡と推測した。

昭和43年の第2次調査では、初めて遺跡の分布範囲を明確にするためのグリッド調査を実施した。その結果、本遺跡は、中央に広場を有する径約200mの円形をなす大集落址と考えられ、第1次調査による推測範囲は大きく修正された。

今次調査では、遺跡の範囲を確認することが、調査当初からの課題の一つであった。というのは、今次調査は5年前の県・町教育委員会、石川考古学研究会、地元御経塚町有志の三者による了解事項に基づき、遺跡の可能・最大範囲を史跡に指定し、緑地として保存することを目的としており、遺跡の範囲確認調査はその基礎作業といえるものであったからである。

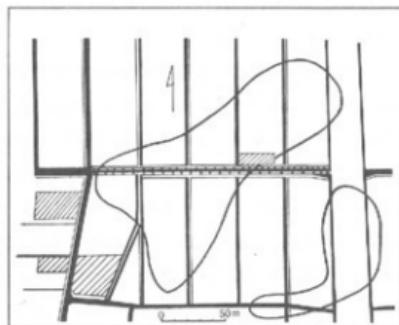


図3-1 遺跡の範囲推定図（第5次調査概報による）

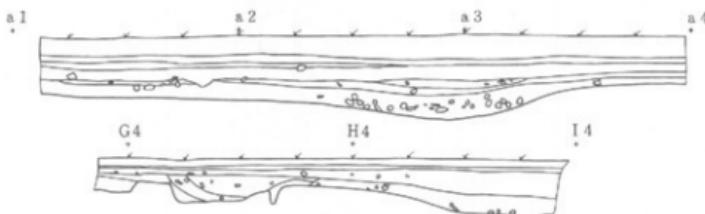


図3-2 第6次調査区土層断面図（S=1/100）
(上、東西 下、南北)

第1年次（通算第5次）調査は、発掘調査に追われ、3月初旬に決雪の下で補足調査を実施するという状況であったから、遺跡の範囲確認は第2年次調査にもちこされた。しかし、表面観察と地元御経塚町の発掘協力員からの聞き取り調査とを総合してみると、遺跡の中央部に、遺物をほとんど出土しない帶状の空地があり、それは遺跡の中央部を、かなりの幅をもって北東方向に連なっていることが知られてきた。すなわち、遺跡の範囲は、円形をなしてひろがっているのではなく、中央の空地を挟んで、大小二つの区域に分かれ、それが一つにまとまって大きく馬蹄形にひろがっているように推測されてきたのである。

第2年次（通算第6次）調査における範囲確認調査では、遺跡範囲は、東西で、若干縮少されて、180m、南北で若干延長されて210mに及ぶものと修正された。また、集落の広場とみられていた中央空地は、第6次調査区では、土層図の如く東に向って落ち込んでいて、中央凹地と呼び改められるに至った。しかも、この凹地と、この調査区で検出された縄文後期の窯場と考えられるかなりの幅をもつ溝状遺構の上部包含層からは、いずれも古墳時代初頭の土師器の細片が検出され、本集落の東の一部は、古墳時代初頭の集落と重複していることが判明した。この事実から、第4次調査区のトレント南で、復原可能な古墳時代初頭「月影期」の大形の腰形土器が出土していることが再検討され、集落南東部でも古墳時代初頭の集落と重複していると考えられるに至った。このことは、第8次調査で確認されている。

第4年次調査は、前述したように、指定地の南を限る農道南を発掘調査したのであるが、農道東寄りに接して土塙を検出したから、縄文時代集落の南限は、農道の南方10m前後であることが判明した。また、国道8号線と御経塚町集落のはば中央で、幅約30mにわたる溝状落ち込みが検出され、耕土下に厚さ約30cmの拳大の礫層があり、土層は、それより下部へ小礫屑、砂屑へと漸移していた。これが、かつて空地・広場と呼び、中央凹地と改称するに至った遺構の正体である。礫層から打製石斧若干、礫層、小礫層から縄文土器・古墳時代土師器の細片若干を検出したから、この落ち込み遺構は、古墳時代初頭以降における大洪水によって形成された大溝であることは確実である。現住宅に近い農道下で古墳時代初頭の住居址の一部が検出されており、縄文集落の南西部もまた、古墳時代集落と複合していることが判明したのである。

さて、以上の如き経過をたどった御経塚遺跡の範囲確定は、第1次調査における推定より出発

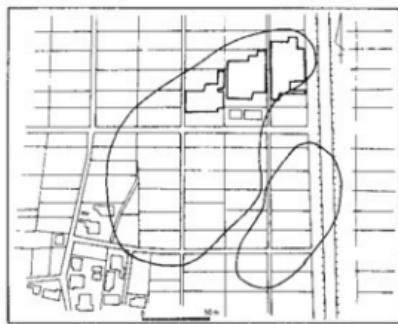


図3-3 遺跡の範囲推定図（第7次調査概報による）



図3-4 御経塚道路の範囲と形態

したものであるが、分布調査と発掘調査の実施により、しだいに精度を加えてきた。すなわち、第1年次調査から第4年次調査までの間に北部と南部が分明となり、次いで実施した第5年次調査で西部を、第6年次（通算第11次）から第8年次に及ぶ調査で、国道8号線東のひろがりを見えることができたのである。これを総合したのが図3-4であり、南北約200m、東西約185m、ほぼ円形にひろがっている。その東は、弥生末期から古墳時代初頭に中心をおき、一部古墳時代後期に及ぶ御経塚ツカダ（御経塚B）遺跡と複合し、南東部では、古墳時代初頭と奈良時代前期の集落跡である御経塚アスナロ団地（御経塚C）遺跡と重複している。そして南西部もまた、現御経塚集落の下にもぐる古墳時代初頭の無名遺跡と複合しているのである。

2 集落の形態

集落址の範囲を知り、その中に営まれた集落の構造を解明することは、集落址調査の重要な課題である。しかし、御経塚遺跡の今次調査は、集落址の大部をうぶのまま保存し、緑地として保全することを目的としたので、発掘区域は保存区域の周辺に限られながら、集落址の全容を明確にすることは不可能であった。ために、集落構造追及の前段階である集落形態の解明にとどまらざるを得なかったのである。

さて、第1年次（通算第5次）から第3年次にわたる北部区域の発掘調査で、5基の竪穴住居址と22基の石組み炉址を検出している。炉址は、竪穴住居址が古墳時代初頭以降、中世以前におきた大洪水によって押し流されたり、拳大の礫層に覆われたりした上に、耕地整理や耕作による削平または破壊を受けて、大きく変容し、わずかに石組み炉のみが残存したものであると考えられる。炉址は遺跡一面に広がる礫を取り除いた黒土層から検出される場合が多く、たとえ、竪穴住居の一部が残存していたとしても、われわれの初体験というべき当時の発掘技術では、落ち込みの残存肩部を見落したことでも少くなかったであろうから、炉址即竪穴住居址と考えて大過ない。とすれば、北部区域で計27棟の竪穴住居址を検出したことになって、この地区の集落の形態はおのずと分明となる。

集落の西部では、第1次調査のA区で御物石器を検出したトレンチ断面で、竪穴状の落ち込みと、それに伴う柱穴ピット2を確認しているから、竪穴住居が営まれていたことは確実である。また、東部では、第2次調査のトレンチで竪穴住居の落ち込みが確認され、第8次調査では、右川広域農道から3枚目と4枚目の水田にまたがる方形住居址が検出されている。

以上を総合し、北部地区の竪穴住居址と炉址を連ね、第1次調査のA区と第8次調査で検出した方形住居址点を結べば、円形に近い集落の形態が出現できる。東西150m、北部区域の東よりで若干突出するため、いびつな形にゆがめられて、円形というよりは馬蹄形と呼ぶべき形態を示している。

第3年次（第7次）調査で検出された3基の竪穴住居址の2基は、南に張り出しが設けられていた。これは住居の出入口、すなわち玄関と考えられるから、この2例から推測すると、北部の住居はすべて南に口を開いていたことになる。住居が指示示すこの南方こそは、馬蹄形状をなす集落の広場にほかならないであろう。

とすると、中央広場は、遺跡の中央を北東方向に帯状に連なる中央凹地と、如何に関連するかが問題になってくる。第2年次調査区には、東よりにかなりの幅と深さをもつ溝状遺跡が検出されたことは既述した。この溝状遺構は、北部では西折してしまい浅くなり、やがて地山面に消えてしまう。南部では、石川広域農道より2枚目水田の中央で、にわかにすばまって中央凹地に消えまる。北部の状況を東西土層図と南北土層図に示した(図3-2)。

南北土層図にみられる落ち込みは、第8次調査区の北方落ち込みに連続していた。この落ち込みの石川広域農道南側断面では、深さ約1.2m、灰白色粘土層、灰青色粘土層、灰色粘土層、青灰色砂混粘質土層、暗灰色砂混粘質土層、地山の層序を示し、この堆積状況からは、落ち込みは凹地というよりは大溝と解すべきことを知り得た。第4年次調査では、指定地南の農道中央で、幅30mにわたり、厚さ30cmの礫層が堆積していたことも既述した。この礫層は大溝の南方部上流にあたり、古墳時代初頭、中世以前におきた大洪水で、微低地を占居していた御経塚繩文集落の東よりも大きく抉って新河道をつくり、上流から運んだ拳大の礫を、集落の広場跡と住居群址に撒きちらしたのである。耕土下にみられる礫層は、集落消滅後の古墳時代後期の間頃におきた、未曾有の大洪水によって形成されたものと解すべきである。

(高堀勝喜)

参考文献

- 高堀勝喜、1952：「金沢市北塚住居跡遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌』第4号。
——、安村律義、1953：「石川郡安原村下福増遺跡調査略報」『石川考古学研究会々誌』第6号。
——、1954a：「石川郡安原村下福増遺跡略報(続)」『石川考古学研究会々誌』第6号。
——、1954b：「金沢市古府遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第6号。
——、1964：「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『石川県押野村史』
——、南久和、1974：「金沢市古府遺跡」金沢市教育委員会。
出越茂和、1981：「金沢市中屋遺跡」金沢市教育委員会。
中島俊一、1977：「松任市長竹遺跡発掘調査報告」石川県教育委員会。
沼田啓太郎、1956：「石川郡安原村中屋遺跡調査概報」『石川考古学研究会々誌』第8号。
——、安村律義、他、1967：「金沢市古府遺跡第2次発掘報告」『石川考古学研究会々誌』第10号。
——、1970：「古府遺跡」金沢市教育委員会。
藤 財雄・西柳嘉章、1970：「金沢の繩文晩期近岡遺跡からの礫の発見」『考古学研究』第17巻第3号。
南 久和・他、1976：「金沢市北塚遺跡」金沢市教育委員会。
——、1983：「金沢市新保本町チカモリ遺跡・遺構篇」金沢市教育委員会。
宮本哲郎、1976：「新保本町(旧八日市新保)遺跡分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第10号。
米沢義直、1969：「金沢市松村繩文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第12号。

第4章 繩文時代の遺構

本章では、縄文時代の遺構が集中的に検出された、石川広域農道北の第1年次（通算第5次）、第2年次（第6次）、第3年次（第7次）調査区につき、住居址、炉址、土塁・配石遺構、の順に記述する。以後の記述の便宜上、西より数える第3年次（第7次）調査区をI区、第1年次（第5次）調査区をII区、第2年次（第6次）調査区をIII区と呼称することにする（図4-1～3）。



図4-1 I区(第3年次(第7次)調査区)遺構配置図(S=1/300)



图4—2 II区(第1年次<第5次>调查区)遺構配置図 (S = 1 / 300)

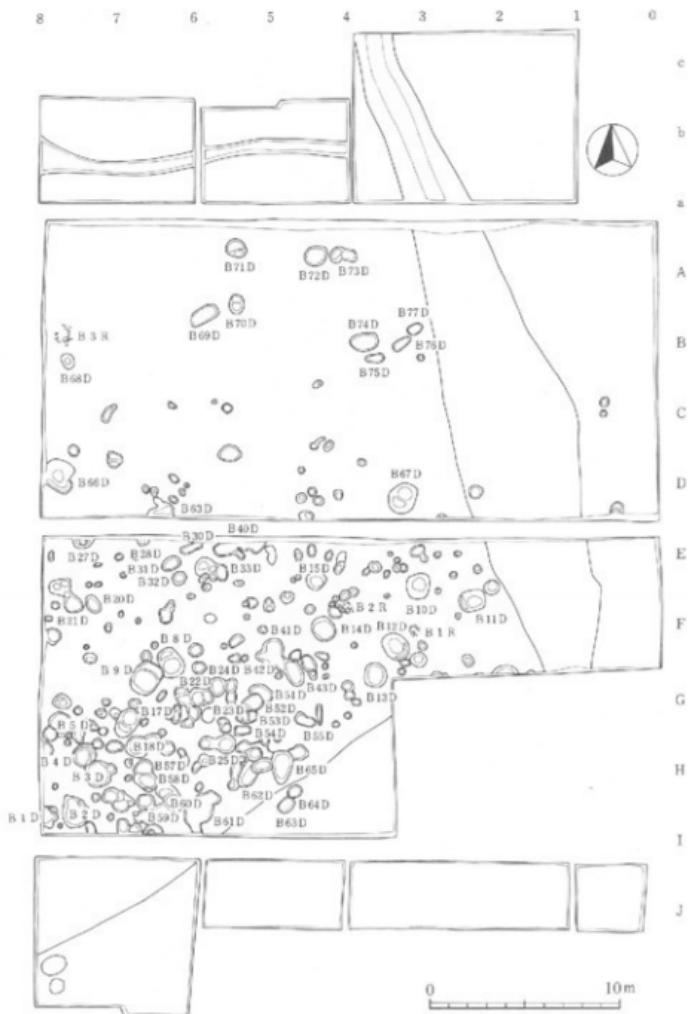


図4—3 III区(第2年次(第6次)調査区)遺構配置図 (S=1/300)

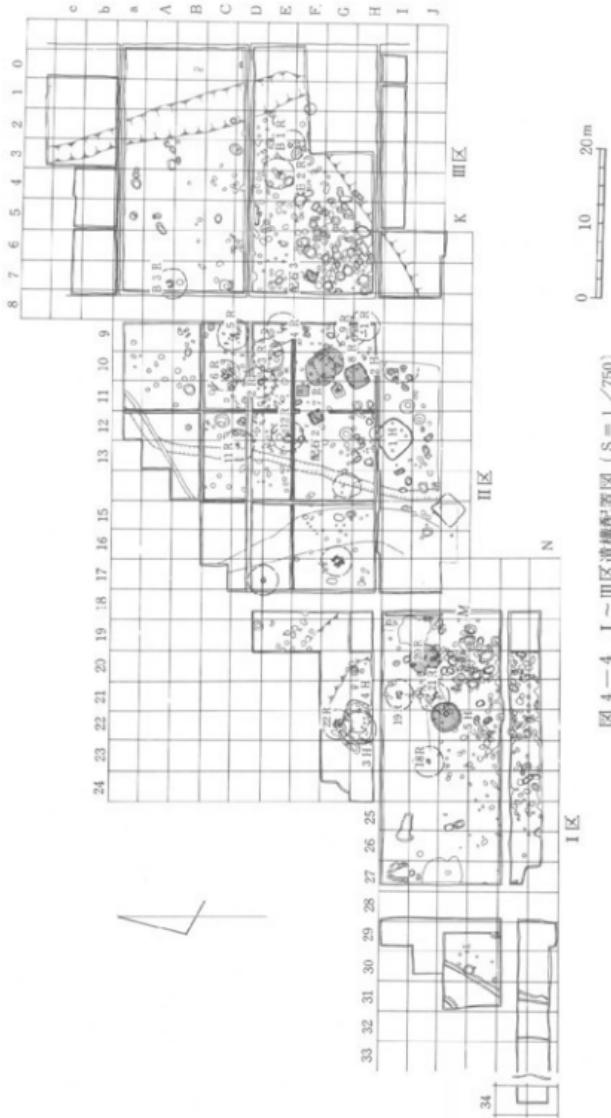


图 4—4 I ~ III 区遗物配置图 (S = 1/750)

1 住居址

住居址は、第1号住居址より第6号住居址までの計6棟を検出した。第1～2号住居址はII区、第3～5号住居址はI区、第6号住居址は第8次調査で検出した。

第1号住居址（図4-6） II区の南、ほぼ中央で検出した。北東隅は畦下にもぐっているために未発掘であるが、4.6m×4.4mを測る隅丸形の竪穴住居址である。柱穴は4本主柱と考えられる。周溝はなく、地山面は削平され、炉石は撤去されていた。

第2号住居址（図4-7） 第1号住居址の北東約6mの所にあり、2.6m×3mの隅丸方形のきわめて小形の竪穴住居址である。主柱穴は4、周溝はなく炉石は第1号同様に既に失われていた。出土土器から第1・2号共に晩期前葉前半に當まれたと考えられる。

第3号住居址 I区北部のほぼ中央で検出した。径約4.5mの平面円形をなし、南に造り出し部を設けている。

第4号住居址（図4-8、図版4の上） 第3号住居址の東で、それに切りあって検出された。3.7m×3.6mの隅丸方形を呈し、地山の黄褐色細砂を用いた貼り床が認められた。周溝は、第3号・第4号共に比較的幅のひろいものが、それぞれにめぐらされている。しかし、主柱穴と認められるものは、いずれも検出されなかった。炉は、共に単式の石組み炉で、東位置に口を北西に向かって深鉢形土器が斜めに置かれていた。出土土器から第3号住居址は後期後葉前半、第4号は後葉後半頃と考えられる。

第5号住居址（図4-9、図版4の下） I区中央部において検出した。径3.7m、円形プランの小形住居址である。炉は中央東よりに設けられた単式の石組み炉で、炉床に土器を敷きつめ、東よりに深鉢形土器が横位で検出された。この深鉢は本来は斜位に据えられていたものと推測される。南側には造り出し部が設けられているが、周溝はなく、主柱穴も認められなかった。出土土器からみて後期後葉前半に當まれた住居である。

第6号住居址（図4-5）は、第8次調査のトレンチで全体の土が検出された方形住居址である。南東辺で4.5mを測る。幅25cmの調溝がめぐり、主柱穴の径は30cm、4本主柱と考えられる。炉址は認められなかった。床面出土土器は後期後葉後半である。

第3号住居址と第5号住居址には、それぞれ南に造り出しを設けている。この造り出しは、住居の出入口にあたるものと解せられ、集落の中央広場に通していた。

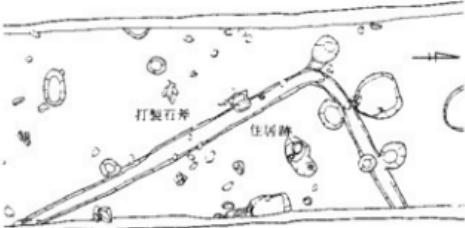


図4-5 第6号住居址実測図(湯尻1976)

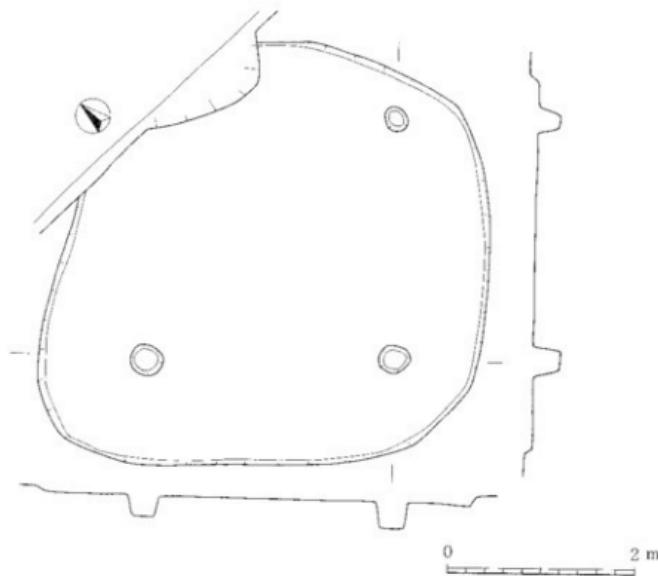


図4-6 第1号住居址実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

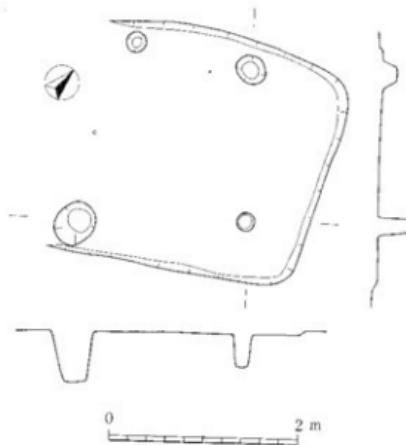


図4-7 第2号住居址実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

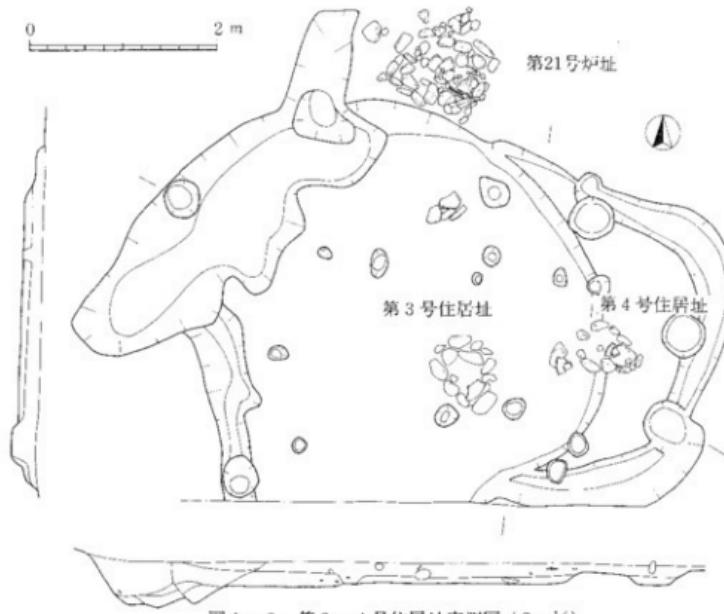


图4—8 第3·4号住居址实测图 ($S = \frac{1}{50}$)

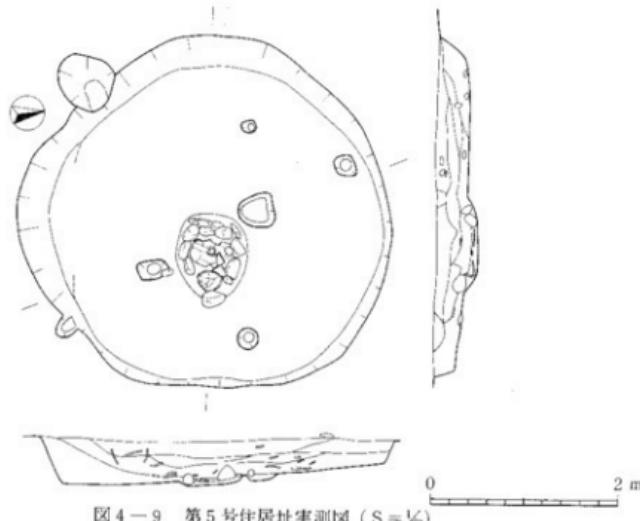


图4—9 第5号住居址实测图 ($S = \frac{1}{50}$)

2 爐 址

第1年次調査から第3年次までの調査で22基の炉址を検出している。第3号～第5号住居址を加えれば、絶数25基となる(図4-10～13、図版5～8)。しかし、この住居址3例以外は、すべて竪穴住居の落ち込みをおさえることはできなかった。I区～III区以外の調査区では、炉址は発見されていない。

炉址は、第2号炉址(図4-10、図版5の上)が複式炉かとみられるくらいで、他はすべて単式の石組み炉である。通常の棒状河原石をもって構成されるが、河原石は長大なものでも40cm程度、洪水で運ばれたものや、包含層下の礫層から採集したものであろう。

I区では、5基が検出されている。残存状態の良好な第21号炉址(図4-11、図版7の上)は、100cm×70cmの長方形炉で、本集落の炉としては最大な部に属する。互いに切り合っている第3・第4号住居址の竪穴落ち込みの肩部で検出されたが、出土土器からは後期後葉前半の時期が考えられ、第3・第4号住居との時間差はほとんどみられない。

第18号・第19号・第22号炉址は、本集落通有の20cm前後の方形石組み炉で、石組みの一部が欠失し、残存状態は余りよくない。第20号炉址(図4-13、図版5の下)は、炉石が撤去されているが、後期後葉前半の所産である。先に述べたように、方形をなす第1号・第2号住居址では炉石が撤去され、時期は後期後葉後半ないし晚期前葉前半に當造されたものと推定したが、炉石が撤去されている炉址は、時期的に新しいとは必ずしも断定できないようである。

II区では、総数14基が検出され、すべてが石組み炉である。これに先に述べた2基の方形住居址を加えると、総計16基となってこの調査区の住居密度はきわめて濃い。

これら石組み炉のうち、第1号、第3号、第4号～第13号炉は、小形の方形に近い単式である。第10号炉は炉石が撤去されているが、炉石の一部を欠失しているものも少なくない。第2号炉は、50cm×40cmの主炉に一辺20cmの方形副炉を取りつけた複式炉のように観察された。しかし、副炉とみなされた方型部の炉石が浮いていることと、本集落の他の炉址がすべて単式炉であることからして、第2号炉を複式炉と見ることは留保しておきたい。

本集落の石組み炉には、粗製深鉢形土器を炉の中央東隅に、口をやや斜め上にして斜位に埋置されているのが特色である。第14号炉址(図4-10、図版5の中)は、80cm×65cmを測る本集落最大の石組み炉であるが、埋置深鉢形土器は、炉外に接して置かれている状態で検出され、本集落炉址の特例かとも考えてみたのである。しかし、仔細に観察すると、炉の東南辺の側石が動いているようであるから、通例の如く炉内に埋置されていたと考えておきたい。

III区では3基(B区〔3区〕第1～3号炉址)が検出された。いずれも単式の小形方形の石組み炉で、石組み内部に粗製深鉢形土器を斜位に据える通例のものである(図4-10・11、図版6の中・下、図版7の下)。出土土器からみて共に後期後葉前半のものと判断される。これらは、地山面からわずかに傾斜する肩部において検出されたもので、第1年次調査区(II区)とほぼ同様傾向にあった。3基とも、竪穴住居の掘り込みが黒色土層中になされているためか、竪穴の落ち込みは検出することはできなかった。

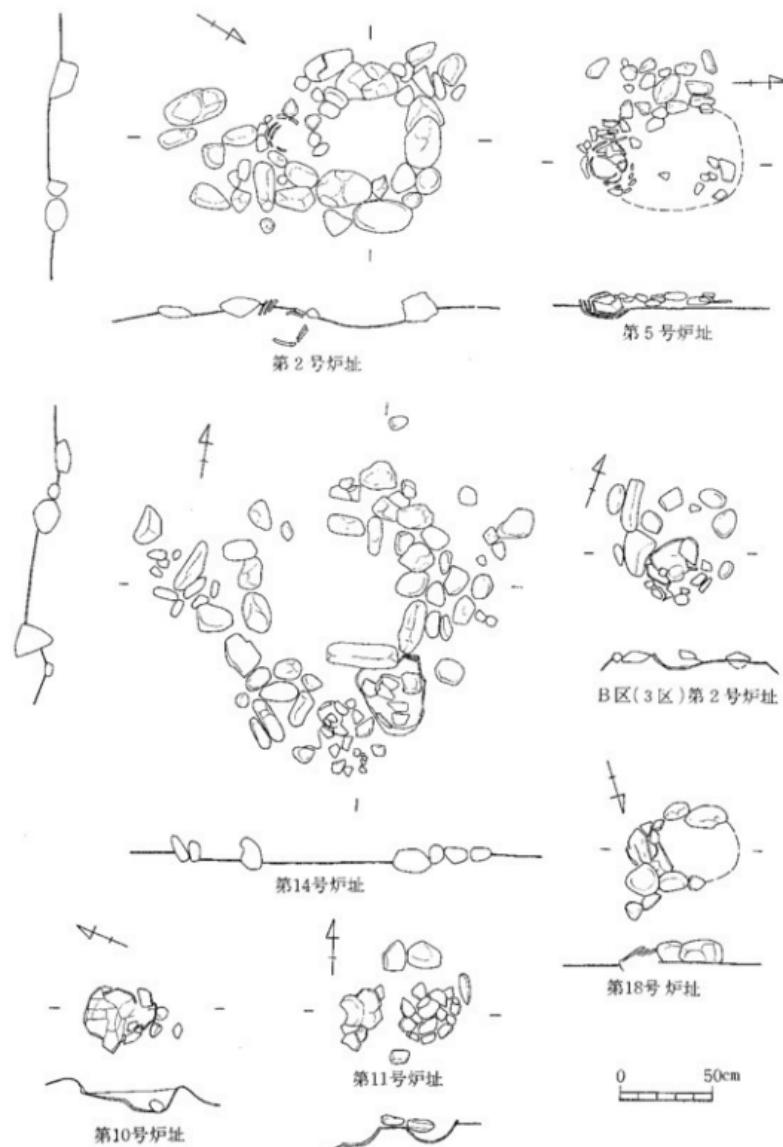


图4—10 炉址实测图1 ($S = 1/30$)

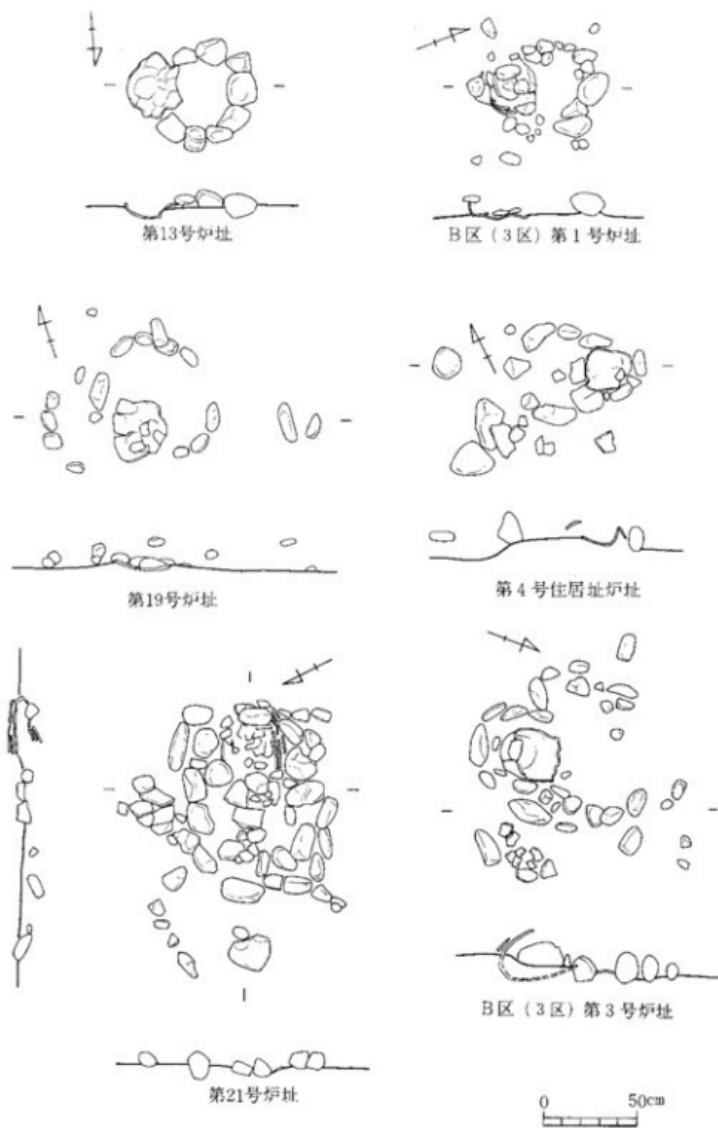


图 4--11 炉址实测图 2 ($S = 1/30$)

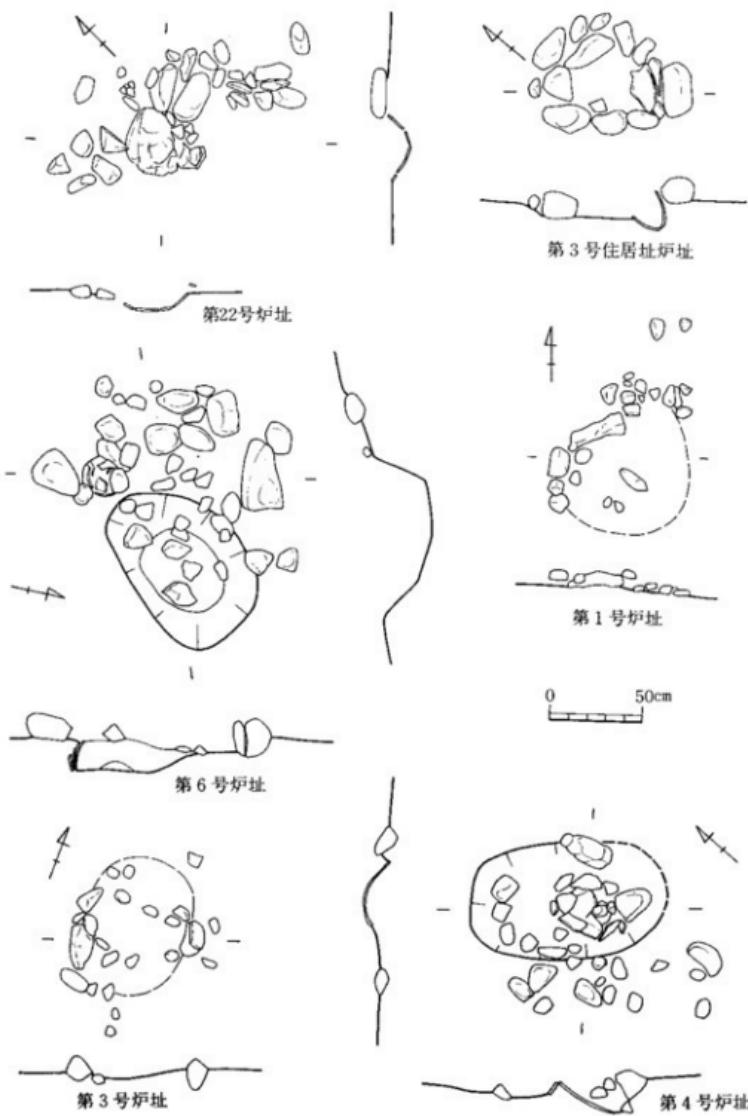
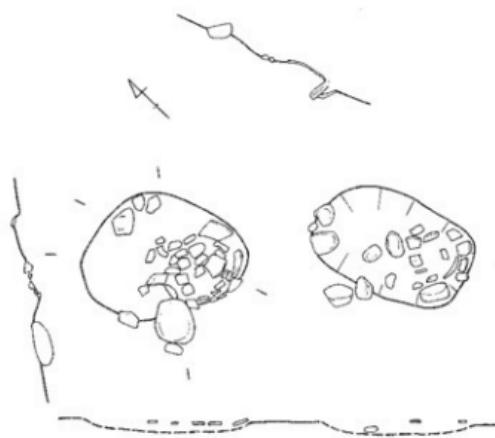
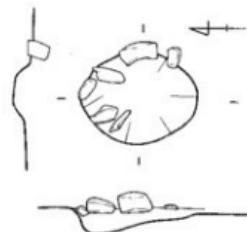


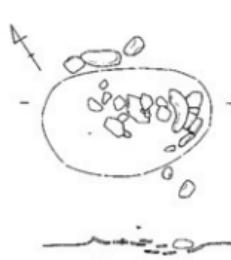
图 4—12 炉址实测图 3 ($S = 1/30$)



第7·8号炉址



第9号炉址



第20号炉址

0 50cm

图4—13 炉址实测图4 (S = 1 / 30)

3 土塙と配石遺構

土塙は、総数で200基に近く、配石遺構は3例を検出した（図4-14～23、図版9～15、表4-1）。土塙は貯蔵穴・墓穴・大形柱穴などにあたるが、先述したように、石川県の縄文遺跡で堅穴住居址と無関係に土塙・柱穴等の検出に努めたのは、本遺跡調査が初めての体験であるため、発掘技術・記録・図上復元等に反省すべき点が少なくない。

I区の土塙は総数52基を検出している。平面橢円形プランのものが多く、方形プランは少ない。東南部で1m強の橢円プランの土塙が、20基近く密集する形で検出された（第190～211号土塙）。これなどは、近時、金沢市新保本町（旧八日市新保）チカモリ遺跡（南1983）で明らかにされた円形大形建物遺構に類するものかも知れない。第202号土塙は、床面に河原石が敷きならべられていた。

発掘区の南西隅で埋甕を検出した（図4-16）。粗製の縄文を施した深鉢形土器で口縁部は耕起によって失われていた。

II区では総数77基を検出した。橢円プランが多く、長橢円形、円形プランのものも若干存在する。径1mをこえる第1号土塙、1.5mをこえる第63号土塙は、大形円形土塙で地山を掘り抜き、礫層まで掘りさげている。貯蔵穴または井戸の如きものかと推定される。第9号土塙もまた、径1.5m以上の大形円形土塙で、壁面に礫がはりつけていた。第56号土塙は、底面に6箇の礫石で円形石組みを造り、中に焼土がみられた。火を焚く何らかの儀礼が行われたのかも知れない。

甕棺は4例、無文または条痕文の深鉢形土器を用いる（図版15の上）。うち三例は底部を打ち欠く。倉庫裏東隅の第10号土塙出土の無文土器は、その好例である（図5-27の100-2）。

III区の土塙総数は65基である。南西部では、径0.8mの円形プラン、長径1.3m×短径1.0mの橢円形プランの土塙などが密集する形で検出された。I区東南隅の例と同様なことが推測されよう。礫層まで掘り込まれた土塙の存在することなどはII区に同じい。

なお、羊齒状文に三叉文を配した中屋I式期の深鉢形土器は、大形の優品で耕土層直下で、直立する形で検出された。埋甕ないし甕棺であろう。甕棺はほかに1例を検出している。

配石遺構はII区で2例、III区で1例検出されている。第1号配石遺構（図4-23）は、径1.8mの円形をなし、黒土層中に検出された。出土土器から後期後葉前半頃と推測される。

第2号配石遺構（図4-23）は、河原石をほぼ1列に180cm×160cmの方形に並べたものである。河原石は赤く焼け、内部には焼土がみられた。何らかの焚火儀礼の場であったことが考えられる。2例とも配石下には土塙等の特別な施設は設けてなかった。

第3号配石遺構はIII区で検出され、180cm×120cmの方形をなし、第2号配石遺構に近似している（図版15の下）。

（高橋勝喜）

参考文献

- 南 久和也、1983：『金沢市新保本町チカモリ遺跡・遺構』金沢市教育委員会。
湯尻修平 1976：『野々市町御経塚遺跡調査（第8次）概報』石川県教育私員会。

表4-1 土塙一覧表 (Dは土坑、Pはピット)

I区(第7次)調査区

	検出 グリッド	平面図	切合	径(cm)	深度	出土遺物・その他
第164号土塙	M20	不整形	有(385P)	90×70	47	
第165号土塙	M21	楕円	無	(120)×60	46	
第166号土塙	M22	楕円	有(ピット)	95×65	31	
第167号土塙	M22	楕円	有(417P)	90×85	14	
第168号土塙	M22	楕円	有(169D)	80×(60)	26	
第169号土塙	M22	楕円	有(168D)	95×(75)	66	
第170号土塙	N24	楕円	有(171D)	(100)×70	16	
第171号土塙	M24	楕円	有(172D)	(110)×(50)	23	
第172号土塙	M24	楕円	有(171D)	(110)×85	18	
第173号土塙	N24	楕円	無	114×80	32	
第174号土塙	M25	楕円	無	90×50	32	
第175号土塙	N26	楕円	無	160×(100)	21	
第176号土塙	K25	方形	無	110×90	27	
第177号土塙	K25	方形	無	125×105	31	
第178号土塙	L24	楕円	無	102×48	23	
第179号土塙	K23	楕円	無	55×50	16	
第180号土塙	L23	楕円	無	83×58	29	
第181号土塙	L23	楕円	有(498P)	(70)×55	23	
第182号土塙	L23	不整形	有(ピット)	—	17	
第183号土塙	L22	不整形	有(185D)	—	40	
第184号土塙	L22	不整形	有(183D)	95×65	31	
第185号土塙	L22	不整形	有(183D)	—	27	
第186号土塙	L22	楕円	無	65×70	—	
第187号土塙	L22	楕円	有(512P)	115×63	13	打斧、土器
第188号土塙	L22	楕円	有(ピット)	125×75	17	
第189号土塙	K22	円	有(ピット)	—	—	第5号住居址と重複
第190号土塙	L21	不整形	有(ピット)	155×95	40	打斧、磨石、土器
第192号土塙	K21	楕円	有(528P)	90×50	31	
第193号土塙	J21	楕円	無	110×65	50	
第194号土塙	I20	楕円	無	100×75	19	
第195号土塙	K20	楕円	有(545P)	108×60	34	
第196号土塙	K20	不整形	有(561P)	(110)×(110)	33	配石あり
第198号土塙	K20	楕円	有(583P)	110×70	30	
第199号土塙	K20	円	有(542P)	110×95	50	土器
第201号土塙	L20	円	無	75	15	
第202号土塙	L20	楕円	有(210D)	130×100	30	配石あり
第203号土塙	K20	円	有(580P)	70	48	
第205号土塙	L19	楕円	有(215D)	130×120	55	磨石
第206号土塙	L19	楕円	有(207D)	(120)×85	35	
第207号土塙	L19	楕円	有(206D)	120×90	47	
第208号土塙	L19	楕円	無	150×(140)	48	磨石
第210号土塙	L20	楕円	有(202D)	115×75	31	
第211号土塙	L20	楕円	有(539P)	180×115	40	

	検出 グリッド	平面形	切合	径(cm)	深度	出土遺物・その他
第 213 号土塙	K19	楕円	有(215D)	(90)×70	52	
第 214 号土塙	K19	楕円	有(215D)	120×90	39	打斧
第 215 号土塙	K19	楕円	有(214D)	(120)×(115)	38	
第 216 号土塙	D19	楕円	無	120×105		土器
第 217 号土塙	H20	楕円	有(ピット)	123×115	22	土器
第 218 号土塙	I25	(楕円)	有(219D)	(150)×(110)	34	土器
第 219 号土塙	I25	(楕円)	有(220D)	(180)×(150)	45	
第 220 号土塙	I26	(楕円)	有(219D)	215×(130)	35	
第 222 号土塙	L26	楕円	無	90×45		

II区(第5次)調査区

	検出 グリッド	平面形	切合	径(cm)	深度	出土遺物・その他
第 1 号土塙	J12	円	無	128×131	69	土器、打斧
第 2 号土塙	I9	円	無	86	42	
第 3 号土塙	J13	楕円	有(ピット)	70×75	20	土器、打斧
第 4 号土塙	J15	楕円	無	136×130	18	土器
第 5 号土塙	J12	楕円	有(ピット)			
第 6 号土塙						
第 7 号土塙	I10	楕円	有(16D)	61×39	12	(甕棺)
第 8 号土塙						
第 9 号土塙	I11	円	無	188×176	87	土器
第 10 号土塙	I9	楕円	有(ピット)	79×63	32	(甕棺)
第 11 号土塙	I11	楕円	有(ピット)	72×52	43	
第 12 号土塙	I14	楕円	無			
第 13 号土塙	J14	楕円	無			
第 14 号土塙	J14	楕円	有(ピット)			
第 15 号土塙	I10	円	無			
第 16 号土塙	I10	楕円	有(7D)	82×53	36	(甕棺)
第 17 号土塙	I10	楕円	無	99×74	41	
第 18 号土塙	I13	楕円	有(ピット)	93×65	25	土器、打斧
第 19 号土塙	H12	楕円	有(1号住)	212×170	—	
第 20 号土塙	I15	楕円	有(ピット)	92×76	31	
第 21 号土塙	G15	楕円	無	131×106	—	未掘
第 22 号土塙	G17	楕円	無	127×72	—	未掘
第 23 号土塙	H17	楕円	無	88×58	—	未掘
第 24 号土塙	F15	円	無	70		
第 35 号土塙	H13	長楕円	無	116×65	9	
第 36 号土塙	H13	長楕円	有(37D)	95×42	7	
第 37 号土塙	H13	円	有(36D)	98×87	17	打斧
第 38 号土塙	H12	円	無	80×70		打斧、磨斧
第 39 号土塙	G12	円	無	175×173	77	土器、石皿、打斧
第 40 号土塙	G14	楕円	有(律令期満)	77×—	14	
第 41 号土塙	H11	楕円	無	120×110	18	
第 42 号土塙	F14	不整形	無	80×70	22	土器
第 43 号土塙	F12	長方形	無	102×57	12	骨片

	検出 グリッド	平面形	切 合	径(cm)	深度	出土遺物・その他
第 44 号土塗	F11	楕円	無	(110)×76	10	
第 45 号土塗	G11	円	無	(76)×66		土器、打斧
第 46 号土塗	H10	円	無	60×60		
第 47 号土塗	H 9	円	無	74×58	14	骨片
第 48 号土塗	G 9	円	無	58×50	8	
第 49 号土塗	G 9	円	有(50D)	66×58	21	
第 50 号土塗	G 9	楕円	有(49D)	116×96	17	磨石
第 51 号土塗	G 9	楕円	無	68×31	24	
第 52 号土塗	F 9	楕円	有(120P)	96×68	18	
第 53 号土塗	F 9	楕円	有(53D)	68×47	15	
第 54 号土塗	G 9	楕円	無	87×60	32	
第 55 号土塗	H 9	楕円	無	96×79	—	土偶、土器
第 56 号土塗	G11	楕円	無	170×160	74	土器、打斧(石組み)
第 57 号土塗	E12	長楕円	無	140×58	16	土器
第 58 号土塗	E11	楕円	無	(110)×66	36	
第 59 号土塗	D11	円	無	80	40	
第 60 号土塗	D12	不整形	有	116×100	12	土器、磨石
第 61 号土塗	D12	楕円	無	80×53	17	土器
第 62 号土塗	D12	楕円	無	70×55	20	土器
第 63 号土塗	C12	円	無	180×193	100	土器
第 64 号土塗	D13	長楕円	無	120×63	10	
第 65 号土塗	D14	長楕円	無	(78)×48	12	
第 66 号土塗	D13	楕円	有(律令期講)	86×(45)	8	土器
第 67 号土塗	E13	長楕円	無	100×44	16	土器
第 68 号土塗	E12	楕円	無	96×80	30	
第 69 号土塗	E12	不整形	有(12号炉址)	110×94	24	
第 70 号土塗	E 9	長楕円	無	116×55	29	玉、土器、磨石
第 71 号土塗	E10	長楕円	無	132×66	23	
第 72 号土塗	E10	円	無	68	43	
第 73 号土塗	C10	楕円	有(6号炉址)	91×60	26	土器
第 74 号土塗	D10	楕円	有(ピット)	93×53	17	
第 75 号土塗	E 9	楕円	無	80×56	31	
第 76 号土塗	E10	不整形	有	88×76	14	
第 77 号土塗	B11	円	無	134×130	51	
第 78 号土塗	B10	不整形	無	75×60	11	土器
第 79 号土塗	B10	不整形	無	130×88	32	
第 80 号土塗	C 9	楕円	無	100×86	35	
第 81 号土塗	B10	円	無	67	30	石皿
第 82 号土塗	A10	不整形	無	64×66	24	
第 83 号土塗	H12	方形	無	100×100	—	
第 84 号土塗	H13	楕円	有(ピット)	116×88	19	土器
第 85 号土塗	H12	不明	無	—	—	
第 86 号土塗	H11	楕円	無	103×88	26	
第 87 号土塗	H15	楕円	無	106×89	—	未掘

田区(第6次)調査区

検出 グリッド	平面形	切合	径(cm)	深度	出土遺物・その他
B第1号土塙	H 7	楕円	有(ピット)	125 × (80)	51
B第2号土塙	H 7	不整形	無	175 × 150	50 骨片、スクレーパー
B第3号土塙	G 7	楕円	有(B4D)	140 × 125	47 骨片、打斧
B第4号土塙	G 7	円	有(B3D)	130 × 130	50 打斧、土器
B第5号土塙	G 7	円	有(ピット)	133 × 130	37
B第6号土塙	H 6	楕円	有(ピット)	(75) × 65	36
B第7号土塙	F 7	楕円	有(ピット)	95 × 80	45
B第8号土塙	F 6	楕円	有(B9D)	135 × 170	70 玉
B第9号土塙	F 6	楕円	有(B8D)	185 × 145	59 土器、砥石型石器
B第10号土塙	E 3	楕円	無	145 × 123	55
B第11号土塙	E 2	楕円	無	138 × 113	75 打斧
B第12号土塙	F 3	楕円	有(51P)	155 × 125	50
B第13号土塙	F 3	楕円	無	135 × 117	37
B第14号土塙	E 4	楕円	無	140 × 120	84
B第15号土塙	E 4	円	無	110 × 90	42 打斧、磨石
B第16号土塙	F 3	円	有(B51P)		
B第17号土塙	G 6	楕円	有(B6P)	165 × 110	69
B第18号土塙	G 6	円	有(B19D)	120	50 土器
B第19号土塙	G 6	楕円	有(B18D)	(100) × 80	23
B第20号土塙	E 7	楕円	無	108 × 67	17
B第21号土塙	E 7	楕円	有(B14P)	95 × 98	42
B第22号土塙	F 6	楕円	有(B60P)	195 × 100	61 打斧
B第23号土塙	G 5	円	無	85 × 70	66
B第24号土塙	F 5	円	有(B22D, B104P)	105 × 90	8
B第25号土塙	G 5	円	有(B64P)	100 × 105	55
B第26号土塙	G 6	円	無	80 × 85	26
B第27号土塙	D 7	円?	無	110	
B第28号土塙	D 6	円?	無	60	
B第30号土塙	D 6	不整形	無	120 × 45	18
B第31号土塙	E 6	楕円	無	118 × 75	22
B第32号土塙	E 6	円	無	75	30
B第33号土塙	E 5	楕円	有(ピット)	109 × 75	40
B第40号土塙	D 5	不整形	有(ピット)		
B第41号土塙	F 4	不整形	有(B42D, B43D)		
B第42号土塙	F 5	楕円?	有(B41D)		
B第43号土塙	F 4	楕円	有(B41D, B76P)		
B第51号土塙	F 5	楕円	有(B52D)	130 × 80	21
B第52号土塙	F 5	楕円	有(B51D, B53D)	120 × 90	21
B第53号土塙	G 5	楕円	有(B52D)	115 × 70	44
B第54号土塙	G 5	楕円	無	86 × 50	24
B第55号土塙	G 4	楕円	無		
B第57号土塙	G 6	楕円	有(B58D)	105 × 95	21
B第58号土塙	G 6	楕円	有(B57D)	130 × 95	43

	検出 グリッド	平面形	切合	径(cm)	深度	出土遺物・その他
B第59号土塙	H 6	不整形	有(B60D)	(195)×90	40	
B第60号土塙	H 6	楕円	有(B59D)	185×90	57	
B第61号土塙	H 6	楕円	有(ピット)	225×145	32	
B第62号土塙	G 5	楕円	有(ピット)	110×70	—	
B第63号土塙	H 4	楕円	有(B64D)			
B第64号土塙	H 4	楕円	有(B63D)			
B第65号土塙	G 4	楕円	有(ピット)	185×85	—	
B第66号土塙	C 7	不整形	無	168×155	30	土器
B第67号土塙	D 3	楕円	無	175×145		
B第68号土塙	B 7	楕円	無	82×70	33	
B第69号土塙	A 5	楕円	無	165×80	26	
B第70号土塙	A 5	楕円	無	105×85	12	
B第71号土塙	a 5	楕円	無	110×95	26	
B第72号土塙	a 4	円	無	114×105		
B第73号土塙	a 4	楕円	有(土塙)	95×65		
B第74号土塙	B 3	楕円	無	150×97	21	
B第75号土塙	B 3	楕円	無	100×50	12	
B第76号土塙	B 3	楕円	無	113×55	22	
B第77号土塙	A 3	円	無	78×70	10	

(西野秀和氏作成)

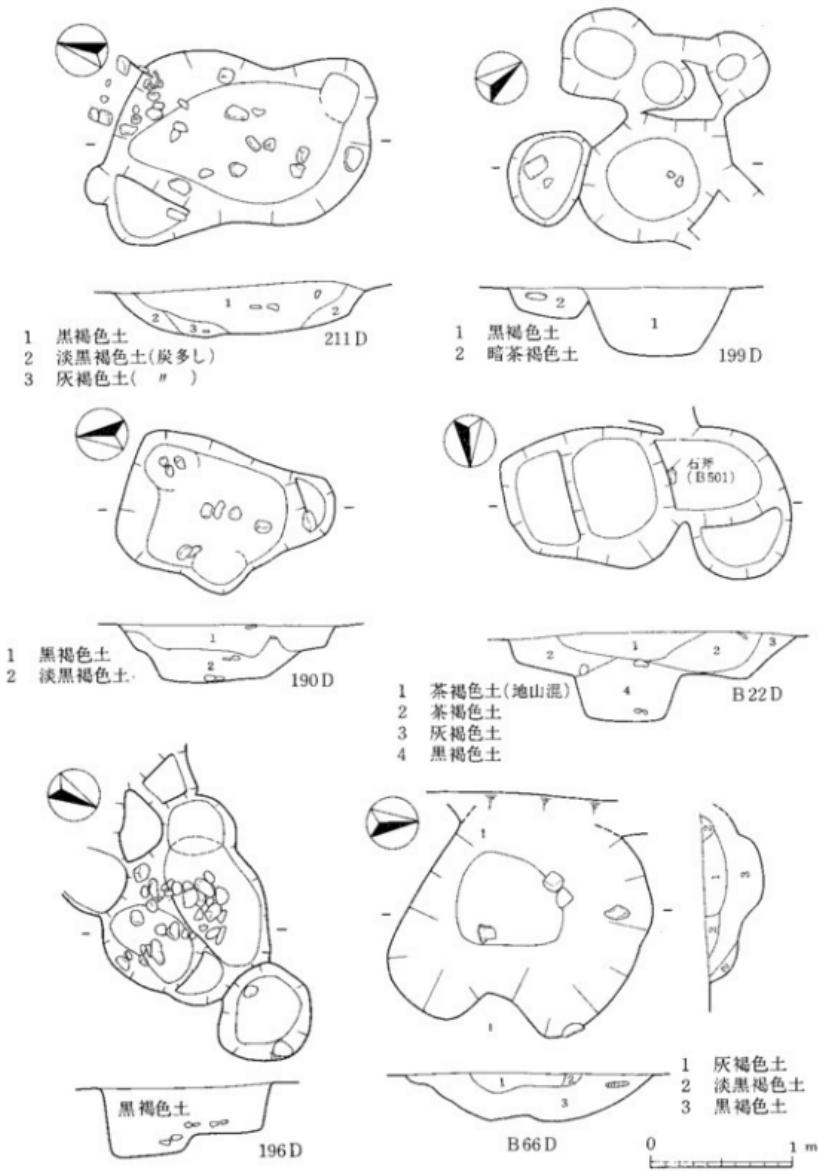


図4-14 土地実測図1(211D、199D、190D、B22D、196D、B66D)(S=1/40)

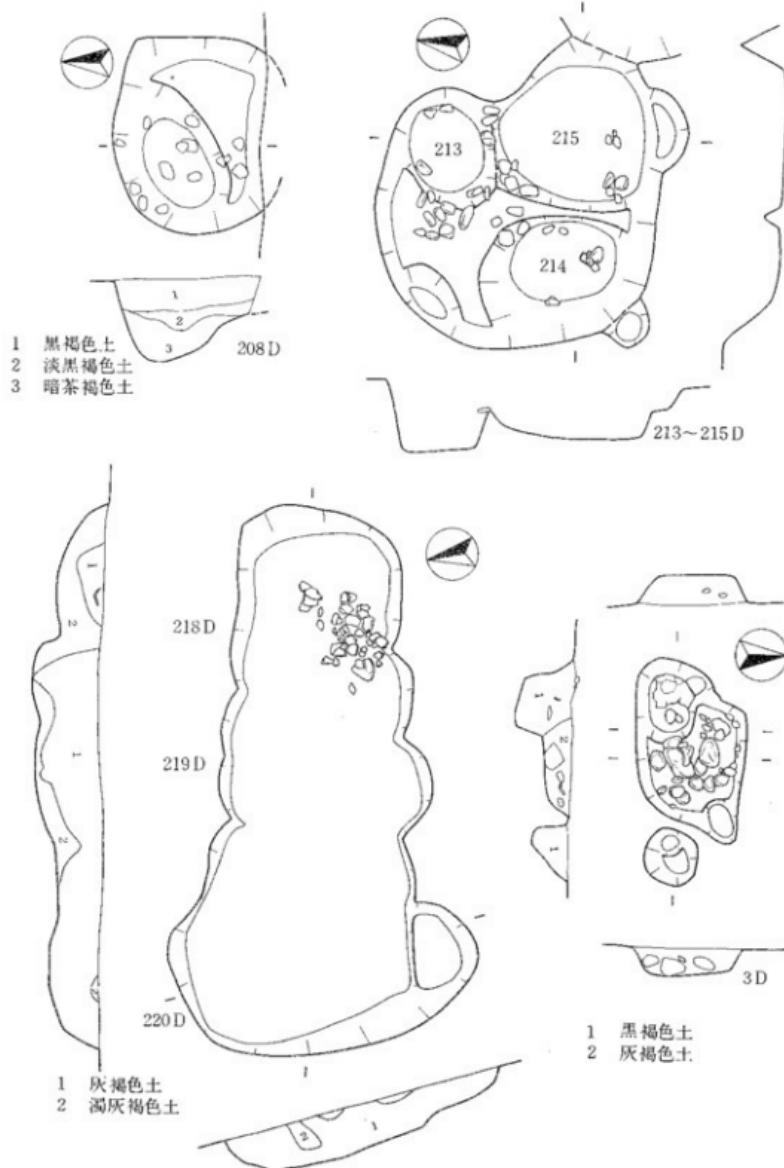


图 4--15 土坡实测图 2 (208D、213~215D、218~220D、3D) ($S = 1/40$)

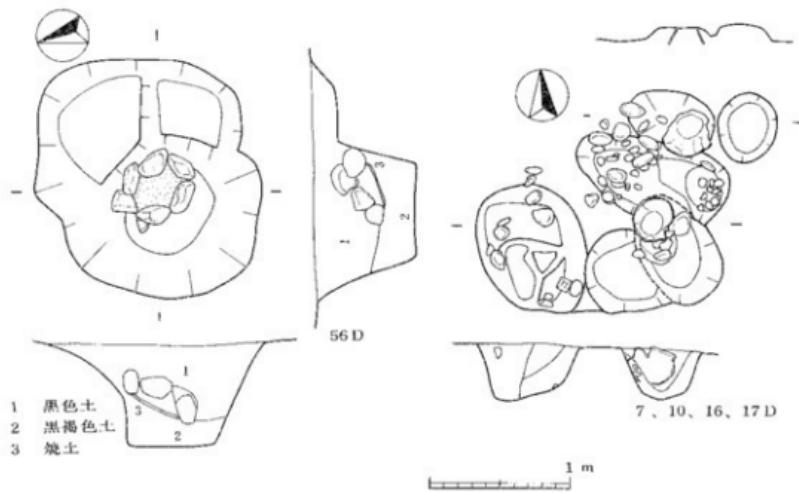
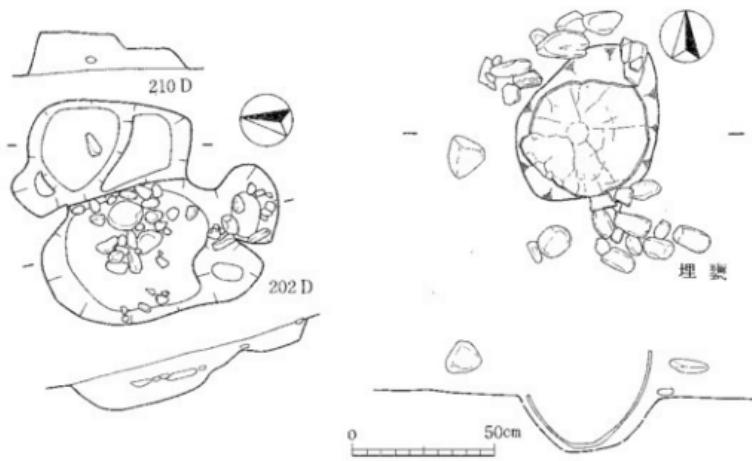


图 4—16 土坡、土器棺实测图 3 (210·202 D, 56 D, 7·10·16·17 D) ($S = 1/40$)

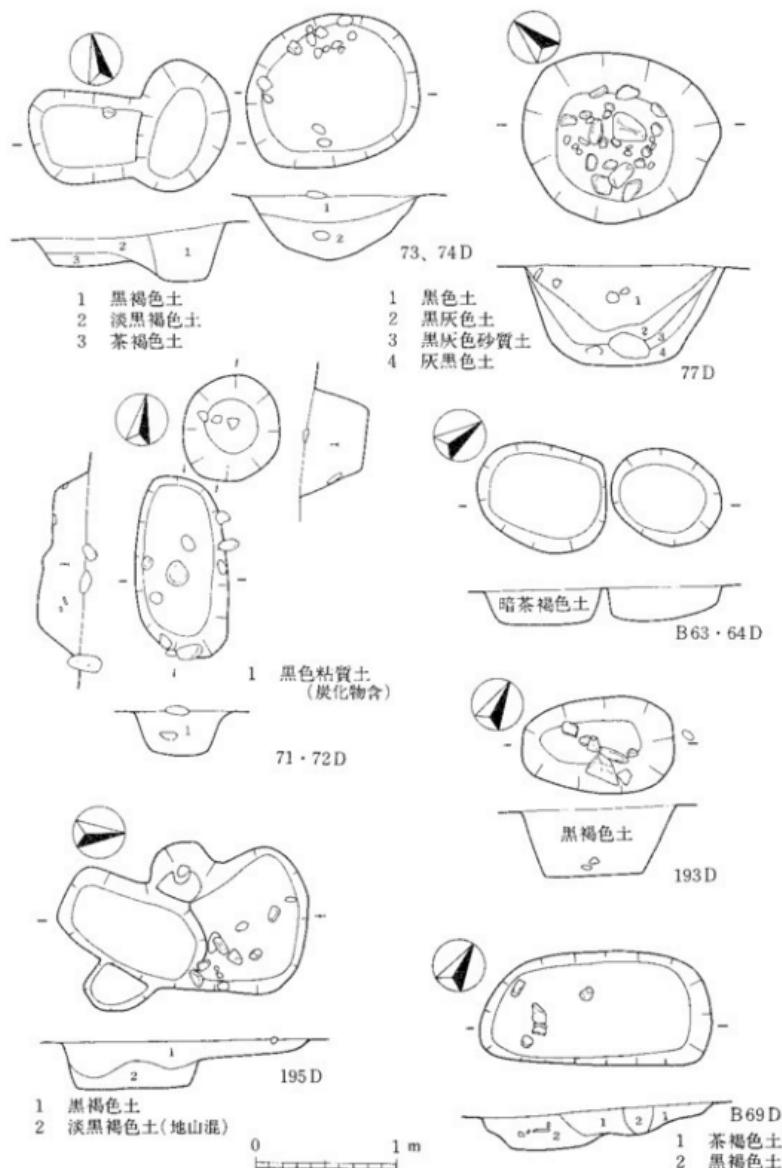


图 4-17 土坡实测图 4 (72·73D、77D、71D、63·64D、193D、195D、B69D)(S = 1 / 40)

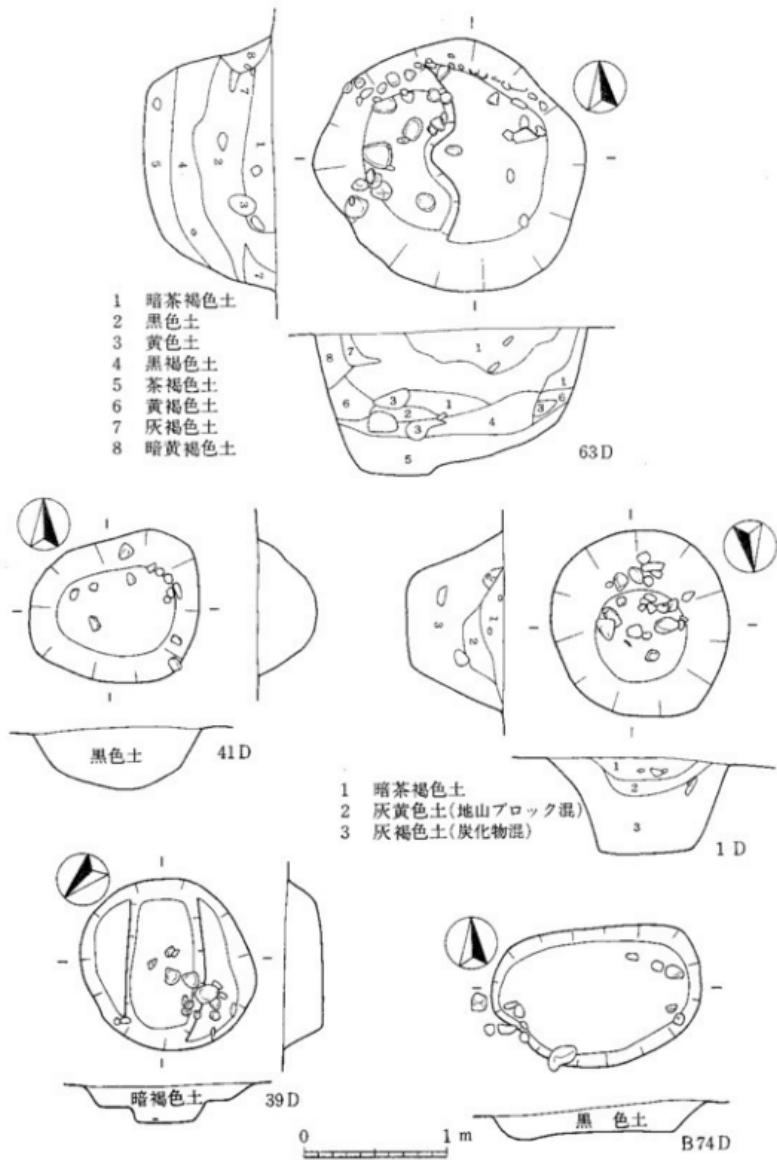


图 4-18 土地实测图 5 (63D、41D、1 D、39D、B74D) ($S = 1/40$)

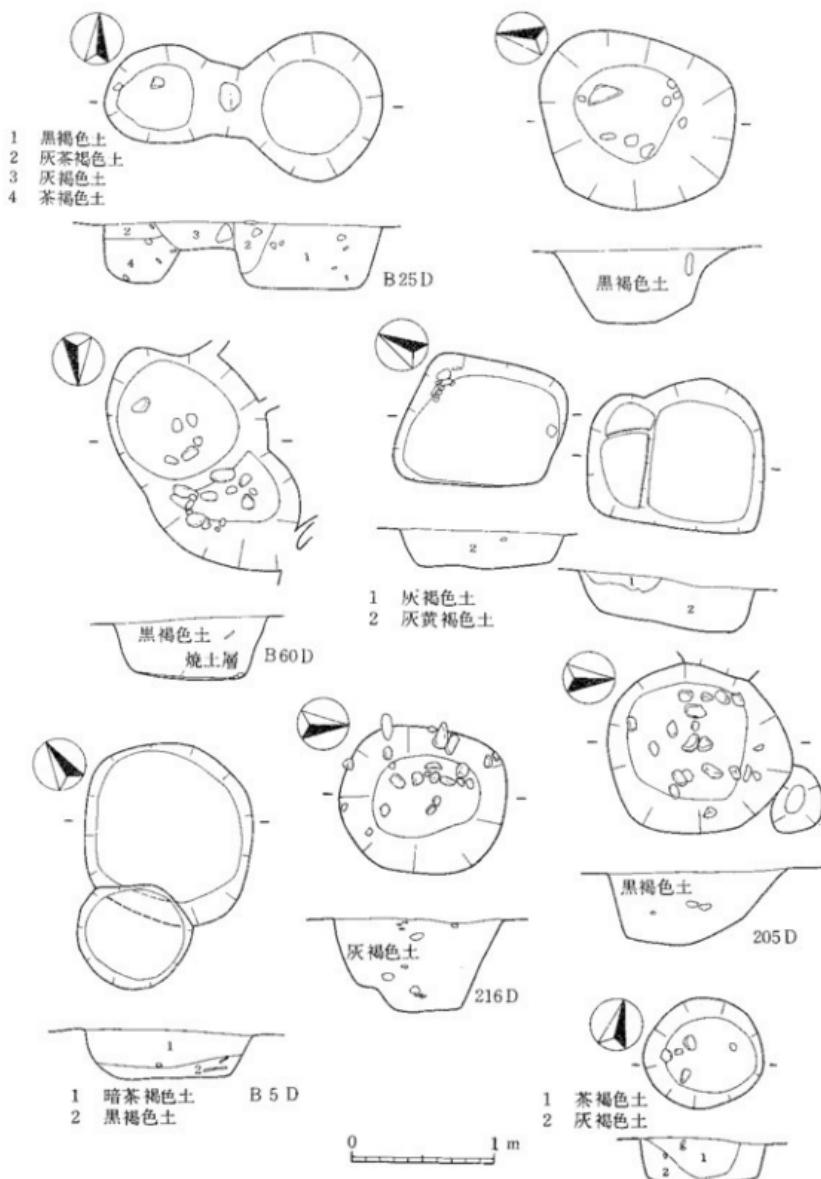


图 4-19 土壤实测图 6 (B25D、B60D、B5D、205D、216D)(S = 1/40)

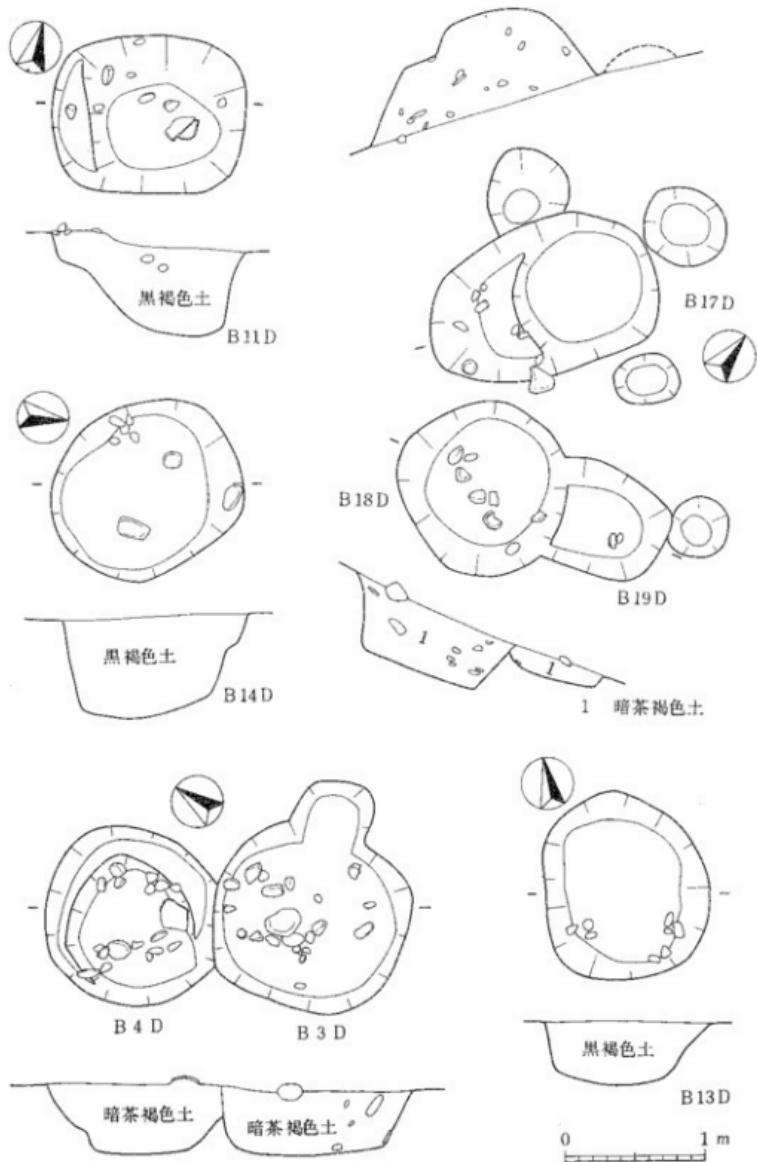


图 4-20 土壤实测图 7(B11D、B14D、B17D、B18D、B19D、B4 D、B3 D、B13D)(S=1/40)

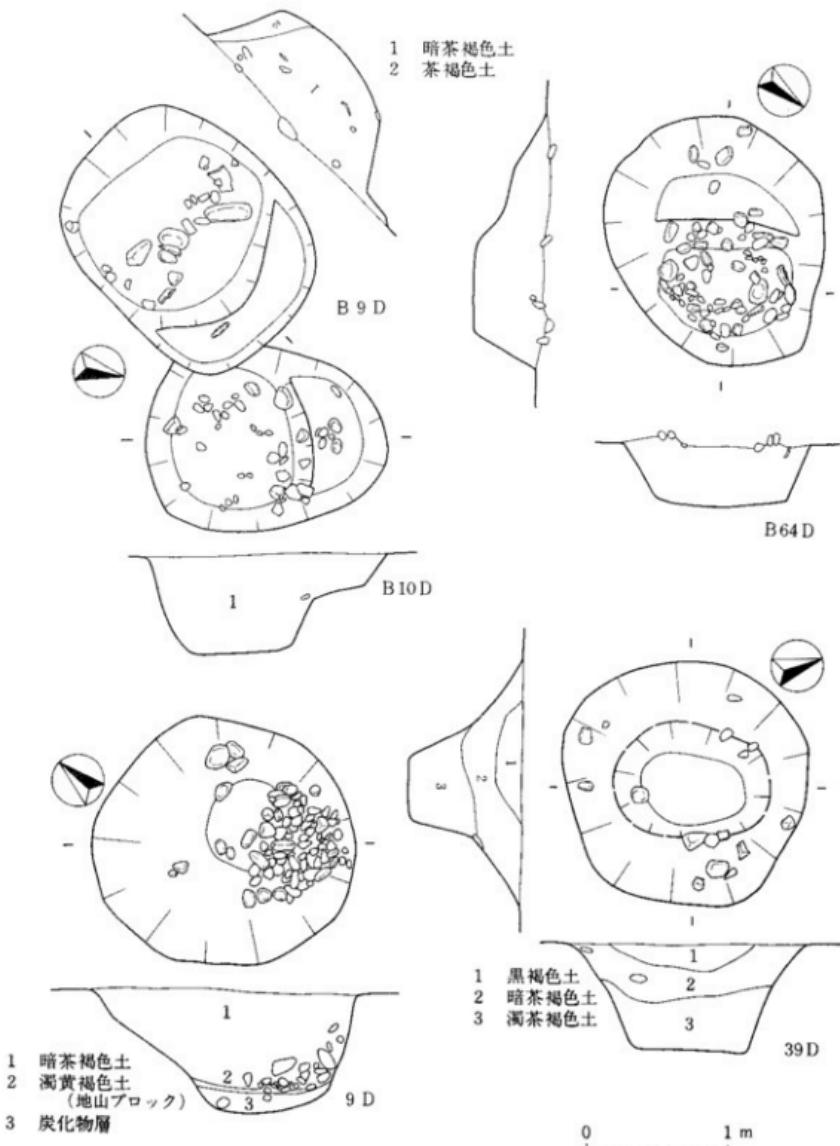


図4-21 土壟実測図8(B 9 10D, B 64D, 9 D, 39 D)(S = 1/40)

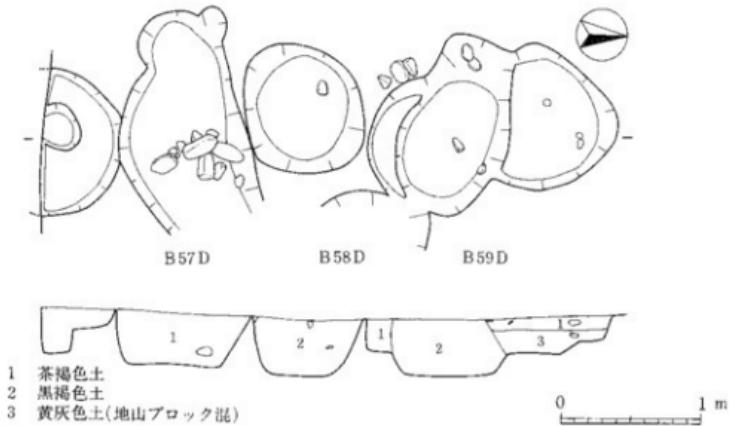
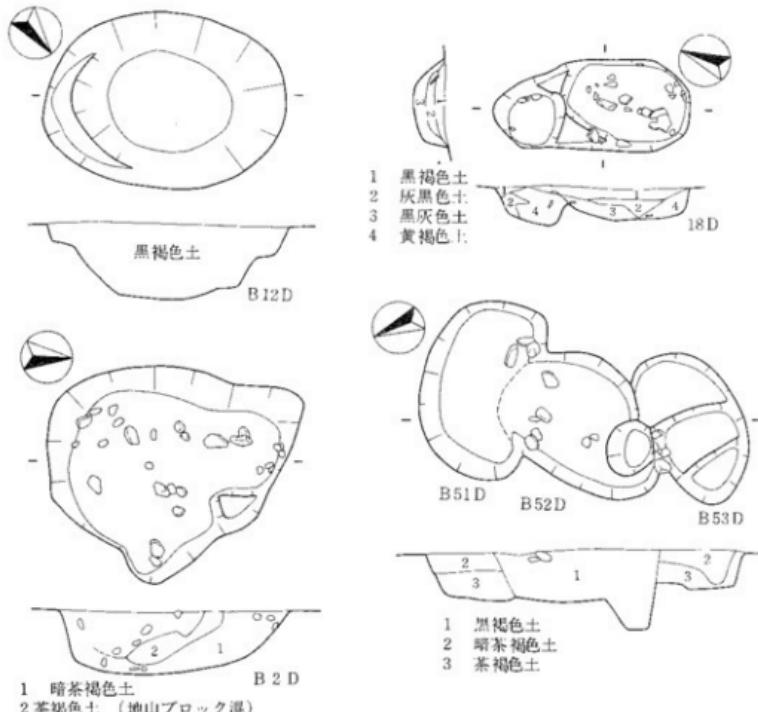
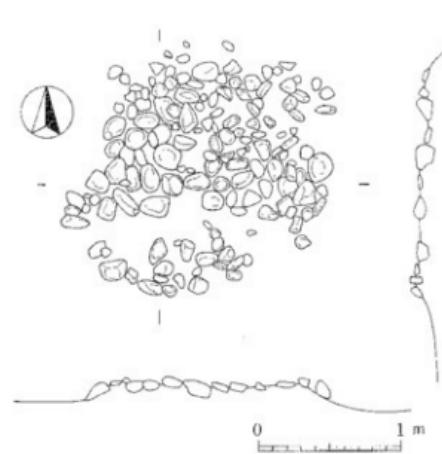


図4-22 土壌実測図9 (B12D、18D、B2D、B51~53D、B57~59D) ($S = 1/40$)



第1号配石遺構



第2号配石遺構

図4-23 配石遺構実測図 ($S = 1/40$)

第5章 繩文土器と土製品

第1節 繩文土器

1. 北陸の繩文後・晚期土器型式編年研究

後・晚期土器型式の設定 戦後における北陸の繩文土器編年は、山内清男博士によって大綱が定められた。昭和27・28年に行われた九学会連合能登調査委員会の先史班長であった博士は、淡島氏の保管する富山県氷見市朝日貝塚出土の後・晚期遺物と、沼田啓太郎氏が石川考古学研究会会誌第8号に発表した中屋遺跡の遺物を入念に調べ、能登では、班員であった市原寿文（現静岡大学教授）氏と筆者を賛同し、珠洲郡上戸村字北方所在山岸遺跡などの発掘を精力的に試みられた。博士は、これら一連の調査をまとめ、北陸において東北の大洞B式に併行する晚期土器型式として山岸式、大洞B-C式に併行するものとして中屋式を設定したのである（高塙1955）。

ついで、八日市新保遺跡（現新保本町チカモリ遺跡）と御経塚遺跡を調査した筆者は、八日市新保遺跡出土遺物が山岸遺跡に比べ、繩文土器量が豊富で各器種も揃っていることから、型式内容を明確にするには、山岸式土器の呼称を八日市新保式土器に変更することが適当であることと、八日市新保式土器に後続する土器型式として御経塚式土器を提唱し（高塙1964）、ここに八日市新保式土器→御経塚式土器→中屋式土器なる北陸の晚期前葉の土器編年ができるようになった。

一方筆者は、昭和37年、石川考古学研究会の市堀藤夫氏の協力で能登・羽咋郡富来町酒見新堂遺跡の発掘調査を行い、加曾利B式に類似する羽状縄文を施した鉢・浅鉢、独特の文様を施した深鉢・注口と、中期後葉以来、北陸に盛行する縱位縄文の粗製深鉢の組合せからなる一群の土器に注意し、これを酒見式土器と名付け、北陸の後期中葉後半の土器型式とすべきことを、現地説明会で発表した（高塙・市堀1974）。

酒見遺跡の発掘に参加した富山考古学会の小島俊彰氏は、同年、富山県東砺波郡井口村井口遺跡で発見された巻貝凹線文・扇形圧痕文土器を実見、関西の元住吉山II式、宮滝式土器に類似することに注目し、これを酒見式土器に後続する後期後半の土器型式として井口式土器と呼称した。小島氏は、井口遺跡の別地点で酒見式土器に近似する一群の土器を採集したが、昭和40年末、小島氏と筆者および奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部の佐原真氏とで行った、晚期前葉における北陸と関西の交流に関する検討会で、佐原氏から酒見式近似土器の鉢・注口の施文が貝殻縄文であることを指摘されるに及び、小島氏は貝殻縄文の類を関西の一乘寺K式・元住吉山I式土器に併行する井口I式土器、凹線文・扇状文の類を井口II式土器と呼称し、北陸の繩文後期中葉・後葉の土器型式とすべきことを提唱した（小島1966）。

なお、吉岡康暢氏と筆者は、昭和35年、手取川上流の石川郡鳥越村下野遺跡で東北の大洞A式土器と併行する一部の土器を発掘し、これを北陸の晚期後半の土器型式として下野式土器と呼ぶことにした（吉岡1971）。

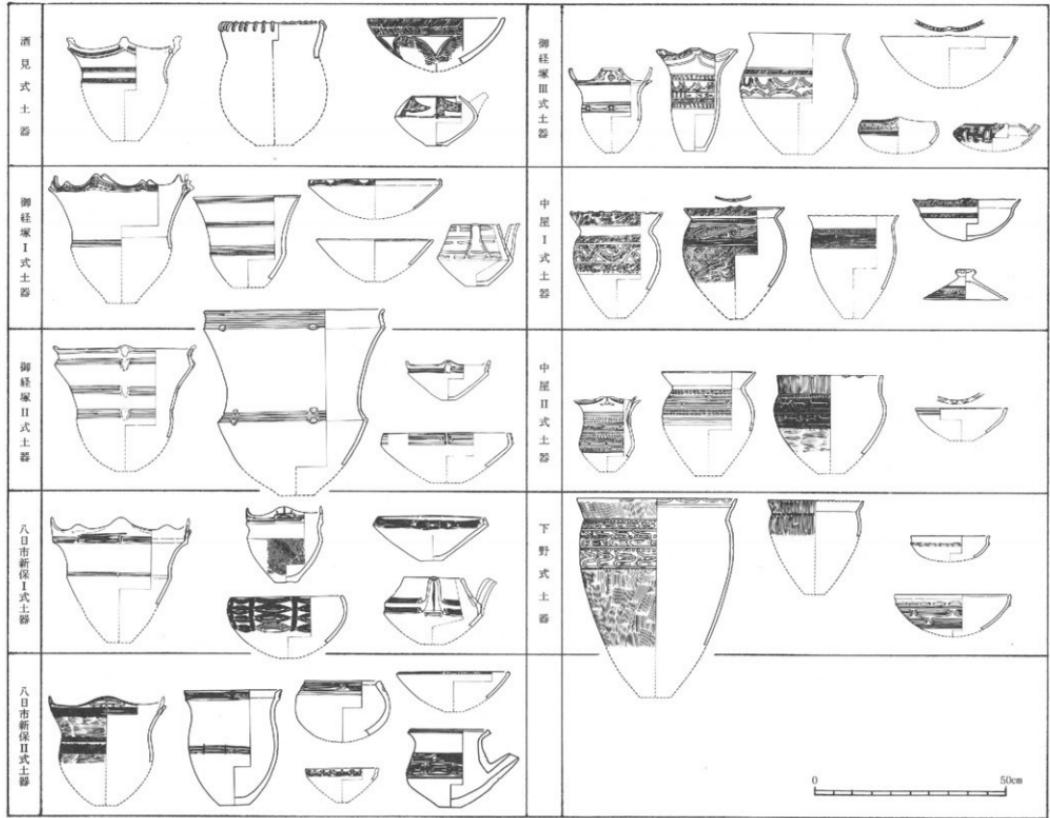
当時、北陸の隣接地域では、新潟県小千谷市三仏生遺跡で酒見式土器類似の後期中葉の土器が報告され（中村1957）、中頸城郡妙高町薄生では、酒見式土器によく似た後期中葉の土器、井口式土器類似の凹線文土器、大洞C I式併行の晚期土器が紹介され、東海・甲信との関係が論ぜられた（中川1967）。東海では、清水市天王山遺跡（市原1960）の晚期土器は、八日市新保遺跡・御経塚遺跡にみられる鍵の手文が特色の一つをなし、磐田市西貝塚（麻生・市原1961）では、井口式土器類似の凹線文土器が関西の後期後葉の宮滻式土器に対比され、酒見遺跡・井口遺跡と類縁性のみられる浜松市蜆塚遺跡の土器型式は、5期に分けられ（麻生1962）、酒見式土器、井口I式土器に対応するものは蜆塚III式、井口II式土器に対応するものは蜆塚IV式、V式土器に編年された。また、関西では、大津市滋賀里遺跡の土器を精製土器と粗製土器に大別し、器種・器形に基づく土器構成が論じられた（坪井1962）。

以上の情報をもとに、北陸以外の後・晚期土器を何ら実見することなしに、筆者が北陸の後・晚期土器編年を述べたのが、「繩文文化の発展と地域性—北陸一」であり（高堀1965）、研究者の引用するところとなつたが、上器編年の基礎である器種構成には何らふれることができなかつた。

上に述べた小島氏の井口I・II式土器論、富山市岩瀬大神遺跡出土遺物例などによって、貝殻压痕文、扇形压痕文のかわりに、細長い楔形文をえぐる北陸の後期終末の上器と、東北系の瘤付土器との関係を論じた出崎（現姓外山）報文（出崎1967）、酒見式土器・井口I式土器と井口II式の上器セットが、いずれも東北系と関西・東海系の組合せからなる二系統論を紹介した久永論文（久永1969）などは、上記高堀土器編年の欠を補なうことを意図したものであつた。

また、高岡市勝木原遺跡を調査した小島氏は、器種と器形、文様を組み合せて編年論を展開した（小島1967）が、これは北陸の後期土器編年における最初の試みといえる。氏が玉抱き三叉文と八日市新保式との関連を取り上げたのは、みごとな着眼であったが、玉抱き三叉文土器を八日市新保土器に併行する勝木式土器の特色とし、御経塚式土器と区別したことに問題が残されたようである。小島氏と、「佐野遺跡の研究」（永峯1967）により、亀ヶ岡式土器の第1次・第2次文化伝播圏の接点にあたる中部山地東辺の後期土器編年に、画期的業績をうちたてた永峯光一氏は、中屋式土器は、大洞B-C式併行とC I式併行型式に二分されるべきであるとして、きわめて熱心であった。しかし、金沢市松村遺跡出土の晚期土器（米沢1969）を適当にあしらった筆者は、これに対し適確な答を出す用意がなかつたのである。

上のような状況のもとに開始されたのが、第1年次（通算第5次）以降の御経塚遺跡の調査である。御経塚遺跡の第5次～第9次調査で得られた重要な知見の一つは、後期中葉後半から後期後葉までの中葉までの遺構・遺物が豊富に検出され、本遺跡は、この期では最大規模を誇る全国有数の遺跡といえることである。御経塚の集落形成の前夜にあたる後期中葉前半は、加賀市横北遺跡の発掘調査（湯尾1977）で、日本海岸に近い舞鶴市桑飼下遺跡出土土器を標準とする桑飼下式土器（渡辺1975）と濃いつつながりをもつ土器群が明らかにされ、酒見遺跡・御経塚遺跡と続く、関西繩文後期文化伝播をあとづけることが可能になってきた。また、後期中葉後半から後葉後半までの土器型式については、増子康真氏は東海西部を中心とする後期遺跡出土の主要土器を洩れなく紹介し、北陸との関係を論じた（紅村・増子1978）。小林達雄氏は、西日本・東海・北陸に



図A 御経塚遺跡出土土器型式編年図I

ひろがる中葉以降の土器を凹線文様上器系式と汎称し（小林1977）、泉拓良氏は、関西の一乘寺K式・元住吉山I・II式・宮滝式土器の組成内容を概活し、東海・北陸との関係を論述した（泉1979）。これに対し北陸では、小島氏によって神通川以東地域における東北系の後期後半の土器群が報告され（小島1979）、橋木氏は、井口遺跡の発掘調査で得た資料による大胆な凹線文系土器型式論を準備していた。

一方、御経塚遺跡は、北陸の晩期前半を代表する遺跡として周知されているが、調査概報は中星式土器を御経塚式土器として報告するなど（高堀1975）、筆者の不勉強により、後期前半の研究は著しく阻害されていた。この状況を林謙作氏は、「1965年に刊行された『日本の考古学』第2巻には、ごく一部の地域をのぞいて、全国各地の編年研究の成果が示されている。ただし、この過程で、大洞諸型式と直接的な対比をおこなうことのできた地域（たとえば北陸、北海道）では、かえって混乱を生じるという皮肉な結果をも生んでいる。この混乱は、おおむね二つの原因に由来する。第一は、大洞諸型式との対比にさいして誤認を生じている場合であり、とくに晩期前半の諸型式にこの種の事例が多い。先に指摘したように、大洞諸型式の基準資料が公開されていないため、羊齒状文・珠文をもつ土器を機械的に大洞B-C式に、三叉文をもつ土器を無条件に大洞B式に比定するといった傾向がみられる。第二は、山内自身が関東地方における安行式と亀ヶ岡式の関係のなかで、再三にわたって強調した外来の影響を受け、外来的要素を含む土器と、在地の伝統を強固に保持する土器が併存して一型式を構成するという事実を無視し、大洞諸型式の影響が強く表われた土器のみを抽出して、一型式を構成している場合も認められる」（林1981）と述べているのは、筆者を中心とする北陸の晩期前半の編年研究に対する、的を射た批判として素直に受取られるのである。この林氏の批判に答えられるのは、土師・須恵器の型式研究に基づきおいた吉岡康輔氏の「石川県下野遺跡の研究」ぐらいであるのは、皮肉というべきであるが、事実、晩期後半の上器型式は富山県上市町丸山A遺跡の前葉後半土器と下野式土器の分析（酒井1979）松任市長竹遺跡出土の下野式の研究（中島1977）によって、さらに深められているのである。

さて、昭和48年の調査開始以来、完形に近い土器や複元可能な土器のみを抽出していた筆者が、御経塚遺跡の土器と取組み始めたのは昭和54年のことである。それから試行錯誤を繰返しながら、55年11月の報告書編集打合せ会に提示するに至ったのが、折込図に掲げた御経塚遺跡の土器を、酒見式（井口I式土器）→御経塚I式土器（井口II式土器）→御経塚II式土器（井口II式土器）→八日市新保I式土器→八日市新保II式土器（八日市新保式土器）→御経塚III式土器（御経塚式土器）→中星I式土器（中星式土器）→中星II式土器→下野式土器の9型式の区分した編年表である。その要点をいえば、酒見式土器（井口I式）は、2型式に区分する腹案を将来の課題として残し、従来のまま、一型式にとどめたこと、井口II式土器を御経塚I式、同II式、八日市新保I式土器に三分したが、御経塚I式土器は元住吉山II式に、御経塚II式土器は宮滝式に併行するものであり、八日市新保I式土器は、筆者が御経塚遺跡の概報で述べていた『滋賀里風』土器にあたり、後期最終末の地域色豊かな上器型式である。八日市新保II式土器は、従来の八日市新保式土器であるが、波頂部を内面にひねりこんだ深鉢と、I式土器の意匠に独自のえぐりを加えた三

又文を長軸で結ぶ連続三叉文とを指標とする。御経塚Ⅲ式土器は、これまでの御経塚式土器であるが、玉抱き三叉文は、口縁内面をめぐる1~2条の凹線と組合さって深鉢の一タイプとなる。中屋Ⅰ式土器は、入組三叉文と口縁のB突起が目立ち、中屋Ⅱ式土器は、B突起は消滅し、Ⅰ式七器から発展した変形縫の手文や工字文土器が、一部搬入品を加えた大洞C1式土器の模倣品と組合わせている。下野式土器の二区分は将来の課題として残した。

上の土器型式の編年は、林氏のいう誤認も少なくないことと思われるが、あえてこの型式編年に基づいて御経塚遺跡の繩文土器を報告することとし、今後の批正をまつことにした。

2. 住居址出土の繩文土器（図5-1~16）

第1号住居址の土器 覆土と床面の土器とがある。覆土中の上器は、中屋Ⅱ式ないし下野式土器とみられる26~29・45、中屋Ⅰ式土器にあたる22~25、御経塚Ⅲ式の34~36、八日市新保Ⅱ式土器の31~33である。床面の土器は10~12の如き八日市新保Ⅱ式土器と7~9・38~44の如き御経塚Ⅰ式土器である。粗製深鉢形土器に繩文施文土器が多いことから、この住居址は御経塚Ⅰ式期とみなすべきであろう。1~5の酒見式の深鉢は床面下のものであろう。

第2号住居址の土器 覆土には八日市新保Ⅱ式（51）、御経塚Ⅲ式土器（52~54）があるが、46~50の御経塚Ⅰ式土器が本住居址の土器である。

第3号住居址の土器 第3号住居址は第4号住居址と切合っていた。初めは、単独の住居址と考えたのが、掘り進むうちに2基の住居址が複合していることを知ったので、遺物は3号・4号、3~4号住居址出土に区分された。しかし、この区分は正確なものとはいがたい。覆土には92~96の如き八日市新保Ⅰ式土器、97にみられる御経塚Ⅲ式土器少量が含まれているが、それ以外は、55~1の酒見式土器を除くと、御経塚Ⅰ式土器とⅡ式土器（56~85・86~91）に大別される。81~5は、赤彩した口縁直口する大形の浅鉢である。

第4号住居址の床面 検出された118~6は、口縁部の内折する2段にくびれる浅鉢で、内面にせまい繩文帶をめぐらす御経塚Ⅰ式七器である。器外面全体に煤が付着している。

第3号住居址との切合い 関係の中で検出され土器は、138~141の御経塚Ⅱ式土器を除けば、ほとんどが御経塚Ⅰ式土器である。137~8のⅠ式壺形土器は塗彩する。

以上の土器分類から、第3号住居址は御経塚Ⅰ式期、第4号は同Ⅱ式期とすべきであろう。

第5号住居址 初め第189号土塙として発掘し、作業を進めるうちに、この土塙は第5号住居址の覆土、堆土に埋り込まれた新しい時期の土塙であることに気付いたものである。169~14は、第5号住居址の炉内で検出された御経塚Ⅱ式土器である。火熱で変色し、淡橙色を呈する。波状口縁は4波頭で低い半円径をなし、器形は3段にくびれる深鉢で、ヘラ磨きで整えられているが、波頂下に3段にわたり、下向きの巻貝を押圧した扇状文がみられる。胎土には1mm程度の砂粒が含まれている。住居址内の土器は、御経塚Ⅰ式土器が多く、Ⅱ式土器は、167~173、185~189と意外に少ない。188~20は連弧文に細い横長の列点文を配した舟形土器である。

189号土塙からは、八日市新保Ⅰ式（191~202）、八日市新保Ⅱ式（203~216）、御経塚Ⅲ式（217~229）、中屋Ⅰ式土器（230~231）、中屋Ⅱ式土器（232）などが検出されている。



图 5-1 第 1 号住址出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

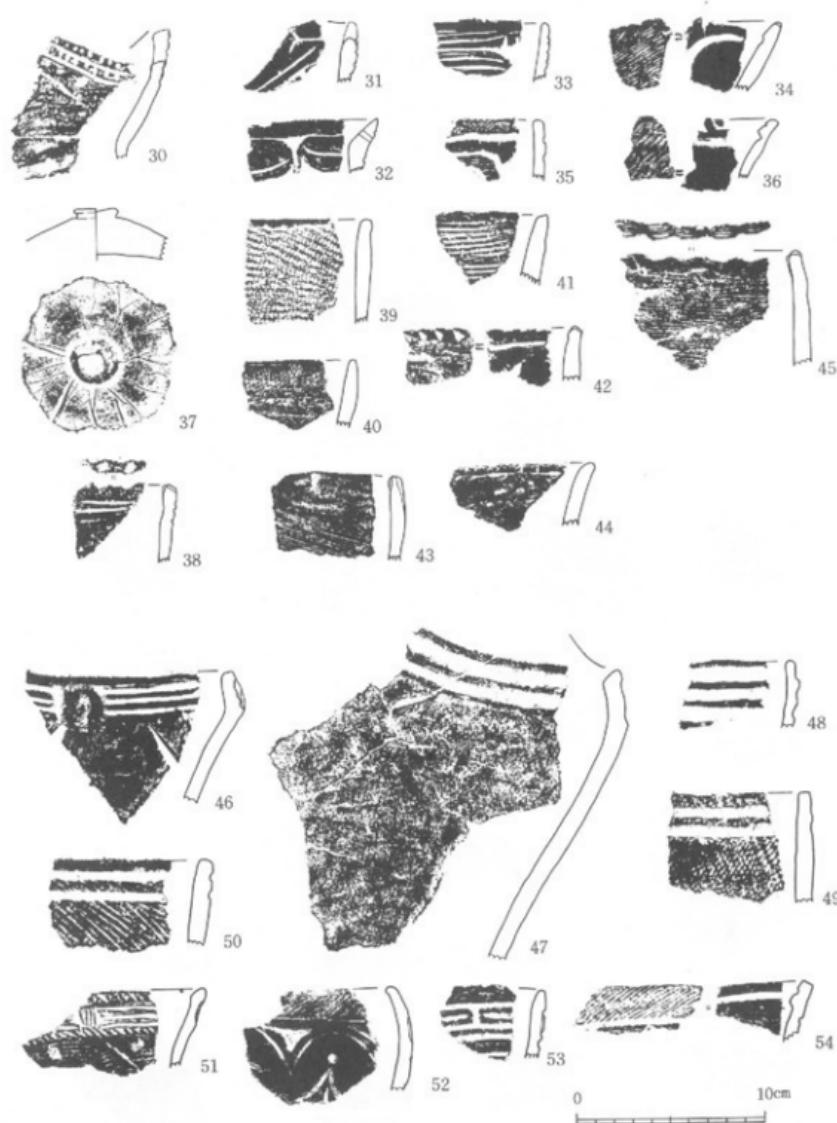


図5-2 第1号(45まで)・第2号(46以下)住居址出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

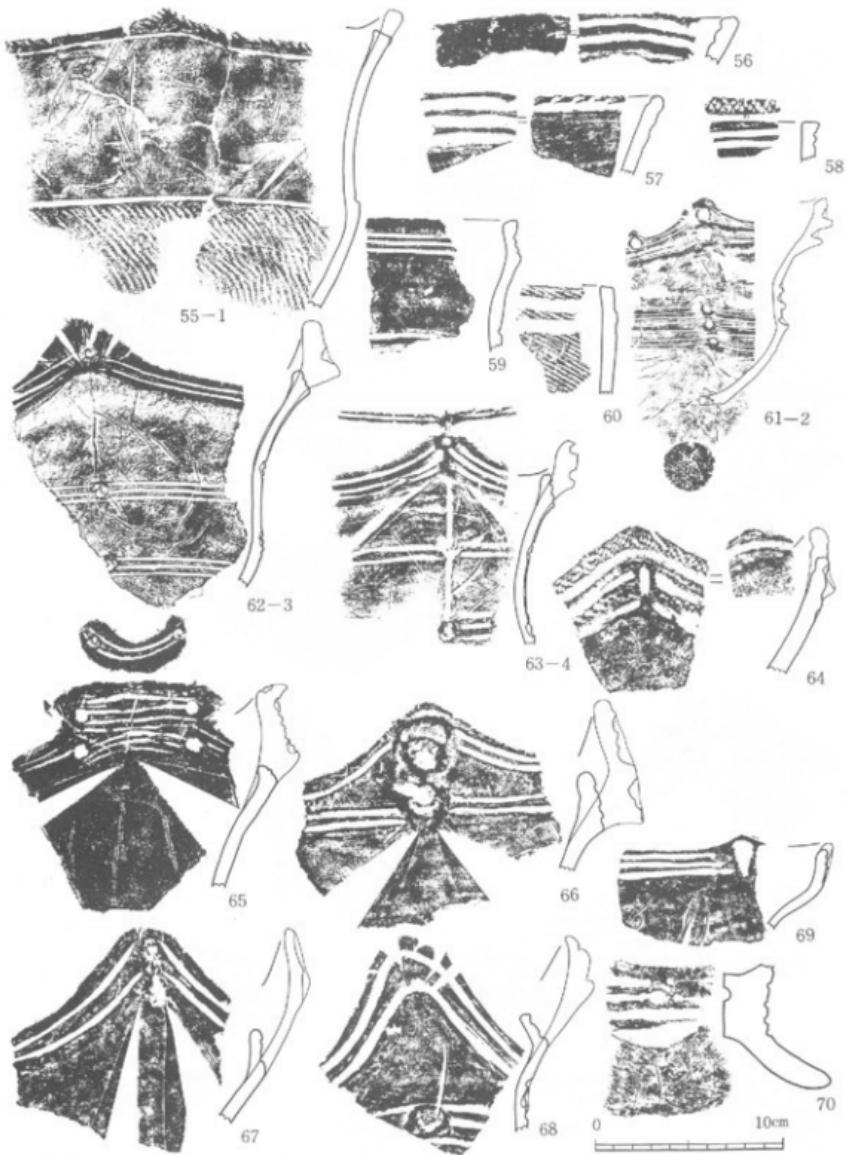


図5-3 第3号住居址出土土器拓影1 (S=1/2、ただし61はS=1/4)

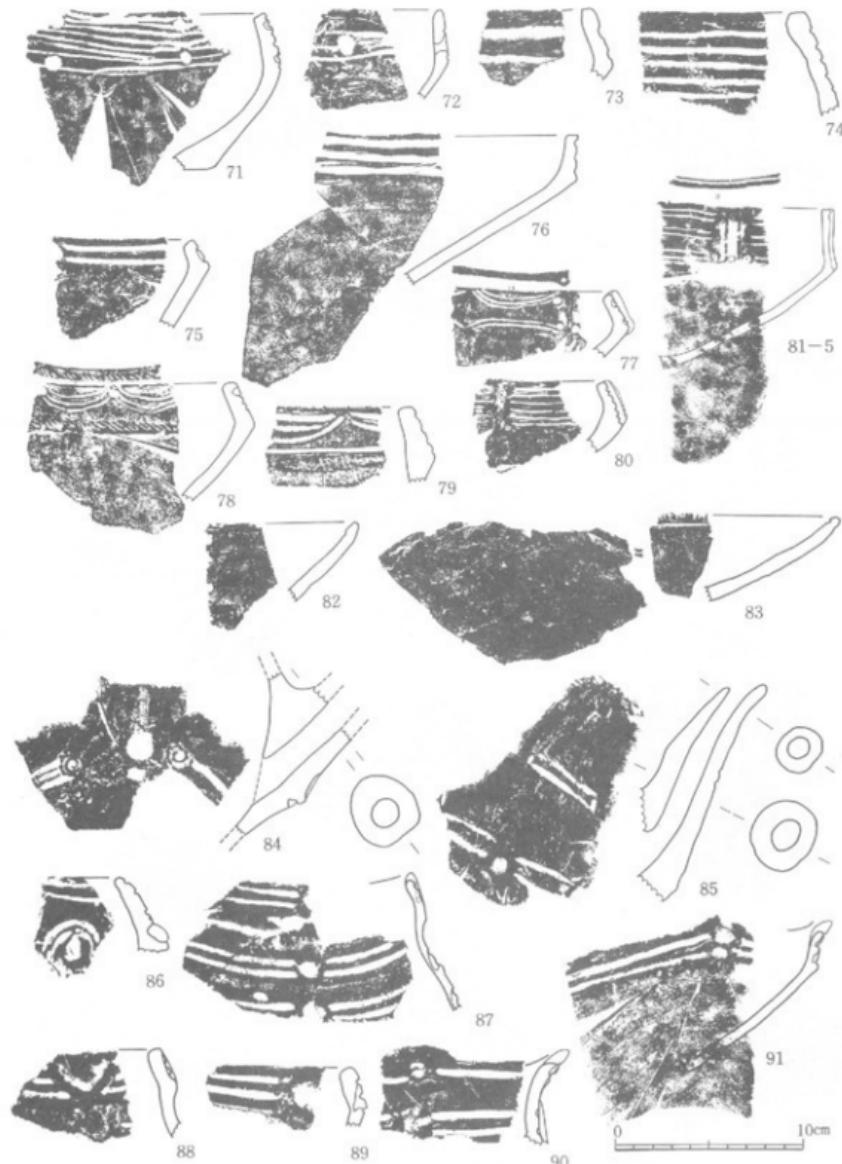


図5-4 第3号住居址出土土器拓影2 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし81は $S = \frac{1}{8}$)

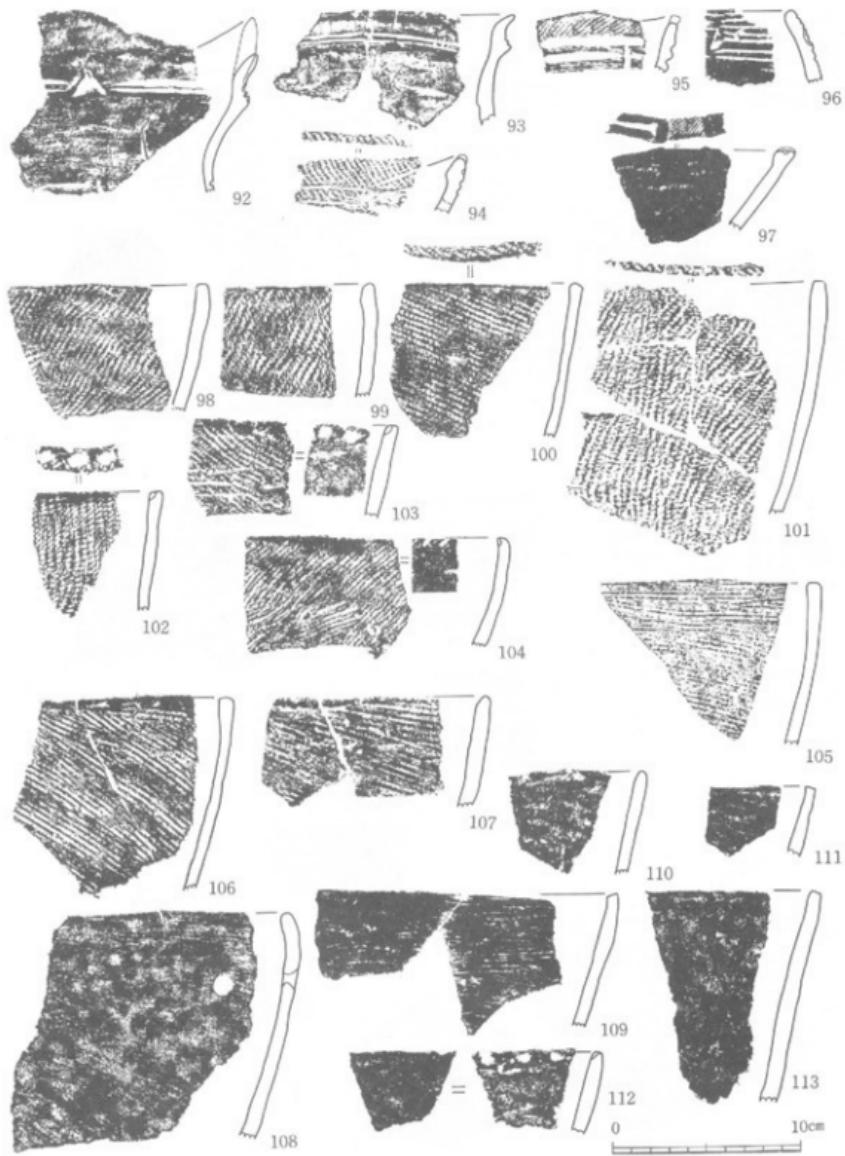


图 5-5 第 3 号住居址出土土器拓影 3 ($S = \frac{1}{3}$)

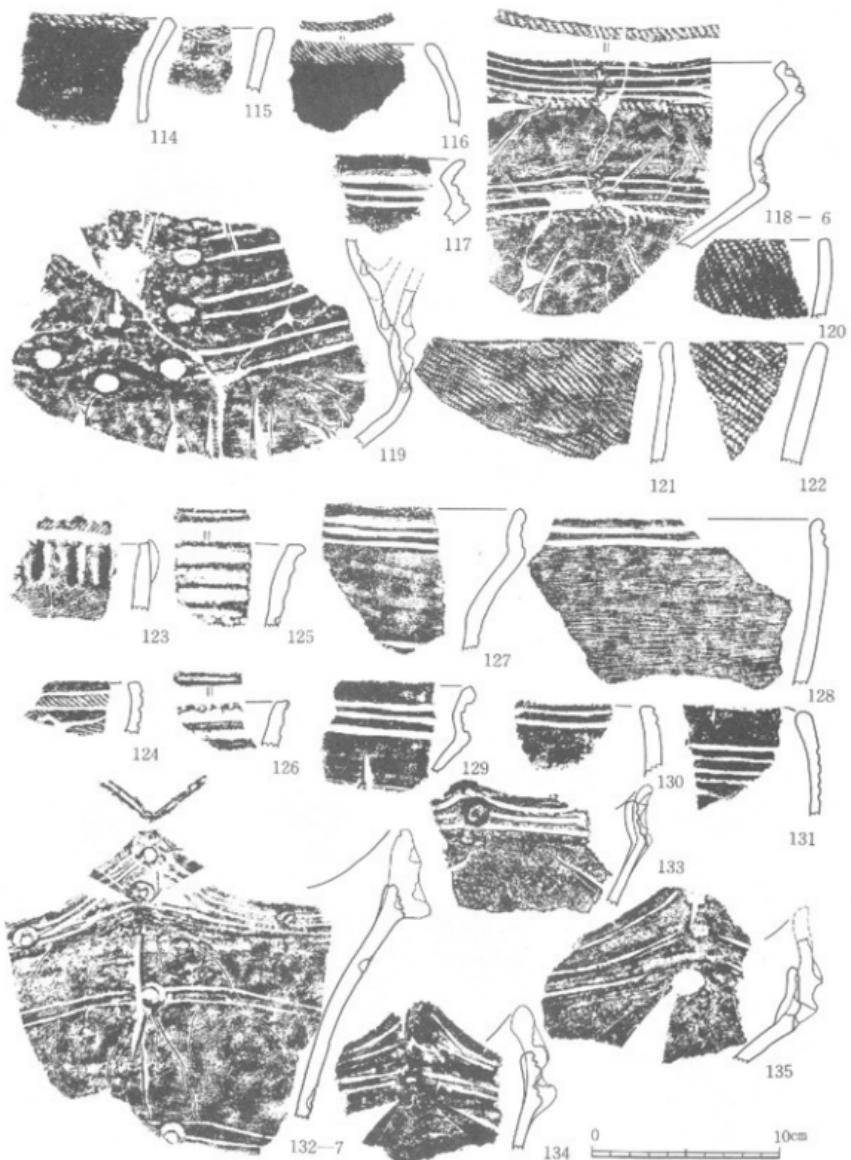


图 5-6 第4号(114~122)、第3·4号住居址出土土器拓影($S = \frac{1}{2}$)

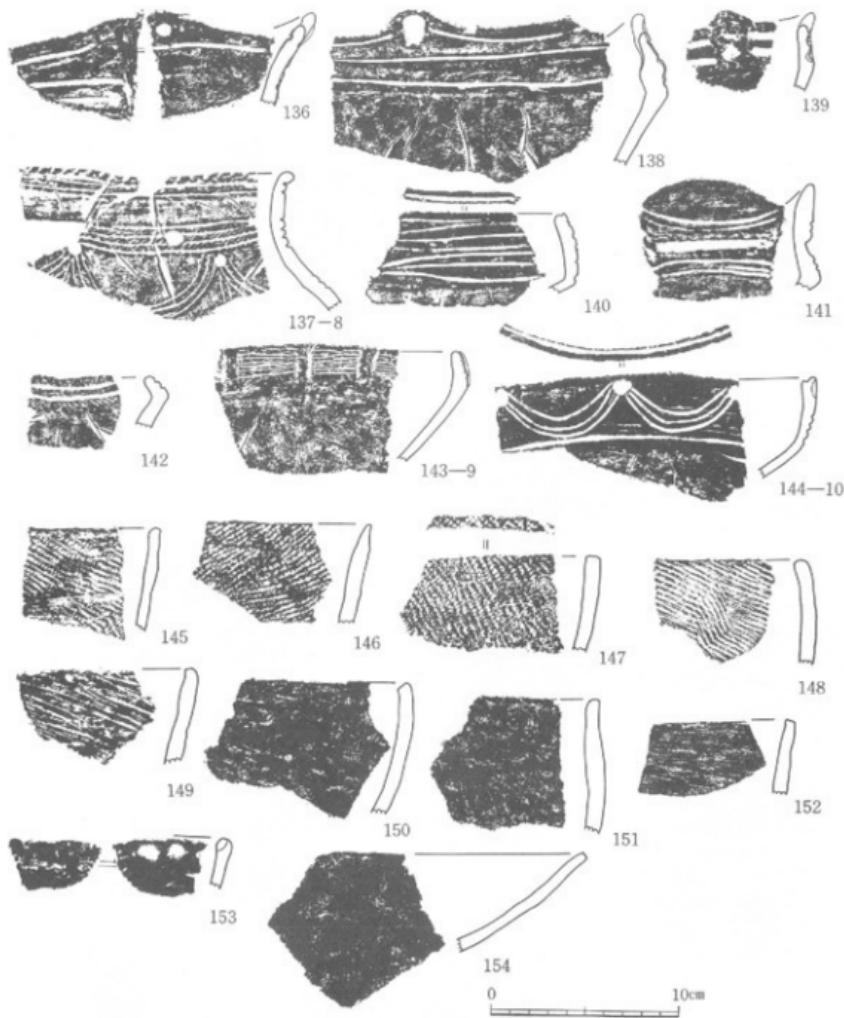


図 5-7 第3・4号住居址出土土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)

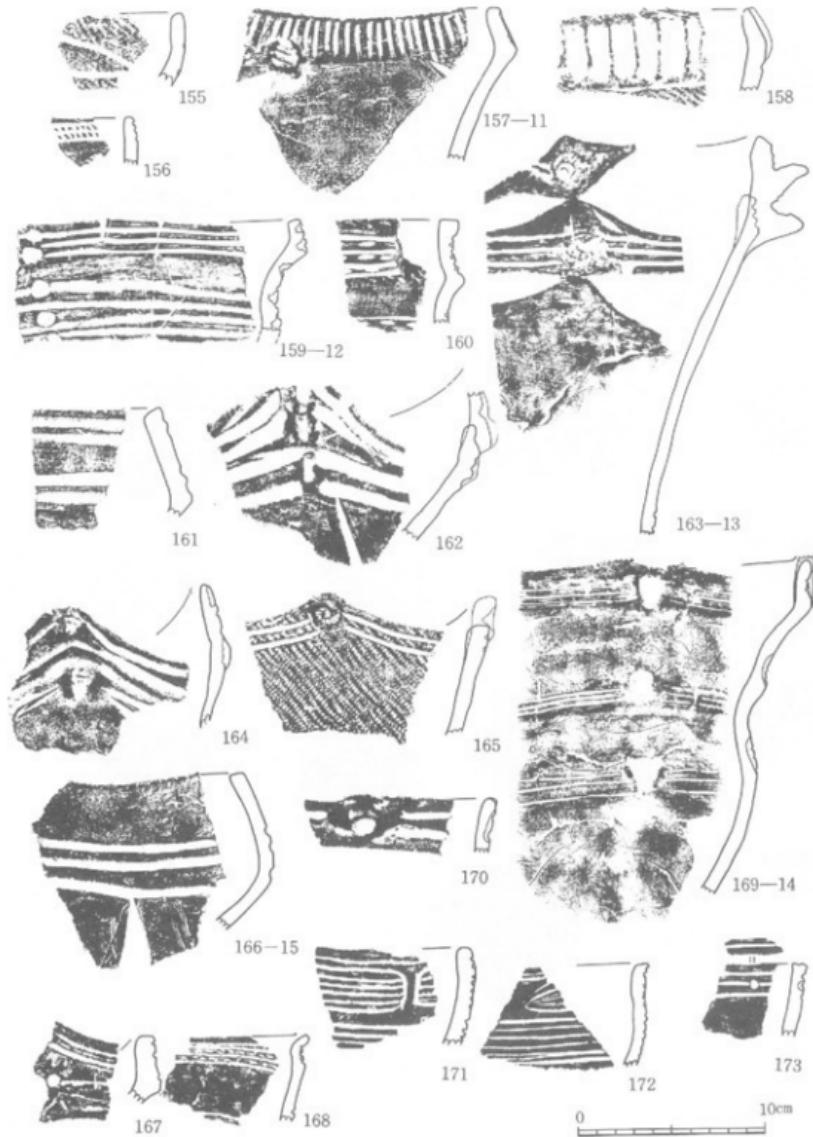


图 5-8 第 5 号住居址出土土器摄影 1 ($S = \frac{1}{2}$)

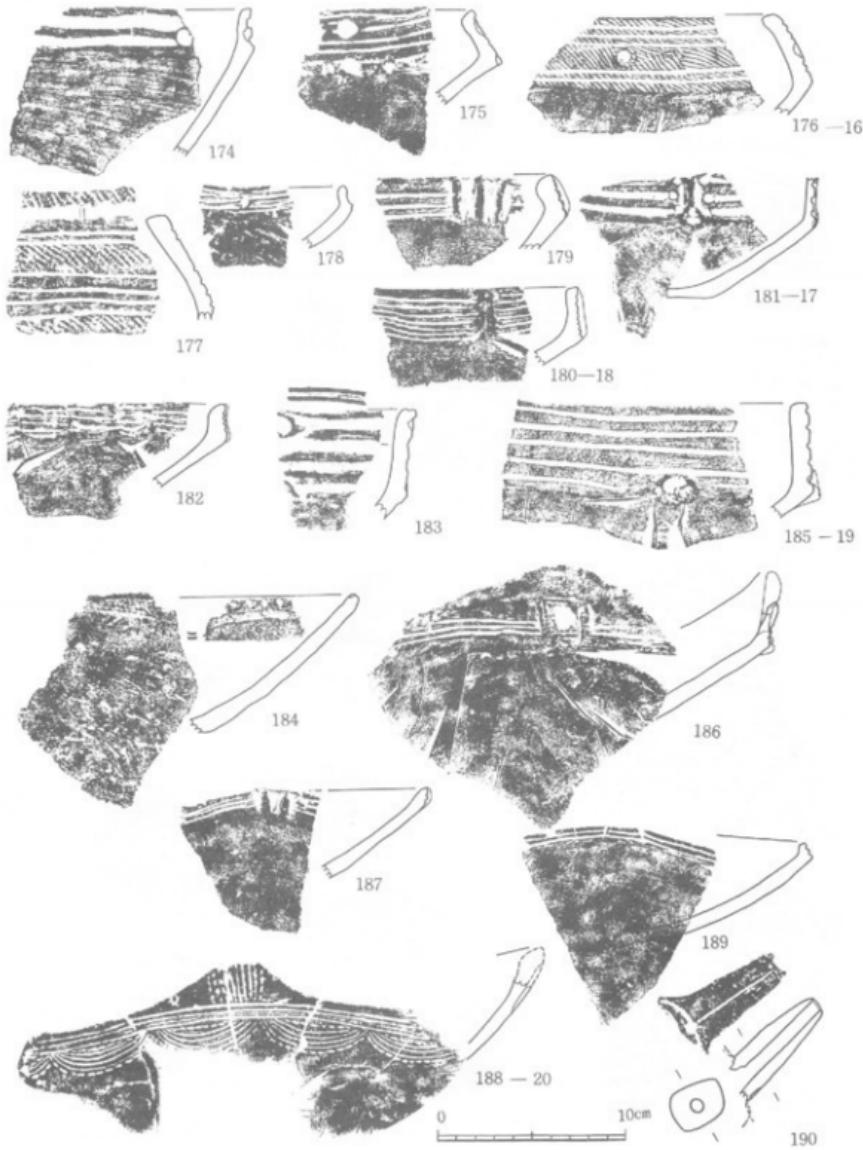


图 5-9 第 5 号住居址出土土器拓影 2 ($S = \frac{1}{3}$)

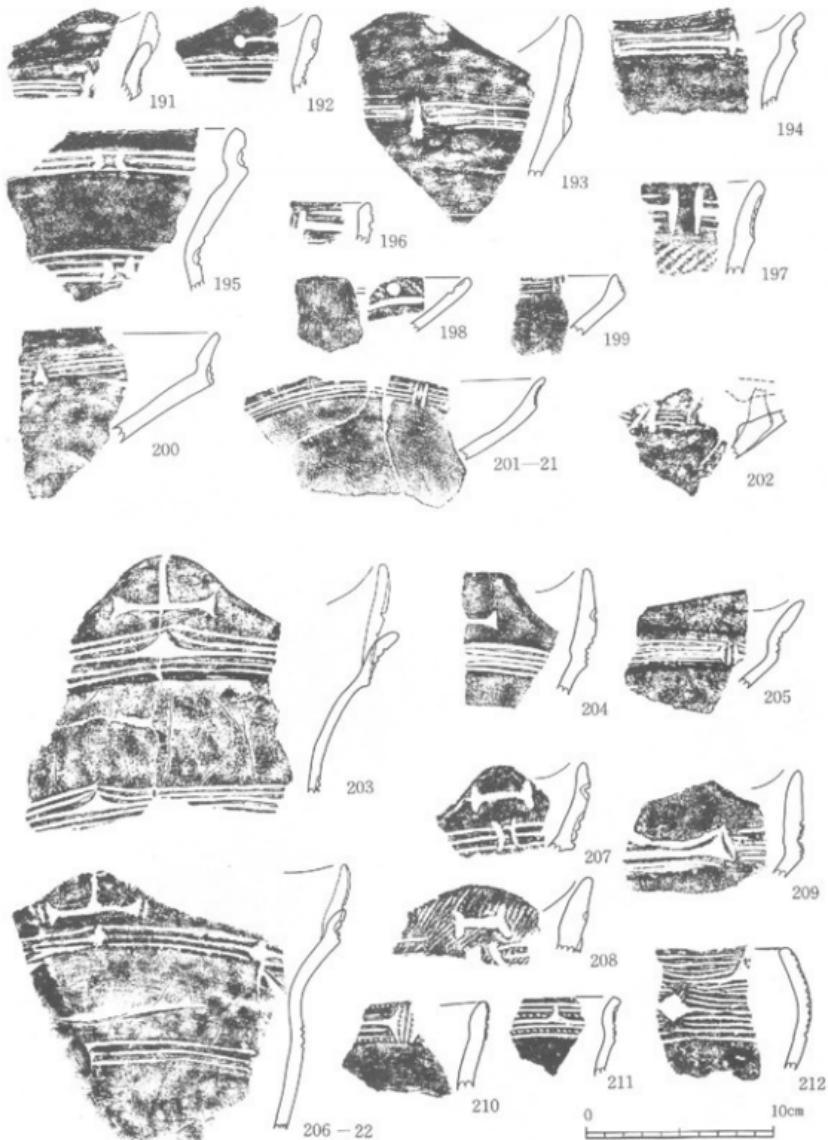


図5-10 第5号住居址出土土器拓影3 ($S = \frac{1}{2}$)

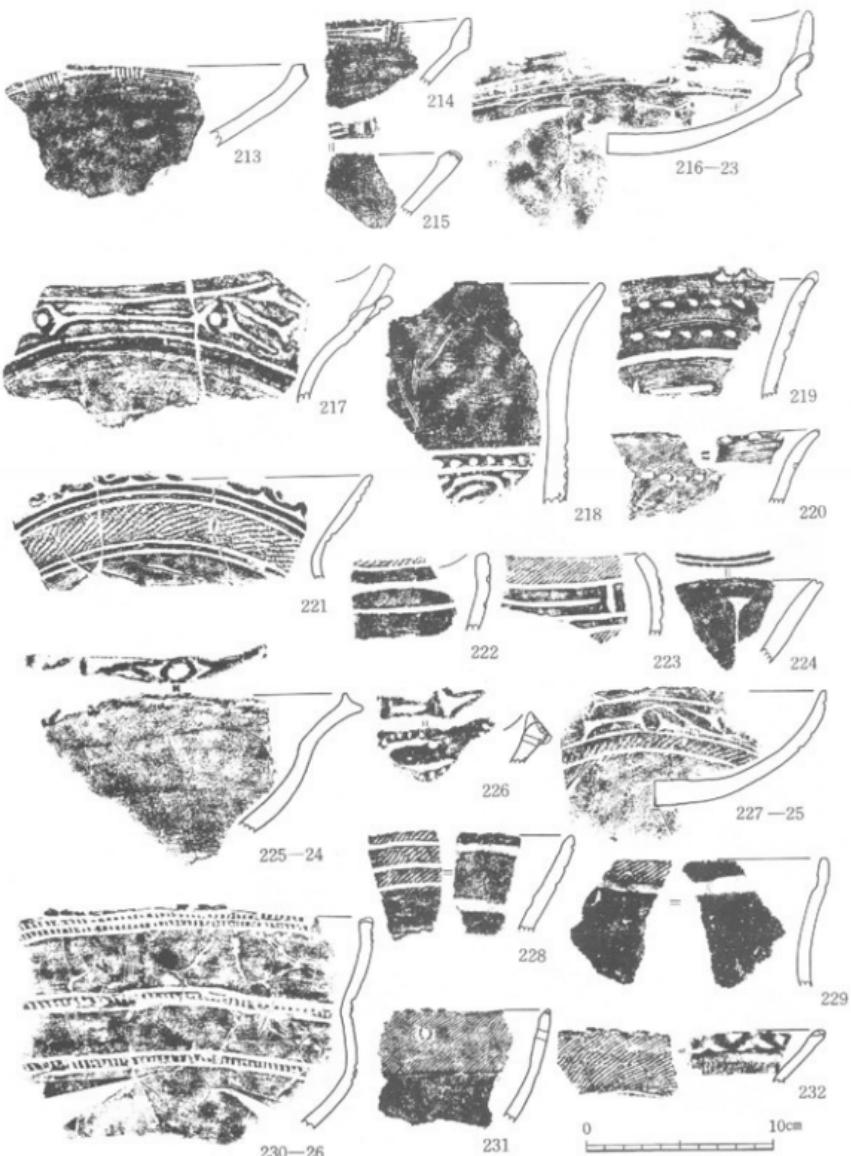


图 5-11 第 5 号居住址出土土器拓影 4 (S = $\frac{1}{2}$)

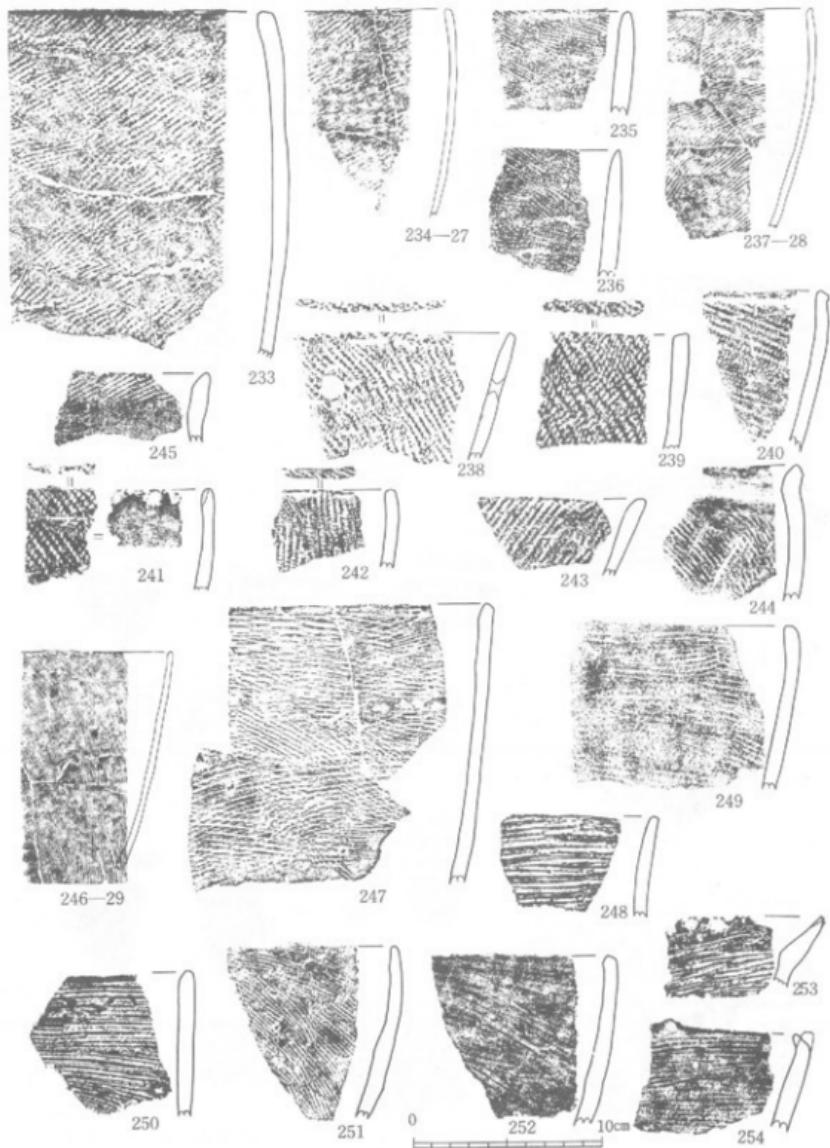


図5-12 第5号住居址出土土器拓影5 (S=1/2、ただし234・237・246は1/6)

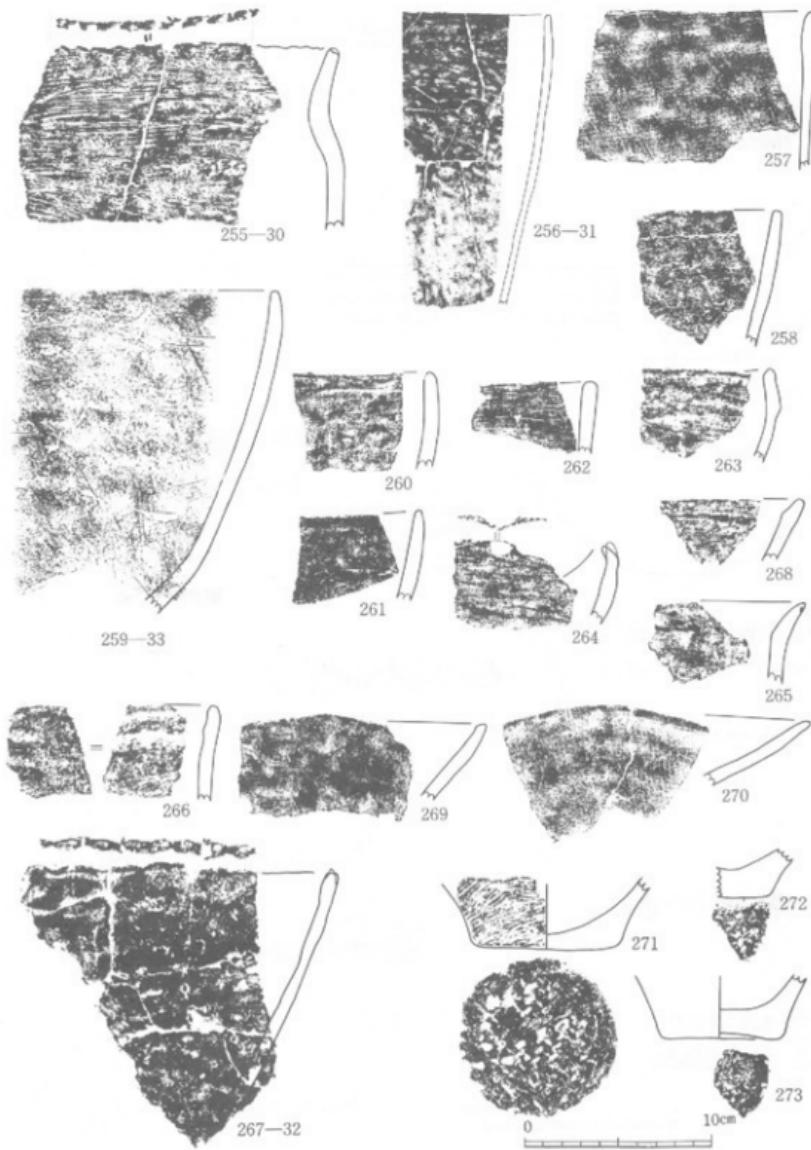


図 5-13 第 5 号住居址出土土器拓影 6 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 256 は $\frac{1}{8}$)

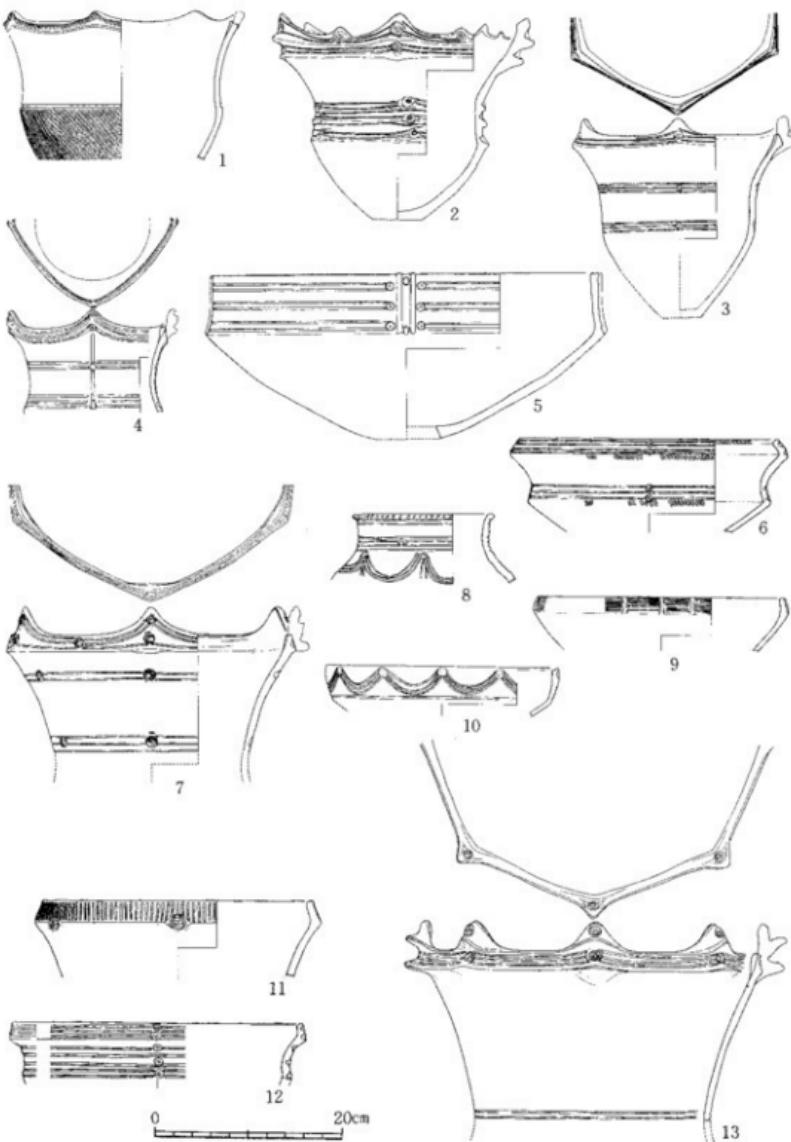


図5-14 住居址出土土器実測図1 ($S = \frac{1}{8}$)

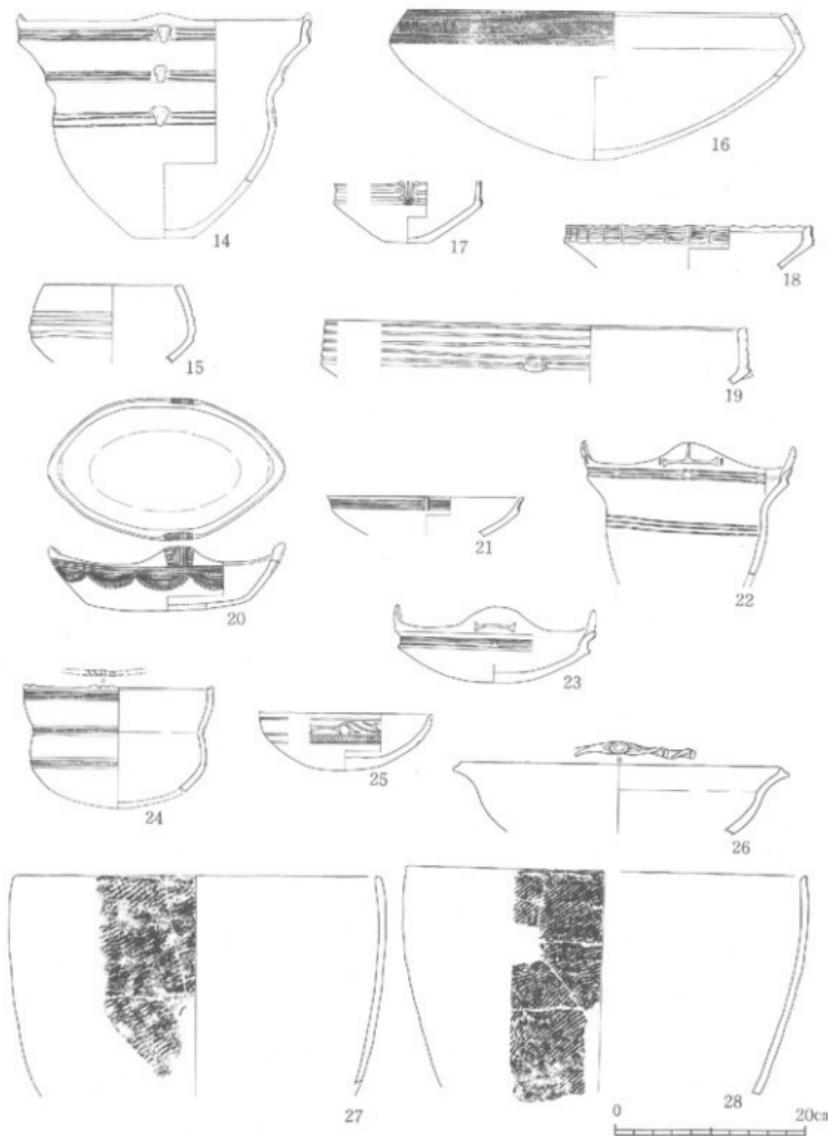


図 5-15 住居址出土土器実測図 2 (S = $\frac{1}{8}$)

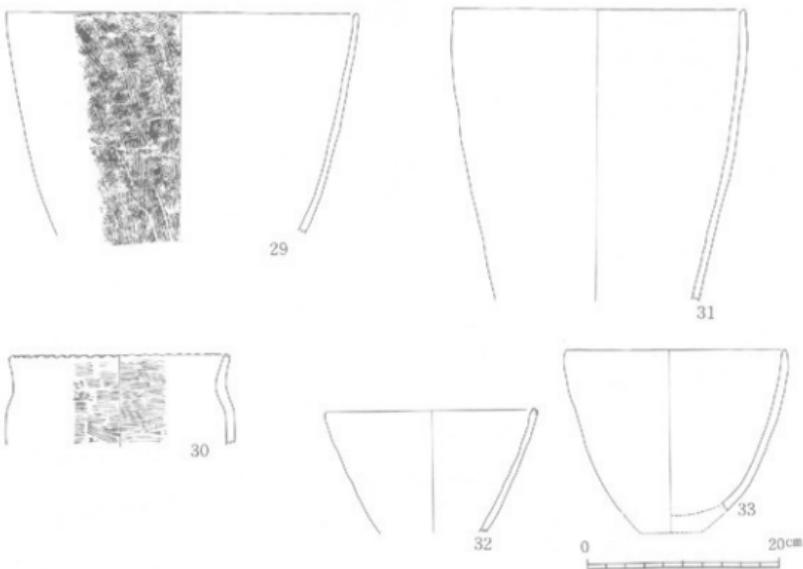


図5-16 住居址出土土器実測図3 ($S = \frac{1}{5}$)

3. 炉址出土の繩文土器 (図5-17~23)

炉には、原則として粗製土器を、炉の東中央隅に口を北と西の間に向け、斜位に据えている。強い火熱を受けるために壊れやすく、複元困難なものが多い。炉址内と周辺の土器は、これまた、火熱によって変色し、乳白色、明橙色などを呈している。

III区のB第1号炉址出土土器の図5-17の1は、大きき口が開き、口縁内面に刻み目をめぐらす平縁の深鉢で、元住吉山田式土器類似の御経塚I式土器である。同図の2-1は、4波頂の低い山形をなす波状口縁の深鉢で、波頂下に粘土を貼り、ヘラ状工具で突きさす楔形文を有する八日市新保I式土器である。一度廃絶した後に八日市新保I式期の住居が営まれたのであろうか。B第2号炉址も御経塚I式期である。図5-17の11の如き八日市新保I式、同12の八日市新保II式の浅鉢は覆土内出土であろう。

B第3号炉址の条痕文深鉢は、外面に、細歯とみられる櫛状具を底部から口縁にむけて動かすことで生ずる条痕を施し、内面をヘラ削りで整え、口縁内面には列点文をめぐらしている。御経塚I式土器である(図5-17の15-2)。

II区の7号炉址出土の18-3は、横走する条痕文に特色がみられる。時期は周辺出土の16にみられる如き御経塚I式期にあたる。図5-18の23-4の第6号炉址出土の条痕深鉢は、体部上半の

条痕は横走し、下半は斜め方向をとっている。同図の19の如き酒見式の羽状繩文深鉢も出土しているが、御経塚I式期とみるべきである。第8号炉址も同期である。

第10号が出土の平縁土器は(29-6)、高45.5cmを測る凹底の大形土器である。胎土には砂粒を含み、ナテ調整とヘラ磨きで整えられているが、炉の火を受けて黄褐色を呈している。凹縁内には巻貝痕が残存しているように見られる。また、巻貝圧痕文は円形粘土を貼付した上を、巻貝先端で斜上方から押圧したように観察される。口縁は内折せず緩い曲線をもって開き気味である。以上から、本土器は御経塚I式とII式の接点に位置することが考えられ、ここでは御経塚II式土器に含めておくことにした。

第11号炉址出土の図5-18の32-7は、五波頂の波状口縁の深鉢で、波頂部に相対する縱位巻貝腹縫圧痕文を押圧する。内外面とも横位のヘラ磨きが施されている。また、同図の33-8は、平縁・凹底の凹縁文土器で、器高は25.5cmを測る。外面は横位のヘラ磨き、内面は上部を横位に下部を縱位に磨いている。第13号炉址出土の図5-19の36-9は4波頂に小突起を配する大形波状口縁の深鉢形土器で、口縁端部を欠失するが、波頂間の小突起にそうて凹縁内に貝殻圧痕文を施文している。図5-19の38-10の平縁の連弧文深鉢と共に御経塚I式土器に属する。同37の平縁の深鉢は、体下半を欠失するが、口縁に3本の凹線をめぐらし、頭部に4本の凹線をめぐらす。口頭部には、さらに2本の凹線をめぐらし、口頭部凹線間と頭部下位2凹線間に刻目を施している。口縁内面に環状刻印文のみえる御経塚I式期の土器である。

I区の第18号炉址出土の図5-19の39の11は、口縁部の内湾する2段にくびれた波状口縁の深鉢形土器で、内外面をナテ調整する御経塚II式土器である。器高21.4cm。同図40-12の条痕文深鉢は、底部を欠失するが、体上半は灰黒色、下半は赤褐色を呈する。器外面には、部分的に煤の付着がみられ、内面も同様である。同41-13の無文深鉢は器高30.5cm、外面はヘラ磨きを加え、調整時に胎土の砂粒が動いた跡が観察できる。

第19号炉址の同図42-14は、ほぼ完形に複元された平縁の深鉢で、器高28.5cm。外面は、ヘラ磨き調整がなされているが、内面の磨きは丁寧でなく、粘土紐巻上げ痕が残っている。貝殻腹縫による円形圧痕文を有する御経塚II式土器である。第20号炉址出土の図5-19の46-48は御経塚I式土器である。

第21号炉址出土の図5-20の52・53の繩文施文の粗製深鉢は、いずれも胴下半を欠失している。53の外面は全面に煤の付着が認められる。56-16の繩文上器は器高28cm、口縁部には2孔があり、内外の2方向から穿たれている。55の下半を失った条痕深鉢にも煤の付着が認められるが、本炉址は御経塚I式期に属する。第22号炉址(57-62)も同様、御経塚I式期である。

以上に述べてきたように、炉址のみ検出できたB第1号炉からB第3号炉、第1号炉から第22号炉までの計29基のはほとんどは、御経塚I式期に営まれたもので、御経塚II式期に属するものとみられるのは、わずかに第10・18・19号炉址の3基にすぎないのであるが、いずれも微高地が微低地に移る傾斜面の肩部に営まれているのが特質である。地下水との関係を考えられよう。

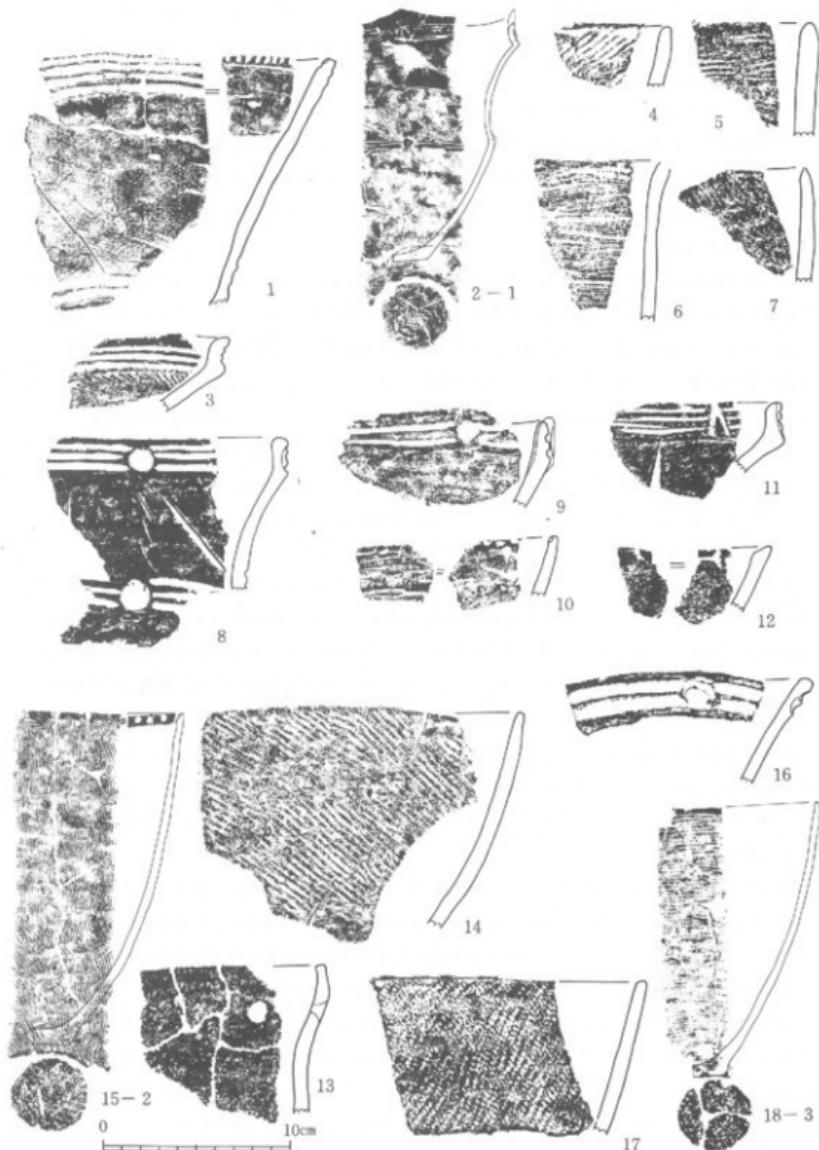


図5-17 第1・2・3・7号炉址出土土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし2・15・18は $\frac{1}{2}$)



図5-18 第6・8・10・11号炉址出土土器拓影 (S=1/2、ただし 23・26・29・33は1/4)

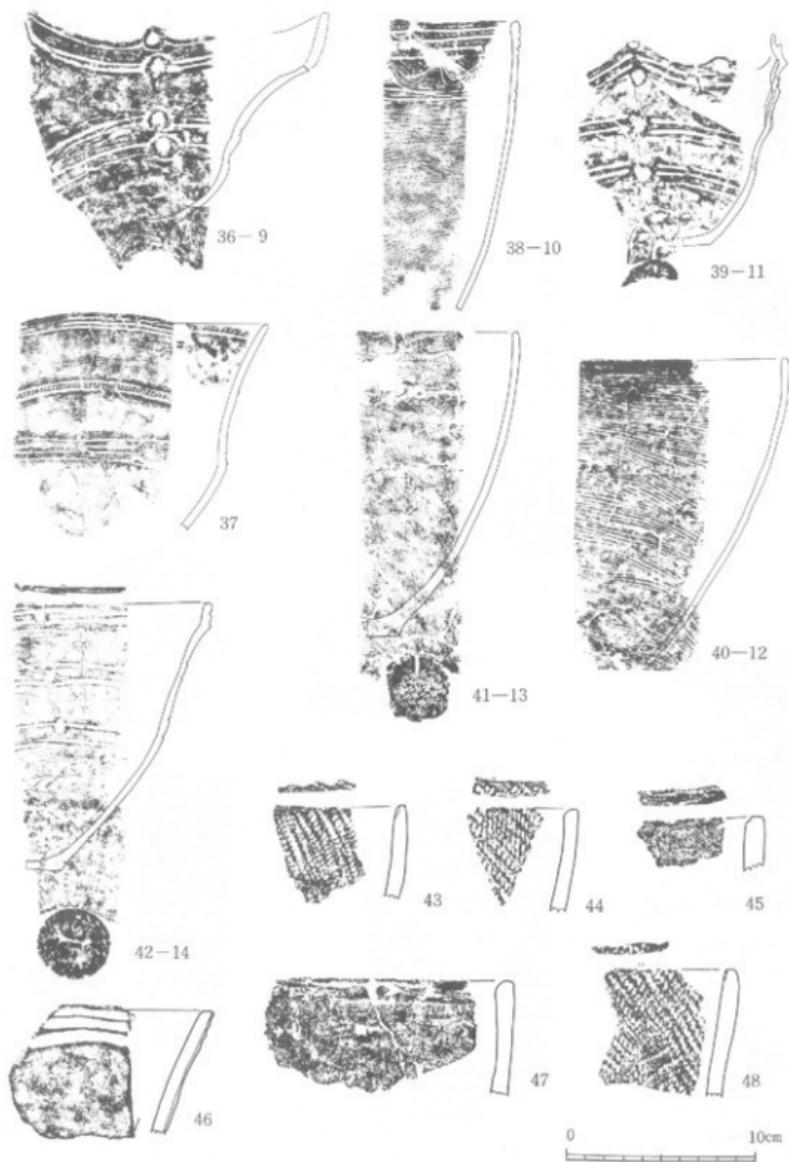


図 5-19 第13・18・19・20号炉址出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし36~42は $\frac{1}{4}$)

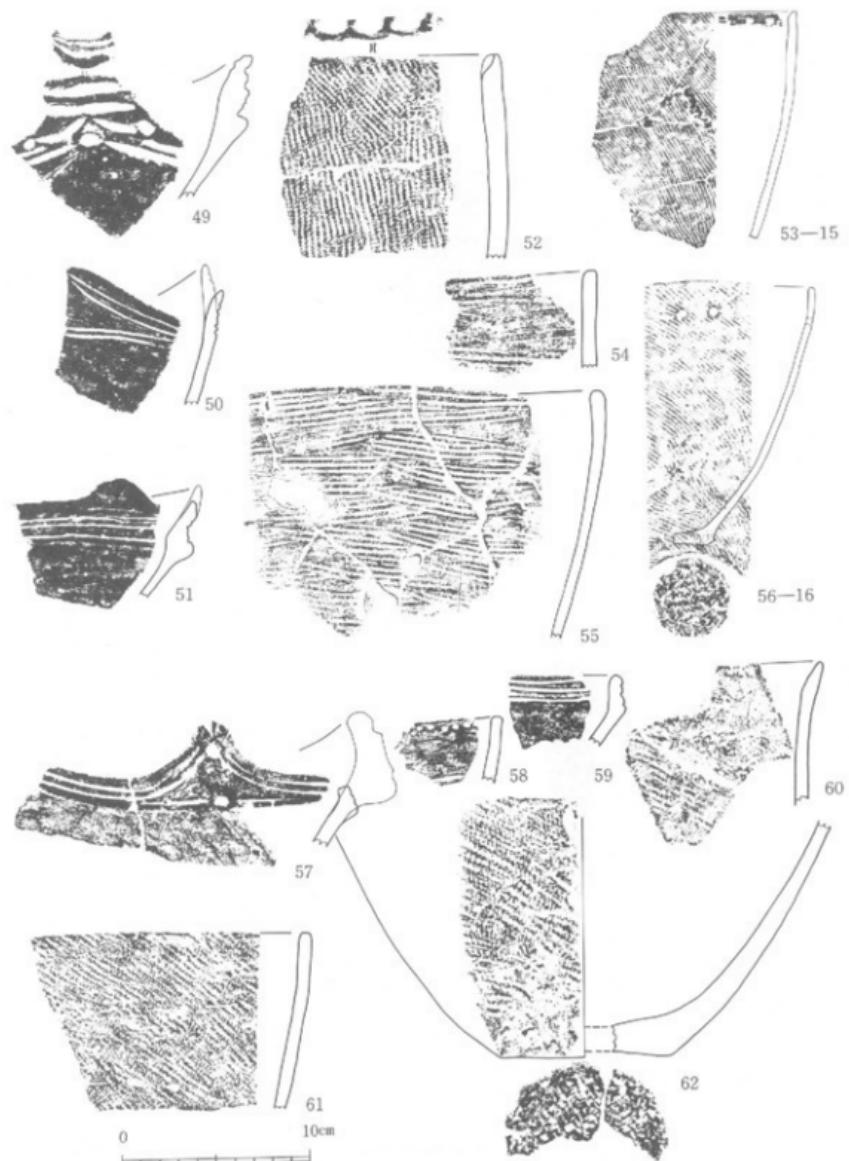


図5-20 第21・22号炉址出土土器拓影 (S=吉、ただし53・56は弓)

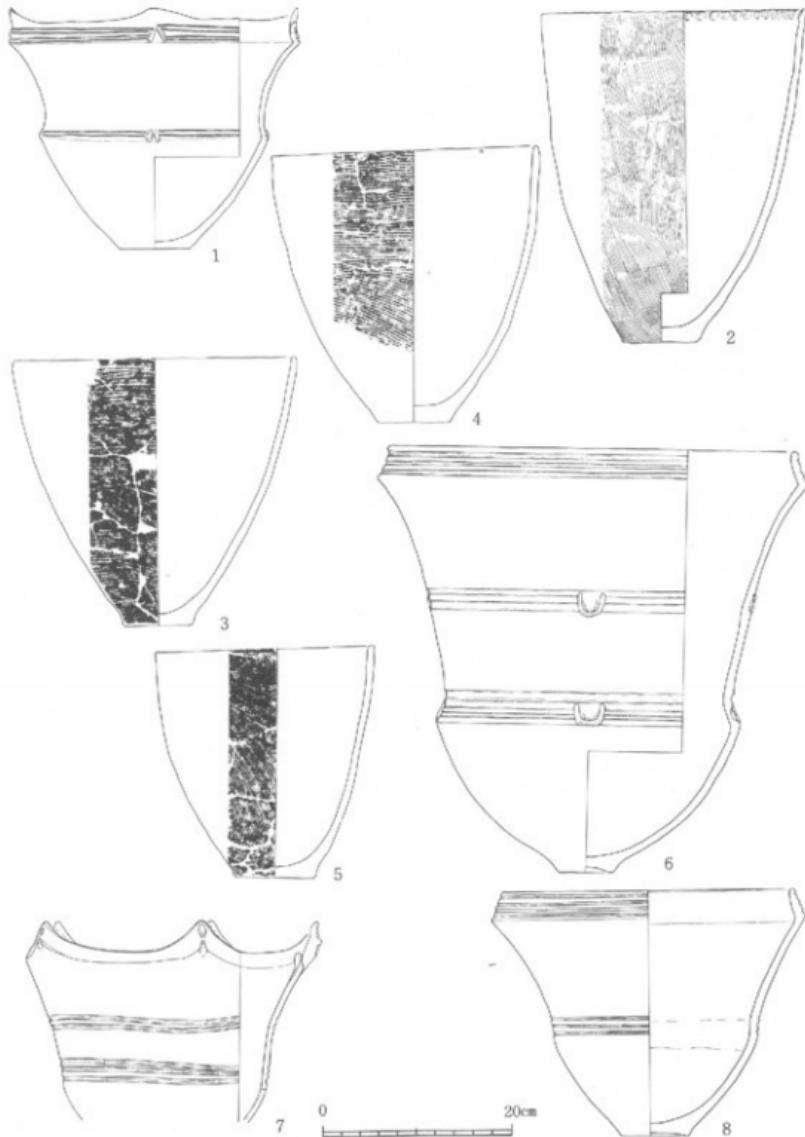


图 5-21 炉址出土土器实测图 1 ($S = \frac{1}{2}$)

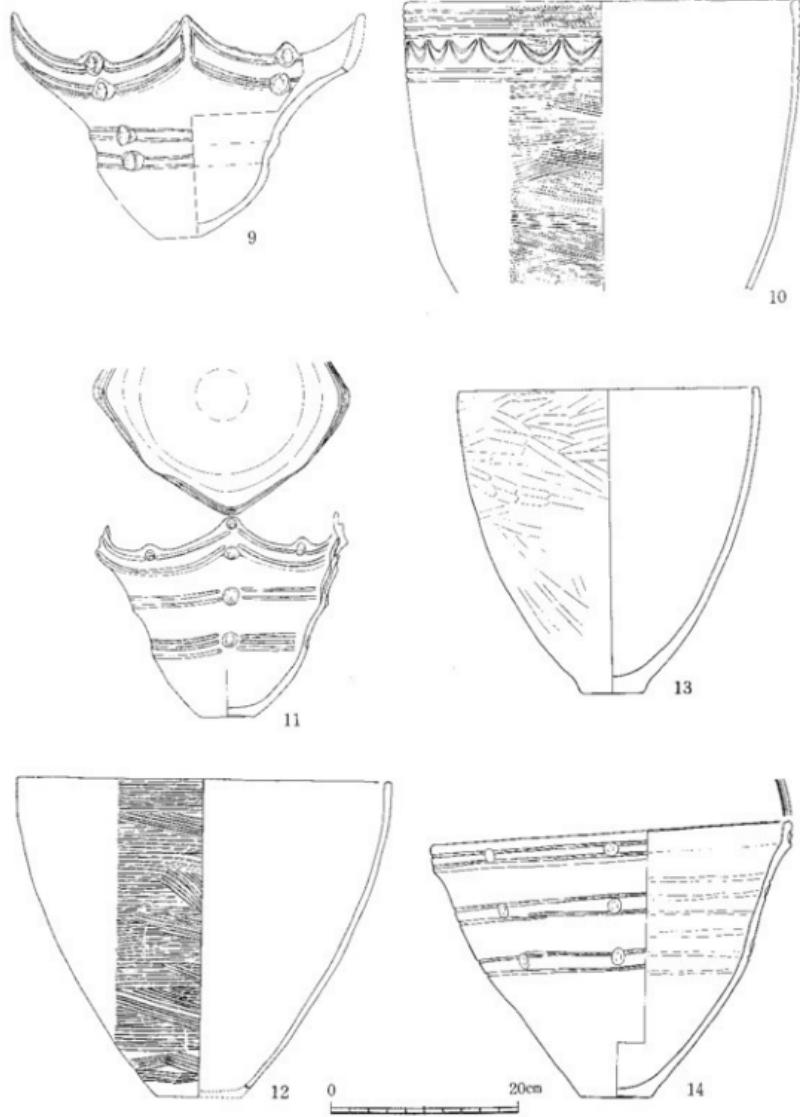


図 5-22 炉址出土土器実測図 2 ($S = \frac{1}{6}$)

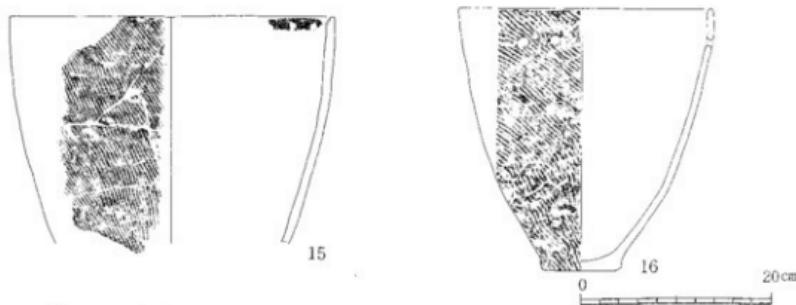


図5-23 炉址出土土器実測図3 ($S = \frac{1}{2}$)

4. 土塙出土の縄文土器 (図5-24~43)

土塙は、総数300基近くが検出されているから、土器を出土した土塙のすべてにふれることは困難である。胴部片出土土塙と、1~2点の精製土器口縁や数点の粗製土器口縁のみを出土した土塙は省略し、必要があれば、調査区出土土器の項で述べることにした。

I区の第205号土塙は、図5-24の1の御経塙III式の平縁深鉢と、八日市新保I式に属する同図5の波状深鉢と平縁無文の浅鉢とがみられる。第206号土塙は、同図14の低い口縁波頂を内面にひねった列点文の粗製条痕深鉢と、同19の楕円区画文の平縁深鉢とをもって、御経塙III式期の土塙と考えられる。第211号土塙も26~29にみられるように、御経塙III式期に属する。ただし、以上は、これらの土塙を黒土層に穿たれたものと想定した場合であり、覆土内の土器と考えれば、第206号土塙は八日市新保I式期、第211号は御経塙I式期となるであろう。

II区の第1号土塙は38~40・48の御経塙III式土器、34~36の中屋I式の粗製土器と42の蓋形土器、41~16の中屋II式土器、37の下野式土器が出土している。37は内面に2凹線、外面に眼鏡状隆帯文に近い楕円区画帶をめぐらしている。41~16は口唇に指頭による圧痕が施される。内外面のヘラ磨きや、それぞれに施される2条の沈線は中屋II式の意匠であるが、口唇の指頭圧痕からみてI式に近いものと考えたい。第3号土塙は御経塙II式(45~47)、八日市新保II式(50~51)、中屋I式(56~58)下野II式(55)などである。

第9号土塙では、図5-26の60~62は御経塙I式土器であるが、同65~68・75~77は八日市新保II式土器、70~74・78は御経塙III式、同81~85は中屋I式土器、同86は中屋II式土器、87~88は下野式土器である。このような、多岐にわたる出土土器の様相により、この土塙の時期も決定するのは困難である。

第10号土塙の100~2は腰棱で、底部を打ち欠いた無文土器で、内外面をヘラ磨きで整えるが、口縁内湾する器形からみて御経塙II式土器の可能性が高い。96は御経塙III式土器、97~99は中屋I式期に属する。

第39号土塙は、酒見式と御経塙I式がみられるが、図5-28の114~115は御経塙III式土器、116~134は中屋I式土器で中屋II式土器(117~122・131~133)が多い。第56号土塙は御経塙I式・II

式土器は少量で、精製土器のほとんどにあたる140~145は御経塚III式土器である。

第63号土塙は、154~158は御経塚I式土器、159は八日市新保I式土器であるが、その他は166の沈線区画内押引き列点文深鉢にみられるように、下野式土器ないしは中屋II式土器に属する条痕深鉢が多い。

第64号土塙では、173~176は八日市新保I式土器、177~178は八日市新保II式土器、179~180は中屋I式土器であり、182~184は下野式土器であるから、出土土器は多くの土器型式にわたり、これまた、きわめて複雑である。第50号土塙は御経塚式I式土器（186~193）が出土する。第77号土塙は下野式土器（194~195~17）が出土しているから、この期の土塙であろう。

III区のB第13号土塙は八日市新保II式（199）、御経塚III式土器（201）、下野式土器（197）などが検出され、様相は複雑である。B第14号土塙の有文土器は207の八日市新保II式土器のみである。

B第9号土塙は、図5-32の215~218の中屋I式の深鉢と219~220の浅鉢、同II式の221~222の深鉢が出土している。B第10号土塙には、223~224の御経塚I式、225~228の八日市新保I式、229の中屋I式の浅鉢、234の中屋II式土器、232~233の中屋I式に属する粗製深鉢が出土している。

B第11号土塙は、237~238の御経塚I式土器、236~242の八日市新保I・II式土器、244の中屋I式土器、245~247の中屋II式土器を出土する。248~12の下野式の浅鉢は把手付の器形と、重圓文を細長い楕円状区画降帶で方形に開む底部の意匠が特色である。

B第17号土塙は、251~253の御経塚II式土器、255~257の八日市新保II式・御経塚III式土器、264の中屋I式土器、259の中屋II式土器が出土している。B第18号土塙は、269の八日市新保I式271の御経塚III式、272~275の中屋I式土器が出土し、276~277は中屋II式土器である。274は下野式であろうか。

B第63号土塙は、278~279が八日市新保I式、280が同II式、281~286・300は御経塚III式、287~296は中屋I式土器である。297~303は中屋II式土器であり、303のような東北系の雲彫文を施した鉢が伴う。

B第64号土塙は、305~308は御経塚II式、312は八日市新保I式、313はII式、314は御経塚III式、315~319は中屋I式、条痕粗製深鉢に中屋II式土器が多い。

B第66号土塙は、330~331は酒見式土器、332~334は御経塚I式土器、336、337は御経塚II式土器、338~343が御経塚III式土器、344は中屋I式土器である。345の浅鉢は工字文を施した下野式土器である。

以上が土塙内出土の繩文土器の概要である。どの時期の土器が、どの土塙から発掘されたかを知ることはできるが、土器型式が多様なため、そのうちのどの時期に土塙がつくられたかを知ることは困難である。これは、先に述べたように、県内の繩文遺跡調査では、かかる多数の土塙とピットの検出に努めたのは初めてのことであったから、土塙・ピットの検出のみに追われ、覆土内の遺物、土塙底面の遺物の如く、くわしい記録を残して遺物を取り上げることが十分でなかったからであり、今後の調査の戒めとすべきである。ここでは、これら土塙周辺には御経塚III式以降、下野式期までの遺構の分布が考えられることから、御経塚I・II式のみに集中していた住居址、炉址分布の欠を補えることに、土塙調査の意義を認めることにとどめておきたい。

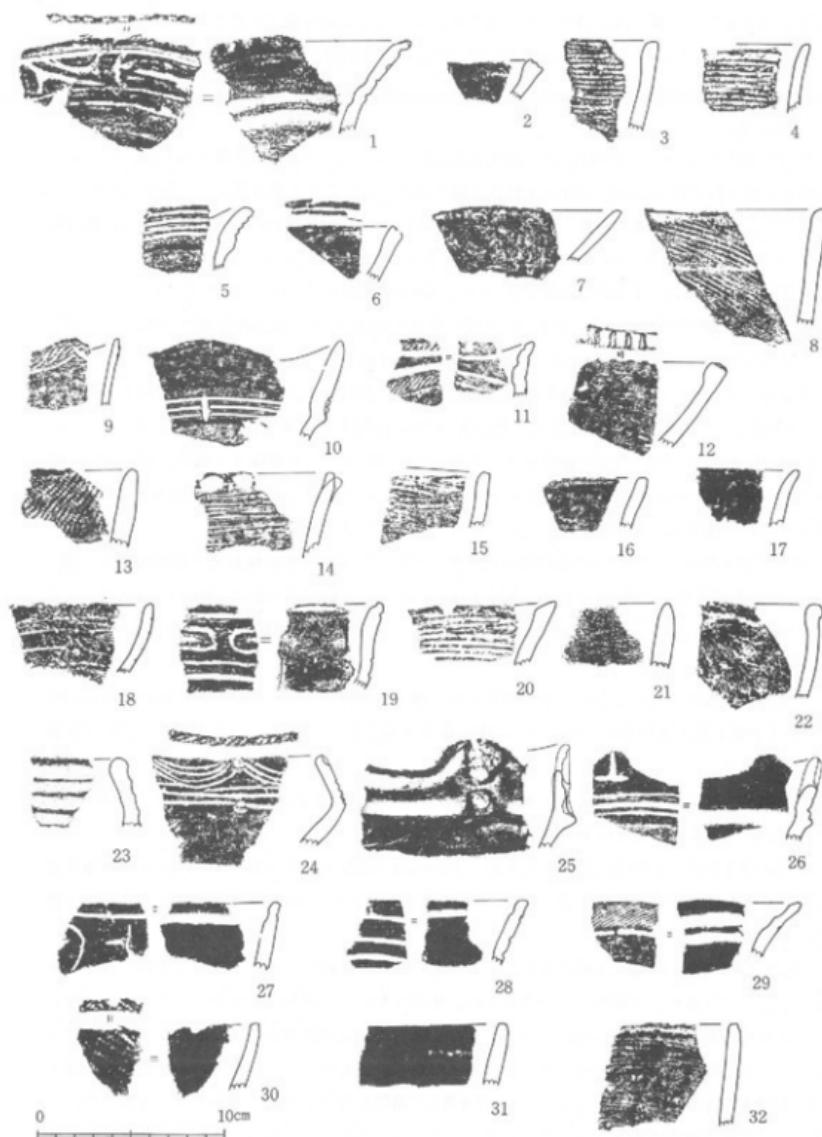


图 5-24 第205·206·211·214·216号土坑出土土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)



图 5-25 第 1·3 号土坡出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)



图 5-26 第 9 号土堆出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

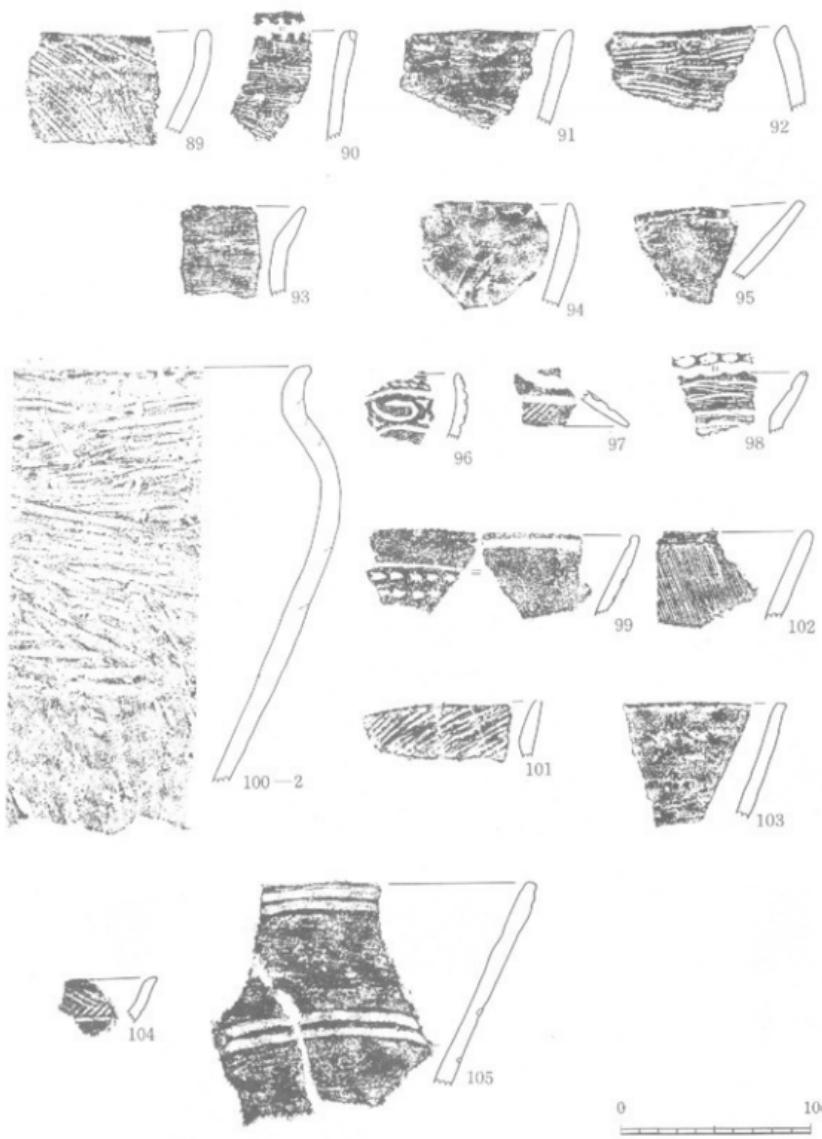


图 5-27 第 9·10·16 号土坡出土土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)



图 5-28 第39号土坟出土土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)

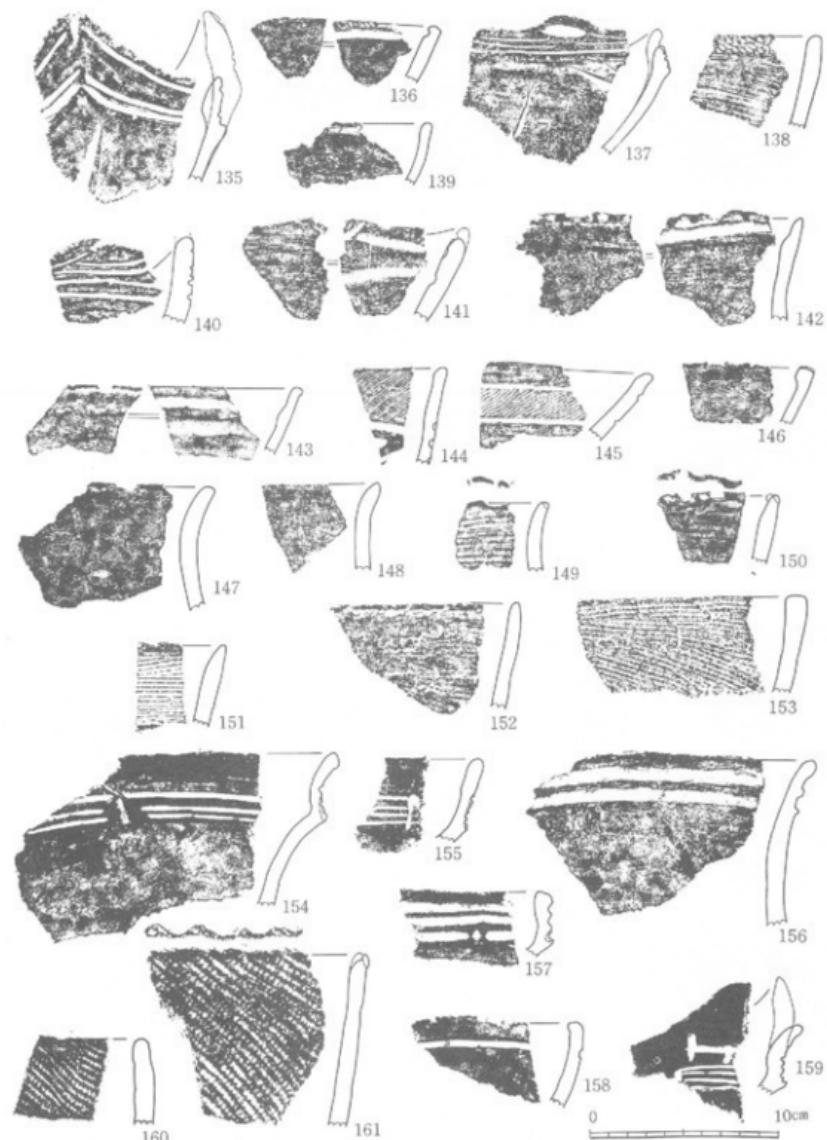


图 5-29 第56·63号土坡出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

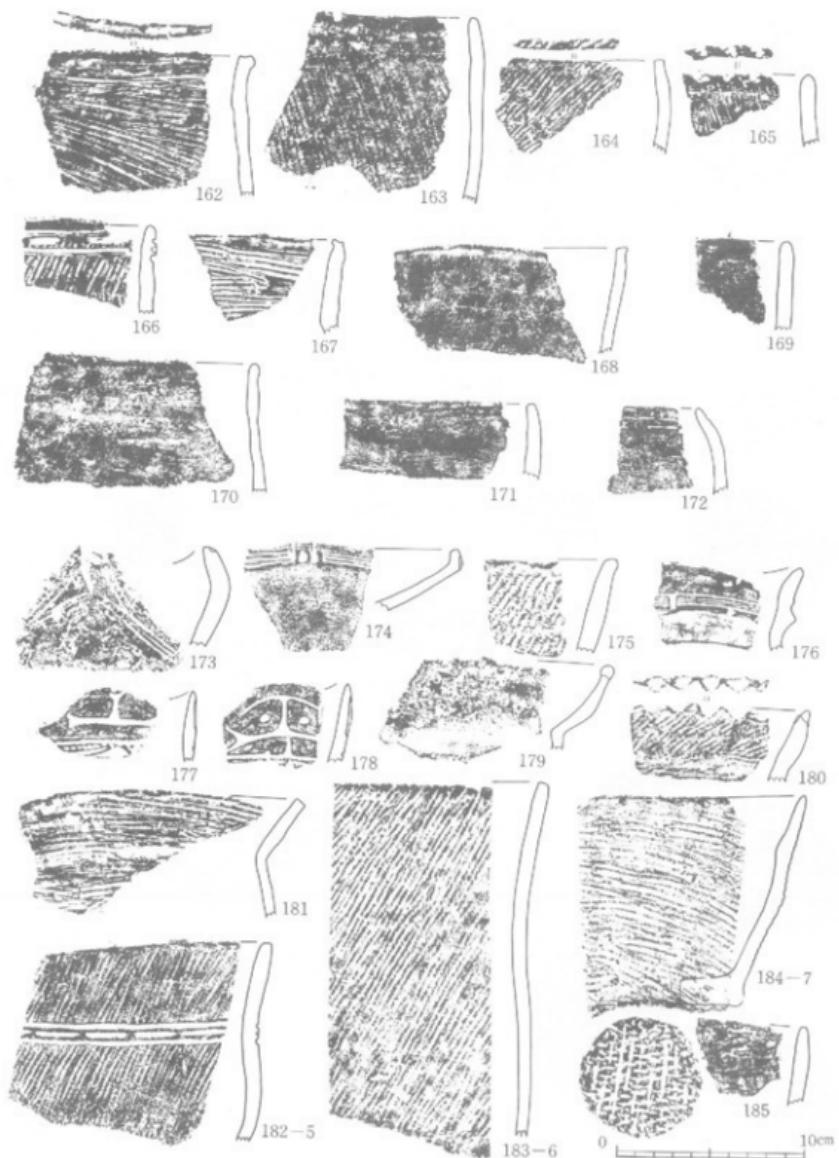


図5-30 第63・64号土塙出土土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$)



图 5-31 第50·77·B第13·14号土坡出土土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)

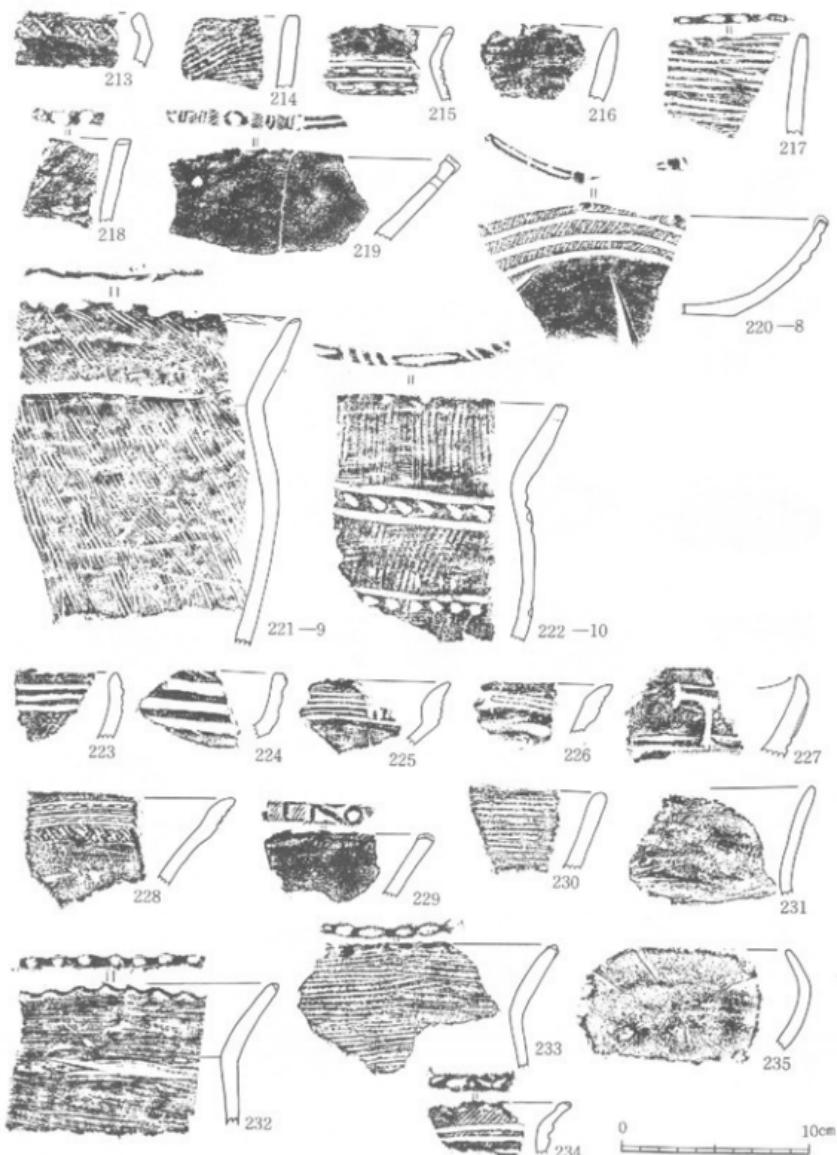


图 5-32 B 第 9·10 号土堆出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

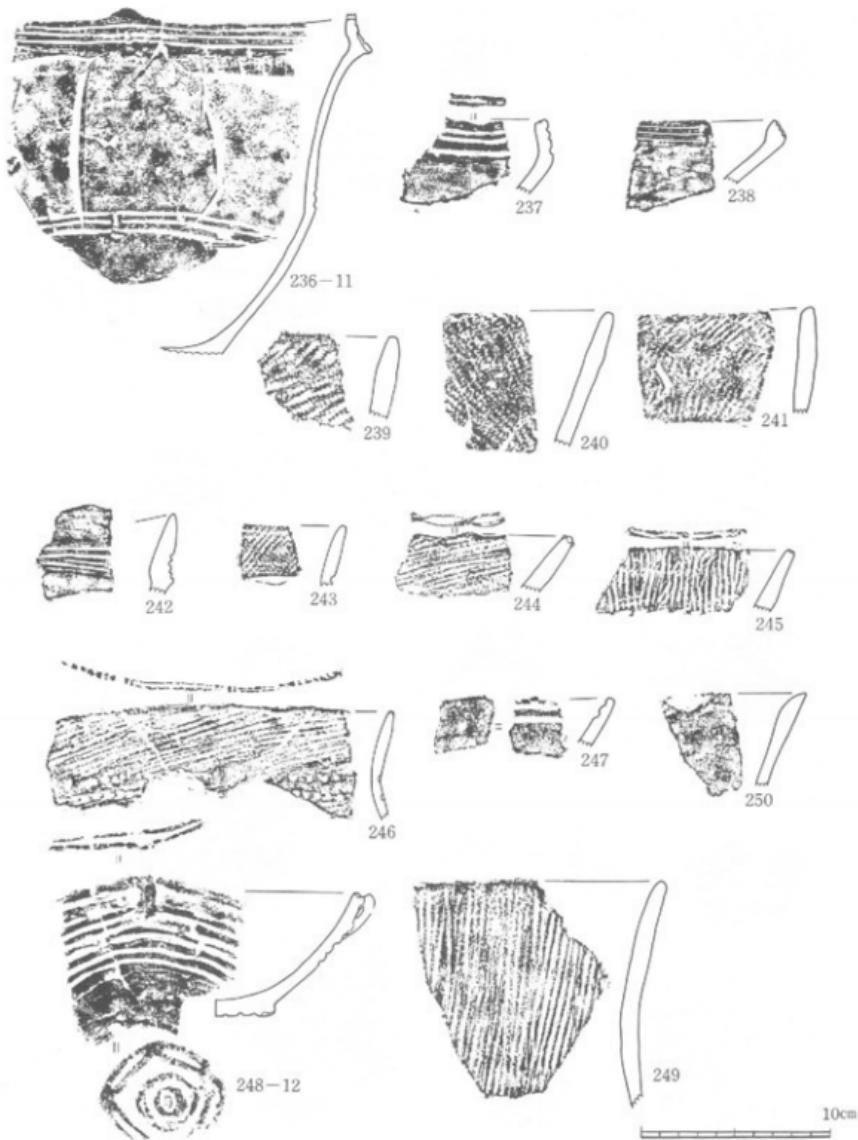


图 5-33 B 第11号土坑出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

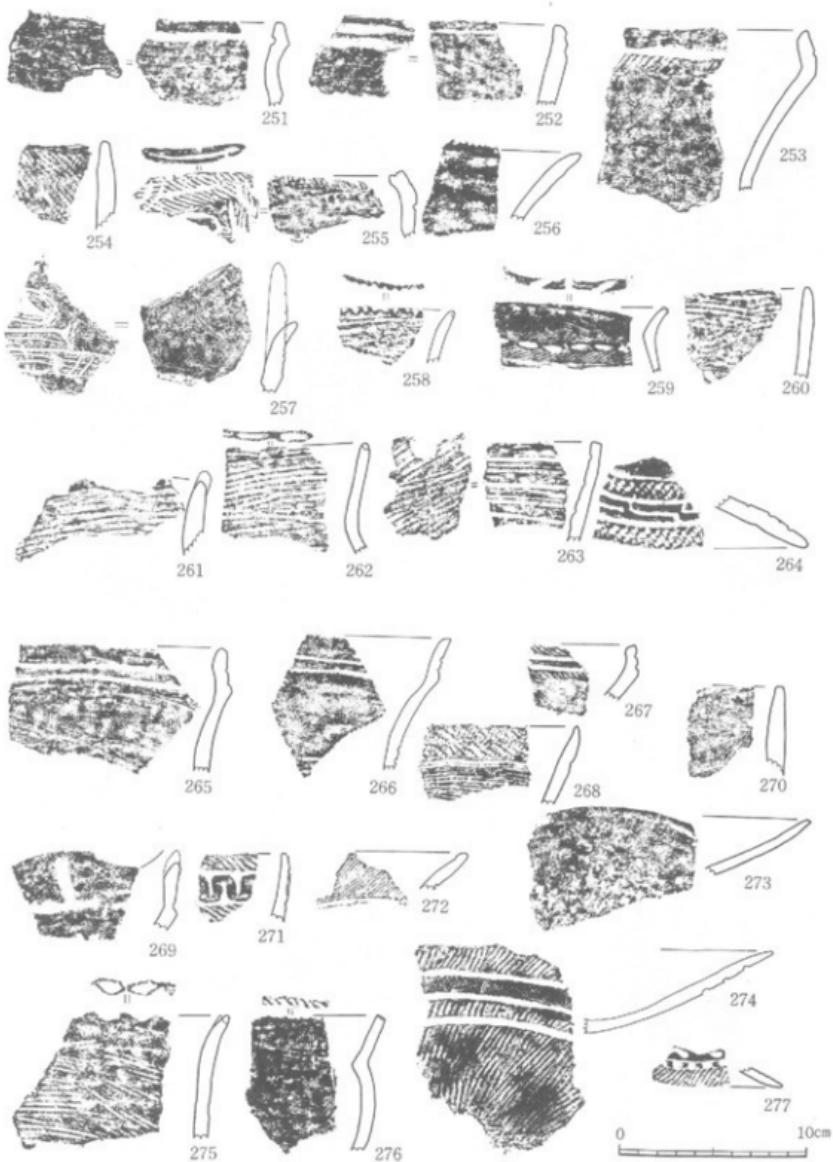


图 5-34 B 第17·18号土窑出土土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)

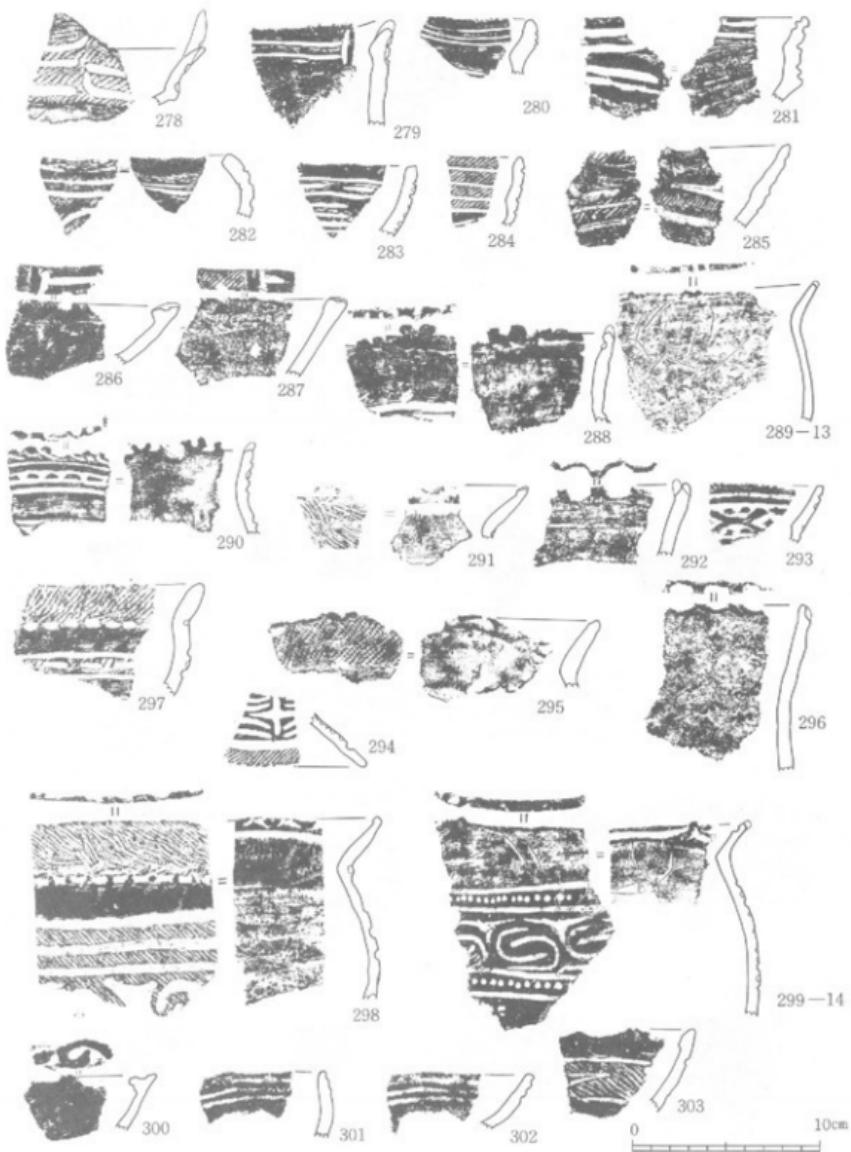


图 5-35 B第63号土坑出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

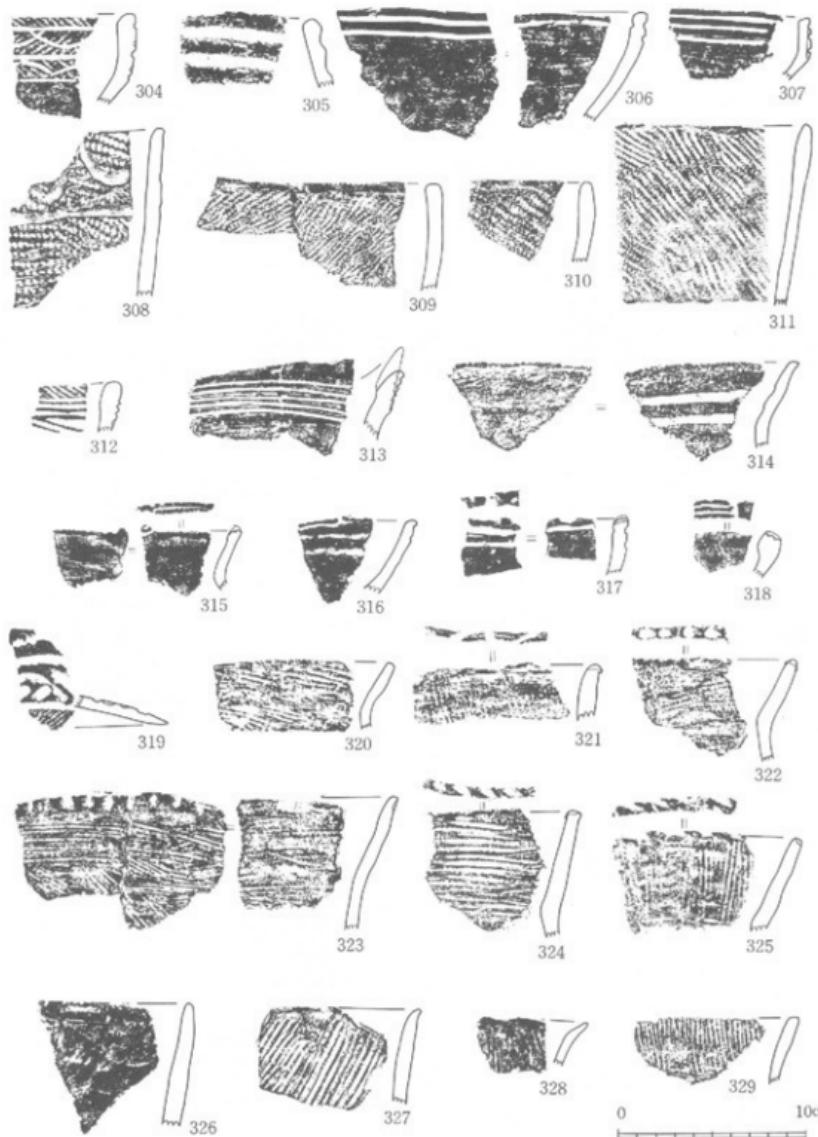


图 5-36 B第64号土坡出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

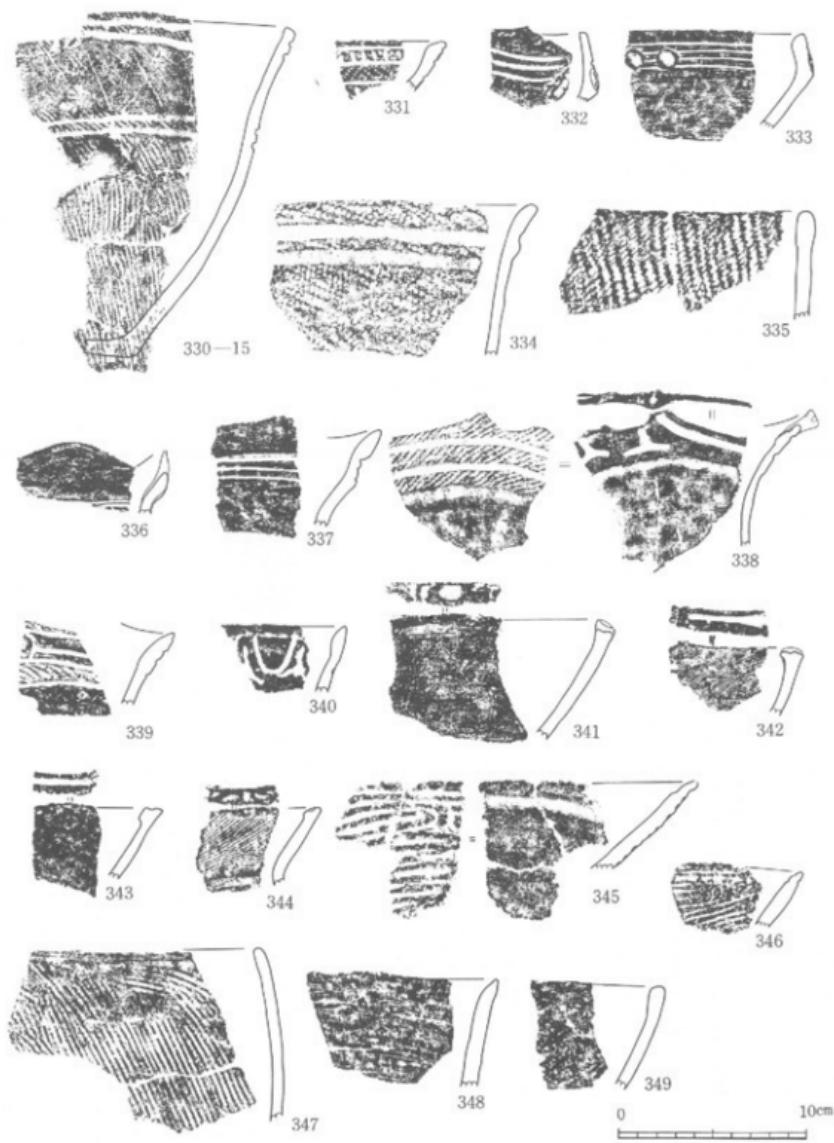


图 5-37 B第66号土坛出土土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

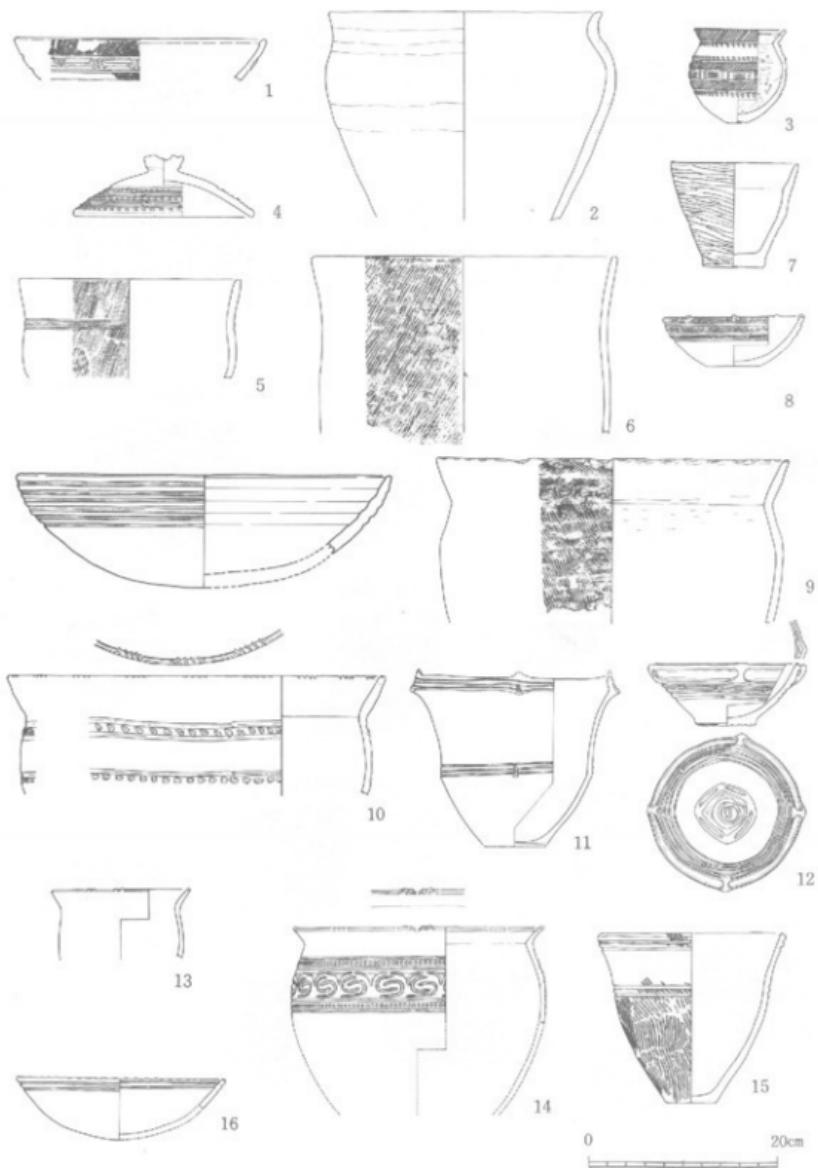


図5-38 土塙出土土器実測図 ($S = \frac{1}{6}$ 、ただし17は $\frac{1}{2}$)

5. 調査区出土の縄文土器

(1) 酒見式土器

波状口縁の深鉢は、頸部でくびれ、口縁は「く」の字形に内折し、波頂部を貼付降帯で肥厚させ、口縁部と頸部に沈線で区画された磨消繩文帯をめぐらす、図5-39の1-1にみられる元住吉山I式類似の形態を基調とする。波頂部の隆帯も図5-39の2、3-2、図5-40の32、図5-42の62の如く変化し、図5-40の30-10、31は隆線となり、図5-39の14では隆帯は消滅する。文様に東海系の連弧文や東北系の羽状繩文を施すものがあり、このような器形、文様の変遷に地域化の過程をみることができる。

平縁の深鉢には、図5-41の39-12、38のような口縁帯に短かい縦隆線を貼付する広口の深鉢があり、図5-42の63は東海との交流が伺える。図5-40の18・20、図5-41の42では隆線は沈線に変化しているが、頸部で緩くくびれ、口縁の内湾する器形には、大きな変化はないと考えられる。橋本正氏は、これを東海系に対する北陸型と定義しているが(橋本他1980)、胴下半で屈曲する器形を想定することは、さらに検討を加える必要があるのではないか。

図5-42の71-18は口縁の蛇行貼布降帯に対向弧線と円文を配し、口唇には繩文を施している。口頸部斜繩文に3条の沈線をめぐらし、腹部には縱方向の繩文を施している。I区、B第66号土塗出土の図5-37の330-15の胴部に縱位繩文を施し、口縁部と口頸部をめぐる斜繩文帯に各2条の沈線をひく半縫深鉢はこの類であり、東北系の影響下に生れた北陸型深鉢とみるべきであろう。酒見式土器の口縁端は、一般に厚手でズンギリしている。37-11の広口深鉢は重層沈線文をはさむ狐縫磨消繩文帶土器である。

鉢は平縁で、平行沈線による磨消繩文帯の図5-41の49-13、刻み目を羽状に配する図5-39の6などがある。図5-39の12-6は把手付鉢である。把手部の口縁には、棒状具による押圧文が加えられているが、この施文は図5-41の54-15の浅鉢にもみられ、本型式の特色の一つである。御経塚I式土器として、図5-51の89-50に描かれた舟形土器は、これを本類に含めて考えることにしたい。浅鉢には図5-40の27、図5-41の45-46のような刻み目文、図5-39の11-5にみられる弧線羽状繩文と三角状磨消文、図5-41の47、51のような連弧文を施すものなどがみられる。10-4の小形品は浅鉢とも蓋とも考えられた。

注口は算盤形が基本で、貝殻擬繩文、羽状繩文、弧線文を施文するものとがある。図5-40の23-8は刻み目列点文と三角状磨消文帯を組合せた異形の小形容器である。特異な例に図5-39の4-3の筒形土器がある。筒形として完結するのか、円形に近い体部が着くのか明らかでない。

井口I式土器については「北陸には前期後半以降久しぶりに西日本系の土器、元住吉山I式が進出し、東北系の羽状繩文土器系と共存して井口I式が成立する」と述べられている(泉1979)。御経塚遺跡出土の酒見式土器は、井口I式土器に併行する酒見式土器の新しい部分であり、酒見遺跡にみられる…乗寺K式併行の前半に対し、酒見II式と仮称してもよいと考えている。

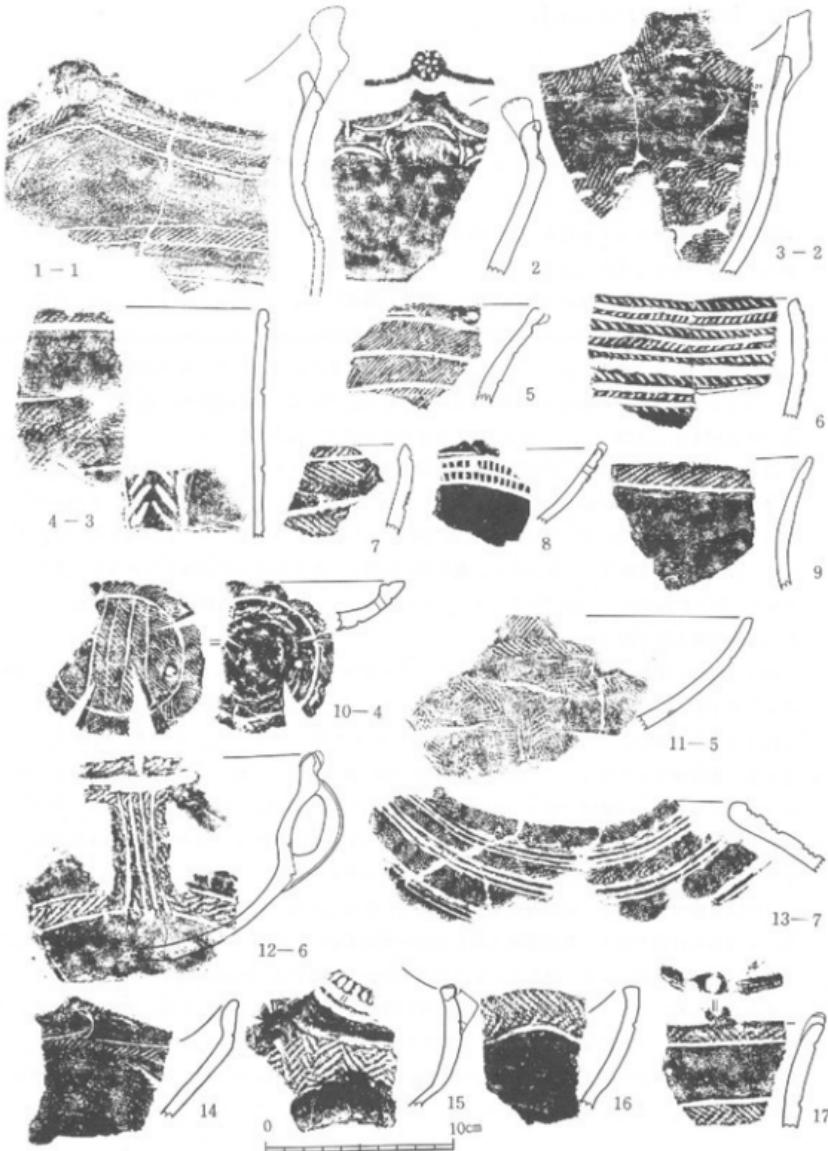


図 5-39 I・II区酒見式土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$)

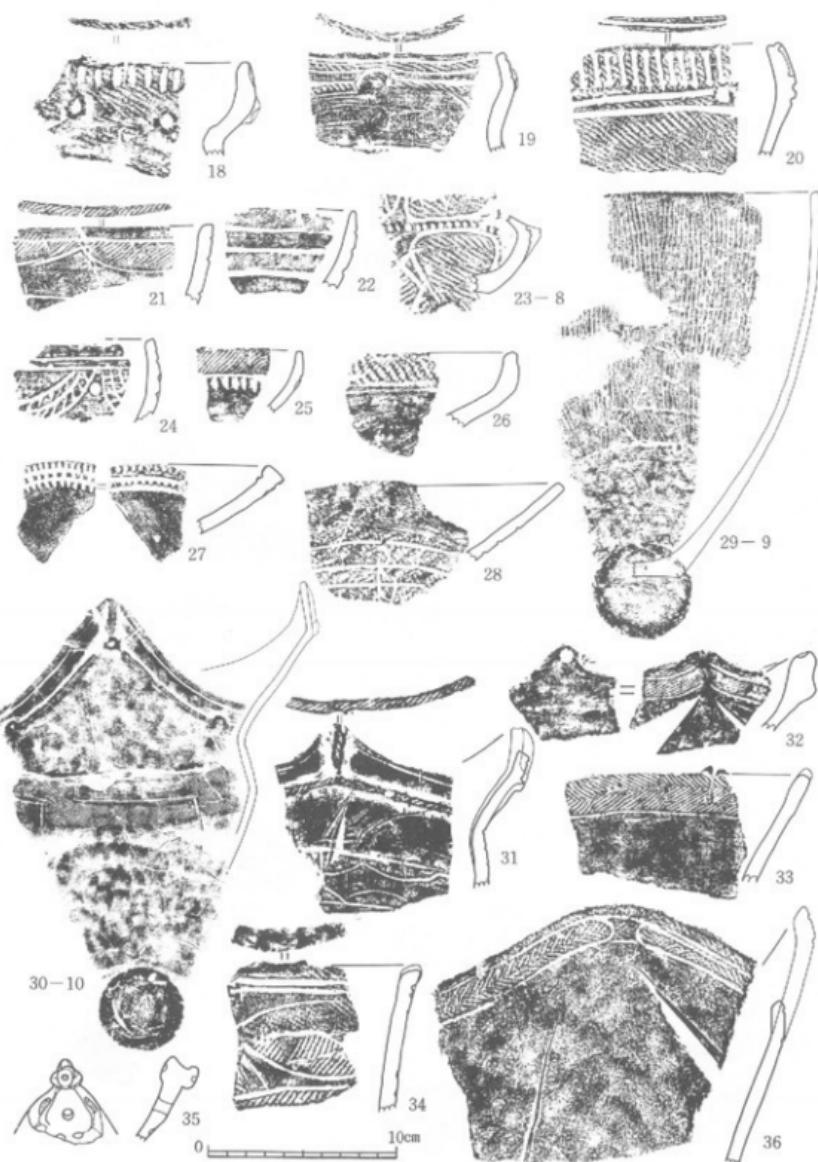


図 5-40 II・III区酒見式土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし29~30は $S = \frac{1}{6}$)

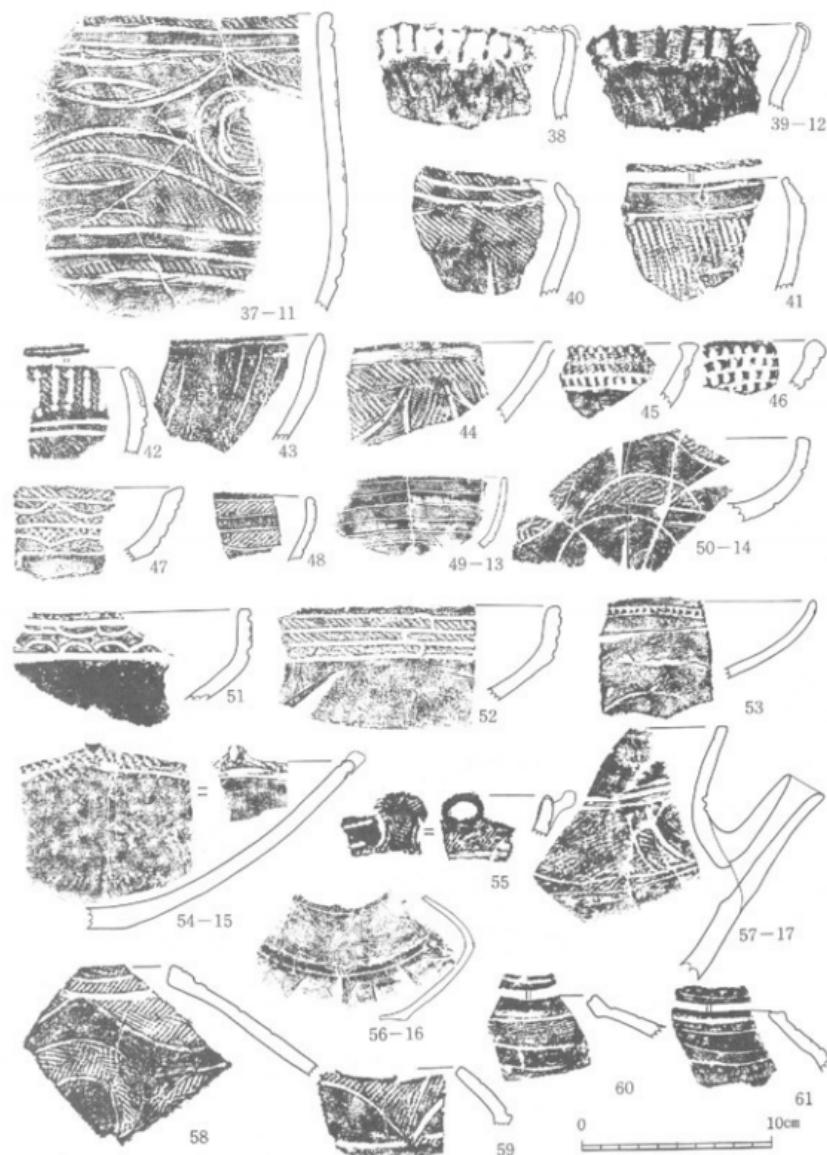


図5-41 III区酒見式土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし49・56はS = $\frac{1}{3}$)

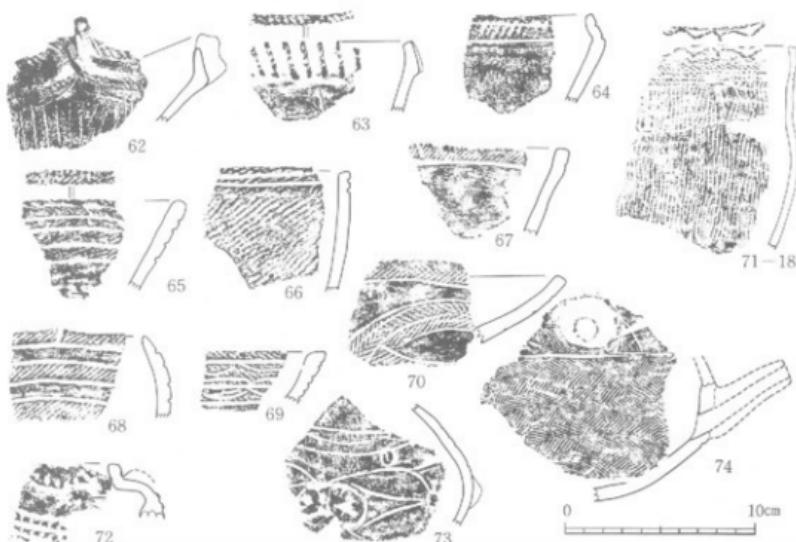


図 5-42 IV区酒見式土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし71はS = $\frac{1}{6}$)

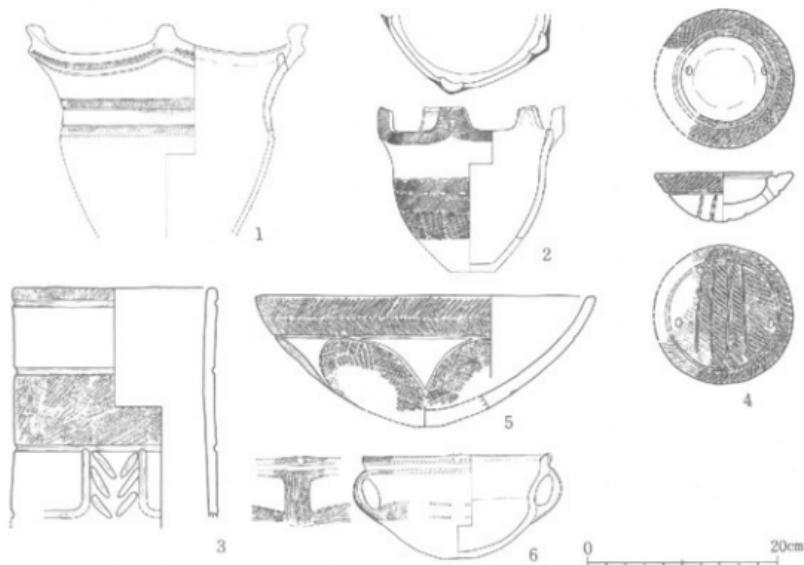


図 5-43 酒見式土器実測図 I (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし3~5はS = $\frac{1}{6}$)

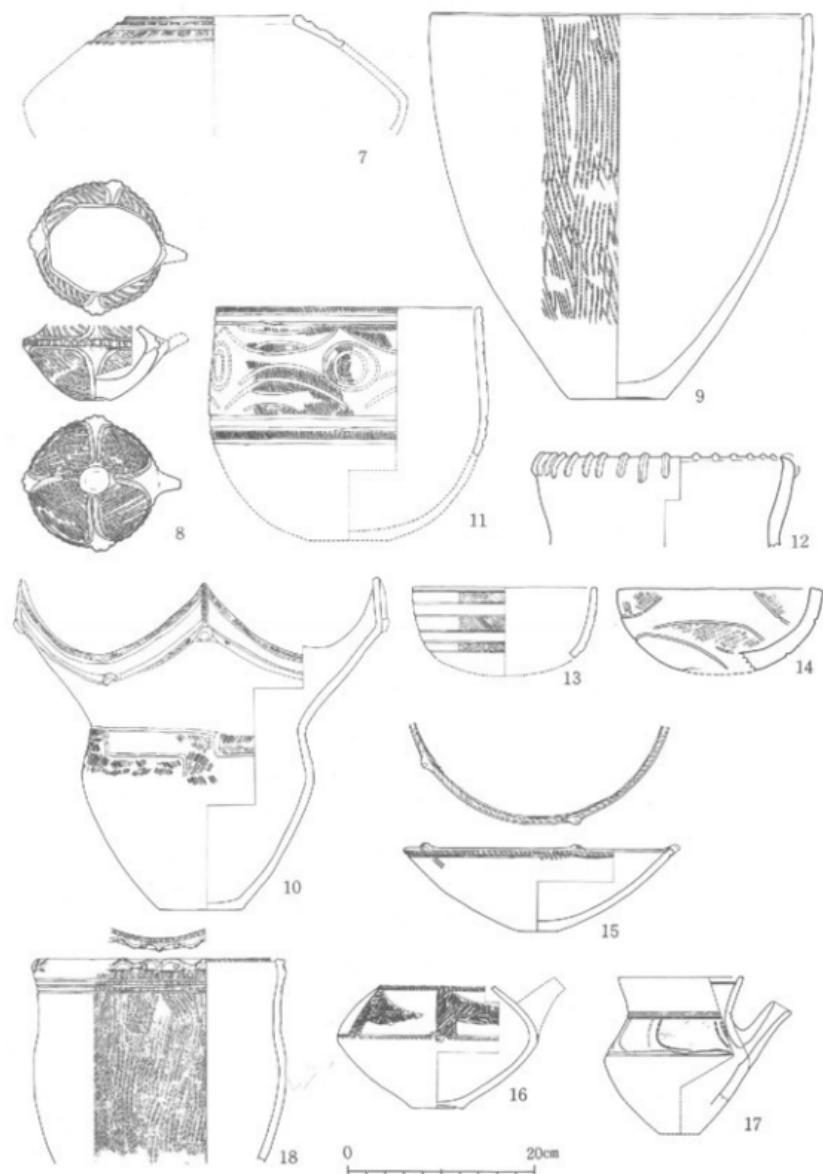


図5-44 酒見式土器実測図2 ($S = \frac{1}{6}$ 、ただし 8・12・14は $S = \frac{1}{3}$)

(2) 御経塚I式土器

井口II式土器は、元住吉山II式土器に併行する前半と宮施式に併行する後半に分かれる。井口II式土器の前半を、本遺跡出土土器によって御経塚I式土器と呼称することにする。

波状口縁の深鉢は、胴部でくびれ、口縁の内に折れる酒見式土器の深鉢の器形を継承するが、くびれの屈曲がやや強くなり、口縁内折は逆に緩くなる。波頂部は三角形状の尖り気味であることが特色である。波頂は4、ほかに5・6波頂のものや波頂間波谷部に突起をつけるものがある。

貝殻压痕文は、波頂部、突起部の基部と、波頂下のくびれ部をめぐる凹線に旋文するが、貝殻殻頂を器面に對し直角に押しつけるから、円錐状を呈するのが本型式の特色である。波頂部が大きく台形を呈し、内面が匙状をなすものがあるが、量的には多くはない。台形の場合は、図5-45の7・36-28のように貝殻压痕文は綫長の腹縁压痕文となることが多い。4-4は円形をなし貝殻压痕文は御経塚II式例に近い。図5-49の63-39如き高い円形波頂例や、土塙出土の図5-3の63-4、図5-50の67のような圧痕文を沈線や降線で結ぶ例は稀である。

平縁の深鉢は、口縁の内に折れる類と、外傾して口の開くものとがある。内折するものは、土塙出土の図5-8の157-11のように口縁に縦沈線を引き並べるもの、図5-46の11-8の如き条痕地の口縁と口頭部をめぐる磨擦繩文帶および胴上半に凹線と貝殻文を施すものなどがある。口縁外傾するものは、口縁内面にせまい刻み目文帶をめぐらすものが多い。粗製深鉢は繩文施文のものを主とし、口唇に繩文、口縁内面にせまい刻み目文帶や列点文帶をめぐらすものがみられる。

鉢は、口縁が内折する図5-46の12-9と内湾する21-15の二つに大別されるが個体数は多くない。17-12の対向連弧文や平縁深鉢の図5-50の68-42にみられる連弧文は、東海系文様といわれ深鉢や鉢に少なく浅鉢に目立つ。17-12と24-18は梢円状の透し孔を有する。

浅鉢は波状口縁同様に多量で、赤彩したものが少なくない。波状口縁と平口縁に分かれるが後者が量的に多い。口縁は一般に内折し、文様は沈線に繩文、刻み目文を配し、あるいは縦隆線に小圧痕文を配するなど多様であるが、連弧文が目立つ。台付浅鉢は少量である(33-25)。口縁内面に環状刻み目文帶をめぐらすものは皿形に近い器形である。

壺は数個体にすぎない。三段となる図5-46の16-11、連弧文を施文する住居址出土の図5-7の137-8は、いずれも赤彩する。

注口は算盤玉形であるが腰高となる(図5-61・62の69-70・72・74-79)。ほとんどは平縁であり、69-36の如き波状口縁の例は少ない。

御経塚I式土器は、最も多量に出土した。関西の元住吉山II式土器を基調とし、円錐形状の貝殻压痕文と波頂部が三角形状を呈する波状深鉢の盛行、赤彩したものが少くない浅鉢が比較的高い比率を占めることなどに特色がみられる。東海系は浅鉢に多い連弧文様に交流の一端が示されているが、東北系は図5-46の15-10の瘤付鉢の如き模倣品と図5-52の122-53の瘤付き壺が収入されているにすぎないのである。口縁部にせまい繩文帶をめぐらし、その下部に横走する条痕文を施し、または無文とする深鉢は、横走条痕から本類とした(8・9・19-13・66-41)。

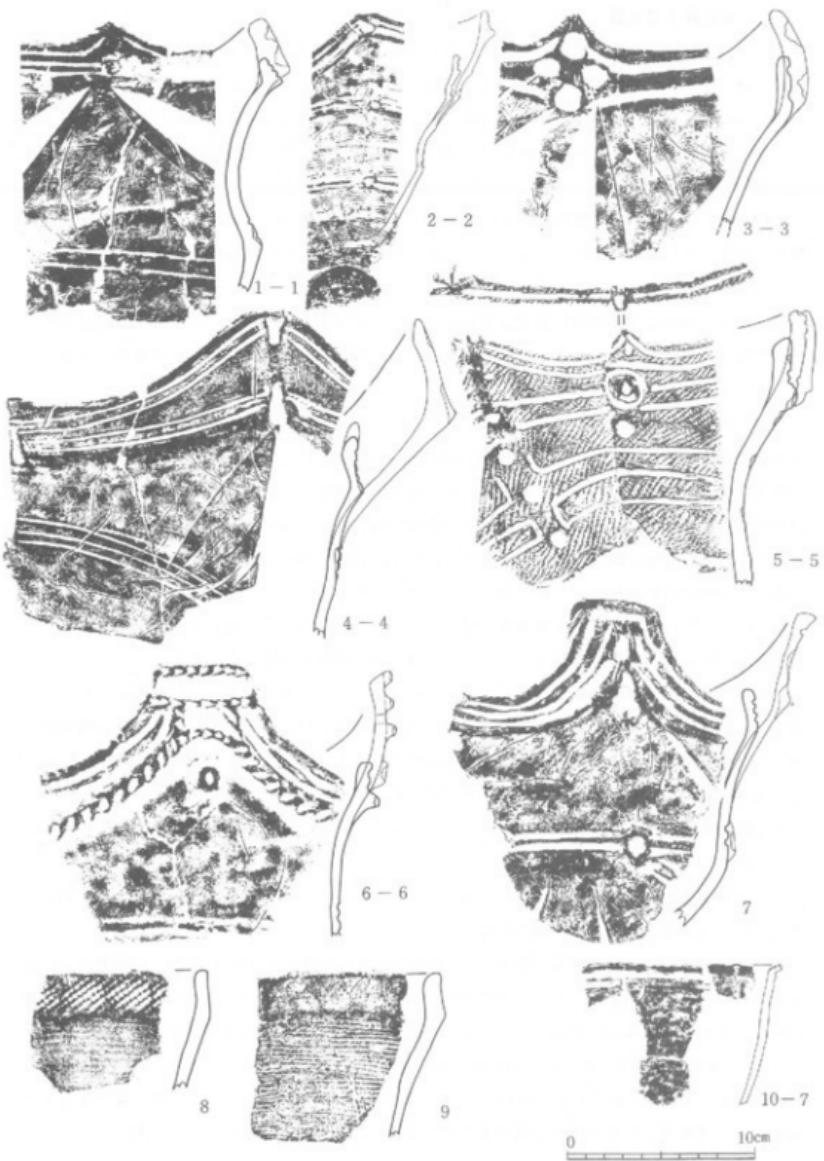


図 5-45 I 区御経塚 I 式土器拓影 1 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし 2・10 は $S = \frac{1}{6}$)

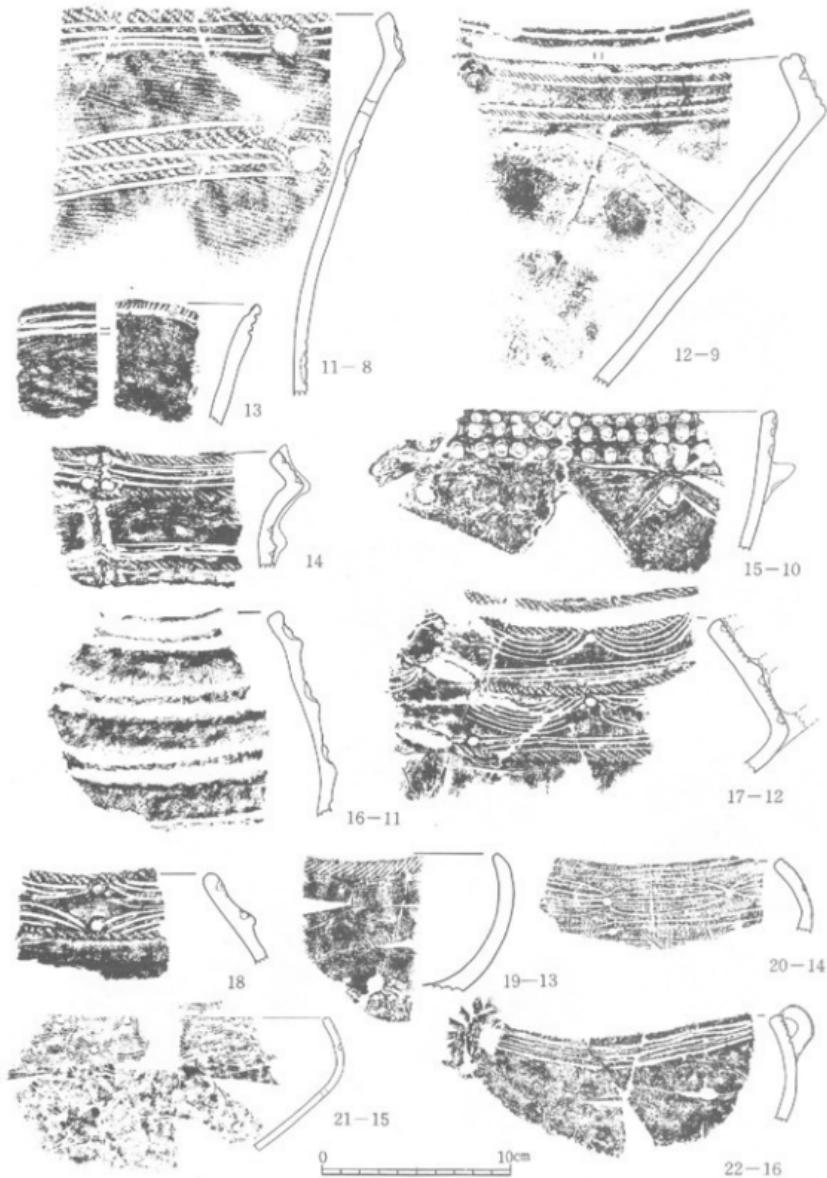


図5-46 I区御経塚I式土器拓影2 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし21は $S = \frac{1}{8}$)

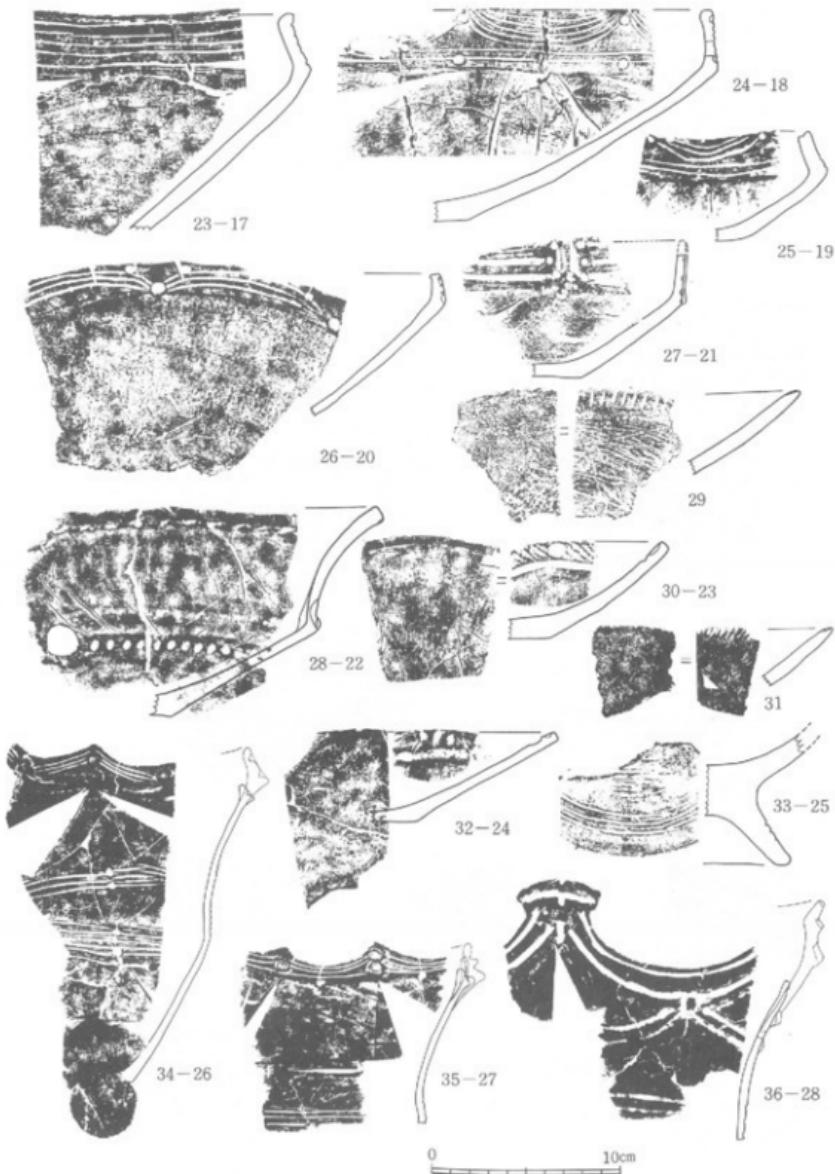


図 5-47 I・II区御経塚 I式土器拓影3 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし34~36は $S = \frac{1}{3}$)

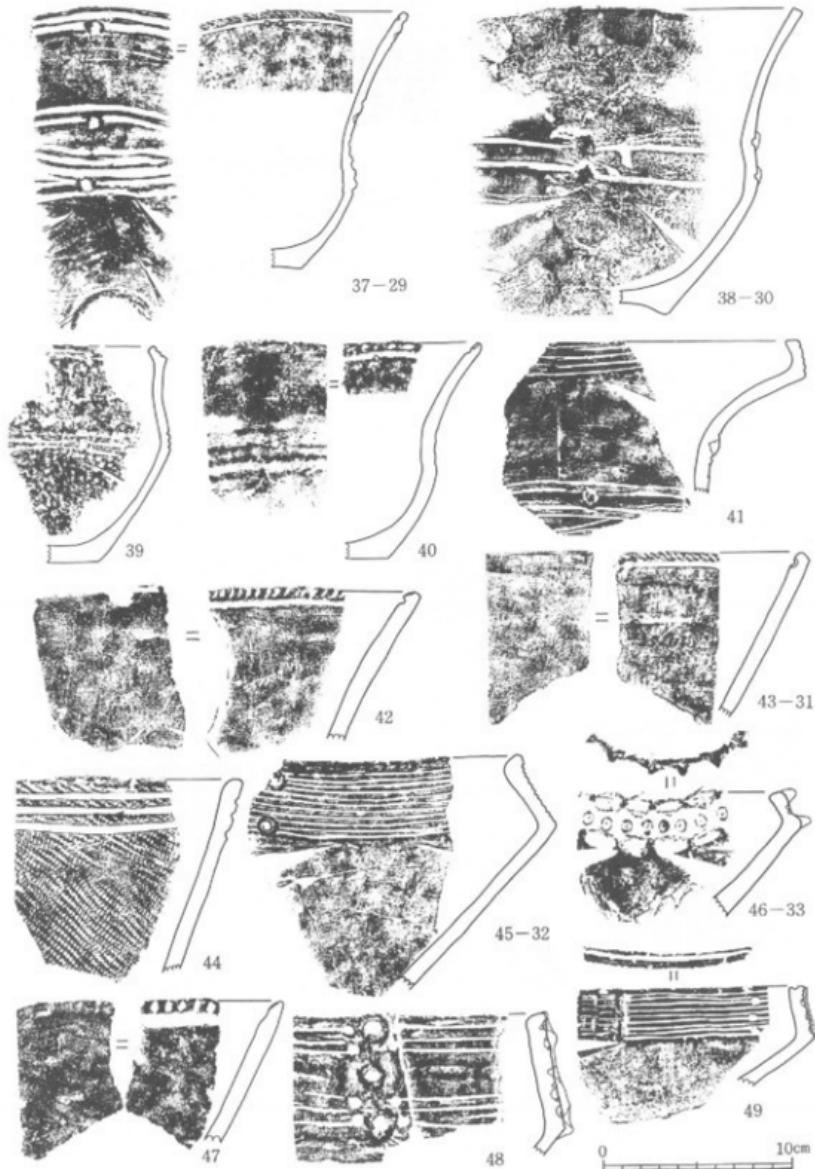


図5-48 II区御経塚I式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)



図 5-49 II・III区御経塚 I 式土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし 51・59・63~65 は S = $\frac{1}{4}$)

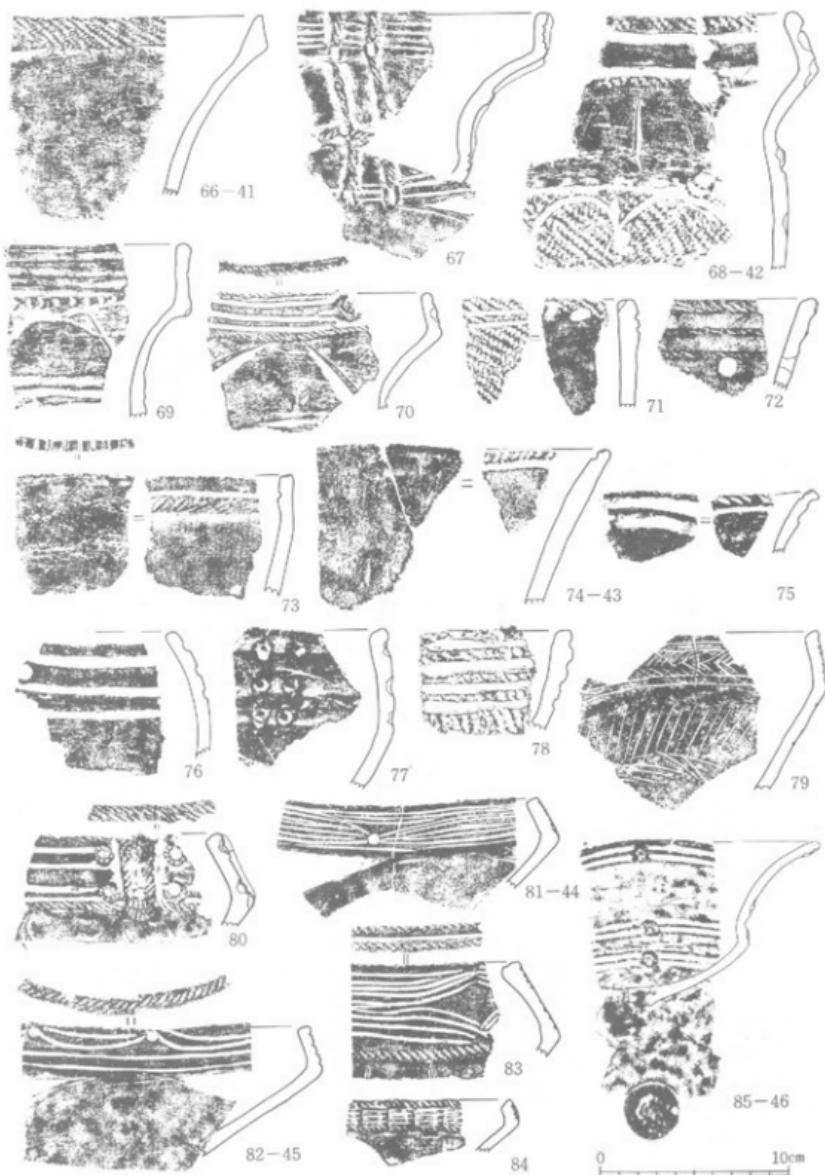


図5-50 III区御経塚I式土器拓影 ($S = \frac{1}{10}$ 、ただし85は $S = \frac{1}{5}$)

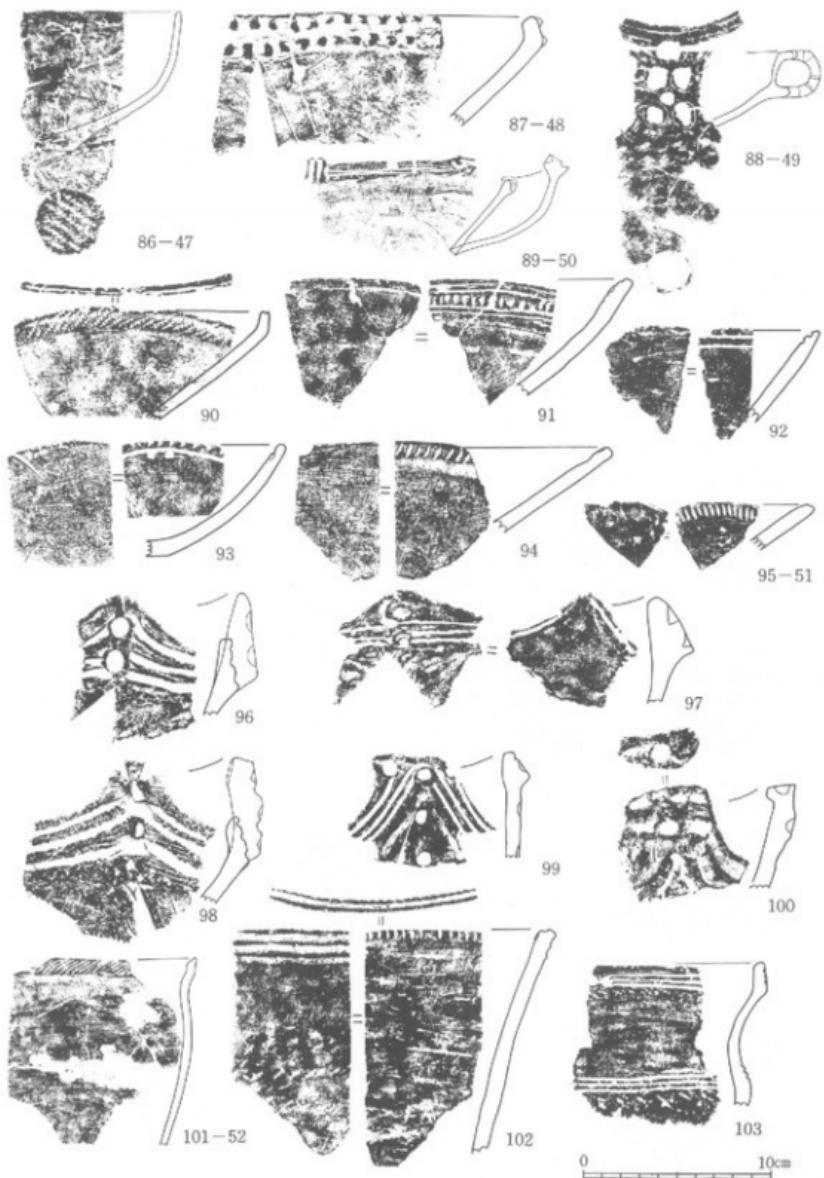


図 5-51 III・IV区御経塚 I式土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし 86・88・89・101 は $S = \frac{1}{6}$)

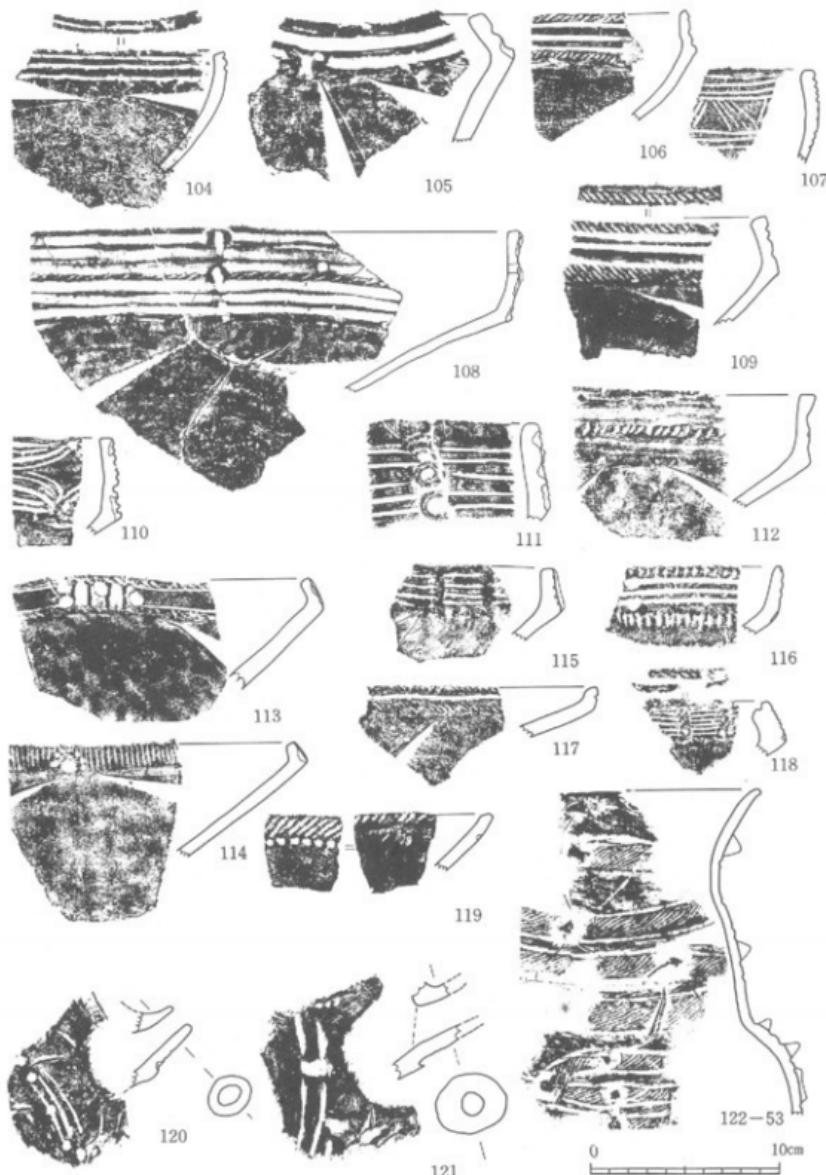


図 5-52 IV区御経塚 I式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

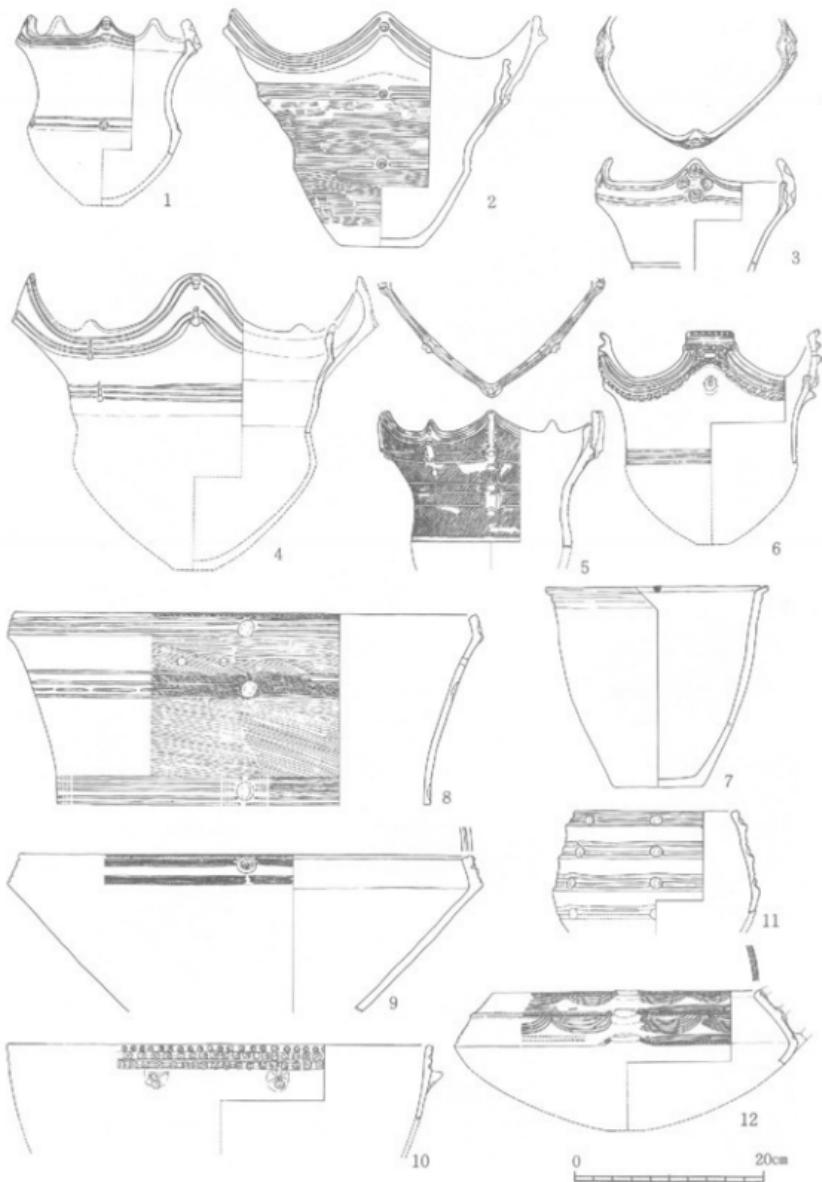


図5-53 御経塚I式土器実測図1 ($S = \frac{1}{2}$)

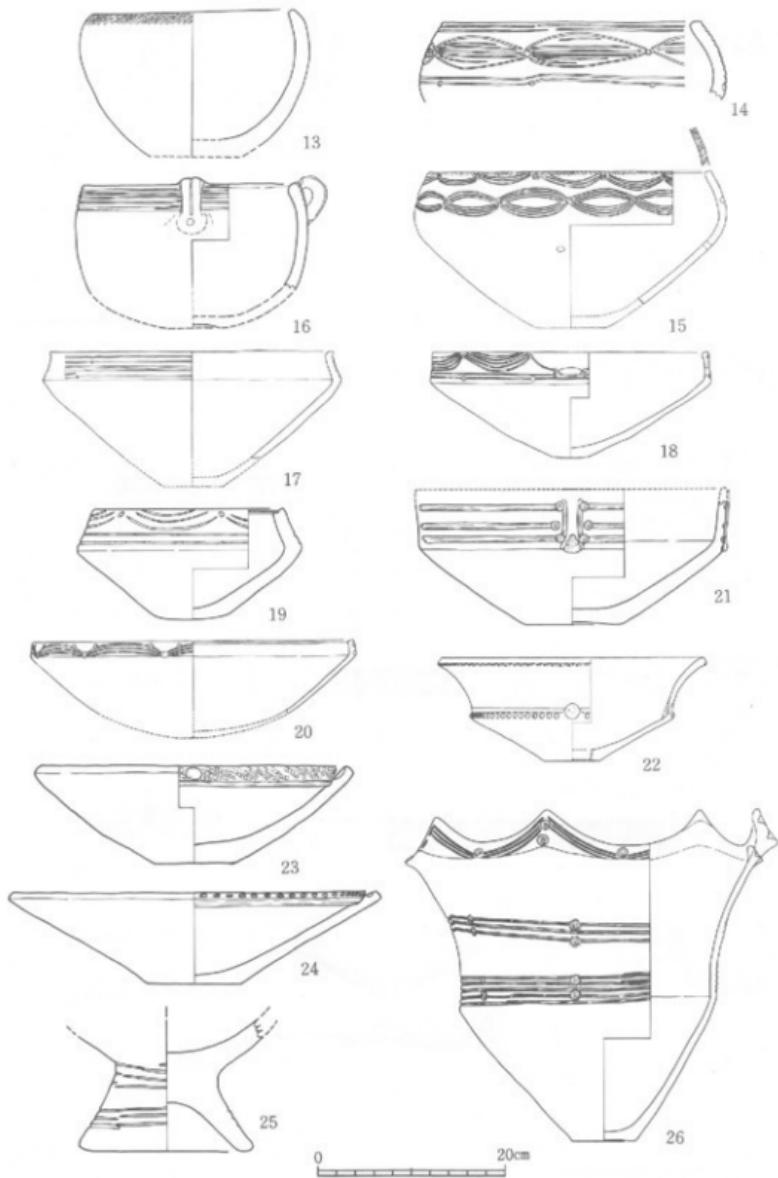


図5-54 御経塚I式土器実測図2 (S=1/2、ただし13~14・19・21・23~25はS=1/3)

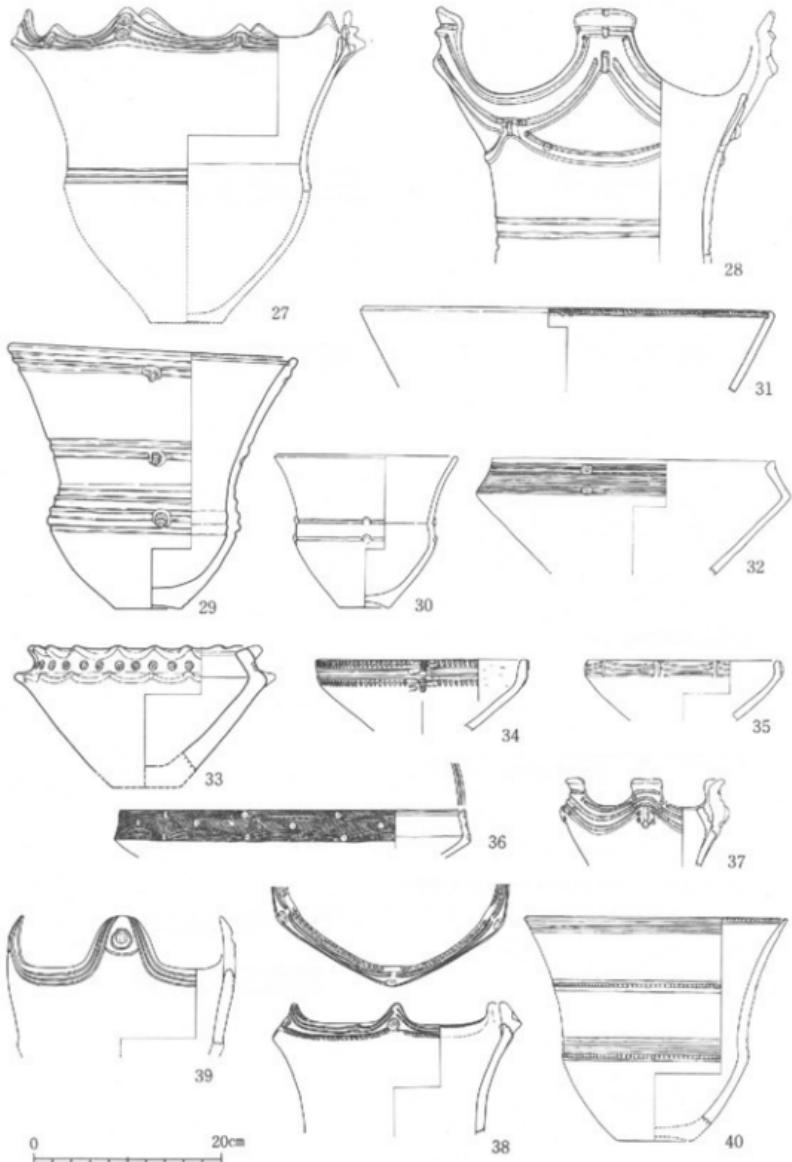


図5-55 御経塚I式土器実測図3 (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし33はS = $\frac{1}{3}$)

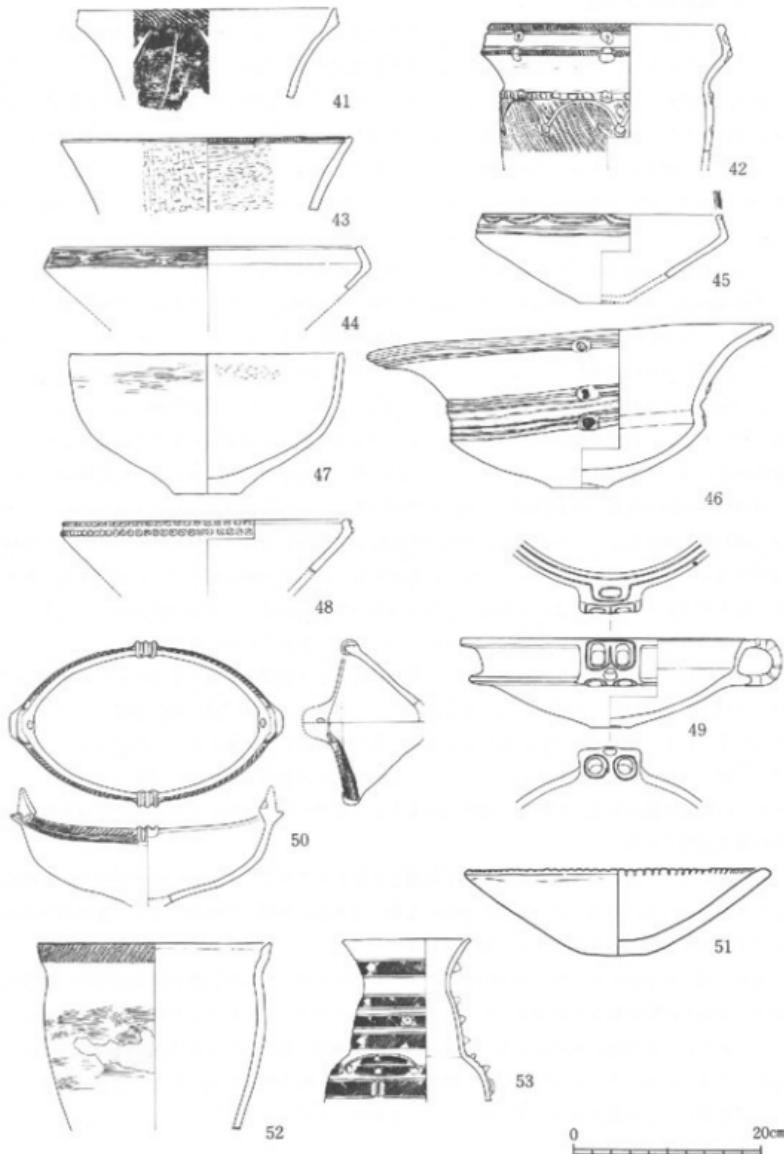


図 5-56 御経塚 I 式土器実測図 4 ($S = \frac{1}{2}$)

(3) 御経塚II式土器

これまで宮滻式併行または宮滻風といわれ、井口II式土器に抱括されていた関西の宮滲式併行のものを、井口II式土器から分離して新たに御経塚II式土器を設けた。

波状口縁深鉢は、半円状突起となり（丹治1980）扇状圧痕文が施されるか、扇状圧痕文は「北陸や東海地方に、扇状圧痕文の向きなどに若干の地方色があらわれる」（泉1979）と指摘されているように、関西の逆方向に押捺回転されているものが多い。口縁は御経塚I式の内折しているものから内湾に移る。波頂部の高いもの（図5-57の6、図5-59の30）と台形をなすもの（図5-59の43）は、量的に少ない。貝殻腹縁圧痕文や浅い円形貝殻圧痕文（図5-19の42-14）を施すものがある。腹縁圧痕文は八日市新保式への過渡期を示す施文と考えたい。

平縁深鉢は、胴部でくびれるものと、胴下半でさらに屈曲するものとがある。口縁は内に折れるものと、外傾して外に開くものとがあり、御経塚I式を継承しているが、内折の場合は、端部が外に開き内湾状に変化している。図5-18の29-6は、先に述べたように、I・II式の接点にあたり、口縁端はわずかに外に開いている。図5-19の42-14のように、貝殻腹縁による浅い円文を施す例は少ない。粗製深鉢には、口縁内面に刻み目を施すものが含まれるか否かは定かでないが、条痕地の口縁に2~5条の凹線をめぐらすものは、本型式の粗製深鉢に含め、さらに検討したい。

浅鉢は、半円状突起の波状口縁と平縁のものとがある。波状口縁浅鉢は扇状圧痕が伴い、波頂下に横短線を加えるものが出現する。平縁のものは、貼付円形隆帯に貝殻を押圧したり、口縁縦隆線をめぐって小形の円文を施すものなどに変化する。口縁部沈線に細い雨だれ状列点文を配するものは本型式からはじまるようである。口縁は波状の場合は内湾し、平縁の場合は、上に立上るが、口縁部の幅が次第に狭まる傾向が見られ、ついで口唇加飾のものに変化している。

壺は、扇状圧痕文を施すが、口縁部から口頸部が段をなす御経塚I式を受けたものが数点みられ、注口はI式期のものをあわせると数量は多いが、台形口縁深鉢同様に貝殻腹縁文を押圧するものが多く、I・II式のいずれに属するか識別に苦しむ。本型式に属することがほぼ明らかなのは、口縁に雨だれ列点を配した図5-59の41、小円文と貝殻腹縁文を配した図5-61の71-37である。口縁部連続山形文と口頸部に横円区画文をはさんで山形文を配する73-38は口縁形態から御経塚II式期である。

御経塚II式土器は、関西の宮滲式土器を基調とするものであるが、扇形圧痕文の向きに在地的なものが現われていることは、先学の指摘する如くである。連弧文は漸減するが、連続山形沈線文はI式期に出現し、晚期前半まで施文される。

また、雨だれ列点文のような在地的な文様が現われるようになり、波状口縁波頭下に貝殻圧痕文のかわりに横短線などが加えられるようになる。このような意匠は、手取扇状地で発生したのか、あるいは神通川以東の東日本と密接につながる地域で発生したのか（小島1979）、現段階では判定できないが、そのいずれにしろ、御経塚I式期に一時中断したかにみえた東日本系繩文文化との交流が、この期で復活しはじめるきざしとみることができよう。

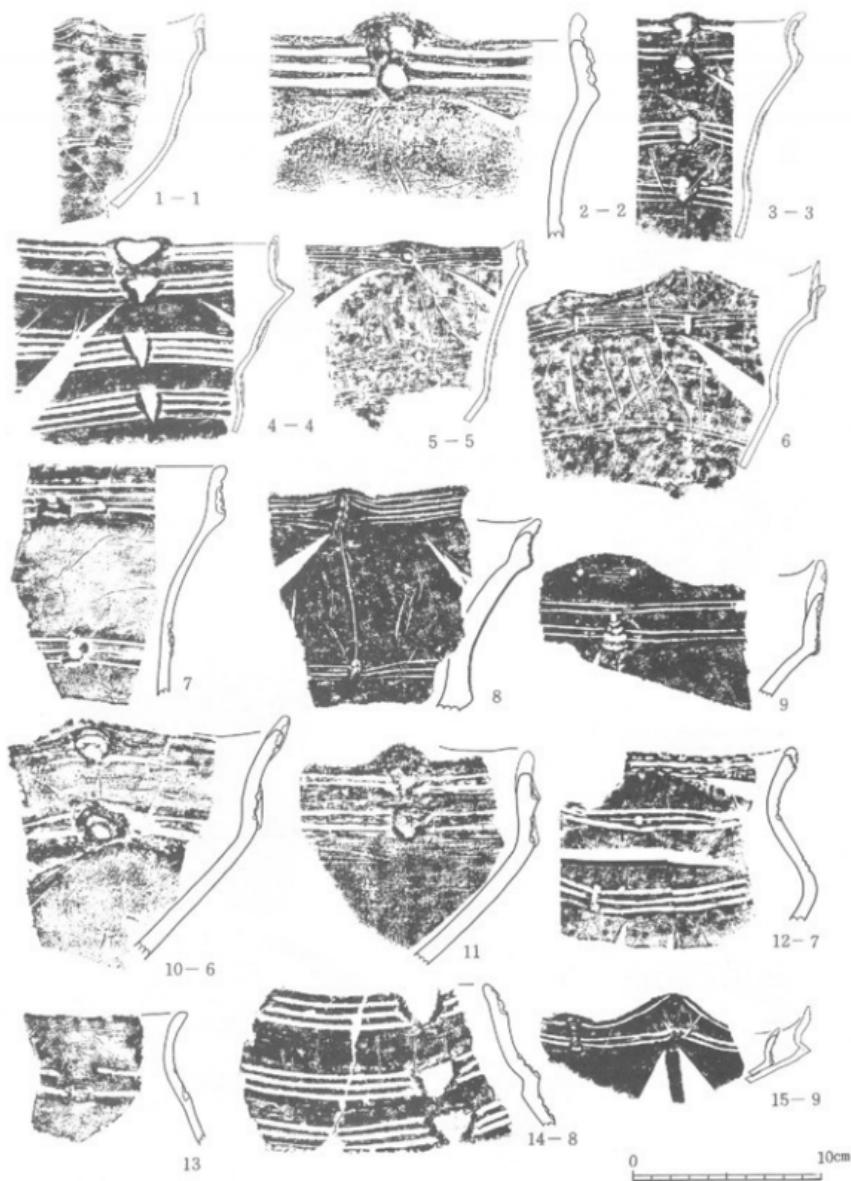


図 5-57 I 区御経塚 II 式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 1・3~6・15 は $S = \frac{1}{4}$)

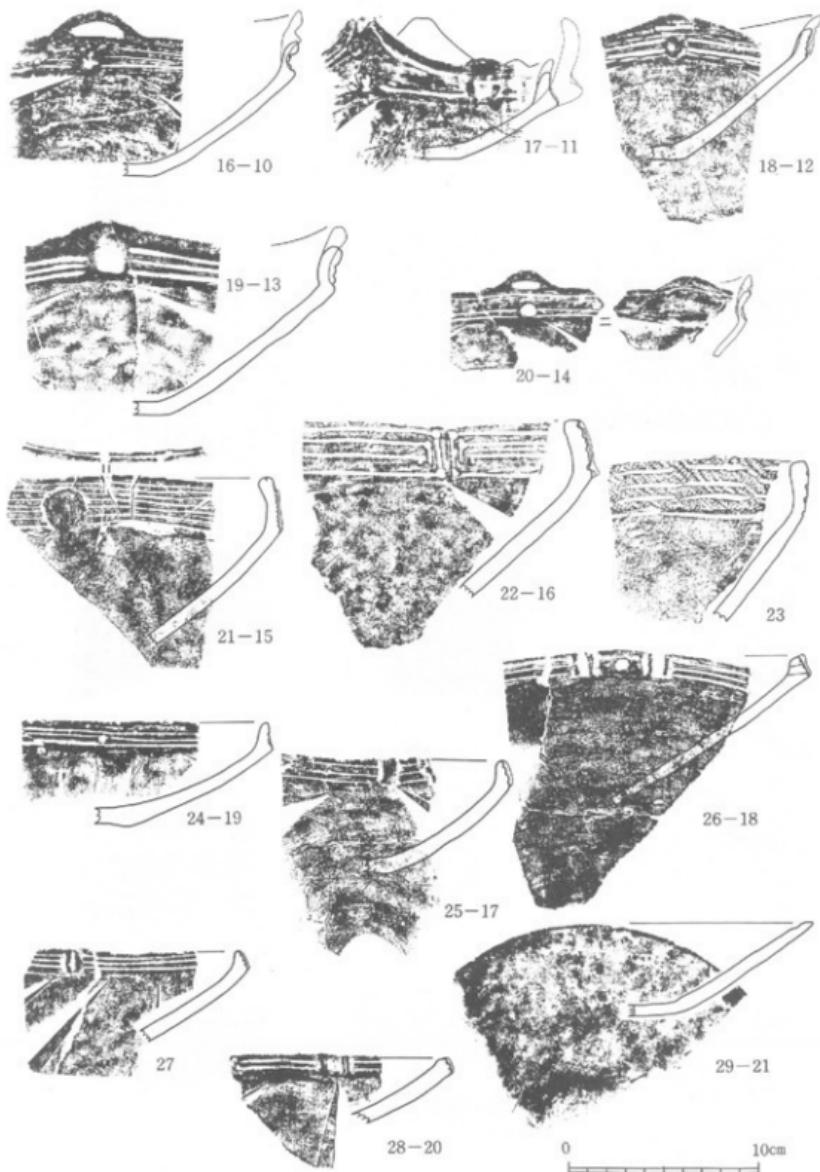


図 5-58 I 区御経塚 II 式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 20 は $S = \frac{1}{3}$)

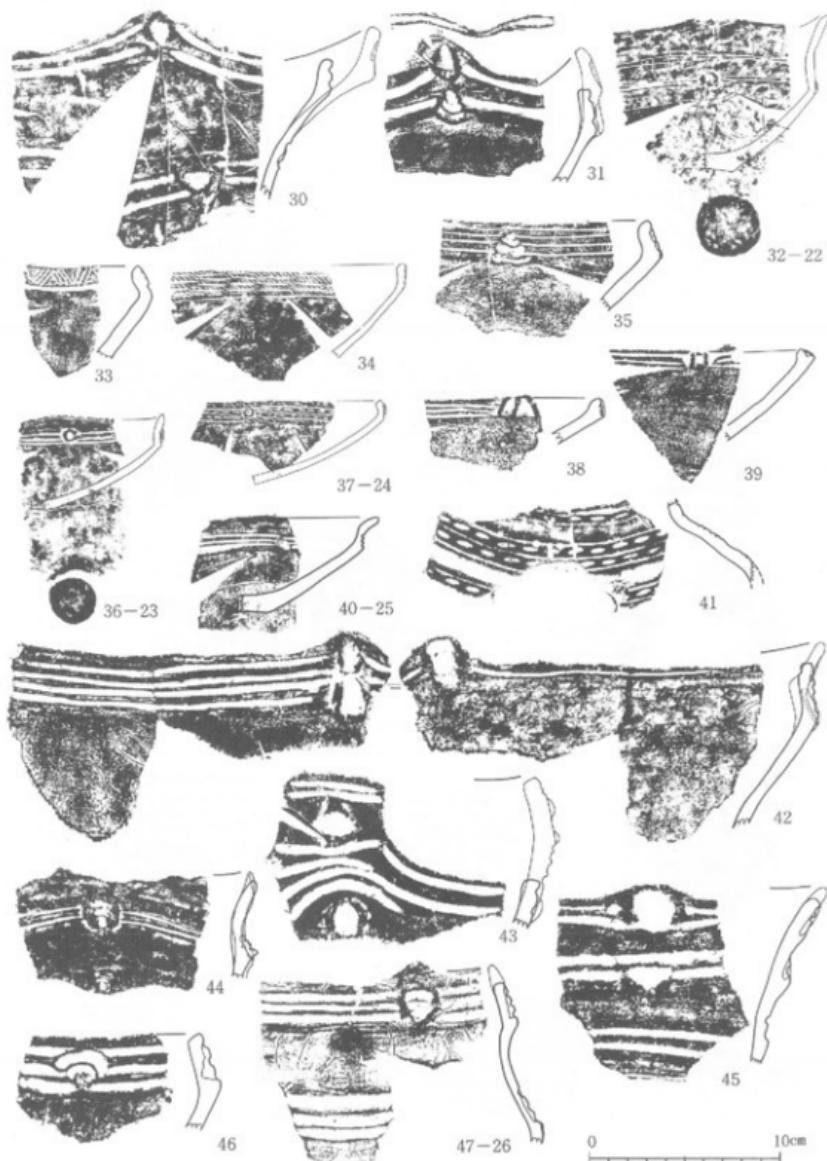


図5-59 II・III区御経塚II式土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし32・34・36-37は $S = \frac{1}{6}$)

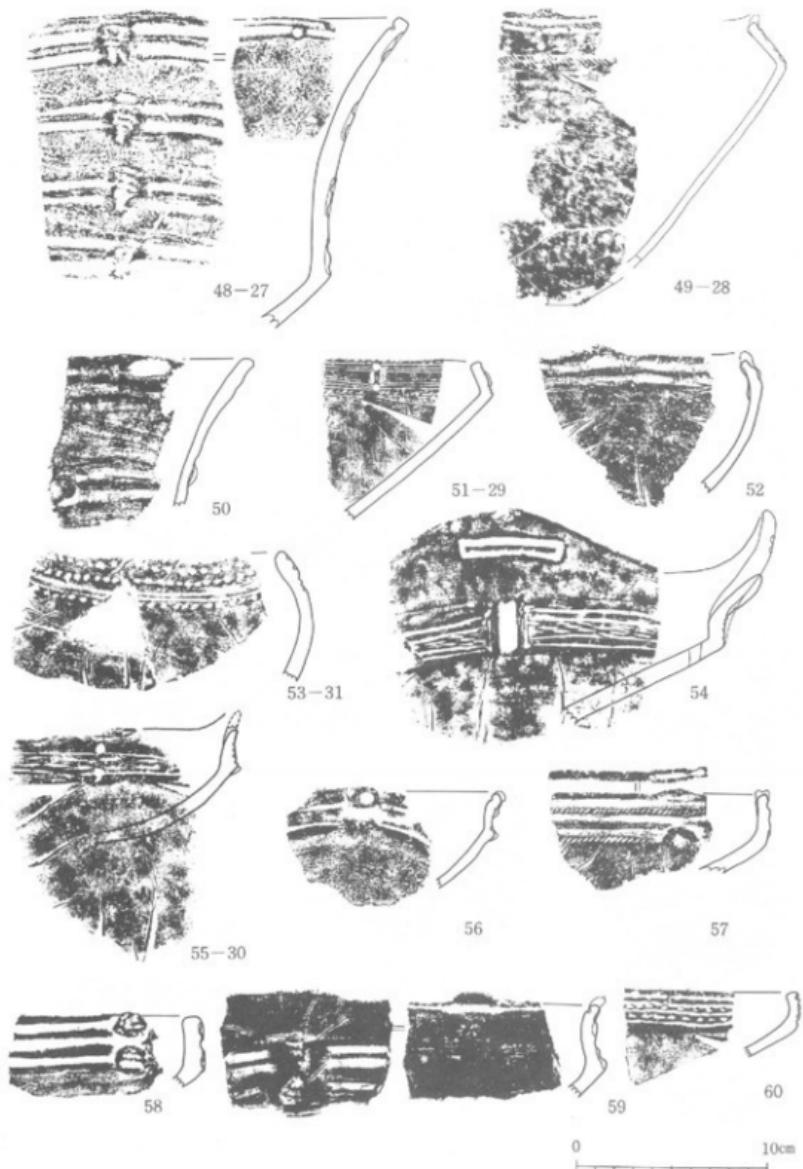


図 5-60 III区御経塚Ⅱ式土器拓影 ($S = \frac{1}{10}$ 、ただし 49・51 は $S = \frac{1}{5}$)

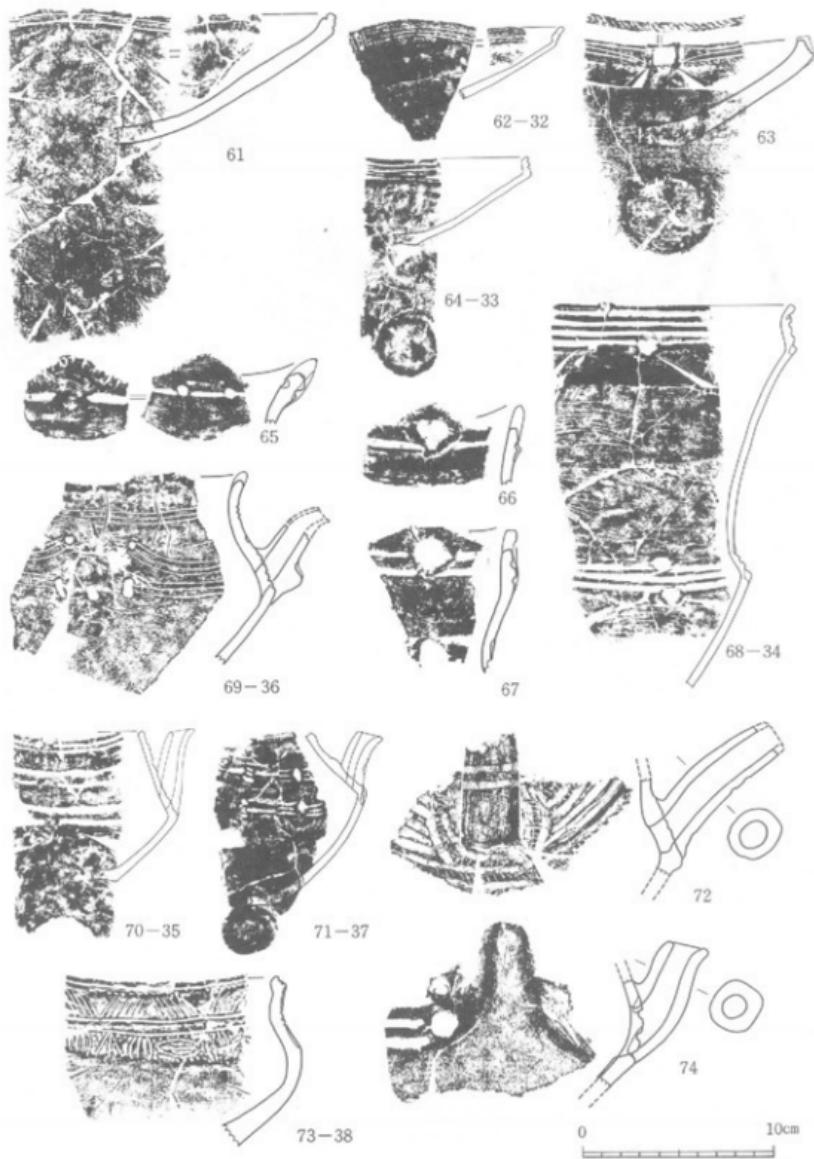


図5-61 III・IV区御経塚II式土器・御経塚I・II式注口土器拓影

(S = 割、ただし62・64・68・70-71はS = 割)

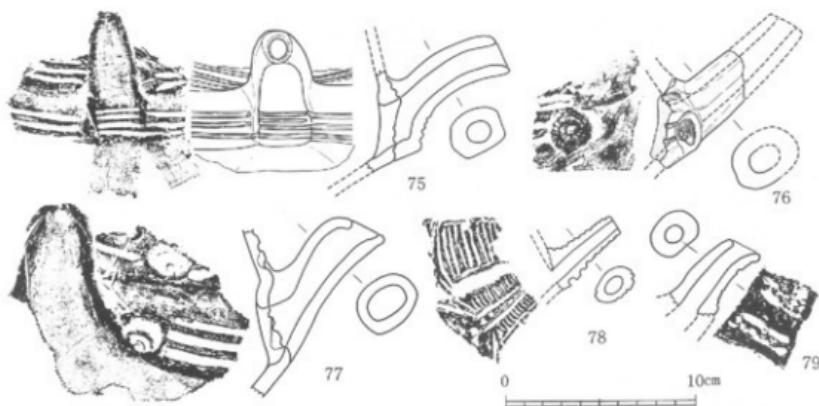


図 5-62 御経塚 I・II式注口土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

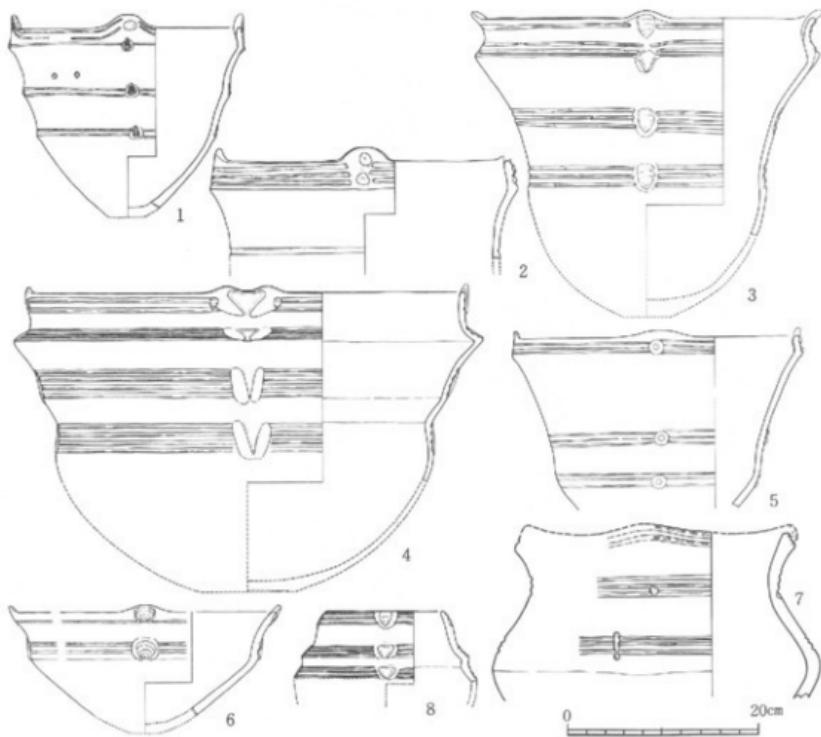


図 5-63 御経塚II式土器実測図 1 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 7 は $S = \frac{1}{3}$)

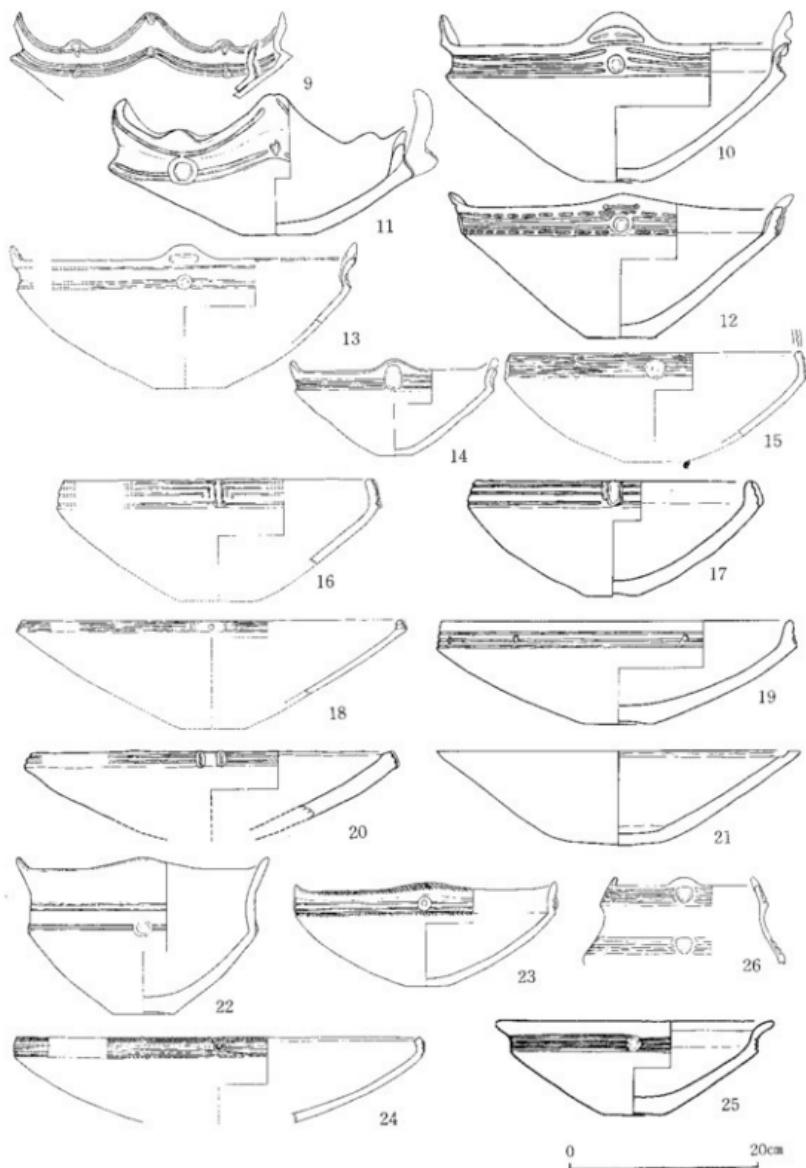


図5-64 御経塚II式土器実測図2 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし10~12・17・19~21・25は $S = \frac{1}{2}$)

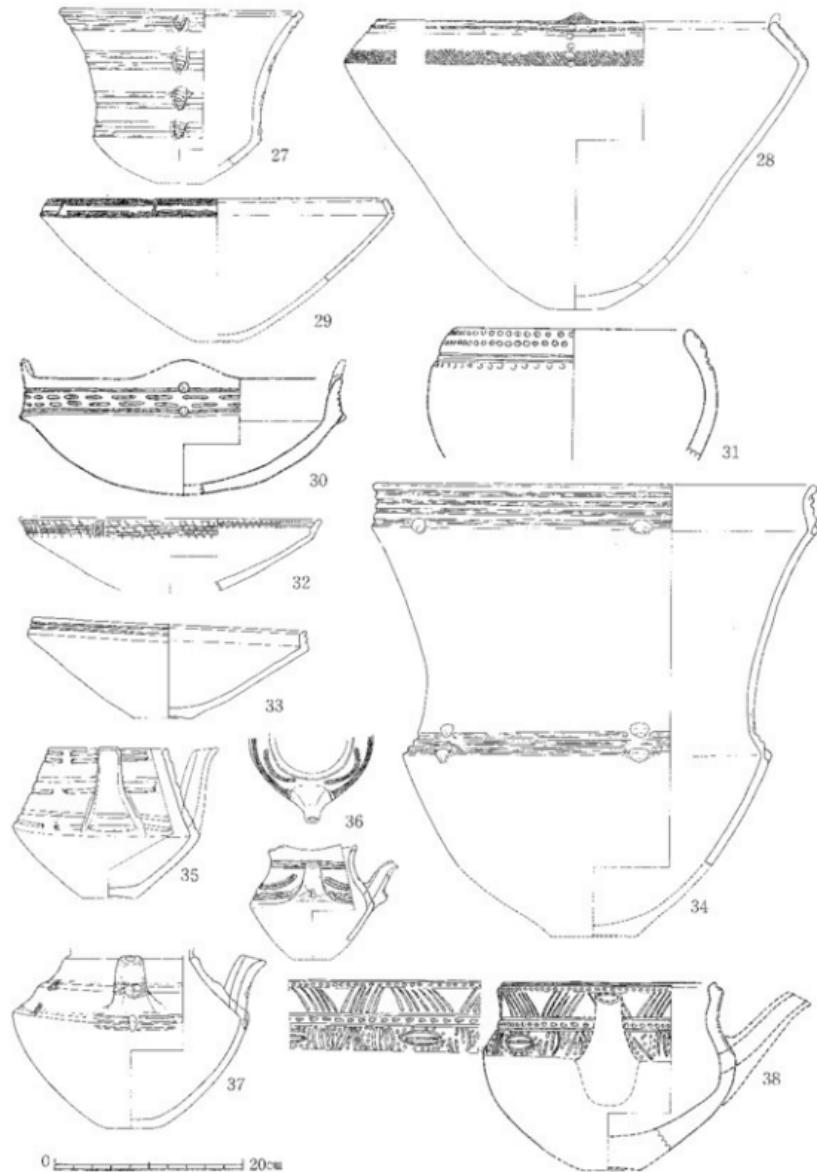


図5-65 御経塚Ⅱ式土器実測図 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし30~31・38は $S = \frac{1}{3}$)

(4) 八日市新保Ⅰ式土器

滋賀里風と筆者が呼んでいたものを中心新たに八日市新保Ⅰ式土器を設定した。八日市新保は八日市本町の旧名である。後期末にあたる北陸的ともいえる在地性の強い一群であり、晚期初頭八日市新保Ⅱ式の母胎となった土器型式である。

深鉢は低い山形をなす波状口縁で、平縁はほとんどつくられなくなっている。図5-66の14-3のような一見、平縁風のものは少ない。器形は口頸部で外に開き口縁部で外湾する。頸部のくびれは弱いが、口縁は内面に肥厚して段をつくることと、波頂部を内側にひねり出す手法とが現われてくる。文様は図5-66の1-1にみられる如き貼付円文を、先端の尖ったヘラ状具で押圧することから始まり、口縁部と口頸部をめぐる沈線に細い綫長の楔形文を施すのを特色とする。また、楔形文のかわりに沈線を2~4条の縱短線で切るものも多い。9・37の如き格円区画帯は12のような孤線で切るものに発展する。波頂下に施された横短線と縱短線を組合せた意匠や、口頸部、胴部上半で沈線を縱短線で切る手法は、八日市新保Ⅱ式の連結三叉文に発展する。粗製深鉢は、縦文施文と条痕施文のものとの交替期にあたると予想される。

鉢（図5-70の58-21）と上にあげた平口縁の深鉢は、対向弧線文と縱沈線文の接点を、浅く楔形風に削りこみ、文様帯を浮きたたせているのが特色であり、連続山形文の鉢も同じい手法を用いる場合が多い。

浅鉢は波状口縁と平縁とがあり、波状浅鉢は楔形風施文や沈線を縱短線で切るのは深鉢と同様であるが、御経塚Ⅱ式に現われた波頂下に横短線を加えたものも残る。

注口（図5-71の89-28）は幅広の楔形文と横方向の削りこみがなされ、八日市新保Ⅰ式土器の特色を最もよく示している。69は関西系の注口土器であろう。

八日市新保Ⅰ式は、宮窓式併行の御経塚Ⅱ式土器から発展した在地の土器型式と考えられる。しかし、関西の繩文文化との交流は、図5-67の23-6の如き波状深鉢の搬入品に示され、神通川以東については、岩瀬天神遺跡例の如く（出崎1967）富山県東部にひろがっていて、次の八日市新保Ⅱ式期における北陸一円を覆うに至る大洞B式期の段階が準備されている。

なお、図5-67の21-5は、図5-67の23-6の深鉢、図5-70の69の注口と同様に黒色を呈し、よく研磨されて光沢を帯びる。移入品であろう。本型式に含めてみたが、その当否について先是学の教示に俟ったことにしたい。

さて、器形の変化と、貝殻腹縁文のかわりに、貝殻施文を離れ、先端の尖ったヘラ状施文具で楔形文を押捺する文様をもって、御経塚Ⅱ式と時期を画することには異論はないと思われるが、後続する型式とは器形に変化はみられないのに、單に横走する沈線とそれを区切る縱短線の接点に、抉りが加えられているか否かという微細な施文手法の変化をもって、一型式を設定することは、型式論のための型式設定という懸念がしないでもない。この点に関しても高教を仰ぎたいと思う。

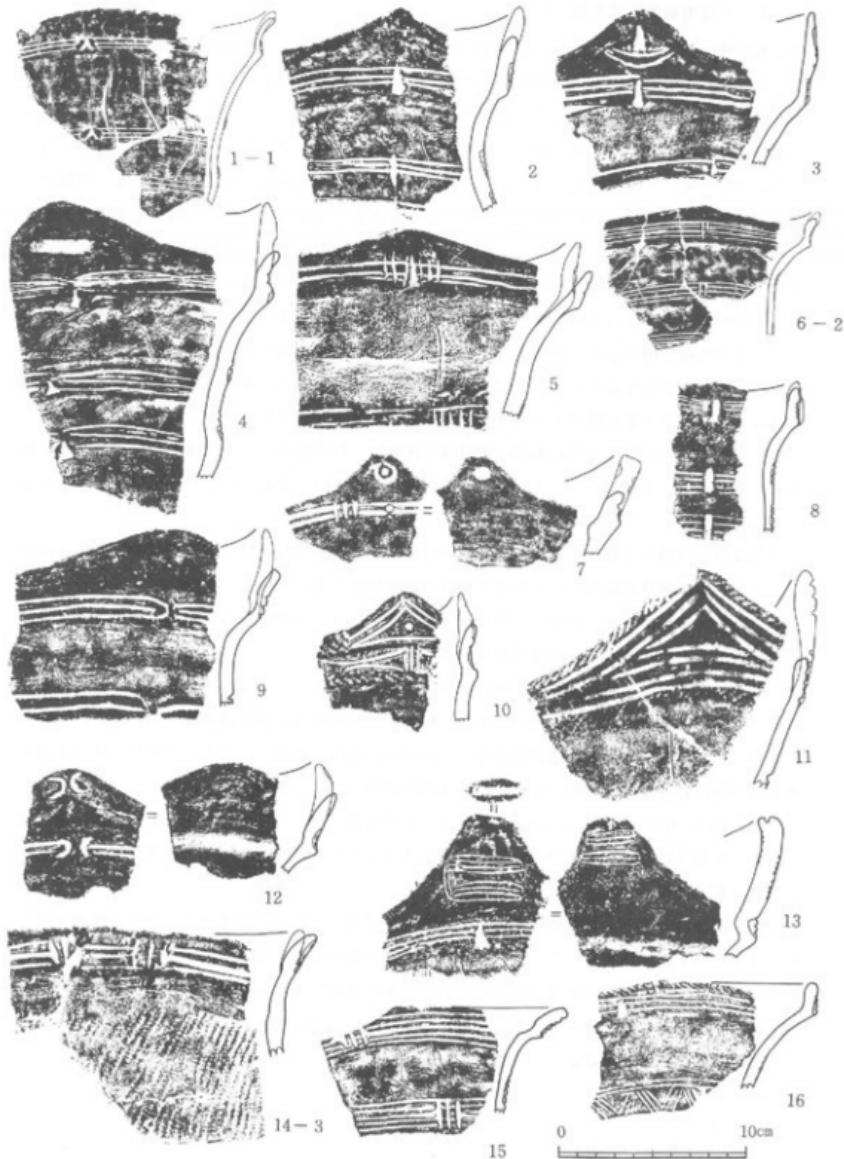


図5-66 I区八日市新保I式土器拓影 1 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし1・6は $S = \frac{1}{3}$)

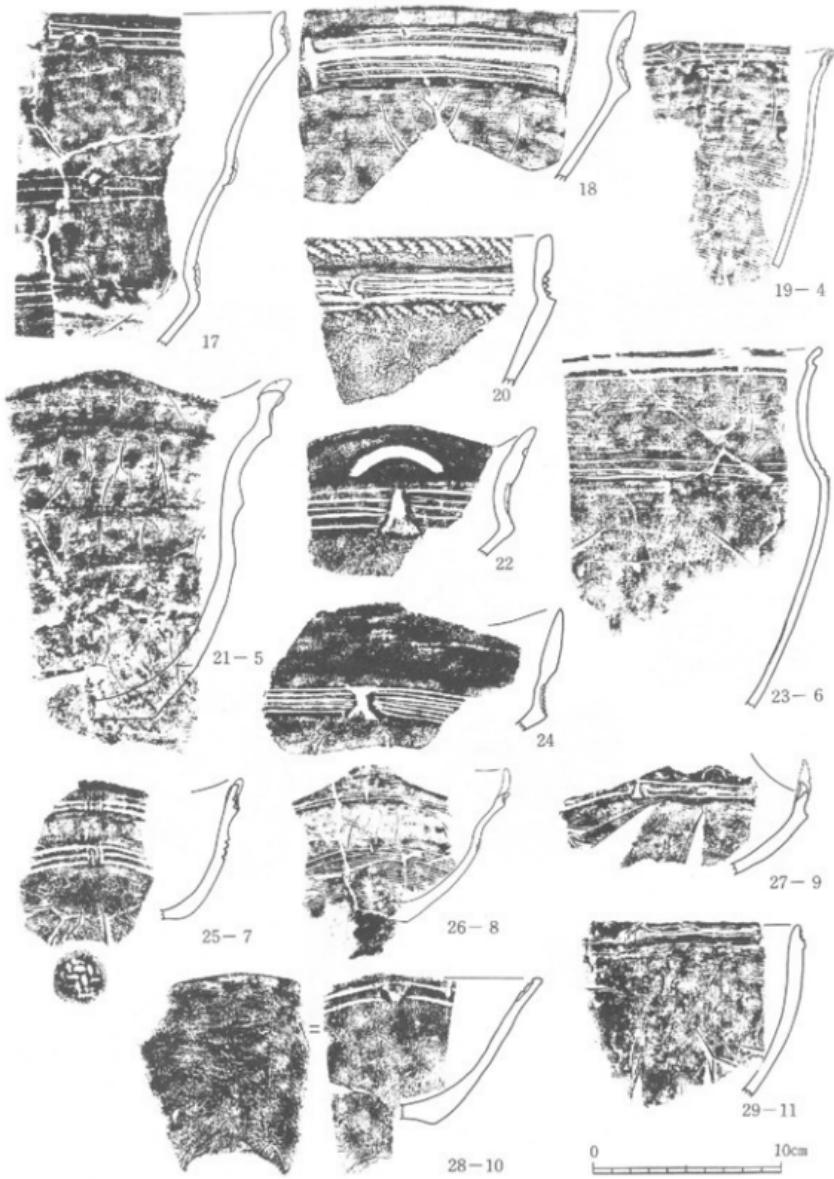


図 5-67 I 区八日市新保 I 式土器拓影 2 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 19・23・26は $S = \frac{1}{4}$)

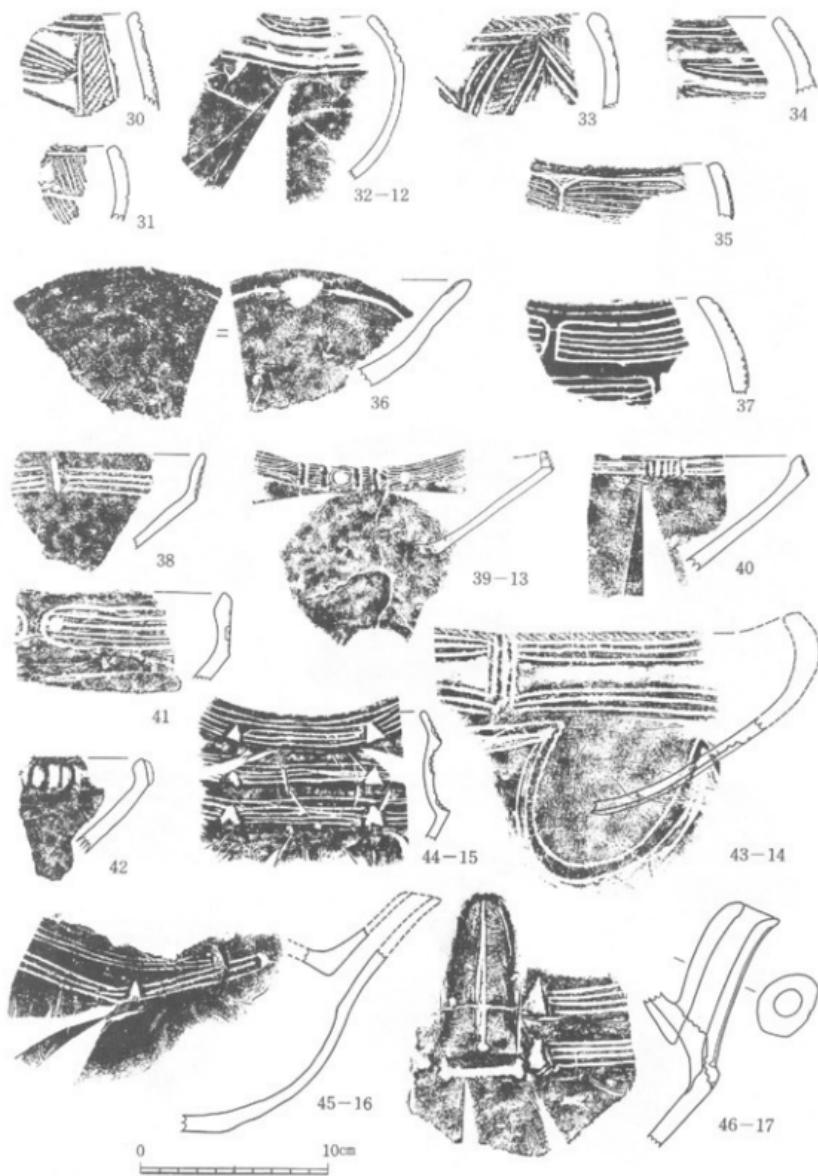


図5-68 I区八日市新保I式土器拓影3 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし39は $S = \frac{1}{3}$)

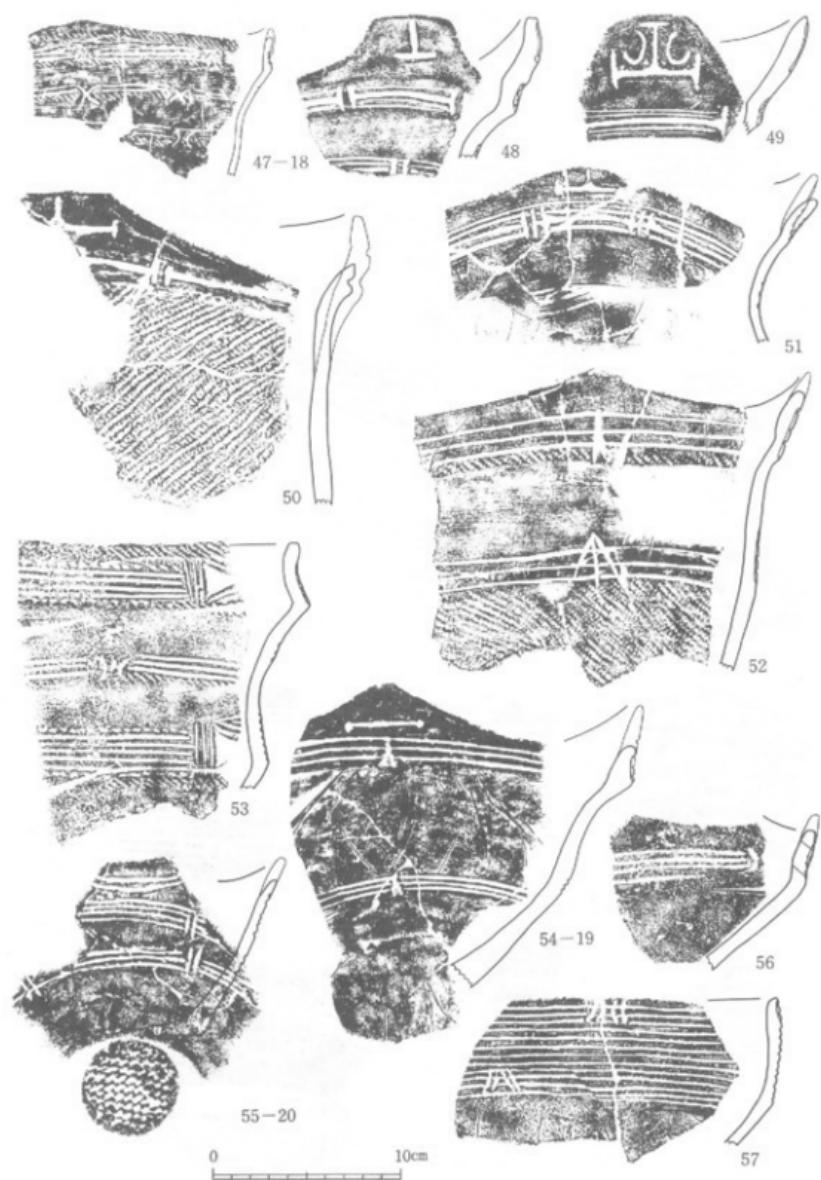


図 5-69 II区八日市新保 I 式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 47 は $S = \frac{1}{3}$)

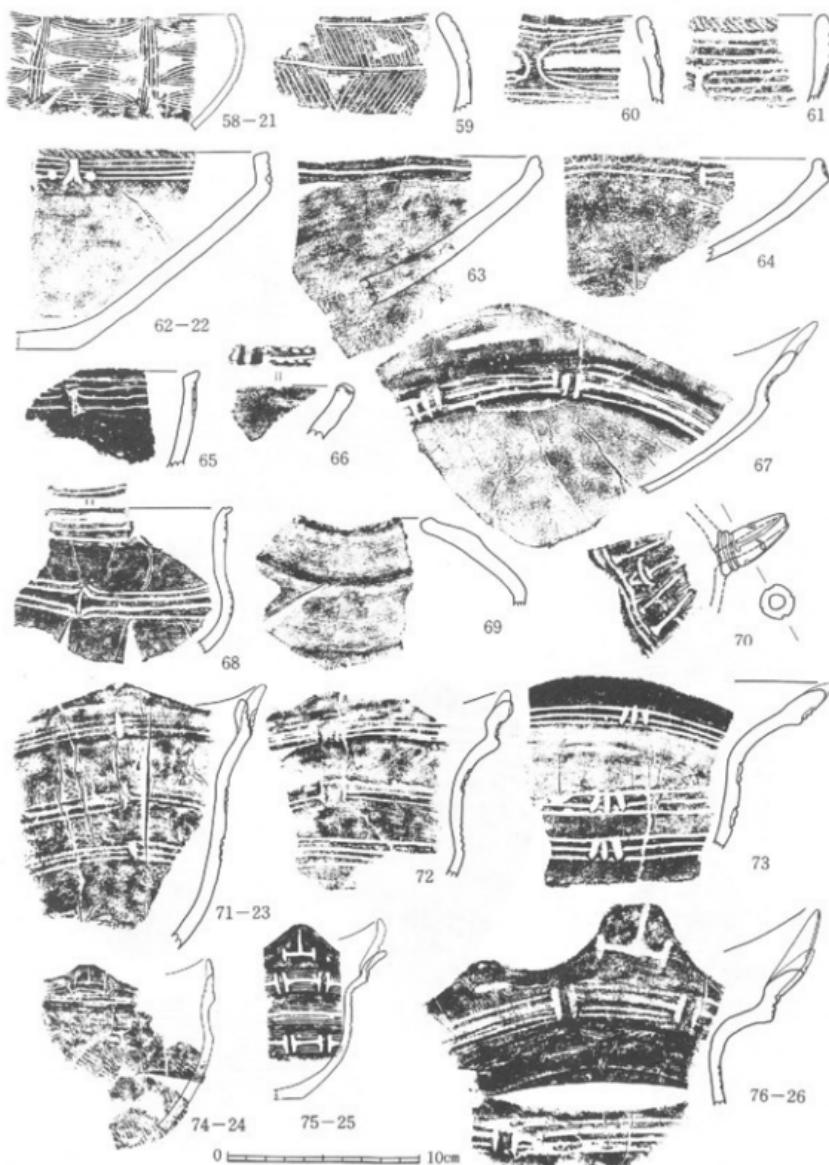


図5-70 II・III区八日市新保I式土器拓影 (S=1/2、ただし 74-75はS=1)

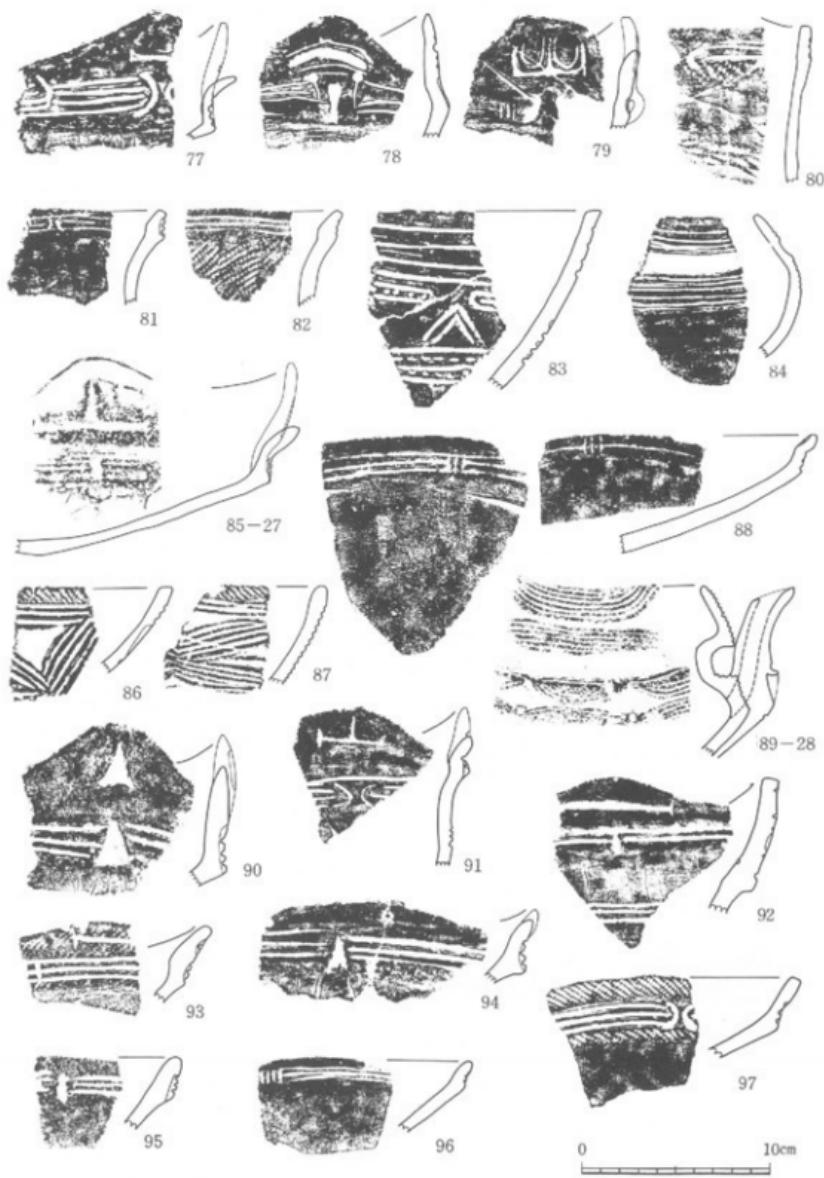


図5-71 III・IV区八日市新保I式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

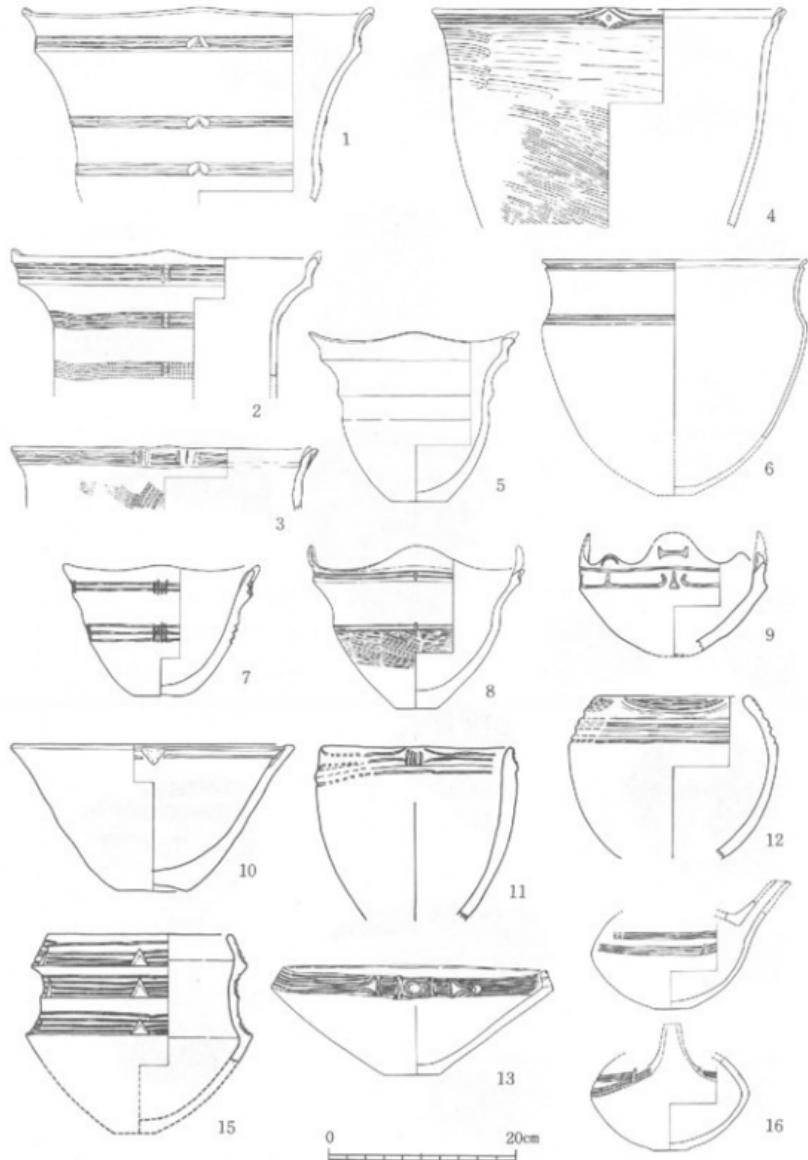


図5-72 八日市新保I式土器実測図1 ($S = \frac{1}{8}$ 、ただし 7・9・10~12・15は $S = \frac{1}{2}$)

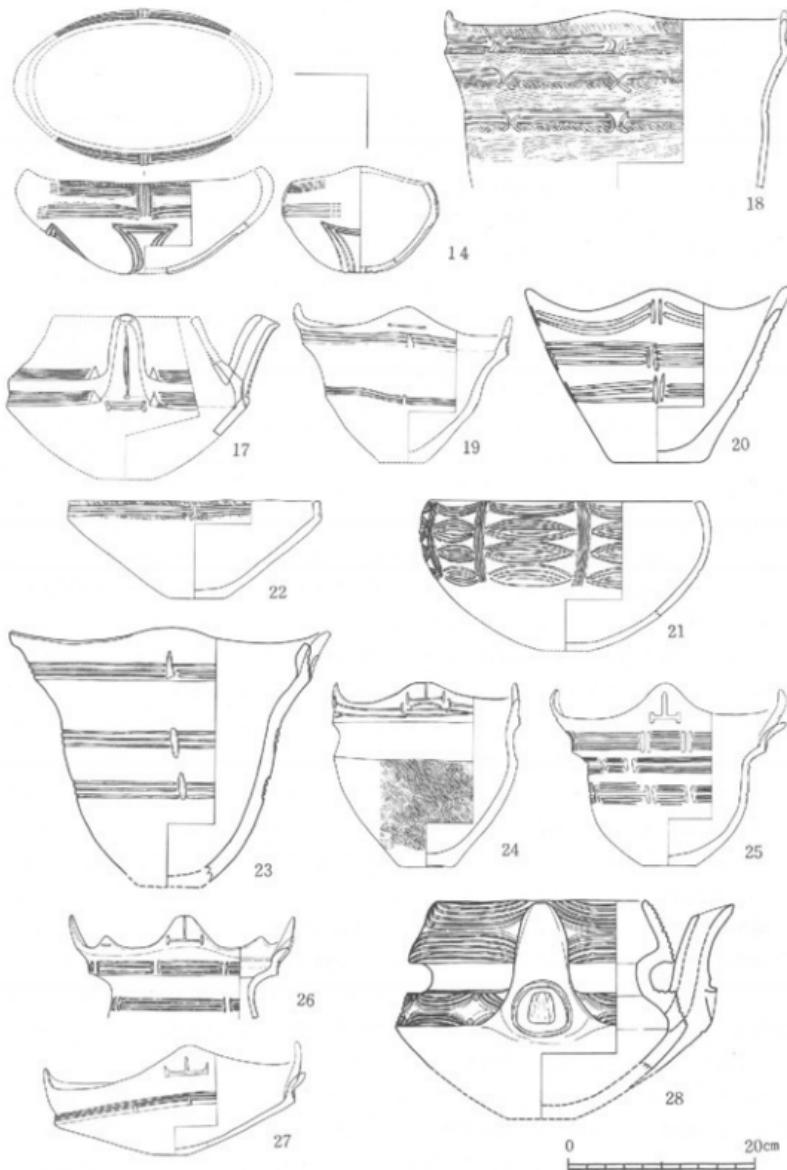


図5-73 八日市新保I式土器実測図 2 ($S = \frac{1}{6}$ 、ただし 20・23・28 は $S = \frac{1}{3}$)

(5) 八日市新保II式土器

八日市新保II式土器は、これまでの八日市新保式土器で、北陸の晩期前葉前半の土器型式であり、亀ヶ岡式土器の大洞B 1式に対応する。

深鉢は、波状口縁と平縁があるが、平縁は量的にきわめて少ない。波状口縁の口縁は外に開き、内面に肥厚して段をつくり、断面は三角状となる。波頂部は低い山形をなし、内面にひねりこんでいる。量的に少ない平縁深鉢にも内面ひねりこみがみられる。

文様は、かつて筆者が唱えた連結三叉文を主文様とする。連結三叉文は、八日市新保I式土器の沈線と縦短線との結節部を、先端の尖ったヘラ状用具で“ほじくる。すなわち抉ぐりこむこと”で生ずる文様で、施文具を斜め上から器面にあてて三叉文を彫る正統三叉文手法と異なる。また、三叉文が曲線文様であるのに対し、連結三叉文は直線文様であり、波頂部では山の字文となる。双つの相対する三叉文が中に玉を抱く玉抱き三叉文が盛行するのは、次の御経塚III式で、本型式では文様として施文されることはないと考えたい。

鉢は、連結三叉文を施することは少なく、図5-74の13の如く連弧文の接点に三角状の抉りを入れるものと、図5-75の30-5のように細い縦沈線を並べた区画文の間に配した横向きの連續山形文に、八日市新保I式の技法につながる抉りを加えている。

浅鉢は、波状口縁と平縁があるが、波状口縁は量的に少ない。短い直口口縁の場合は図5-76の38-39にみる如くせまい口縁帯に連結三叉文を施す。口縁が内面に肥厚する類には、口唇をめぐる1-2条の沈線に短隆線を貼付し、隆線をはさんで連結三叉文を施したり、降線と沈線との接点を抉りこんで連續三叉文としたりする。図5-77の55-62などがその例である。口唇加飾の浅鉢はII式期に出現し、御経塚III式、中屋I式土器に引きつがれ、北陸型浅鉢として地域性を明確に示している。図74の19-13は台付鉢の脚部で連續三叉文の透しを施す。

注口は、図5-76の41-8の算盤玉に近い胴部から緩やかにくびれ、口縁部は外傾する。連結三叉文は、口頸部下方のくびれ部に施文される。同40の注口はその腹面に三叉文を施す。

八日市新保II式土器は、抉りによって生ずる連結三叉文を指標とする。北陸型ともいえる地域色豊かな土器型式で、東は神通川を渡り、その支流宮川により岐阜県北部に、庄川と長良川の分水嶺を越えて岐阜県南部へ渡及している。また、関西では、琵琶湖沿岸の滋賀里遺跡から、遠く奈良県橿原遺跡にも、その技法が伝えられている。

繩文だけを施文した土器は粗製土器に分類した。直口の深鉢がほとんどで、図5-80の27の如き鉢類はきわめて少ない。30のように、口が外に開き口縁の肥厚するものは八日市新保I・II式のいずれかに属する深鉢である。八日市新保I式土器の項で、粗製深鉢は繩文施文のものと、条痕施文のものとの交替期にあたると述べたのは、30の如き器形のものは量的に少なく、御経塚III式の器形をとる繩文深鉢が検出できなかったからである。

酒見新堂遺跡出土の条痕土器は総数4点にすぎなかった。しかし、本遺跡の炉址では繩文深鉢に劣らない数量の、口縁部に横走条痕を施文する条痕深鉢が検出されているから、繩文深鉢は御経塚I・II式の粗製土器の絶対多数を占めなかつたことは確実である。この点からも御経塚I・II式期の北陸は関西系繩文文化の強い影響下にあったといえるのである。



図5-74 I区八日市新保II式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)



図 5-75 II区八日市新保II式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 21~22・25 は $S = \frac{1}{4}$)

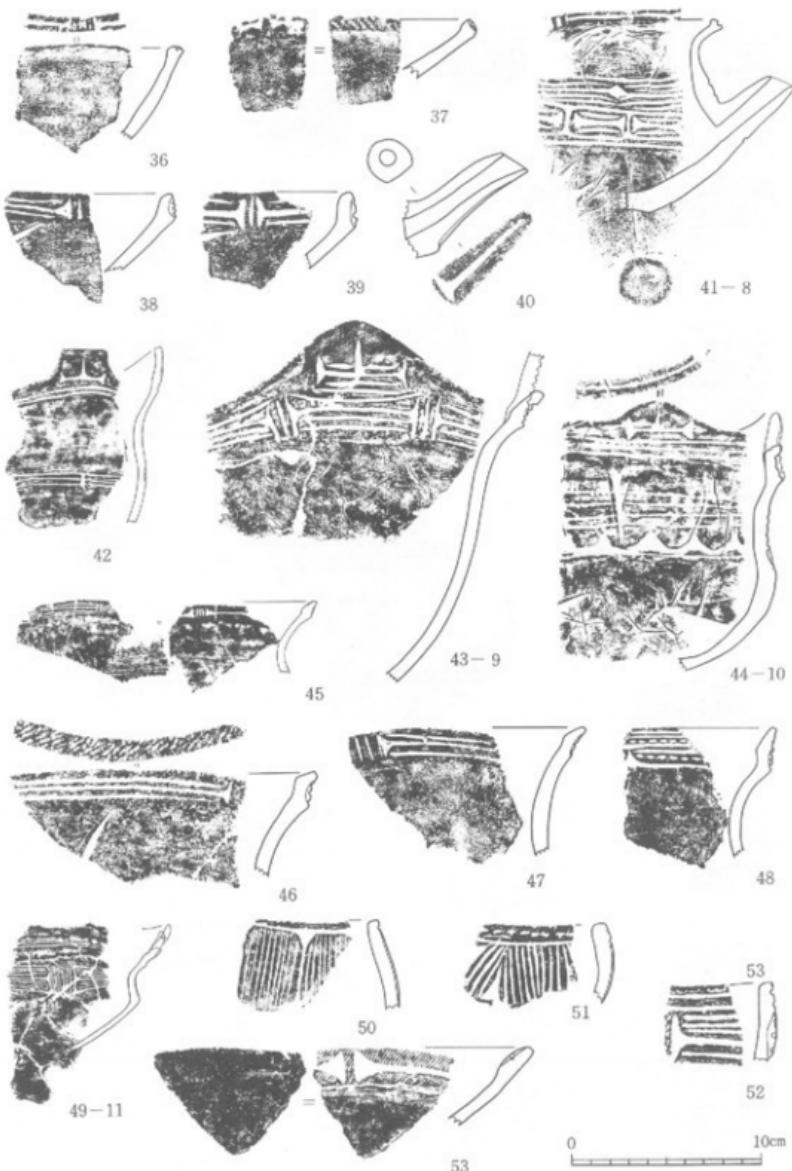


図5-76 II・III区八日市新保II式土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし42・45・49はS = $\frac{1}{3}$)

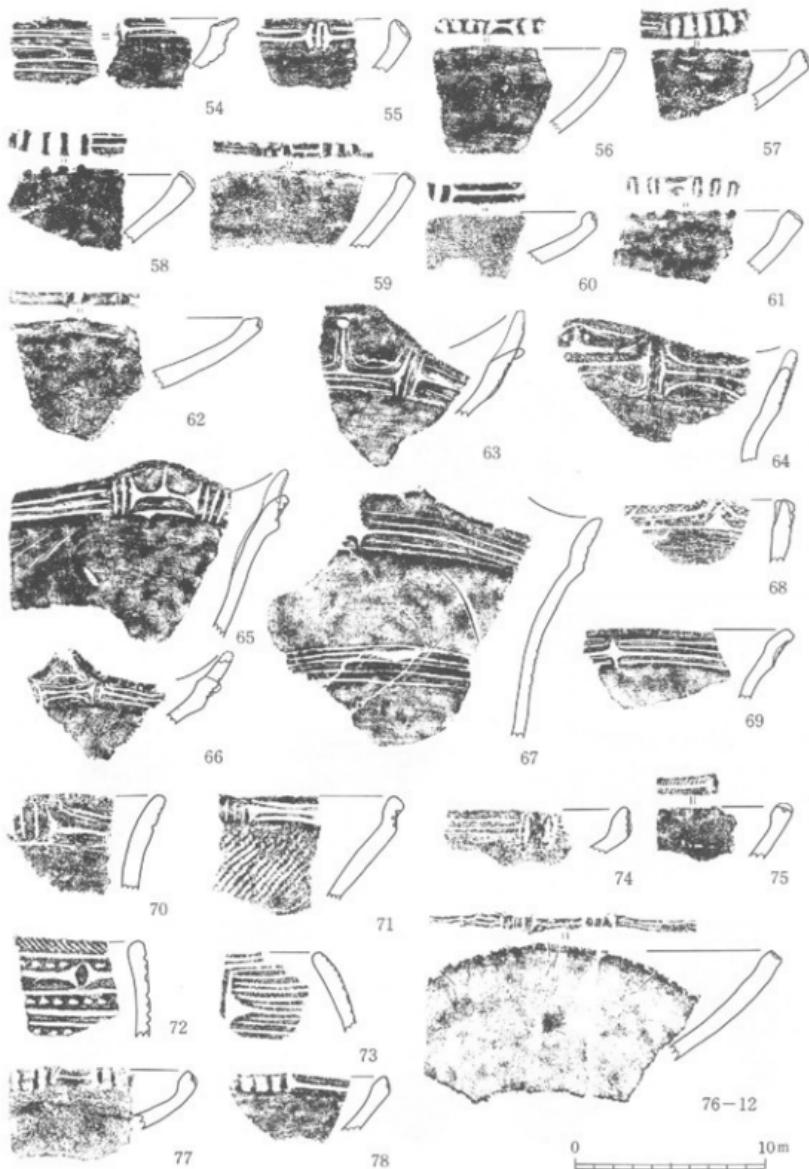


図 5-77 III・IV区八日市新保II式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

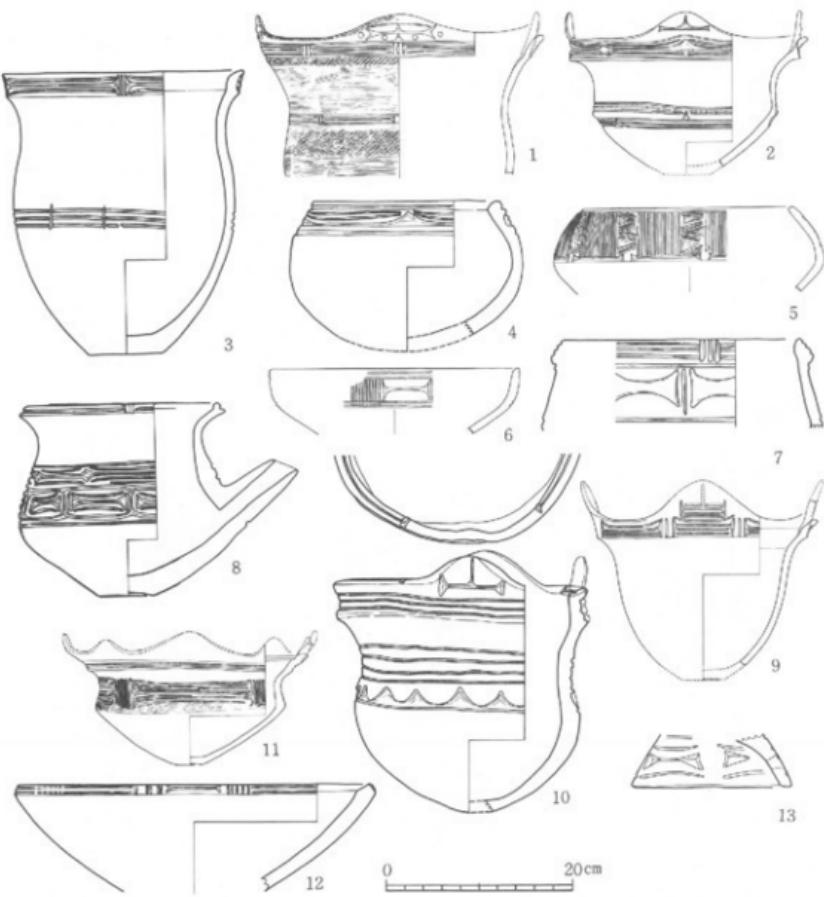


図5-78 八日市新保II式土器実測図 ($S = \frac{1}{6}$ 、ただし3~4・7~8・10・12~13は $S = \frac{1}{3}$)

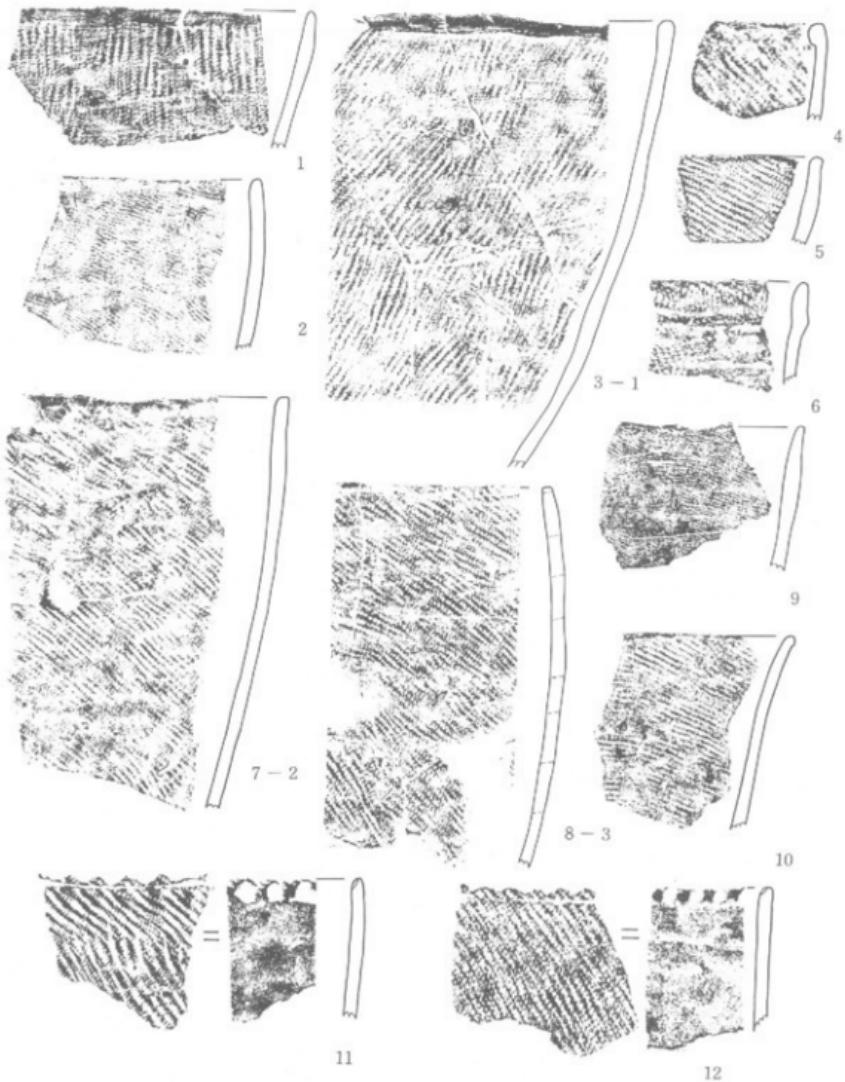


図 5-79 I 区縄文土器拓影 1 ($S = \frac{1}{2}$)

0 10cm

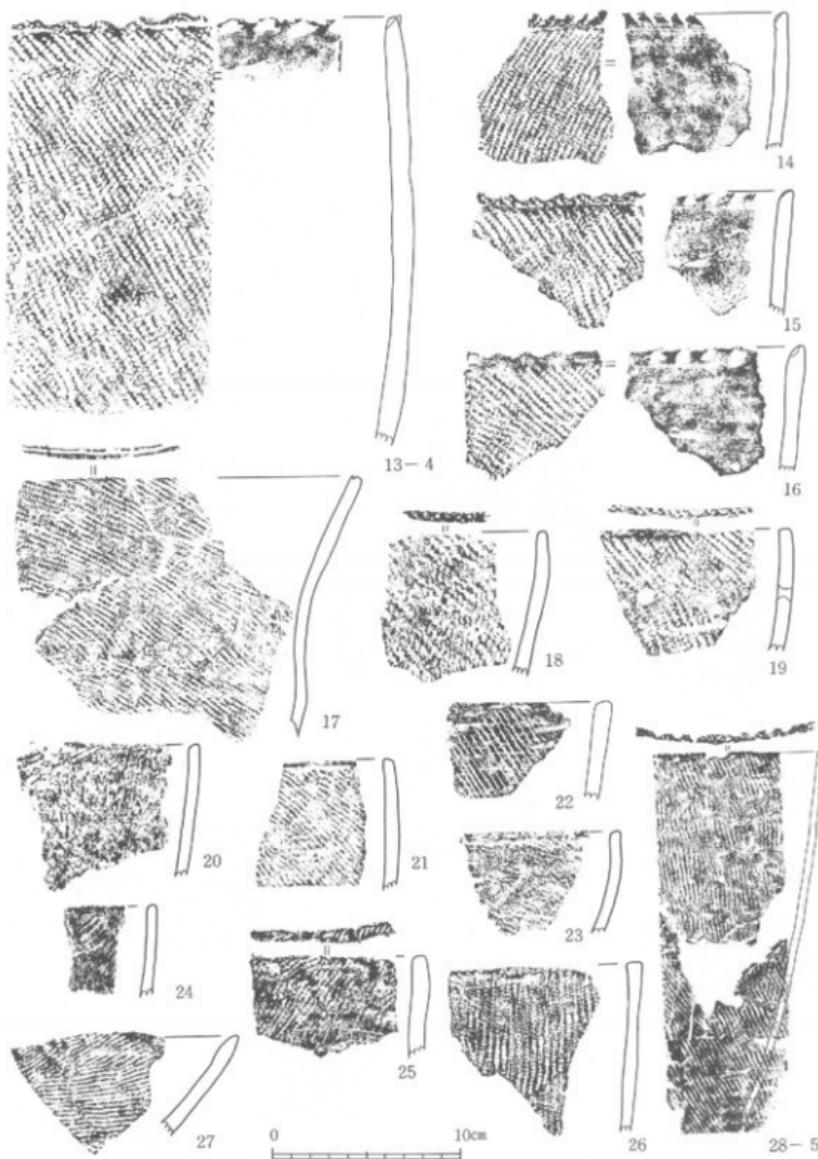


図5-80 I区縄文土器拓影 2 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし28は $S = \frac{1}{10}$)

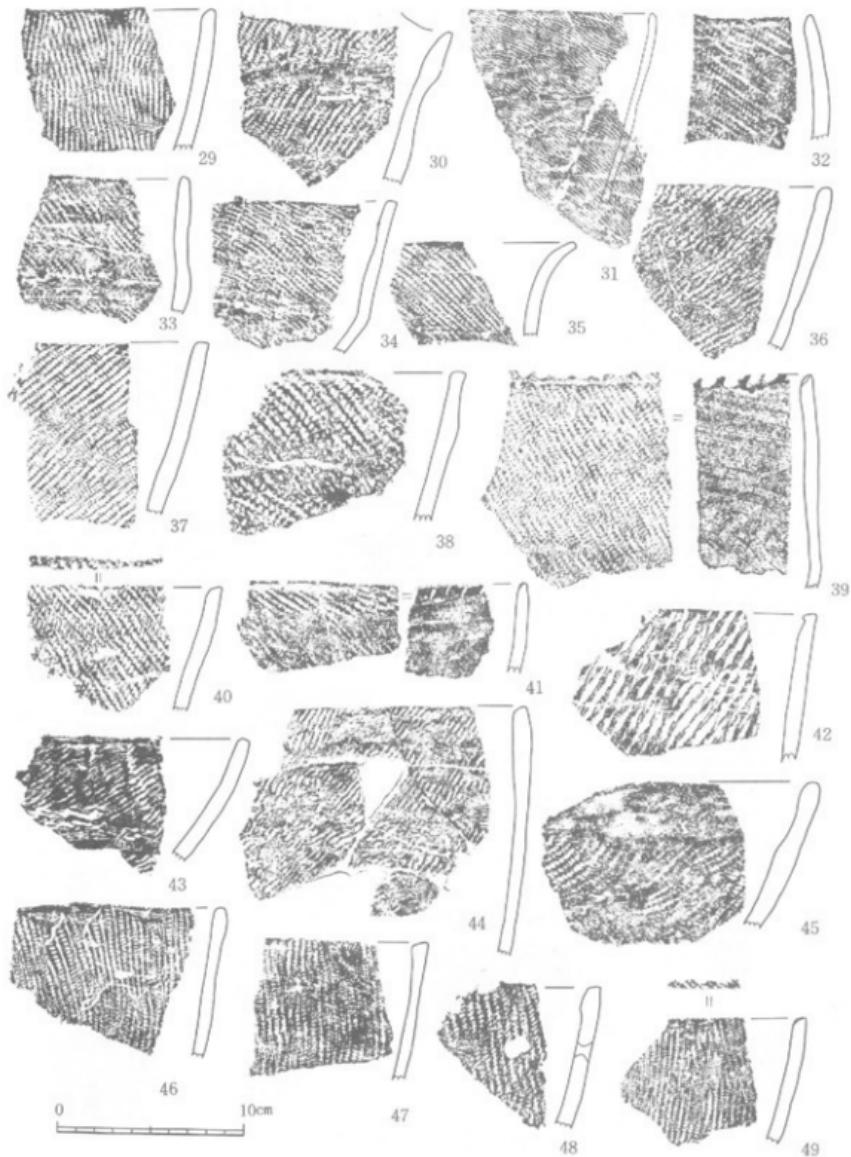


図 5-81 II 区繩文土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 31 は $S = \frac{1}{4}$)

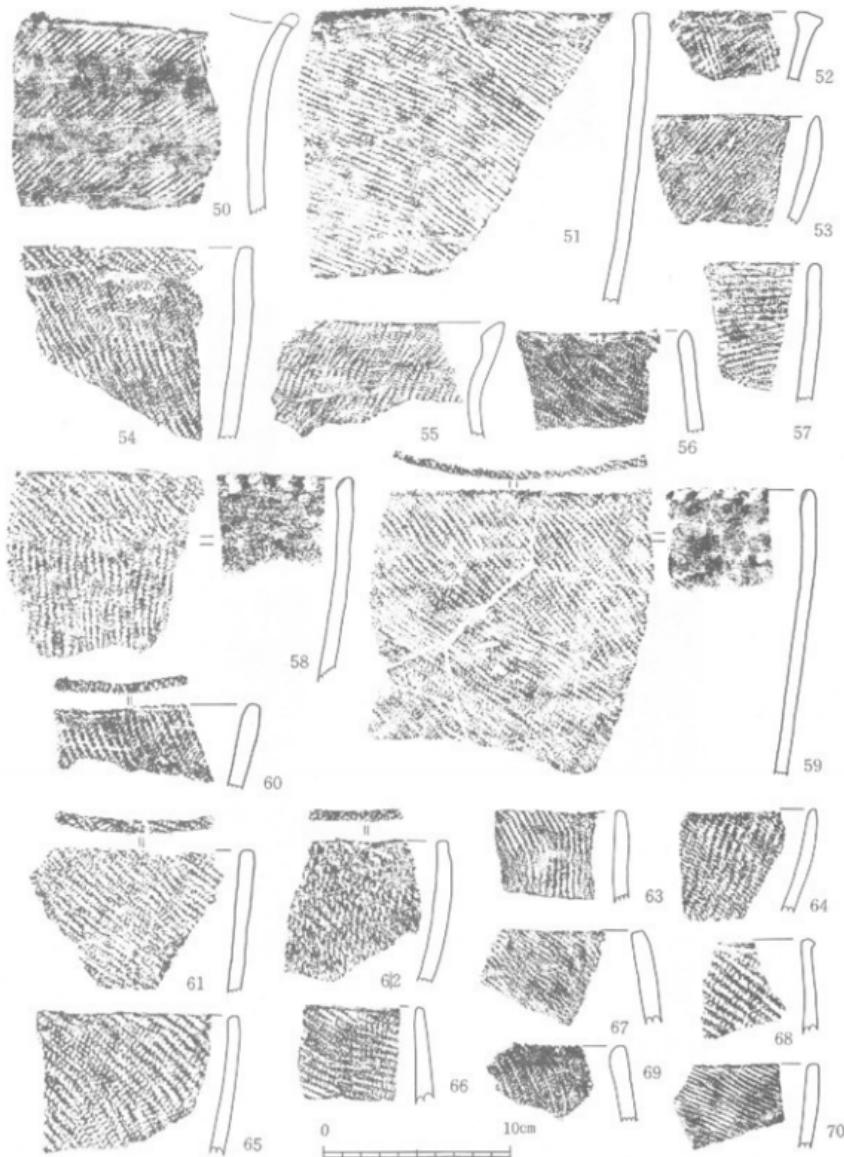


図5-82 III·IV区繩文土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

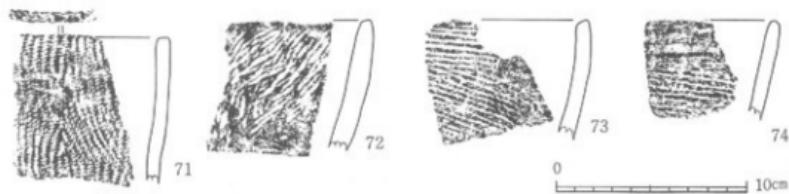


図5-83 IV区縄文土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)

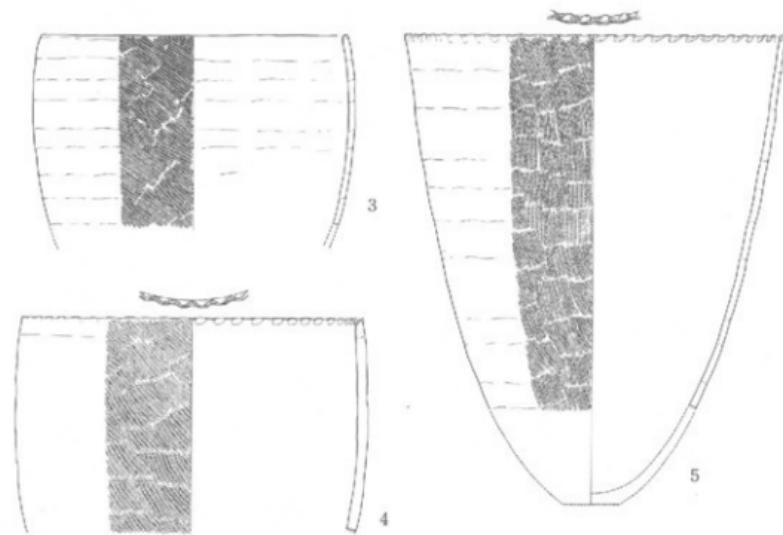
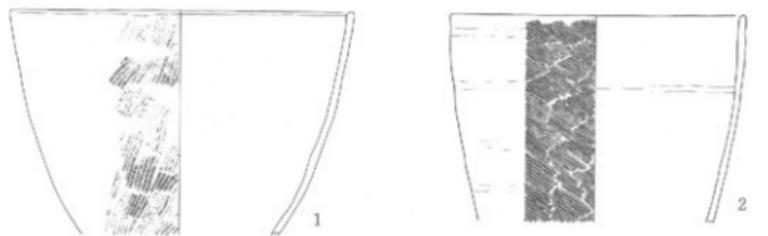


図5-84 縄文土器実測図 ($S = \frac{1}{3}$)

(6) 御経塚III式土器

御経塚III式土器は、これまで御経塚式土器と呼んできたもので、大洞B2式に併行する地域色の強い土器型式である。

深鉢には波状口縁と平縁のものとがあり、波状口縁をなすものが多い。波頂部は台形状の突起に近いものが多く、波頂下に玉抱き三叉文を施すものは、波頂部がやや高く内面に肥厚している。器形は、体部のふくらんだズングリ形をなす広口の深鉢で口縁は外に開き、口縁端は厚味をもち、口縁内面には、口縁に沿う1~2条の凹線をめぐらすのを特色とする。また、波頂部端面を加飾したり、波頂部内面に三叉文を彫りたりするものも多い。

文様は磨消入組文帯に三叉文を配するものを主文様とするが、玉抱き三叉文が盛行する。平縁のものは、口頭部から上を無文に残すものが多い。この場合も口縁内面に1~2条の凹線をめぐらしている。また、口縁の内湾する広口の深鉢、口縁部のすばまる壺形に近い器形となるものも(図-87の24-7・25-8)、数量は少ないが存在する。

鉢は平縁のものと波状口縁のものがある。図5-87の35-13は小波状口縁の鉢であるが、二線間に対向沈線を彫ることで連続T字形三叉文区画帯をつくり、区画内に円文を配することで玉抱き三叉文を描出している。39・40はT字形三叉文を施し、41の浅鉢のものは工字文によく似ている。

浅鉢は、器形・文様とともに本遺跡出土の土器型式の中で最もバラエティーに富んでいる。底部から大きく外に開くもの、口頭部で内湾するもの、八日市新保II式からの口縁を内面に肥厚させるものなど多様であるが、29-10の如く胴下半でくびれるものは後続型式土器に多い。

なお、口縁を内面に肥厚させる類は32-11のように、頭部でくびれるものは少なく、34-12のような器形が一般的であるが、口唇加飾部を肥大させるのが本型式の特色の一つである。また、加飾部を区切る短線あるいは短線間に繩文を施すようになるのも前型式との大きな相違点である。器面全体に施文する皿は本型式だけに存在するようである。135-31は台付鉢または浅鉢の脚部である。八日市新保II式期に属するものかもしれない。

注口は全般にひしやげながらや丸味をもつ特異な器形を呈し、注口の位置は低い。口唇と体部の磨消入組文帯の意匠が繁複であるのも大きな特色といえる。

蓋はこの期に出現し中屋I・II式に盛行するが、北陸の晩期だけに盛んに用いられるのは、広口形態の深鉢との関連が考えられ、さらにはその貯蔵形態からかれらの食生活の一端が想起されて興味をよぶのである。

御経塚III式土器は、磨消入組三叉文・玉抱き三叉文・T字形三叉文などに、東北地方との関連が見出されるが、台状小突起をつけたズングリした器形をなす深鉢、口唇部に三叉文を彫った三角状の横位貼付隆帯で加飾する深鉢・浅鉢や注口の意匠および蓋形土器の出現に土着性が顕著にみられるなど、三叉文を誇張した地域性濃厚な土器型式である。しかし、粗製深鉢は繩文を施したもののは全く使われなくなり、条痕深鉢に統一される。この点を重視すれば、御経塚III式土器は西日本系の土器型式ともいえよう。



図 5-85 I 区御経塙田式土器拓影 1 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし 1 は $S = \frac{1}{6}$)



图 5-86 I 区御经塚Ⅲ式土器拓影 2 ($S = \frac{1}{2}$)



図 5-87 I 区御経塚III式土器拓影 3 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 32 は $S = \frac{1}{8}$)

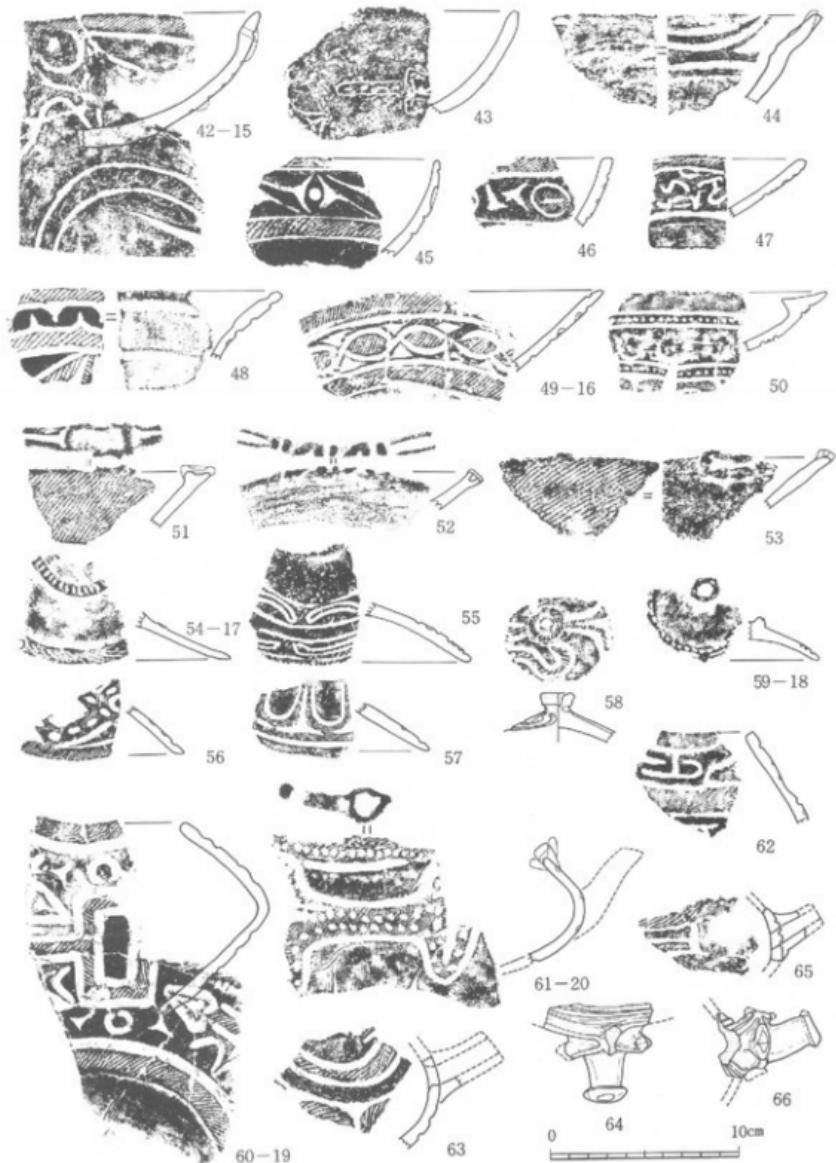


図5-88 I区御経塚III式土器拓影4 (S=1/2)

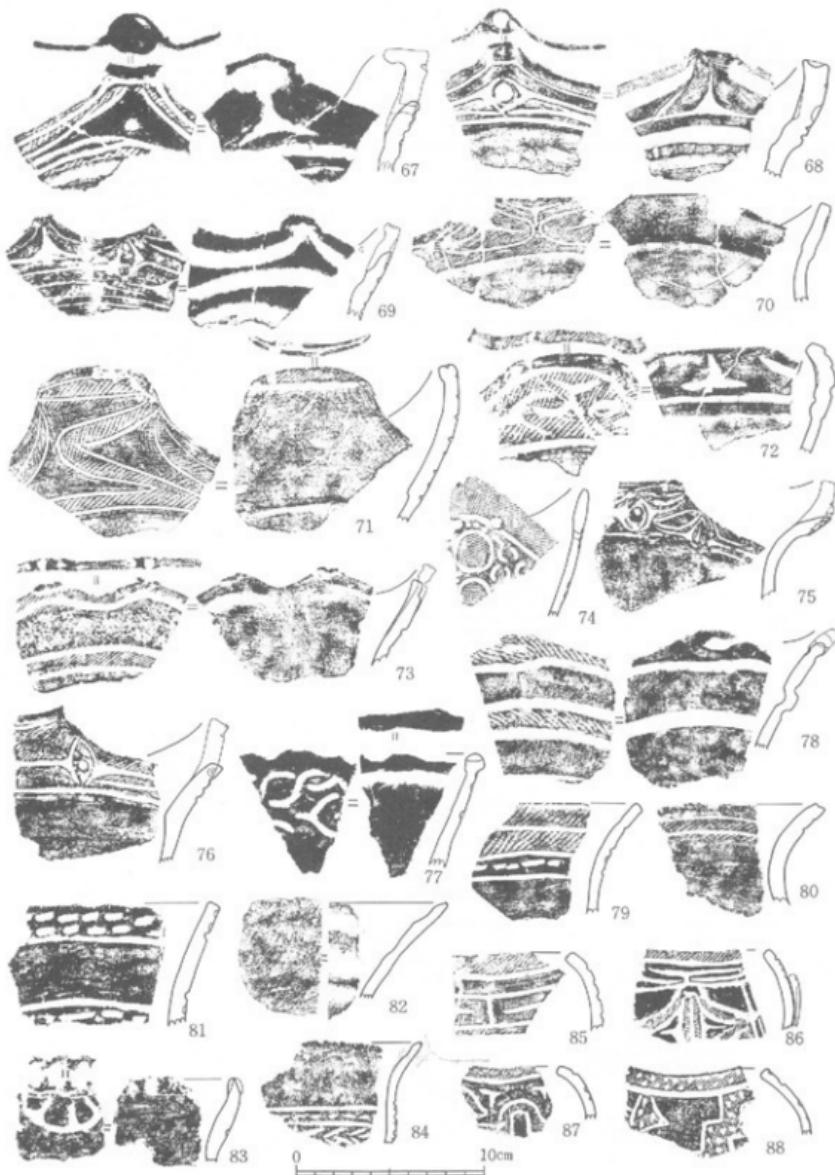


図 5-89 II区御経塚III式土器拓影1 ($S = \frac{1}{3}$)



図5-90 II区御経塚式土器拓影2 (S=↑、ただし90・105はS=↓)

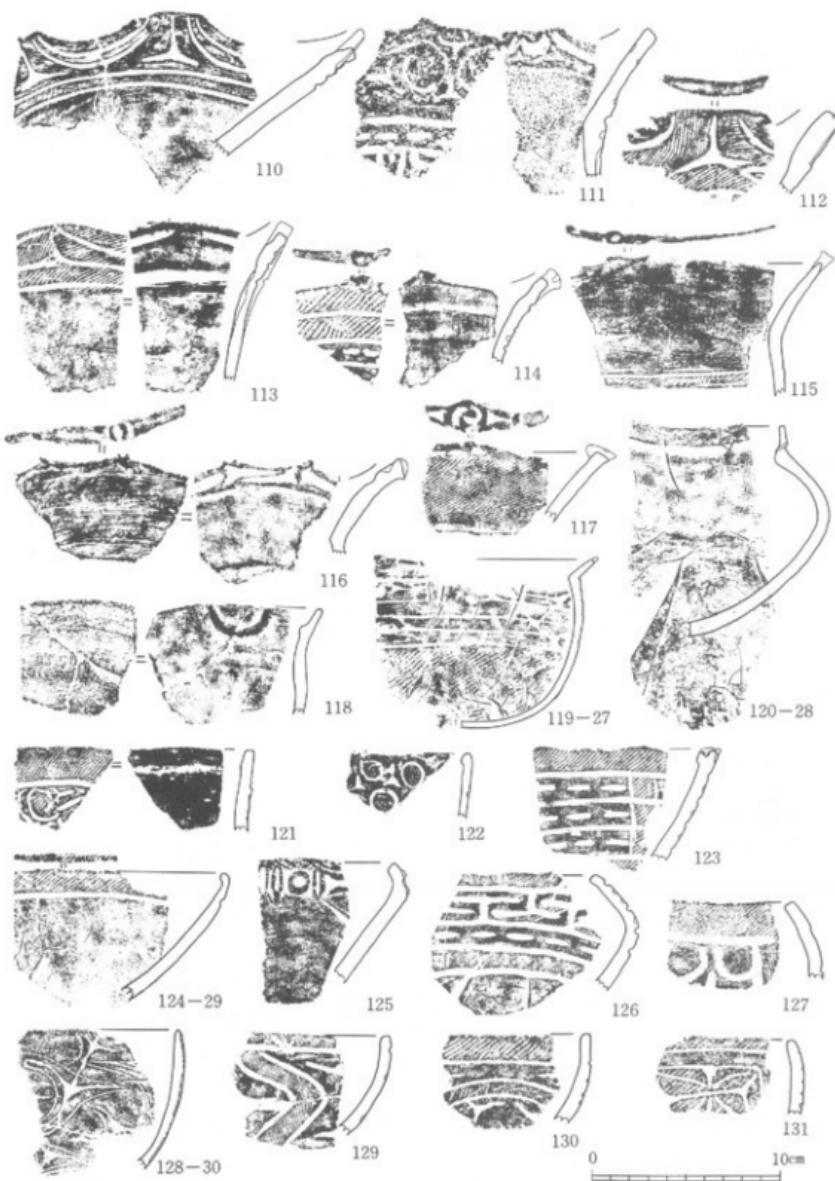


図 5-91 III区御經塚III式土器拓影 1 ($S = \frac{1}{3}$)

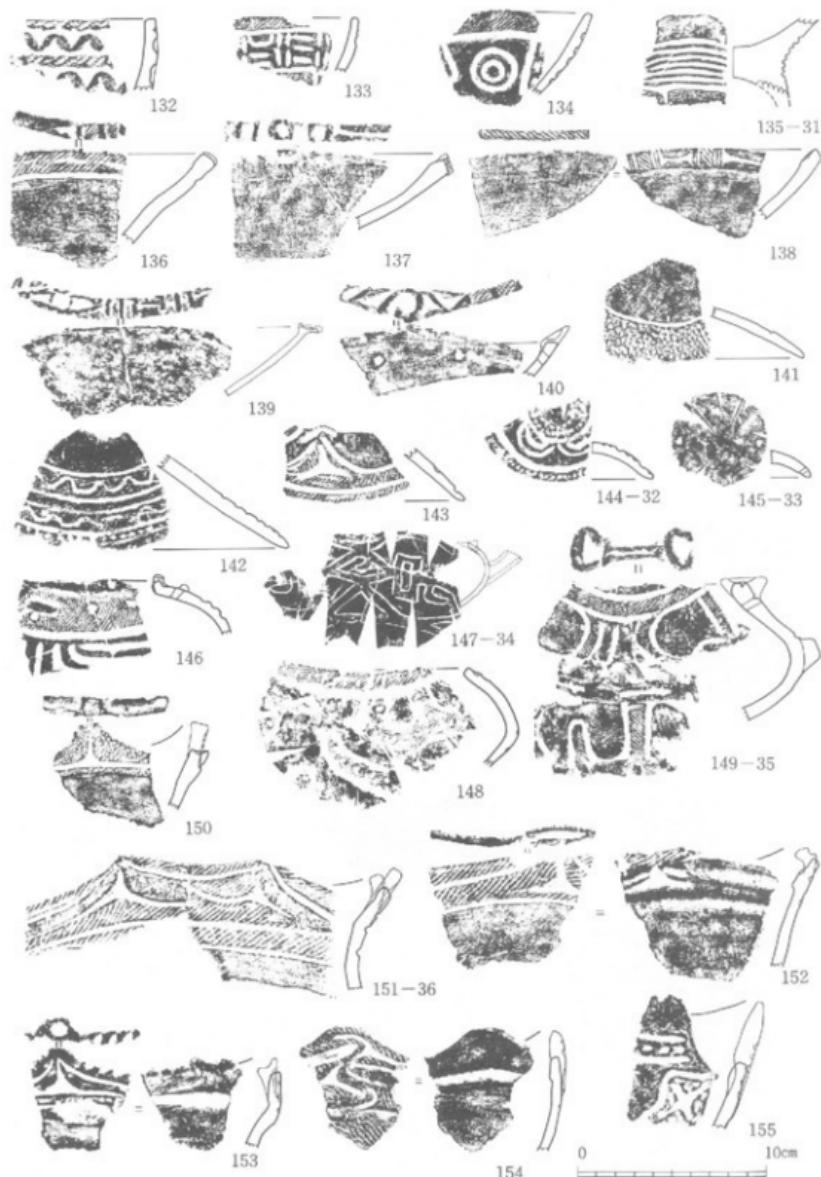


図 5-92 III・IV区御経塚III式土器拓影 2 (S = 1/2, ただし 139-147は S = 1/4)

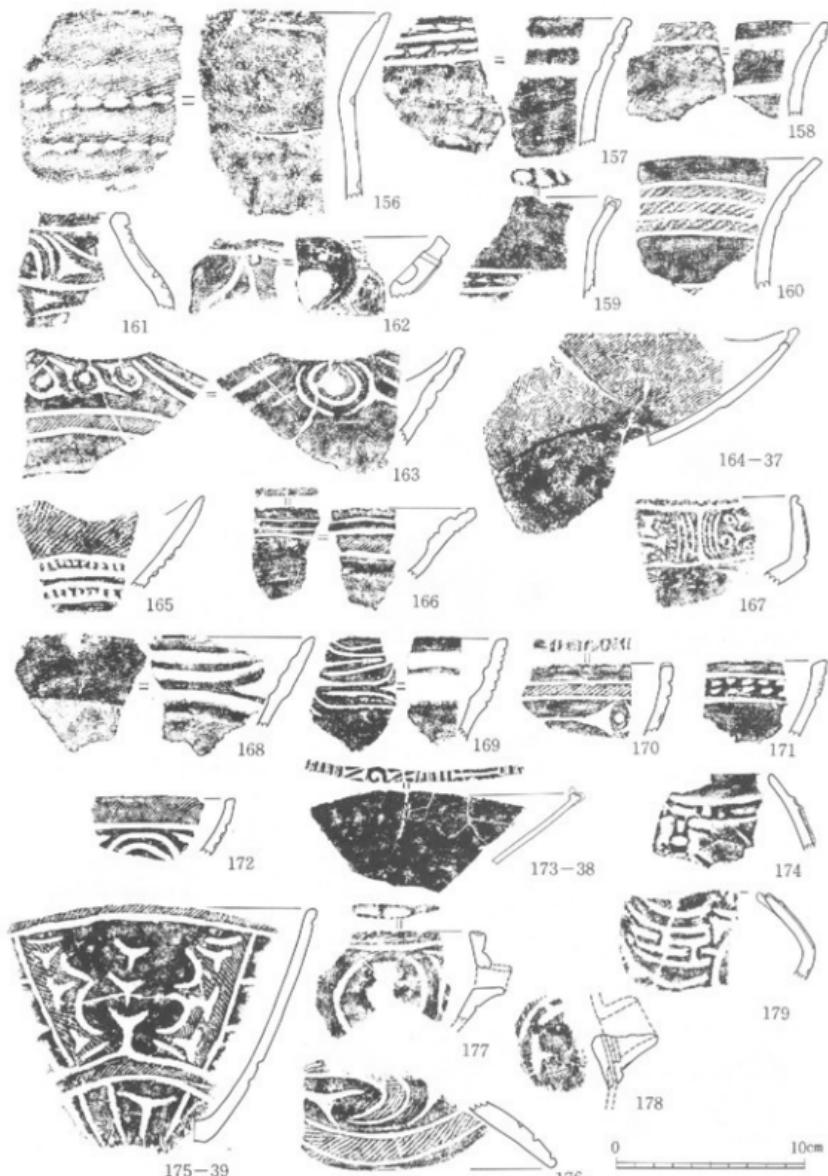


図5-93 IV区御経塚式土器撮影1 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし173は $S = \frac{1}{2}$)

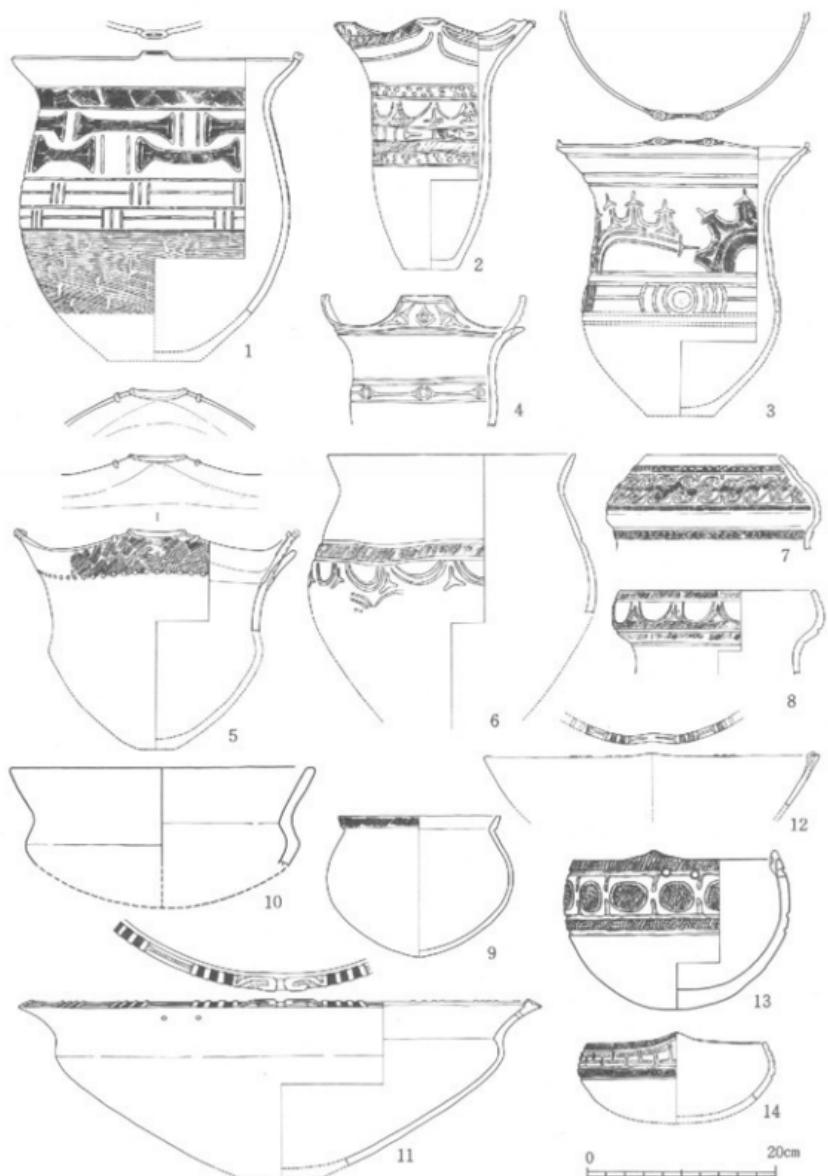


図5-94 御経塚III式土器実測図1 ($S = \frac{1}{6}$ 、ただし 10・13は $S = \frac{1}{3}$)

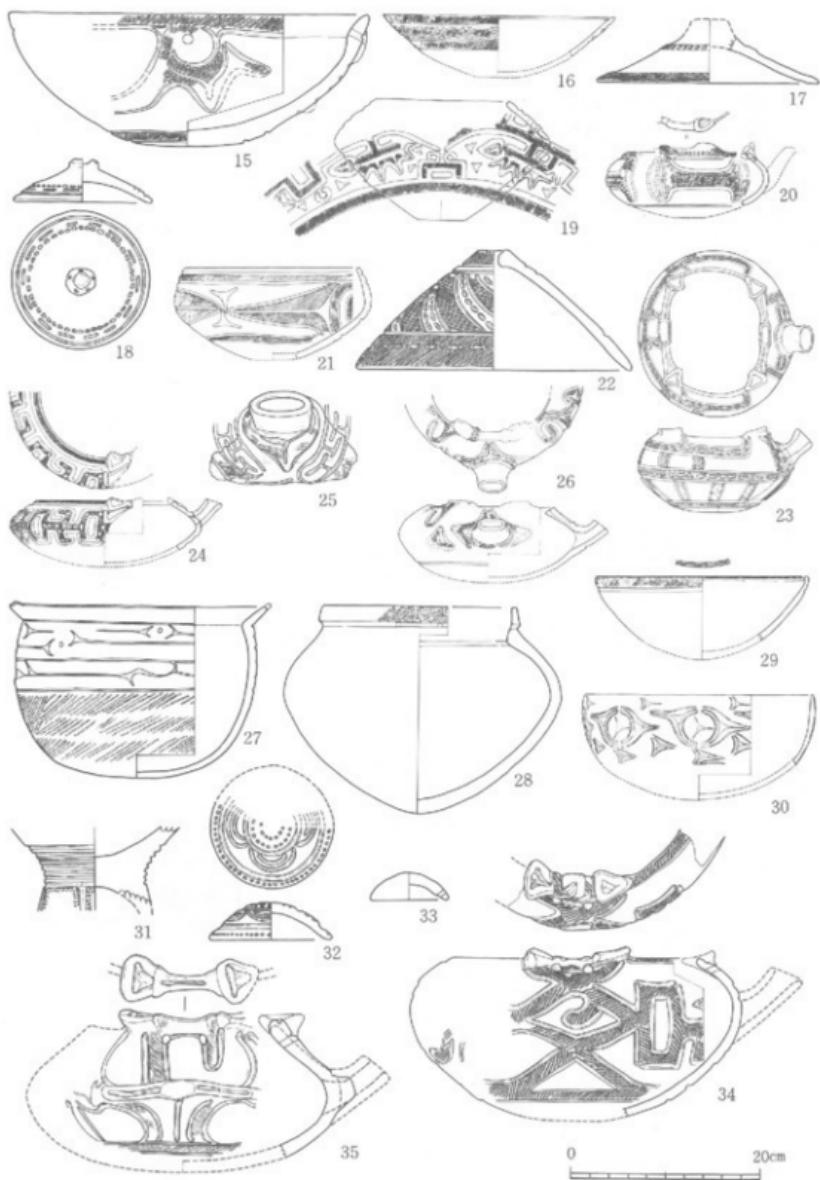


図 5-95 御経塚III式土器実測図 2 (S = ¼、ただし 15・17~18・22・25~28・31~35は S = ½)

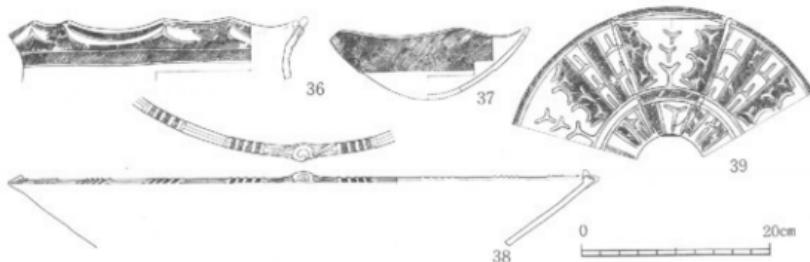


図5-96 御経塚III式土器実測図3 (S=1/2)

(7) 中屋I式土器

これまで中屋式土器と総称していたものから、大洞B-C式に併行する前半土器を分離し、新たに中屋I式土器を設定した。

中屋式I式土器の深鉢は、平縁に統一され、胴の張った体部から口頭部で「く」字形に屈折外傾する広口の深鉢で、口縁端は内面に少しく肥厚する。波状口縁は全くつくられないが、かわって口縁にB凸起をつける。文様は入組三叉文を主文様とする。文様帶は、頭部にめぐらした1~2条の沈線と、胴部の最大径近くにめぐらされた沈線で構成される繩文区画帯に入組三叉文を配する。頭部を無文帯に残す場合があり、沈線間に列点文を施すものも少なくない。羊齒状文もあるが、御経塚III式土器の文様であったT字形文から発展したと考えられる鍵の手文は、入組三叉文に次いで施文される。粗製深鉢は条痕文土器で、口唇に横円状列点文を施している。

浅鉢は、胴部でくびれ口縁外傾するものと、胴部から外に開き口縁部が内湾するものとがあり、前者には、口縁部文様帶と入組三叉文を充填した口縁部文様帶間を無文帯として残しているものが多い。後者の場合は、十字形文を中心に弧線文を連ねる意匠を施したものもある。口唇に、繩文を施した貼付隆線と三叉文を組合せた加飾を施し、これを基点に沈線をめぐらす無文浅鉢は前型式から引きつがれるが、御経塚III式のように、加飾部分を特に肥大させることはない。浅鉢の無文化も目立つが、口縁内面に埋珊瑚状加飾を施すものが少なくない。

注口は、いまだ検出されていないが、蓋は前型式を受けて盛んにつくられ、そのつまみにさまざまな形と意匠が試されている。

中屋I式土器は、沼田啓太郎氏と山内清男博士の調査によって、早くから北陸の大洞B-C式併行土器型式として紹介されてきた。これを二分しその前半を新たに中屋I式土器としたのであるが、広口の「く」字形口縁の器形とB凸起、入組三叉文・羊齒状文・鍵の手文などの東北系文様と、土着的な繩文を押捺した隆線と三叉文を組合せ加飾部を基点とし、口唇に沈線をめぐらす浅鉢と、蓋形土器の盛行を指標とする。粗製深鉢がすべて条痕文土器であることは御経塚III式土器と同様である。中屋I式土器は、御経塚III式土器という地域性の強固な土器型式に、日本海を経由した大洞B-C式の意匠を加えた北陸独自の土器式とみるべきであり、口唇加飾の浅鉢は遠く三河・吉胡貝塚に及んでいる。



図5-97 1区中屋1式土器拓影1 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし2-6・11・15は $S = \frac{1}{2}$)

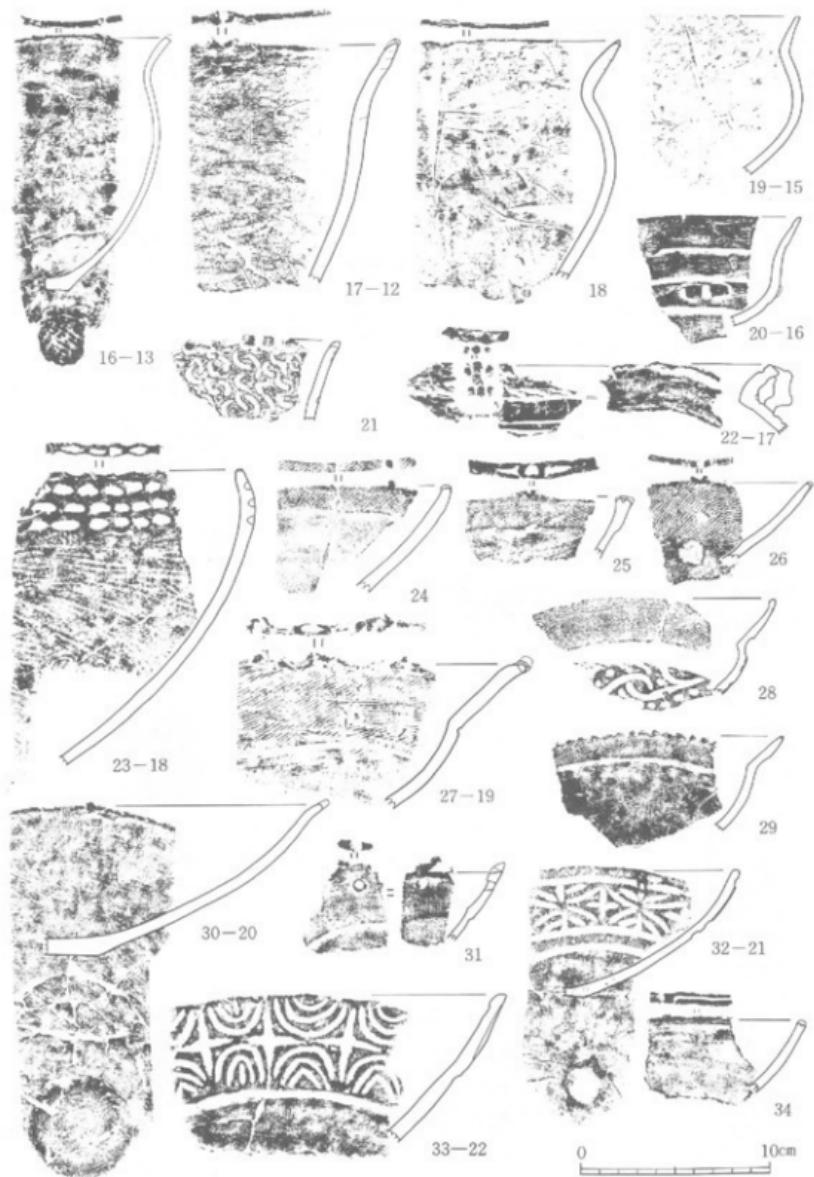


図5-98 I区中層I式土器拓影2 (S=1/2, ただし16はS=1/3)

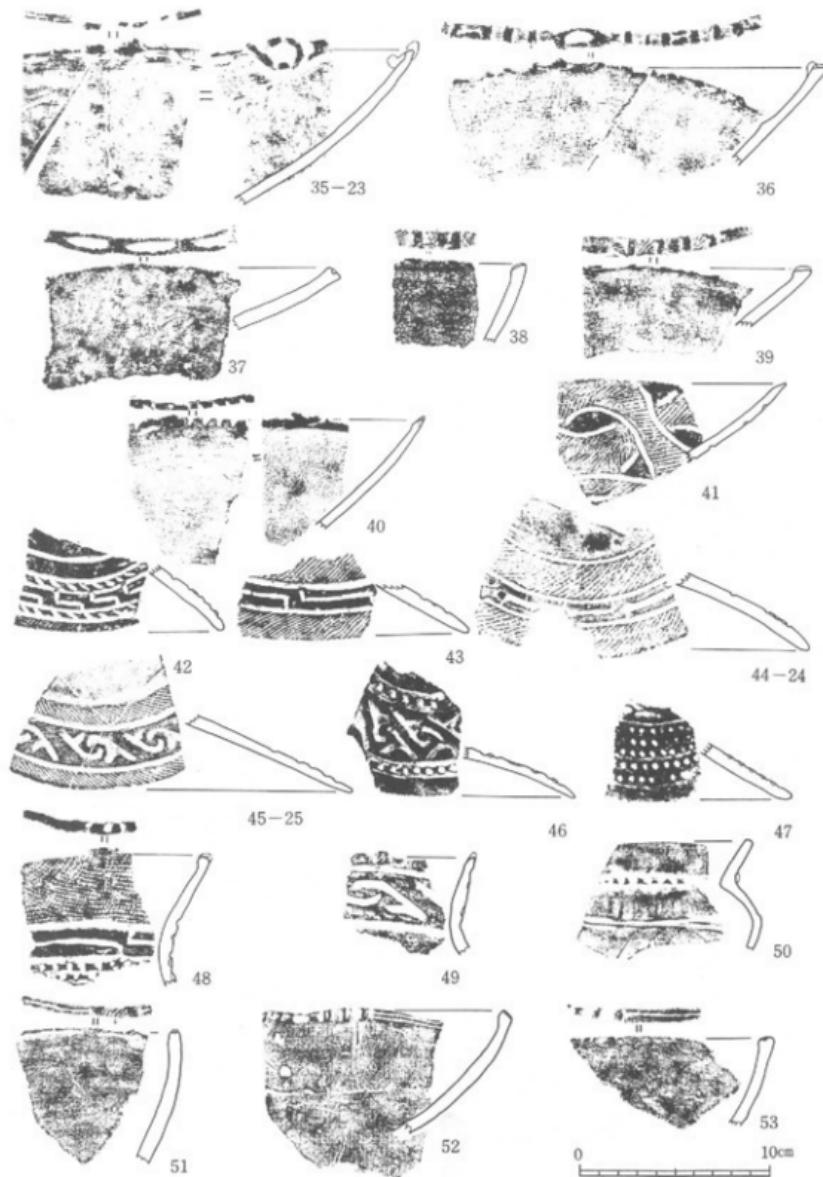


图 5-99 I · II 区中层 I 式土器拓影 3 ($S = \frac{1}{3}$)

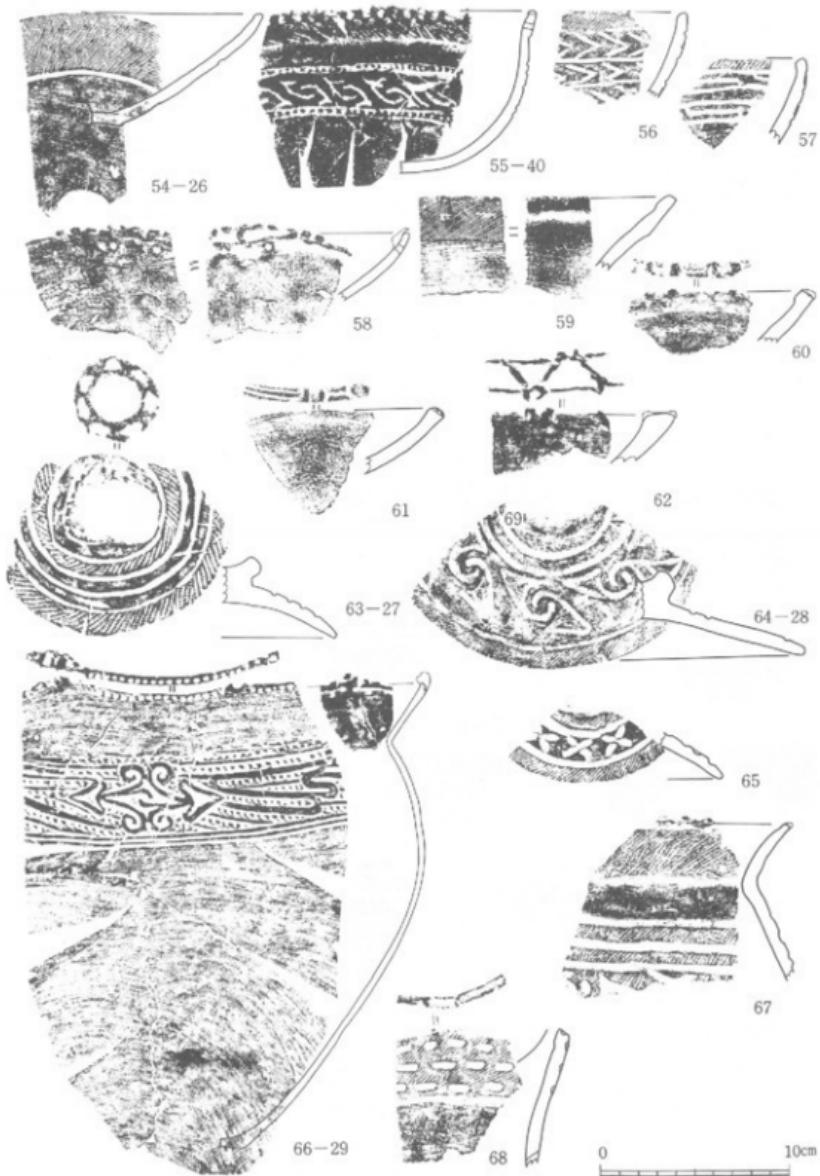


図5-100 II・III区中屋I式土器拓影 (S=↓ただし66はS=↑)

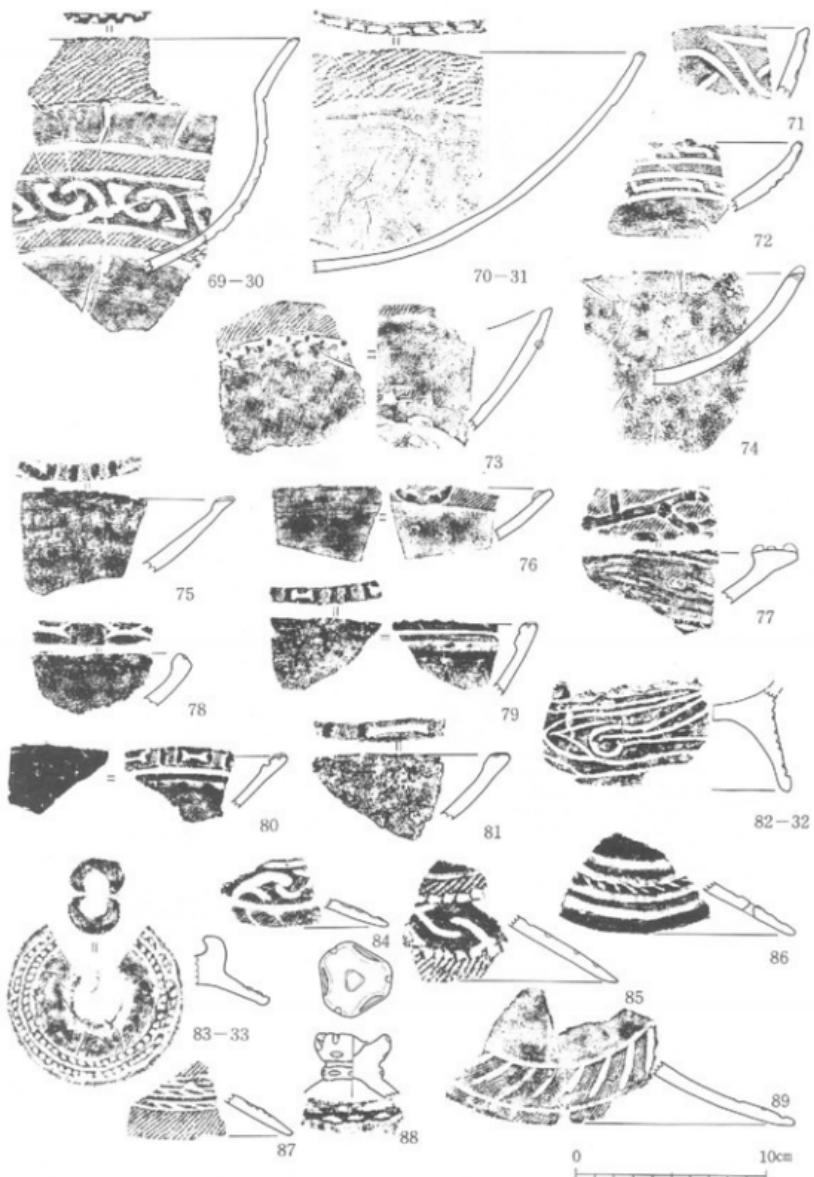


图 5-101 III区中屋 I式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

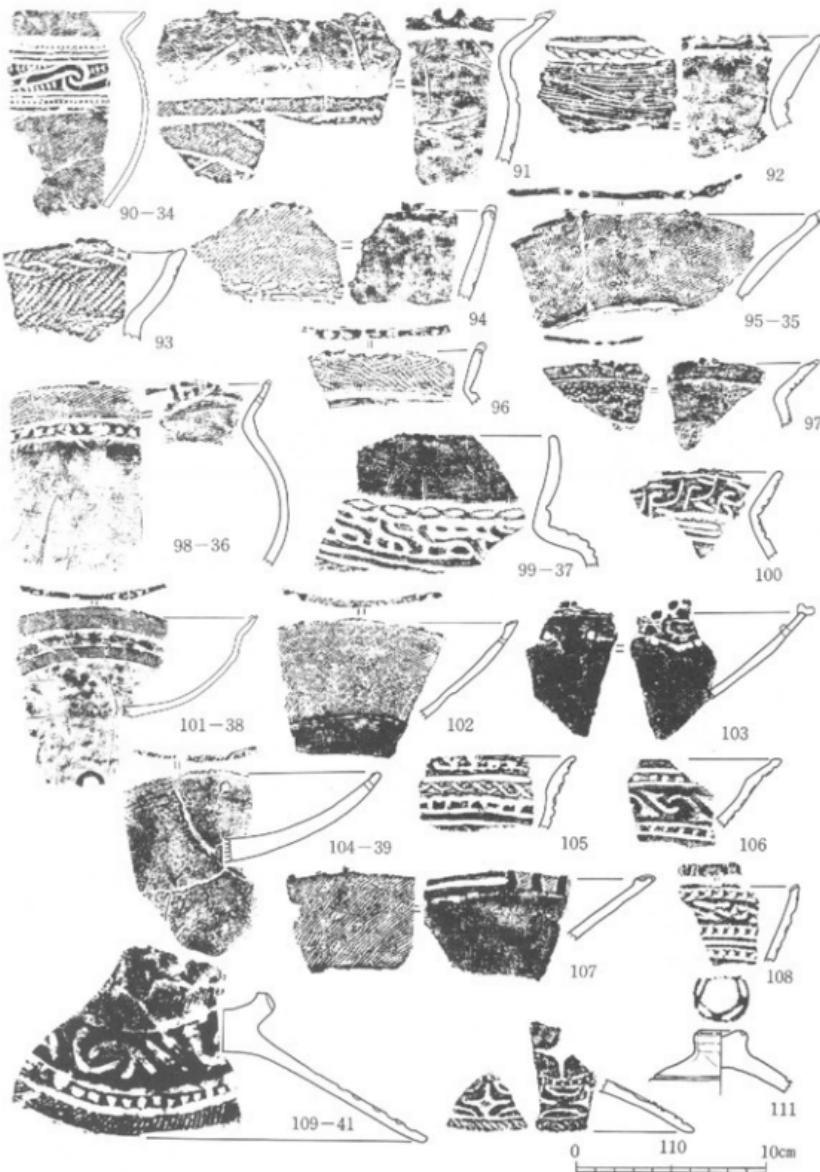


図 5-102 IV区中星 I 式土器拓影 (S = 千、ただし 90・101) は S = フ)

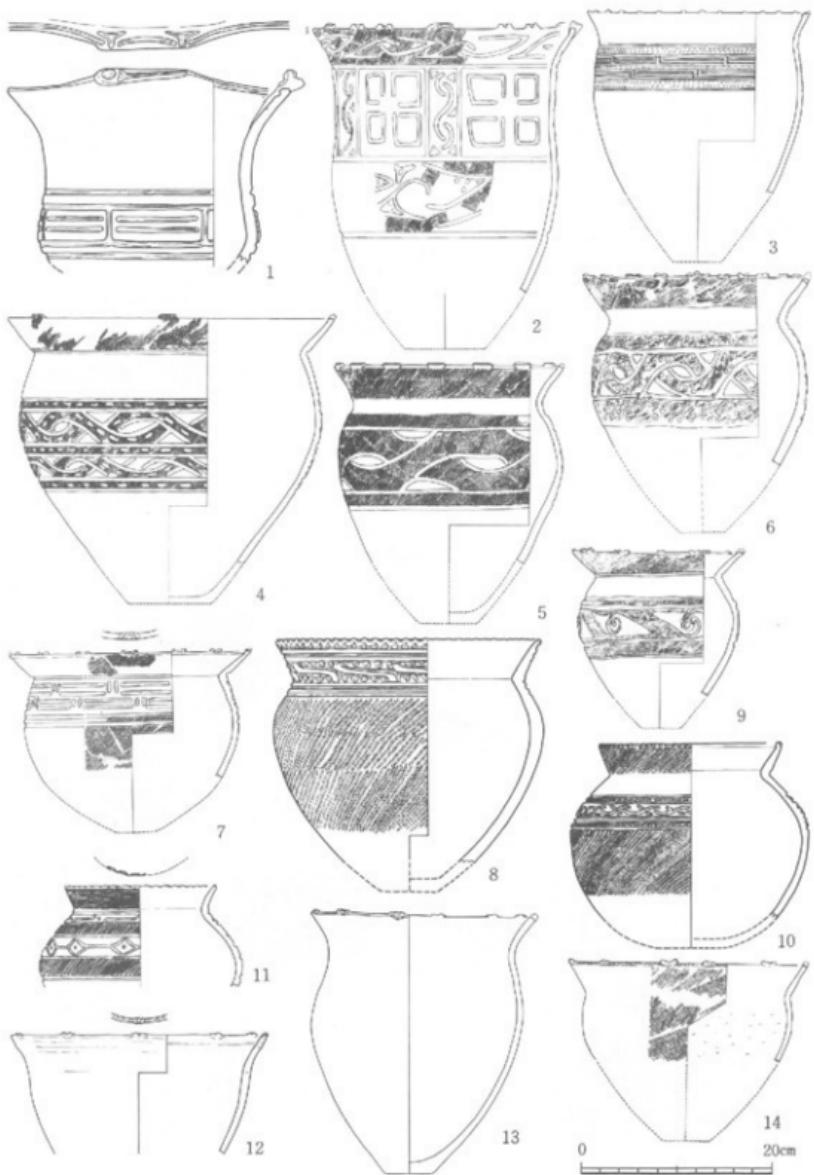


図5-103 中屋 I 式土器実測図 1 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 1・8 $S = \frac{1}{3}$)

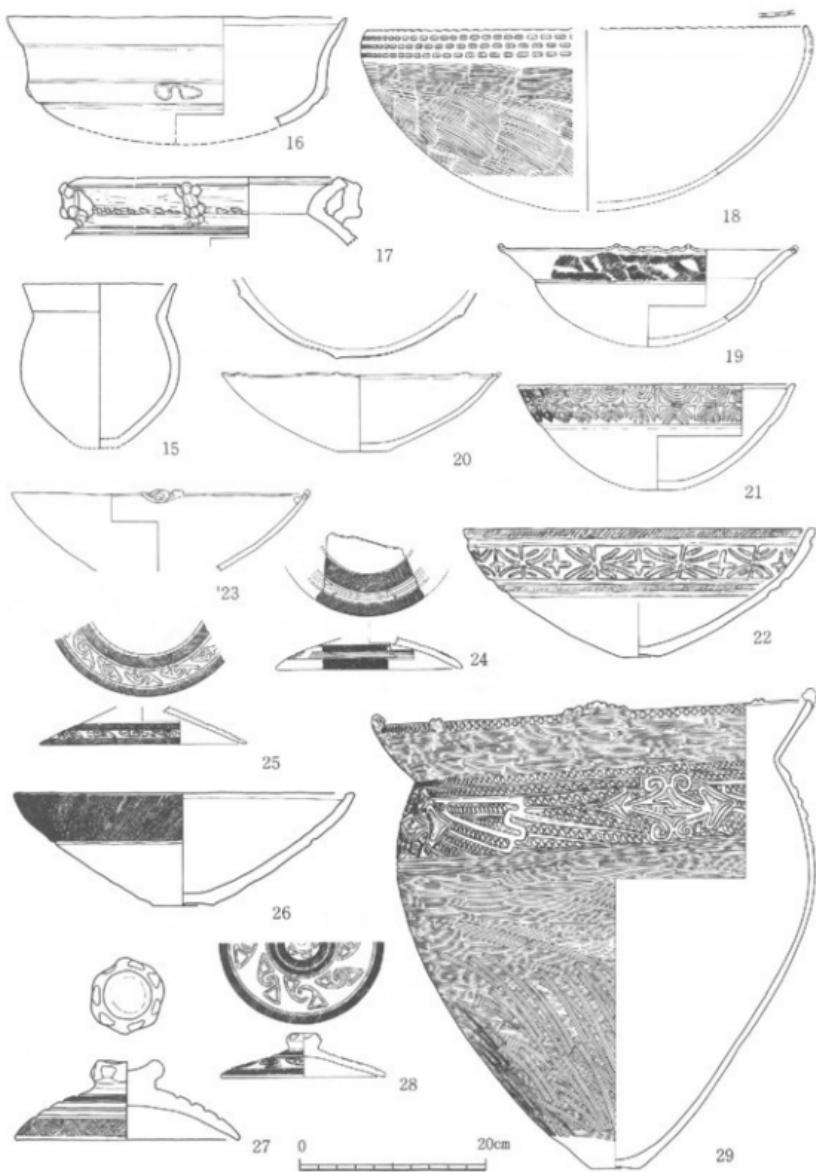


図 5-104 中屋 I 式土器実測図 2 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 15~17・22・26~27は $S = \frac{1}{3}$)

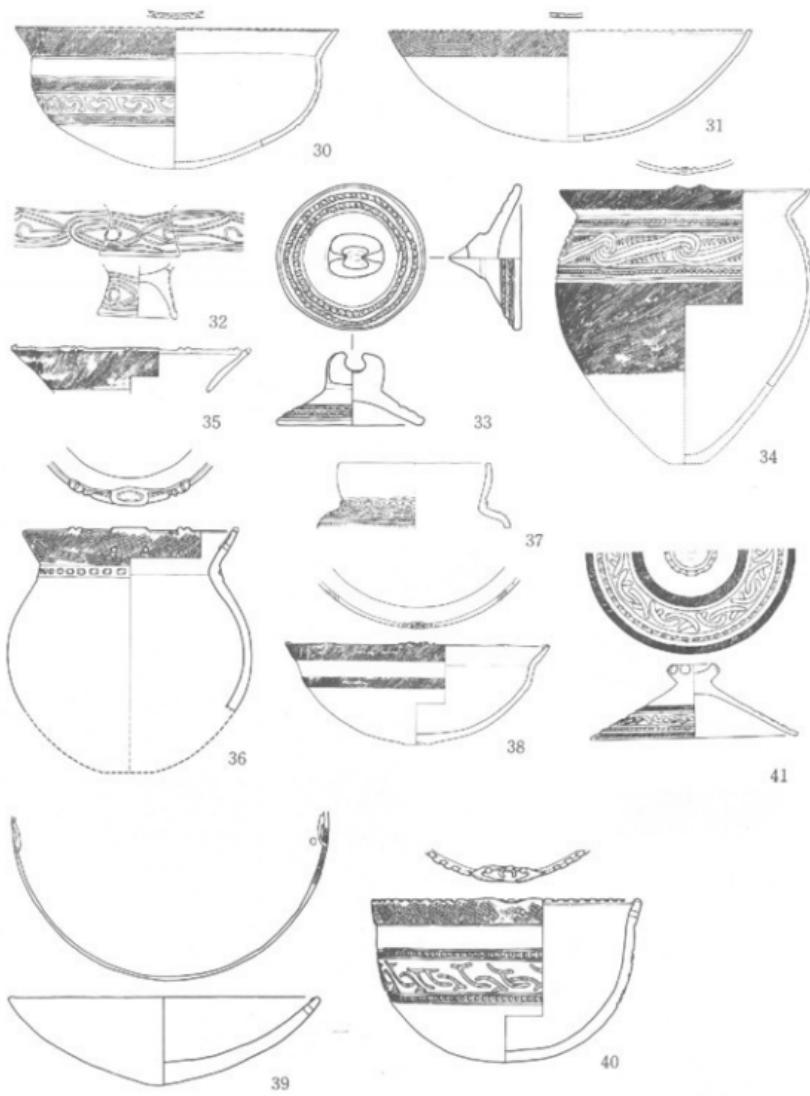


図 5-105 中屋 I 式土器実測図 3 ($S = \frac{1}{8}$ 、ただし 33・36・39~40)

(8)中屋II式土器

これまでの中屋式土器から、その後半に含められていた大洞C I式土器に併行するものを分離し、新たに中屋II式土器を設定した。既に金沢市松村遺跡で検出されていたにもかかわらず（1969年米沢）、筆者が検討を怠っていたものである。

深鉢は、中屋I式土器の器形を踏襲するが、頸部の「く」字形の屈曲の角度が強く、口縁はさらに大きく聞くものと、御経塚III式土器の系譜に連なるくびれの弱い、立上り口縁風の広口形とがあり、後者には波状口縁をなすものがある。B凸起は消滅し、口唇加飾は、楕円列点文のかわりに円形列点文や斜行刻み目文を連ねたり、あるいは小さい楔形の切り込みを交互に付けたりするなどの変化があり、装飾効果をねらったものが多い。これは、口が大きく外に聞く、広口形の器形と無関係ではあるまい。粗製深鉢は条痕文一色であるが、条痕は縱方向に施すものがみられ頭部に沈線をめぐらすものがある。*

文様は入組三叉文の場合は2段構成となるものが多く、曲線化した鍵の手文や工字文を施すものには、御経塚III式の系譜に連なる波状口縁を保っているものがある。

図5-108の37-17の口縁内湾する鉢は、口唇に羊齒状文風の沈線と列点を施し、24-11は波状口縁で鍵の手文を連ねT字形三叉文を配する。また、3-3、25-12の入組三叉文鉢は口唇の加飾に特色がみられる。

浅鉢は、内外面沈線を施した鉢と大洞C I式の模倣品、移入品を併用していることも特色で、御経塚遺跡では、外来要素をもつ客体的土器が、該期ほどかなりの比重をもった時期はないのである。図5-110の95は胎土・色調からみて東北でつくられたことが確実な唯一品である。おそらく中屋I式期の末期に搬入されたものであろう。

注口は、胴部球形の図5-109の82-29があるが、個体数は多くない。

蓋は、中屋I式期に劣らず盛行し蓋のつまみ側縁に三角形彫去を施している。

中屋II式土器は、下野式土器の標準遺跡である下野遺跡を調査した昭和35年前後から、小島俊彰氏を中心に論議され、中屋I式土器即大洞C I式という極論さえあった。その背景には永峯光一氏の…連の研究（永峯1955・1967）によって、亀ヶ岡式縄文文化の第2次伝播圏とされる地域の晩期研究が進展したことによって、第3次伝播圏とされる北陸においても少量の大洞C I土器が検出されていることから、この客体的土器に対応する土着的な大洞C I併行の土器の存在が予想されたからであると思われる。

中屋II式土器については、B凸起の消滅と口唇加飾の変化をメルクマールとし、波状・平縁の深鉢における器形の変化と、入組三叉文の組合せ、鍵の手文の変化した変形鍵の手文、工字文様技法に注目したい。粗製深鉢における縱條条痕も見逃せない特色である。

中屋II式期は亀ヶ岡式土器文化の第3次伝播圏とされる北陸—新潟県西頃域から福井県九頭竜川北岸—において、亀ヶ岡式土器の模倣品、移入品の占める比率の最も高かった時期と考えられる。その意味で晩期を通じて最も東北的な時期といえよう。しかし、一方富山県庄川流域までは粗製深鉢は条痕文土器で統一されていた。この点から石川県手取川から富山県庄川流域までを北陸中枢部というのである。

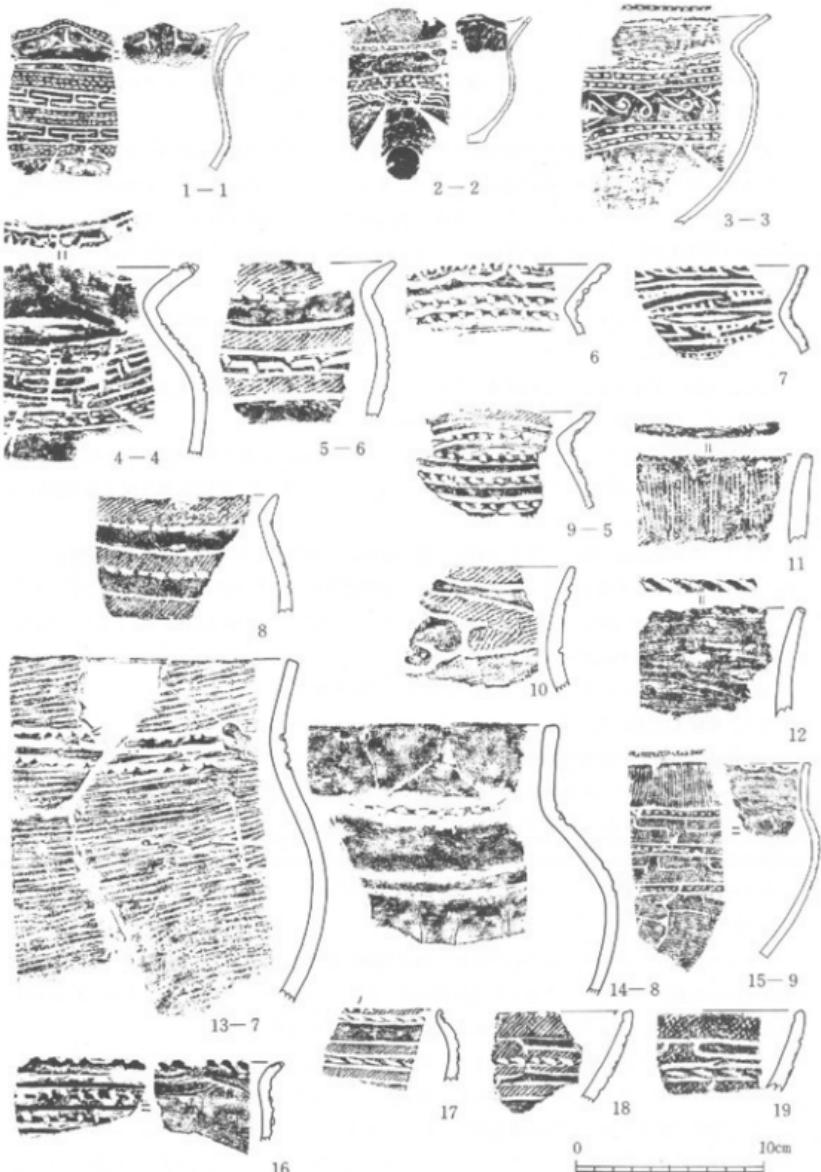


図5-106 I区中屋II式土器拓影1 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし1~3・15は $S = \frac{1}{6}$)

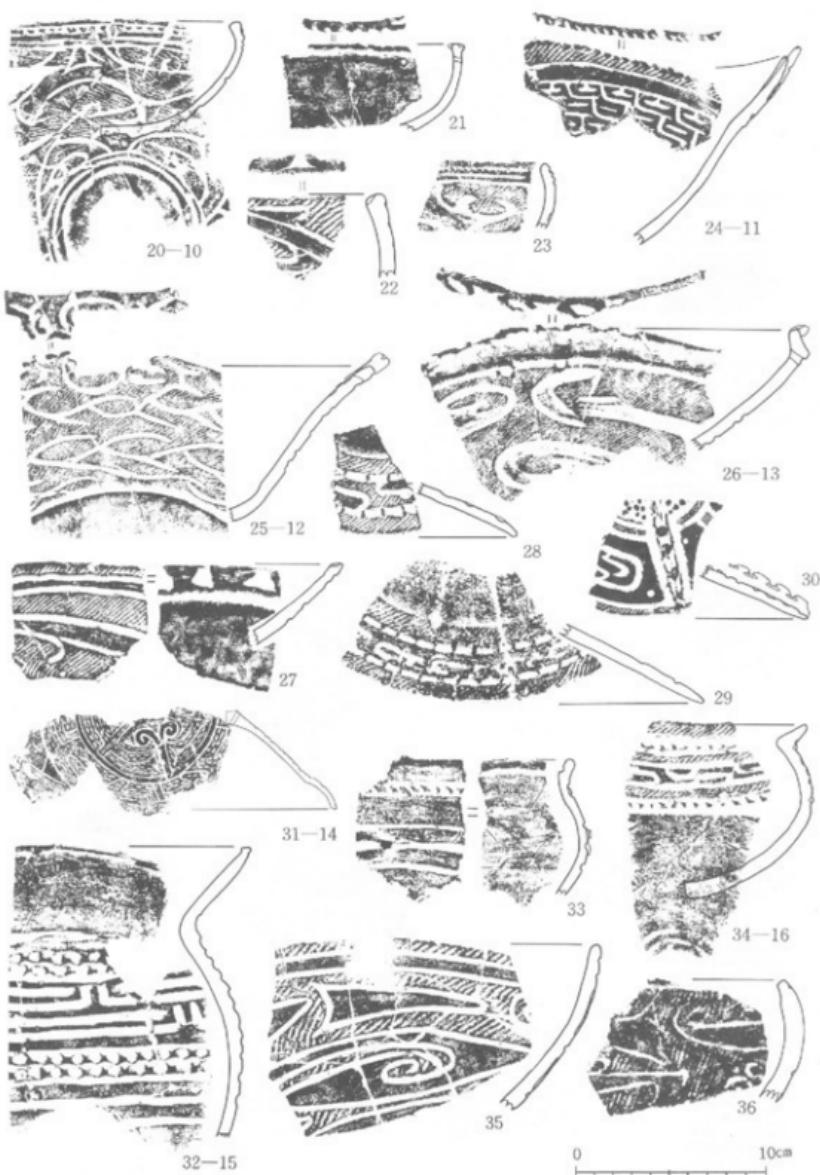


図5-107 I・II区中屋II式土器拓影2 (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし31はS = $\frac{1}{4}$)

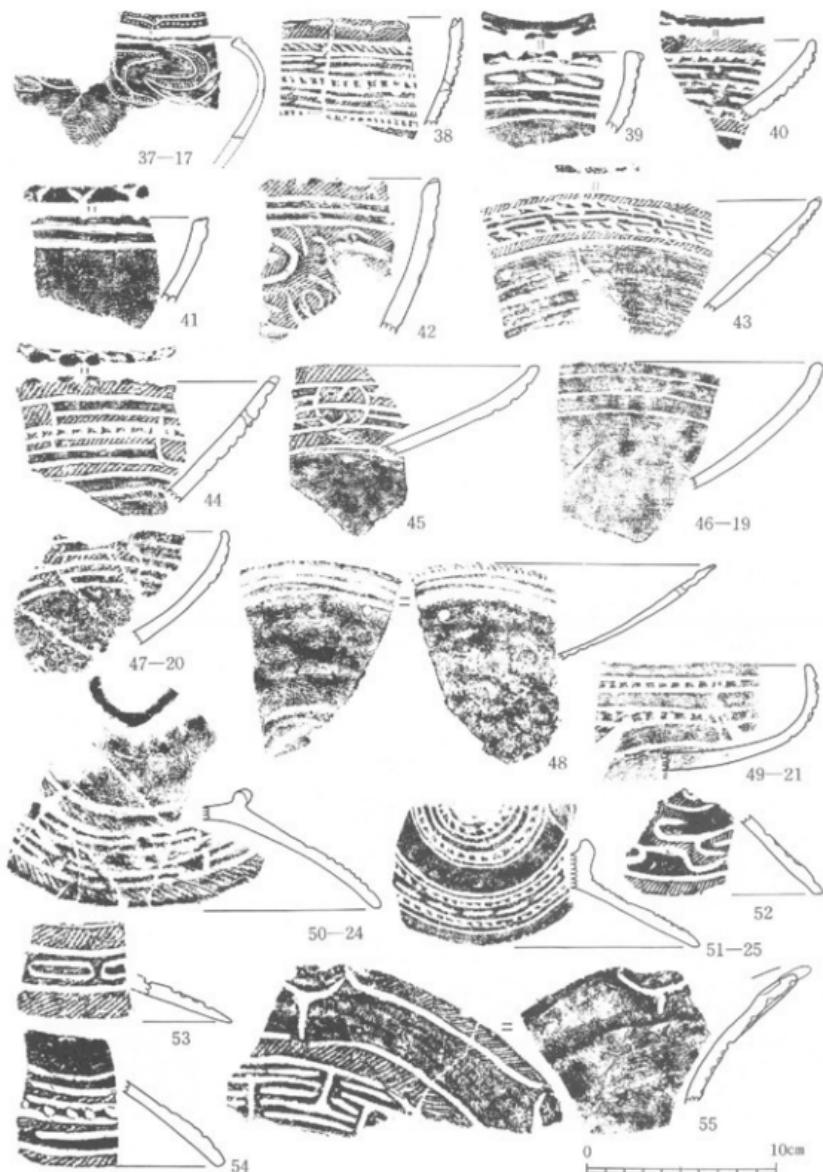


図 5-108 II区中屋II式土器拓影 ($S = \frac{1}{4}$ 、ただし 37は $S = \frac{1}{6}$)

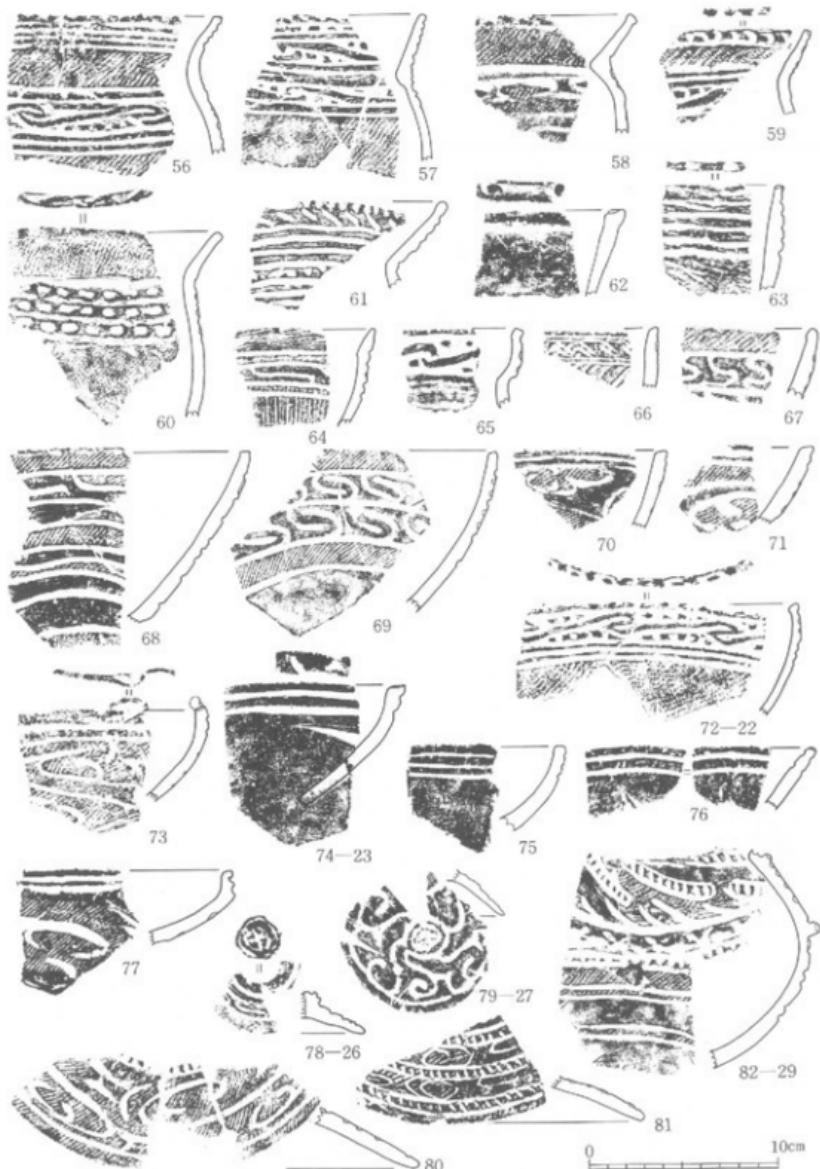


图 5-109 III区中屋II式土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$)



図5-110 IV区中層II式土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$ 、ただし99は $S = \frac{1}{6}$)

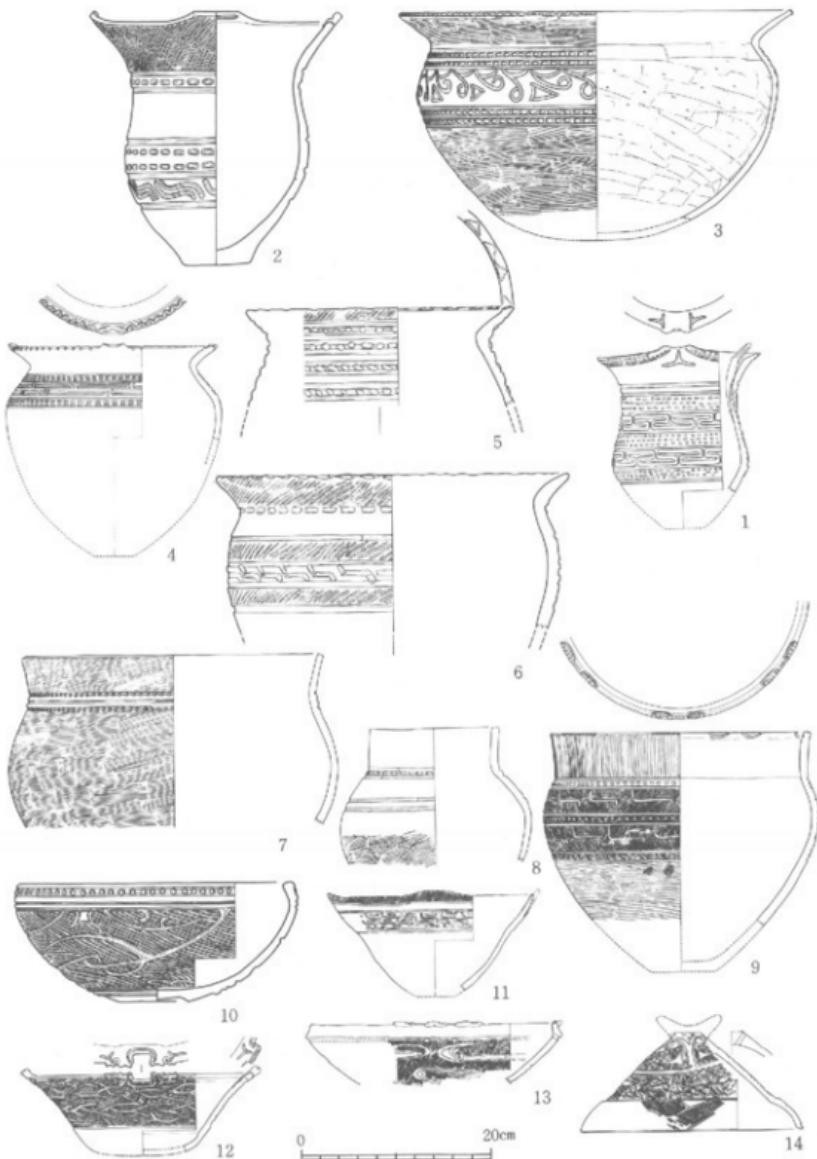


図5-111 中屋II式土器実測図1 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし2・5・6・10は $S = \frac{1}{3}$)

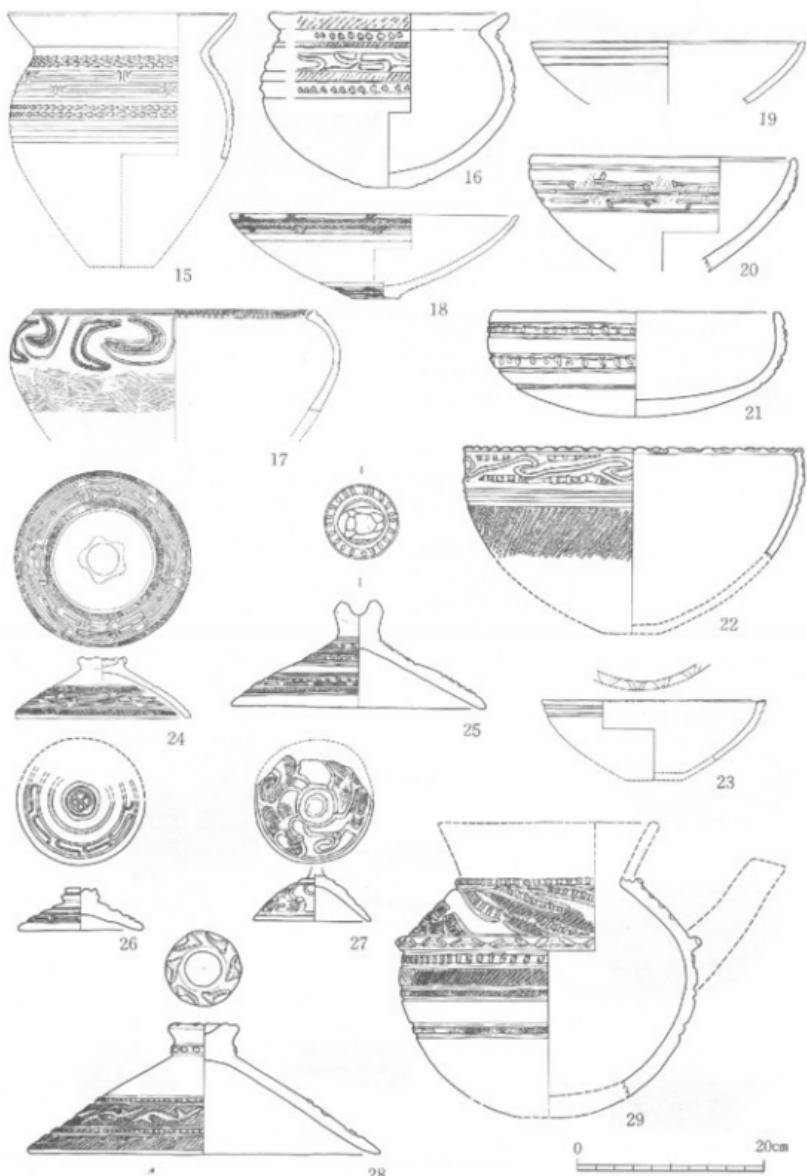


図 5-112 中屋II式土器実測図2 ($S = \frac{1}{6}$ 、ただし16・20~22・25~29は $S = \frac{1}{3}$)

(9) 下野式土器

下野式土器は、吉岡康暢氏によって設定されたもので（吉岡1974）、富山考古学会の酒井重洋氏によって組成内容がさらに深められ（酒井1976）。現在、北陸の大洞C2式から大洞A式前半の土器型式として不動の位置を確立している。

深鉢は、あまり張りのない胴から少しくびれ、緩く「く」字状に開く器形で、口縁は立上り気味となる。頸部をめぐる沈線間に押引列点文を施す半精製の類（図5-114の32-7）と、図5-113の1-1の如き精製土器とに分かれ、人形土器が少なくない。後者にはS字状文が施文されている。口縁に横描押引文を施した隆帯をめぐらす図5-114の40-8の如き関西系土器もみられる。深鉢の多くは大・中・小形にわかれれる条痕文深鉢である。斜行・横走の数も少なくないが、縱方向のものが目立つ。口唇は素文のままのものと、斜方向の刻み目を加えるもの及び彫状具とみられる施文具で彫齒文を連ねるものがある。

壺には横円区画文の図5-115の151-11があり、鉢には口唇に繩文を施し孤文と弧線文と変形鍵の手文の組合せによるS字状文を施文する図5-115の64-17の如きものや、工字文を施した図5-113の15-3などがある。

浅鉢は椀形状を呈し、工字文を施したもの、内外面に沈線をめぐらしたものなどがあるが、特に眼鏡状降帶文は主文様となり、S字状文などと組合わさせて盛行する。

蓋は30-6のような中屋II式期に近いものが残る。29-5は方形を呈し大洞C2式併行段階まで下降するものと考えられる。本遺跡出土の蓋の中で異形をなす唯一品である。

下野式土器は、中屋II式土器とは、かなりの確度をもって弁別できるが、これを大洞C2式とA式に分離するまでに至っていない。石川県では松任市長竹遺跡出土土器は下野式土器の後半にあたることは確実であるから、両者が分離されて下野式、長竹式が設定されるのは、そう遠いことではあるまい。今のところ石川県では網状浮線文土器は発見されていないし、関西とは前期凸帯文土器とをもって袂別するようである。

条痕文土器は御経塚III式以降、粗製深鉢の主体となる。中屋式土器には口唇部にヘラまたは指圧による割め目を加えたものが非常に多いことに最初に注目したのは沼田啓太郎氏である。氏は口唇施文を直上より施したもの、外面から斜めあるいは直角に施したもの、内外面から三角形に割りとったものに分類した（沼田1956）。

これらの口唇施文は、おおまかにいって御経塚III式から中屋I式は横円列点文であり、中屋I式の後半に円形列点文が加わる。刻み目・斜行刻み目文や三角形割りとりは中屋II式期に列点文にとってかかる。下野式期には横描き文が加わることは前述した。器形についても先述した如くであるが、条痕文の方向については中屋II式期から縱方向にひきおろすものが目立ってくることを指摘できるぐらいで、施文具や施文手法による時期毎の特徴を明らかにすることは、研究不足のために論述できないのを遺憾とする。

無文土器は量的に多い。深鉢は後期にかなり用いられているが晩期には必ずしも多いとはいえないようである。むしろ晩期には無文浅鉢が量的にかなりの分量を占めるが、これについても今後の研究の進展に期待することにしたい。

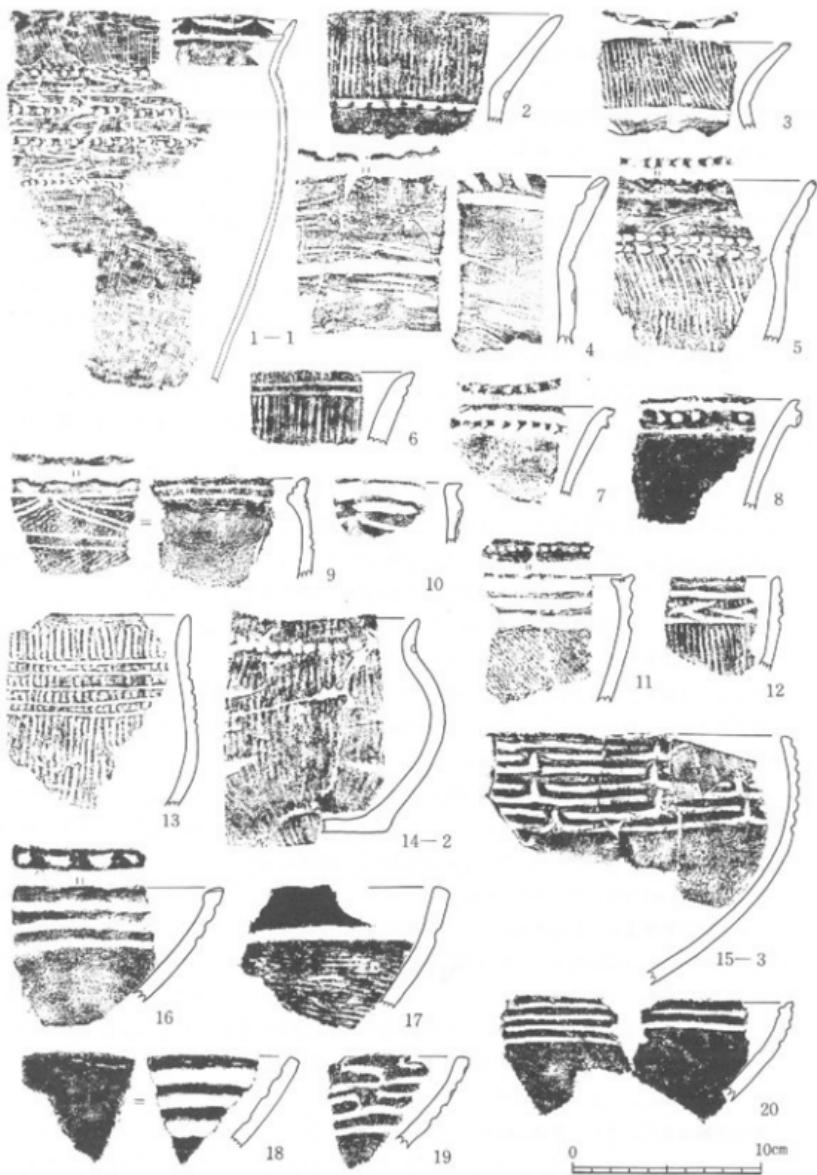


図5-113 I区下野式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし1は $S = \frac{1}{4}$)



図 5-114 I・II区下野式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

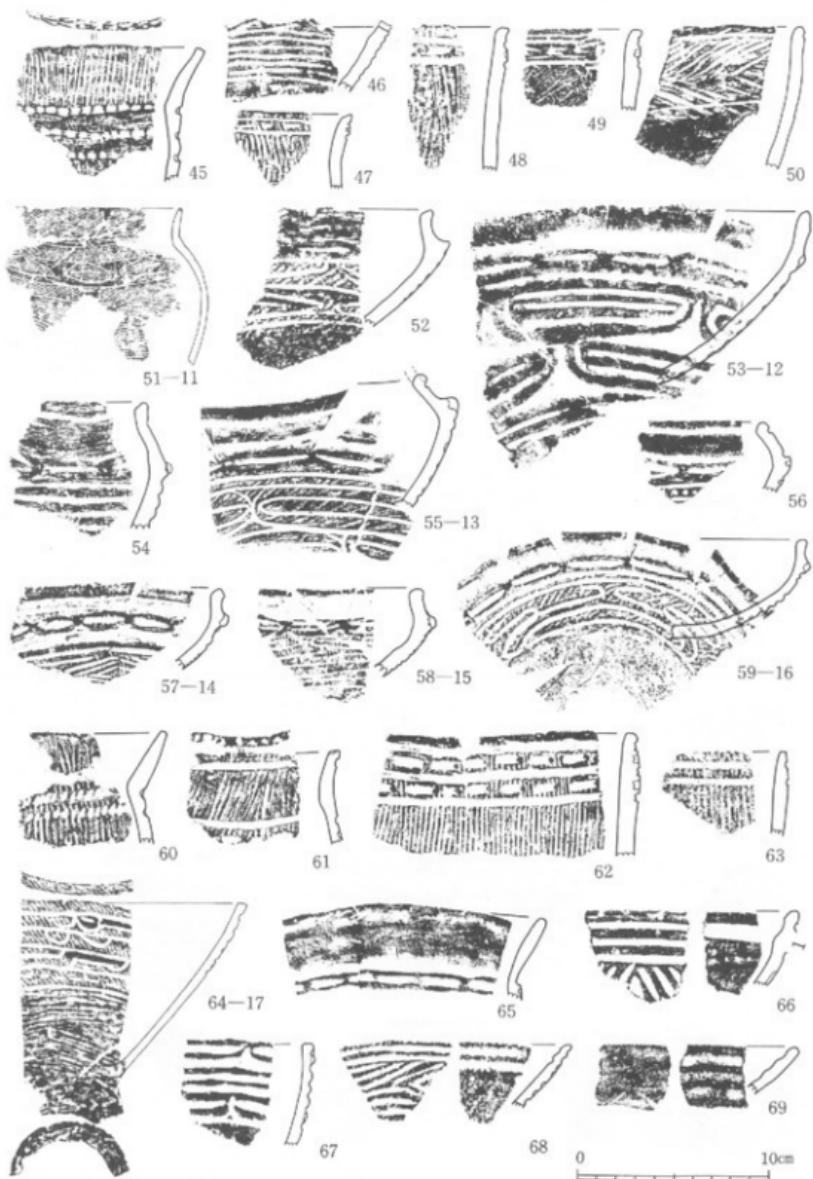


図 5-115 III・IV区下野式土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 51・64 は $S = \frac{1}{3}$)

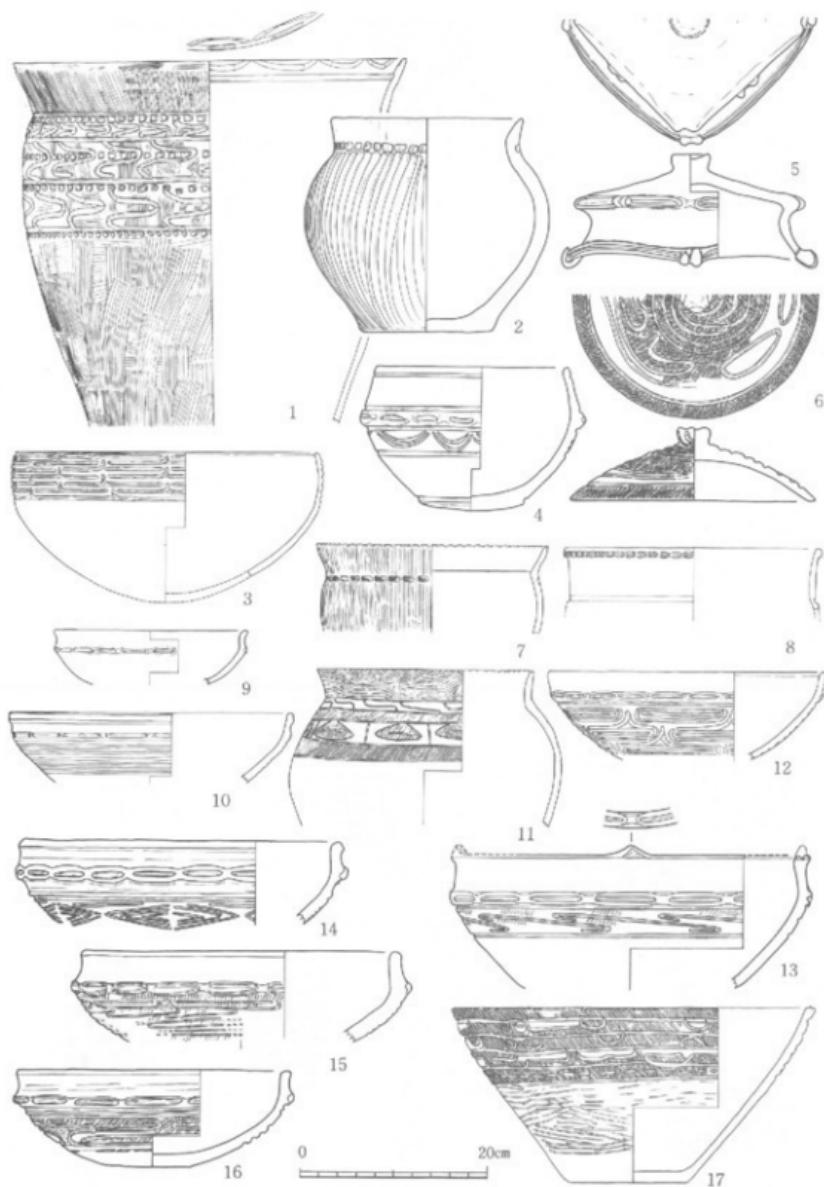


図 5-116 下野式土器実測図 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 2・4~6・13~16は $S = \frac{1}{3}$)

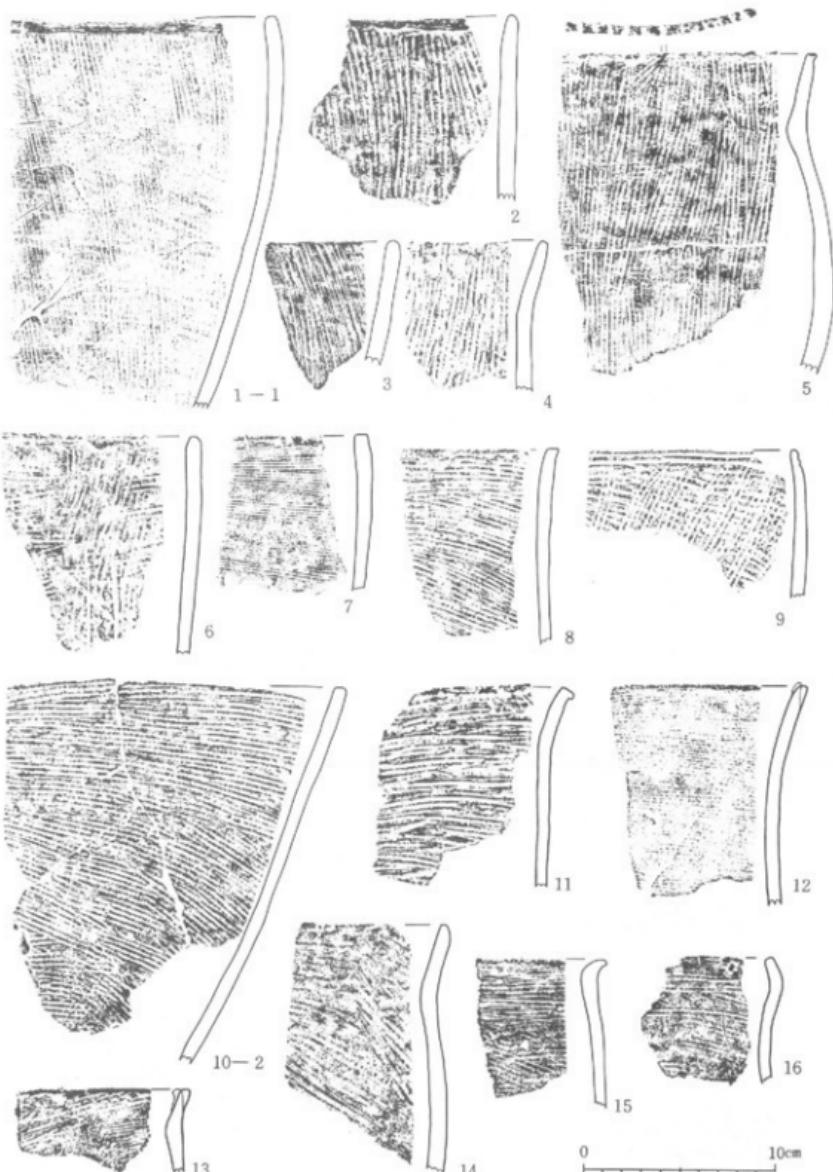


图 5-117 I 区条痕文土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

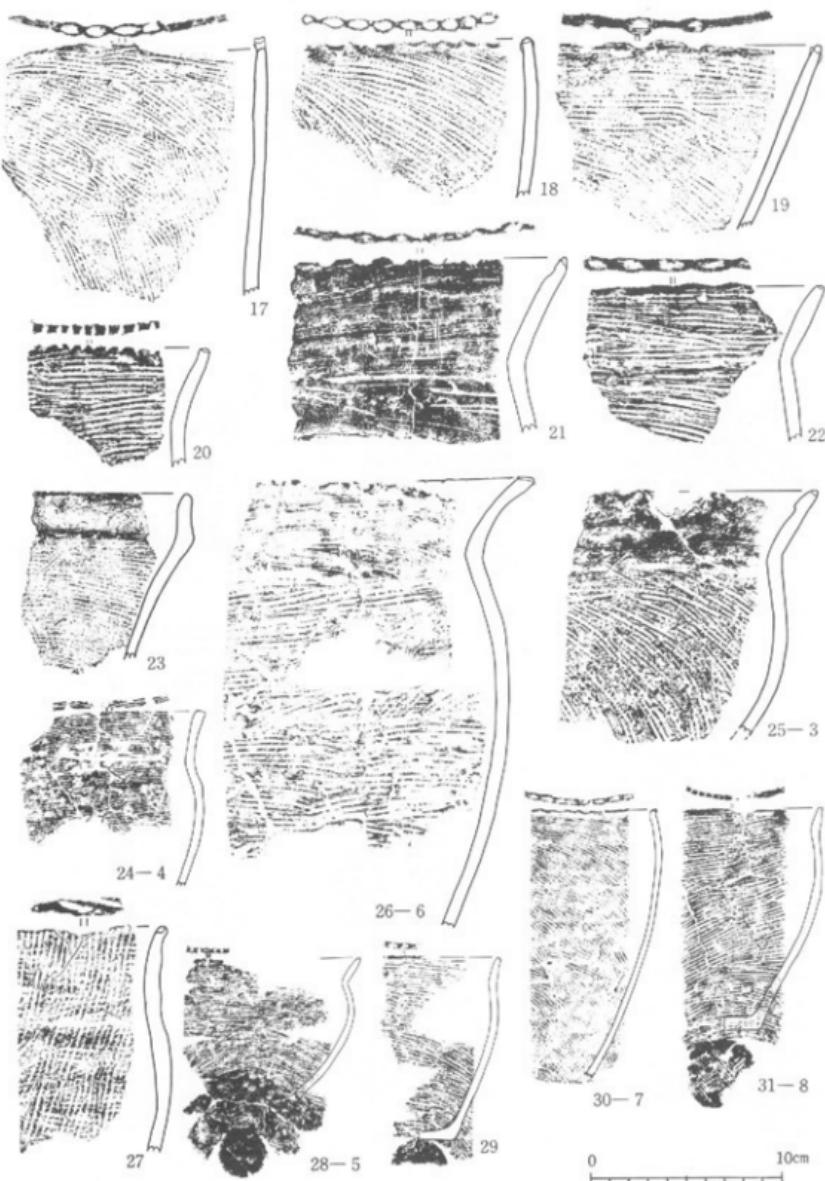


図5-118 I・II区条痕文土器拓影 (S = $\frac{1}{2}$ 、ただし24・28-31はS = $\frac{1}{4}$)

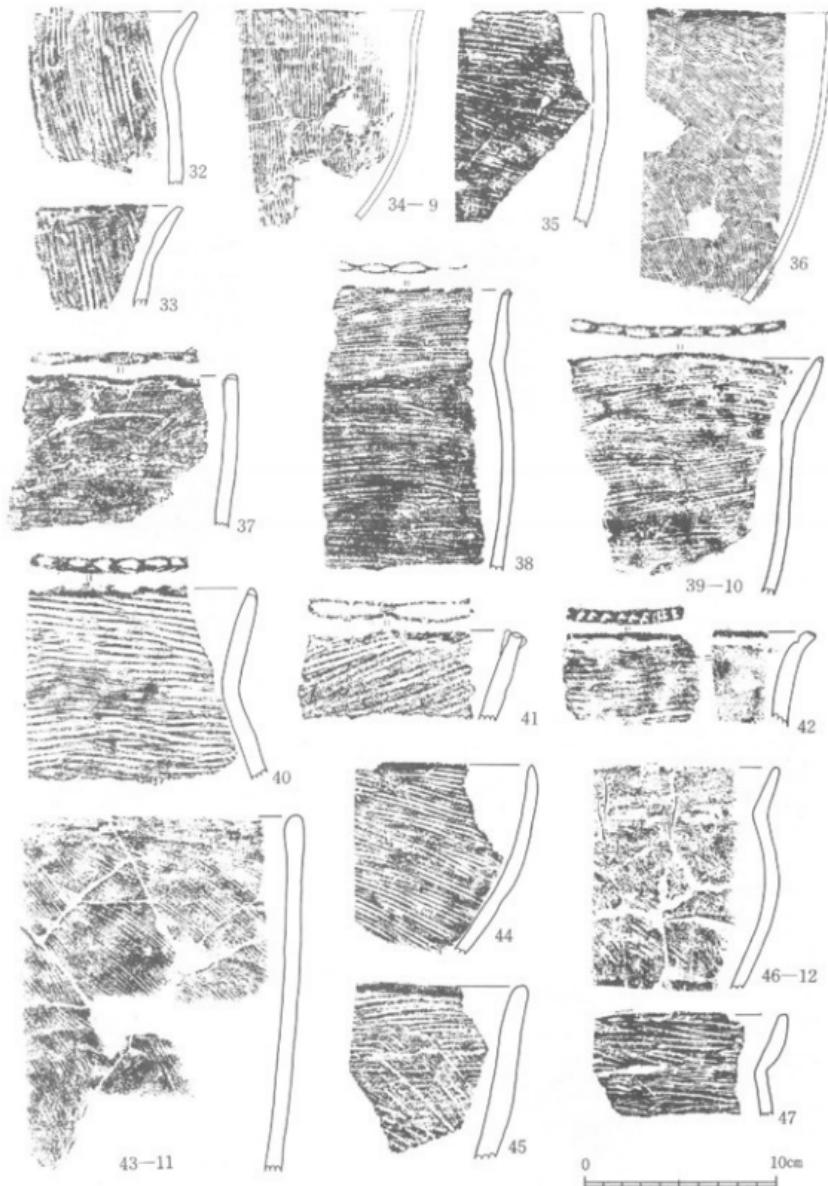


図 5-119 II・III区条痕文土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 34・36は $\frac{1}{4}$)

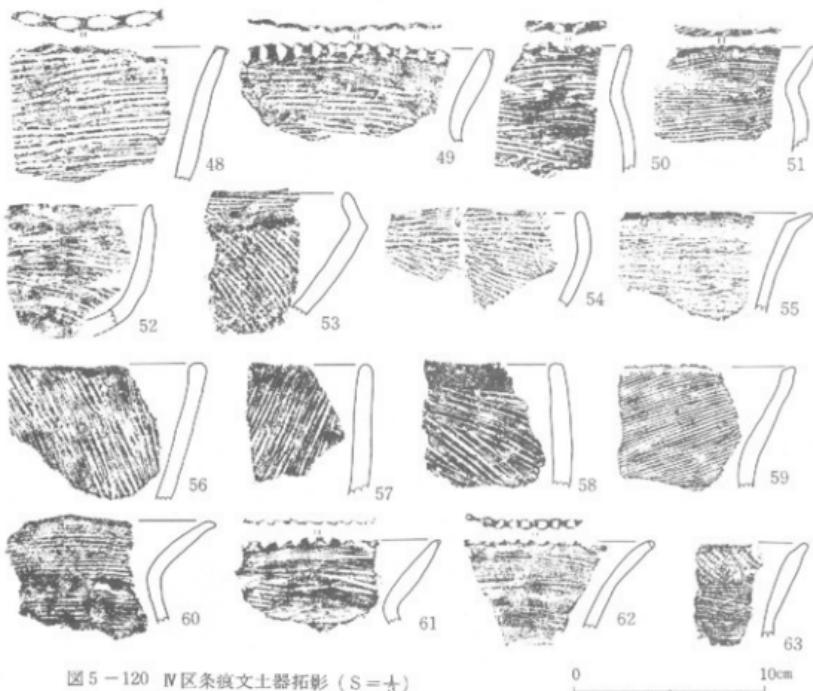


図 5-120 IV区条痕文土器拓影 ($S = \frac{1}{3}$)

0 10cm

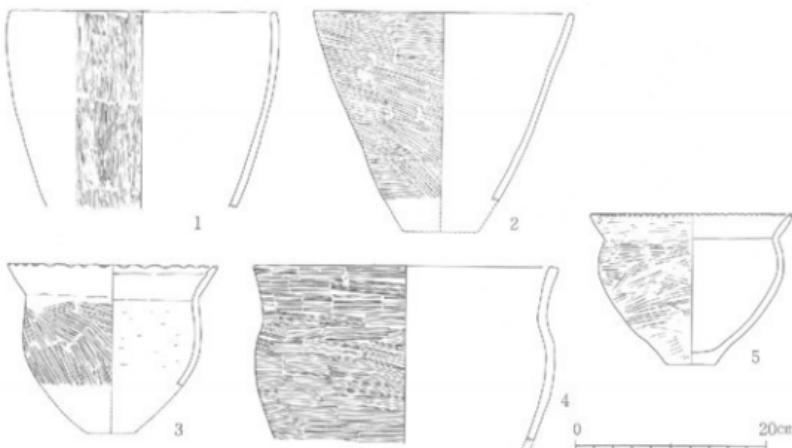


図 5-121 条痕文土器実測図 1 ($S = \frac{1}{3}$)

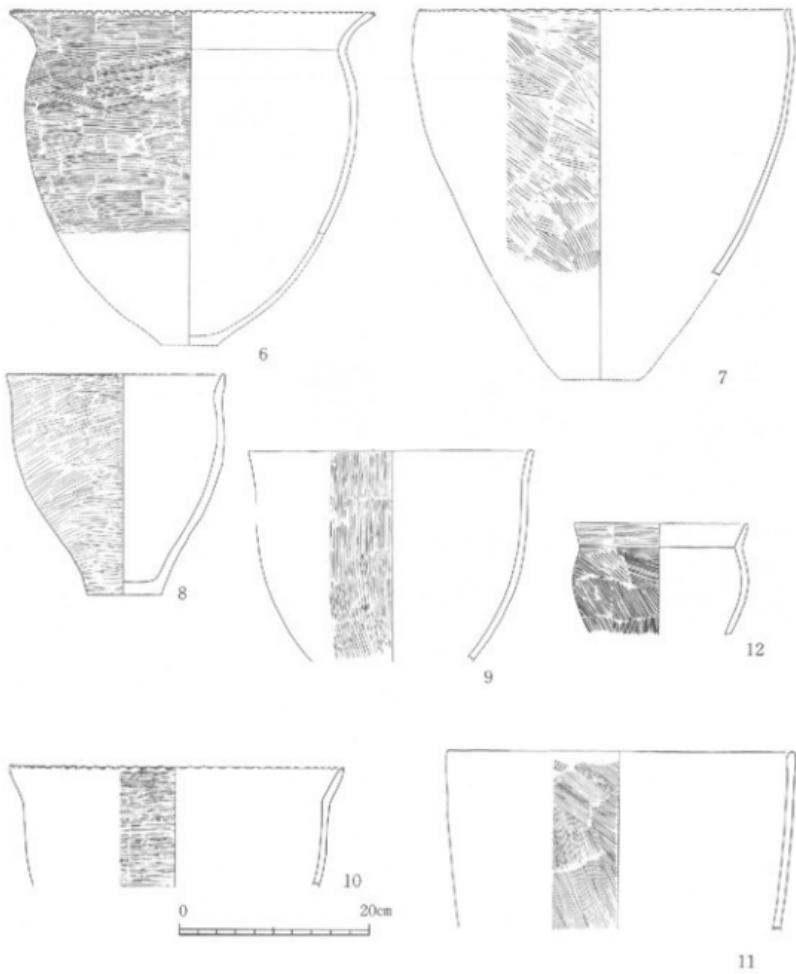


図 5-122 条痕土器実測図 2 ($S = \frac{1}{8}$)

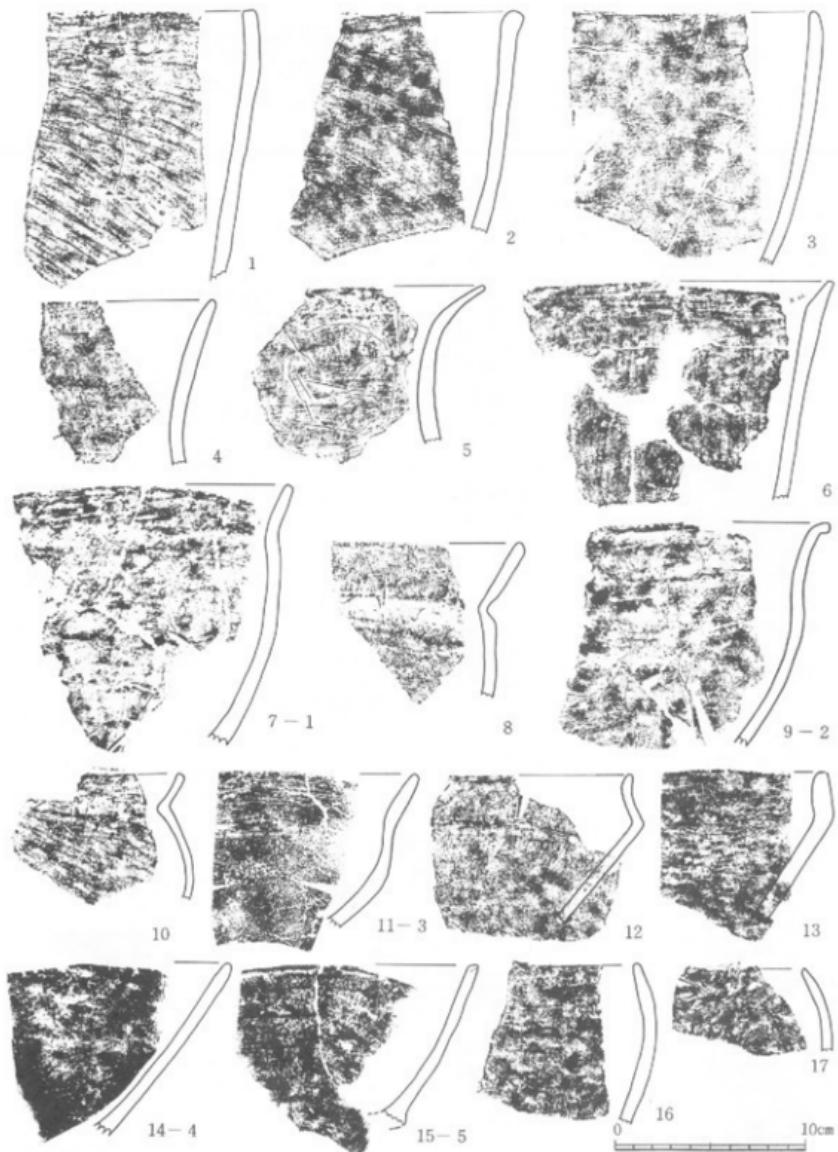


図 5-123 I 区無文土器拓影 1 ($S = \frac{1}{2}$)

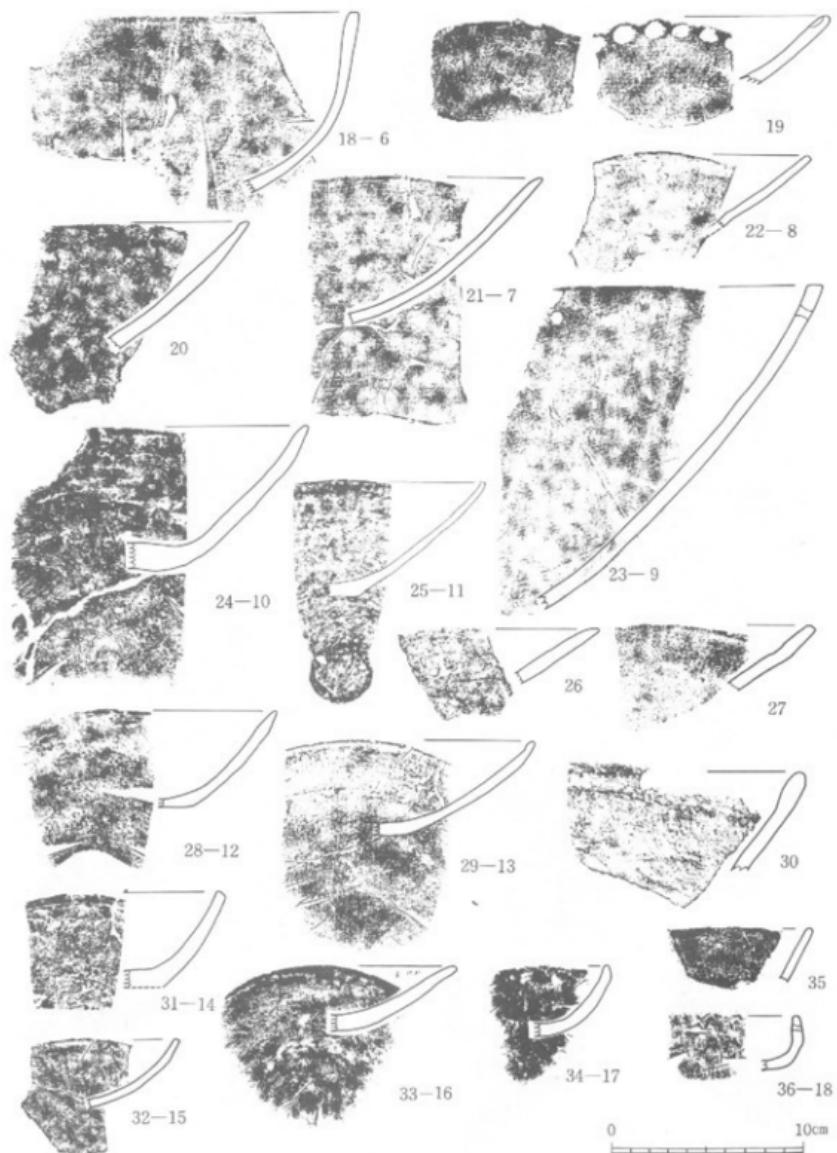


図5-124 I区無文土器拓影2 ($S = \frac{1}{2}$ ただし25は $S = \frac{1}{6}$)

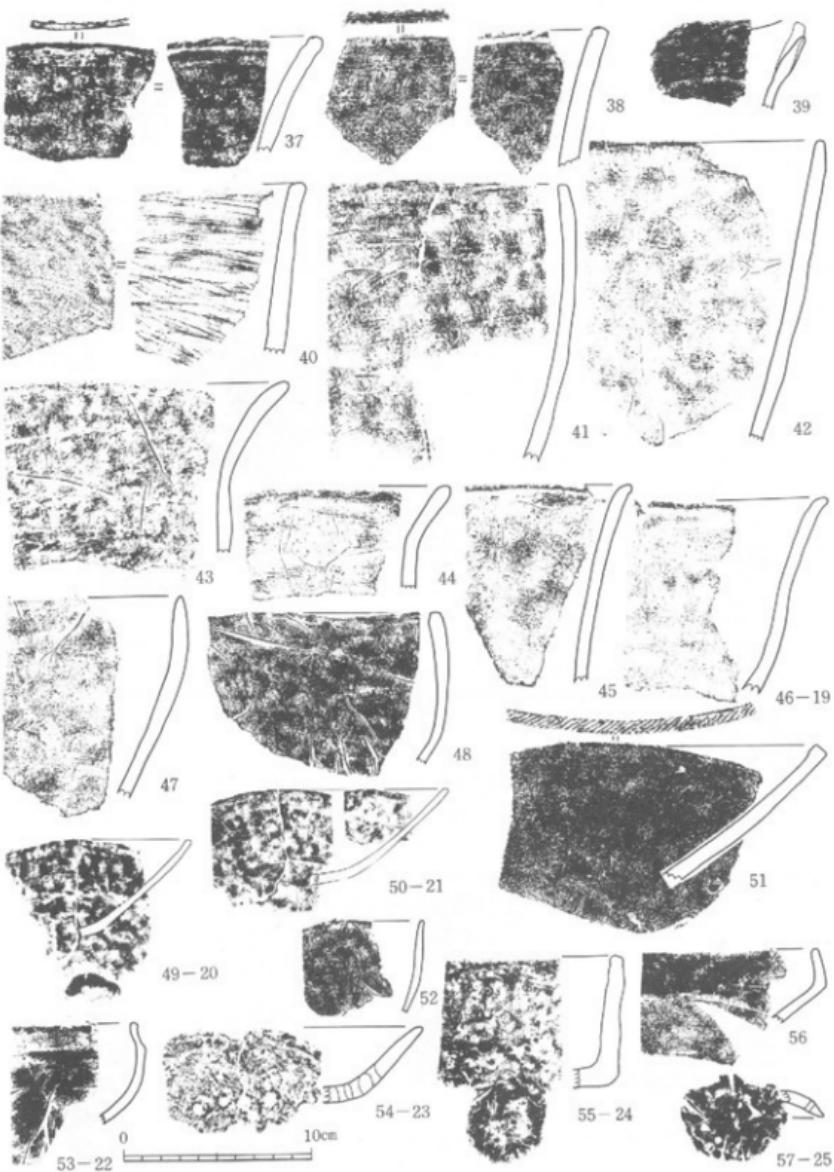


図 5-125 II区無文土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし49・50は $S = \frac{1}{6}$)

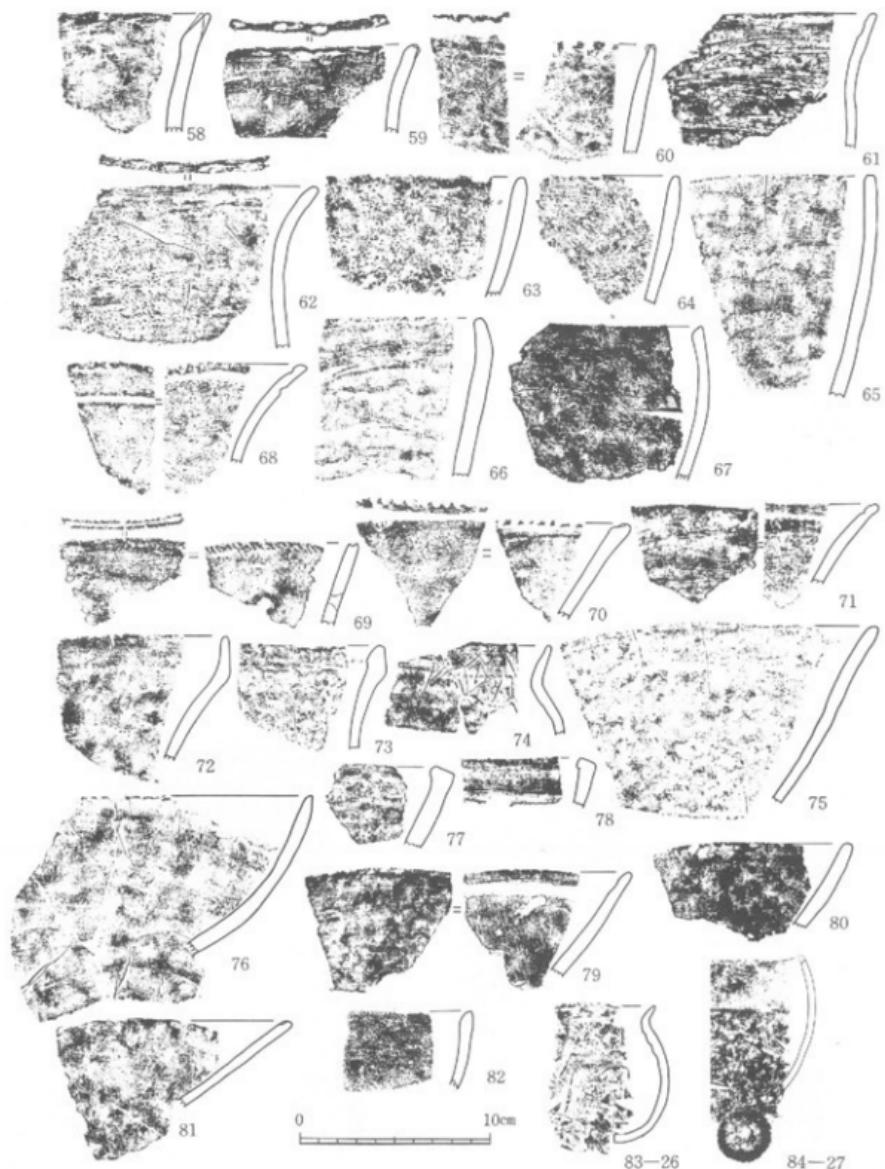


图 5-126 III区无文土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

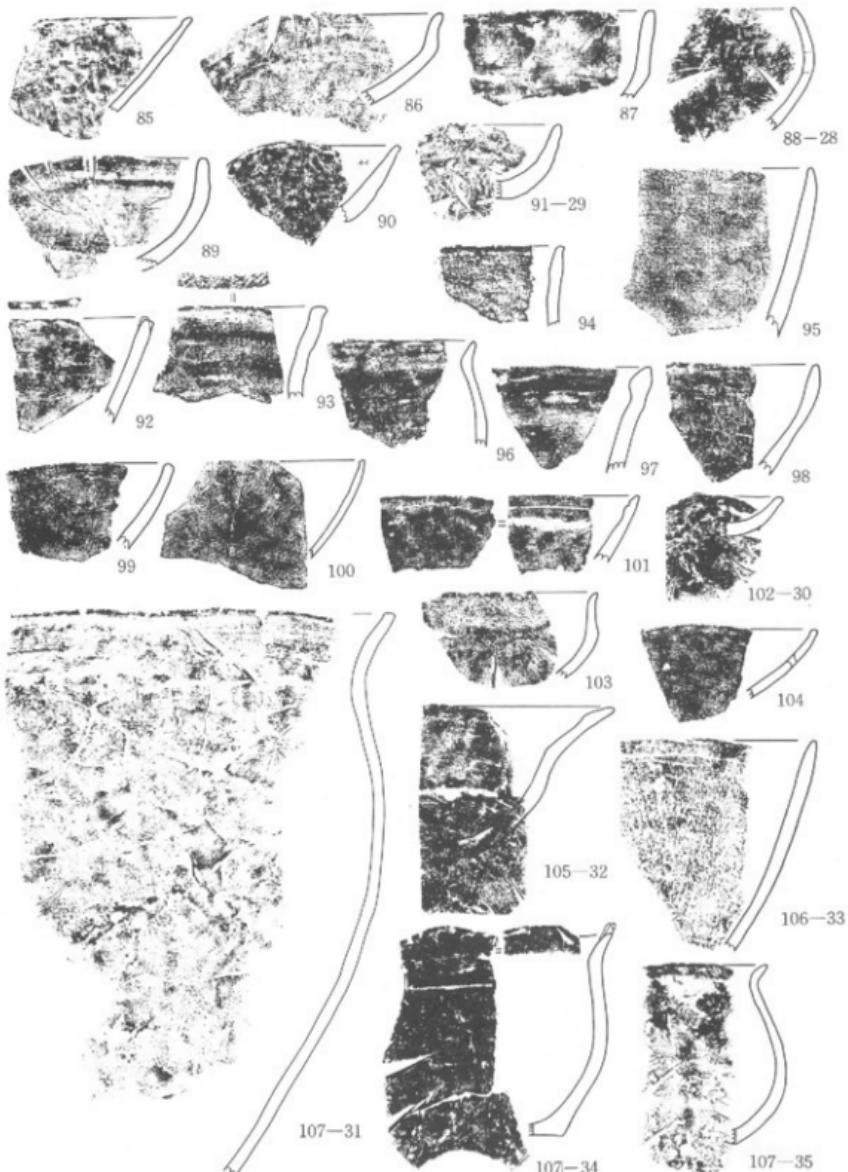


図 5-127 III・IV区無文土器拓影 ($S = \frac{1}{2}$)

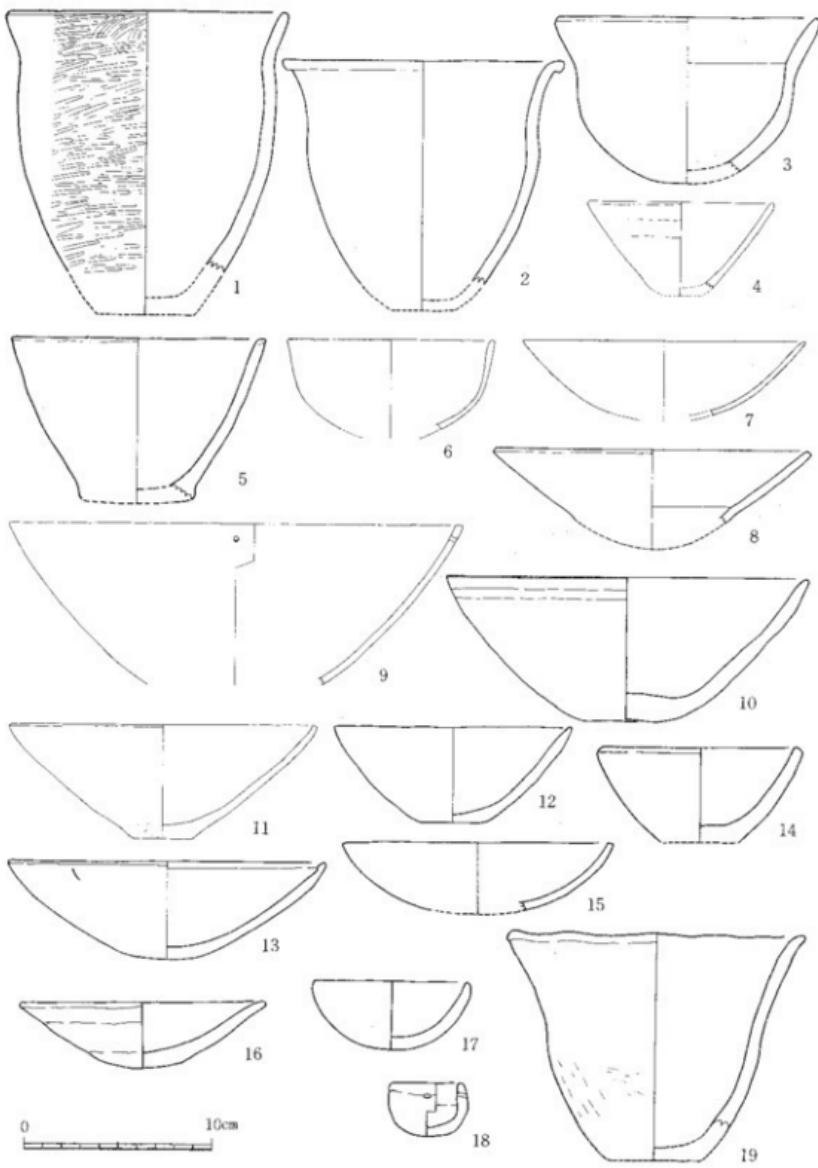


図 5-128 無文土器実測図 1 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし 4・6・7・9・11・は $S = \frac{1}{4}$)

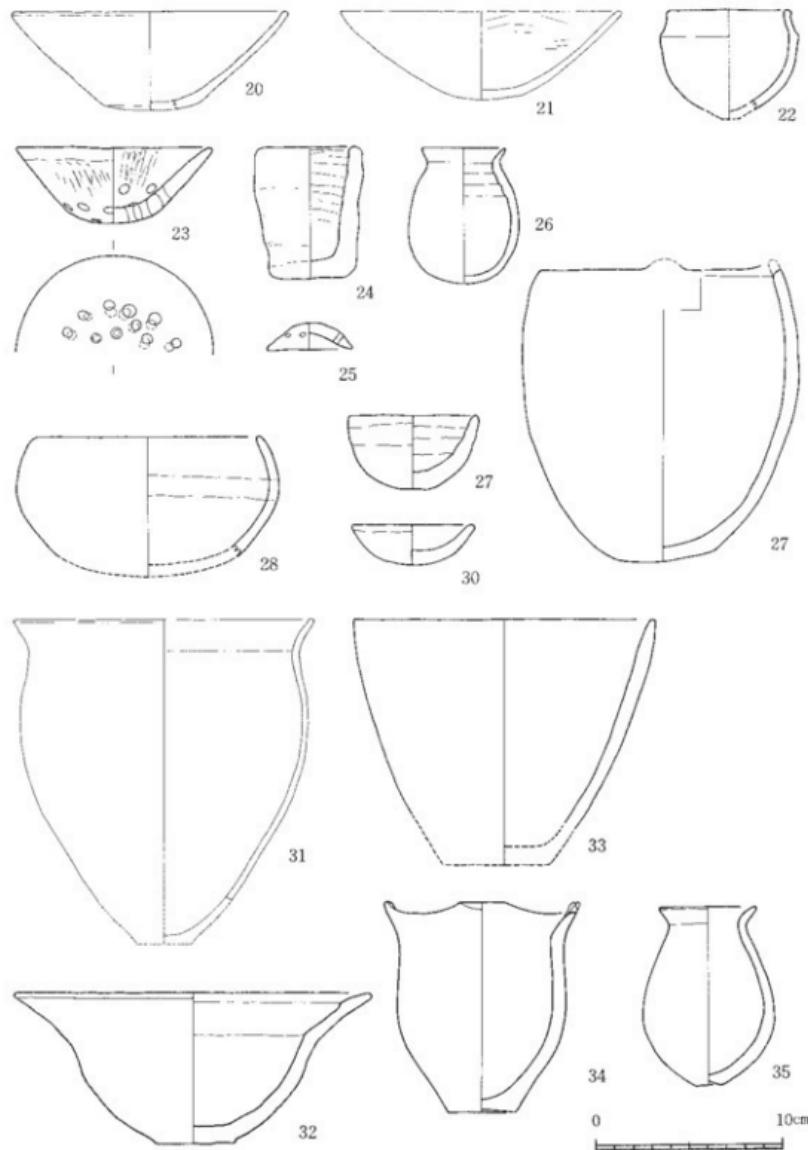


図5-129 無文土器実測図2 ($S = \frac{1}{2}$ 、ただし20~21・31は $S = \frac{1}{4}$)

参考文献

- 麻生 優・市原寿文、1961：『西貝塚』
——、1962：「土器」「縄塚遺跡・總括篇」
泉 拓良、1979：「西日本の縄文土器」「世界陶磁全集1—日本原始—」
市原寿文、1960：『清水大王山遺跡』
紅村 弘・増子康真、1978：『東海先史文化の諸段階資料編II』
小島俊彰、1966：「東筋波郡井口遺跡出土遺物の紹介」「大境」第2号。
——、1979：『滑川市史考古資料編』
小林達雄、1977：「土器の変遷」「日本原始美術大系1—縄文土器—」
酒井重洋、1976：「上市町脇目新丸山4遺跡」「大境」第6号。
永峯光一、1955：「千曲川沿岸に於ける晩期縄文式土器について」「石器時代」1。
——、1967『佐野』
——、1981：「縄文晚期の土器—中部・北陸地方—」「縄文土器大成4—晩期—」
高橋勝喜、1964：「金沢市近郊八日市新保遺跡並びに御経塚遺跡の調査」「石川県押野村史」
——、1965：「縄文文化的発展と地域性—北陸—」「日本の考古学II・縄文時代」
——、市堀藤夫、1974：「酒見新堂遺跡」「富来町史資料編」(考古資料)。
——、1974：『石川県御経塚遺跡第5次調査概報』
——、1975：『石川県御経塚遺跡第6次調査概報』
——、1976：『石川県御経塚遺跡第7次調査概報』
田辺昭三、1973：『湖西線関係遺跡調査報告書』
丹治康明、1980：「宮滝式再考」「藤井祐介君追悼記念考古学論叢」
出崎政子、1967：「北陸の縄文時代晩期について(1)」「大境」第3号。
中村孝三郎、1957：『三弘牛』
中川成大・岡本 勇・加藤晋平、1967：『津生遺跡』
中島俊一、1977：『松任市長竹遺跡発掘調査報告』
中山修宏・中司照世、1977：『鹿谷本郷遺跡』
野口義磨・安孫子昭二、1981：『磨消縄文の世界』「縄文土器大成3—後期—」
橋本 正・他、1980：『井口遺跡発掘調査概要』
林 謙作、1981：「縄文晚期という時代」「縄文土器大成4—晩期—」
久永春男、1969：「縄文後期文化—中部地方—」「新版考古学講座3・先史文化」
糸 貢雄・四柳嘉章、1970：「金沢の縄文晚期近岡遺跡からの稻の発見」「考古学研究」第17卷第3号。
湯尻修平、1976：「野々市町御経塚遺跡調査(第8次)概報」
——、1977：『加賀市横北道跡発掘調査報告書』
吉岡康暢、1971：「石川県下野遺跡の研究」「考古学雑誌」第56卷第4号。
米沢義直、1969：「金沢市松村縄文遺跡概報」「石川考古学研究会々誌」第12号。
渡辺 誠・編、1975：『京都府舞鶴市桑飼下発掘調査報告書』

6. 底部と压痕

はじめに

御経塚遺跡から出土した縄文土器底部は、L II型コンテナバット（37cm×60cm×14cm）66ヶース分に相当する。これらは昭和43年に行われた第2次調査から、51年3月に終了した第8次調査までの出土底部である。各調査年次の出土数は、つぎのとおりである。第2次122点、第3次56点、第4次721点、第5～7次10,141点、第8次477点で総数11,517点である。

つぎに整理作業のすすめ方および資料の選択方法について簡単にふれておく。

①調査年次ごとに出土地点別、グリッド別に区分し、それぞれ同一個体の接合・復元につとめながら記名作業を行った。

②記名完了後、もう一度同一個体の追求を行い接合・復元を繰り返した。この過程で破片残存度が底面全体の約6分の1に未だないもので、しかも欠損や磨耗により压痕の有無や断面形態を識別できない小片を除去し、これらは出土数の集計に含めないことにした。

③調査年次別・出土地点別に区分した資料を観察し、整理カードに記録を行った。カードと資料とに通し番号をつけて基本作業を終えた。

なお隣接するグリッド間や離れた地点間における破片接合の可能性も十分考えられるが、調べるに至っていない。

1 底部断面形態

本遺跡出土の底部断面形態は、つぎの7類に大別することができる。それぞれの形態の特徴を以下に略記する。

A類（図5-130の1～3）

底面よりほぼまっすぐに外側に開くか、あるいは少し外側へ脹らむように開く形態。（数的処理は不十分であるが、後者は前者に比べ少數である）出土数は6,878点と最も多く、全体の59.7%を占めており深鉢の底部と考えられる。底面がくぼみ底になっている例がみられるが、胴部にいわゆる巻貝凹線文の施されているものがあることや、井口II式期に属する深鉢の完形品などに類似があることから、この時期の所産と考えられる。

B類（図4・5）

底径が胴部へ接続する部位の径とはほぼ同じもので、A類のように外側に開く形態。891点出土し、全体の7.7%を占める。深鉢の底部と考えられる。

C類（図6～8）

底径が胴部へ接続する部位の径より大きいもので、A類のように外側へ開く。底と胴との接続部分を観察すると、工具で押圧したと思われる痕がこる例がみられる。これは接続部分をより密着させるために行われたものと思われる。深鉢の底部と考えられる。222点出土し、1.9%を占める。

D類（図9）

底面からの胴部の立ち上がりが、A～C類に比べゆるやかなもの。鉢形土器の底部と思われる。

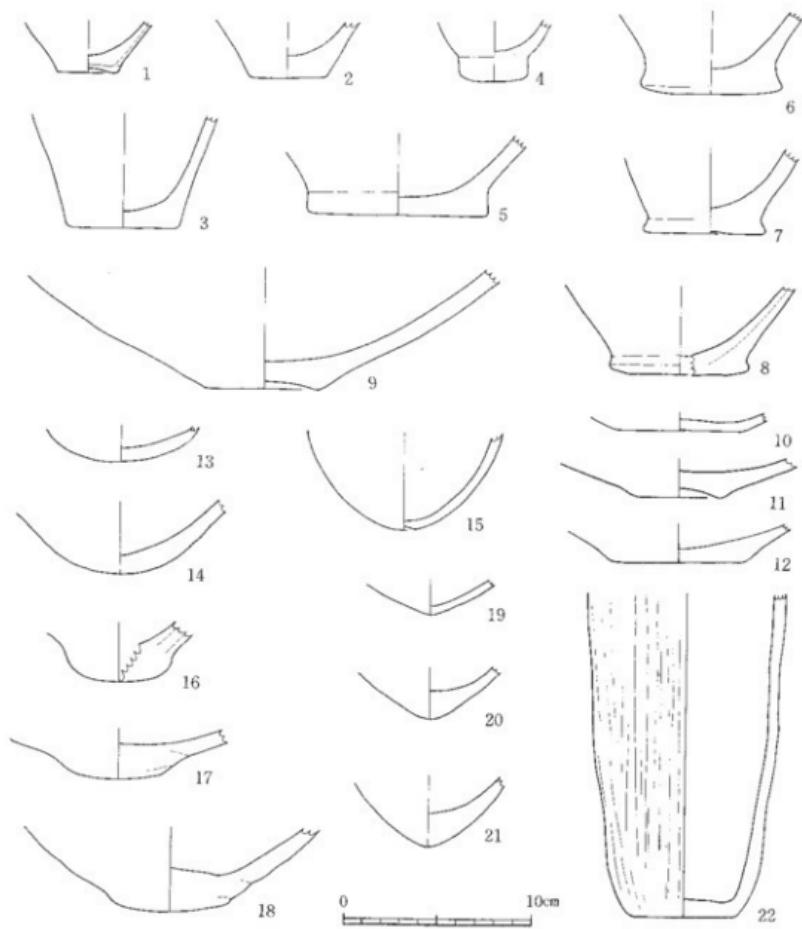


図 5-130 底部実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

238点出土し、2.1%を占める。

E類（同10～12）

浅鉢や皿形土器の底部と考えられる。くぼみ底が目立ち、この形態の2割強を占めている。器壁は内外面ともナデやミガキによる調整が行われている。底径の小さなものには、かなり器壁の薄いものがみられる。989点出土しており、8.6%を占める。

F類（同13～15）

丸底で底面はすべて無文。E類と同様、器壁は内外面とも入念なナデ、ミガキが施されており薄手のものが目をひく。F類のくぼみ底は胴部径に比べ、くぼみ部の径が極端に小さいことが特徴的である。小さなくぼみ部が土器の機能と関連があるのかどうか疑問がのこる。浅鉢、壺形土器、注口などの底部と思われ、晩期になると多くあらわれるようである。173点で1.5%を占めている。

表5-1 底径・断面形態別集計表（平は平底、凹は凹底を示す）

形態 底径 cm	A		B		C		D		E		F		G その他 平	不 明	平 凹	合 計	
	平	凹	平	凹	平	凹	平	凹	平	凹	平	凹					
1.0～1.9	1	4							1	7		12	1	3		29	
2.0～2.9	14	7	2				4	1	15	24		6	1	1	11	86	
3.0～3.9	95	14	3	1	1		13	5	51	42		7		3	46	5	286
4.0～4.9	284	25	13		4	1	28	3	115	56		8	3	126	3	663	
5.0～5.9	803	20	70	4	11		50	5	169	42		5	1	261	3	1,446	
6.0～6.9	1,514	31	188	2	32	3	38	5	179	30		7		434	6	2,467	
7.0～7.9	1,714	18	256	2	70		44	1	121	13		3		457	1	2,705	
8.0～8.9	1,139	3	188		49	1	20		47	1		1		294	1	1,744	
9.0～9.9	608	2	104		29	1	6		19	3				168		941	
10.0～10.9	261	2	29		12		3	1	13	1				65		387	
11.0～11.9	82		8		2				4					19		115	
12.0～12.9	29		1		2		1	1	2					16		52	
13.0～13.9	11		1											2		14	
14.0～14.9	9						1		1							11	
15.0～15.9	1													1		2	
不 明	187		19		4		7	1	30	3	140	8	5	7	152		563
小 計	6,752	126	882	9	216	6	215	23	767	222	140	33	30	19	2,055	22	11,517
合 計	6,878		891		222		238		989		173	30	19		2,077		11,517
百分比(%)	59.7		7.7		1.9		2.1		8.6		1.5	0.3	0.2		18.0		

G類（同16～18）

出土数はきわめて少ないが、実測図に示すように平底でなくやや丸味をおびており、胴部の立ち上がりはA～C類に比べゆるやかである。外側に開きはじめた部位で破損しているため全体の形態を知ることは困難であるが、一応形態のひとつとして分類を試みた。30点、0.3%である。

以上7類以外の底部は19点で、内訳はつぎのとおりである。注口土器7点（注口部から底面まで実際にのこっているもののみを集計した）やや尖がり気味のもの6点（同19～21）手づくね土器3

点、A類に比べ胸部の立ち上がりが急なもの3点(図22)である。胸部残存部分が僅かだったり、底面が胸部から剥落したため形態のわからなかったものは2,077点を数え、18%を占める。それぞれの形態と、底径および出土数との関係は表5-1のとおりである。断面形態の判別可能な底部9,439点に対する深鉢A～C類の比率は84.6%である。深鉢の底径は6.0～8.9cmにまとまりをみせるが、浅鉢系では4.0～7.9cmとひとまわり小さくなるようである。また、器高、口径に対し底径は小さい印象を受ける。

表5-2 底径・圧痕種別集計表

種別 底径 cm	網代圧痕	スダレ状 圧痕	本葉痕		網代+ 木葉痕	その他	無文	不明	合計
			網状痕	平行痕					
1.0～1.9							25	5	30
2.0～2.9	1						77	8	86
3.0～3.9	10	3					198	75	286
4.0～4.9	27	25	2	4		1	396	241	669
5.0～5.9	90	88	3	8			547	710	1,446
6.0～6.9	265	185	13	14		2	746	1,242	2,467
7.0～7.9	444	228	7	25			619	1,382	2,705
8.0～8.9	396	156	11	17	1	2	305	856	1,744
9.0～9.9	210	110	7	16	1	3	145	449	941
10.0～10.9	109	56	2	4		2	49	165	387
11.0～11.9	26	23	3	2			12	49	115
12.0～12.9	10	3					7	32	52
13.0～13.9	6	1		1			1	5	14
14.0～14.9	4	2					1	4	11
15.0～15.9	1						1		2
不 明	103	56	4	4	1		195	199	562
小 計			52	95					
合 計	1,702	936	147		3	10	3,297	5,422	11,517
百分比(%)	14.8	8.1	1.3		0.0	0.1	28.6	47.1	

2 底部圧痕の種類

総数11,517点のうち圧痕の認められるものは、24.3%にあたる2,799点であった。底径・圧痕種別出土数は表5-2のとおりである。

網代圧痕 1,702点 総数の14.8%を占める(図5-131の1～11、図5-132の1～15、図版43-1～3)。

スダレ状圧痕 936点 8.1%を占める(図5-134の1～14、図版43-4・5)。

木葉痕 147点 1.3%を占める(図5-132の16、図5-133の1)。

網代圧痕と木葉痕の重複 3点(図5-133の2～4)。

カゴ底圧痕 7点(図版付2-1)。

条痕状のもの 1点(図5-133の5)。

表5-3 網代圧痕と胴部の文様

胴部 形態	縄文	条痕文	無文	撚糸文	不明	計	百分比 (%)
A類	361	246	33		454	1,094	64.3
B類	55	31	6	1	103	196	11.5
C類	5	7	1	1	22	36	2.1
D類	3	2			9	14	0.8
E類			2		32	34	2.0
その他					1	1	0.1
不明	33	36	6	1	251	327	19.2
計	457	322	48	3	872	1,702	

植物の葉脈のようにも思えるが判然としないもの 2点(図5-141の6・7)。

底面の著しい磨耗や欠落により圧痕の有無を判断できないものを不明とする。5,422点、47.1%。

この項では網代圧痕とスグレ状圧痕を中心に解説する。カゴ底圧痕および編布圧痕については、現在のこされている民俗資料の調査を基礎に、古代の織物の研究を重ねられている名古屋大学文学部考古学研究室の渡辺誠先生の報告に詳しい。ここでは出土数のみを報告しておく。なお編布圧痕は、スグレ状圧痕と製作技法上同種のものであるため、集計上はスグレ状圧痕の出土数に含めてある。

3-1 網代圧痕

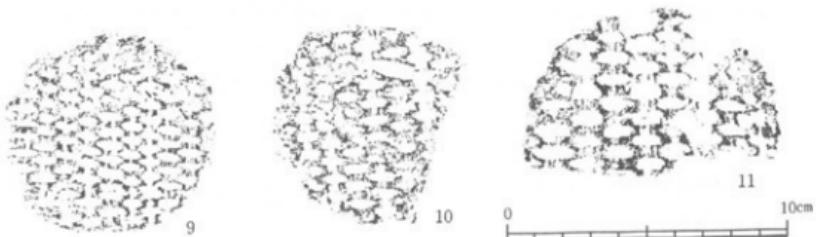
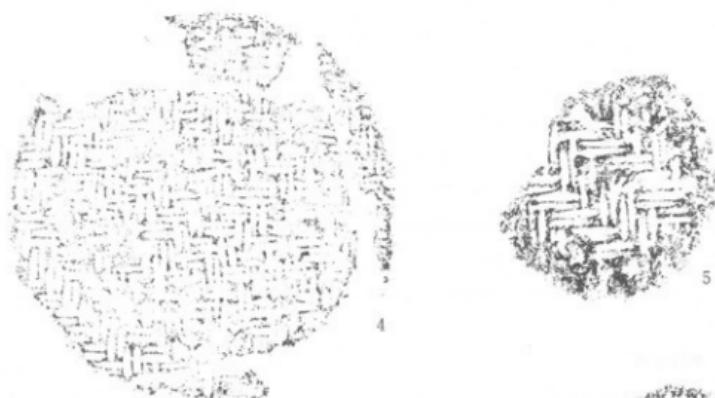
網代圧痕の認められる底部は、全体の14.8%にあたる1,702点であった。これらの胴部残存部の文様と各断面形態との関連を表5-3に示した。A類で胴部に縄文のあるものに最も網代底が多い。網代底全体の21.2%にあたる。ついでA類で条痕文のもの14.5%となる。A～C類の粗製深鉢に圧痕の残る割合が大きいと考えられる。浅鉢の底部と思われるE類では、僅か2%となる。E類の底部はナデやミガキなどの調整がなされ、器壁に光沢をもつものが多い。圧痕は器面調整の際に消されたものと思われる。胴部が無文の深鉢底部の中に、圧痕が消しのこされた状態を呈する例がある。この点からも器面調整時に圧痕を意識的に消したものと推測される。

3-2 網代の編み方

網代の編み方をよみとことのできたものは877点、不明瞭なものは825点であった。編み方はタテ条に対するヨコ条の超え、潜りとヨコ条間の送り(ズレ)によって分類した。この表記方法については、「若干の問題があり、民具資料の調査を進めた上で別に検討することとし……」(植松1981)という新しい指摘があるが、ここでは従来の方法によった。拓影は、超え、潜り、送りをヨコ条で統一して配置した。

本遺跡の網代の編み方はつぎの8種であった。そしてそのほとんどがタテ条、ヨコ条は直交するようである。

I類 2本超え2本潜り1本送り(図5-131の1～5) 586点出土。本遺跡で最も多くみられる編み方で、網代底全体の34.3%を占める。このうちタテ条、ヨコ条とも2本1単位として編ま



0 10cm

圖 5-131 底部压痕拓影 1 ($S = \frac{1}{2}$)

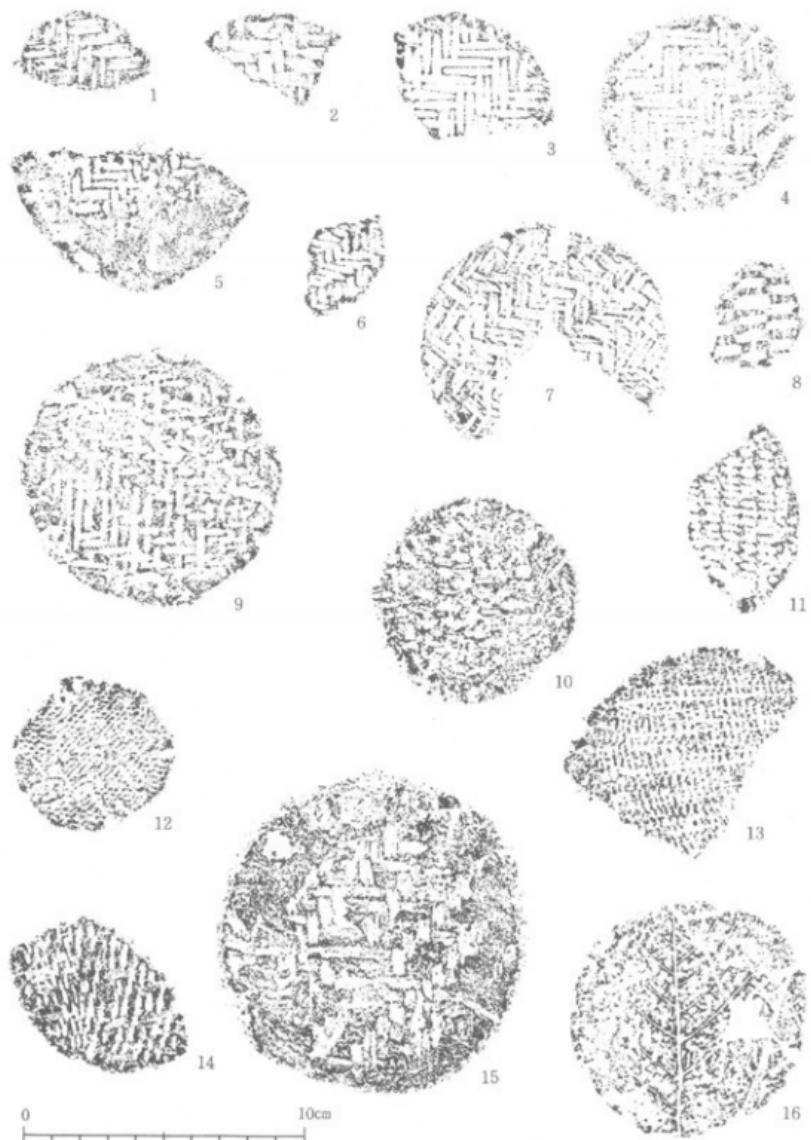


图 5-132 底部压痕拓影 2 ($S = \frac{1}{2}$)

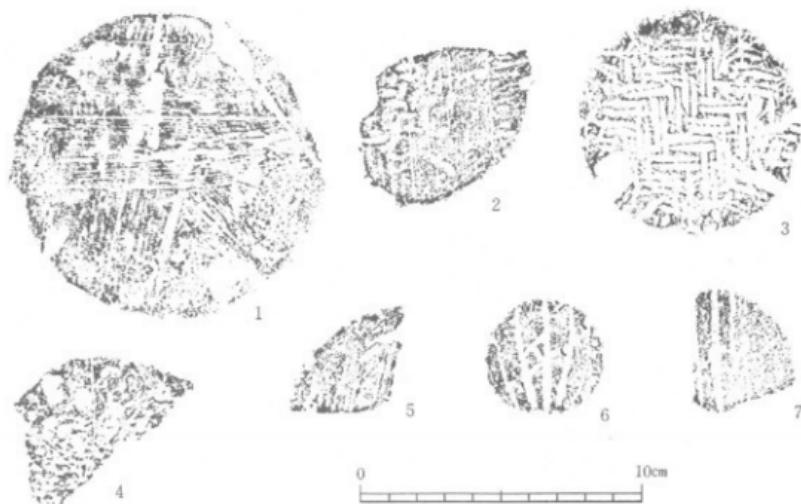


図5-133 底部圧痕拓影3 ($S = \frac{1}{2}$)

れたものは43点であった。

II類 2本超え1本潜り1本送り(図5-131の6~8) 179点、10.5%を占める。この場合タテ条は1本超え2本潜り1本送りとなる。2本1単位のものはみられなかった。

III類 1本超え1本潜り1本送り(図5-131の9~11) 79点出上、4.6%を占める。2本1単位のものはみられなかった。

IV類 3本超え3本潜り1本送り(図5-132の1~4) 25点、1.5%を占める。2本1単位のものは15点であった。

V類 3本超え2本潜り1本送り(図5-132の5~6) 5点、0.3%を占める。2本1単位のものなし。この場合タテ条は2本超え3本潜り1本送りとなる。

VI類 2本超え2本潜り1本送りと3本超え3本潜り1本送りの二種の圧痕が重複するもの(図5-140の7) 2点。

VII類 2本超え2本潜り2本送り(図5-132の8) 1点。モデリング陽像を観察するとタテ条が2本みられる。

VIII類 編み方を確認できなかったもの(図5-132の9~15) 825点、48.5%を占める。磨耗などにより編み方を断定できないものを不明として集計した。

つぎに図5-131および図5-132の拓影資料のいくつかについて観察結果を略記する。

I類 図5-131の1は綱代の材の巾7mmで、本遺跡出土品のうち最も巾の広い例である。材の繊維が明瞭である。圧痕は縁の部分が角ばっており、隙間なく編まれている。4・5は材を2

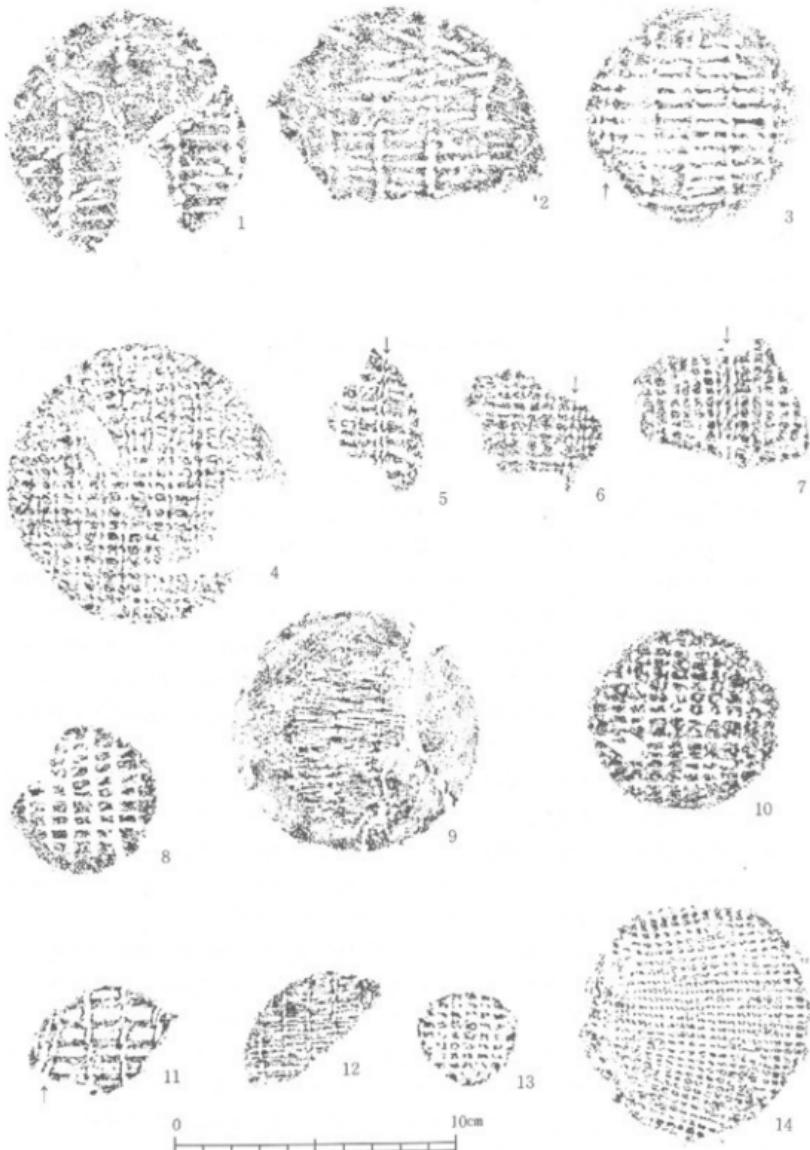


图 5-134 底部压痕拓影 4 ($S = \frac{1}{2}$)

本1単位として編まれている。

II類 7はタテ条約1.5mm、ヨコ条3mm巾の材を用いている。8は巾2.5mmである。2例とも圧痕は鮮明である。

III類 9は材の巾3.5mm、11は4.5mmである。1～8と比較して、圧痕の縁が少し丸味をもっており、タテ条が部分的に割れているのがみられる。

IV類 図5-132の2は巾4mmで圧痕の縁は角ばっており、細い植物繊維状のものがみられる。4は約3mm巾の材を2本1単位として編まれている。圧痕の断面は浅いじ字状を呈する。

V類 6は巾2.3mm。

VI類 7は巾約3mm。

VII類 8は巾4～5mm。

VIII類 9は巾2.5～3mm。拓影上部よりヨコ条11列目までは3本超え3本潜り2本送りで編まれているようである。次のヨコ条からは2本超え4本潜り1本送りに変化していると思われ、拓影の下部では3本超え3本潜りとなるが送りは不明である。10(図版43-1)は材が丸味をもつようである。ヨコ条は巾1.2～1.5mm巾の材を2本1単位としていると思われる。11(図版43-2)の材は、他と比較すると厚味がある。巾は約2.5mmである。福井県勝山市の古宮遺跡の例と圧痕の質感が類似する(渡辺1978)。タテ条は確認できないが、古宮例と同様にタテ条、ヨコ条はそれぞれ厚味の異なる材が用いられたと思われる。12(図版43-3)は本遺跡の出土品中最も細い材で編まれており、巾は1～1.5mmである。モデリング陽像を観察すると、非常に繊細で軟らかい植物のような印象を受け、他の縄代とは趣を異にするものである。圧痕の重複がみられる。13も材の巾1～2mmの細いものを用いている。14はタテ条約1.5mm巾、ヨコ条の巾は不明で圧痕が重複しているようである。15は材の巾3.5～4.5mmである。圧痕は底面周辺にはついておらず、中程にのこっているため編み方は不明な箇所が多い。不鮮明ではあるが以下に判別可能な部分について編み方を記してみる。拓影上部→の位置右より左へ、2本超え2本潜り、つぎの列では3本超え1本潜り2本超え、3列目は2本潜り2本超え1本潜り3本超え、4列目は2本潜り3本超え1本潜り、5列目は2本超え1本潜り3本超え2本潜り、6列目は2本超え2本潜り2本超え1本潜り3本超え2本潜り、7列目は3本超え1本潜り6本超え、8列目は2本潜り2本超え1本潜り4本超え1本潜り2本超えと思われる。以下は不明であるが植物を想定するとシグザグ模様を意識的に編み出しているように思われる。

以上拓影資料について観察所見をのべたが、つぎに材の巾について他の縄文遺跡の出土例と比較しながら簡単にふれたいと思う。本遺跡の場合タテ条、ヨコ条とともにほぼ同じ巾の材を用いる例が大半であったが、少數例異なるものもみられた。1mm～7mmまで多種の巾の材を編物に用いていることがわかった。3mmのものが最も多くみられたが、2～4mmの範囲のものが約80%を占める。この点について他の遺跡と比較し以下に記す。金沢市中臣遺跡の縄代底14点中13点、鳳至郡能都町宇出津崎山遺跡では巾の明瞭な37点中35点、石川郡尾口村の尾添遺跡では巾の計測可能な62点中60点に2～4mm巾の圧痕がみられた。さらに鳳至郡穴水町の曾福遺跡でも2～3.5mmのものがほとんどであった(米沢他1980)と報告されており、以上5遺跡については時期、立地等と

はかかわりなく同傾向が認められるようである。今後資料を追加して調べたいと思う。

表5-4 スダレ状圧痕と脇部の文様

脇部 形態	繩文	条痕文	無文	撚糸文	不明	計	百分比 (%)
A類	8	138			244	390	65.0
B類	6	9	2		43	60	10.0
C類					9	9	1.5
D類					3	3	0.5
不明	1	7			130	138	23.0
計	15	154	2	0	429	600	

表5-5 スダレ状圧痕一覧表

[()はヨコ糸の部分的開引きのあることを示す]

遺物番号	底径	タテ糸		ヨコ糸		図版番号
		本数	間隔	本数	間隔	
1	5056	8.6cm	4	20.7mm	11	5.0mm
2	11462	10.5	4	18.5	12	4.2
3	2570	7.6	6	3.5, 14.5	13	5.5
4	8273	9.5	20	3.6~7.0	17	4.0~5.0
5	11165	7.3	5	2.5, 7.0	8	5.5
6	3946	不明	10	2.2, 5.0	10	3.5
7	4849	不明	14	3.0, 4.5	12	3.5~4.0
8	2697	5.1	6	3.0, 4.5	10	4.5~5.0
9	11244	8.5	2	15.5	(13)	4.0
10	4371	6.7	9	6.2	13	4.0
11	11485	6.0	6	12.0	5	7.0
12	3341	6.5	5	8.5	(8)	3.2
13	7957	3.4	7	5.0	8	4.0
14	10819	8.1	20	3.8	25	3.0~3.2
						43-5

表5-6 スダレ状圧痕間隔別出土数

タテ糸 ヨコ糸	2.0 1.9~2.9	3.0 -3.9	4.0 -4.9	5.0 -5.9	6.0 -6.9	7.0 -7.9	8.0 -8.9	9.0 -9.9	10.0 -10.9	H.0 -11.9	12.0 -12.9	13.0 -13.9	14.0 -14.9	15.0 -15.9	16.0 -16.9	17.0 -17.9	20.0 -20.7	計	
2.0 -2.9	2	6	7	3	4		1	1	1									25	
3.0 -3.9		4	34	39	41	44	37	19	7	4	3	2	2				1	237	
4.0 -4.9		10	23	37	51	70	65	40	20	9	6	1	1	1				335	
5.0 -5.9		3	4	16	34	33	21	19	9	6	2	2	1	1				151	
6.0 -6.9			3	3	3	9	9	3	2	1	5				1	2	2	43	
7.0 -7.9			1		2	2	2	2			1	1						11	
計	2	23	72	98	135	158	134	84	39	20	18	5	5	2	2	0	3	2	802

4-1 スダレ状圧痕

スダレ状圧痕という名称は、1954年石川県小松市大杉上町山崎遺跡の発掘調査で類例が出土し、その形状と編み方にもとづいて故沼田啓太郎先生によって命名されたものである。スダレ状圧痕はモジリ編みによる編物の圧痕のことであり、本遺跡からは底部圧痕というかたちでモジリ編みによる編物の存在を知ることができる。底部総数の8.1%にあたる936点にスダレ状圧痕が認められた。

5~7次調査区から出土したスダレ状圧痕を有する底部600点を資料として、断面形態・胴部残存部の文様との関連を表5-4に示した。A~C類の深鉢に多くみられ、鉢・浅鉢にはみられない。これは網代圧痕の場合と同じ傾向である。胴部が条痕文の場合は154点(25.7%)であるのに比べ、繩文では15点(2.5%)と少なく、条痕文の10分の1である。

4-2 素材の間隔

タテ糸、ヨコ糸それぞれの間隔を計測して表5-6に示した。936点のうち圧痕の比較的鮮明な802点を資料とした。これらの中にはタテ糸が一部密接する例も含まれるが、値の大きい方を計測値とした。糸の間隔とはタテ、ヨコの材の中央間の距離を示す。

タテ糸間隔についてみると(図5-135)最小値は1.9mm、最大値は20.7mmであった。9mm以上のものは全体の12%と少なくなる。20.7mmを超える編物も存在したと推測されるが、従来指摘されているようにタテ糸間隔が底径を上回るため、土器製作時の敷物として二次利用するには不向きであり、したがって圧痕としてのこらなかつたと考えられる。

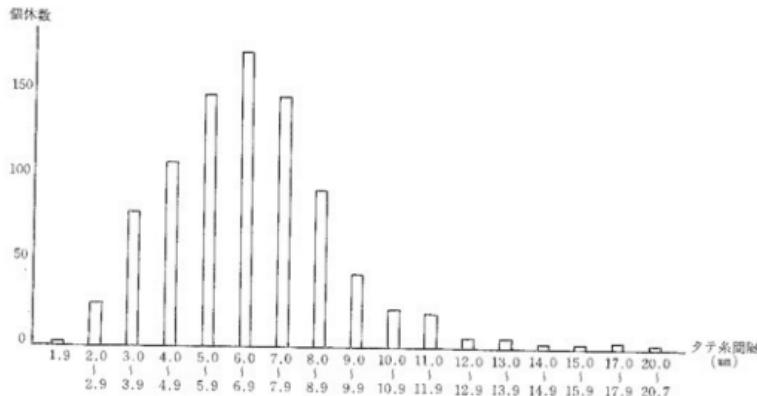


図5-135 タテ糸間隔別出土数

4-3 圧痕観察

図5-134に示した圧痕について若干の観察結果を記す。それぞれの資料の底径、素材の間隔等は表5-5のとおりである。

- 1 本遺跡のスダレ状圧痕の中でタテ糸間隔の最大の例である(20.7mm)。同一の圧痕が重複している。タテ糸、ヨコ糸とともに植物と思われる細かい繊維がみられる。
- 2 タテ糸、ヨコ糸とも太い材を用いている。
- 3 特にタテ糸の圧痕が鮮明である。拓影左下の矢印の部分は、タテ糸が2本密接している。
- 4 意識的にタテ糸を2本ずつ近づけて編んだものと思われる例である。類例は金沢市笠舞A遺跡にも求められる(鷹野1979)。
- 5 タテ糸5本のうち2本が密接している。圧痕の重複がみられる。
- 6 矢印の部分はタテ糸4本が密接している。
- 7 矢印の部分はタテ糸2本が密接している。この部分は他のモジリ編みの目と異なり、ヨコ糸2本に絡んでいるようであるが他のタテ糸の絡み目の数と比べ目の数に変化がみられない。これは鍛具を用いたモジリ編みではなく、手作業でタテ糸を絡めたものと推測される。2枚の編物をこの部分で締じ合わせている場合が想定されるが、継ぎ目の補強の意味でタテ糸を密にしたのではないかと思われる。
- 8 タテ糸、ヨコ糸それぞれの間隔において最も出土数の多い例である。本例の特徴は、ヨコ糸が途中から消える箇所がみされることである。民俗資料では、ハバキの編み方と同様の手法である。県内での類例は、鳳至郡能都町の宇出津崎遺跡、金沢市笠舞遺跡(南・上田1981)出土の底部圧痕に求められる。実物で確認していないが、金沢市古府遺跡出土例にもみられる。
- 9 (図版43-4)タテ糸は2本確認されるだけで、3本目は不鮮明なため全体の様子は分からぬが、タテ糸の目が1~8の例と異なり真横の位置に並ばず、少しづつずれた位置にみられる。そしてタテ糸全体がゆるいカーブを描いている。モデリング陽像を観察するとタテ糸は細い材のようであり、ヨコ糸は軟質な植物質の材を用いているように思われ、細かい繊維が明瞭である。ヨコ糸は軟質なため、タテ糸の目の部分ではしっかりと締めつけられて細くなっている。タテ糸がカーブするような編み方は、民具ではハバキのようにヨコ糸を用いる材の束の一端を結束し、もう一方の端部の材を小さい束に分けながらモジリ編みを行い、次第に目数を増していく方法がある。本例は後者のように思われる。
- 10 タテ糸、ヨコ糸の間隔において最も出土数が多い例である。
- 11 ヨコ糸の巾が広い例である。モデリング陽像で計測するとヨコ糸は約3.2mm巾であった。拓影の左側のタテ糸2本はヨコ糸に対して直交せず、斜めになっている。この部分は、鍛具を用いたモジリ編みではないようである。
- 12 タテ糸、ヨコ糸とともに細くて軟質な材を用いていると思われる。タテ糸の目は並行せず、タテ糸1本おきに並びカーブすることなく直線的である。この場合の編み方は、ヨコ糸に対してタテ糸1本おきにモジリ編みを行い、次のヨコ糸は休ませておいたタテ糸でモジリ編みを行う。

この作業を繰り返していくと本例のような編物ができる。民具では炭俵、種モミ俵などさまざまな製品にみられる。

- 14 (図版43の5) モデリング陽像を観察すると、途中からヨコ糸が消えていく箇所がみられ、タテ糸がカーブを描いている。8との相違点は、タテ糸が密であることと、タテ糸、ヨコ糸が細く軟らかい質感をもっていることである。

本遺跡でも表5-6・図5-135に示すように素材の間隔や質感の異なる多種のモジリ編みによる編物が存在した。編物の製品名を推定することは困難であるが、従来指摘されているように用途によって材質やタテ糸、ヨコ糸の間隔が異なると考えられる。この種の編物は、ヨコ糸方向に卷いたり曲げたりしやすいことから、その特徴を生かしたさまざまな生活用具が使用されたであろう。

おわりに

御経塚遺跡出土の底部には網代圧痕をはじめ、スグレ状圧痕、木葉痕のほかカゴ底圧痕や織物以前の布ともよばれる(滝沢1981)編布の圧痕など、さまざまな圧痕がこされていることがわかった。本遺跡では編物そのものは検出されておらず、すべて圧痕という間接的断片的資料であった。けれども当時の人々の衣食住などと密接にかかわっていたと推測される編物の種類や、技術水準を知るには十分な資料といえよう。

圧痕を観察する際、その質感から編物の素材の硬軟をある程度識別できることが指摘されている(植松1981)が、本遺跡の出土例の中にも前記のごとく厚みをもつ素材や、軟質な植物を用いたと考えられる編物の圧痕がみられた。土器製作に転用される前の製品がどんなものであったかは不明であるが、色々な素材や編み方は使用目的に伴って変化、選択されたと思われる。

本稿をまとめるにあたり、調査担当者等のご了解を得て他の縄文遺跡出土の底部圧痕を観察させていただいた。紙幅の都合上、詳細に報告する余裕はないが、現在のところ萌生遺跡、笠舞A遺跡、尾添遺跡から硬質で扁平な素材の網代圧痕のほか、若干丸みのある圧痕がみられた。これらの圧痕は、植松氏によって名付けられた東北型網代圧痕(植松1981)である可能性がつよい。他の縄文遺跡からも出土していることが予測されるので、今後資料を追加して分布状況等を調べたいと思う。

カゴ底圧痕である可能性がつよいのは、能都町波並西の上遺跡出土の底部(高堀・平田1976)と、珠洲市高屋小浦出遺跡出土の底部片である(杉島1976)。カゴ底圧痕についても、時期や分布状況および製作方法等について再検討を要すると思われる。

一方、近年石川県内ではカゴなどの製品の出土がみられる。金沢市戸水C遺跡からは、弥生時代後期の網代のカゴ⁽⁴⁾が、小松市高堂遺跡からは9世紀前半の網代のカゴ⁽⁵⁾が検出されている。2点はいずれも縁巻きのみられるものであるが、底部は現状では不明である。羽咋郡志賀町鹿首もりがふち遺跡からは、亀ヶ岡式の特徴であるX字状文のある藍胎漆器片⁽⁶⁾が検出されている。今後それぞれの遺物整理が行われるであろうが、これらの素材が何であるか非常に关心がもたれる。

(川端敦子)

註

- (1) ハバキの編み方については、金沢市熊走町在住の出戸幸弘、孝子ご夫妻および出口義雄氏のご教示による。
- (2) 出戸孝子氏のご教示による。
- (3) 中野継次郎先生のご好意で実物を見せていただいた。
- (4) 河村好光氏のご教示による。
- (5) 戸潤幹夫氏のご教示による
- (6) 谷内尾智司氏のご教示による。

参考文献

- 植松なおみ、1981：「東北型網代压旗について」『古代文化』第33巻第2号。
- 杉島季博・他、1976：『石川県珠洲市史』1。
- 高塙勝喜・平田天秋、1970：『能郷町・波垂西の上遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会。
- 滝沢秀一、1981：『日本発見(染めと織り)』晚教育図書。
- 端野英子、1979：『金沢市笠舞A遺跡調査報告』石川県教育委員会。
- 南久和・上田亮子、1981：『金沢市笠舞遺跡』金沢市教育委員会。
- 米沢義光・他、1980：『曾福遺跡』穴水町教育委員会。
- 渡辺誠・編、1978：『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』勝山市教育委員会。

第2節 土 製 品

1. 土 偶

77個体出土している。頭部から手先・爪先までそろった姿を止めるものはなく、頭・胴・腕・脚の各部位に解体してしまっている。残存度合は、頭部12点（15.5%）、頭部から胴体1点（1.3%）、胴部28点（36.3%）、胴部から腕部2点（2.6%）、胴部から脚部6点（7.8%）、腕部17点（22.2%）、脚部11点（14.3%）となる。各部位の残存率に対して、2部位間の接合度が極端に低く、本遺跡の土偶の解体度の高さが示されている。特に頭部と胴部の接合しているものは、図5-136の1の1点であるが、この資料は頭部から胴部が同一幅で作られている本遺跡でも特異なものである。各土偶の欠損部を観察してみると、擬口線風になっているものがいくつも指摘でき、各部位別に作られて接合されたものだということがいえる。焼成後の分断を意図していたものかどうかは別にして、土偶は各部位ごとに破損しやすい作りになっているのである。破損については、図5-141の5～8の胴部資料も注意される。縦一線に分断していく、その面が擬口線風になっていて、左右の胴が別々に作り合わされたことを示しているのである。

整理中に接合できた数点の資料は、いずれも近接区内で出土したもの同志であるが、図5-142の3は、脚部がK20区、腰部がK24区、胴部がK28区から出土したものが接合されたものである。それぞれ15mぐらいの距離にあり、脚部と胴部は30mぐらい離れていた。

本遺跡の土偶は、その多くが後期後葉から晩期前葉に属するものと思われるが、個々の所属期を決定することはむずかしく、また、型式分類も分断資料が多くてままならず、以下、各部位ごとに概観しておきたい。

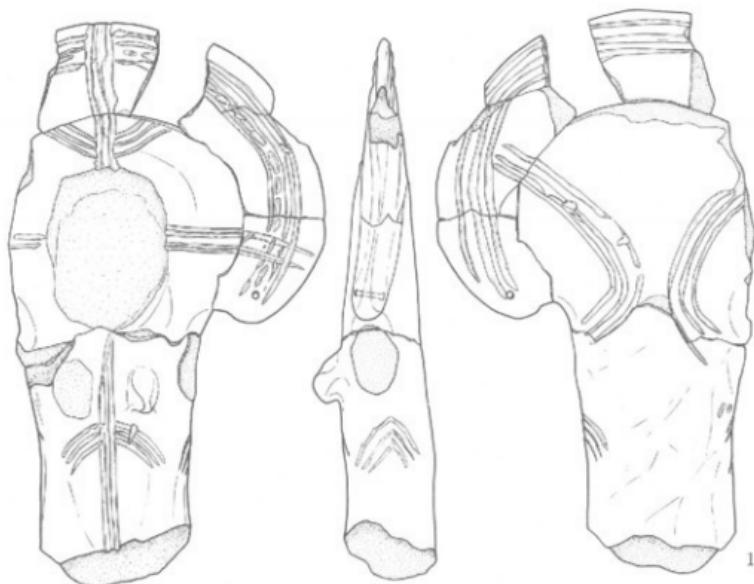
頭部

平坦で丸い顔面に半球状の後頭部を作り出したものが多い（図5-136・137、図5-138の1～8（図版44））。この仲間は、眉と鼻をT字状の隆帯で表現している。

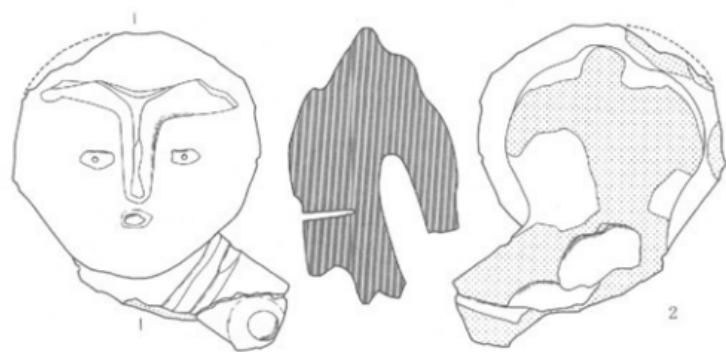
このうち、図5-137の4点は、頭部に一線を引く特徴を持っている。1は、後頭部に何か飾りがあったのだろうが剥落している。目は沈線の端部を深く押して表しているが、この沈線の引き方は、後期後葉の土器に用いられる施文方法である。額の沈線文は、左右を縦線と横線で違っている。3は、1と同様の半環状の耳がついていたのだが、欠損している。口は、ヘナタリ端部を押しつけて凹ませている。4は、顔面から後退した位置に耳を作り出しているが、穿孔はない。赤彩である。

図5-138の1（図版44の3）は、抜歯土偶と呼ばれているものである。凹んだ口の上側を心もち盛りあげてここに縦線を6本引き、1区画おきに横線を加えて目の字状に作りあげている。目は表されていない。肩の上には細かい刺突が加えられ、鼻の下から頸、首にかけて細い線が1条引かれている。

図5-138の2は、首の切斷面が深く凹んでいて作成時に胴部が押しこまれた様子を示している。図示していないが、左耳は小孔で示されている。右耳は欠損している。



1



2



図 5—136 土偶実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

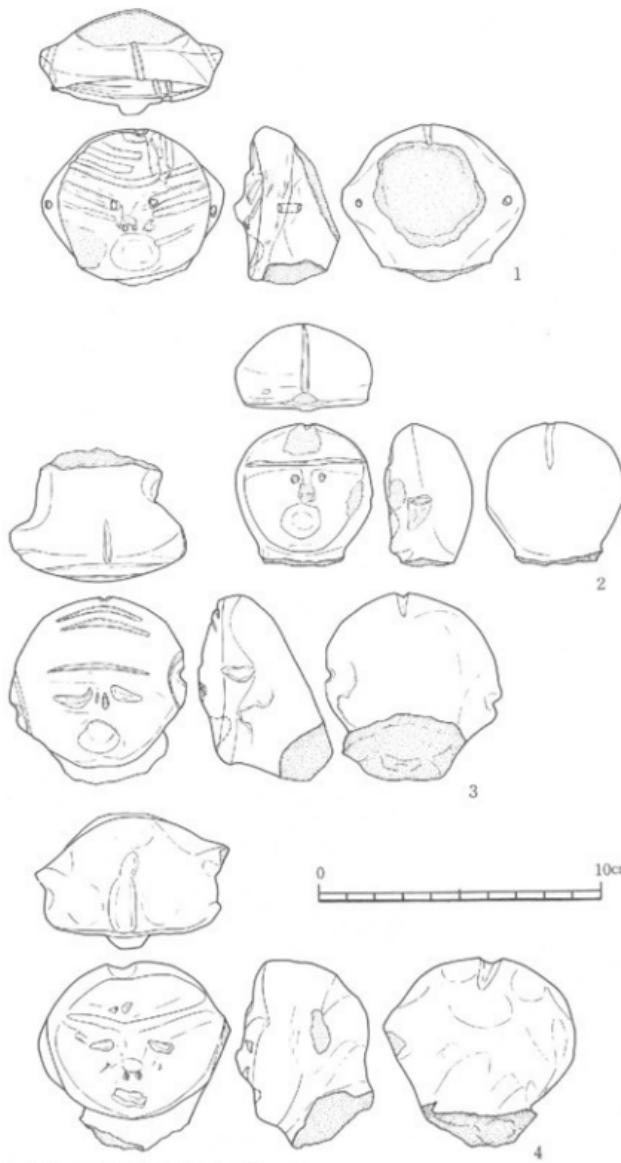


図 5-137 土偶頭部実測図 1 ($S = \frac{1}{2}$)

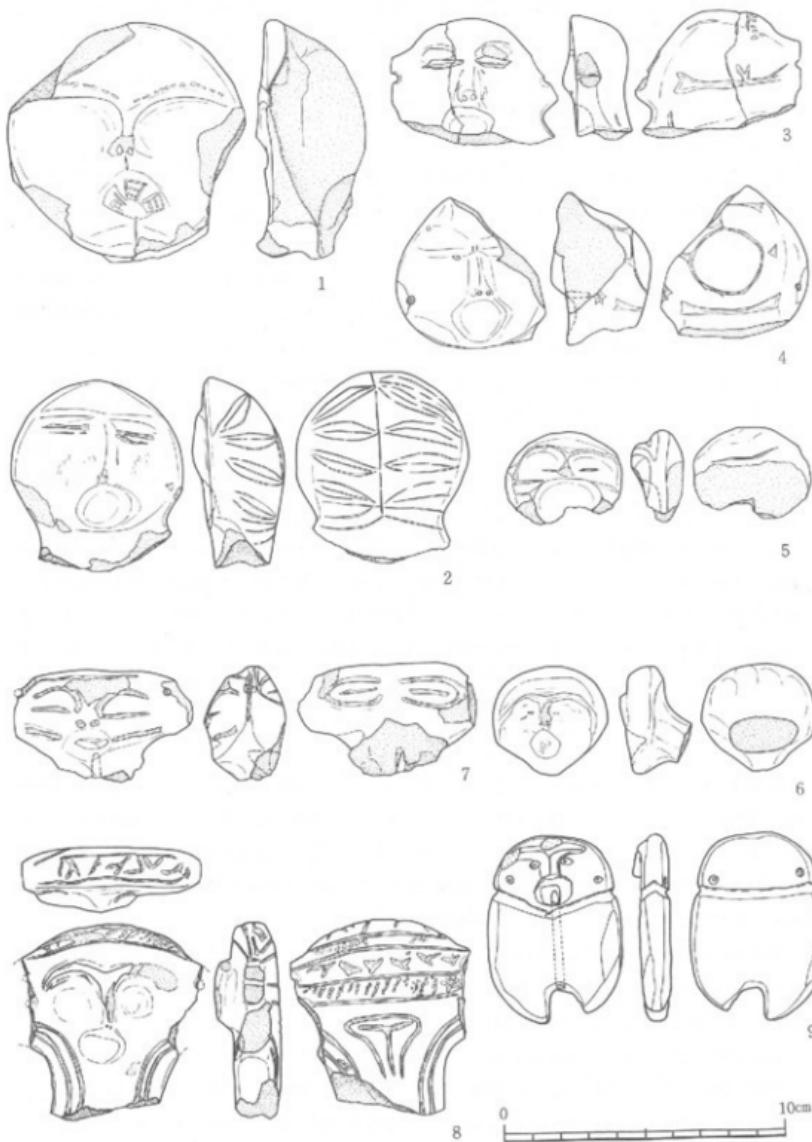


図 5—138 土偶頭部実測図 2 (ただし 9 は土版、 $S = \frac{1}{2}$)

図5-138の3・4は、後頭部に連続三叉文を施しているので、晚期初頭と推定される。両者とも、顔面が不正円形になっている。首の断面は凹み、脇部が押しこまれたようである。

図5-138の5・6は、小形で梢円状の顔をもち、後頭部も脹らまぬものである。6は、首をつき出した状態で胸部にのるものである。口の凹みは、ヘナタリでつけられている。5は、口が大きな凹みで表現されている。

図5-138の7（図版44の5）は、顔面が横長の梢円で、後頭部とともに少し脹らみをもつている。眉と目は、沈線で表現されている。首の断面には、上に向う幅5mm厚さ3mm位の平板な孔が見られる。口の凹みには繩がらない。

図5-138の8（図版44の4）は、板状の土偶である。眉と鼻は、隆帯で表している。顔面の左右は欠損しているが小突起が作り出され小孔が穿たれていたようである。三叉文が頭頂部や裏面に施されていて、御経塚式期のものであることを示している。丹が残っている。

図5-136の1（図版44の2）は、板状の胸部に平板な頭部のつくものである。顔面はそんぐり剥落してしまっている。頭部周囲には髪を表現したのであろうか、薄い板が半環状に取り付けられている。文様は、2・3条の沈線を1単位として引いている。列点も用いられている。乳房は重ね気味になっている。頭部と髪部との接合面は擬口縁状になっているが、腕と肩の接合面もまた同じで、右手側は褐色であることから焼成時にはすでに右腕が離れていたかとも推測できる。

図5-136の2（図版44の1）は、本遺跡唯一の中空土偶である。繊維質のものを頭部や肩部の内部に入れて作ったもののように、器壁は部厚い。円形で平板な顔にはT字状に隆帯を貼り眉と鼻を表現している。目は沈線でつくり、この中央に針状の細いもので小孔を突いている。口は直径5mm位であるが、奥はすばまって中空部にかろうじて抜けている。耳は今は欠落しているが、小さな半環状の突出部で表現されていたようである。後頭部は、半球状に作り出されている。飾りがあったようだが、剥落している。

胸部

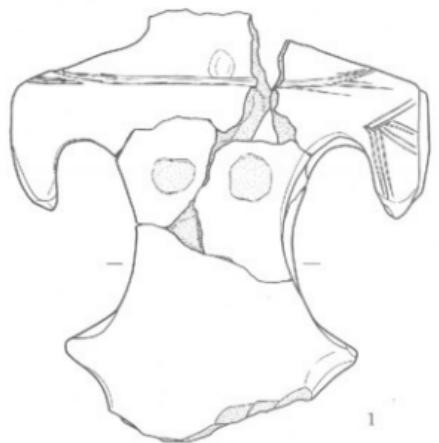
脇部は、断面が角ばった板状になるのが多く（図5-139～141、図版45の1～5）、図5-139の1（図版45の2）のように、横腹を凹ますものもある。文様は2条を単位とした沈線を引いたものが多く、これに繩文を加えたものもある。図5-141の3は、三叉文を喉部に飾っている。同図4は刺突文を施していて、晚期も後葉の雰囲気をもつ。図5-139の2（図版45の1）は、沈線の端部をヘナタリの先端で突いている。後期後葉のものである。

乳房は、ほとんどに付されているが、図5-140の7・9のように無いものもある。乳房は半円球状に表現されるものが多いが、図5-136の1・2のように垂れ下った作りのものもある。図5-141の2も、図5-140の3、図5-141の6もそうであろう。

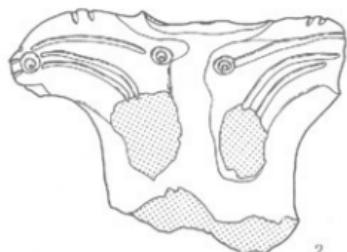
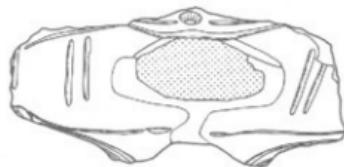
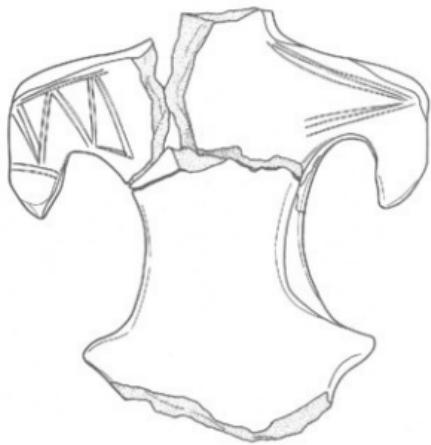
腹部が脹らむものは、本遺跡では図5-142の9の1例だけである。

腰部（図5-142、図版45の6～9、図版46の1）は、図5-139の1・図5-140の4・図5-142の5～8などのように張り出しをもつものと、突出度合の弱い図5-142の1～4などがある。

胸体内に、縦に直径5mm位の小孔を穿つものがある。図5-140の1・2・7、図5-141の1・5、図5-142の1・3などである。これらの資料ではこの孔は、股の残っている場合は必ずそ



1



2



図 5—139 土偶胸部実測図 1 ($S = \frac{1}{2}$)

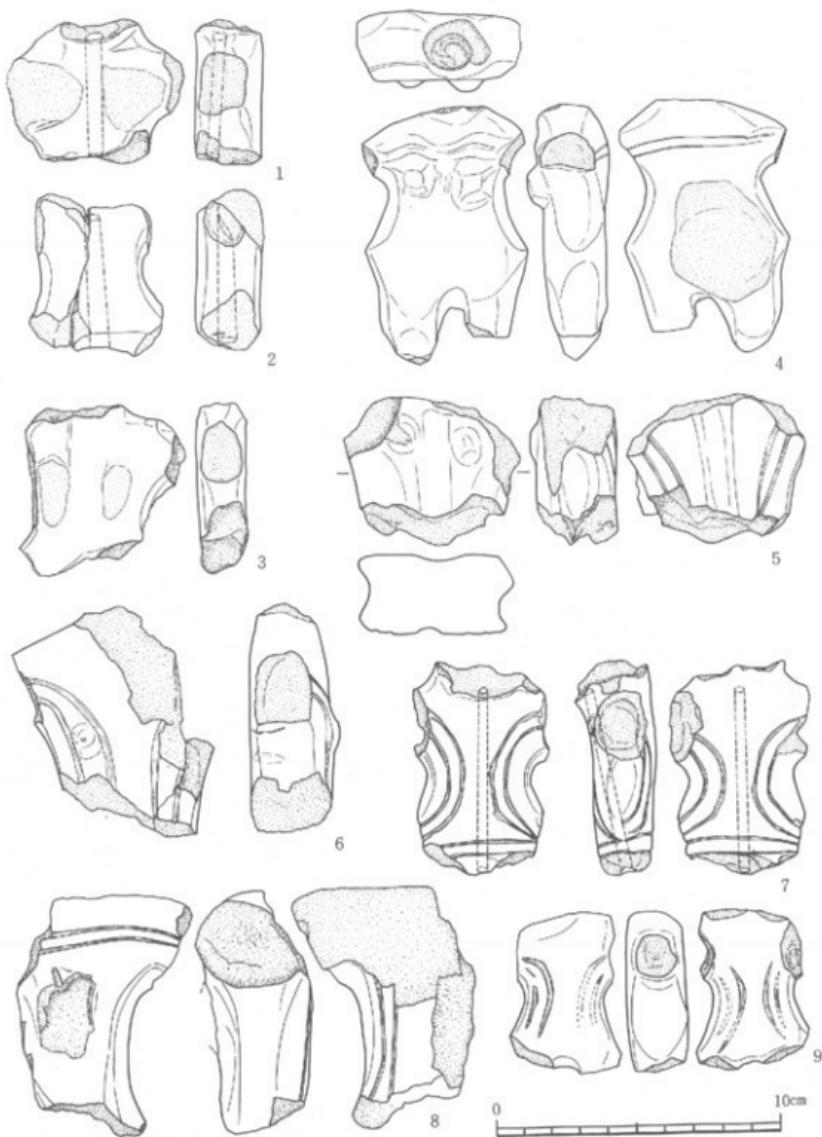


図5-140 土偶胸部実測図2 ($S = \frac{1}{2}$)

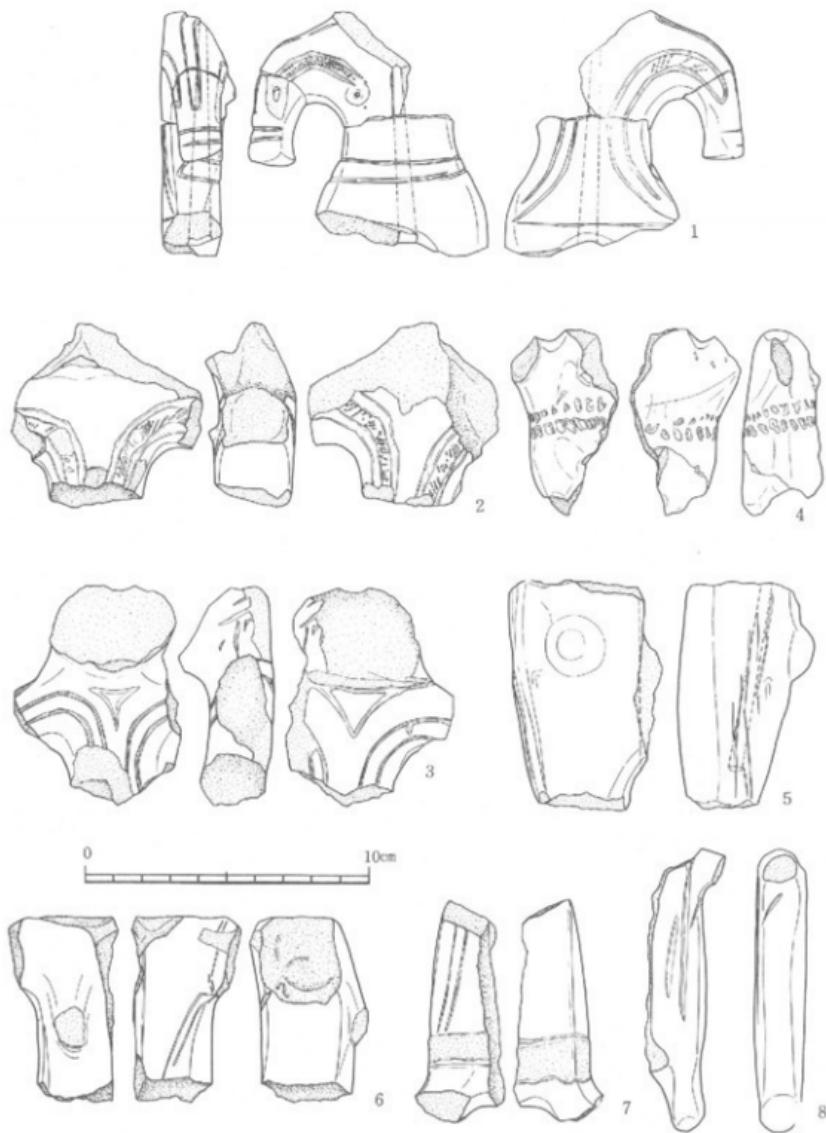


図5—141 土偶胸部実測図3 ($S = \frac{1}{2}$)



図 5-142 土偶腰部実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



図5—143 土偶輪部実測図 1 ($S = \frac{1}{2}$)

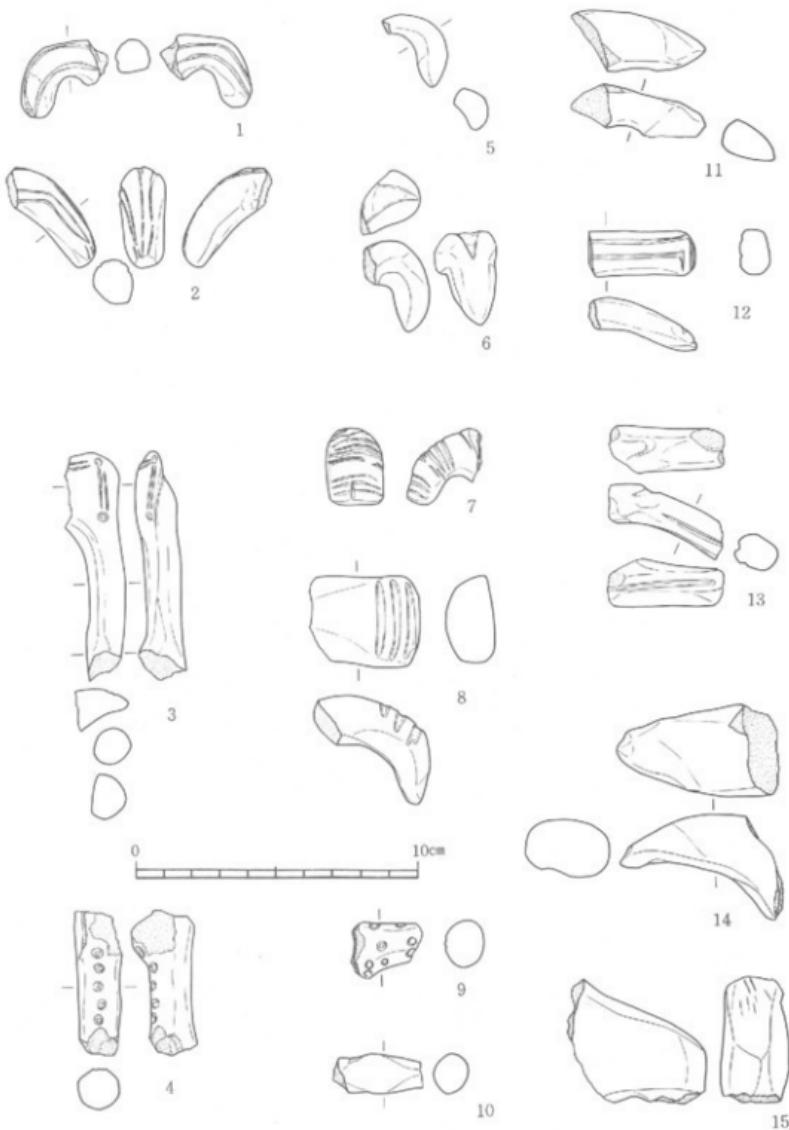


図 5-144 土偶腕部実測図 2 ($S = \frac{1}{2}$)



图 5—145 土偶脚部实测图 ($S = \frac{1}{2}$)

こにつき抜けて開口している（図5-140の7・図5-141の1・図5-142の3など）。孔の上部は、どうなっているのだろうか。図5-138の7の頭部資料には小孔（これは板状孔であったが）が見られた。また、図5-139の1はうまく図示できなかつたが、上部の断面一部は口の凹部で、胸部から的小孔はここに抜けてきている。図5-140の7や図5-141の1の断面図に示した孔の方向は、図5-138の9の上版が股から口に孔を貫通させているので、それと考え合わせると口に向っているとも見てとれる。この小孔が各部位を接合するためのものなのか、あるいは何かを表現しようとしていたものなのか、今後の資料をまちたい。なお、焼成時にこの孔中に棒状具が残っていたのか、あるいは引き抜かれていたのかの判断は、できなかった。

腕部

短く表現されたものが多い。図5-143の1・図5-144の1に代表されるように、肩から直角に下げたもの、図5-143の5～9のように軽く斜めに下げたものなどがある。少數だが、図5-144の3・4のように長日のものもある。指先など、細部を表現したものはない。沈線で施文したものが多いが、図5-139の1は、前面は左腕のみの施文、背面は左右違えての施文になっていて目につく。

脚部

この部位の断片数は11点と意外に少ない（図5-145、図版46の2～12）。

図5-145の8は四角の作りだが、断面が円状のものがほとんどである。足部を小さく作り出したものが、図5-142の3や図5-145の1～7に見ることができる。3は、先端に刻みを加えて、指を表している。図5-145の1・2は膝を張り出して表現している。

2. 土版

長径6.5cm、短径4.5cmの楕円状の板（厚さ1cm）に、沈線で頭部を、U字状の切り取りで脚部を表現している（図5-138の9、図版46の29）。低いT字状の隆帯で眉と鼻を、小さな刺突で目を、小穿孔で耳を表現している。円んだ口から股には、直径2mm位の孔が貫通している。

3. 土製耳飾

8点の出土があるが、大小や形態・文様も個々様々である（図5-146の1～8、図版46の13～15、18～22）。

1は、厚さ1.7cm、直径2.9cmの円盤形で、両面ともに無文である。D-3区2層出土。

2も、文様を施していない。厚さ直径とも1.2cmの小形で、両面がやや凹み、その中央に直径2mmの孔を穿っている。E-9区出土。

3も無文である。直径4.7cm、厚さ1.5cmぐらいで、両面は強く凹んでいる。この中央に径4mmの孔をあけている。バイパス区5層出土。

4は、直径6cm厚さ2cmで、やや平坦な方の一面には文様が施され、大きく凹んだ一面は無文となっている。文様は、中央の深い円形刺突を中心にして2円を描き、この間には刺突を、外側には、U字状の区画を10個引いている。側面は、強く絞りこんでいる。E-1区4層出土。

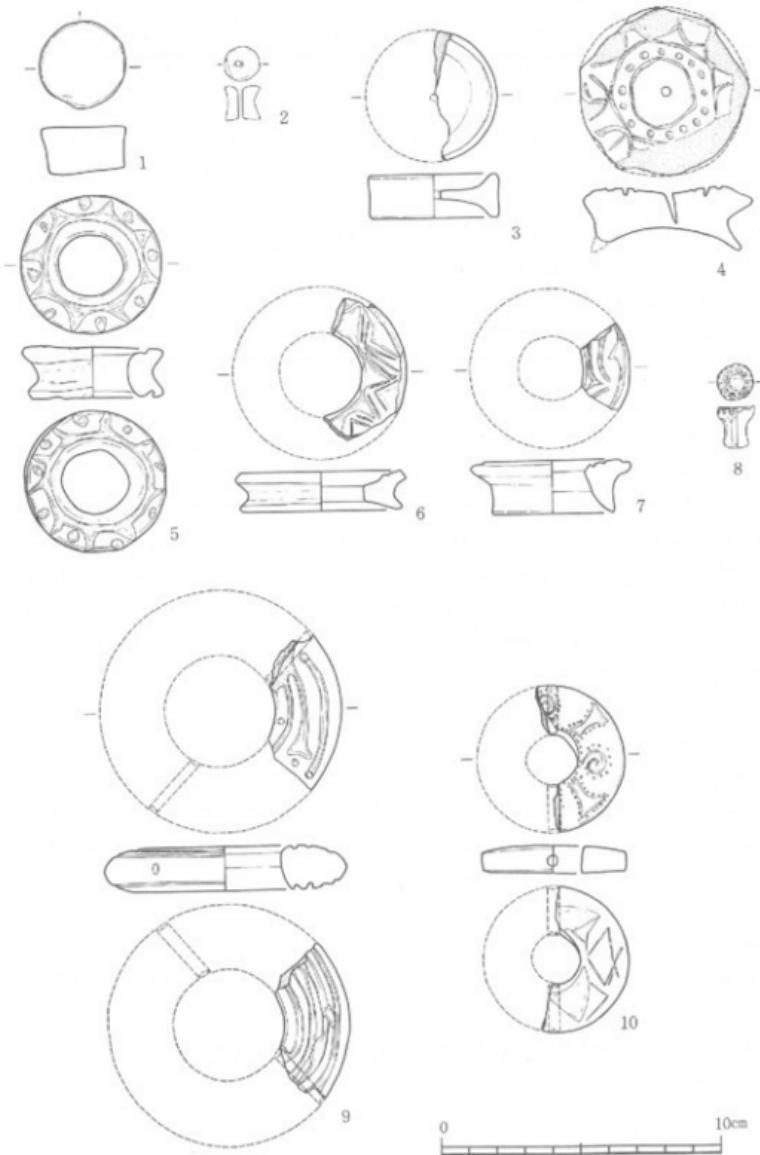


図5-146 土製耳飾（1～8）・環状土製品（9・10）実測図（S=1/2）

5は、2号竪穴状遺構から出土した、完形品である。直徑5cm厚さ1.9cm。中央に径2.3cmの孔があく環状品で、内側傾斜部の両面に、沈線で円を描きこれに三角形の彫りこみを配してU字状の区画をめぐらせた文様を施す。文様の区画単位は一面では8、もう一面は9となっている。丹塗である。

6も環状品であるが、直徑6.2cmに対して厚さが1.4cmと薄手の作りである。内側の傾斜部は平坦で、その一面にV字状の彫りこみをし、残った凸部に2・3条の沈線を引く。丹が少し残っている。C-14区黒色土下層出土。

7も環状品だが、両面の直徑が5.6cmと4.3cmと違い、内側の作りも径の大きい方が傾斜をゆるく、この面にのみ文様が施されている。少量の丹が残っている。

8も両面の径が違った小形品だが、中央に穿孔のない充填されたものである。直徑1.3cmの広い面と側面上部には、円形の刺突が施されている。H-23区3層出土。

4. 環状土製品

土製耳飾と似ているが、側面が凹まない土製品が2点あるので、環状土製品という名でまとめておく（図5-146の9・10、図版46の16・17）。

9は、外径が8.6cm、内径3.9cmの大形である。厚さは1.5cmで、外側から内側に向けて小孔（直徑4mm）が穿たれている。沈線が両面に引かれているが、一面には円形の刺突や三叉状の彫りこみも付されていて、この土製品には表裏があったことを示している。L-24区2～3層出土。

10は、厚さが1cmと平板だが、9と同様に側面に小孔が1対になって穿たれている。文様は両面にあるが、平らな一面は粗雑な施文になっているのに対し、凸状の面には溝文や刺突文なども加えられ、ここには丹も残っている。

5. 獣面土製品

動物を表現した土製品が1点ある（図5-147の1）。椭円状の首から直角に突き出た頭部を形どったもので、三角状の額の額から鼻部に三叉状文が彫られ、この両側に細い目が刻まれている。首部には、LRの縦文地に三叉文と連結三叉文が描かれている。この資料は、独立した土製品というより、土器の口縁部を飾った可能性が強いと思われる。

6. スタンプ形土製品

直徑3.3cmのやや反った円盤面に、沈線で溝文が施されている（図5-147の2、図版46の26）。背面には、円柱状の柄が付されているが、ちょうど小孔が穿たれている高さ2cmの所で欠損している。本県では、加賀市横北遺跡（湯尻1977）にも長楕円形の面に曲線を描いた該土製品が1例知られている。

7. 有孔球状土製品

直徑が5.5cm位の球形状土製品の半欠であるが、下ぶくれ形であったと推定される（図版46の30）。

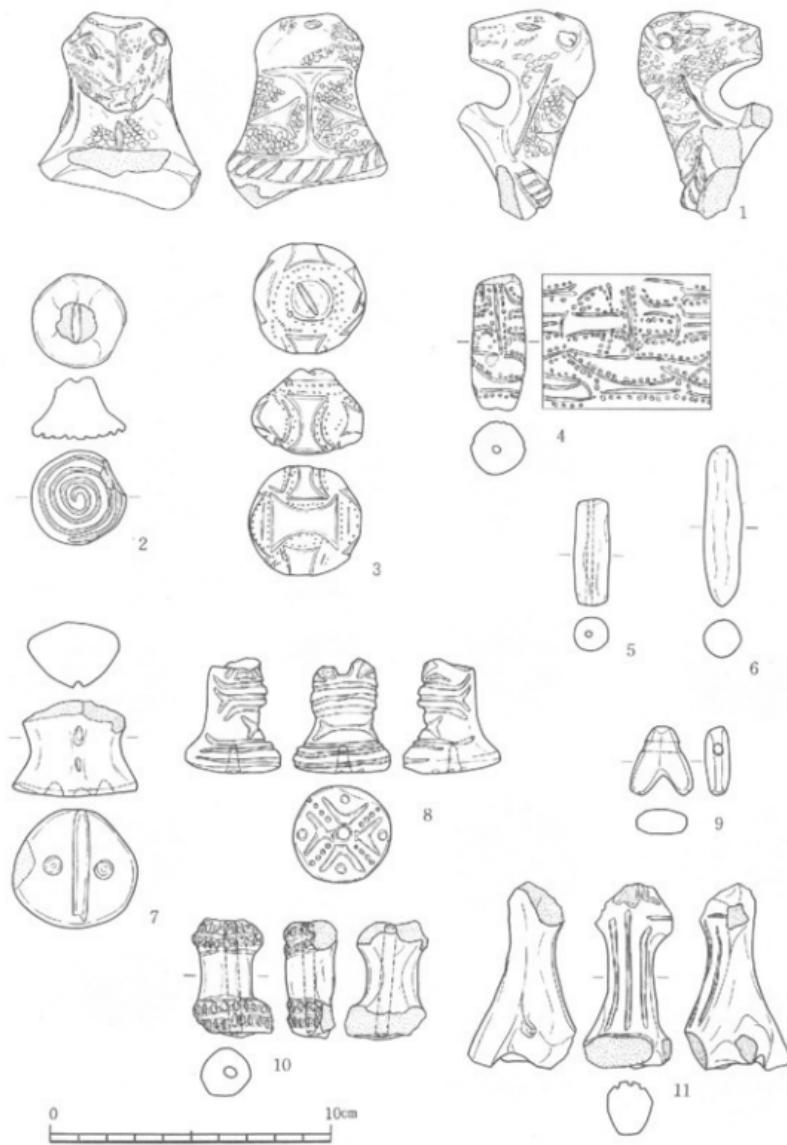


図5-147 獣面(1)・スタンプ形(2)・球状(3)・その他の土製品実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

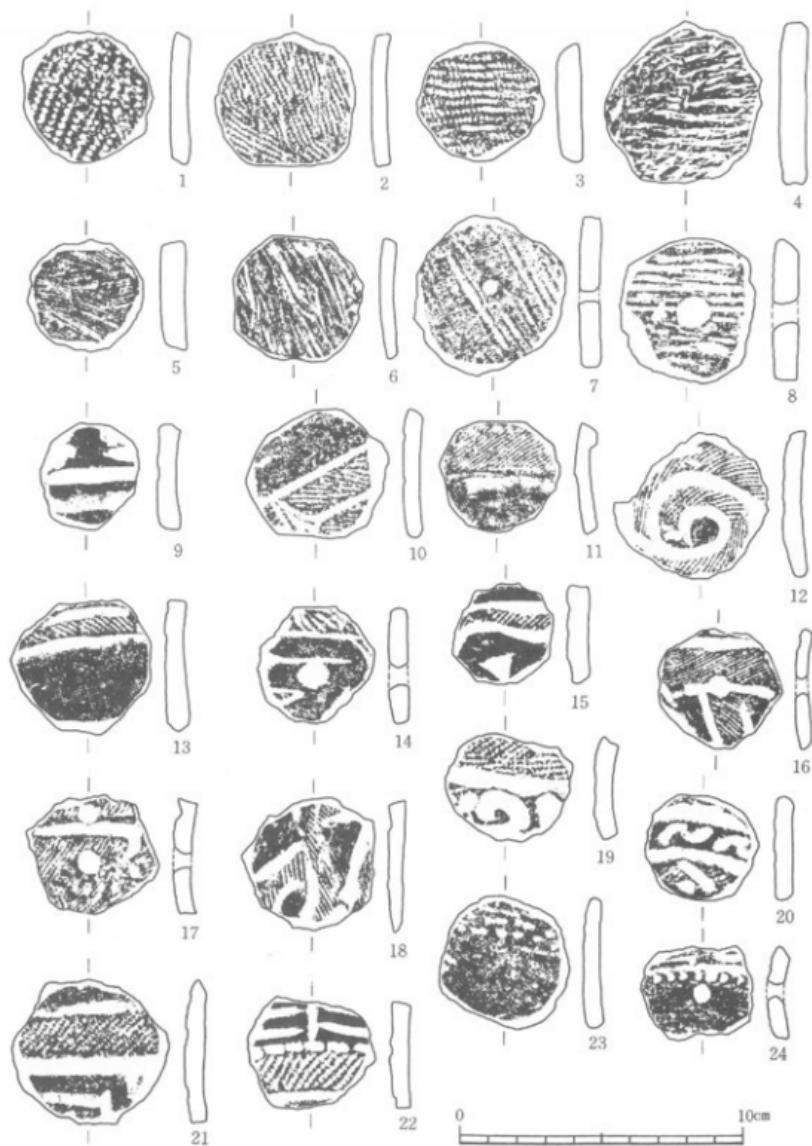


図5-148 土製円盤実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

中心部に直径4mmの小孔が穿たれている。無文である。富山県東部に発見例が多いようであるが、本県では加賀市横北遺跡(湯尻1977)に有文のものが出土している。

8. 球状土製品

最大径4cm高さが3cmの、下ぶくれ形の球状土製品である(図5-147の3、図版46の25)。連結三叉文の連結部を幅広くしたかのような彫りこみを底面に1個、側面に方向を交互に違えながら4個配して、周囲には刺突文を添えている。赤彩痕が残っている。頂部は欠損しているようで、小孔が穿たれていたと思われる痕跡がある。

9. 土製円盤

土器片を円形や橢円形に整形したもので、円盤状土製品とか土製メンコなどとも呼ばれているものである(図5-148)。形状が円形とならず、三角形や四角形に近いものも含め、本遺跡では175点(内完形品133点)が出土している。遺構から出土したものも23点あるが、それらを含めいずれも他の遺物と混然とした状態で出土し、その分布状況にも特に片寄りはない。

大きさは、最小のものが直径2.3cm、最大が直径7cmであるが、直径3cmから5cmにまとまりが多い。重さは、軽いものが3g、重いものが57gあるが、10gから20g位のものが多い。

周縁の整形には、打ち欠きのみで周縁はまったく研磨が認められないもの(I)、周縁の50%未満に研磨が認められるもの(II)、周縁の50%以上100%未満に研磨が認められるもの(III)、周縁の100%に研磨が認められるもの(IV)がある。完形品のみで数えてみると、Iは107点(80.4%)、IIは4点(3.1%)、IIIは13点(9.8%)、IVは9点(6.7%)になり、周縁に研磨がみられるものより、打ち欠きのみのものの方が圧倒的に多いことがわかる。土製円盤は、円形に近い形さえ得られればよい程度のものであったとも考えられる。

この土製品には、ほぼ中央に穿孔されたものもある(a)。穿孔の無いもの(b)、穿孔途中のもの(c)もある。全個体について数えてみると、aは31点(17.7%)、bは140点(80%)、cは4点(2.3%)と、穿孔されていないものが圧倒的に多いことがわかる。

器面は無文のもの(D)が89点で全体の50.9%を占め圧倒的に多いが、他に縄文のもの(A)が16点(9.1%)、条痕のもの(B)が38点(21.7%)、沈線などの文様をもつもの(C)が28点(16%)、燃り糸文をもつもの(E)1点、他に不明のもの(F)が3点ある。

文様をもつもの(C)は、その文様から、酒見式が1点(3.6%)、井口II式が2点(7.1%)、八日市新保式が3点(10.7%)、御経塚式が8点(28.6%)、中巻式が13点(46.4%)、下野式が1点(3.6%)と時期を判別することができる。条痕を施した土器片が多く用いられていたこととこの数値を重ね合わせると、後期よりも晚期、特に中巻式期により多くの土製円盤が作られたと考えてよいであろう。

10. その他の土製品

図5-147の4(図版46の28)は、長さ4.8cm、直径1.9cmの円柱状の土製品で、長軸に直径3mmの

孔を穿っている。沈線と刺突で文様が描かれている。

5は、4と同じく中心に小孔を穿った円柱状の土製品だが、無文である。

6は、棒状の土製品で孔を穿っていないものである。

7と8は、スタンプ形土製品と形が似るが、柱状部が大きいことや正面性が認められることから、何かの脚部残欠と考えられるものである。7（図版46の24）は、底面に太い直線とその両側に円形刺突を施している。柱状部は断面が丸味をもつ三角状で、頂部には刺突が施されている。

8（図版46の23）は、直径3.5cmの盤状底面に、深い円形刺突を中心にV字状の彫りこみを4個配し、この間に刺突を加えて飾っている。柱状部は片面にのみ連結三叉文や沈線を引いている。上部は欠損していて、ここには横位に穿たれていた小孔底が残っている。亦彩する。

9（図版46の27）は小孔を穿ったV字状の、図版46の31は勾玉形の土製品である。

（高畠勝喜・河村裕子）

参考文献

湯尻修平、1977：『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会。

第6章 石器と石製品

第1節 石 器

第2次から第8次までの調査において、本遺跡から発掘・表採された縄文時代の石器は、6465点を数える。⁽¹⁾出土状況については、住居址や土坑に伴うものもあるが、ほとんどのものは包含層からの検出である。

表6-1 石器組成表

器種	調査次							計
	2・3	4	5	6	7	8	表採	
打製石斧	163	135	954	389	685	198	208	2,732 42.26%
石皿	2	3	111	89	97	17	44	363 5.61
磨石	2	7	76	56	86	21	20	268 4.15
敲石	2	54	555	324	490	92	158	1,675 25.91
石鍬	3	4	5	10	6	4	32	0.48
磨製石斧	4	7	82	73	70	17	20	273 4.22
円盤状石器	1	—	5	—	4	—	2	12 0.19
石鏃	(7)	—	300	203	194	22	40	766 11.85
石錐	(2)	—	(129)	—	—	2	14	147 2.27
石匙	—	—	—	—	—	—	—	6 0.09
砥石	—	—	—	—	—	—	—	114 1.76
擦切石器	—	—	—	—	—	—	—	77 1.19
計	—	—	—	—	—	—	—	6,465 99.99

本遺跡の縄文時代の石器の点数と器種の構成比を表わしたのが表6-1であり、構成比は発掘により出土したものとそれに表採品を含めたものを算出した。また、石器の点数は、完形品も欠損品もそれぞれ1点として計算し、接合資料は接合したうえで1点として計算した。

なお、石器の石質については、本章第3節に詳述されている。

1. 打製石斧

打製石斧は総数2732点出土した。このうち完形品は729点である。

打製石斧の出土状態は、一般に土器や他の石器と同じであり、特別な状況を示すものではない。ただ、集積された状態で検出されたものが1例ある(図6-1)。第6号住居址の北西0.5mの所に直径40cmの浅い掘り込みがあり、そこから7点の打製石斧が長軸を東西方向に向けて出土した。第6号住居址は全体の1%を検出したにすぎず、集積と住居址は近接していること以外、関係は明らかでない。図6-1の7を除く6点は、本遺跡の打製石斧の一般的な大きさを呈するのに対し、同図7は2732点の打製石斧のなかで最長のものである。同図2は脛部で2つに破損しているが、これは使用による破損ではなく、土圧か何か他の原因による破損であると考えられる。また、7点のいずれも磨耗痕は全く認められない。

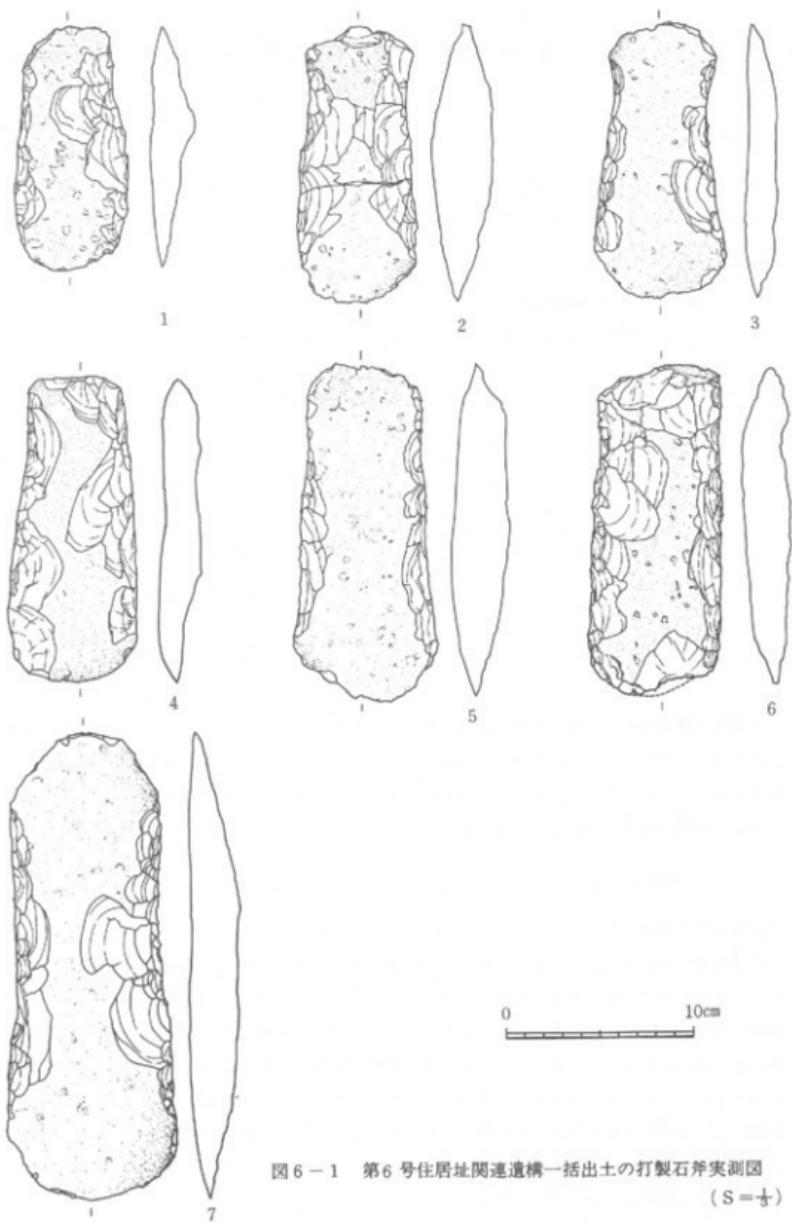


図 6-1 第6号住居址関連遺構一括出土の打製石斧実測図
(S = $\frac{1}{2}$)

形態については、短冊形、撥形、分銅形の3種類に分類でき、形態を特徴づけるのは頭部と刃部における幅の関係と側縁部の形である。

短冊形は頭部と刃部の幅が同じもので、基本形は縦長の長方形であり、完形品は110点である。側縁部の形により4類に細分され、側縁部が直線的なもの（図6-2の1～3、図版47の上）、内曲するもの（図6-2の4～9、図版47の中・下）、外曲するもの（図6-3の1～3、図版48の上）、それに三日月形になるもの（図版48の中）である。

撥形は頭部から胴部・刃部にかけて幅広になり、刃部で最大幅をとるものであり、完形品は60点である。基本形は縦長の台形であり、側縁部の形により3類に細分される。側縁部が直線的なもの（図6-3の4～9、図6-4の1～3、図6-7の1～2・4～6、図版48の下、図版49、図版50の上・中）、内曲するもの（図6-4の4～8、図6-5の1～4・6～9、図6-6の1～5、図6-7の7～8、図版50の下、図版51、図版52の上・中）、やや強く内曲するもの（図6-5の5、図6-6の6～9、図6-7の3～9、図6-8の1～3、図版52の下、図版53、図版54の上）である。また、撥形の刃部幅が頭部幅の何倍になっているかをみてみると、その1.15～2.0倍に分布して1.25～1.55倍に集中する傾向が認められる。すなわち、短冊形と撥形では1.15倍を境界にして区切ることができるといえよう。短冊形は厳密な意味では1.0倍だけであるが、1.0倍から1.14倍までの幅があり、短冊形から撥形への移行は極めて連続的である。

分銅形は頭部と刃部の幅が同じで、胴部のくびれるものである（図6-8の4～9、図版54の中・下）。完形品は13点である。

大きさについては、短冊形で最大のもの（図6-1の7）は、長さ25.0cm、幅9.0cm、厚さ2.7cm、重さ689.3gであり、最小のものは、長さ9.1cm、幅5.6cm、厚さ1.5cm、重さ82.2gである。一般に、長さ9～16cm、幅4.5～9cm、厚さ1.5～4cm、重さ100～500gの範囲内にほとんどのものがおさまる。撥形で最大のものは、長さ23.3cm、幅7.7cm、厚さ4.1cm、重さ906.5gであり、最小のもの（図6-3の6）は、長さ8.4cm、幅4.4cm、厚さ1.5cm、重さ68.5gである。一般に、長さ10～18cm、幅6～10cm、厚さ2～4cm、重さ150～600gの範囲内にはほとんどのものがおさまる。分銅形で最大のものは、長さ14.5cm、幅9.4cm、厚さ3.2cm、重さ492.7gであり、最小のものは、長さ10.7cm、幅5.9cm、厚さ2.2cm、重さ182.5gである。一般に、長さ10～15cm、幅6～10cm、厚さ2～4cm、重さ200～500gの範囲内にはほとんどすべてのものがはいり、大きさが比較的まとまっている。

長さは、短いもので8cmくらいからみられ、長いものになると20cmを越えるものもみられ、全体的には9～18cmの範囲にあり、特に10～15cmに集中する傾向がある。幅は4.5～11cmの範囲にはほとんどのものが含まれ、厚さは2～4cmの範囲にあり、1.5cmより薄いものは種である。重さは150～600gの範囲にあり、1kgを越えるものは1点しかない。次に、短冊形、撥形、分銅形の一般的な大きさを比較してみると、分銅形は撥形に比べて長さが短い傾向にある。短冊形は撥形に比べてやや小振りである。

打製石斧のほとんどのものには河原石の礫皮が残っており、このような自然面が $\frac{1}{2}$ 以上残っているものが打製石斧全体の約70%を占め、 $\frac{1}{2}$ 以下からほとんど残っていないものは少ない傾向にある。自然面の残っている部分は、一般に胴部の両側と刃部を除く部分である。とりわけ、胴部

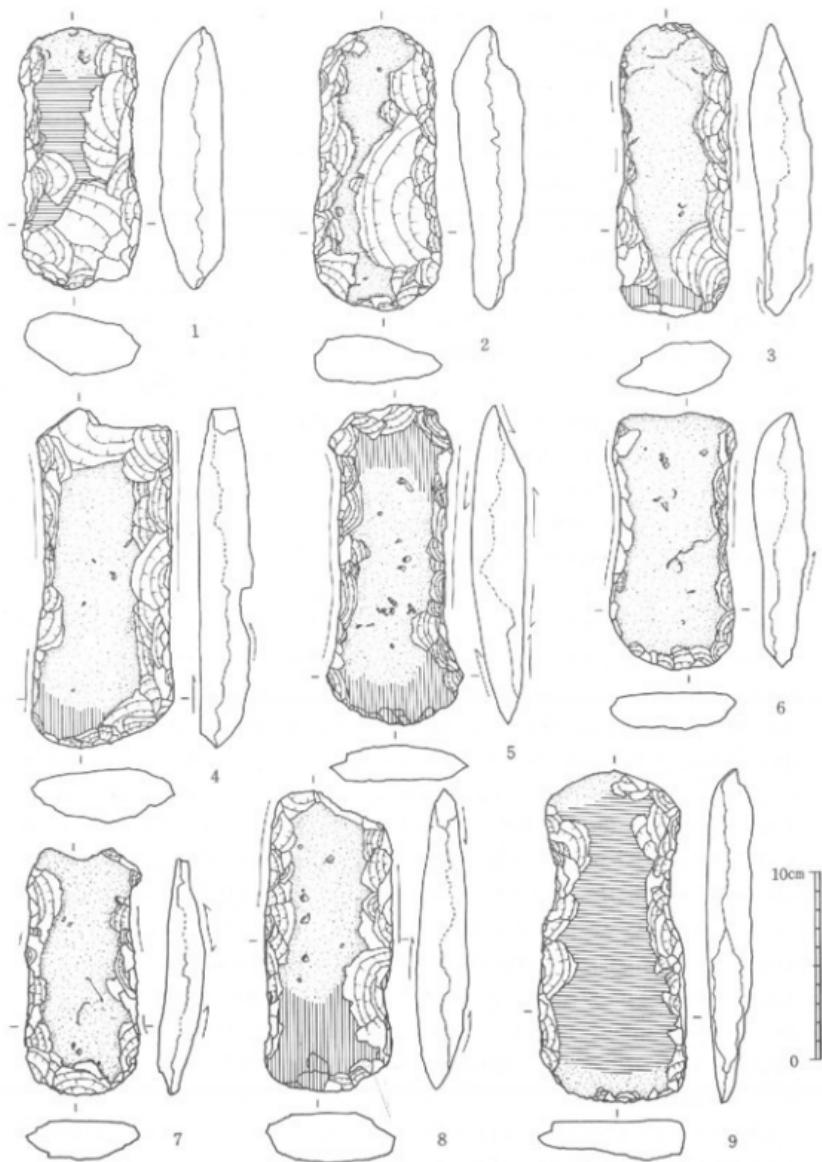


圖 6-2 打製石斧實測圖 1 ($S = \frac{1}{3}$)

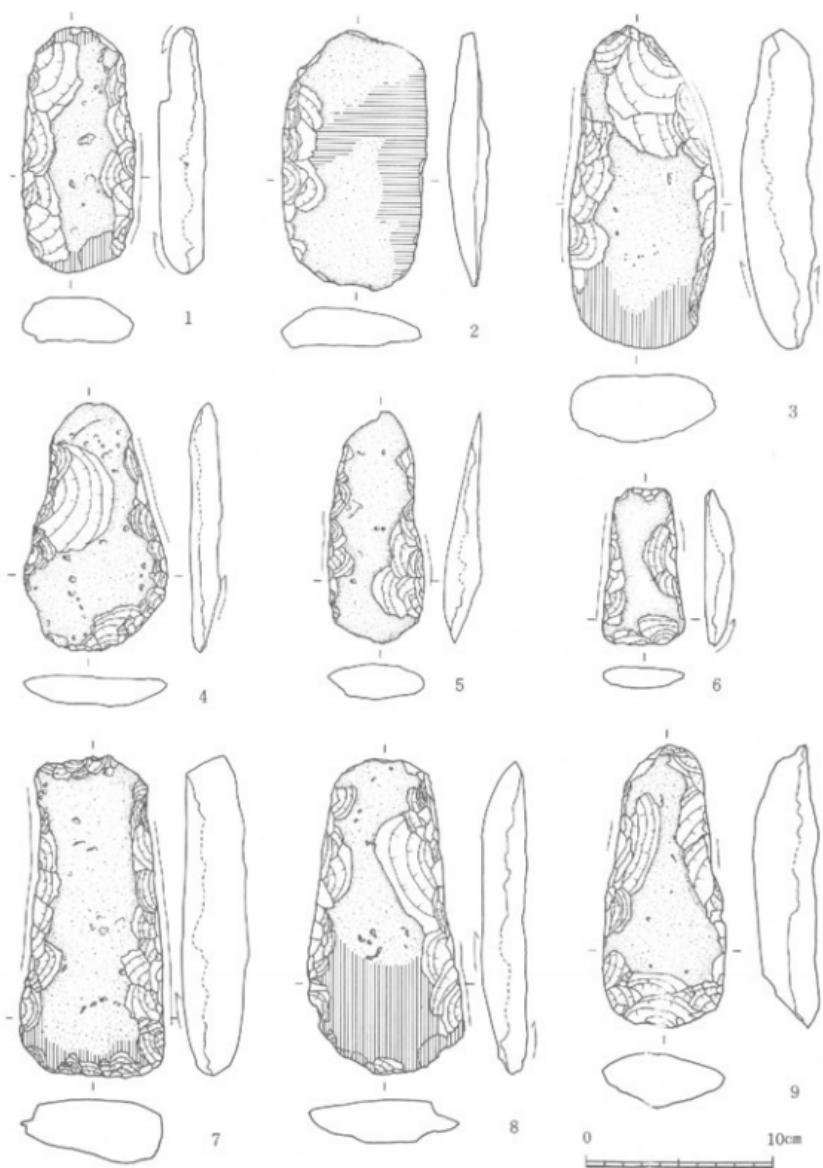


図 6-3. 打製石斧実測図 2 ($S = \frac{1}{3}$)

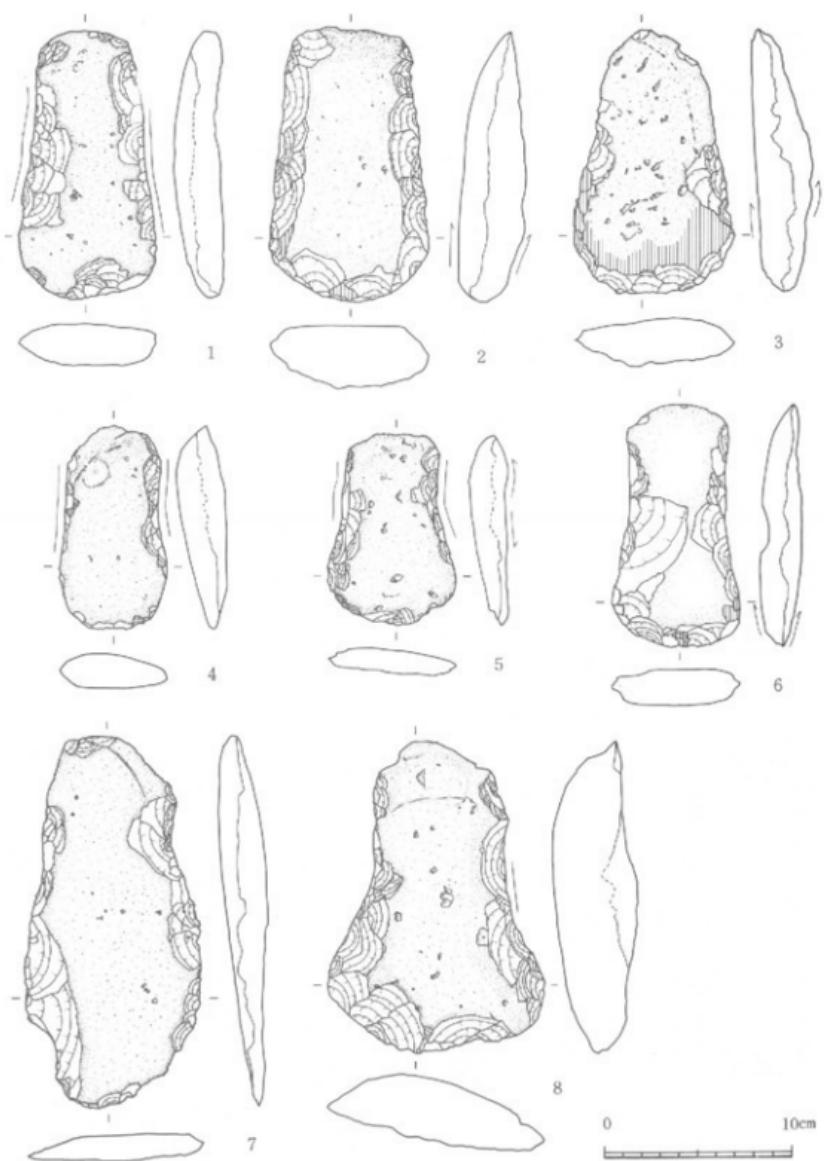


圖 6-4 打製石斧實測圖 3 ($S = \frac{1}{3}$)

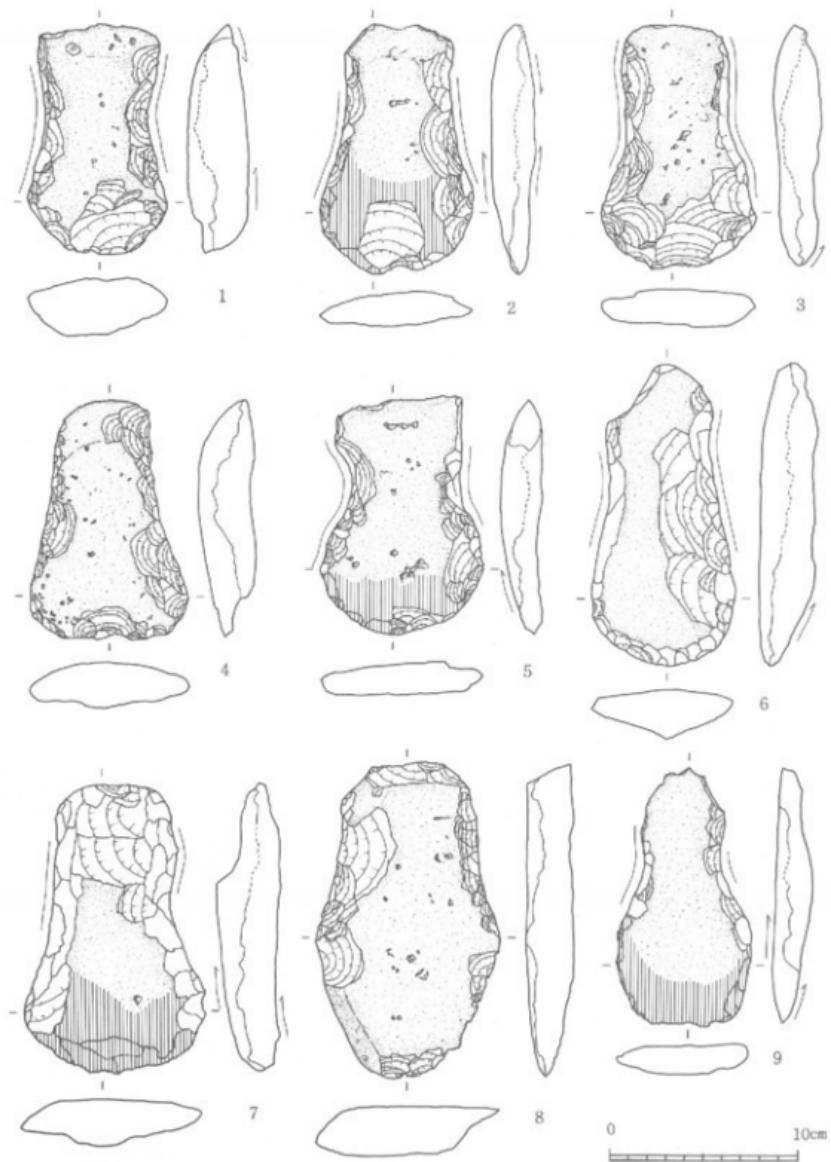


図6-5 打製石斧実測図4 ($S = \frac{1}{3}$)

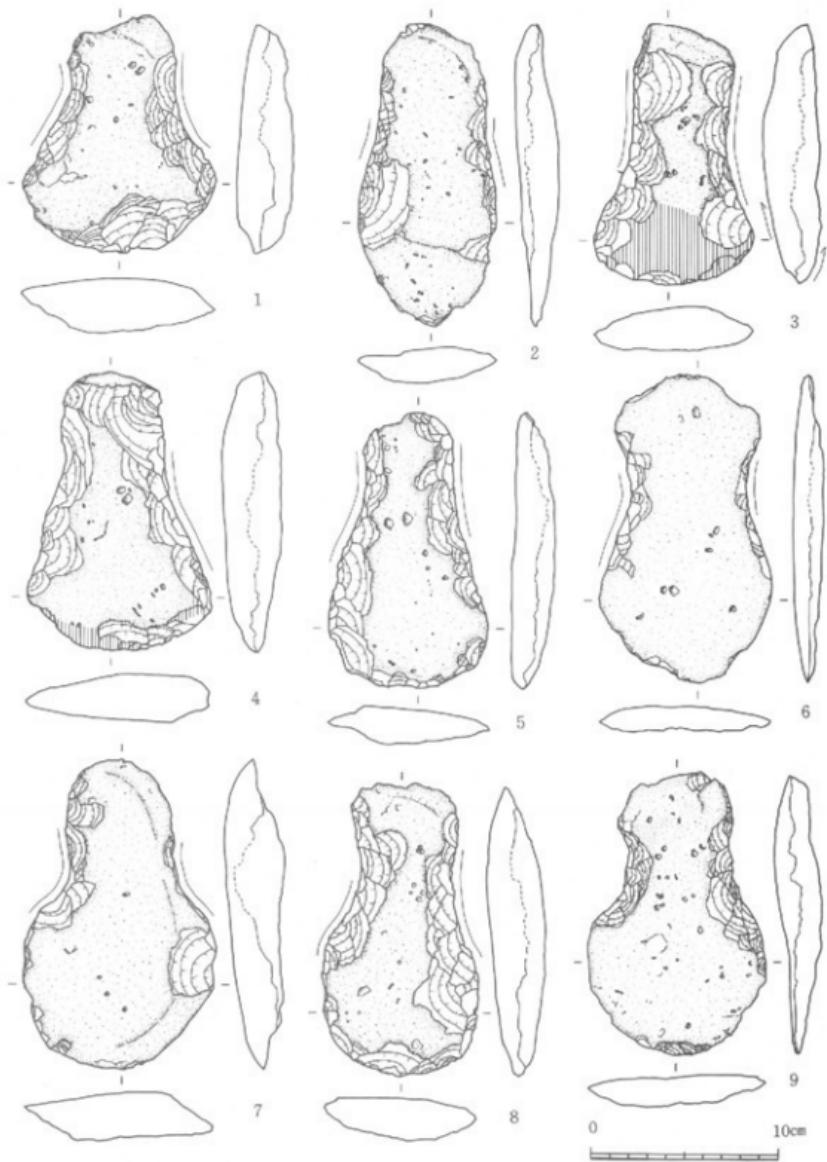


图 6-6 打制石斧实测图 5 ($S = \frac{1}{2}$)

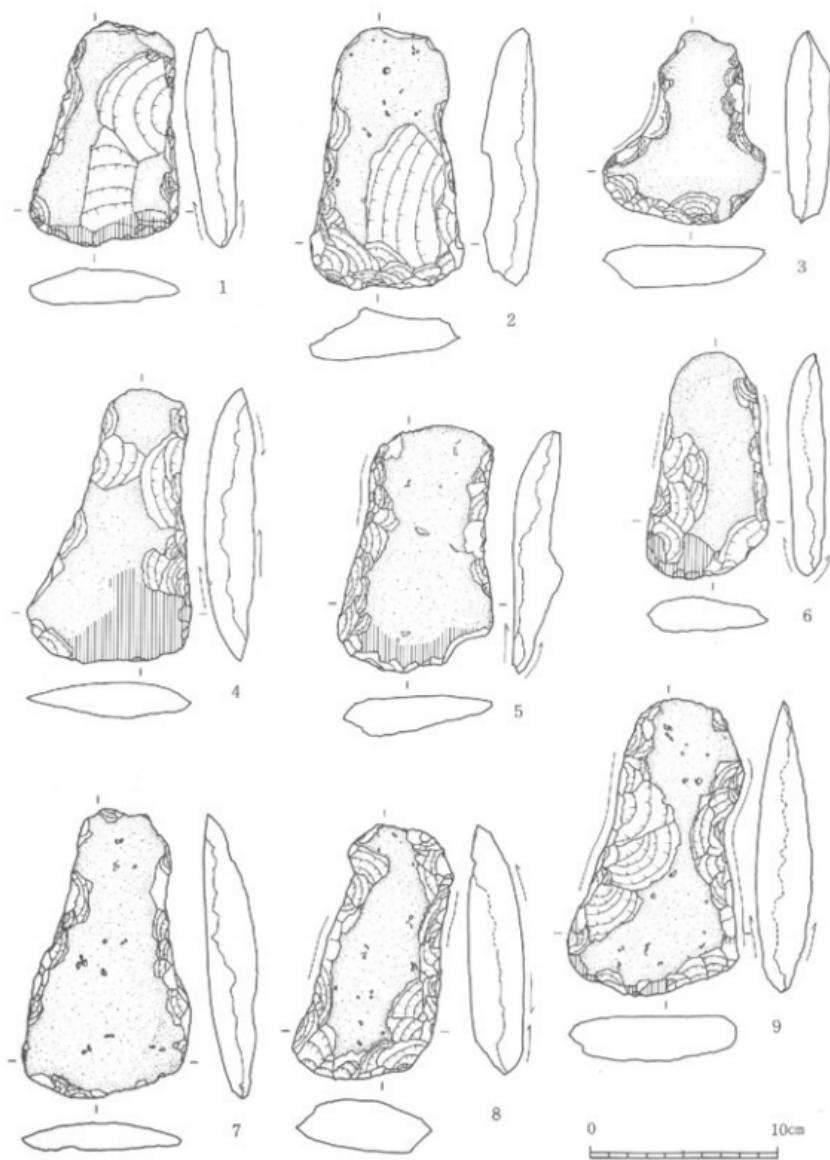


圖 6-7 打製石斧實測圖 6 ($S = \frac{1}{2}$)

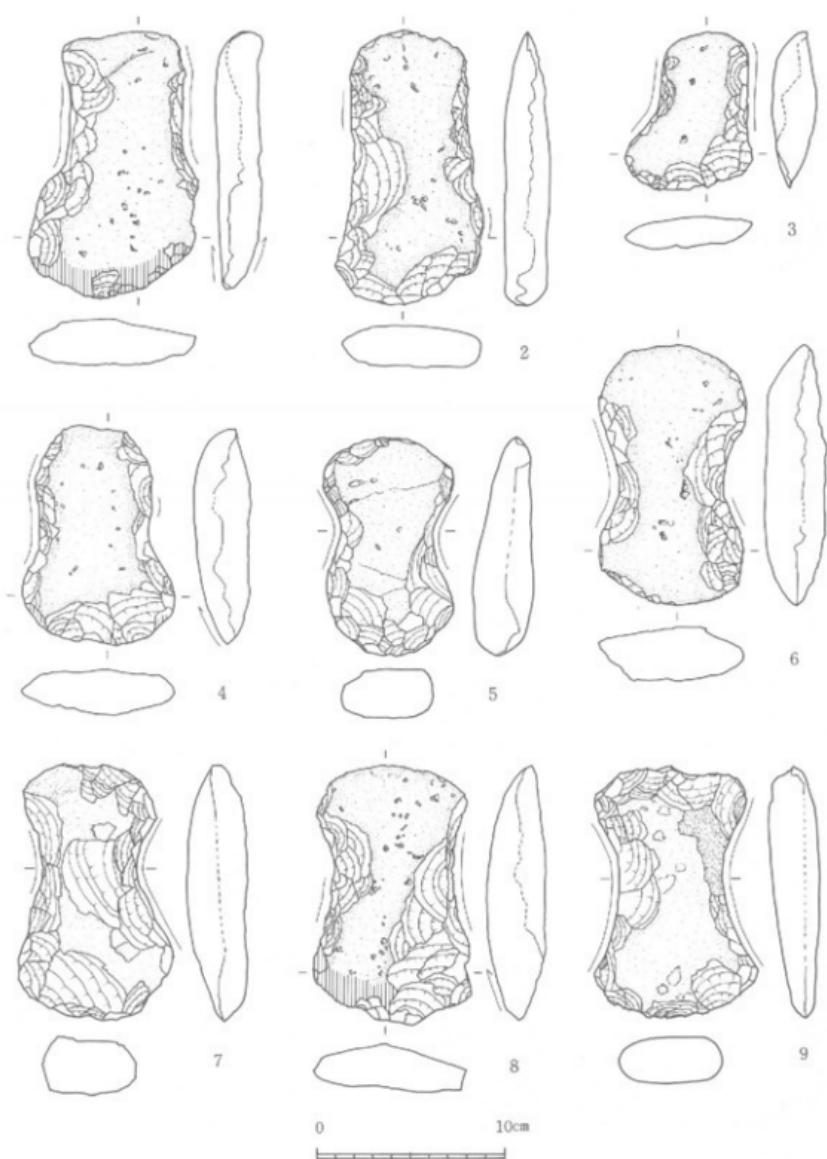


圖 6-8 打製石斧尖測圖 7 ($S = \frac{1}{3}$)

は中央に残っていて両側に残っていないものが多い。このことは、頭部に比べて側縁部や刃部により多くの調整が施され、胴部の向側や刃部の自然面が剥離したことを示すものであろう。本遺跡の打製石斧について河原石のどの部分の剥片が使われているかを推定してみると、河原石の周縁部の丸味を帯びた部分が、打製石斧の頭部になるような剥片のとられ方のものが多く、頭部は丸味を帯び、胴部から刃部にかけては平らである。頭部は反るといった感じではなく、丸味を帯びるといった感じである。また、少ないながらも両面に自然面の残っているものがあり、河原石1個から打製石斧1点が製作されたことを示している。さらに、頭部にだけ自然面が残っており、そのカーブの具合から河原石の芯を利用して製作されたと考えられるものもある。復元しうる河原石の大きさは、手頃なものから一抱もあるようなものまで考えられる。本遺跡の打製石斧はこのような大きさの河原石を素材にして剥片をとり、それに調整を加えて製作されたと考えられ、河原石から剥片をとる具体的な方法の一つとして扁平円錐打削法（小林1978）があげられよう。

打製石斧の側縁部を観察すると、敲打痕のみられるものもある。河原石から剥片をとる製作技術上、必然的に胴部は刃部や頭部に比べて肉厚となる。肉厚な部分の形を整えるために調整が多く施され、その結果として敲打痕が生じ、胴部の自然面の戻り具合が少なくなったものと思われる。このことは、側縁部が内曲するする形態のものに多いことからもうかがわれる。短冊形や撥形の打製石斧のはとんどのものは着柄して使われたと考えられるが、敲打痕のみられないものも存在する。すなわち、側縁部の敲打痕は斎藤基生氏が指摘している（斎藤1978）ように、着柄のための刃済ではなく、整形のために施された調整の結果であったと思われる。

欠損品は、部分的に欠損しているもの、頭部片、胴部片、刃部片、破片の5種類に分けられ、欠損品の数は完形品の数をかなり上回り、欠損品の割合は打製石斧全体の73.3%である。部分的に欠損しているものは1433点出土しており、そのうちわけは短冊形224点、撥形1209点である。また、欠損品に対して完形品は短冊形110点、撥形606点であり、欠損品は完形品のほぼ2倍となっている。また、頭部片234点、胴部片127点、刃部片70点、破片139点であり、頭部としたもののなかには、刃部になるものが若干あるかもしれないが、頭部の数が刃部の数を大きく上回ることは疑いえない。欠損品のなかには火熱を受けているものもあるが、完形品に火熱を受けているものがないことや火熱を受けた欠損品の状態から、完形品の時に火熱を受けたのではなく、破損した後に火熱を受けたと考えられる。

打製石斧の刃部や胴部を細かく観察すると剥離の後線が磨滅していたり、刃部の色が光沢を帶びて胴部や頭部のそれと違っていたり、条線の痕がみられたりする。こうした磨耗痕は使用することによって生じた2次的な属性であり、その部位により磨痕と擦痕（渡辺1975）に分けられる。さらに磨痕は条線痕と磨滅痕に分けられ、両者が共存するものみられる。

磨痕の平面形態は、湾曲の強い三日月形、U字形、W字形の3つの形態が認められる。湾曲の強い三日月形・U字形の磨痕は、刃部から胴部下半の側縁部にそって分布する。すなわち、両側縁部の磨痕の高さが刃部中央部のそれよりも高くなってしまい、それぞれの形を呈している。またW字形は自然面にはあまりみられず、剥離面によくみられ、特に刃部・胴部下半の肉厚になっている部分にみられる。剥離面の磨痕が付着している部分は自然面のように一様ではなく、剥離の

稜線とが出っぱっている部分である。このことは、これらの部分が最もよく土壤に触れ、そのため磨耗が著しく進んだことを表わしていると考えられる。側縁部では稜線がわざかに磨滅している程度であり、著しく磨耗しているものは全くない。自然面と剥離面の両面における磨痕の高さを比べるとどちらか一方が高くなっている、両面とも同じ位の高さに及ぶものはほとんどない。しかし、本遺跡の打製石斧にみられる磨痕は京都府舞鶴市桑飼下遺跡（渡辺1975）、山口県平生町岩田遺跡（潮見1960）、高知県中村市中村貝塚・入田遺跡（木村1970）、福岡県二丈町広田遺跡（小池1980）の打製石斧の磨痕に比べてあまり明瞭ではない。そしてそのほとんどが磨滅痕であり、条縫痕は極めて少なくて縱方向のものばかりであり、磨痕のある打製石斧の点数自体も少ない。

自然面や剥離面の側部や側縁部が磨かれているものもあり、半磨製石斧とも言えるが、その形態・大きさ・製作技術などからして打製石斧の範疇に含まれるものである。7点出土しており、完形品4点（図6-2の1・9、図6-3の2、図6-5の7）、欠損品3点である。欠損品が存在するので通常の打製石斧と同じように使われたと考えられるが、「磨く」という相違点があり通常のものとは違った別の用途があったかもしれないと考えられる。

打製石斧は、一般に土掘り具として認められており、土掘りの機能が考えられている。その使用に際して着柄して使われたのか、着柄されないで手鍤として使われたのかという点と、着柄されたのならば鍤先であるのかそれとも鉗先であるのかという点に、問題の焦点が絞られるようと思われる。分銅形に関しては、紅頭嶼（蘭嶼）のヤミ族がかつて使っていたChichivchivのような使い方（鹿野1942）が、最も適当であると考えられる。短冊形や撥形の着柄の問題については、その手掛となる擦痕の残っているものがほとんどなく、着柄されずに手鍤として使われたとも考えられようが、形態や大きさなどからして着柄して使われたと考える方が適当である。擦痕がほとんど残っていないのは着柄されなかったからではなく、擦痕がつにくかったり、それがつく前に使用により欠損してしまったものと推測される。ほとんどの短冊形・撥形は着柄して使われたと考えられるが、鍤先として使われたのか、鉗先として使われたのかという問題については、鍤先も鉗先も同じような磨耗痕のあり方を示すので磨耗痕の状態からだけでは導きえない。

用途としては、豊穴住居・柱穴・埋葬用土壙・貯蔵穴などを掘ったり、土器の粘土を採掘したり、根茎類の植物質食料を採集したりすることなどが考えられる。これらの中には打製石斧が出現する以前の時期から存在するものもあり、打製石斧はこれらの労働の能率を高めたであろう。しかし、御経塚遺跡の打製石斧の大形化・量産化は、一般論としてそれだけでは理解しえない側面を持っている。根茎類の植物遺体の検出例やクズ・ワラビなどの地下茎の採集に関する民俗例がほとんど皆無に等しくて実証性を欠くが、打製石斧はクズ・ワラビ・テンナンショウ・ヤマユリなどの根茎類を採集するのに果した役割が、最も大きかったと推測される。

2. 石皿

石皿は363点出土しており、断面の形態から4類に分類することができる。

I類 周縁から中央にかけて凹むものである（図6-9の1・4・5、図版55、図版56の1）。49点

出土しており、すべて欠損品である。

II類 周縁に低い縁があり、表面がほぼ平坦なものである（図版56の2）。4点出土しており、すべて欠損品である。

III類 表面が平坦で、板状を呈するものである（図6-9の2・3、図版56の3～6）。53点出土しており、すべて欠損品である。

IV類 中央部が平坦かやや高く、周縁に向けてゆるく傾斜しているものである（図6-10、図版57）。257点出土しており、完形品54点、欠損品203点であり、欠損率は高く、79%である。IV類の表面には磨耗痕や敲打による凹みがみられ、その状態は敲石と同じようなあり方であり、周縁部にも磨耗痕や敲打痕のみられるものがある。形状は楕円形を呈し、長さや幅に比べて厚さが薄く、偏平である。完形品について重さをみてみると、1000g以下が12点、1001～2000gが31点、2001～3000gが8点、3000g以上が3点であり、重さにはかなり幅が認められるが、1000g台のものが多い傾向にある。

また、石皿のなかには、図6-9の3～5のようにタール状の付着物のついているものもみられる。

表6-2 磨石・敲石の形状の分布表

分類	円 形	椭 圆 形	長橢圓形	不 定 形	計
磨 石	79	55	17	16	167
敲石I類	74	159	40	43	316
敲石II類	150	311	59	43	563
敲石III類	24	48	8	5	85
敲石IV類	37	134	16	8	195
敲石V類	17	52	6	10	85
敲石VI類	10	19	3	2	34
	391	778	149	127	1,445

表6-3 磨石・敲石の形状の分布表

重(g)	1	101	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	計
分類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
磨 石	1	6	24	33	26	25	22	11	8	3	3	4	1				167
敲石I類	2	12	42	76	56	51	30	17	12	6	5	3	3	1			316
敲石II類	2	14	45	14	119	82	65	51	29	24	13	6	4	2	3		563
敲石III類	1	6	17	8	9	20	9	7	6				1	1			85
敲石IV類		6	23	25	33	46	22	9	13	4	4	5	3	2			195
敲石V類	2	6	17	10	12	10	9	6	5	4	1	1	2				85
敲石VI類		1	2	11	4	5	3	3	1	1	2	1					34
計	7	39	141	265	257	214	197	119	73	53	30	19	15	8	8		1,445

3. 磨 石

円盤の表面に磨耗痕だけがみられるものを磨石とした（図6-11、図版58）。磨石として分類したものの中にはアバタ状の小さな凹みが散在しているものがあるが、磨耗痕が顕著である

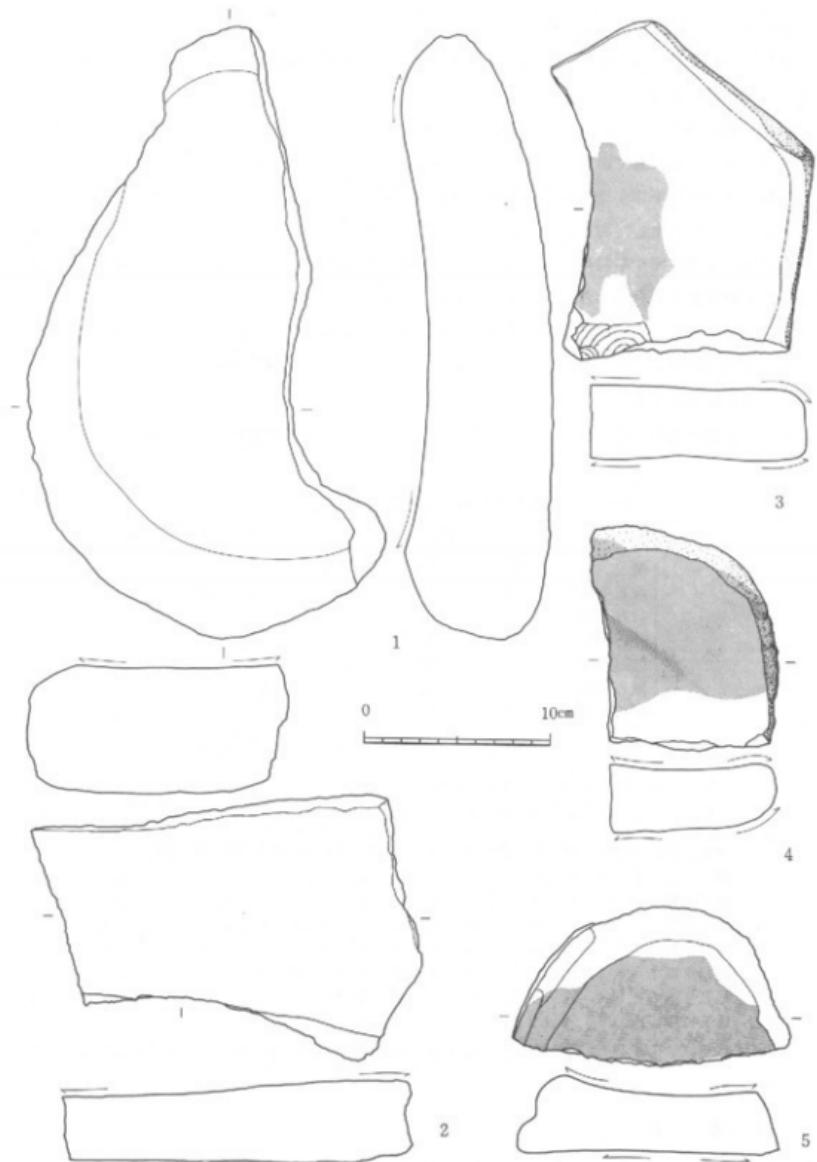


圖 6-9 石皿実測図 1 ($S = \frac{1}{3}$)

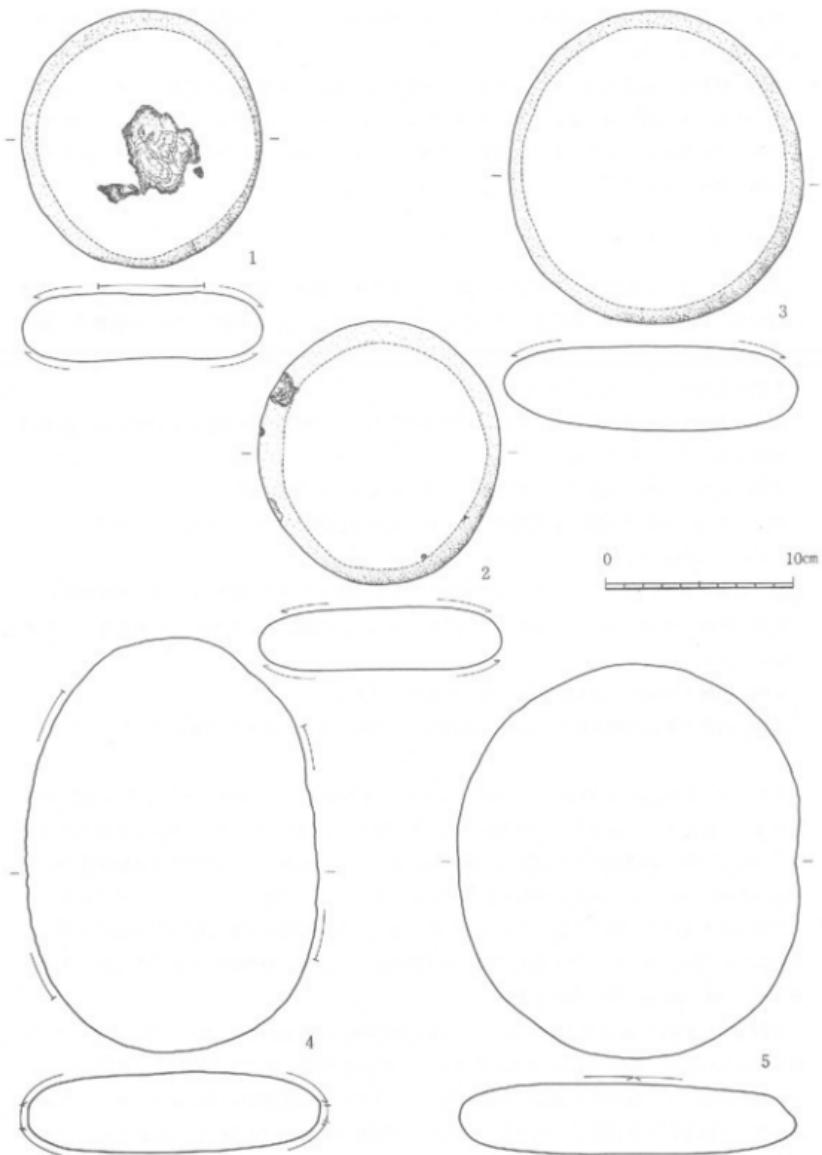


図 6-10 石皿実測図 2 ($S = \frac{1}{2}$)

で磨石とした。総数268点出土しており、完形品は167点であり、欠損品は101点であり、完形品が全体の62.3%を占める。

磨石の磨耗痕は表面全体に広がっており、完形品で片面にのみ磨耗痕が認められるものは26点あり、両面ともに磨耗痕が認められるものは141点である。形状は、円形を呈するものが47.3%を占め、次に楕円形を呈するものが多い。重さは、1000 g を越えるものもみられるが、201~700 g の間に集中している。

4. 敲 石

円礫の上・下面に敲打痕のある凹みが認められるもの、表面に磨耗痕の認められるもの、円礫の周縁部に敲打痕の認められるものを、敲石として分類した。出土状態は、他の石器類や土器と同様で包含層中のものが多く、特別な状況を呈するものはない。総数1675点出土しており、そのうち完形品は1278点、欠損品は397点である。

円礫の表面の敲打痕と磨耗痕、そして周縁部の敲打痕の3種類の使用痕の組合せから、敲石は6類に分類することができる。

I類 円礫の表面に敲打による凹みだけがみられるものである（図6-12の1~3）。

II類 円礫の表面に敲打による凹みがみられ、周縁部に敲打痕のみられるものである（図6-12の4~6、図版59の上）。

III類 円礫の表面に敲打による凹みと磨耗痕がみられるものである（図6-13の1、図版59の下）。

IV類 円礫の表面に敲打による凹みと磨耗痕がみられ、周縁部に敲打痕のみられるものである（図6-13の2~4）。

V類 円礫の周縁部に敲打痕だけがみられるものである。

VI類 円礫の表面に磨耗痕がみられ、周縁部に敲打痕がみられるものである（図6-13の5~6）。

I類では、完形品が316点出土しており、完形品全体の24.7%を占める。そのうち、片面にのみ凹みがみられるものは95点あり、両面に凹みがみられるものは221点であり、後者がI類のはば70%を占めている。敲打痕のある凹みは、最も深いもので1 cmを測り、その位置は長軸端部から4~6 cmの所にみられる。凹みの個数は最多で3個であり、1・2個のものがほとんどであり、アバタ状の小さな凹みが散在するものもみられる。また、その形態は円形や楕円形のものが多い。形状については、楕円形を呈するものがほぼ半数を占め、円形、長楕円形のものがこれに次ぐ。重さは、201~700 g の間のものが多い。

II類は、完形品が563点出土しており、完形品全体の44.1%を占める。これらの中で片面にだけ凹みがみられるものは91点あり、両面に凹みがみられるものは472点であり、後者がII類の83.8%を占めている。I・II類とも画面に凹みの残っているものが、圧倒的に多い傾向にある。表面の凹みは、I類と同じ状況を呈している。周縁部の敲打痕は、周縁に部分的にみられるものが多く周縁全体に及ぶものや長軸の両端部にみられるものなどがある。形状は楕円形を呈するものが半数以上であり、次に円形のものが多い。重さは、201~800 g の間に集中する。

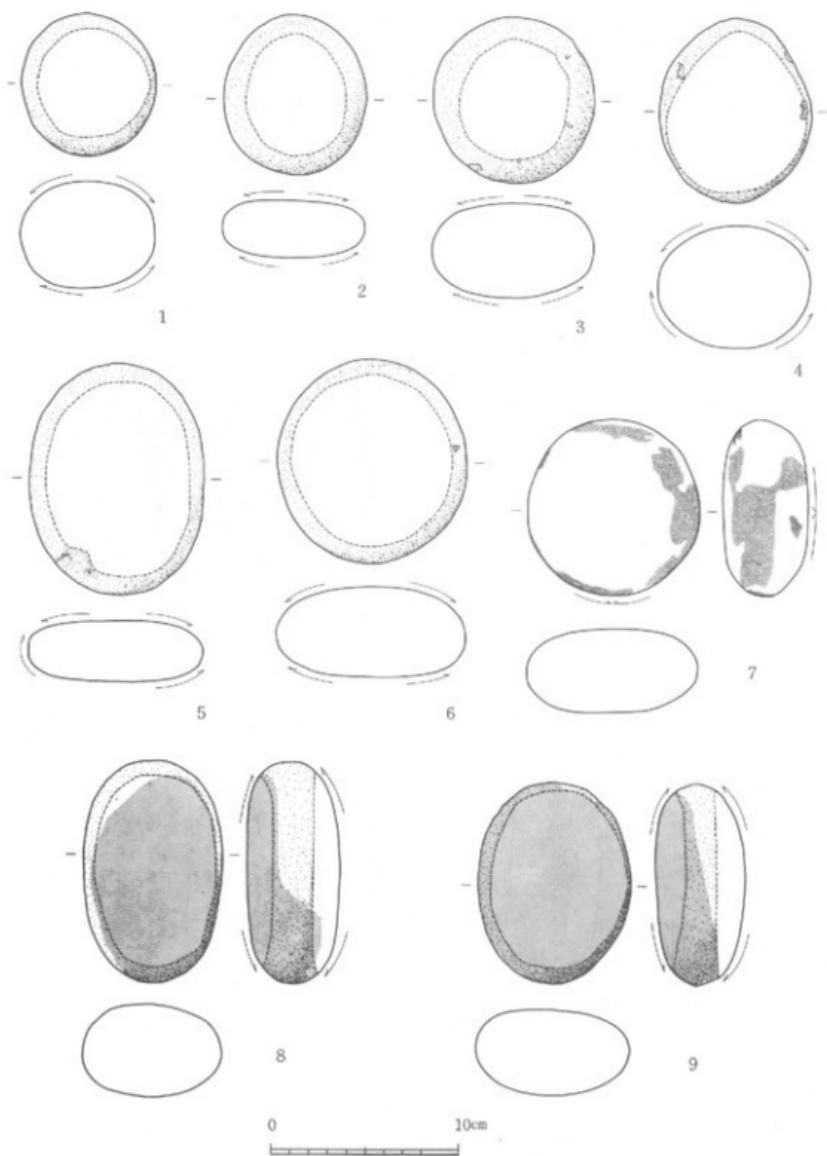


图 6-11 磨石実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

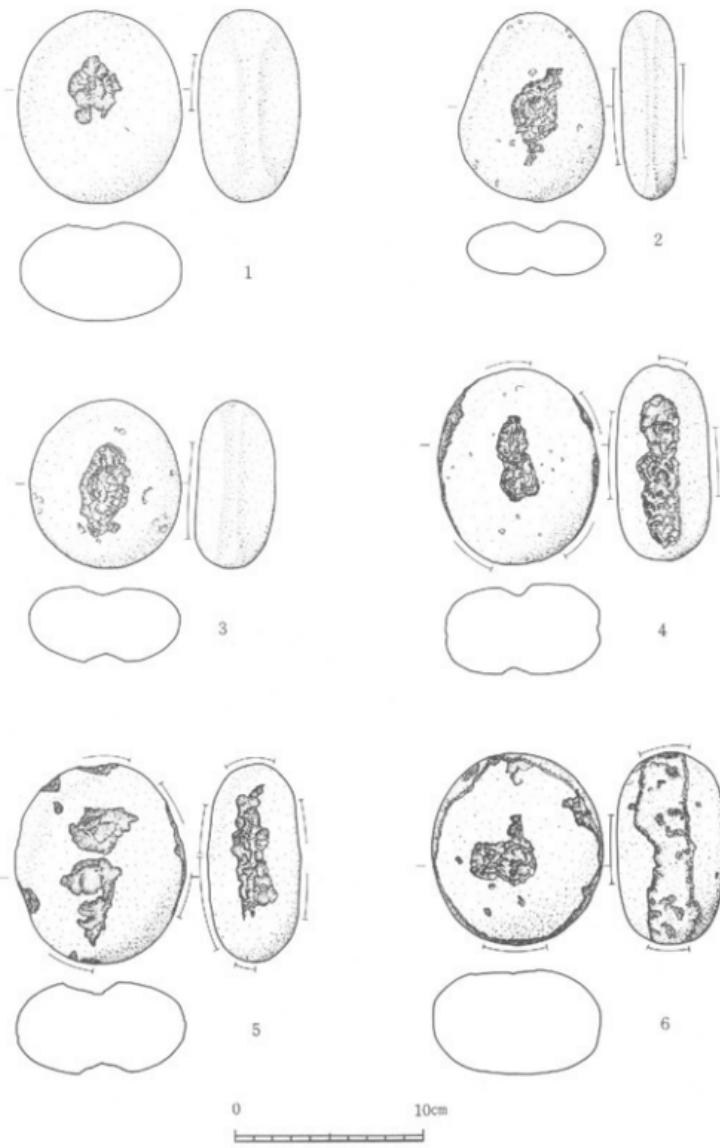


図 6-12 敲石実測図 1 ($S = \frac{1}{2}$)

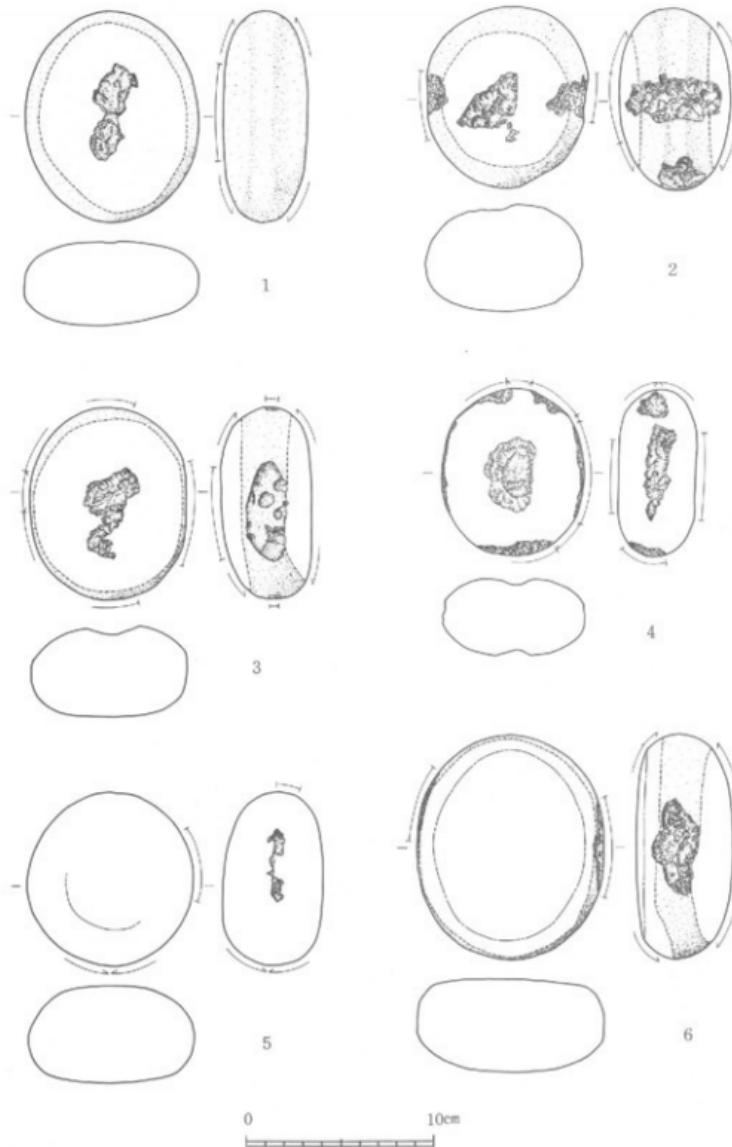


図 6-13 敲石実測図 2 ($S = \frac{1}{3}$)

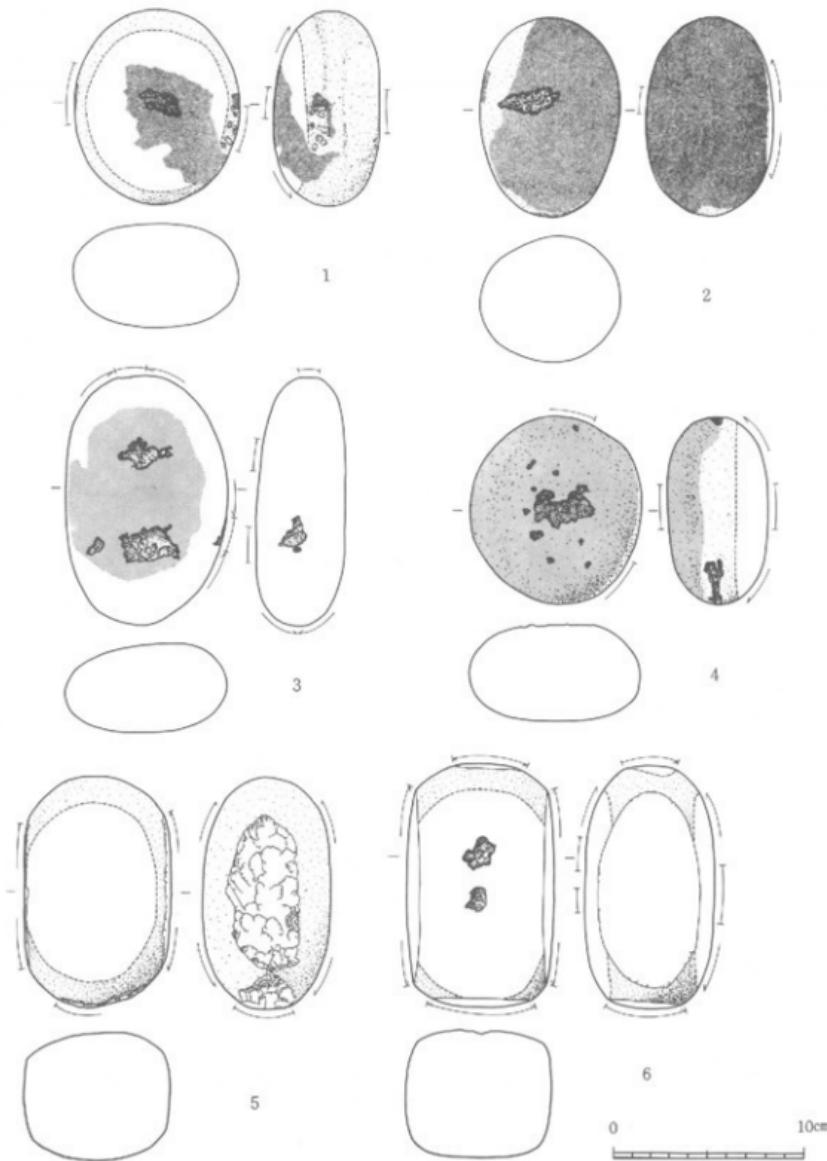


図 6-14 敲石実測図 3 ($S = \frac{1}{3}$)

III類は、完形品が85点出土しており、完形品全体のわずか6.7%を占めるにすぎない。両面ともに凹みと磨耗痕がみられるものが28点、片面に凹みと磨耗痕がみられて他面には凹みしかみられないものが27点あり、それぞれIII類の約30%程度を占めている。磨耗痕は表面全体に広がっており、凹みはI・II類と同じ状況にある。形状もI・II類と同様に楕円形のものが半数を占めている。重さも301~800gの間のものが多い。

IV類は、完形品が195点出土しており、完形品全体の15.3%である。両面ともに凹みと磨耗痕がみられるものが95点あり、IV類のはば半数を占めている。また、片面に凹みと磨耗痕がみられて他面に凹みがみられるものは57点あり、約30%を占めている。磨耗痕は表面全体に広がり、表面の凹みや周縁部の敲打痕はII類と同様の状況を示している。形状は、楕円形を呈するものが圧倒的に多い。重さは、IV類と同様に301~800gの間に集中する傾向にある。

V類は、完形品が85点出土しており、完形品全体の6.7%を占めるにすぎない。周縁部の敲打痕はII・IV類と同様で、全周に及ぶものや長軸の両端部にみられるものなどもある。この類も楕円形の形状のものが多く、201~700gの重さのものが多い。

VI類は、完形品が34点した出土しておらず、完形品全体に占める割合もわずか2.7%にしかすぎない。磨耗痕は表面全体に広がっており、両面ともにそれがみられるものが26点あり、片面のものより圧倒的に多い。周縁部の敲打痕はII・IV・V類と同様であり、特別な状況を示すものではない。形状も他の類と同様に楕円形のものが多く、重さは401~700gを中心分布している。

敲石や磨石にも石皿と同じように、火熱を受けているものやタール状の付着物がついているものがみられる(図6-11の8・9、図6-14の3・4、図版60の上)。火熱を受けている部分は表面や周縁に部分的であったり、全体的であったりする。タール状付着物の着いている部分も表面や周縁に部分的にみられたり、表面全体であったり、表面から周縁にかけてみられたりする。また、辰砂の付着しているものもみられる(図6-11の7、図6-14の1・2)。辰砂の付着している部分は表面や表面から周縁部にかけてであり、敲石としての3種類の使用痕が残っていない部分にも付着している。敲石の中には、周縁部が敲打されて面取りのみられるものが18点ある(図6-14の5・6、図版60の下)。面取りの部分は敲打痕が残っているものだけではなく、それと磨耗痕が残っているものもみられる。面の数は1、2、4、6面であり、2面のものが多い傾向にある。

I~VI類に分類した敲石では、I・II・V類のように敲打痕をもつものとIII・IV・VI類のように敲打痕と磨耗痕をもつものとがみられる。表面や周縁部に敲打痕のある敲石には敲く機能を考えられ、表面に磨耗痕のある敲石や磨石には磨る機能を考えられよう。

ところで、石皿IV類の磨耗痕は周縁部の下方に傾斜しているところにまでみられ、このことはとりも直さず、磨耗痕の付いている部分までは確實に使用されたということである。石皿IV類は縁がなくて下方に傾斜しているので、堅果類にしろ、根茎類にしろ、それらを磨り潰して製粉するのには不都合であるように思われ、物を敲き潰すための台石と分類すべき石器かもしれないと考えられる。石皿IV類の磨耗痕と敲石や磨石のそれとは類似しており、それは方向性を持たず、光沢を帯びてすべすべしているだけのものである。すなわち、磨耗痕のある敲石や磨石はたんに磨る機能を有していただけでなく、何らかのものを敲く機能も持っていたものと推察される。

5. 石 錘

石錘は、欠損品を含めて总数32点出土した。その内訳は、切目石錘3点、有溝石錘3点、礫石錘15点、敲打石錘11点である。

切目石錘は3点出土し、完形品である(図6-15の1、図版61の1・2)。図6-15の1は長軸の両端にのみ擦り切りによる切目があり、A種に分類されるものである(渡辺1973)。糸掛けの切日の幅は両端とも5mmであり、両端の切目を結ぶ線上の表面は磨耗している。重さは60.0gを測る。図版61の1もA種に分類されるものであり、長さ12.0cm、重さ108.0gである。切日の幅は両端とも6mmであり、側面が磨かれている。図版61の2は長軸の一端が打ち欠かれた後に擦り切られており、切日の幅は8mmで重さは132.0gを測る。

有溝石錘は、完形品が1点(図6-15の3)、欠損品が2点(図6-15の2、図版61の3)出土している。3点とも長軸上にのみ擦り切りによる溝がめぐり、A種に分類されるものである(渡辺1973)。3点の重さは、44.6g(同図2)、66.6g(同図3)、22.5g(同図版3)である。両端の溝の幅は3~4mmである。

礫石錘には一般にみられるような礫の長軸の両端が打ち欠かれているものと、礫の短軸の両端が打ち欠かれているものがみられ、前者を礫石錘I類、後者を礫石錘II類とする。礫石錘I類は完形品が5点、欠損品が2点出土している(図6-15の4・5、図版61の4・5)。完形品についてみると、重さで最も重いもの(図6-15の4)は337.2gであり、最も軽いものは26.2gである。長軸の長さで最も長いもの(図6-15の5)は9.4cmであり、最も短いものは4.2cmである。糸掛け部分においては、ほとんどが打ち欠きであるが、敲き済されているという状態のものもみられる。礫石錘II類は8点出土しており、すべて完形品である(図6-15の6・7、図版61の9~13)。重さで最も重いもの(図版61の13)は704.6gであり、最も軽いもの(図版61の10)は75.5gである。長軸の長さで最も長いものは13.0cmであり、最も短いもの(図版61の10)は5.2cmである。側縁部には敲打痕がみられる。また、図版61の13は両面に凹みがみられ、図版61の9・11の側縁部には敲打痕がみられる。これらは敲石から石錘に転用されたものであるのか、それとも石錘から敲石に転用されたものであるのか、前後関係は不明である。

敲打石錘というのは、礫の短軸の周りが溝状・帯状に敲打されているものである(図6-15の8・9、図版61の6~8、図版62の1~5)。本来は独鉛石ないしは独鉛状石器と分類すべき石製品かと思われるが、ここでは一応敲打石錘として分類したものである。完形品が10点、欠損品が1点出土している。重さで最も重いものは359.1gであり、最も軽いもの(図版61の7)は143.5gである。長軸の長さで最も長いものは10.3cm、最も短いものは5.2cmである。両面に凹み、長軸の両端に敲打痕がみられるものもある(図版62の4)。

石錘の重さと擦り切られたり、打ち欠かれたり、敲打されている糸掛け部分の幅の関係においては、切目石錘や有溝石錘は50~130gの重さの範囲にあり、両端の擦り切りの幅は5mm前後である。礫石錘やその他の石錘では重さにはばらつきがみられるし、両端の打ち欠きや敲打の幅も1cmくらいのものから5cmを越えるものまでみられる。

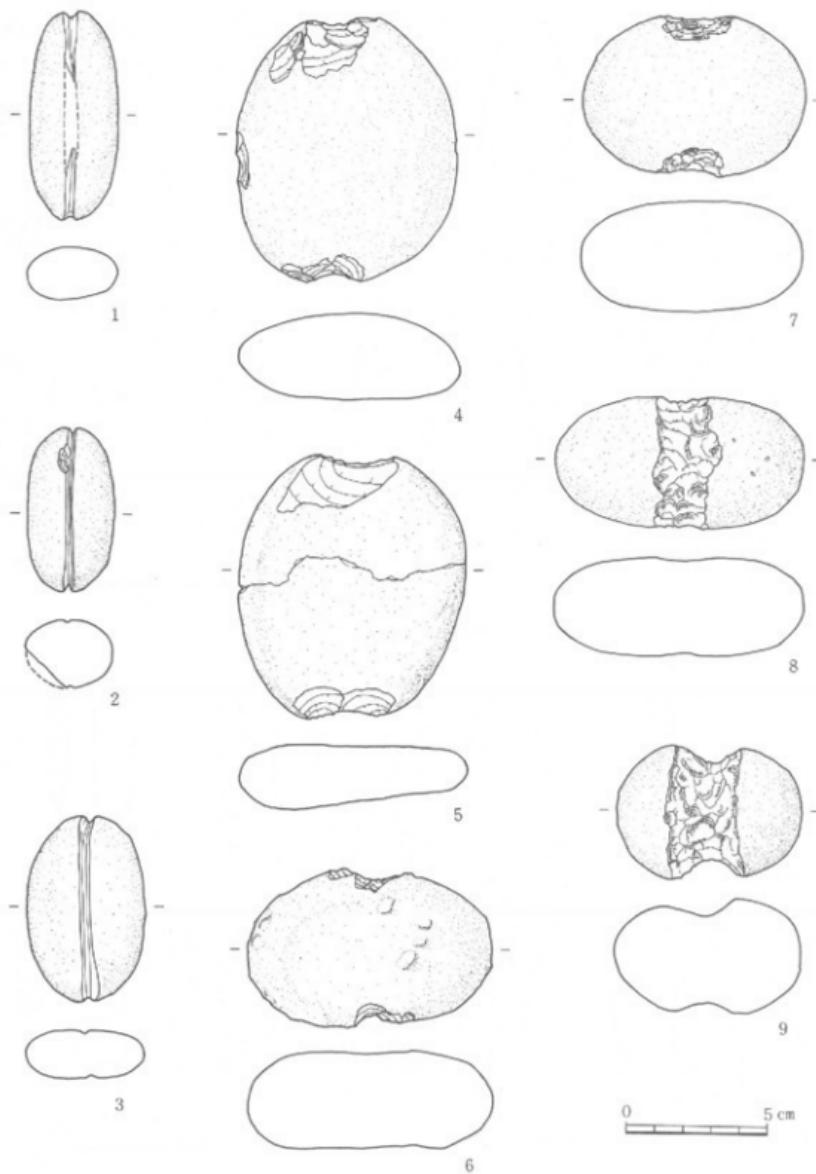


図 6-15図 石錐実習図 ($S = \frac{1}{2}$)

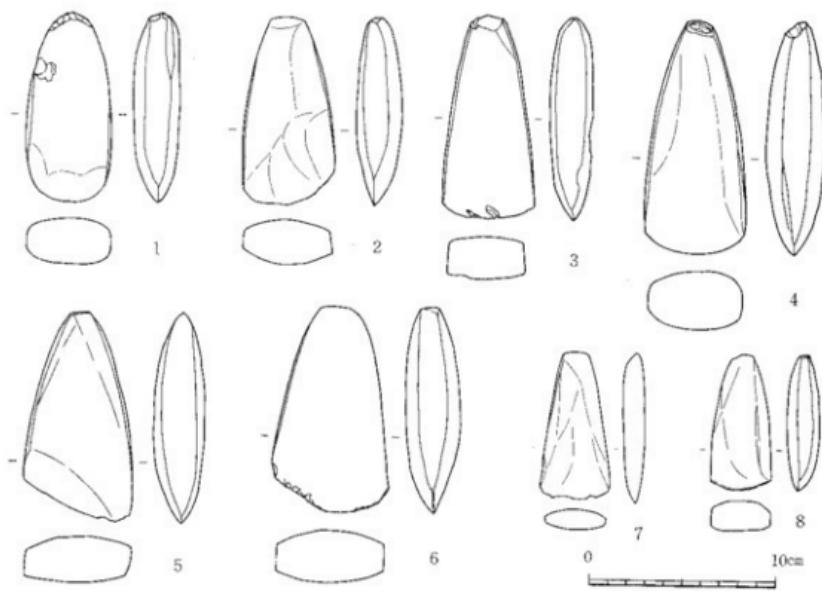


図 6-16 磨製石斧実測図 1 ($S = \frac{1}{3}$)

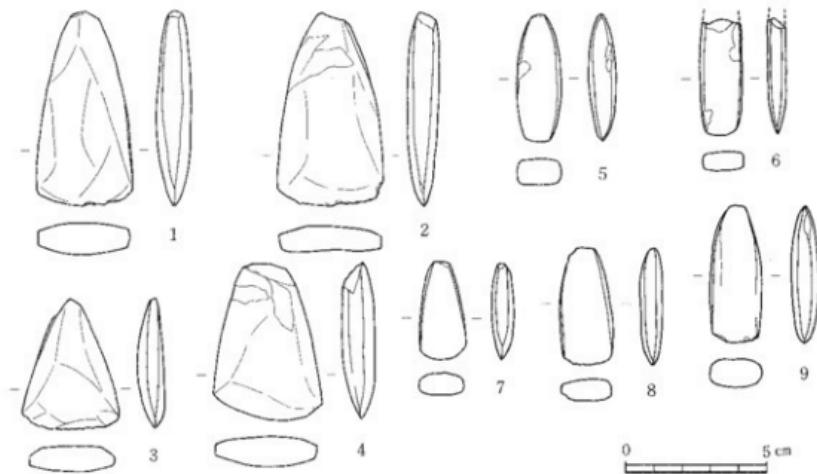


図 6-17 磨製石斧実測図 2 ($S = \frac{1}{2}$)

6. 磨製石斧

磨製石斧は、総数273点出土した。完形品はわずか38点であり、定角式磨製石斧36点、乳棒状石斧2点である。欠損品が多く、磨製石斧全体の86%を占める。頭部や刃部の欠けているものは209点を数え、他は頭部片4点、胴部片4点、刃部片8点、部位不明の破片10点である。定角式磨製石斧では正面と側面の稜線があまり明瞭ではなく、横断面が橢円形を呈するものが11点みられる。定角式のなかで最大のものは、長さ12.6cm、幅6.6cm、厚さ3.3cm、重さ479.0gであり、最小のもの(図6-17の7)は、長さ3.5cm、幅1.7cm、厚さ0.8cm、重さ8.0gである。

定角式は、大きさと形態から4類に分類できる。

I類 長さが9~13cm、幅が5~7cmに及ぶ1群である(図6-16の1~6、図版63の2~7)。厚さは2~3cmの間にほぼはいり、重さは100~300gくらいである。15点の完形品が含まれる。

II類 長さ6.5~8.5cm、幅3.5cm前後の細長い台形を呈する1群。厚さ1~2cm、重さ50~100gで(図6-16の7・8、図6-17の1・2、図版63の8~15・20~22)、12点の完形品が含まれる。

III類 長さは5cm前後で、幅が2.5~4cmの間にあり、厚さが1cm余りの扁平な1群である(図6-17の3・4、図版63の16~19)。重さは50gを越えることはない。完形品5点が含まれる。

IV類 長さは3.5~5cm、幅が1.5~2cmの長方形を呈するきわめて小形の1群である(図6-17の5~9)。厚さは1cmを、重さは30gを越えない。完形品4点を数える。

定角式の平面形においてはほとんどがややふくらみを持つ直刃であり、円刃はわずか6点である。また、偏刃も少ないながらも定角式I~III類にみられ、これは意図的に作られたものではなく、使用により消耗と磨研の繰り返しによるものと思われる。側面形をみるとほとんどのものが両凸刃(佐原1977)となっており、定角式IV類では弱凸強凸片刃となっている。頭部に敲打痕をもつものもみられる(図6-16の1)。II類はI類に比べて小形、扁平、軽量であり、両者の間では何らかの用途差が考えられるかもしれない。定角式IV類は、刃部の幅の狭さ、片刃気味になる点、重さが軽い点に特徴がある。

乳棒状石斧は8点出土しており、完形品2点(図版63の1)、欠損品6点であり、敲打を施して器面を調整しているものだけである。その形状は細長い円筒状をなし、頭部で細くなっている。横断面は橢円形をなす。概して、定角式I類よりも大振りである。

頭部や刃部の欠けている209点は、欠損個所が刃部にあるものが多いという傾向にある。

7. 円盤状石器

円盤状石器は、総数12点出土している(図版62の下)。最も大きいものは、長さ12.8cm、幅10.2cm、厚さ3.9cm、重さ579.0gである。最も小さいものは、長さ6.6cm、幅4.8cm、厚さ2.7cm、重さ116.5gであり、これは打製石斧が胴上半で欠損した後に自然面を磨き、折れた部分を調整したものである。一般に、長さ7.5~9cm、幅6.5~8cm、厚さ1.5~3cm、重さ100~250gである。

(山本直人)

8. 石 錐

石錐は766点（うち表面採集、出土地点不明は40点）出土している。発掘品726点のうち第5次調査300点、第6次調査203点、第7次調査194点（合計697点）と、その大半を第5次～第7次調査で得ている。しかし、遺構の検出が地山面まで掘り下げた段階ではじめて可能になるということもある。これらの石錐は第5次及び第6次調査で検出した2本の溝状遺構と、その他のピット・土塹・軽跡・住居跡等から計57点出土している以外はすべて包含層からの出土である。以下、第5次～第7次調査での出土品を中心にまとめてみた。

(1)石 錐質

697点の石錐に利用されている石材は輝石安山岩（62.4%）・フリント（28.7%）で約90%を占め、その他に凝灰岩（3.7%）・サヌカイト（2.4%）・流紋岩（2.2%）さらに玉髓（0.5%）・めのう（0.1%）である。後述する石錐の各タイプと使用石材との間には有意の相関性は認められない。

(2)形態観察と計測の基準

石錐の形態観察と計測を行うにあたって、長さ・柄部長・幅・尖端部角等の計測の基準を図6-18に示した。

柄部長については、基部から柄部への移行が、深い抉り込みを持たずに滑らかな曲線をなす場合（図6-21の35・41）には、剥離加工と曲線の状況に応じて基部と柄部を区別したので、若干の誤差をみておかなければならない。

尖端部角については、尖端部に近い側縁部がほぼ直線をなす場合には、その側縁に沿った直線のなす角度で表わし、尖端部に近い側縁部が曲線をなす場合には概ね尖端部付近での接線のなす角度をもって表わした。

(3)分 類

従来、石錐の形態分類は基部の形状あるいは平面形が三角形か五角形などに主眼をおいて行われてきたが、ここでは尖端部角を基本に平面形を補完要素として分類を行った。

基部形状については、技術的に稚拙な段階の製作作者にあっては、深い抉り込みや柄部の作出は欠損品を多く作ることにもなりかねず、また、矢柄への装着が——その直径とも関係するかもしれないが、抉り込みが深いほど石錐をおさえる面積が少なく固定が不安定となる。事実、有柄錐の柄部長は1cm前後であり、装着によると思われる長軸方向の両面の擦痕（図6-21-15）は基部端部より1.3cmにおよんでおり、1cm以上の抉り込みによってはじめて充分な固定が可能となると思われ、極端に深い抉り込みは装着に対して逆の効果しか持たないと考えるべきであろうし、実際、四基式の中にも極端に深い抉り込みを持つものは少ない。したがって基部形状は、技術的・構造的理由からほぼ平基式あるいは浅い四基式に主体をおかざるを得ず、若干のバラエティーを含むものと考えるべきであろう。

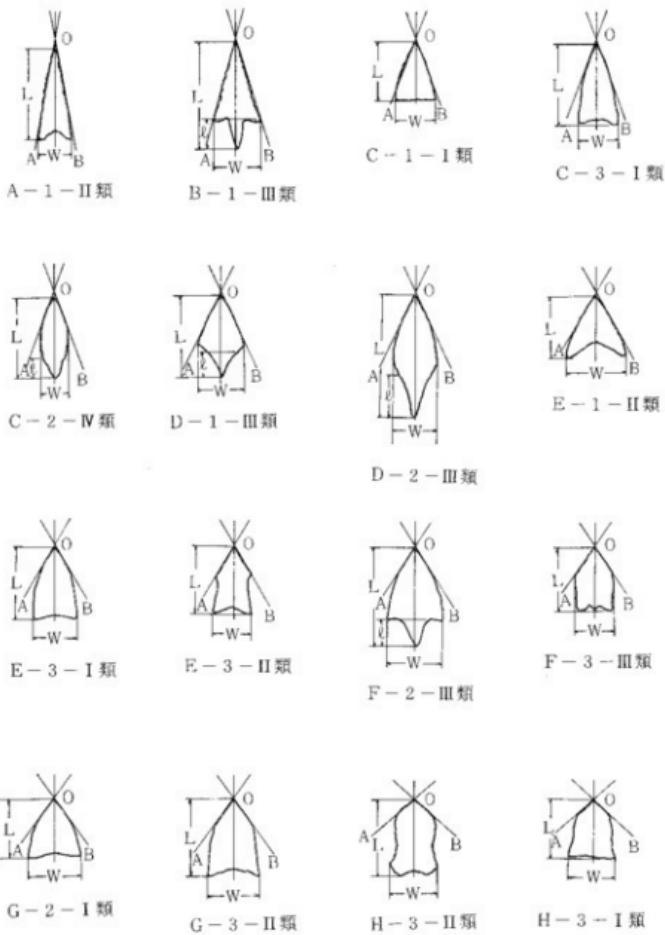


図 6-18 石鎚各タイプと計測基準 ($\angle AOB$: 尖端部角、L: 長さ、 ℓ : 柄部長、W: 幅)

刺突具である矢の一端としての石鎚の機能を考えた場合、尖端部角によってその基本形態が決定され、平面形に補完される。これは対象物によるものか、時期的なものか、あるいは地図的な要素によるものなのかは今後に待ちたい。

まず、尖端部角の分布状況を見ると図6-19に示したように、約 14° ～ 100° までの間に8つのピークがみられる。これらをA～H類の8類に分類する。

A類：尖端部角 20° 以下のもの。

B類：尖端部角 34° 前後のもの。

C類：尖端部角 42° 前後のもの。

D類：尖端部角 51° 前後のもの。

E類：尖端部角 60° 前後のもの。

F類：尖端部角 67° 前後のもの。

G類：尖端部角 75° 前後のもの。

H類：尖端部角 98° 前後のもの。



図6-19 尖端部角頻度分布図

A類には極めて細身で尖端部角が約 14° のものがある。B～F類は概ね $\pm 2^{\circ}$ の幅を持つ。G類は約 73° ～ 80° の間に分布し、H類は約 91° ～ 100° の間に分布がみられる。

次に平面形により3類に分類する。

I類：二等辺三角形を呈し、側縁部が直線的なもの。

II類：概ね二等辺三角形を呈するが、側縁部が外湾するもの。

III類：いわゆる五角形鎌で、尖端部側の側縁部は直線的なものが多い。

さらに基部の形態により4類に分類する。

I類：平基式のもの。抉りを持っても極く浅いもの。逆に若干ふくらむもの。

II類：凹基式のもの。抉りを持つもの。

III類：有柄式のもの。

IV類：柳葉形のもの。

なお、未製品を除いては凸基式のものはみられない。

これらをまとめたものを表6-4に示し、分類可能なものの(未製品と思われるものは除く)558点を以上のように分類し、その点数を表中に加えた。

(4)重量・長さ・幅

先述のように石鎚の基本形態は尖端部角によって決定され、平面形に補完されるものであるとの考え方から、重量・長さ・幅については基部形状は除外して計測・グラフ化を行った。全形を推定可能な491点について、全体とタイプ別に重量・長さ・長さ／幅(L/W)の分布を図6-20に示した。

重量は、全体では0.9 gに最大の分布がみられ、平均重量1.16 gである。4.0 g以上の5点を除いた場合には1.12 gとなり、後者の方が実際の状況に近いと思われる。タイプ別には、C類・

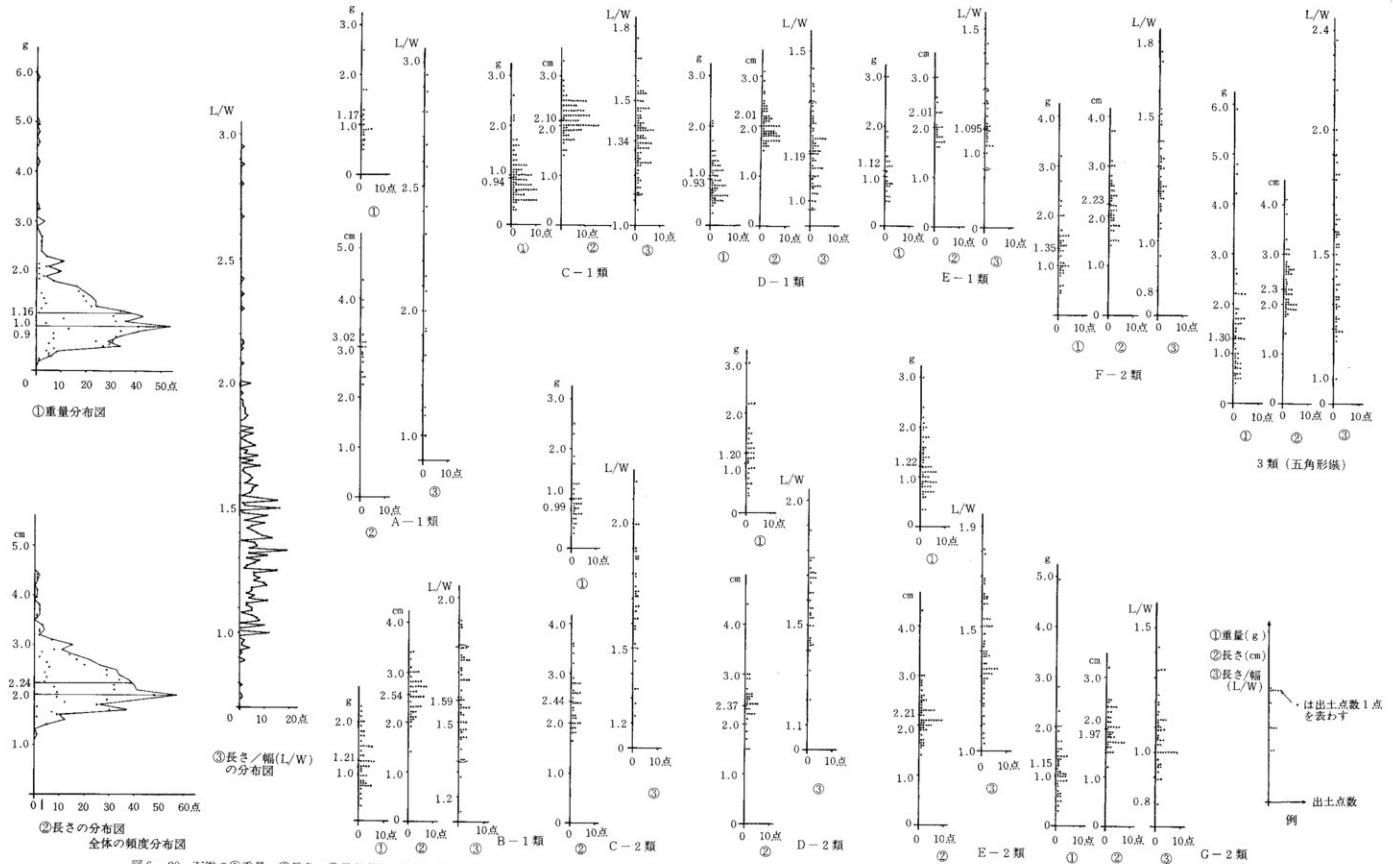


図 6-20 石器の①重量・②長さ・③長さ/幅の頻度分布図

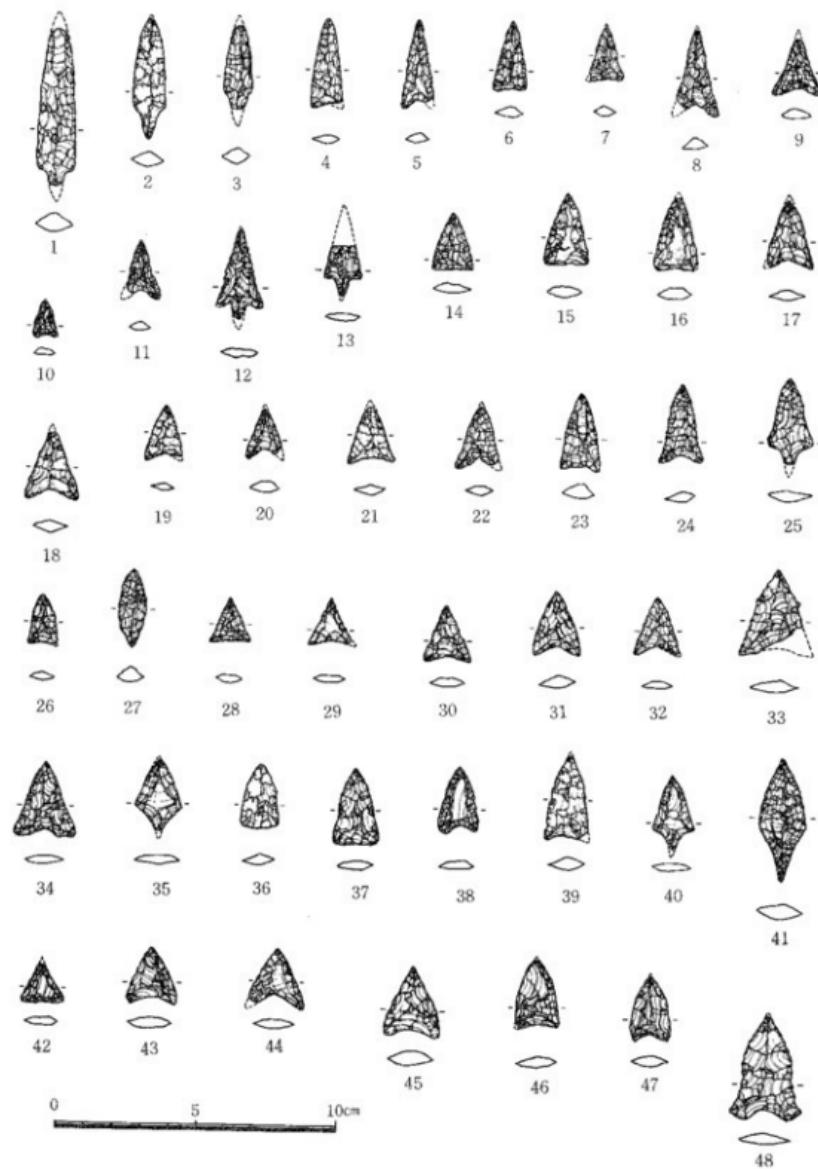


図 6-21 石鏃実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

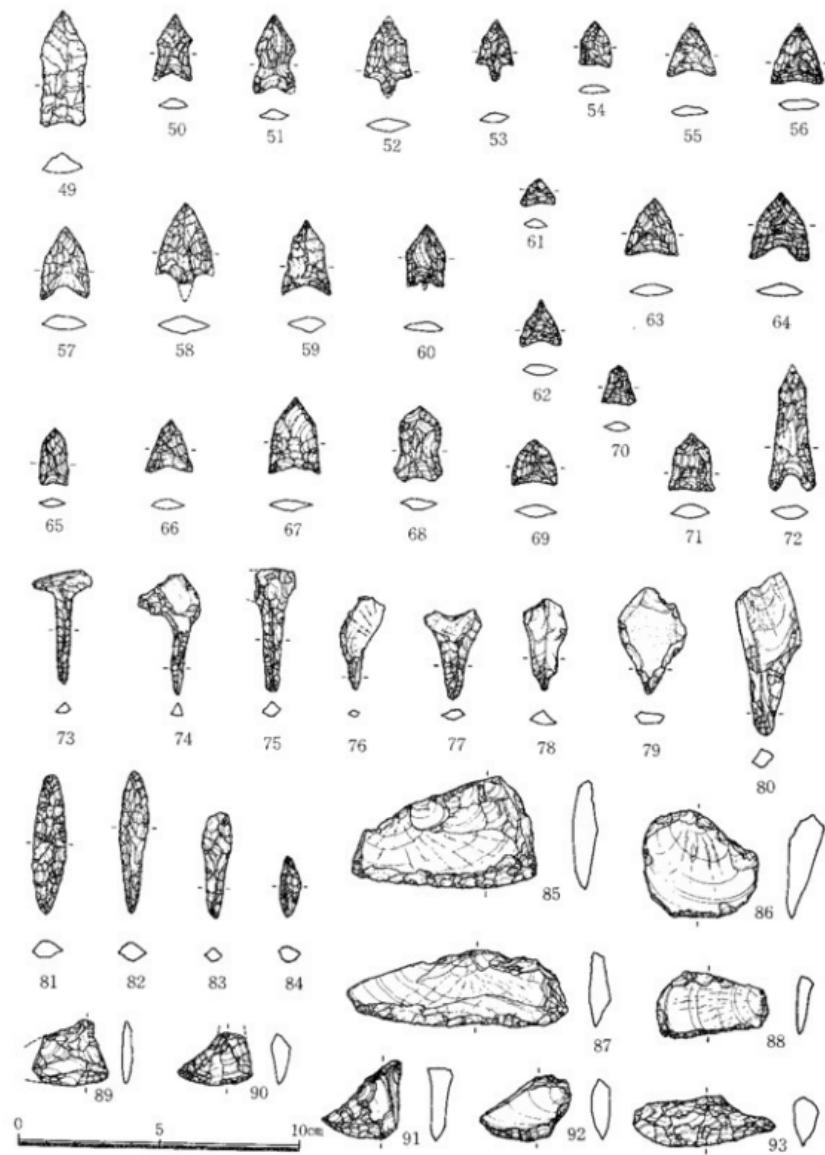


图 6-22 石簇·石锥·石匙·不定形刃器实测图 ($S = \frac{1}{2}$)

D-1類で軽量のものが、B-1類・D-2類・E-2類・F-2類にやや重いものが多いといえる。0.4 g以下の極く軽量のものが16点ある。

長さは、2.0 cm前後に分布のピークがあり平均長2.24cmである。タイプ別ではC-1類・D-1類・E-1類・G-2類でやや短いものが、A-1類・B-1類・C-2類・D-2類に長いものが多い。1.5 cm以下の極く短いものが18点ある。

すなわちC-1・D-1類に小型のものがB-1・D-2類にやや大型のものが多い。

長さと幅の比(L/W)は、1類で尖端部角の分布状況との間にある程度の相関性がみられ、A-1類でL/Wは概ね1.8以上、B-1類で平均約1.59、C-1類で1.34、D-1類で1.19、E-1類で1.09である。

表6-4 石鎚の各タイプと個数

	I	II	III	VI	不明	計
A	1	3	17	10	—	32
	1	14	59	4	—	78
	2	—	—	—	1	1
C	1	20	79	—	—	100
	2	5	28	4	3	40
	1	12	41	1	—	55
D	2	7	23	2	—	32
	3	3	6	—	—	9
	1	2	15	—	—	17
E	2	19	38	1	—	58
	3	3	4	1	—	8
	2	10	26	2	—	39
F	3	3	8	2	—	14
	2	2	44	1	1	49
	3	5	13	1	—	19
H	2	2	2	—	—	4
	3	—	3	—	—	3
	計	110	406	29	5	558

(5) 極小石鎚と未製品及び破損状況と使用痕

先述の重さ0.4 g以下・長さ1.5cm以下の極小石鎚は9点出土している。これらはB-1・D-2・E-2・F-2・G-2・H-2類各1点、C-1類3点であるが、このような極めて小型の石鎚は加工の粗雑なものが多く、実用品として機能したのかどうかは疑問である。(図6-21の10、図6-22の61)

また、未製品として扱ったものは91点であるが、これらは未製品ばかりではなく、技術的稚拙者による試作品も含まれると考えることも可能であり、このことは極小石鎚についてもいえる。

第5次～第7次調査で出土した558点のうち完形品は165点(29.6%)であり、その他は尖端部あるいは基部等のいずれかまたは複数部に欠損をみるものである。これらの欠損品の尖端部・側縁部・基部(柄部も含む)の欠損数をみると図6-24のようになる。I類とII類の基部の欠損状況をみると1:4.2(出土点数は1:3.7)と出土点数に比してII類の欠損率が高く、すべてが製作時に欠損を生じたのでないことは当然としても、II類の方が製作時に欠損を生じる可能性が非常に大きいといえるであろう。

(6)時期による各タイプの変化

各タイプ石鎚の時期的推移を表6-5に示したが、IV期は出土数が少なく誤差を考慮したい。

本遺跡は、石鎚も含めた大半の遺物が包含層中に混在する形で出土し、編年的な序列を整然と行えない状況であるが、土器を中心にある程度地区的・層位的にまとまった出土状況をとらえる

表6-5 各タイプの時期的推移

タイプ	I期		II期		III期		IV期		III+IV期		
	点数	百分率	点数	百分率	点数	百分率	点数	百分率	点数	百分率	
A 1	7	4.9	8	4.3	6	7.2	1	3.2	7	6.1	
B 1	26	18.2	19	10.2	11	13.3	3	9.7	14	12.3	
C	1	27	18.8	29	15.5	14	17.0	5	16.1	19	16.7
	2	11	7.7	14	7.5	5	6.0	2	6.5	7	6.1
D	1	13	9.1	24	12.8	13	15.7	5	16.1	18	15.8
	2	9	6.3	12	6.5	4	4.8	1	3.2	5	4.4
	3	1	0.7	2	1.1	1	1.2	2	6.5	3	2.6
E	1	5	3.5	10	5.4	2	2.4	0	0	2	1.8
	2	12	8.4	17	9.1	10	12.0	6	19.4	16	14.0
	3	2	1.4	5	2.7	3	3.6	1	3.2	4	3.5
F	2	12	8.4	15	8.1	6	7.2	1	3.2	7	6.1
	3	1	0.7	4	2.2	2	2.4	1	3.2	3	2.6
G	2	14	9.8	18	9.7	1	1.2	1	3.2	2	1.8
	3	3	2.1	5	2.7	3	3.6	2	6.5	5	4.4
H	2	0	0	2	1.1	1	1.2	0	0	1	0.9
	3	0	0	2	1.1	1	1.2	0	0	1	0.9
1類	78	54.5	90	48.4	46	55.5	14	45.1	60	52.7	
2類	58	40.6	78	41.9	27	32.5	11	35.5	38	33.3	
3類	7	4.9	18	9.7	10	12.0	6	19.4	16	14.0	
平均重量		1.25g		1.08g		1.08g		1.21g		1.12g	
平均長		2.31cm		2.14cm		2.23cm		2.22cm		2.22cm	
計	143		186		83		31		114		

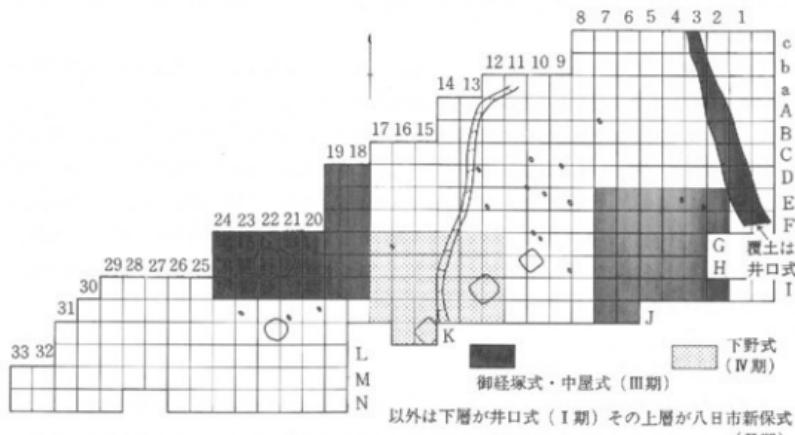


図6-23 第5次～第7次調査区における各時期土器の集中出土地区層位概略図

ことが可能なので、おおまかな編年に沿った推移をみることができます。便宜上、I期（井戸II式を主とする）・II期（八日市新保式を主とする）・III期（御経塚式、中屋式を主とする）・IV期（下野式を主とする）の4期に分けて推移をみると、I期の土器は発掘区全域にわたって下層より出土し特に第5・6次調査区東側の溝状遺構中及び第7次調査区南東部下層に顕著である。II期の土期も発掘区全域にわたって出土する。III期の土器は第6次調査区南西部上層及び先の溝状遺構上層、第7次調査区北部上層に出土がみられる。IV期の上器は第5



図6-24 完形品と欠損品の割合
次調査区南西部上層及び第6次調査区南西部大型土塙覆土より出土する（図6-23概略図）。

以上の結果をもとに石鐵各タイプの時期的推移をみると、IV期でE-2類が最も多く出土している以外はC-1類がI期～III期を通じて最も多くみられる。B-1・D-2・F-2類は時期が下るにつれて減少し、I期とIV期を比較すると約半分になっている。特にG-2類はIII期以後激減する。逆に、D-1・E-2・G-3類は時期が下るとともに増加し、I期とIV期を比較すると約2～3倍に増加している。こうした中でC類は概ね変化がみられない。また、五角形鐵の3類は晩期になって急増し、IV期には全体の約20%を占めている。

重量・長さについては、I期は大形品が多くII期は小形品が多いといえる。

最後に、各時期の石鐵が特に多く出土する地区をあげると、I期では2条の溝状遺構及び第7次調査区東半部に、特にb-3区及びH-21区とともに17点が出土している。II期ではA-4・6区、B-3・5・6区、C-5・6区、D-3・4・6区、E-6区、F-3・5区で3～8点出土している。他にB-13区、C-14・15区で計15点出土している。また第7次調査区南東部でも集中している。特にK-20・21・22区で計24点出土している。III期では第6次調査区南部に集中し、またF-18区、G-19区で計17点出土している。IV期はG-13・14区に13点出土している。なお、これらの集中出土地区のうちb-3区は溝状遺構、H-21区は4号住居跡、K-22区は5号住居跡に対応するが、それ以外は土塙あるいはピットが検出されているだけの地区が多い。

(7)若干のまとめ

これまで述べてきたことを若干まとめてみると

1. 766点出土し、石質は輝石安山岩が圧倒的に多くフリントがこれに次ぐ。
2. 尖端部角及び平面形により17類に分類されるがC-1類、D-1類、B-1類が約40%を占める。又1類が約50%を占めている。尖端部角は14°～100°までと幅広い分布を示す。
3. 重量は0.9gに最大の分布をし、0.2g～5.95gの間にある。平均は1.16gである。
4. 長さは1.2cm～5.7cm以上までの間で2.0cmに最大の分布を示し、平均は2.24cmである。
5. 実用品と思われないような極小石鐵が9点出土している。また未製品が約13%ある。
6. 晩期前半まではC-1類が最も多く、下野式期ではE-2類が中心となる。3類は晩期に入って急増し、徐々にその割合を増す。また、D-1・E-2類も時期が下るにつれて増加する。逆にB-1・D-1・E-2類は減少し、G-2類は八日市新保式期以後激減する。

表6-6 石鉄観察表 (No.は図6-21・22による。()は推定値)

No	タイプ	重量g	長さcm	幅cm	石質	地区	時期	No	タイプ	重量g	長さcm	幅cm	石質	地区	時期
1	A-1-II	4.7	5.6	1.3	流紋岩	A-F溝		37	D-2-I	1.05	2.7	1.6	輝石安山岩	F-12	I期
2	#	(2.5)	(4.4)	1.2	輝石安山岩	L-22	I期	38	D-2-II	1.0	2.4	1.4	フリント	F-19	II期
3	#	(1.7)	(3.9)	1.0	#	E-1	Ⅲ期	39	D-2-II	(2.2)	3.0	(1.6)	輝石安山岩	E-6	#
4	A-1-II	(1.1)	3.25	1.1	#	A-4	Ⅲ期	40	D-2-III	(1.1)	(2.9)	1.5	フリント	E-12	Ⅳ期
5	#	(0.9)	3.1	(1.2)	#	F-3	#	41	#	3.0	4.3	1.6	#	I-13	不明
6	A-1-I	0.85	2.5	1.2	#	H-21	I期	42	E-1-I	(0.5)	(1.6)	1.5	#	I-22	II期
7	B-1-I	(0.8)	(2.0)	1.2	フリント	C-14	#	43	E-1-II	1.3	2.0	1.8	輝石安山岩	H-12	I期
8	A-1-II	(1.3)	3.1	1.7	#	H-5	Ⅲ期	44	#	(1.0)	2.05	(2.05)	#	B-1溝	#
9	B-1-II	(0.7)	(2.3)	1.6	輝石安山岩	M-28	Ⅱ期	45	#	1.8	2.5	2.0	#	K-22	#
10	#	0.25	1.4	0.9	#	H-21	I期	46	E-2-I	1.2	2.45	1.5	#	I-14	Ⅳ期
11	#	(0.7)	2.1	(1.2)	フリント	G-21	Ⅲ期	47	E-2-II	0.9	2.3	1.45	#	J-19	I期
12	B-1-Ⅲ	(1.3)	(3.4)	1.7	#	F-5	Ⅲ期	48	#	(2.2)	(3.7)	2.5	#	C-14	#
13	#	0.25	1.8	1.3	#	F-2	#	49	E-3-I	4.8	3.1	1.8	#	C-13	Ⅳ期
14	C-1-I	0.7	2.0	1.5	#	C-3	Ⅲ期	50	E-3-II	(0.8)	2.3	(1.4)	フリント	B-2	Ⅲ期
15	#	1.4	2.5	1.5	サヌカイト	L-25	I期	51	#	(1.5)	2.8	1.5	輝石安山岩	B-C-0	Ⅱ期
16	B-1-I	(1.5)	(3.0)	(1.7)	輝石安山岩	L-21	#	52	E-3-III	(1.7)	(3.0)	1.7	#	A-E溝	
17	C-1-II	(1.1)	(2.6)	1.6	フリント	F-14	Ⅳ期	53	#	(0.7)	(2.2)	1.3	フリント	J-17	不明
18	#	(1.2)	(2.5)	1.9	輝石安山岩	B-2	Ⅲ期	54	E-2-I	0.6	1.65	1.1	輝石安山岩	G-14	II期
19	#	(0.5)	(2.0)	(1.3)	#	A-3	Ⅲ期	55	F-2-II	(0.8)	(1.9)	1.7	#	C-6	#
20	#	(0.5)	(2.5)	(1.5)	フリント	G-10	#	56	#	(1.0)	(2.1)	1.8	#	C-21	不明
21	#	(0.7)	(2.3)	1.6	サヌカイト	F-3	Ⅲ期	57	#	1.6	2.65	1.75	#	A-E溝	
22	C-2-II	(0.9)	(2.4)	(1.6)	フリント	A-5	I期	58	F-2-III	(2.7)	(3.5)	(2.0)	#	A-B-3	I期
23	C-2-I	1.85	2.8	1.4	輝石安山岩	F-5	Ⅲ期	59	F-3-I	1.8	2.6	1.8	#	G-13	Ⅳ期
24	C-2-II	0.9	2.8	1.5	フリント	G-7	#	60	F-3-III	(0.9)	(2.3)	1.4	流紋岩	G-5	Ⅲ期
25	C-2-Ⅲ	(1.7)	(3.4)	1.6	輝石安山岩	b-3溝	I期	61	H-2-II	0.2	0.9	1.2	輝石安山岩	K-22	II期
26	C-2-I	0.6	1.8	1.0	#	G-H-II	#	62	G-2-II	0.5	1.7	1.5	#	F-19	#
27	C-2-N	1.4	2.8	0.95	フリント	C-5	Ⅲ期	63	#	1.05	2.1	2.0	#	C-14	#
28	D-1-I	0.5	1.6	1.45	#	F-0	Ⅲ期	64	#	1.7	2.4	2.0	流紋岩	A-4	#
29	D-1-II	(0.45)	1.7	(1.5)	輝石安山岩	A-3	Ⅲ期	65	G-3-I	0.55	2.0	1.0	輝石安山岩	C-6	#
30	#	0.7	2.0	1.7	フリント	L-24	#	66	G-3-II	0.6	1.9	1.65	フリント	F-5	#
31	C-1-II	1.05	2.3	1.7	輝石安山岩	I-17	#	67	#	1.7	2.75	1.7	輝石安山岩	G-14	Ⅳ期
32	C-1-II	0.7	2.1	(1.6)	#	D-1	Ⅲ期	68	H-3-II	1.9	2.7	1.7	#	H-22	Ⅲ期
33	D-1-II	(2.1)	3.1	(2.5)	#	G-14	Ⅲ期	69	H-2-II	0.95	1.65	1.6	#	C-2	#
34	#	1.3	2.65	2.2	フリント	L-24	#	70	G-3-I	0.5	1.4	1.2	フリント	L-21	I期
35	D-1-Ⅲ	(1.1)	(2.7)	1.6	輝石安山岩	E-6	#	71	H-3-I	1.3	2.05	1.3	#	A-F溝	
36	E-2-I	1.1	2.25	1.4	#	H-5	Ⅲ期	72	D-3-II	(2.8)	(4.5)	1.65	輝石安山岩	#	

表6-7 石錐観察表 (Noは図6-22による)

No	タイプ	重量g	長さcm	石質	地 区	時 期
73	A-I	1.6	4.05	フリント	不明	(5次調査)
74	"	3.5	4.3	"	E-3, B10地	IV 期
75	"	3.45	4.45	"	不明	(5次調査)
76	A-II	1.6	3.3	輝石安山岩	X - b	(8次調査)
77	"	2.0	3.15	"	K - 24	II 期
78	"	2.4	3.3	フリント	C - 11	I 期
79	"	3.6	3.8	輝石安山岩	C - 16	不明
80	"	11.5	5.8	"	E - 13	IV 期
81	B-I	6.05	5.9	フリント	F - 12	不明
82	"	3.0	5.1	輝石安山岩	A-F溝	"
83	"	2.5	3.8	"	I - 17	II 期
84	"	0.8	2.1	フリント	G - 4	"

表6-8 石匙、不定形刃器観察表 (Noは図6-22による)

No	重量g	長さcm	幅cm	厚さcm	石質	地 区	時 期
85	26.3	3.9	6.5	0.8	輝石安山岩	A - 6	(4次調査)
86	18.2	2.8	7.8	0.8	"	A-B区	I 期
87	12.6	3.8	4.1	0.85	フリント	不明	(5次調査)
88	6.6	2.4	4.0	0.65	"	G-10	不明
89	3.4	2.4	2.7	0.5	輝石安山岩	G - 13	IV 期
90	2.6	1.9	2.7	0.7	フリント	G - 5	III 期
91	4.9	2.9	2.75	0.0	"	B-Z区	I 期
92	4.2	2.4	3.1	0.6	"	A - 9	II 期
93	7.3	1.8	5.1	0.8	"	H - 17	"

9. 石錐

石錐は147点（うち表面採集、出土地点不明は14点）出土している。発掘品133点のうち129点が第5次～第7次調査で出土しており、石錐同様、この調査出土品について観察を行った。

石錐に使われている石材はフリント63点（48.8%）、輝石安山岩58点（45.0%）で、他に凝灰岩6点・めのう・玉髓が各1点あり、フリントの多いことが特色である。

これらは、大小を考慮に入れなければ3種類に分類できる。

A-I類（図6-22の73～75）；つまみ部を有し、錐部へ急角度な抉りで移行するもので、棒状あるいは針状の錐部を有する。

A-II類（図6-22の76～80）；つまみ部を有し、錐部への移行が抉りが浅いために比較的緩やかなもの。

B-I類（図6-22の81～84）；つまみ部を有せず、棒状あるいは針状の錐部を有するもの。中には基状部を有するものもある。

A—I類は14点(10.9%)あり、うち完形品は4点である。このタイプには錐部尖端の磨滅したものではなく、1点だけ刃毀の著しいものがある。また錐部断面三角形のものは5点で、他は菱形状を呈する。

A-II類は52点(40.3%)あり、うち完形品は23点である。このタイプには錐部尖端の磨滅したもののが2点、刃毀の著しいものが6点ある。また錐部断面三角形のものは18点あり、そのうちの15点はフリント製である。

B—I類は63点(48.8%)あり、うち完形品は14点である。このタイプには錐部尖端の磨滅したものが13点、刃毀の著しいもの4点あり、使用痕のあるもの、特に磨滅したものが多い。また、錐部断面三角形のものは10点である。

ここでA類とB—I類の用途について考えてみると、A類とB—I類の間に以下のような特徴的な違いがみられる。

1. B—I類はA類に比べて完形品率が低い。(A類40.9% ; B—I類20.6%)
2. B—I類はA類に比して、錐部尖端に使用痕の著しいもの、特に磨滅したものが多い。これは回転数、使用頻度、対象物などによる違いと考えるが、主に回転数の差から生じると思われる。
3. B—I類はつまみを有せず、中に若干のふくらみをもって茎状部を形成するものがある。以上のことから、B—I類は木あるいは竹等の棒状のものの先に装着して両手でもみきるような状態で使用する現在の木工用錐のような形態が考えられ、回転数が多く、欠損も生じやすいものと思われる。またA類は手でつまみ部を持って使用するような形が考えられ、対象も比較的軟らかいものに用いられたのであろう。

10. 石匙及び不定形刃器

石匙と思われるものが未製品を含めて6点出土している。また不定形刃器は103点(うち表面採集あるいは出土地点不明は6点)以上出土している(図6—22の85~93)。

石匙に使用されている石材はフリント4点、輝石安山岩2点であり、不定形刃器にはフリント46点、輝石安山岩43点、凝灰岩4点である。フリントと輝石安山岩が約95%を占め、石鎚・石錐の場合と同様に他の石材の使用が極めて少ない。石鎚の場合とは逆に石錐・石匙・不定形刃器ではフリントの方が多いが、これは石鎚の場合、瞬間に力が加わること、石鎚・石匙・不定形刃器では継続的に力が加わることによる違いから生じるのかもしれない。

石匙は図6—22の89に示したもの及び図示しなかつたが縦型石匙と思われるものも、ともにつまみ部の作り出しが不十分であり、石匙と考えるにやや難点がある。また、極めて出土点数の少ないのが大きな特色である。

不定形刃器は大形の第1次剥片を刃部のみ両面に加工を施したものと、中小形の剥片に同様に刃部をつけたもの、及び図6—22の90~93に示したナイフ様のものがある。ナイフ様の石器では全面にわたって押圧剥離を施したものが多い。大形品では輝石安山岩が多く、中小形品ではフリントが6割近くを占め、ナイフ様のものではフリントが8割以上を占める。

いずれも石匙が少ない点を考えると石匙と同様の用途に利用されたものであろう。(吉田裕雪)

11. 砥 石

114点出土している（図6-25の1～5、図版64の上）。砥ぎ痕のみのものが37点。一面に砥ぎ痕、他面に摩耗痕をもつものが17点。一面に砥ぎ痕、他面に凹みをもつものが4点。彫線に敲打痕をもつものが8点。故意に打ち欠いているものが6点。その他のものが42点ある。

石質は砂岩が7割と最も多く、凝灰岩質のものが2割でこれに次いでいる。他には角閃石安山岩・流紋岩などがある。大きさはバラバラで、長さ10cm以下で重さも100gに満たないものから、長さ25cmを超えるものまで多様であるが、完形品でみると限り、長さ13～20cm、幅7～10cm、重さ500～1000gのものが多い。

図6-25の5のように故意に打ち欠いているもの他は、自然石をそのまま利用していて、とくに整形などはされていない。

12. 擦切石器

薄い板状の石片の側縁に、研磨によって幅5mm程度の刃を作り出した石器。77点出土している。（図6-25の6～10、図版64の下）。刃の部分だけを磨いてあるものもあり、全体的に加工の度合いが低いため、完形品と欠損品の区別がつけにくいか、長さ4～6cm、幅3～5cm、厚さ0.6cm前後と1～2cm、重さ10～30g程度のものが多く、ちょうど手に持ちやすい大きさと形をしている。石質は砂岩が殆どである。石軋や砥石の破損したものを利用して作っているものが多い。刃部は直線かやや外反するものが多いが、内湾するものもあり、形状はバラエティに富んでいて、規格性はみられない。

これらと同様の石器は、関東・東北地方に出土しており、擦切技法に用いられる石鋸と考えられている。しかし、本遺跡出土の磨製石斧には、明らかに擦切技法によって製作されたと思われるものはみられないため、他の用途も考える必要がある。新潟県細池遺跡では、円礫の端部を打ち欠いて作っているが、本遺跡のものと類似の石器が多く出土しており、攻玉用の内磨砥石とされている（寺村1974）。また、同じく玉生産に関係している新潟県長者ヶ原遺跡にも出土例があり（佐津1974）、本遺跡も玉の生産を行っていたと考えられることから、攻玉用の砥石である可能性が強い。しかし、石川県内では、加賀市横北遺跡（湯尻1977）や辰口町西野遺跡（西野1978）など、玉造りを行っていないと思われる遺跡からも出土している。他の用途も考えねばならない。その他の用途としては、切目石錐の切目を入れる為、または、石棒・石劍・石刀などの成形、線刻が考えられる。

（辻森由美子）



図 6-25 砥石・擦切石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

13. 小 結

御経塚遺跡から出土した6465点に及ぶ縄文時代の石器を、その器種の機能や石器全体に占める割合についてみてみると次のようになる。植物質食料の採集・加工用具としこの打製石斧・石皿・磨石・敲石は5038点出土しており、石器全体の77.93%を占めている。狩猟具としての石鏃は1766点出土しており、わずか11.85%である。確実に漁撈具として認められる切目石錘・有溝石錘はわずか6点出土しているに過ぎない。樹木の伐採・加工工具としての磨製石斧は273点であり、4.22%を占めている。礫石礫・石錐・石匙・砥石・擦切石器は359点出土しており、石器全体の5.55%を占め、これらの石器は有機物や石などを材料にした道具類の製作・加工に関与したと考えられる。縄文時代の生業は植物採集・狩猟・漁業から成り立っており、これらの活動に関する石器についてみてみると、植物採集に関する石器は77.93%と高率であるのに対して、狩猟・漁業の石器はそれぞれ11.85%と0.09%を占めるに過ぎない。このことを巨視的にみるならば、植物食への依存度が大きかったと言えるであろう。

北陸における縄文時代の石器については、中期から晩期まで石器の器種の構成にはほとんど変わりないが、その構成比や石器個々には時期差や遺跡差が認められる。これらの時期の石器のなかで、特に問題とされるのは、石錘と打製石斧であると考えられる。

石錘については、中期中葉の古府式期に至って規格化と量産化が始まり、後期前葉の氣屋式期を以って姿を消すことが指摘されている（高堀1965）。石錘の主体となるのは礫石錘であり、この石器の機能については、漁網錘であるという考え方（高堀1965、四柳1976、平口1979）とモシリ編みの鍤具であるという考え方（渡辺1976・1978・1981）がみられる。また、切目石錘や有溝石錘といった漁網錘は一般に少ない。中期に比べて後・晩期には礫石錘が極端に少なくなるという現象は明らかであるが、一方では鍤具を使うモシリ編みによって編まれたものの圧痕が上器の底部に付いており、その存在により鍤具が存在したことも明らかである。また、民具にみられるモシリ編みの石錘については、渡辺誠氏によってA～D類に分類されており、全国20ヶ所の遺跡で自然石を利用した石錘が出土している（渡辺1981）。すなわち、後・晩期に礫石錘が減少するのは、石器の製作が簡略化され、モシリ編みの石錘の主流が礫石錘から河原石に移っていったからであると考えられる。また、河原石ばかりではなく、敲石や磨石のなかにも鍤具として利用されたものがあつたことも推測される。

北陸において打製石斧が出現する時期は、石川県志賀町堀松貝塚（高堀1955）、福井県勝山市古宮遺跡（渡辺1978）や富山県砺波市蕨照寺遺跡（岡上1977）の出土例から、中期前葉の新崎式期には確実に出現していたと考えられる。前期末から中期初頭にかけての土器の様相は、信州方面との関係が強く、前葉にはその関係を弱めながらも脈絡を保ち続けている（小島1970）ことや、前期末から中期初頭に打製石斧が多くみられる地域が関東・信州であることから、打製石斧の系譜は信州方面に求められると考えられる。また、中期後葉から打製石斧の量産化が始まることが指摘されており（高堀1974）、量的には磨製石斧とはほぼ同じかあるいはそれを上回る数量である。富山県立山町岩崎野遺跡（池野1976）のように、遺跡によってはかなりの量の打製石斧が出土し

ている。後期後半から晩期前半の打製石斧は数量も多くなり、中期のものに比べて一回り大きくなり、晩期後半のものはそれより一層大形化している（吉岡1971）。形態的には、そのほとんどが擬形や短柄形であり、分銅形は本遺跡の他に能都町波並西の上遺跡（平田1976）などでみられるだけである。北陸の打製石斧のほとんどのものが河原石を素材にしており、穴水町曾福遺跡（米沢1980）、七尾市赤浦貝塚（四柳1977）、宇ノ氣町上山田貝塚（平口1979）などの石川県北部の数遺跡では板状の素材から製作されており、扁平な打製石斧である。また、本地域の打製石斧は、中期にしろ、後・晩期にしろ、同時期の他の地域のものよりも肉厚で、重い点が特徴的である。

（山本直人）

註

- (1) 打製石斧・石皿・磨石・敲石について、磨耗痕や敲打痕の状態を示すために若干の記号を用いた。
打製石斧の正面図の実線は周縁部の敲打痕の範囲を示し、横断面図の内向きの矢印は刃部の磨痕の範囲を、外向きの矢印のは擦痕の範囲を示している。また、刃部の磨痕は縱縞、茎部の磨かれていている部分は横縞を用いてその部分を表わしてある。
石皿・磨石・敲石の磨耗痕の範囲は破線で囲って示している。正面図のトーナーは周縁部の敲打痕の範囲を、内向きの矢印は磨耗痕の範囲を示している。側面図・横断面図のトーナーは両面の敲打痕の範囲を、内向きの矢印は磨耗痕の範囲を示している。
石器総数に不定形刀器は含めていない。
- (2) 江坂輝弥先生の御教示による。

参考文献

- 青木重孝・寺村光晴他、1974：『細池遺跡』 糸魚川市教育委員会。
池野正男・柳井睦、1976：『富山県立山町岩崎野遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会。
岡上進一・神保孝造・他、1977：『富山県砺波市蕨照寺遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会。
鹿野忠雄、1942：「紅頭嶺ヤミ族と石器」 『人類学雑誌』 第57巻第2号 85～93頁。
本村剛郎、1970：『縄文時代石器における機能上の実験(1)』 『考古学ジャーナル』 43, 23～26頁。
小池哲吾、1980：『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』 福岡県教育委員会。
小島俊彰、1970：『富山・石川両県地方の鍛付有孔土器』 『信濃』 第22巻第7号 31～37頁。
小林公明・武藤雄六・他、1978：『曾利』 富士見町教育委員会。
斎藤基生・他、1978：『貴井』 小金井市教育委員会。
笠津備洋・他、1964：『長者ヶ原』 糸魚川市教育委員会。
佐原 真、1977：「石斧論—横斧から縱斧へ—」 『考古論集』 53頁。
瀬見 浩、1960：「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」 『広島大学文学部紀要』 第18号 138頁。
高根勝喜・近藤清一・他、1955：「石川県羽咋郡越松貝塚調査報告」 『石川県羽咋郡旧福野潟周辺綜合調査報告』 61～71頁 石川考古学研究会。

- 、1965：「縄文文化の発展と地域性 4・北陸」『日本の考古学』II 142～146頁。
- ・編、1974：『金沢市古府遺跡—第4・5次調査報告』金沢市教育委員会。
- 西野秀和、1978：『芦生遺跡』辰口町教育委員会。
- 平口哲夫・編、1979：『上山田貝塚』字ノ久町教育委員会。
- 平田天秋・編、1976：『能都町・波並西の上遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会。
- 吉岡康暢、1971：『石川県下野遺跡の研究』『考古学雑誌』第56巻第4号 1～49頁。
- 湯尻修平・編、1977：『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会。
- 四柳嘉章、1976：「“サケ・マス論”の基盤について」『考古学研究』第23巻第2号 67～78頁。
- ・他、1977：『赤浦遺跡』七尾市教育委員会。
- 米沢義光・編、1980：『曾福遺跡』穴水町教育委員会。
- 渡辺 誠、1973：『縄文時代の漁業』
- ・編、1975：『京都府舞鶴市桑原下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会。
- ・編、1978：『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』勝山市教育委員会。
- 、1981：『福み物用鉢具としての自然石の研究』『名古屋大学文学部研究論集』80（史学27）1～46頁。

第2節 石 製 品

本遺跡では、御物石器・石冠・石棒・石劍・石刀・砥石状石製品・装飾品など多様な石製品が数多く出土している。

1. 御物石器

完形品2点、破片3点の合計5点出土している。(図6-26、図版65の上) 完形品はいずれも橋本正氏の分類による「濃飛型棒状頭3式」にあたる(橋本1976)。

1は、第1次調査の際に右組み遺構を伴って発見されたもので、形は簡略であるが、敲打による成形後、かなりよく磨かれている。長さ25.1cm、最大巾8.2cm、頭部高12.2cm、重さ3340gの火山礫凝灰岩製である。2は、やや丁寧に研磨され、浮文が施されている。長さ23.4cm、最大巾7.2cm、頭部高9.8cm、重さ2,062gである。1、2とも上面が他の部分に比べて良く磨かれている。3は頭部片で、断面形も丸く、やや特異なものである。現存長12.2cm、巾5.7cm、頭部高8.7cm、重さ845gで、石英安山岩製である。4は腹部破片で、断面形は稜線のはっきりした三角形をなしている。現存長12.2cm、現存巾5.0cm、重さ148gの安山岩製である。

御物石器は、その形態の特殊性から、神社などに奉納されていることが多く、明確な出土状況がとらえ難かったが、近年、発掘による出土例が多くなり、遺物の性格を知る手がかりとなっている。御経塚遺跡においても、前述のように、1が石組遺構を伴っている(高堀1964)ほか、4が、甕棺の口縁に接して出土している。新潟県細池遺跡からも遺構に伴う例が報告されている(寺村1974)が、住居址には完形品が納置され、破損品が上塙墓内から出土している。土塙墓内出土のものは、故意に打ち欠かれ、また、一側面に火熱を受けた跡があるとされているが、本遺跡出土の4も、故意に打ち欠かれたかどうかは不明であるが、破片であり、火熱を受けていること、甕棺の口縁に接して出土したことなど、類似点がある。

2. 石冠

37点出土している(図6-28、図6-29の1~4、図版65の下、図版66、図版67の1・2)。形態によって図6-27のように分類した。

I類—石棒状の頭部と隅丸長方形の基部をもつもので、6点出土している(図6-28の1~3)。II類—石棒状かやや尖った頭部と円形または隅丸方形の基部を持つもので、頭部と基部の区別が明瞭でないものも含む。8点ある(図6-28の4~6)。III類は斧の刃状の頭部と隅丸方形の基部をもつもので、頭部と基部の区別は段をつけるか横位の沈線によってつけられている。6点出土している(図6-28の7~9)。IV類は半円形に近い斧刃状の頭部と長楕円形の基部を持つ大型のもので、2点出土している(図6-28の10)。V類は半円形の斧刃状頭部を持ち、底面が橢円形のもので、1点のみ出土(図6-29の3)。VI類は頭部が直線かやや丸味を帯びた斧刃状を呈し、両側に面をもつもので、底面は隅丸方形である。7点出土している(図6-29の1・2)。VII類はV、VI類を横に引き伸ばしたような形で、底面が長楕円形を呈する大型のものである。7点出土して

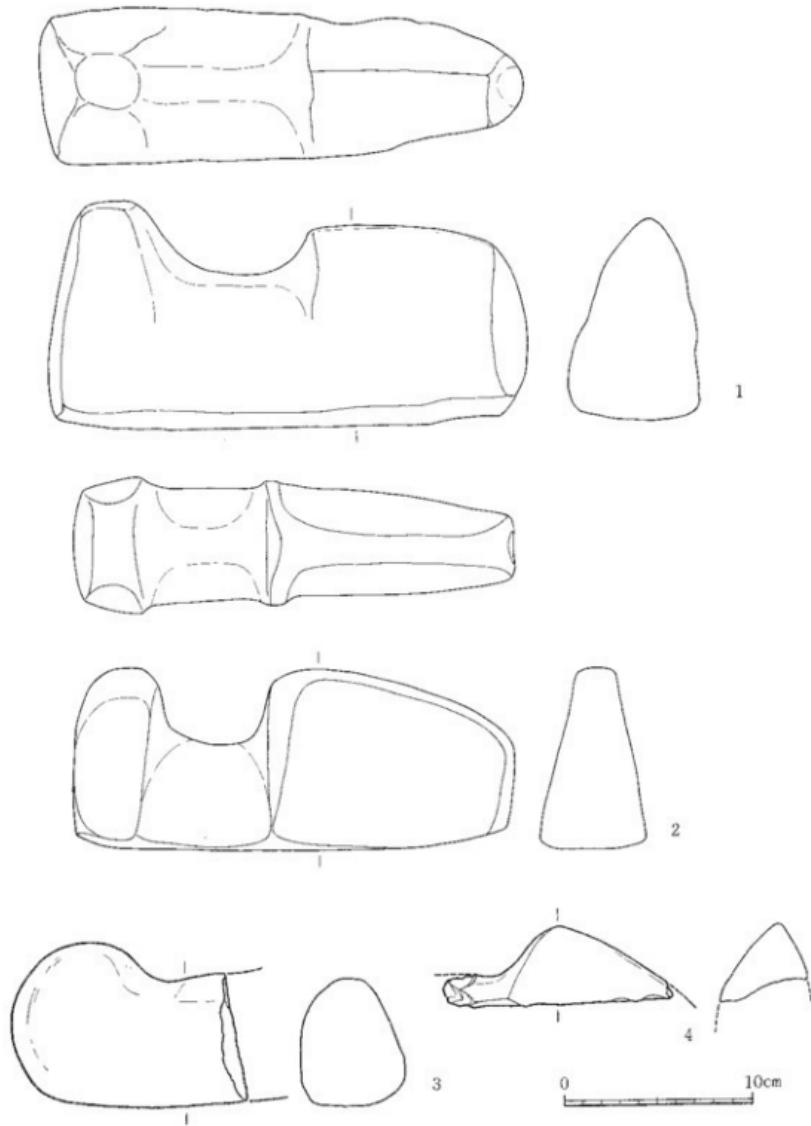


图 6-26 御物石器实测图 ($S = \frac{1}{2}$)

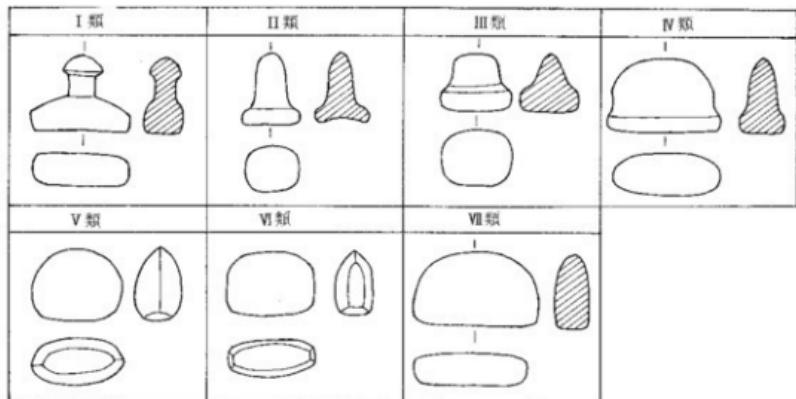


図6-27 石冠の分類

いる(図6-28の11)。

石質は凝灰岩質のものが21点と最も多く、6割近くを占めている。次いで多いのが砂岩質のもので10点ある。その他には、泥岩、角閃石安山岩、石英安山岩などがある。類別に石質についての顕著な差異は見られず、どの類においても凝灰岩質のものが優位を占めている。

図6-28の1は長さ14.9cm、巾4.7cm、高さ8.6cm、重さ445.5g、2は長さ9.8cm、巾14.4cm、高さ8.1cm、重さ220.5gで、他のI類のものもほぼこれくらいの大きさである。II類では、基部が直径4~5cm、高さはいろいろあるが6~9cm、重さ200g前後になる。III類は、基部が7cm×6cm、高さが6cm、重さ200g程度である。IV類は大型で、基部の長さは10cmを超えて、巾は約6cm、高さは8cm程度、重さは400~500gである。V類は長さ9.3cm、巾5.0cm、高さ7.5cm、重さ431.0gで全面敲打によって成形している。VI類は、長さ8cm、巾4cm、高さ6cm、重さ200g程度のもののが主である。VII類は、長さ15cm、巾5cm、高さ7~8cm、重さ400~700g程度である。

I~III類は装飾性がやや強く、IV~VII類では装飾はみられない。沈線による施文のあるものが7点あるが、そのうち5点はIII類である。ただ、III類にみられる沈線は図6-28の9のように底面にも描かれているものもあるが、殆ど文様というより、頭部と基部を区別していた段の変化したものである。赤彩痕があると思われるものは、II、III類に各1点、VI類に2点ある。また、火を受けているとみられるものが6点あり、うち2点は熱によってヒビ割れている。他にも焼けた痕跡は明らかではないが、ヒビ割れているものが3点あり、これらも火を受けている可能性があるとすれば、9点が火を受けていることになる。これは、石冠の使用(石冠を用いた祭祀)と火を結びつけるものではないだろうか。また、火を受けた可能性のあるものは各類にみられるのに、I類にのみ1点もないのは特徴的である。

頭部と底面についてみると、頭部がよく磨られているものがI類に1点、II類に5点の計6点、底面がよく磨られているものが、I類4点、II類3点、III・IV・VII類に各1点の10点ある。VI類

は全体的に磨かれていて、頭部や底部が特によく磨かれているということはない。また底面に敲打による凹みのあるものが I・VI類に各 1 点、II類に 3 点ある。I類では底面の磨りが、II類では頭部の磨りと底面の凹みが特徴的である。凝灰岩質のため、風化によって磨ってあったかどうかわからなくなっているものもあるが、特に I・II類において、頭部と底面への意識の集中がみられるようである。図版 67 の 2 は特殊なもので、頭部が折れたか、または頭部を折った後、その割れ口の部分を丁寧に敲打して形を整えている。

VI類については、斧刃状の頭部をもつその形態から、石斧のような用途も考えられるが、特に使用痕と思われるものは観察できなかった。

3. 鋸節形石製品

21点出土している（図 6-29 の 5 ~ 6、図版 68 の上）。完形品は 2 点しかないが、長さは 20cm 前後、巾 6cm、厚さ 4 ~ 5cm 程度のものが多いと思われる。石質は凝灰岩質が殆んどで、他に砂岩、石英安山岩、石英粗面岩、泥岩、片麻岩などがある。

図 6-29 の 5 は、一部欠損しているが、長さ 23.5cm、幅 6.8cm、厚さ 4.9cm、重さ 500g を測るやや大型の白色凝灰岩製のもので、火熱を受けて一部黒色に変色している。この他にも、火熱を受けていると思われるものが 5 点ある。また、図 6-29 の 6 は 2 点の完形品のうちの 1 点であるが、長さ 18.6cm、幅 4.8cm、厚さ 3.4cm、重さ 447g を測り、一部にタール状の付着物がある。

風化しているためもあるが、研磨された痕跡はみられない。殆どが破損した状態で出土していることは、凝灰岩質という風化しやすく壊れやすい石材を多用しているためであろうが、火を受けているものがあることと共に興味深い。

4. 石鋸形石製品

8 点出土している（図 6-29 の 7 ~ 11、図版 67 の 3 ~ 5、図版 68 の下左）そのうち完形品は 3 点である（図 6-29 の 7・8・11）。

大きさは、長さ 15 ~ 20cm、巾 7cm 前後、厚さ 3cm 前後、重さ 250 ~ 400g で、凝灰岩質のものが半数を占める。刃部がほぼまっすぐで、背が湾曲するものと、背がまっすぐで、刃部が湾曲するものがあるが、どちらもかなり丁寧に作られており、きれいに整形され、線刻が施されているもののが半分ある。

用途は不明であるが、大きさ、重さは、手に持てて使用するのにちょうど都合が良いサイズである。8 には両端に紐かけ風のえぐりがあり、10 と図示しなかったが、もう 1 点は穿孔されている。紐を通して手に持ちやすくしたのであろう。ただ使用されている石材が凝灰岩のように軟質のものが多いこともあり、あまり実用的な感じは受けない。刃部も、何かを切るためといった鋭さはなく、使用痕もみられない。ただ、8 で刃部の中央付近が内済気味になっているのは、使用による摩滅かもしれない。

9 にはタール状の付着物がある。11 は石鋸形石製品に入れたが、疑問が残るものであり、鋸節形石製品に近いかもしれない。図の右側は、上下を逆にしてみると、サケかイルカの頭のような

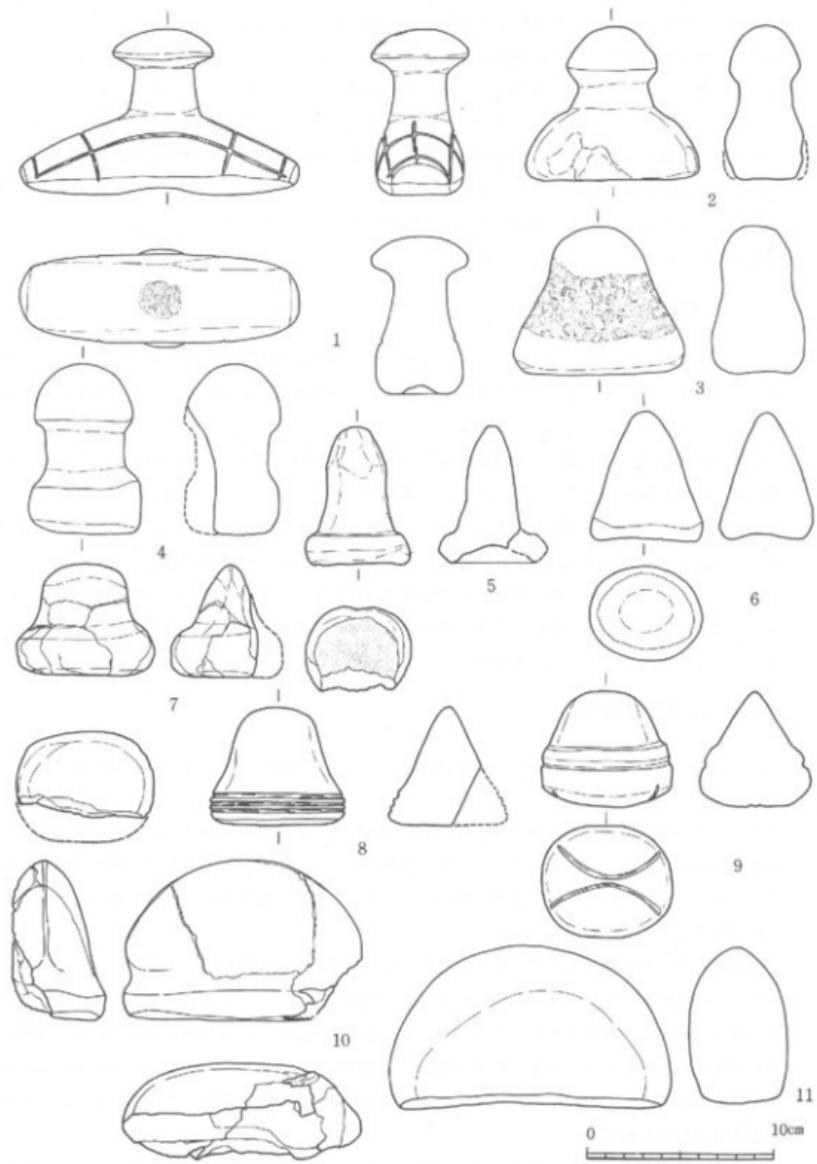


図 6-28 石冠実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

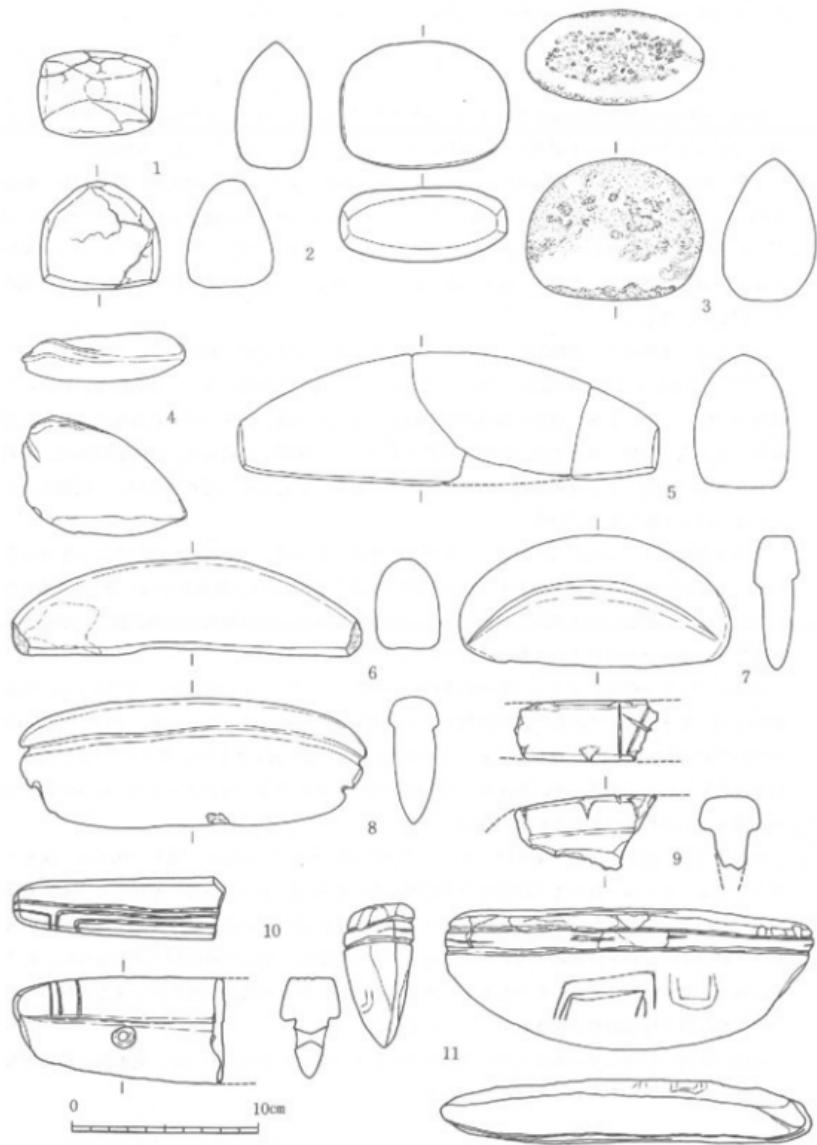


図 6-29 石冠・鐵節形石製品・石鋸形石製品実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

感じを受ける。片面に線刻があるが、何を描いたものか不明である。

5. 石棒・石劍・石刀

石棒・石劍・石刀類は断面形態によって分類されているが、破片の場合判別が難しいので、一括して述べることとし、下記のように分類した（図6-30・31、図版68の下右、図版69）。

I類—断面がほぼ円形となるもの（いわゆる石棒）（図6-30）。II類—両側縁に稜をもち、断面が凸レンズ状となるもの（いわゆる石劍）（図6-31）。III類—断面形が扁平な楕円形を呈するもの（図6-31の10）。IV類—ミネをもつものの（いわゆる石刀）（図6-31の1～3・7・9・11）。V類—両端を刃状に作っているもの（図6-31の4～6）。VI類—上記の分類不能のもの。a—頭部片b—胸部片、端部片

出土数は、I類62点、II類24点、III類4点、IV類91点、V類7点、VI類84点、未成品1点の合計273点の多さにのぼる。石質は、全体としてみると、頁岩が圧倒的に多く、類別に多い順から3種類あげていくと、I類—頁岩・凝灰岩質各11点、安山岩8点、II類—凝灰岩質10点、頁岩5点、緑色片岩4点、III類—頁岩2点、砂岩、緑色片岩各1点、IV類—頁岩31点、凝灰岩質20点、泥岩16点、V類—頁岩4点、凝灰岩質、安山岩各1点、VI類—頁岩50点、凝灰岩質13点、泥岩6点というように若干差が生じている。

I類は直徑が3～5cmのものが多い。長さは完形品が第4図4、6しかないと認めはっきりしないが、4は19.9cm、6は26.0cmある。図6-30の1は直徑約4.5cm、現存長56cm、重さ2,120gを測る大型品で、頭部には工字状の線刻がある。頁岩製である。6は角閃石安山岩製で、頭部のみ研磨され、他は全面敲打により整形されている。

II類は、巾3cm前後、厚さ2cm前後が多い。III類は、10でみれば、巾3.3cm、厚さ1.6cm、現存長10.6cm、重さ77.5gである。IV類は最も多く、大きさもバラエティに富んでいるが、完形品が少ないため、明確ではない。IV類の図6-31の1は長さ20.4cm、最大巾4.5cm、重さ272.5gを測る、緑色凝灰岩の石刀である。巾はやはり3cm前後が多い。V類では、巾が2～3cm、長さが12～15cm、重さは35gのものもあるが100g程度である。

形としては、頭部と体部の境がはっきりしているのが一般的であるが、図6-30の6、図6-31の3・4・9・14～16のように境界の不明瞭なものもある。また、頭部に線刻をもつものかなりあるが、同じものが2つないといって良いほど変化に富んでいる。はっきりと線刻しているもの、更には、その上に赤彩しているものもあり、一方、図6-31の15・16・19・20のように、細く浅い線刻を簡略に施しているものもある。図6-31の13・18は頭部が折れたか、または折ったものの、割れ口を再度調整してきれいにしているものである。

細長い棒状の形をしていて、頁岩を多用しているためでもあろうが、完形品が殆どなく、大部分が頭部片であることは注目に値する。

6. 装飾品

全部で52点出土している（図6-32）。うちわけは次のとおりである。

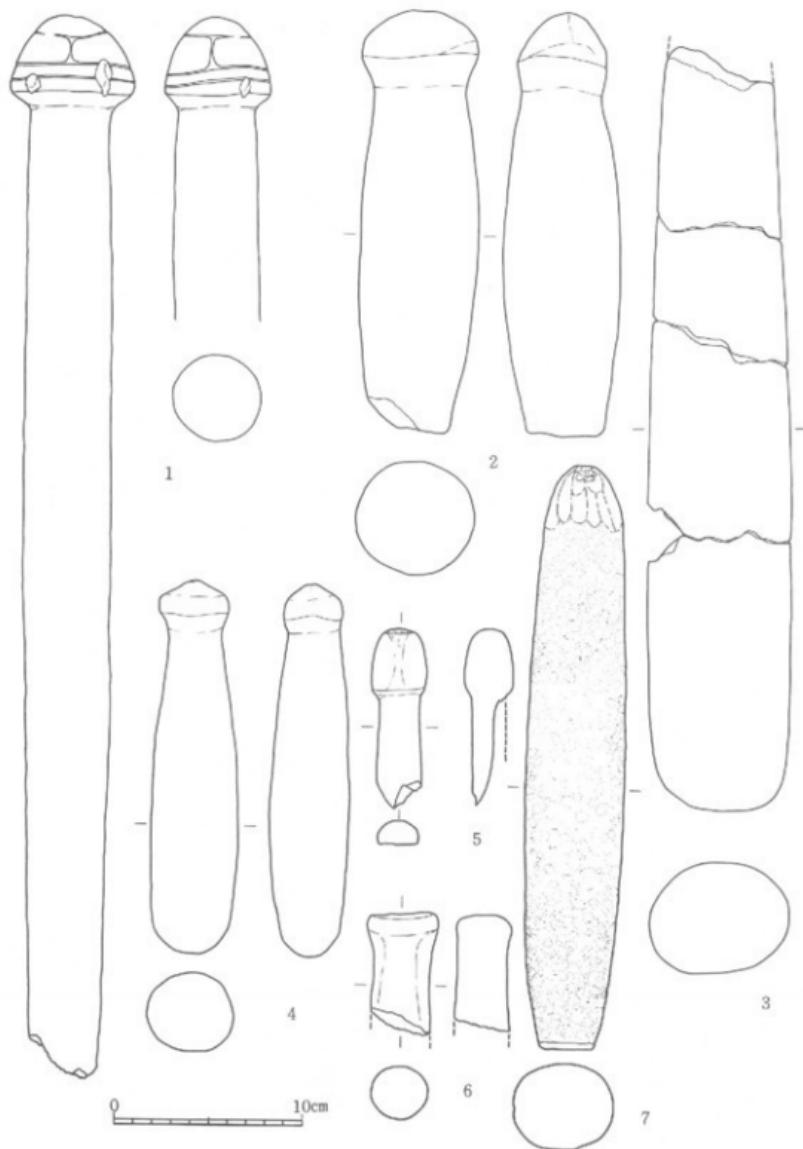


図 6-30 石棒・石剣・石刀実測図 1 ($S = \frac{1}{3}$)

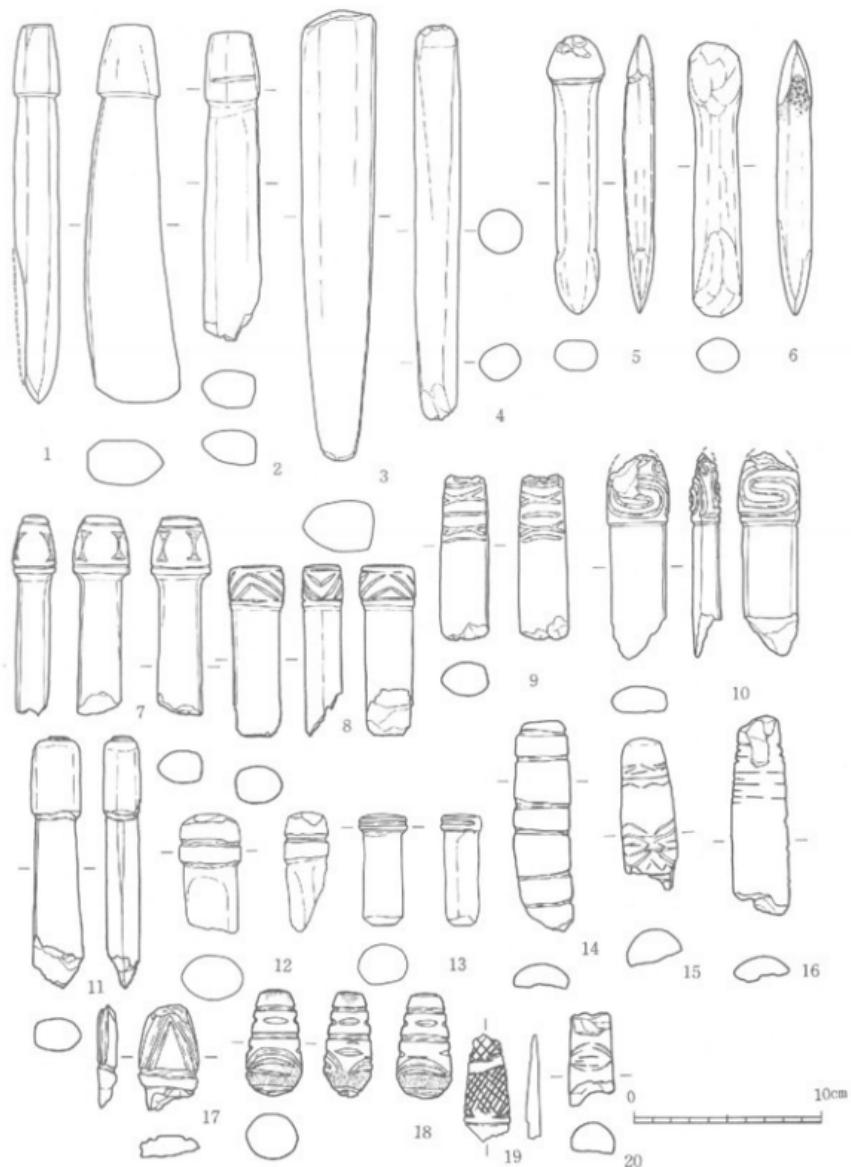


図 6-31 石棒・石剣・石刀実測図 2 (S = $\frac{1}{2}$)

I類—丸玉（最大径が長さと同じか大きいもの）。21個（うち本成品2個）（同図1～6・27・28）。II類—長玉（最大径が長さより小さいもの）。8個（同図7・8）。III類—勾玉形。4個（うち本成品1個）（9・10・28）。IV類—垂飾りで穿孔しているもの。13個（同図11～16・20～23・25）。V類—孔をあけず切目が入っているもの。6個（同図17～19、24）。

石質は、ヒスイが25点と最も多く、次いで石筆質のものが16点ある。他は1、2点ずつある。I類、II類の、いわゆる玉類ではヒスイと石筆質のものがほぼ同数で、他には蛇紋岩のものが1点ずつあるだけである。IV類、V類のいわゆる垂飾りでは、石材の種類が多くなってくるが、ヒスイの割合が増し、石筆質のものが少ない。

孔は、片側から開けているものと、両側から開けているものが半々であるが、I類についてはヒスイ製のものが殆んど片側から穿孔しているのに対し、他の石質のものは殆ど両側から穿孔している。

I類では直径が8mm前後のものが多く、1cmを超えるものでは、大きさにバラツキがある。長さは7mm前後が多い。重さはほぼ1.5g以下である。II類は大きさがバラバラであり、I類に近いものから、8のように大きなものまである。また、16のように線刻してあるものもある。III類は長さが1～2cmで、重さは1g前後である。IV類は、11～15のように重さが2g未満の小型でIII類に近いものと、20～23、25のように、やや大きいものがある。23は中生代砂岩製で、富山県極楽寺遺跡に類例がある。V類は、大きさ、形状ともバラエティに富んでいる。

26・27は、丸玉の未成品であるが、26では他の部分が小さな面を作り磨かれているのに、岡の上面にあたる部分だけ割れ口がそのまま残っており、27でも、側面や下面が磨かれているのに上面だけは殆ど磨かれておらず、やや凹んでいる。これは穿孔しやすいためであろう。完成品を見ても、球形というより、お椀のような形をしていて、平らな面から穿孔している。

7. 砥石状石製品

両端がやや細くなった四角柱状の石製品である（図6-33の1～4、図版64の下）。92点出土している。以下のように分類した。I類—砥ぎ痕をもつもの（23点）。II類—磨り面のみを持つもの（37点）。III類—凹みをもつもの（5点）。IV類—その他（9点）。その他、破片のため分類できないものが18点ある。完形品が少ないため長さについては確定ではないが、ほぼ長さ15cm、幅4cm、重さ300g程度で、手に持ちやすい大きさである。砥ぎ痕や凹みは浅くあまり明瞭ではない。また、II類についても、中央部分がよく磨られているものと、端部付近がよく磨られているものがあり、一定ではない。II類については、磨石とも考えられるが、自然礫利用の磨石が多く出土しており、わざわざ敲打によって成形する必要が感じられないことと、石肌との組み合わせで使用するには、やや巾（厚さ）が足りないことなどから、別の用途を考えた方がよいと思われる。砥ぎ痕をもつものがあること、砂岩のものが殆どであることから、砥石としての用途を考えたい。大きさは手に持って使用するにちょうどよく、可動式の砥石というのか基本的な用途ではないだろうか。ただし、砥石としての実用性のみを重視するならば、わざわざ敲打によって四角柱状に整形する必要はないのであり、本遺跡でも、自然礫をそのまま利用した砥石が多数出土してい

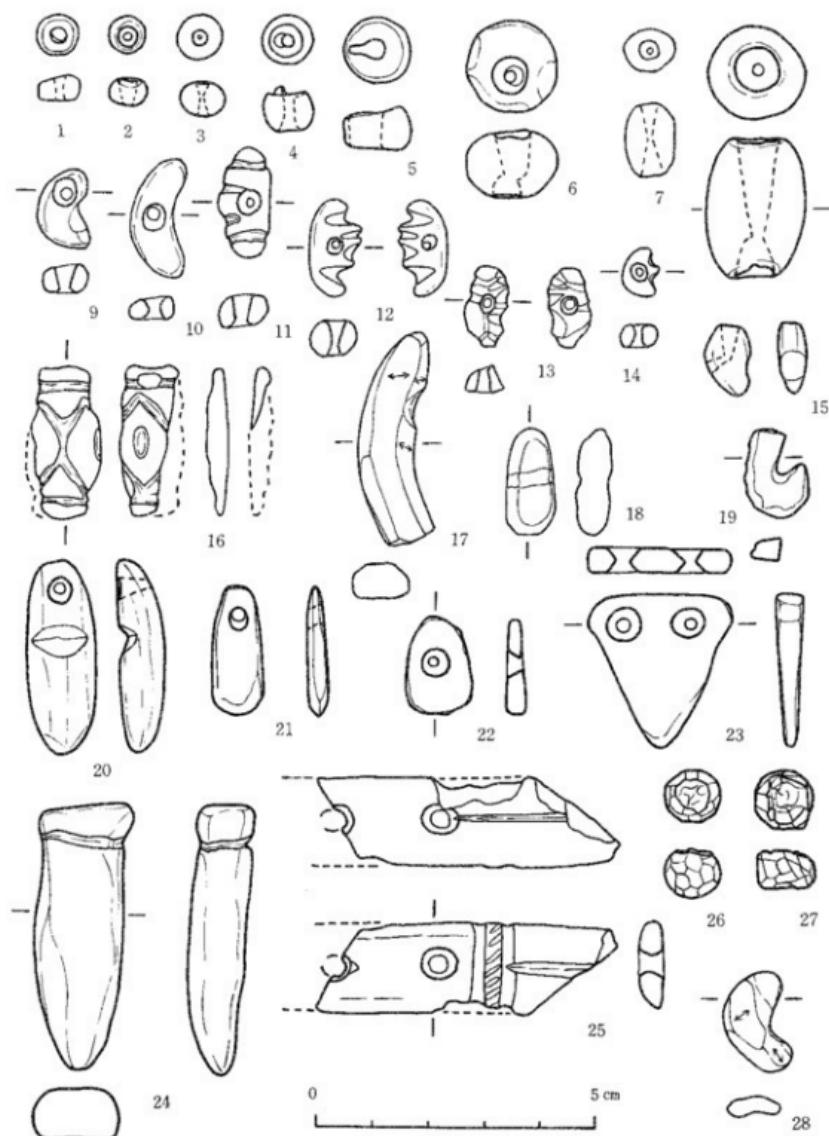


図 6-32 装飾品実測図 (S = +)

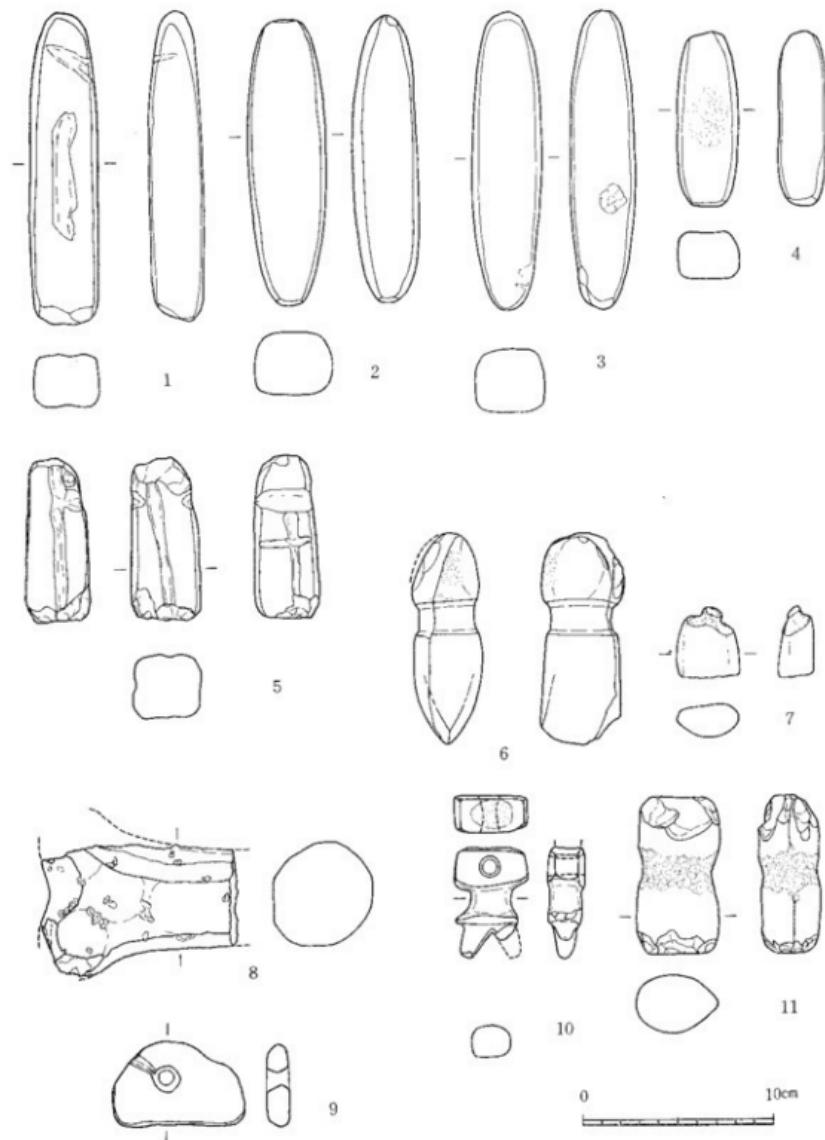


図 6-33 砥石状石製品・不明石製品実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

る。この石製品の場合、四角柱状という形態が特徴的であり、単に手頃な自然礫を利用するのには不適当なとき、例えば、砾石として使用する対象物が、御物石器、石冠、石棒、石劍、石刀など呪術的な意味を持つものである時などに使用されたものではないだろうか。

8. 岩版

第7次調査の際に出土した（図版67の6）。下部約1/3が欠損しているが、現存長11.5cm、巾9.8cm、厚さ4.2cm、重さ345gを測る。白色凝灰岩製である。残存部の中央よりやや上方に丸い凹みがあり、その両側縁は半円状に抉られている。裏面は表面に比べやや丸味を帯びており、凹みや線刻などはない。表面にも線刻はみられない。

9. その他の石製品

図版67の7は長さ23.5cm、巾8.1cm、厚さ4.3cm、重さ937gを測る。石質は凝灰岩である。背の部分及び片面に連結三叉文風の陰刻が施されている。石鋸形石製品に近いものであろうか。

図6-33の6は長さ11.2cm、巾4.5cm、厚さ3.5cmの頁岩製で、両頭の石劍を極端に短くしたような形をしている。7は、現存長3.7cm、巾3.2cm、重さ29gで、砂岩製である。小さなつまみ状の突起がある。9は、軽石製の壺飾品のようである。10は、緑色凝灰岩製で6次調査の際出土した。11は、7次調査に出土したもので、長さ8.4cm、巾4.3cm、厚さ3.2cmを測る。石刀の破片の両端を打ち欠き、更に中央部を敲打によって凹ませて、鉢りのような形にしている。（辻森由美子）

参考文献

- 吉木重孝・寺村光晴他、1974：『細池遺跡』、糸魚川市教育委員会。
高塙勝喜、1964：『金沢市近郊八日市新保並びに御経塚晚期遺跡の調査』、『石川県押野村史』
石川県石川郡押野村史編集委員会。
橋本 正、1976：『御物石器論』、『大境』 第6号 富山考古学会。

第3節 繩文後～晩期御経塚遺跡の石器圈

緒　言

本節においては、金沢市郊外野々市町御経塚に位置する縄文後～晩期の御経塚遺跡から出土した石器の石材を調べ、現時点で判っている周辺地域の地質を基に、これらの石材の原産地を求める、当時の交流圏の実体について論じた。

考古学では、同類～類似の型式・模様の土器を用いたと推定される古代人の生活の範囲を“土器圈”とよんでいる。これまでの長年に亘る考古学の成果によると、集落間の交易、あるいは、通婚によって、土器の製法や施文法も集落から集落へと伝えられ、ある地理的範囲の中で同類～類似の型式・模様をもつ土器がこれら集落間に普及した、といわれている。しかし、土器は考古学的資料の一部であって、すべてではない。資料の中には、石器もあり、それは、縄文時代には重要な道具の一つであり、更に、無土器時代においては、資料の大部分を占める。しかしながら、この石器を素材にした交易圏や通婚などの諸問題を今日に至るも余り議論されていない。殊に、縄文時代については、その感がある。それは、石器の型・模様は土器程に自由に施されないために、石器の様式の類型化は土器程に多種・多様でないからである。従って、編年的・地理的に詳細に類型化することが困難であることのために、文化圏問題に当って石器の視点よりアプローチされにくかった。

石器圈を認識し、生活圏問題にまで議論を展開するには、従来の土器で取扱ったような様式・施文等の観点からだけ取上げるのではなくて、石器の石材・石質・微量化学成分の視点からもアプローチするというような研究方法の転換が必要である、と考える。

そもそも、日本の考古学遺跡から出土した石器の岩石学的視点からの研究は極めて僅少であり、既報の論文の中にも、明らかに岩石学的にみて間違った鑑定の石材があつたり、または、考古学者のいう通称名で記載された鉱物名・岩石名の石材が多い。

最近における考古学は、自然科学との協力の上で研究される時代になっており、以上の意味からも、石材についての岩石学的・鉱物学的視点からの正確な認識に基づく石材の研究は必要欠くべからざるものである。その成果は、古代人の交流を知るだけではなくて、当時の交流圏の広がりを知る上でも、極めて貴重である。

筆者らは、以上に述べたような観点から、御経塚遺跡の石器についての研究を行った。

この研究では、まず、出土石器を岩質の観点から分類し、これら石材の石器の種類との関係を統計的に処理し、どのような理由で、特殊な石材が利用されたかの石材の岩石学的特質からみた見解も述べる。次に、石材が遺跡周辺のどこに分布しているのかを述べる。殊に、異地性の石材については、最寄りの産出地はどこであるかについて、現時点での地質学の成果に基づいて述べたい。

なお、本研究では、以上のような主旨において、御経塚遺跡を主とし、その周辺に散在する縄文中期の古府遺跡、縄文中～後期の北塙遺跡、そして、弥生前～中期の寺中遺跡から出土する石器

をも比較検討のための参考資料として調査した。

1 遺跡の立地環境

御経塚遺跡は、金沢市の西南に隣接する野々市町御経塚の北東地区に立地する。本遺跡は、手取川扇状地の北東扇端部、海拔10mに位置し、その北東には十入川、伏見川などがある。すなわち、本遺跡は、手取川によって形成された第四紀更新世～末期の手取川扇状地の北東扇端部に立地し、遺跡の周辺には、旧手取川、あるいは七ヶ用水がかつて自由に流れ、ある時には洪水に伴う冠水、ある時は殆んど乾水となるような、小起伏に富んだ扇状地末端であったと推定される。また、この地域は、手取川の周年的自噴帯であり、温帯中央部に位置するため、冬季における積雪寒冷時を除いて、当時の生活環境としては恵まれていたようである。従って、御経塚遺跡を中心とした半径約2km以内には、縄文中期中葉の標式遺跡である古府遺跡、縄文晚期初頭の新保本町遺跡・中屋遺跡等が散在し、更に、北方約3kmには縄文中期後葉北塚A遺跡がある。このように、この地域には、縄文中～晩期の北陸の標式遺跡が集中して分布している。

2 御経塚遺跡の考古学的編年と文化的背景

本遺跡の調査は、昭和48年9月から54年3月までに、数次に亘って実施された。

(1) 遺跡の規模と出土品の概要

本遺跡は、大小2つの馬蹄形に近い遺跡が中央に空地を挟んで向かいあい、直径約200mの円形に近い大集落址をなしている。

調査の結果、遺構としては、堅穴住居址5棟、炉址27基、土器棺・塚を主体とする土塙墓百数十基の他に、配石遺構、貯蔵穴と推定される円形ピット等が検出され、縄文後～晩期の各期に亘る多量の土器、土偶、耳栓等の土製品が出土している。

石器としては、多量の打製石斧をはじめ、磨製石斧・敲石・磨石・凹石・石皿・石錐・硬玉製玉類・呪術の盛行を物語る多様異石器(石冠・石剣・石刀・石棒・御物石器)、及び砥石状石製品等約7千点が出土している。

これらの出土品から判断すると、本遺跡は、縄文後期中葉酒見式期から晩期後葉下野式期まで営まれたと判断される。

(2) 土器からみた文化的背景

莫大な数の土器は、その大半が井口式で、発掘地全域に亘って出土した。次に多いのは、三叉状連結文を特徴とする八日市新保式で、御経塚式・中屋式・下野式は上記の2つに比して少量であった。下野式は発掘地域の一部分に、比較的まとまって出土している。以上から縄文後期中葉酒見式期に遺跡の形成が始まり、末葉井口式期には飛躍的に膨張を遂げ、晩期前半の八日市新保式・御経塚式・中屋式期に至って集落の中心を移しながら生活が営まれたと考えられるが、晩期下野式期には、急速に解体したようである。

縄文後期中葉を示すといわれる酒見式土器は、磨消縄文を主とした土器で、関東の要素と東北の要素の濃い三仏生式土器に酷似している。この事は、北陸地方一帯が、東日本を中心とした広

域文化圏に包含される位置における事例を示している。次期の井口式は近畿宮流式の強力な浸透をうけ、西日本の影響下にはいる。晩期になると、宮流式の器形・文様の基盤の上に亀ヶ岡式の三叉状文の影響が加わり、地方色豊かな独自の土器を形成していった。勿論、後期末のように、八日市新保式併行滋賀式で明白にされる西日本との関連は続いている。このように、晩期の前半は、北陸が西日本と東日本の中间に位置しているが故に、東西両文化圏の中間的性格を示す地方色の強い土器圏をもつて至ったのである。

また、縄文晩期とされる呪術的な御物石器は、土器の文化圏と重なりを示し、飛牌を中心とした中部地方の西半分に分布している。この事も、当時の北陸の文化圏を考える上で見逃せない。

御経塚遺跡が開始され、発展し、解体していった時代は、東日本と西日本の影響を交互に、時には、同時に受けながら、両地域の性格に影響されながらも、北陸特有の土器圏を形成し、完成していった時代である。

3 御経塚遺跡出土石器の石材

縄文後期から晩期に亘る御経塚遺跡から出土した石器類は、磨製石斧・打製石斧・磨石類・石錐・石鎌、及び石皿等に区分される。これら石器の間には、用途別による石材の相違のあることが予想されるので、一応、石器の種類毎に石材との関係を調べ、これら石材の原産地を、現在の地質的視点から最寄りの分布地を求ることにより推定する。そして、かかる石材の原産地の推定によって、縄文後～晩期における金沢を中心とした、当時の文化圏の広がりを将来決定するに当っての資料を提供したい。

(1) 石器の種類毎の石材の検討

a 磨製石斧

本遺跡から出土した磨製石斧の石材毎の頻度は、表の如くである。表示したように、これら磨製石斧の中で最も頻度の高い石材は、蛇紋岩の91点、34.6%である。この蛇紋岩の最寄りの分布地は、福井県九頭竜川上流白馬洞付近で、他に富山県と新潟県との県境から青海川上流にかけての地域である。前者は、古生代シルル紀の石灰岩類に付随して分布し、後者は、石炭～二疊紀と推定されるカンラン岩が、その後に変質を受けてできた岩石と推定される。蛇紋岩は比較的軟かで（硬度2.5）、加工しやすいことも利用度の高い理由と考えられる。次に多いチャートは、38点14.4%で、九頭竜川上流、及び富山県東北部に分布する。この他に、緑色凝灰岩（8%）、白色凝灰岩（6%）、凝灰岩（6%）、破碎された流紋岩（6%）がある。

頻度は低いが、特徴的な石材としては、手取川上流に分布する中生代手取層群の砂岩、犀川主流二又、尾添村に分布する飛騨変成岩類の片麻岩がある。更に、遠距離産の石材としては、新潟県姫川上流の翡翠、御母衣ダム上流、九頭竜川上流、神岡の南、及び白馬岳近傍に分布する緑色片岩、富山県黒部川上流、及び富山県東北部に分布する单斜輝石等がある。

これら石材は、何れも交流圏を知るための重要な手がかりを与えるものである。

表6--9 磨製石斧

石質の種類	実数 (個)	百分率 (%)	最寄りの岩石分布地
妙岩	15	5.7	手取川中流、犀川上流
中生代の砂岩	4	1.5	手取川上流
凝灰質砂岩	1	0.36	手取川中流、犀川上流
真緑色凝灰岩	1	0.36	手取川上流
白色凝灰岩	21	8.0	手取川(鶴来)
白色凝灰岩	15	5.7	能登、石川・富山県境
火山硬凝灰岩	7	2.7	手取川中流、犀川上流
輝鉄凝灰岩	4	1.5	九頭竜川上流、今庄
凝灰岩	16	6.1	手取川中流、犀川上流
予や	38	14.4	九頭竜川上流、富山県東北部
破碎された流紋岩の一部	15	5.7	医王山、手取川中流
流紋岩中の珪化部分	1	0.36	"
輝石安山岩	12	4.6	能登、手取川中流
安山岩	3	1.1	手取川中流、犀川上流
閃鉄岩	2	0.8	鹿島町、眉丈山麓
フリント	1	0.36	医王山、手取川中流
角岩	2	0.8	
珪化をうけた石英粗面岩	1	0.36	手取川上流、大遺谷(白峰)
蛇紋岩	91	34.6	{ 九頭竜川上流、 [富山・新潟県境青海川上流
翡翠を含む珠質岩	4	1.5	新潟県越川流域
翡翠まじりの蛇紋岩	4	1.5	"
緑色片岩	2	0.8	{ 御母衣ダム上流、九頭竜川 [白馬岳、神岡の南
片麻岩	2	0.8	{ 蛇谷(白山中宮温泉) [犀川上流二又
変成岩中の準斜輝石	1	0.36	富山県黒部川上流、富山県東北部
總計	263	100.0	

b 打製石斧

最も頻度の高い石材は、火山硬凝灰岩の795点、30%で、これは手取川中流、及び犀川上流に分布し、これに次ぐのが緑色凝灰岩の415点、15.7%で、最寄りの分布地は鶴来～倉ヶ岳付近である。次は砂岩の410点、15.5%で、手取川中流、及び犀川上流に分布する。

頻度は低いが、特徴的な石材としては、手取川上流に分布する石英粗面岩(3%)、白山中宮温泉の蛇谷、及び犀川上流に分布する片麻岩(0.6%)、鹿島町石動山麓、眉丈山麓に分布する閃鉄岩(0.2%)、手取川上流、石動山麓、河合谷、押水町等に分布し、宝達山塊を構成する花崗岩(0.04%)がある。更に、遠距離産の石材としては、九頭竜川上流、及び福井県今庄付近に分布する輝鉄凝灰岩(0.1%)がある。

以上を総括すると、打製石斧では、火山硬凝灰岩、緑色凝灰岩、砂岩等手取川、及び犀川流域に産する石材が80%以上を占めるのが特徴である。

c 敲石

敲石の中で、最も頻度の高い石材は、砂岩の293点、29.2%で、これは新第三紀中新世の砂岩と判断される。これは、手取川中流や犀川上流の緑色凝灰岩地帯の凝灰岩層に介在される妙岩である。

その他、角閃石安山岩(4%)、火山硬凝灰岩(2%)等で、何れも手取川中流、及び犀川上流

表6-10 打製石斧

石質の種類	実数(個)	百分率(%)	最寄りの岩石分布地
火成岩	795	30.0	手取川中流、犀川上流
綠色凝灰岩	415	15.7	手取川(鶴来)
凝灰岩	139	5.2	手取川中流、犀川上流
角砾凝灰岩	38	1.4	"
粗粒凝灰岩	27	1.0	"
輝綠凝灰岩	3	0.1	九頭竜川上流、今庄
白色凝灰岩	11	0.4	能登、石川・富山県境
珪化作用をうけた凝灰岩	3	0.1	手取川中流、犀川上流
砂岩	410	15.5	"
中生代の砂岩	11	0.4	手取川上流
砂質凝灰岩	2	0.08	手取川中流、犀川上流
頁岩	1	0.04	手取川上流
泥岩	1	0.04	犀川中流
化石スコアリ	1	0.04	医王山、手取川中流
安山岩	44	1.7	手取川中流、犀川上流
英安山岩	136	5.1	"
輝閃角安山岩	69	2.6	能登、手取川中流
閃石安山岩	208	7.9	手取川中流、犀川上流
閃石安山岩	20	0.8	犀川上流岩稈累層
閃石安山岩	79	3.0	手取川上流、大道谷(白峰)
玢岩	127	4.8	手取川上流(尾口村、白峰)
玢岩	78	2.9	医王山、手取川中流
花崗岩	1	0.04	{ 宝達山系(河合谷、押水町) 手取川上流 }
花崗岩	1	0.04	手取川上流、宝達山
閃綠岩	4	0.2	鹿島町、眉丈山麓
玄武岩	1	0.04	能登半島、穴水、門前、上辰巳
輝綠岩	6	0.24	手取川上流
片麻岩	17	0.6	{ 鮎谷(白山中宮温泉) 犀川上流二又 }
総計	2694	100.0	

に分布する。

これを要するに、御経塚遺跡周辺産の石材が主になっているということである。

d 磨石

新第三紀中新世の砂岩が259点、91.5%を占め、その他に角閃石安山岩(3%)、凝灰岩(3%)等金沢周辺に産する石材が殆んどである。しかし、頻度は低いが、石動山、及び眉丈山麓に分布する閃緑岩の存在は、この石器の特徴である。

e 石鏃

本遺跡から出土する石鏃は、小型で、狩猟を目的としたものであって、弥生時代になって出土する、武器用の石鏃ではない。

石鏃の中で、最も頻度の高い石材は輝石安山岩590点の73%である。この岩石は、能登に広く分布する新第三紀中新世前期の穴水累層に比定されるもので、同石材は、手取川上流にも分布している。次いで多いのが、フリント159点、17.1%、メノウ80点、8.5%で、何れも医王山、及び手取川中流に分布する医王山流紋岩、及びその周辺の破碎岩である。頻度は低いが、特徴的な石材としては、九頭竜川上流、及び福井県今庄付近の輝緑凝灰岩(0.5%)、加賀市鞍掛山、及び内

浦町赤崎に分布する黒曜石（0.3%）、九頭竜川上流、及び富山県・新潟県の県境から姫川上流に分布する蛇紋岩（0.1%）である。

以上を要するに、石鏡の石材としては、輝石安山岩が最も多く、他に、僅かながら黒曜石、及び蛇紋岩がある。しかし、石鏡の用途からいって、蛇紋岩の石鏡は実用性に乏しく、それはむしろ装飾的、あるいは祭祀的意味しかない、と判断される。

f 石

凹石の中で最も高い頻度は、新第三紀中新世の砂岩の969点、74.2%で、次いで、角閃石安山岩の94点、7.2%、そして、火山疊凝灰岩（5%）、凝灰岩（4%）、石英安山岩（2%）等である。何れも金沢周辺産の石材である。

g 石劍・石刀・石棒

石劍・石刀・石棒の中で最も頻度の高い石材は、頁岩の110点、40.4%である。これは中生代手取層群に属し、手取川上流に分布する。次に多いのは砂岩（12.5%）、泥岩（9.2%）、凝灰岩（8.8%）、緑色片岩（4.4%）等である。これらの中で緑色片岩は御母衣ダム上流、九頭竜川上流、白馬岳付近、及び神岡笠山の南部等に分布する。

頻度は低いが、特徴的な石材としては、九頭竜川上流に分布する粘板岩（1.5%）（これは、手取川上流に分布する黒色頁岩の一部であるかも知れない）；九頭竜川上流、及び福井県今庄の輝綠凝灰岩（2.9%）、白山周辺、及び犀川上流二又の片麻岩類（1.8%）、九頭竜川上流、及び富山県・新潟県の県境から墨部川上流の結晶片岩（0.7%）等がある。何れも遠距離産の石材である。

要するに、石劍・石刀は薄片状の石器であるために、薄片状の石材か、または継工の仕易い石材が選定されたのであろう。

石棒と推定されるものの中には石劍や石刀の基部の破片もあって、断片では何れとも決定し難い。この類で最も数の多い石材は、新第三紀中新世の砂岩と緑色凝灰岩である。

数は少ないが、特徴的な石材には、九頭竜川上流、及び福井県今庄付近に分布する輝綠凝灰岩、鹿島町、及び眉丈山麓に分布する閃綠岩等がある。

以上を要約すると、石棒・石劍・石刀では、その90%以上が手取川、及び犀川流域に分布する。すなわち、金沢周辺に産する石材が使われているが、一部には遠距離の石材もある。

h 石皿

石皿の石材のうち頻度の高いのは、新第三紀中新世の砂岩の148点、59%、角閃石安山岩（15%）、緑色凝灰岩（7%）、火山疊凝灰岩（5.6%）である。石皿の石材は、石皿が、他の石器に比べ重量があり、容積の大きいことも必要なので、遠隣に近い金沢周辺、鶴来付近に普通にみられる岩石が利用された、といえよう。

i 「かつおぶし型」石器

最も頻度の高い石材は、凝灰岩6点、28.6%で、これは新第三紀中新世の岩石である。

その他、比較的多産しているものに、緑色凝灰岩（14.3%）、砂岩（9.5%）、火山疊凝灰岩（9.5%）がある。何れも、手取川、及び犀川流域に分布する石材である。

頻度は低いが、特徴的な石材は、白山・中宮温泉の蛇谷及び犀川上流に分布する片麻岩がある。

表6-11 かつおぶし型石器

石質の種類	実数 (個)	百分率 (%)	最寄りの岩石分布地
砂 岩	2	9.5	手取川中流、犀川上流
緑色凝灰岩	3	14.3	手取川(鶴来)
白色凝灰岩	4	19.0	能登、石川・富山県境
火山礫凝灰岩	2	9.5	手取川中流、犀川上流
凝灰岩	6	28.6	"
泥 岩	1	4.8	犀川中流
石英安山岩	1	4.8	手取川中流、犀川上流
石英粗面岩	1	4.8	手取川中流(河内村、白峰村)
片麻岩	1	4.8	{ 手取川上流 犀川上流二又 }
總 計	21	100.0	

以上から、「かつおぶし型」石器では、主に金沢周辺に産する石材が使われている。

j 石 錘

石錘で、最も頻度の高い石材は、新第三紀中新世の砂岩の10点、36%である。次に高いのは、緑色凝灰岩の9点、32.1%である。以上を要約すると、九頭竜川上流、及び福井県今庄付近に分布する輝緑凝灰岩が1点あるが、石錘では、主に、手取川、及び犀川流域等、遺跡周辺の丘陵・低山地に分布する石材が使われている。

k 石 冠

石冠のうちで、最も頻度の高い石材は、緑色凝灰岩の10点、26.3%、次いで、新第三紀中新世の砂岩の9点、23.7%、凝灰岩5点、13.2%、白色凝灰岩の4点10.5%、泥岩の3点、7.9%である。

何れも手取川、及び犀川流域に存在する石材ばかりである。

l 装飾品

装飾品のうちで、最も頻度が高い石材は、翡翠の25点、47.2%である。翡翠の最寄りの分布地は新潟県姫川流域である。次に多い石筆質は、14点、26.4%で、石筆質石を含む原岩の分布地は現時点では判断できないが、ろう石・滑石の分布域ではなかろうか。次いで多いのが、蛇紋岩の3点、その分布地は、既述の如く九頭竜川上流、及び富山・新潟県境から姫川上流にいたる地域である。その他、特徴的な石材としては、手取川上流に分布する中生代の砂岩(1.9)と頁岩とがある。

以上から、磨いて美しい石材は、蛇紋岩や翡翠のように、遺跡から100km以上離れた地方から運搬されてきている。

m 砥石状石製品

この類では、その大部分が手取川中～上流や犀川上流に分布する医王山累層中の砂岩87点で、約95%に達する。その他の石材も、手取川や犀川に分布する岩石である。

(2) 石器の石材に基づく交流圏

本遺跡から出土した石器の石材の最寄りの分布地を地図中にあらわしたのが図6-34である。

表6-12 装飾品

石質の種類	実数 (個)	百分率 (%)	最寄りの岩石分布地
中生代の砂岩 ろ う 石	1	1.9	手取川上流
真 岩	1	1.9	手取川中流(鳥越村、輪島市)
緑色凝灰岩	1	1.9	手取川上流
白色凝灰岩	1	1.9	手取川(鶴来)
玉 流紋岩	1	1.9	能登、石川・富山県境
輝石安山岩	2	3.8	駿河山、手取川中流
翡翠	1	1.9	"
碧 石	25	47.2	能登、手取川中流 新潟県鶴川流域
筆 質	14	26.4	不 明
蛇 紋 岩	3	5.7	九頭竜川上流 富山・新潟県境青海川上流
滑 石	2	3.8	越後基性岩体周辺 ドロマイド岩体域
総 計	53	100.0	



図6-34 繩文後~晩期御経塚遺跡出土石器の石材の最寄りの分布地を示す図

輝緑凝灰岩、チャート、蛇紋岩、翡翠、閃綠岩、玄武岩、緑色片岩、及び黒曜石以外の石材は、何れも御経塚遺跡を中心とした半径50km以内の所に分布していることから、当時、半径50km以内の範囲で、活発な交流が行われていたであろうと一見推察できるが、これらの岩石のうちで、瑪瑙や真岩のような脆い岩石を除く、他の多くの岩石は、本遺跡が位置する手取川扇状地を構成するいわゆる扇状地疊層の中に多産しているので、これら岩石の現在の露出地まで、古代人が採集を行ったというよりはむしろ、遺跡の立地地域の地表下でこれらの石材を求めた、と考えることの方がより妥当である。しかし、それでもなお、前述の瑪瑙、真岩、黒曜石、閃綠岩等は遺跡の立地する手取川扇状地の崩端域には全くないので、これらの石材については、集落から集落への交易、あるいは原産地まで採集に出かけたと考えるのが妥当である。

遠距離の地域より運搬されてきた石材としては、蛇紋岩、翡翠、チャート、緑色片岩、輝緑凝灰岩を挙げることができる。とりわけ翡翠は、新潟県姫川流域から運搬されてきたことは疑う余地のないところであるので、上述したような蛇紋岩、チャート、緑色片岩、輝緑凝灰岩等も100km以上離れた原産地から、何らかの方法で運搬されてきたと考えても不思議ではない。

また、これら遠距離の地域産の石材は、主に、磨製石斧や装飾品などに使われている。これらの石造品は、実生活に密着した実用品というよりは、むしろ飾り品として利用されており、それは原始共同社会における権力、権威の象徴であったと考えられる。その故にこそ、実用品ではなく、且つ、遠方に分布するにもかかわらず、これらの地域から運搬してきたのであろう。従って、御経塚遺跡の石器から石器圈を考える場合には、道具として利用していた石器から石器圈を考察するよりは、磨製石斧や装飾品の石材を主体的に検討し、当時の石器圈の広がりを考えることが、より便宜的・直接的であることがわかった。

4 御経塚周辺の遺跡の石器圈

御経塚周辺に散在する縄文時代～弥生時代の諸遺跡からも、若干ながら石器を共伴する遺跡が分布しているので、縄文時代御経塚遺跡の石器圈を考察するに当たり、それ以前、及びそれ以後の時代の遺跡からの石器についても、石材の観点から比較検討し、併せて、時間的流れと空間的広がりの中で石器圈問題を把握することは、ともすれば静的にしかとらえられないこの種の問題の解決を、時間と空間という動的な側面からとらえることとなり、御経塚遺跡の生活圏の把握に当ってより適切な考察がなされると考える。

このような理由から、御経塚周辺に散在する縄文中期の古府遺跡、縄文中期～後期の北塚遺跡、及び弥生前期～中期の寺中遺跡について、石器圈の視点から検討した。

(1) 縄文中期古府遺跡の石器圈

本遺跡から出土した石器の石材の最寄りの分布地を地図中に表わしたのが図6-35である。

蛇紋岩以外は、何れも手取川、及び犀川流域、または、医王山付近に産する石材である。すなわち、石材の原産地が、遺跡を中心として半径50km以内のところにある。従って、当時、半径50km以内の範囲で、石器、石材の交換によって象徴される当時の交易が活発に行われた、と推察できる。しかし、本遺跡の立地する地域周辺にはこの50km以内に分布する岩石が砾として散在して

いるので、そのような理を利用したと考えるべきであろう。

遠距離産の石材としては、蛇紋岩が挙げられる。蛇紋岩の最寄りの分布地は、福井県九頭竜川上流、及び富山・新潟県境の2か所が考えられるが、何れも、半径100km付近にあることから、当時、既に、100kmの遠距離地方とも間接的にせよ、交流のあったことが推察される。

(2) 繩文中期～後期北塚遺跡の石器図

本遺跡から出土した石器の石材の最寄りの分布地を地図中に表わしたのが図6-36である。

蛇紋岩、チャート、及び翡翠以外は、何れも手取川、及び犀川流域、または医王山付近に分布



図6-35 繩文中期古府遺跡出土石器の石材の最寄りの分布地を示す図

する石材である。すなわち、石材の原産地が北塚遺跡を中心として半径50km以内のところにある。従って、当時、半径50km以内の範囲で、交流があったと考えられるが、この場合も古府遺跡の場合と同様に本遺跡周辺の礫層からの礫を利用したと考えられる。

遠距離より運搬されてきた石材としては、蛇紋岩、チャート、及び翡翠が挙げられる。蛇紋岩の最寄りの分布地は、九頭竜川上流、及び富山・新潟県境にかけての地域で、チャートの最寄りの分布地は、九頭竜川上流、及び富山県東北部である。また、翡翠の最寄りの分布地は、新潟県糸魚川流域である。従って、これらの産出地は、遺跡を中心として半径120km付近にあることから、蛇紋岩、チャート、及び翡翠のように磨いて美しい石材は、かなり遠方との交流で運搬されて来たと結論できる。

(3) 弥生前期～中期寺中遺跡の石器図

本遺跡から出土した石器の石材の最寄りの分布地を地図中に表わしたのが図6-37である。



図6-36 繩文中～後期北塚遺跡出土石器の石材の最寄りの分布地を示す図

翡翠、蛇紋岩以外の石材は、何れも手取川、及び犀川流域、または医王山付近に分布する石材で、石材の原産地は、遺跡を中心として半径50km以内のところにある。従って、当時、半径50kmの範囲で、活発に行われた交流によって得られた石材であろうと推察できるが、この遺跡でも、古府遺跡と同様のことといえる。

遠距離より運搬されてきた石材としては、翡翠と蛇紋岩が挙げられる。とりわけ、翡翠は、新潟県姫川流域から運ばれてきた可能性が大きいので、当時、既に、100km以上の遠距離地方とも交流があったとすれば、蛇紋岩についても、九頭竜川上流、及び富山県・新潟県境から運搬されたと考えても不思議ではない。



図6-37 弥生前～中期寺中遺跡出土石器の石材の最寄りの分布地を示す図

5 総 括

(1) 御経塚遺跡についての考察

御経塚遺跡から出土する石器の石質を基に石器圏の広がりを考える上で重視しなければならないのが、磨製石斧、装飾品、及び御物石器である。

磨製石斧の中で、最も頻度の高い石材は蛇紋岩であり、全体の約35%を占める。蛇紋岩の最寄りの分布地は、九頭竜川上流、及び富山・新潟県境で、何れも遺跡から100km程離れた遠隔地である。

磨製石斧は、切る・削る・削るという機能を發揮するための道具で、石器の中でも最も材質を選ぶ石器である。蛇紋岩は、蛇紋石を主鉱物とする岩石で、硬度2.5の軟かい岩石である。石斧面に残る使用痕の調査も必要であるが、石斧としての目的に充分耐える石材であるとは考え難い。むしろ、権力の象徴、あるいは装飾品として利用した可能性もある。そのため上述したような遠隔地から、何らかの方法で、蛇紋岩を手に入れたのであろう、と推察できる。

また、装飾品の中で、最も頻度の高い石材は翡翠であり、全体の約47%を占める。翡翠の分布地は、新潟県姫川流域で、遺跡から120km程離れた遠隔地である。

装飾品は、当時誰でも身につけることのできる品物ではなく、集落の権力者が、その権力を象徴するためのものであったに違いない。それ故、美しい石材である翡翠は、遠隔地に産するにもかかわらず、最寄りの集落間との製品交換という交易を通して、遠隔地まで運搬された、と推定される。

磨製石斧や装飾品のように、その石質に特殊性はないが、出土地域が限定される石器として、呪術とかかわりの深いとみなされる御物石器があり、それは、縄文後期の特徴的な石器で、その分布は、岐阜県を中心とした中部地方、特に、山間部に多く、富山県下では山田村小谷、砺波市中尾、上平村西赤尾、石川県では鹿西町能登岬上、高来町今田、能都町、及び御経塚遺跡などから出土している。以上のことから考えると、縄文後期には、主に遺跡から約150kmの範囲内で、交流があった、と考えられる。

この推定を裏づける考古学的資料としては、土器がある。土器の模様と型式を基に推定される“土器圈”について考えてみると、縄文後期の井口式は、福井・富山県、さらに、岐阜県・東海地方の影響をも受けている。すなわち、御経塚遺跡時代の石器圈の広がりは、ここから出土の土器から推定された“土器圈”とほぼ一致する。

(2) 他の遺跡についての考察

(a) 古府遺跡

古府遺跡から出土する石器のうち、注目すべきものは磨製石斧である。磨製石斧の石材のうち約70%が蛇紋岩である。

蛇紋岩は、遺跡から100kmの遠距離後の石材であるにもかかわらず、全体の7割を占めるということは、蛇紋岩が当時の人々にとって、いかに重要な石材であったかを示唆するものである。

(b) 北塚遺跡

北塚遺跡から出土する石器のうち、注目すべきものは、磨製石斧と装飾品である管玉である。

磨製石斧では、蛇紋岩が45%と、依然として最も頻度が高く、古府の時代と同様の範囲での交流があったと推定される。

さらに、翡翠製の管玉が出土していることから、中期後葉に入って、古府遺跡の時代（縄文中期中葉～後期）より、交流圏が20km程拡大したと考えられる。

(c) 寺中遺跡

寺中遺跡から出土する石器の絶対数は、他の縄文時代の遺跡と比較すると、少ない。これは、弥生前期～中期は、金属器が伝来した時代であり、石器の道具としての重要性が低くなったこと

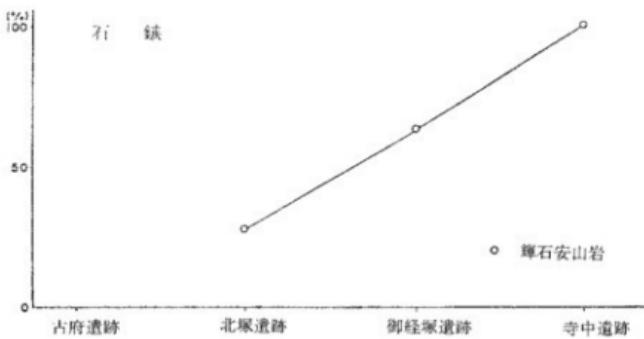


図 6-38 御経塚遺跡周辺の遺跡からの石鋸の石材頻度

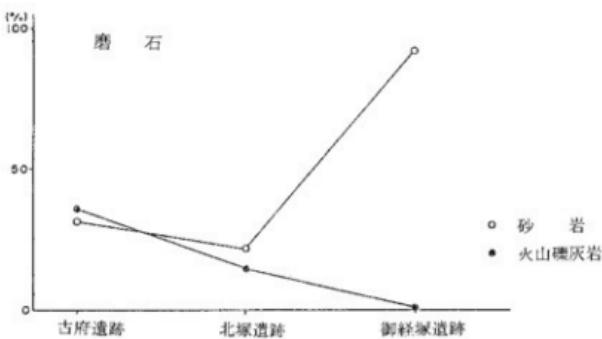


図 6-39 御経塚遺跡周辺の遺跡からの磨石の石材頻度

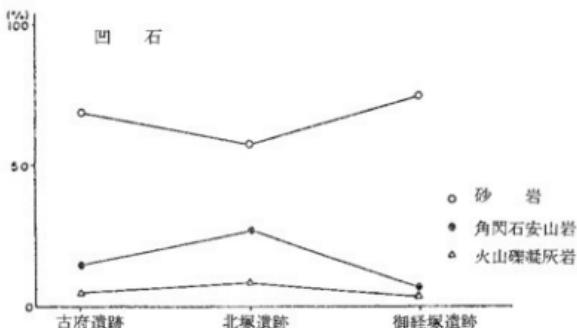


図 6-40 御経塚遺跡周辺の遺跡からの凹石の石材頻度

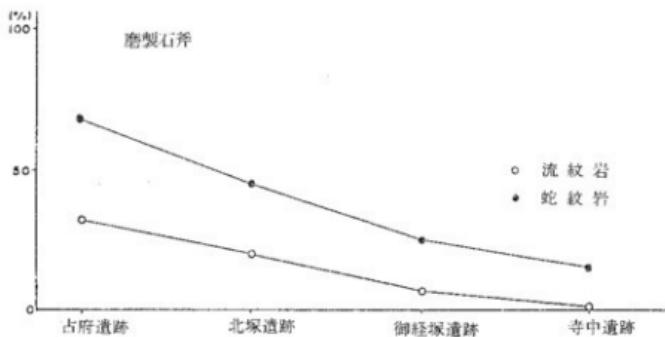


図 6-41 御経塚遺跡周辺の遺跡からの磨製石斧の石材頻度

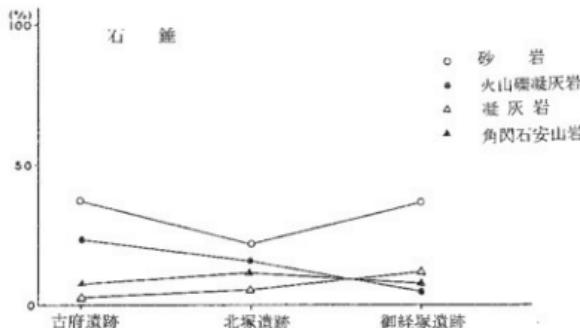


図 6-42 御経塚遺跡周辺の遺跡からの石錐の石材頻度

に原因がある、と思われる。しかし、翡翠製の勾玉が出土していることから、道具は石器から鉄器、青銅器、または、木製品にかわりつつあったが、装饰品としての翡翠の価値は、依然として高く、金属器には代替えできない美的価値の高いものであったと考えられる。

尚、その他の特徴的な石材としては、紅簾石片岩のナイフ状石器が1点出土している。紅簾石片岩は、新潟県の越川流域、埼玉県長瀬付近、愛知県、及び紀伊半島に分布するが、翡翠が新潟県越川産であり、既に当地との交流のあったことを併せ考えれば、紅簾石片岩の原産地も、新潟県越川流域、あるいは愛知県と考える方が妥当である。

(3) 河北低地に立地する縄文遺跡の石材について

古府、北塚、御経塚、寺中の各遺跡から出土する磨製石斧の石材の中に、何れの遺跡からも蛇

蛇紋岩が出土していることから、縄文時代中期頃には、遺跡から100kmの範囲まで、間接的にせよ、交流のあつたことがわかる。

装飾品においては、吉府遺跡を除く他の3つの遺跡から翡翠製の石器が出土していることから、縄文中期後葉に入り、遺跡から120km程離れた新潟県姫川流域にまで交流圏が広がったと推察できる。そして、寺中遺跡から紅簾石片岩製の石器が出土しており、この岩石の原産地を、新潟県姫川流域、あるいは愛知県と考えるならば、弥生前～中期にはその交流圏は、遺跡から120km、場合によってはそれ以上の範囲まで拡大化したと言える。

しかし、何れの遺跡においても、磨製石斧や装飾品以外の石器は、遺跡周辺せいぜい50km以内に分布する石材を使っている。手取川扇状地扇端に位置する縄文遺跡についていえば、これらの近距離産石材は、メノウ、中生代の砂岩、黒曜石を除いて、遺跡が立地する本扇状地を構成する礫層の疊に供給源があると推定される。

(4) 全体的なこと

- (a) 狩猟用石器の絶対数は、縄文時代と比較すると、弥生時代になって極端に減少する。これは、弥生時代になって、稻作農耕が急速に拡大し、從来の狩猟採集中心の生活から農耕中心の生活へと移行しつつあったからと推定される。
- (b) 磨石、及び凹石は、時代が進むにつれて、火山礫凝灰岩の頻度が低くなり、その逆に、砂岩の頻度が高くなる傾向がある。これは、磨石、及び凹石は、食品をすりつぶす時に使われる所以で、石器の表面に礫が凸出していると、都合が悪いので、均質な砂岩へと変わっていたと思われる。最初の頃には、砂岩を利用したくとも遺跡周辺にはないので、磨石や凹石に砂岩を利用するようになったのは、この時期に手取川上流域との交流が開始されたことを示唆し、また、砂岩が磨石や凹石に有効であることを感じたからであろう。
- (c) 磨製石斧における蛇紋岩の頻度は、時代とともに次第に低くなっている。この原因としては、弥生時代の石器を多産する遺跡が少ないので、断定はできないが、稻作文化の伝来とともに、蛇紋岩より鍛工がしやすく、かつ硬い金属が伝来したため、わざわざ遠隔地から蛇紋岩を取り寄せたり、または、製品を交易する必要がなくなったためと考えられる。
- (d) 縄文中期後葉～後期前葉の北塚遺跡から、翡翠製の管玉が1点、縄文後期中葉～晩期後葉の御経塚遺跡から翡翠製の装飾品が全体の半数近くの25点、弥生前期～中期の寺中遺跡から翡翠製の勾玉が1点出土している。これらの翡翠は、新潟県の姫川流域産であることは間違いないので、縄文中期中葉には、すでに遺跡から120kmも離れた地域とも交流があったと考えられる。とは言っても、翡翠を求めて、わざわざ原産地まで足を運んだというよりも、集落から集落へと製品が運ばれたと考えた方が妥当である。
- (e) 弥生時代に入って、磨製石斧、及び打製石斧の絶対数が極端に少なくなっている。これは、稻作技術とともに、鉄も伝來したが、当時、鉄はまだ貴重品であったので、農工具としてではなく、刀(ナイフ)、鉄斧などの木工用利器として使われるようになり、從来の磨製、及び打製の石斧はしだいに使われなくなったと考えられる。
- (f) 縄文時代の石器圏の広がりを考察するには、出土する石器の中で、特に磨製石斧と装飾品の

石材について検討するのが有効である、と思われる。

(g) 石錘は、漁網用の道具で、縄文時代から弥生時代に至るも変化が認められないのは、漁業活動は、農耕文化の発達に左右されることなく、存続したことを意味する。石材をみると、新第三紀中新世～中生代の砂岩が最も多いのは、この岩石は均質で、堅くもなく、さりとて脆くない。しかも、跡附近の河床の構成疊層から容易に得られるからであろう。砂岩に次いで多いのは、古府期には、火山凝灰岩であるが、御経塚期になると、均質な凝灰岩に代っている。それは、磨石や凹石の場合と同様に、礫を含む凝灰岩では、細工がしにくかったからであろう。

(藤則雄・平元悦子)

なお、本報文は高畠勝喜調査団長の了解を得て『石川考古学研究会誌』第25号（昭和57年3月）に発表したものである。

参考文献

- AITKEN, M.J. (1974) : Physics and Archaeology : Clarendon Press, Oxford, pp. 291.
- BROTHWELL, D. & E. HIGGS (ed.) (1963) : Science in Archaeology : Thames and Hudson Bristol, pp. 595.
- DANELS, F. et (1953) : Thermoluminescence as a Research Tool : *Science*, 117, 343-349.
- FRIEDEM, L. & W. LONG (1976) : Hydration Rate of Obsidian : *Science*, 191, 347-352.
- 藤則雄 (1981a) : 「能登半島穴水町曾福遺跡出土石器の石材と“石器園”に関する研究」『石川考古学研究会誌』24号, 29-41。
- (1981b) 「能登半島穴水「美麻奈比古神社前遺跡」周辺の古環境解説」『西川島・II』—美麻奈比古神社前遺跡・古代中世編(穴水町教育委員会), 91-103。
- 橋本潤夫 (1974) : 『北陸の古代史』北陸中日新聞社, pp. 270。
- HIGASHIMURA, T. & T. WARASHINA (1975) : Sourcing of Sanukite Implements by X-ray Fluorescence Analyses : *Jour. Archaeol. Sci.* 2, 169-178.
- 東村武信 (1980) : 『考古学と物理化学』学生社, pp. 194。
- 逸見吉之助 (1974) : 「X線回析法による岩石の同定」『倉敷考古館研究集報』9, 24-28。
- 清水芳裕 (1973) : 「縄文式土器の岩石学的分析—滋賀県遺跡出土の北陸・東北系土器について」『湖西綱関係遺跡調査報告書』225-232。
- SUZUKI, M. (1973・1974) : Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan, (I)・(II) : *Jour. Fac. Univ. Tokyo*, 4, 241-318, 395-469.
- 鈴木正男 (1976) : 『過去をさぐる科学』講談社、ブルーバックス、pp. 234。

第7章 弥生時代以降の遺物

弥生時代以降の遺物は、第2次から第9次調査区にかけて、LII型コンテナバット約4箱分が出土しただけであった。以下調査区ごとに簡単に記述していきたい。
〔本文中で「上層」、「1層」等の用語は発掘作業の際に使用されたものである。○挿図で須恵器及び珠洲焼は断面部分を黒塗りした。○遺構は第4章の図を参照されたい。○第4～8次調査区でI～IV区の付記は第4章に順じた。○第10～13次調査区は割愛した。〕

1 第2次調査区

下層から古墳時代前期の土師器高坏片が1点のみ出土している。

2 第3次調査区（図7-1）

〔古墳時代前期（1～3）〕 上層から3点出土している。1は「く」の字口縁の甕で、体部外側が叩き、内面はやや荒い目のハケ調整である。2は外反する口縁が端部で直立気味となる壺で、磨き調整であるが頭部外面に荒い目のハケ調整痕が残る。3は口縁部に粘土を張りつけ断面三角形状とし、その口縁帯に更に2本1対の棒状浮文をついている壺である。外面は細かい目のハケ調整である。

〔平安時代以降（4）〕 平安時代は、耕作土出土の須恵器有台坏4のみである。外底面に細く「九」の字が刻まれている（図版70）。その他に中世の越前焼が出土している。

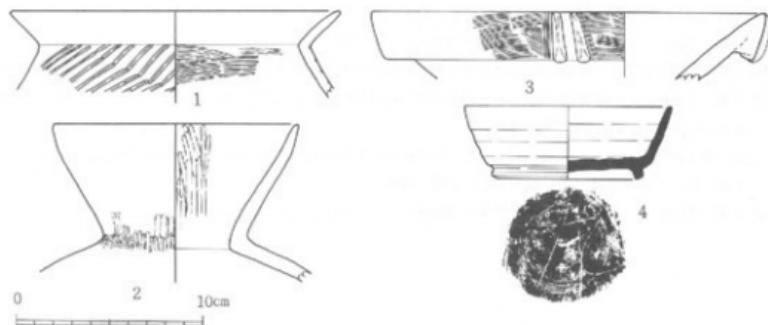


図7-1 第3次調査区出土土器（弥生時代以降）

3 第4次調査区—I区東側一（図7-2、3）

最も多量の土器が出土した。その内、古墳時代前期の土師器が8割以上を占め、また全調査区を通じても6割近くに達する。出土地点は東側中央から南半分にかけて特に集中していた。5と17が地山面出土であることは確認されているが、その他の出土層位は不明である。

〔古墳時代前期（5～24）〕 5～16は甕である。その内5～9は外反する有段口縁に擬凹線をもち、体部外面はハケ調整、内面は削り調整である。甕5（図版70）は完形品で、外反する有段口縁は口唇部で更に外反し、体部は上半で最大径となる卵形を呈し、平底の底部は若干、四状である。口縁部内面には指頭压痕を残し、体部のハケ調整は上位で方向を異にし、内面の削りは底部から螺旋状にかき上げられている。口頸部は横ナデ調整されるが、そのために頸部のハケは消されている。口径31.4cm、体部最大径35.7cm、底径4.8cm、器高42cmである。10～12は擬凹線をもたない有段口縁で、調整等は前者と同様であろう。13～16は「く」の字口縁であるが、14～16の口縁端は面取りされている。16は体部の張りが弱く、体部最大径は口径よりも小さい。17～19は壺である。壺17（図版70）は完形品で、口縁端部を面取りし、「く」の字口縁からやや偏平な球形の体部中位に縁帯をめぐらし、有台底部をもつ。体部中位の縁帯には、上位で細い擬の刻み、中位で2条の細い線刻をめぐらしている。頸部の2ヶ所に2個1対の如き孔穴があけられている。外面は磨き調整（内面は不明）で朱彩されている。口径6.8cm、体部最大径10.4cm、底部台径6.4cm、器高8.3cmである。18は体部中位の縁帯であろう。6条の擬凹線を強く引いて朱彩し、内面には荒い目のハケ調整痕を残す。19は長口有段口縁で、朱色に近い褐色を呈し、調整は磨きである。20～23は高环、24は装飾器台である。23は有段底部に棒状の脚柱がつけられ、段部に4条の擬凹線が引かれ、その直下に4ヶ所で孔穴があけられている。24は縁帶に数条の擬凹線が引かれ、涙滴状の透しをもつものであろう。

〔古墳時代後期（25）〕 内面に返しをもつ蓋が2点確認されている。

〔奈良・平安時代（26）〕 26の土師器有台坏の他に数点の須恵器が出土している。

〔中世以降（27）〕 27は珠洲焼擂鉢で上端面は外傾する。他に数点の陶磁器が出土した。

4 第5次調査区-II区一（図7-4）

全調査区の2割弱の出土であり、各時代ごとの遺物はほぼ均等である。

(イ) 遺構からの出土土器（図4-2参照）

〔ピット5出土（28）〕 古墳時代前期の有段口縁甕で、段は消失している（出土層不明）。

〔ピットII2出土（32）〕 古墳時代後期の須恵器長頸瓶であろう。湾曲気味に外反する口縁部から頸部にかけて3本の浅い沈線がめぐる（出土層位不明）。

〔溝出土（33～41）〕 中央を南北に走る溝の黒色土及び砂礫層からの出土で、33、34は古墳時代後期、36～41は平安時代の土器である。33は壺で、頸部と体部に各々2条の沈線がめぐり、体部下半は回転ヘラ削りである。36の蓋は、つまみ、天井部とともに偏平で、端部はくちばし状に屈折する。37の壺は体部がやや大きく開き、器高はやや低い。墨書（図版70）は、現在のと

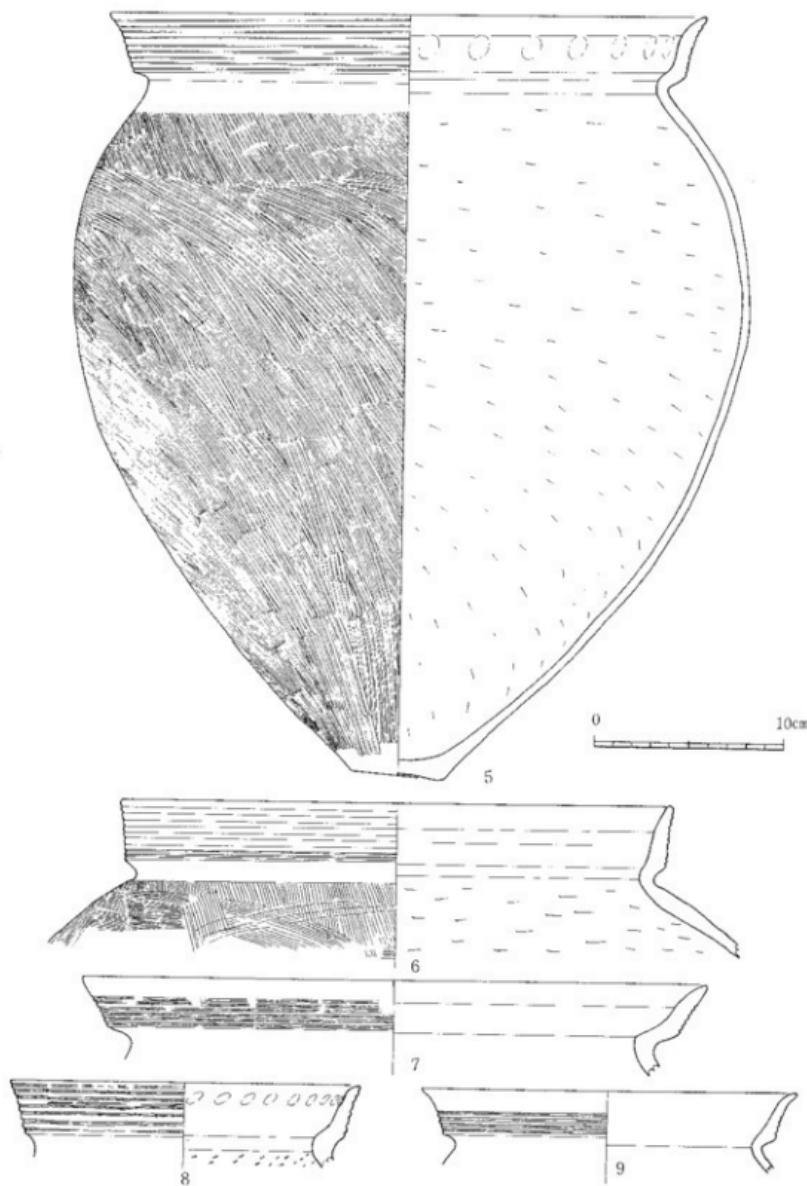


图 7-2 第4次调查区(IV区东侧)出土土器1(弥生時代以降)

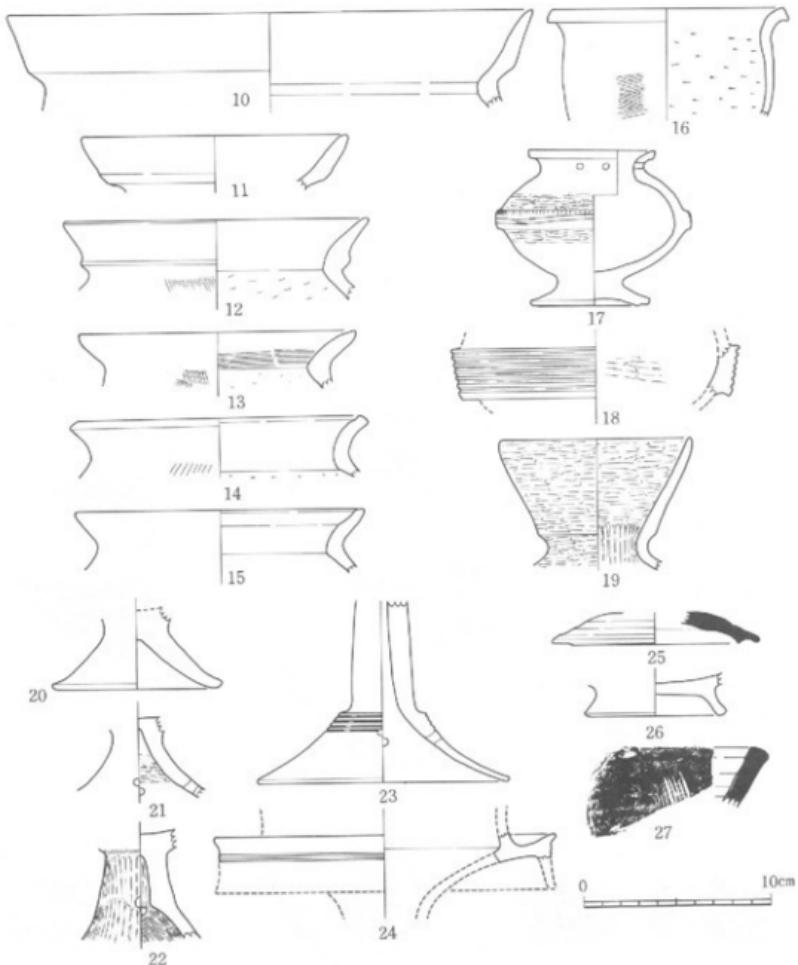


図 7-3 第4次調査区(西区東側)出土土器2(弥生時代以降)

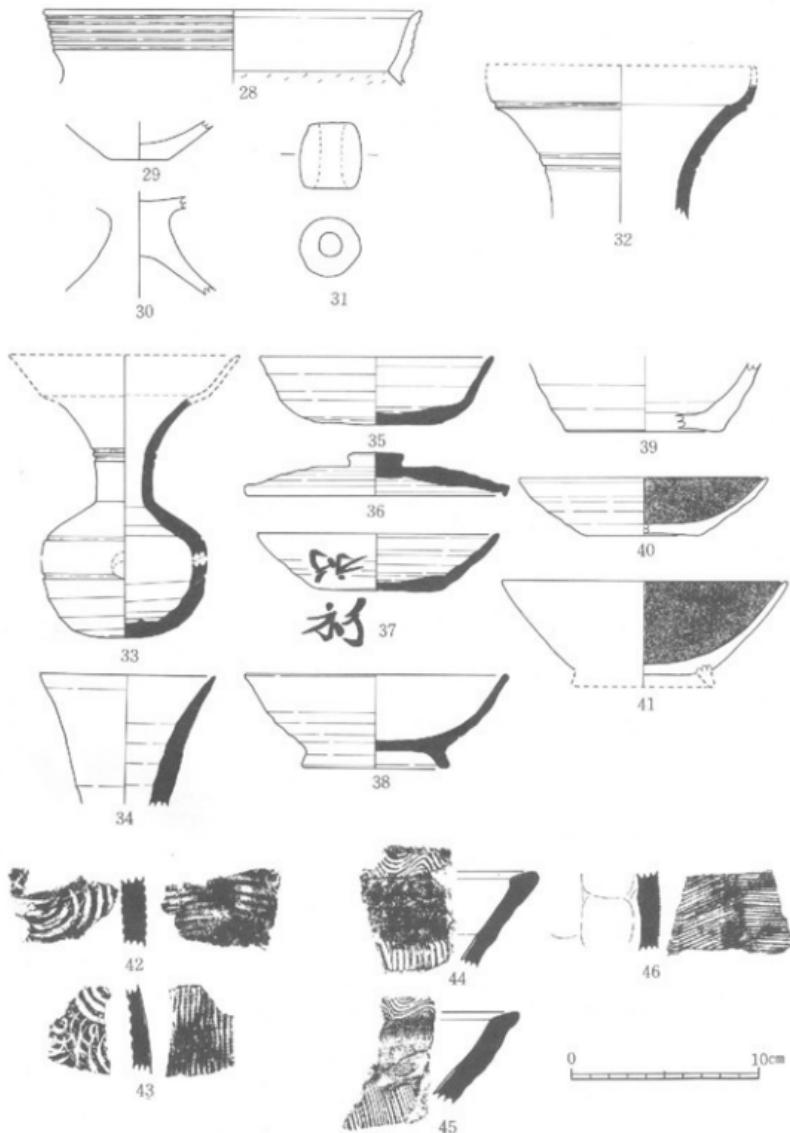


図 7-4 第5次調査区(II区)出土土器(弥生時代以降)

ピット5出土28、ピット112出土32 溝出土33~41

ころ意味不明である（註1）。38は有台の楕型坏で器内は薄く作られている。39～41は土師器である。39は回転糸切痕を残す。40は内面黒色で、器内は薄く、体部が開き器高は低めである。外面は回転ヘラ調整されている。41は内面黒色外面朱彩の有台楕型坏である。

(d) 遺構以外からの出土遺物

〔古墳時代前期（29～31）〕 敷布的に出土している（黒色土上層から下層）。

〔奈良・平安時代（42、43）〕 主に溝周辺から土師器、須恵器が出土している。

〔中世以降（44～46）〕 主に西側一帯の砂礫層から珠洲焼、越前焼等の陶・磁器が出土している。44、45は珠洲焼擂鉢で、口縁部内端面に明瞭な棱をもち、波状文がつけられている。

5 第6次調査区-III区-（図7-5）

全調査区の1割強の出土で、各時代ごとの遺物はほぼ均等である。

(e) 遺構からの出土土器（図4-3参照）

〔土塙18、21出土〕 古墳時代前期のものと思われる土師器片が出土している（層位不明）。

〔土塙27、67出土〕 須恵器片が出土している（出土層位不明）。

〔溝出土（49、50）〕 東側を南北に走る縄文後期の溝の1～3層にかけて、須恵器や古墳時代の土師器が出土している。

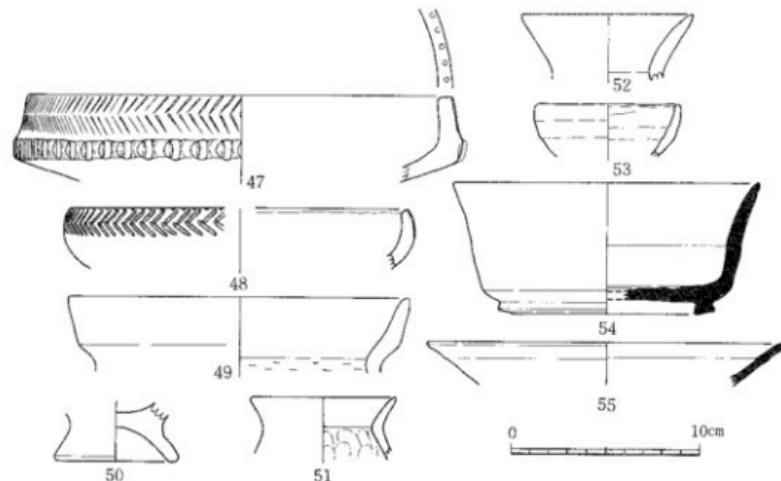


図7-5 第6次調査区(III区)出土土器(弥生時代以降)

溝上層出土49、50

(口) 遺構以外からの出土遺物

全て1~2層からの出土である。

〔弥生時代中期(47、48)〕 2点のみ確認された。47の壺は南端の落ち込み部から出土したもので、口縁部では、上端面に「○」印が押され、外面上方には綾杉文が施され、段部境界には粘土を張りめぐらしてヘラ状具による押し引きで凹凸をつけている。48は小片のため実測図の傾きにやや不安を感じる。口縁部がもつと内傾することになれば壺型が想定されるが(羽昨市次場遺跡で類品とみられるものがある。一谷内尾、他1975)、ここでは図に従って鉢型としておきたい。口縁部に羽状文、口唇部に刻みを各々ハケ状具でついている。

〔古墳時代(51~53)〕 散布的に出土し、小型の壺51、52や鉢53がみられる。

〔奈良・平安時代(54、55)〕 前記の溝に沿った地点で出土したものが多い。54は身の深い有台壺で、体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。55は皿型の壺である。

〔中世以降〕 数点の珠洲焼、陶・磁器の他に3枚の北宋銭がかたまって出土した。1枚は不明であるが、他の2枚は「治平通宝(1064~1067年)」と「元豐通宝」(1078~1085年)である。

6 第7次調査区—I区—(図7-6)

1層から2層にかけて全調査区の1割強の出土であるが、東側中央附近にやや集中している。古墳時代前期の土器がやや多い。

(口) 遺構からの出土土器(図4-1参照)

〔溝出土(66、67)〕 東北隅の旧河川とも考えられる溝の砂礫層から平安時代の須恵器と土師器が出土した。66は回転糸切痕をもち、67の有台壺は内面がすべすべしている。

(口) 遺構以外からの出土遺物

〔弥生時代末期~古墳時代前期(56~62)〕 56は縁帯幅の狭い有段状口縁に2条の擬凹線をひく壺である。57は口縁端部をつまみ上げた壺、58~60は有段口縁の壺である。

〔古墳時代後期(63~65)〕 土師器壺63と須恵器壺身64、65の3点のみ出土している。

〔奈良・平安時代(68~71)〕 前記の集中地区で古墳時代前期の土器と混在して出土したものが多い。71もその1つで、卵形の体部に筒状の口頭部をもつ長頸瓶である。口縁端部が大きく外反して有段状になり、外端面には浅い凹がめぐる。

〔中世以降〕 珠洲焼など陶・磁器の他に銅銭1枚(年代不明)が出ている。

7 第8次調査区-IV区西側—(図7-7)

2層から3層にかけて少數の出土である。

〔古墳時代前期(72~74)〕 74は緑色凝灰岩製の円板状石製品で、断面台形状となる。金沢市黒田遺跡でも同様なものが表記されており、一説には石釧の内径部分を切り取ったものではないかとも言われている(図版70)。最大径5cm、最小径4cm、高さ1.6cmである。

〔古墳時代後期~中世(75~77)〕 77は珠洲焼播鉢で、口縁部内端面がやや丸味をおびて

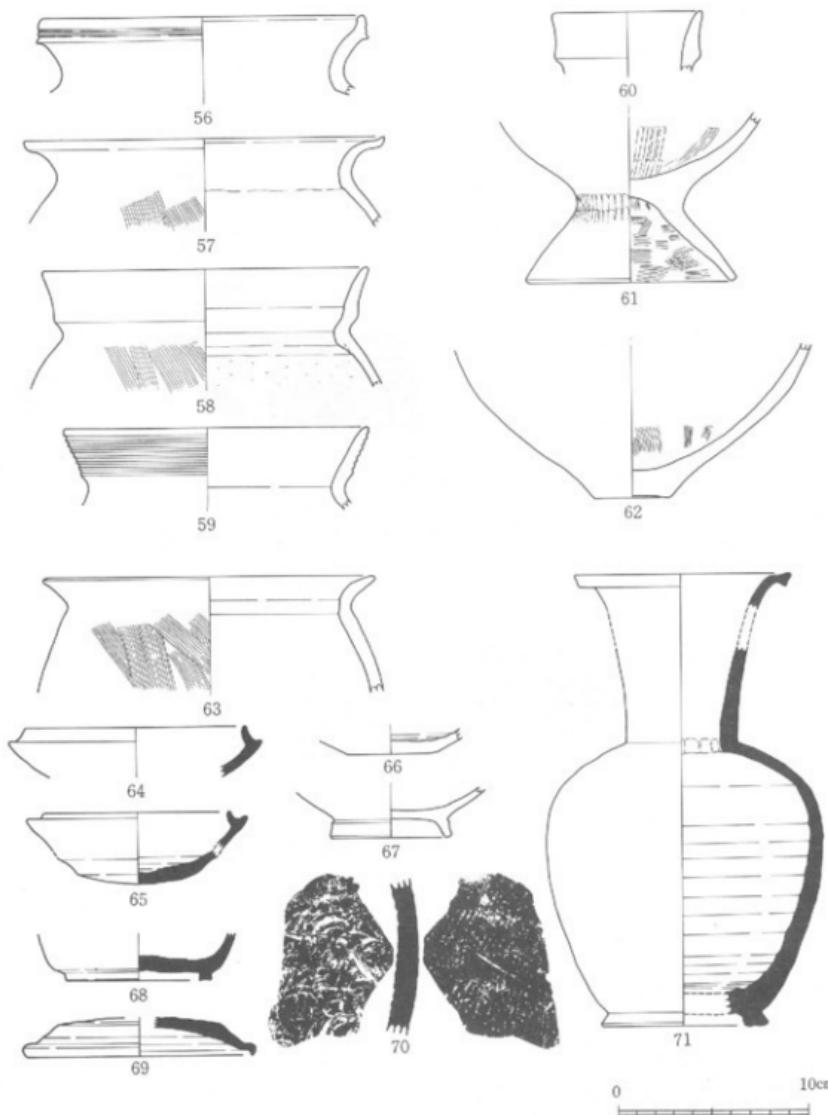


図 7-6 第7次調査区(1区)出土土器(弥生時代以降) 溝出土66、67

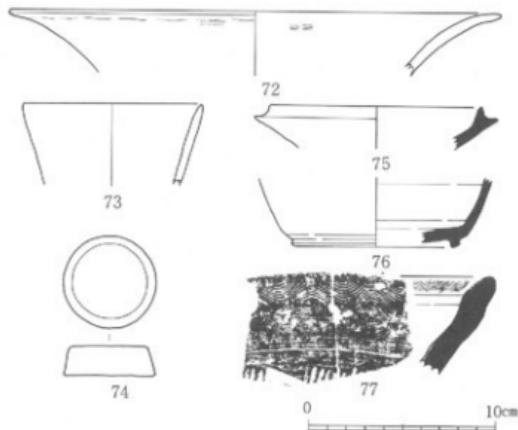


図7-7 第8次調査区(IV区西側)出土遺物(弥生時代以降)

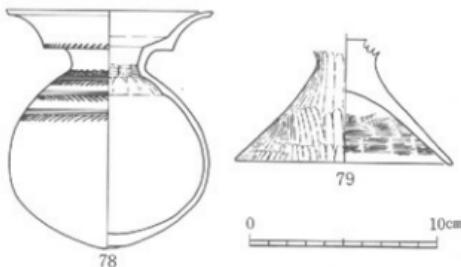


図7-8 第9次調査区出土土器(弥生時代以降)

幅広であり、稜の明瞭さがやや判然としていない。

8 第9次調査区(図7-8)

2層から3層にかけて少數の出土である。

(イ) 遺構からの出土土器(78)

土塙あるいは住居址と思われる落ち込みから出土した古墳時代前期の壺である。有段口縁に球形の体部がつき、一見して丸底風ではあるが、わずかに凹状の小さい平底となっている。口縁段

部と体部上半に、ハケ状具による刻み、波状文、および1単位4条の擬円線を入れて加飾している。磨き調整で、朱彩されている。口径11.1cm、体部最大径10.6cm、底径1.8cm、器高12.8cmの完形品である。（岡版70）。

（四）遺構以外からの出土土器（79）

古墳時代前期の土器は2～4層、中世以降の陶・磁器は2～3層で出土している。

小 結

縄文時代後・晩期の遺物の圧倒的な量と比較すれば、弥生時代以降の遺物は非常に少量ではあったが、しかし第4次調査区（IV区東側）で古墳時代前期の土器が集中していたことは見逃せない。逆にそれより西側の調査区では、第5次調査区（II区）の溝中から古墳時代後期から平安時代中期にかけての土器がまとまって出土したことなどを除けば、全体的に上層ないしは中層で各時代の遺物がまばらに出土していたに過ぎない。換言すると、その後の野々市町教育委員会が行っている御経塚B遺跡の発掘調査の成果等を考え合わせれば、古墳～平安時代の集落遺跡の西端は、第4次調査区附近であったと結論できよう。ただし、第9次調査区では、土壇あるいは住居址と思われる落ち込みから壺の完形品（78）が出たり、第4層から土師器の出土があることなどからして、この附近に古墳時代前期の遺構がある可能性は十分である。以下、簡単に出土土器のまとめをしておきたい。

弥生時代 わざかに中期の47、48および終末期の56が出土しただけである。

古墳時代前期 第4次調査区出土の土器で代表されるように量も多量に出土しており、中でもほとんどが月影式（註2）で占められている（5～24、他）。「月影」期の遺跡の中心からはずれた地区的の発掘のためであろうか、器種構成は不充分であるが、通例のごとく圧倒的に壺が多く、5、7～9は月影式の典型である。叩き調整された1は、時々共伴して出土する種類である。壺では明らかに月影式とされるものは見当たらない。17は珍らしい形で、出土状況が全体との関連で不明ではあるが、一応同時期のものとしておきたい。24は同期でよく見られる装飾器台である。月影期よりも新しい時期のものはほとんど見当たらないが、口縁帯を厚くして断面三角形にした3、加飾された78の壺は「古府クルビ」期と考えてよい。また口唇部内面が肥厚する高壺式は確認されなかったが、2の壺は「高壺」期としてもよいであろう。

古墳時代後期～平安時代 第5次調査区溝から少量ながらまとめて出ている。古墳時代後期では、33の甌は7世紀前半、34の長頸瓶は7世紀中頃から後半である。平安時代では、36の壺は9世紀代、37の無台壺と38の有台碗型壺は10世紀代のものであり、39～41の土師器はこれらと共に伴するものである。その他、ピットII出土の32や第7次調査区（I区）の环身64、65は6世紀後半から7世紀に入るものであろう。また奈良時代8世紀のものとしては、第6次調査区（III区）の54が1点だけみられる。55、71はいづれも10世紀代のものである。

中世（株洲焼） 第5次調査区の西側で砂礫層からある程度まとめて出土しているが、年代を知りうるものは擂鉢のみ数点である。27は4期、14世紀前半、44、45は5期、15世紀前半、77は6期、15世紀後半のものである。

以上、簡単ではあるがまとめとしておきたい。拙稿を書くに当り、吉岡康暢、田嶋明人、谷内尾晋司、平田天秋、三浦純夫の各氏から御教示をいただいたことを深く感謝致します。

(瀧井 真)

註1. 図示では「弔」あるいは「弔」のようになっているが、石川県立社会教育センター古文書課で見分していただいた結果、「打」とも判読できることがわかった。しかし、いずれにしても、そうした文字は見当らず、当然ながら略字、くずし字と考えられる。一応、「社」、「打」(小さいものひき、こばかまの意)、「私」(私)、「称」、「弔」(織物の一種、白たえ)などを候補に挙げていただいたが、判然とはしない。

註2. 北陸の古式土師器の編年では、月影式は4世紀初頭におかれ、続いて、古府クルビ式が4世紀後半、高昌式が4世紀末から5世紀初頭とされている。

参考文献

- 橋本 澄夫・他, 1975: 「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」『石川県考古学研究会会誌』第18号。
—— — — —, 1975: 「金沢市高畠遺跡」金沢市教育委員会。
—— — — —, 1973: 「羽咋市史」原始・古代編 羽咋市。
宮本 哲郎, (1977): 「金沢市寺中遺跡」金沢市教育委員会。
—— — — —, 1981: 「金沢市南新保D遺跡」金沢市教育委員会谷内尾晋司。
谷内尾晋司・他, 1975: 「羽咋市吉崎・次場遺跡」第3次発掘調査概報 羽咋市教育委員会。
吉岡 康暢・他, 1967: 「加賀三浦遺跡の研究」石川考古学研究会、石川県・松任市教育委員会。
—— — — —, 1977: 「珠洲法住寺第3号窯」石川県教育委員会。

附章1 御経塚遺跡の古環境解析

緒 言

御経塚遺跡は、北陸における縄文後～晩期の標式的遺跡の一つとして、北陸でも貴重な遺跡である。殊に、本遺跡から出土する遺物・遺構、なかんずく、土器・石器の出土点数の上からみても、北陸の他の遺跡に例をみない程に貴重である。この遺跡が立地していた当時の古環境、特に、立地する微地形、気候の諸問題、及びこれに関連して生ずる当時の植生の実体を究明することは、本遺跡が活動していた縄文後期末から晩期に至る当時の太古代人たちの生活の実体を立体的に、動的に浮き彫りにすることであり、御経塚遺跡の本質にせまるものである。

この研究は、昭和50年3月から約1ヶ年に亘り、その前年に藤が基本調査一地形・地質を行なって得た結果をもとに、執筆者の1人、丹羽（旧姓宇野）が花粉分析を行なった。その後、丹羽の成果を藤が詳細に検討し、幾つかの層準からの試料を再検討して、本論文をまとめた。

この研究を行なうに当っては、この研究の機会を与えられた石川考古学研究会の高堀勝喜会長、石川県立埋蔵文化財センターの西野秀和主事、及び野々市町教育委員会に感謝の意を表したい。

1 地形要説

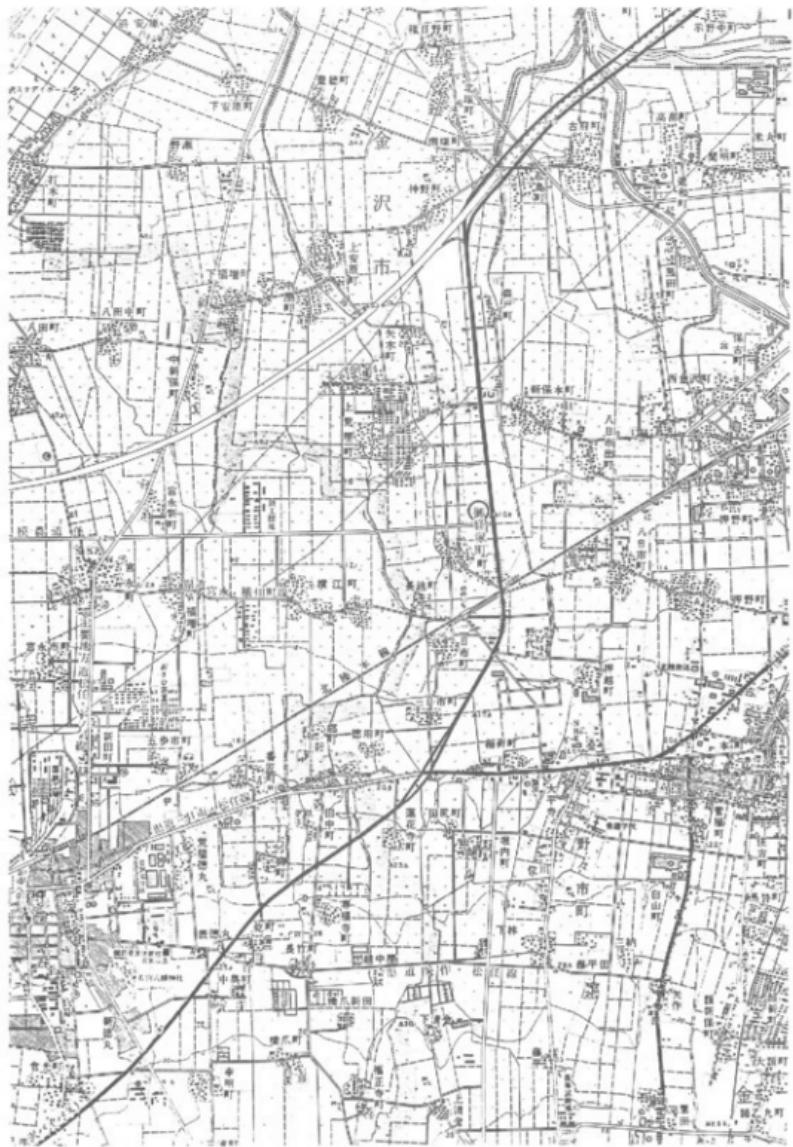
御経塚遺跡は、金沢市の西南に隣接する石川郡野々市町御経塚の北東区域に所在する。

遺跡は、白山に源を発する手取川によって形成された手取川扇状地の北東扇端部の標高10m、遺跡東方を北流する十人川へは約0.5km、伏見川へは約2kmの位置にある。

更新世後期～末期に形成された手取川扇状地は、日本でも最も典型的な扇状地の一つで、犀川新扇状地との境界は今日の伏見川であるとされている。本遺跡は、これら両河川の境界附近、手取川扇状地の北東端に立地し、扇端部に位置するために、第二次大戦頃までは、本遺跡附近は、扇状地伏流水の周年的自噴地帯の一部となっていた。このことは、縄文時代における本遺跡の古環境と生活を考察する上で極めて重要な要素の一つと考える。すなわち、本御経塚遺跡を中心とした半径約2km以内には、縄文中期中葉の標式遺跡である古府遺跡、中期末の北塚遺跡、晩期初頭の新保本町遺跡、晩期の中屋遺跡などの遺跡が点在しているからである。このように、本遺跡周辺には縄文中期・晩期の北陸の標式遺跡が集中している。

なお、以上の他に、本遺跡の東隣には、古墳時代前期の竪穴住居址、平安時代中期の柱列群よりなる御経塚B遺跡も所在している。

以上に述べた如く、本遺跡周辺が、このように、比較的狭い範囲中にあって、北陸でも重要なタイプ・サイトになっていることの理由としては、大古代において、本地域が自然的古環境、殊に、手取川の分流、十人川、伏見川、そして犀川などが流れていることや、前述の周年的自噴地帯であること、及び各所に小起伏のあることなどの自然的環境が当時の生活にとって好条件下に



図附 1-1 御経塚遺跡の位置（○印）

あったことに起因すると推察される。

本遺跡附近には、伏見川、十人川を始めとして、手取川の旧流路に起因する小用水、排水路が小起伏に富んだ微地形の凹部をぬって流れている。小起部は過去の水氾濫の積分であり、遺跡はこれら微高地に位置している。

本遺跡の基盤をなすのは手取川扇状地を構成する砂礫層である。礫は、古生代～原生代飛騨変成岩類の片麻岩類、中生代末～古第三紀と推定される濁飛流紋岩類、新第三紀の変成安山岩類、緑色凝灰岩類、流紋岩類などである。これらの礫は、殆どが拳大の円礫～亜円礫で、何れもかなり硬質堅固である。この礫層は、本地域周辺でのボーリング資料によると、約50mにも及ぶ。本礫層は、恐らくは、第四紀更新世後期～末期に亘る、幾回かの海水準の大低下に伴って、比較的短期間に急速に堆積した、と推察される。

上述の印扇状地性砂礫層の上位に、砂、小礫を混じえた黒色腐植土層が発達している。本層の層厚は、概して、扇状地の北東部で厚く（30～50cm）、手取川の現流路に近づく程、つまり、南西部で薄くなっている。このことは、手取川扇状地上をモディファイしている微地形の形成が、北東部で旧く、南西部程新しいことを示唆している。そして、扇状地上の諸用水・排水路は、人類が手取川の流路を現在の所に固定させる以前の自由に流れた、かつての流路であることを意味している。

2 遺跡とその周辺の現植生

石川県の現植生は、大別すると、海拔0m～350m位までをヤブツバキクラス域、海拔350m～1600m位までをミズナラ・ブナクラス域、海拔1,600m～2,400m位までを寒高山帯、それ以上を高山帯として、以上4地域に区分されている。

これらの境界は、場所によって、若干の相違がある。

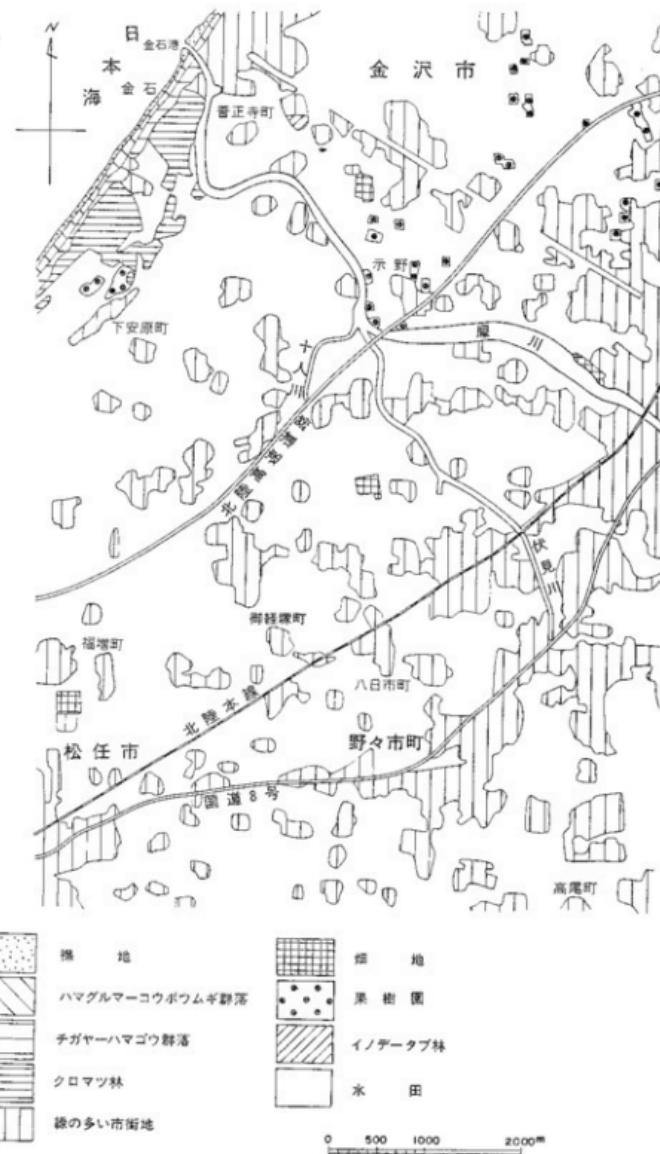
（1）ヤブツバキクラス域自然植生

これらの植生帶の中で、本御経塚遺跡の立地に直接に関係する植生帶はヤブツバキクラス域植生である。これは、通称、常緑広葉樹域といわれ、日本の暖帯地方全域と東北地方の海岸に沿った地域に繁茂している。

本州のほぼ中央部に位置する北陸地方では、このヤブツバキクラス域植生の上限は、太平洋側に比較するとやや低く、東北地方に比較してやや高い。

本植生域は、高度、湿地性、地形によって、更に、スダジイ-ヤブコウジ群集 *Ardisia-Castanopetrum sieboldii* assemblage、タブーイノテ群集 *Palysticho-Machilus thunbergii* assemblage、ウラジロガシ-ヒメアオキ群集 *Aucubo-Quercetum salicinal* assemblage、マサキ-トベラ群集、ケヤキ群落 *Zelkova serrata* community、ハンノキ群落 *Alnus japonica* community、河辺ヤナギ低木群落などの7亜植生に細分されている（里見・1977）。

スダジイ-ヤブコウジ群集は、日本海側での北限が佐渡にあり、石川県下では、モチノキ群集とアカガシ群集の2つに細分される。前者は、斜面下部の土壤が比較的厚く堆積したタブ林に近い土地であり、後者は、尾根部の土壤の浅い土地に優占している。



図附1-2 御経塚遺跡周辺の現植生（里見、1977）

タブーイノテ群集に属するタブの森林の北限は青森県である。しかし、北限付近では、その潜在的植生がミズナラーブナノキクラス域に接しているために、イタヤカエデ・ミズナラ・ブナが混生し、完全なタブーイノテ群集は存在していない。完全な本群集の北限は山形県飛島である（里見・1977）。石川県では、本植群集はオニヤブソテツ亜群集とケヤキ群集とに区分される。前者は風背側に、後者は風衝側に生育する。

ウラジロガシヒメアオキ群集は、裏日本気候帯に認められる植生である。この群集はケヤキ亜群集とモミ亜群集に2分される可能性がある。

マサキートベラ群集は、海岸の裸地や砂丘地に発達する植生である。トベラもマサキも、共に佐渡、及び飛島を北限とする。

ケヤキ群落は、ケヤキーイタヤカエデ群集である。東北地方から北陸地方の日本海側海岸斜面に分布する植物群集である。この群集は、海拔25m～220mに成立するので、スダジイ・ヤブコウジ群集やタブーイノテ群集などと共に標微種を含むことが多い。

ハンノキ群落は、地下水位の高い、低湿地に多い。ハンノキを中心とする林分で、低木層にハイイヌツゲが常に認められる。この群落の立地は平坦地であることから、古代より、水田耕作地として開拓され、残存自然林は僅少である。

河辺ヤナギ低木群落は、河辺の冠水域に分布する。河川の上・中・下流で差違が認められる。ところで、人類は完新世の始まり、つまり新石器時代になると、自然植生に各様の影響を与えてきた。殊に、このヤブツバキクラス域は、北陸地方では平地～低山地の主要植物群として分布しているために、その影響は大きい。しかも最近では、この代償植生さえも急速に滅亡させられようとしている。このヤブツバキクラス域の代償植生としては、コナラ・クリ林、アカマツ・落葉広葉樹林、クロマツ・落葉広葉樹林、禾本科草原、畑、水田、竹林、常緑針葉樹林などがある。これらの中で、水田は、手取川扇状地を中心とした沖積平地に広く認められるが、これはかつてのタブーイノテ群集の代償植生である。

(2) ミズナラ・ブナクラス域自然植生

この植生は、夏緑広葉樹林が分布する地域で、ヤブツバキクラス域に比較すると、比較的に自然に近い姿を残している。しかし、最近では、このクラス域にも開発が進められつつある。この域の代表はブナ林で、その北限は北海道の黒松内低地帯であり、その南限は大隅半島の高隈山である。ブナ林の生活域は、冬期多雪の日本海型気候と雪の影響が少なく、晴天気候の太平洋型気候の影響下にあるものとの2つに区分され、ブナ林も2つの型では異なっている。

日本海側のブナ林は、林床にチシマザサを有しているので、ブナーチシマザサ群団と呼ばれている。

オオバクロモジーブナ群集は、正宗敬敷博士によると、白山では、海拔500m～1,500mに分布している。古い時代にはより低地にまで下降していたようである。

スギーブナ群落は、林床にオオイワカガミを有する。ヒノキアスナロの天然分布は北海道・渡島半島から津軽半島に多く、栃木県日光が南限となっている。能登半島での分布は、植物地理学上の西限となっている。

クロベーシャクナゲ群集は、ブナ林帯のやせ尾根の急斜面・岩角地に成立する。

ジュウモンジシダーサワグルミ群集とヤナギ高木林は、クロベーシャクナゲ群集とは対照的に、ブナ林帯の渓谷に分布する。サワグルミ林は湧水の多い陰湿な土壤の多い所に成立し、渓谷の陽地ではヤナギ類（オノエヤナギ）が成立する。近年における、河谷上流防止のための渓谷における砂防ダムの建設で、この群集—ヤナギ高木林は破壊されつつある。

ヒメヤシャブシータニウツギ群落は白山の峡谷の急斜面に多い。

山地高地草原は、ヤマヨモギークロバナヒキオコシ群集で、白山の渓谷斜面に多い。

以上述べた他に、フジアザミ—ヤマホタルブクロ群集、エゾイタヤーシナノキ群落などがある。

上述のミズナラ・ブナクラス域植生に属する各群集・群落の下部域は、山間住民の出造りと薪炭材生産のために伐採が進み、コナラ・ミズナラ林、ブナ・ミズナラ林のような二次林に代っている。このような代償植生は、既に、明治末期には完成していたという（里見・1977）。

(3) その他の群落

御経塚遺跡の古植生を考える上で重要なものに、ヨシ群落がある。

ヨシ群落は、低地の沼沢やゆるやかに流れる小川を代表する植生で、現在では水田に代っている。小面積のものであれば、各所に散在する。ここでは、ヨシ・ガマ・イヌビエ・オオイヌタデ・アメリカセンダングサ・サンカクイ・ミゾソバ・コブナグサ・チジミザサ・コナギ・スギナなどが構成種である。

尚、参考までに、御経塚遺跡を中心とした地域の現在の潜在的植生と、それに先駆け冷涼な繩文末期～弥生時代末頃の原植生図とをかかげておく。

3 遺跡の花粉学的研究

考古学的遺跡において、土器・石器包含層の土壤を花粉分析することによって、遺跡立地付近における当時の古気候と微地形の実体を解析することができる。

試料中に含まれる花粉化石は、遺物によって相対的に編年された考古学的時代における植物群落を反映しているから、花粉化石の種類とそれらの頻度とを調査する事によって、それぞれの時代における古植物群落が認識されるし、そのような植生を生ずるに至った当時の気候や堆積環境も明確にすることができる。

(1) 花粉分析の試料の採取地点と層序

本花粉分析において処理した試料は、石川県石川郡野々市町御経塚を略南北に通る国道8号線の西に隣接する圃場である。図附1～3中の×印が採取地点である。ただし、この図で、C-2、E-2、F-1、G-7は昭和49年度に野々市町が実施した発掘調査の折につけられたグリット番号であり、a～d、A～Fは筆者らがつけた試料採取地点の表示である。C-2-aやA等をもって、地点名と試料名とする。

C-2-aからG-7までは、野々市町が昭和49年度中に、A～Fは、昭和50年度中の発掘時に採集した試料である。

試料 試料の考古学的記載

C-2-a : 溝遺構の南壁でのあぜ道断面（水田耕土、I層～VI層までの7個の試料）

C-2-b : 溝遺構内の中屋式土器下

C-2-c : 溝遺構内の井口式土器下

C-2-d : 溝遺構内の八日市新保式土器下

E-2-a : 溝遺構内の井口式土器下

E-2-b : 溝遺構内の八日市新保式土器下

F-1 : 溝遺構の南壁断面（I層～VII層までの7個の試料）

G-7 : 土塙墓群の腰棺土塙につく下野式土器下

A : 河遺構の北壁断面（I層～VII層までの7個の試料）

B : 井口式期の炉址にある井口式土器下とその包含層（2個）

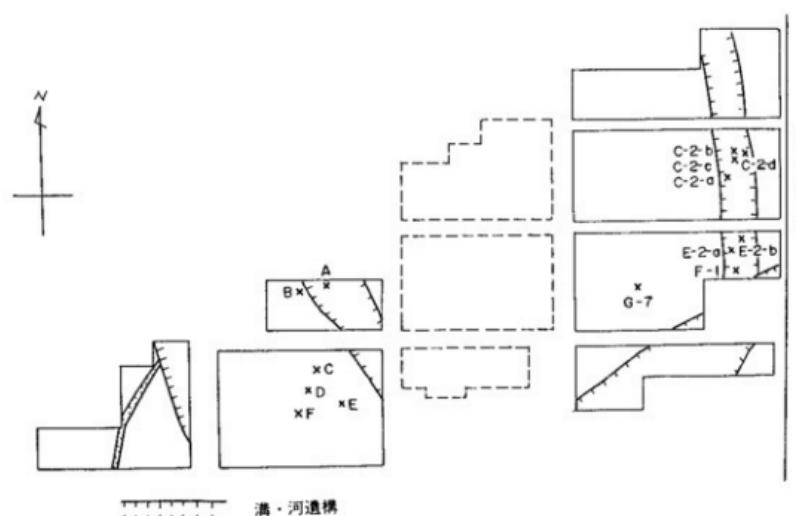
C : 井口式期の鏗節彫石器のある石組の井口式土器下とその包含層（2個）

D : 八日市新保式土器下とその包含層（2個）

E : 八日市新保式土器を含む土塙内

F : 晩期前半にあたる土器下

国道八号線

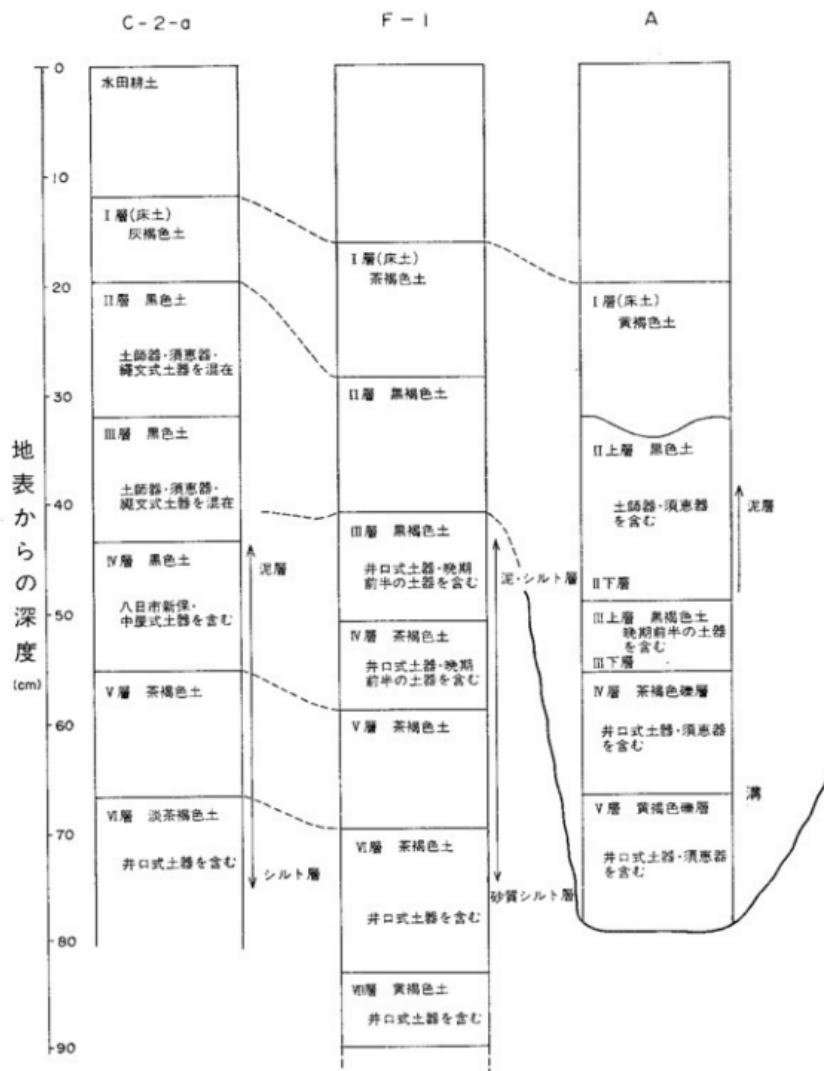


図附1-3 試料の採取地点見取図（縦）

表附1-1 繩文式土器の編年比較表

時代	北陸				関東		年代(B.C.) C ¹⁴ 測定値
	石川・富山	新潟	千葉	綱田			
晩期	下野 朝朝 中御経塚 八日市新保・勝木原	鳥居 星橋 日II 石倉	千 杉安 安安	綱 田IIIc 行IIIb 行IIIa	荒海	310±30	
	井口II	上幕	山島	安安 曾加 曾加 曾加 曾加 曾加 之堀	行II 行I 谷利BIII 利BII 利BII 利BII 内II 内I	八幡崎	950±140
	酒見・井口I	三仏生		曾利BIII 利BII 利BII 利BII 内II 内I		検見川	1122±180
中期	氣屋 前田	三十稻場		之名	之名寺	堺之内	1830±150
	大杉谷・串田新II 北塚・串田新I (古)串田新 古府・牛滑 上山田・天神山 上山田(古) 新崎 新保	馬高 馬高 馬高 馬高 馬長者 馬古屋 上劍	IV III II I	加曾 加曾 加曾 加曾 加勝 加勝 五五	利EIV 利EIII 利EII 利EI 坂II 坂I 台II 台I	姥山	2563±300
	朝日下層 福浦上層 小野・蛇ヶ森 福浦下層 朝日C 佐波・極楽寺	鍋屋 鍋屋 竈寺 羽漆目	町II 町I	十三諸 諸諸 諸諸 黑闇 花積	菩薩 磯磯 磯磯 浜山 下層		
前期	櫻峰	下別當 室谷田 卯ノ木		茅山 茅子 母田 田三花 輪花	上層 下口 上層 戶下 戶台	加茂	3150±400
草創期		家室 小瀬 小瀬 小瀬	谷II 谷III 沢II 沢I	稻夏 大井	荷 輪 台 台島 九草	夏島	7290±350
						福井田	12700±500

(北陸の縄文文化：石川県郷土資料館 1975)



図附1-4 発掘地点の層序・包含土器石器類の層準・対比

以上の地点からの試料計35個を花粉分析に供した。

図附1-3に示されている採集地点のうちで、連続的に採集を行ったC-2-a、F-1、及びA地点の層序を図附1-4に示した。

これら試料の一般的な累重状態は、上位から、水田耕土、床土（I層）、黒色風化土層（II、III、IV、V、VI層）、黄褐色地山層の順序である。このうち、黒色風化土層中に種々の時代を示す遺物が含まれている。C-2-a地点における土器包含層はII、III、IV、VI層であり、このうちII、III層には縄文式土器、土師器、須恵器が混在し、IV層には晩期前半を示す八日市新保・中屋式土器が、VI層には後期井口式土器のみが含まれている。F-1地点においては、III、IV、VI、VII層が土器包含層であり、このうちIII、IV層には井口式～晩期前半にあたる土器が含まれ、VI、VII層には井口式土器のみが含まれている。時代的にみると、VII、VI層は共に縄文後期末までの年代にあたり、V層には土器が含まれていないが、後期末からIV層にあたる年代で、C-2-a地点とF-1地点のIV層は縄文晩期前半にあたる。C-2-a地点のII、III層は遺物によると奈良・平安時代、あるいは、更にさかのぼる時代があると推定される。

A地点については、IV、V層の砂礫層中に井口式土器に混在して須恵器が含まれている事から、奈良・平安時代に河が切りこんでいたと考えられる。従って、埋積層の時代については、含まれている土器から判断するならば、II上層～V層までが奈良・平安時代ということになるが、明確に決定されない。

図附1-4における直線は、編年的に対比されるとみなされる土層や包含層を結んだものである。

（2）花粉分析の方法

① 試料の採取

花粉は酸化されると腐植しやすくなるので、空気と隔離された可能性が高く、且つ、花粉化石の残存が良好であると思われる溝や河遺構で試料を採取する。ただし、年代を決定する遺物の出土状態を考慮して、溝・河遺構において試料の年代が不明確な場合には、他の遺構面で行った。また、試料が他の年代の試料や他の試料と混ざらないように特に注意した。

② 処理の方法

- (I) 採集した試料100gを1,000ccビーカに碎いて入れ、10%NaOHに浸し、2日間放置する。この間、時々攪拌し、最後に1,000ccまで水を加える。
- (II) 傾斜法により上液約1/2を流し去り残液と沈殿をかきませ、水を加えて放置する。半日毎にこれを繰り返し、NaOHを除くために5日間水洗する。
- (III) ビーカに水を満たし、1分間攪拌後、茶こしでごみ・砂礫粒等を取り除き、上液を1日放置する。
- (IV) 上液約1/2を流し去り、残り約1/2を300ccボリ・ビーカに入れ換え、1日放置して上液を除いてから、沈殿物に50%HFを加え、2日間放置する。
- (V) 半日おきに水洗し、4～5日間繰り返す。
- (VI) 「時計皿法」を用いて、沈殿物中の植物質を濃縮し、手動式遠心分離器にて水洗する(4回)。

1回/sec. 位の速度で30回転させる。

- (VII) 水酢酸を加え、攪拌し、熱する。冷却後、遠心分離器にかけて水酢酸を除く。
(VIII) アセトトリシス (H_2SO_4 : 無水酢酸 = 1 : 9) 处理を行い、冷却後、分離器で酸を除く。
(IX) (VIII)と同じく、水酢酸処理をする。
(X) 沈殿物を遠心分離器にて水洗する(3回)。
(XI) グリセリンゼリーにて封入する。ゼリーがやわらかい場合には、空気が入るのを防ぐため、カバーガラスの周囲をマニキュアで縁どりする。

③ 鑑定

オリンパス顕微鏡FH型三筒を使用して、倍率600倍にて検鏡し、重複しないように、無作為的に、花粉・胞子化石を鑑定する。木本類が合計200個以上になるまで化石を同定し、これらの化石を各属や科ごとにまとめて、木本類花粉化石間の百分率と、木本類と草本類間の百分率を算定する。なお、*Fagus crenata-type*、*Fagus japonica-type*は別々にし、*Pinus haploxylo-type*、*Pinus diploxylo-type*は*Pinus*に、一括して数えた。

④ 解析

鑑定した花粉を百分率法を用いて花粉ダイヤグラムに表わす。木本類の花粉について古気候を解析し、木本類の花粉と草本類の花粉との比、及び草本類の種類で微地形解析を行う。

(A) 古気候解析

*Fagus*属と*Quercus*属をそれらの花粉粒の大きさによって、大・小にわける。*Fagus*属は29~33 μ の*Fagus japonica* (イヌブナ) と39~47 μ の*Fagus crenata* (ブナ) に、また、*Quercus*属は19~22 μ の常緑型*Cyclobalanopsis*と27 μ 以上の落葉型*Lepidobalanus*とにわける。

現生種の植物分布から、現在の北陸の気候 (Temperate) を標準とし、寒冷系 (Cold) としては *Picea*、*Abies*、*Betula*、*Tsuga*を、冷涼系 (Cool) としては、*Fagus crenata*、*Ulmus*、*Menyanthes*、*Cryptomeria*、温暖系 (Warm) としては、*Cyclobalanopsis*、*Podocarpus*、*Ilex*を判定資料として古気候の考察を行う。

気候解析の方法

a 現植生と現土壤

現土壤に含まれている花粉の割合をそのまま現植生の比率に換算されないことが、現植生と現土壤表面の中に含まれている花粉の割合との比較によって、明らかにされている。

例えば、松などは花粉を多量に産するもので、松の花粉が試料中の全花粉の50%を占めているからといって、その当時の森林でも50%が松林に覆われていたとは限らない。

一般的には、温帯地方中央部に立地する中部地方の日本海側の植物群落帶は、次の6つの植物帶に分類することができる。

ヤブツバキクラス域 (ヤブコウジースグジ群集・タブーイノデ群集) 海拔 5 m ~ 500 m

トチノキ帯 約500 m ~ 700 m

ブナ帯 約700 m ~ 1,300 m 谷底、山腹、台地

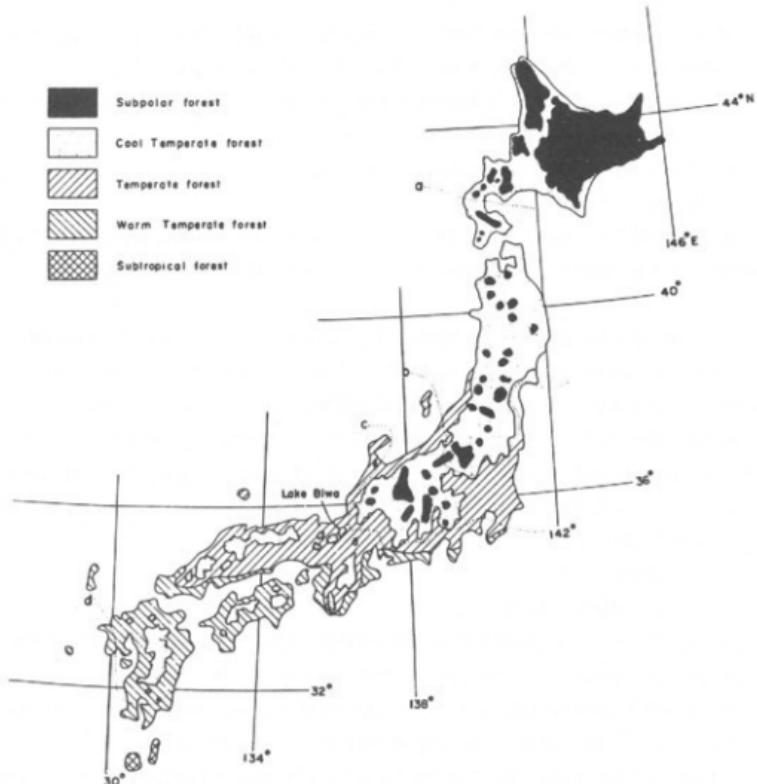
コメツガ帯 約1,300 m ~ 1600 m 台地

約1,100m～2200m

オオシラビソ帯……約1,500～2,300m 台地斜面

ハイマツ帯……約2,000m以上 台地

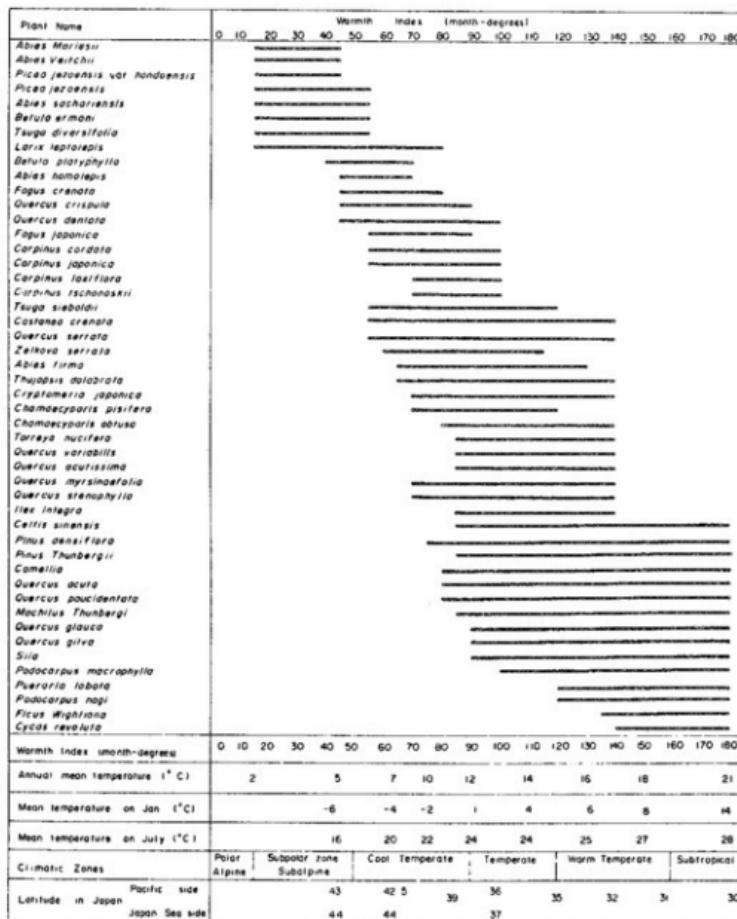
気候解析をする際には、現植生を反映する表層における花粉の割合を基準として、古花粉都集における花粉化石間の比から古植生を推定し、更に、これら古植生から古気候の推定を行った。



図附1-5 日本の現植物分布図（藤、1978）

b 溫量指數

古氣候の最終的判断は、温量指数に基づいて行った。温量指数は、月平均5°C以下の月を除く他の月の平均気温から5°Cをひいたものをすべて加算したものである。これは“暖かさの指数”であり、日本の植物の分布を説明するのに非常に有効とされている。各々の植物に生育可能な温

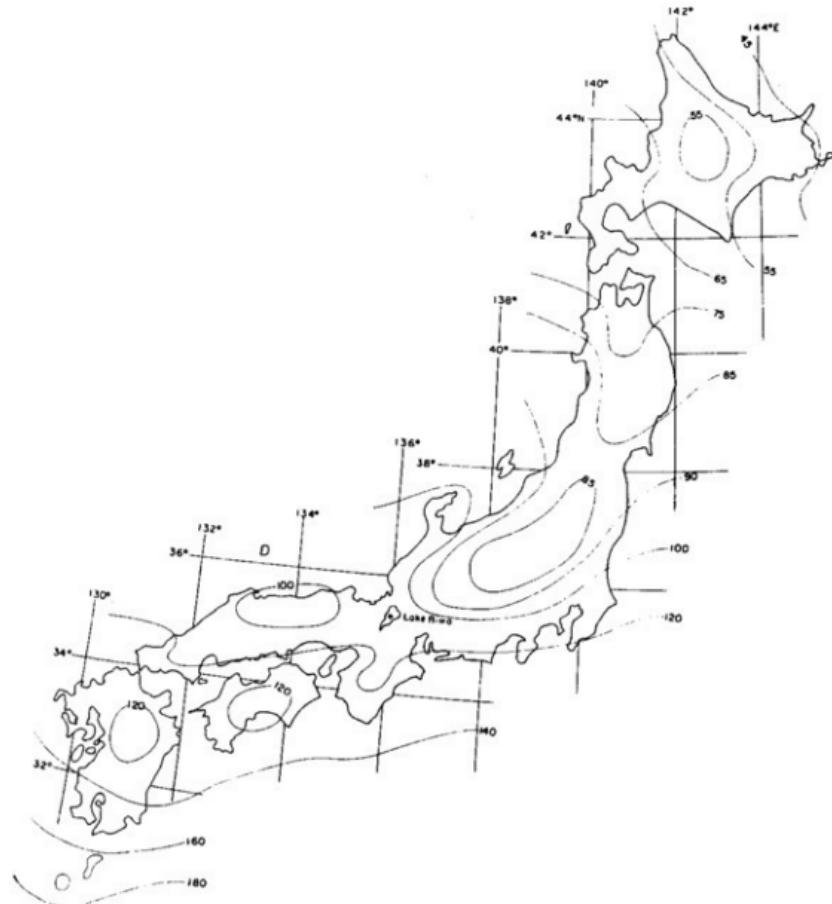


図附1-6 日本における植物と温量指数・季節平均気温・気候帯などの関係図
(藤, 1978)

量指数の範囲があり、この温量指数を基にすれば、木本類を分類することができる。要約図は、5つの温量指数の範囲を設けて、その中で生育する木本類をグループに分け、それらを合計した頻度の変化を示したものである。

① Boreal 垂寒帶性植物

温量指数 W.I. = 15° ~ 55°



図附1-7 日本における温量指数の等指数曲線図（吉良竜夫, 1945）

ここでは、寒冷系の松柏科に属する *Abies*、*Picea*、*Larix*、*Tsuga* をひとまとめにする。

② Cool Temperate plants 冷温带性植物

W.L.=45°～90°

冷涼系の植物である *Betula*、*Ulmus*、*Fagus crenata* を含む。

③ Cool Temperate plants～Temperate plants

冷温带性植物～温带性植物

W.L.=55°～140°

代表的なものでは、*Cryptomeria*、*Zelkova*、*Fagus japonica* を含む。

④ Middle Cool Temperate plants～Warm Temperate plants

冷温带中部～暖温带性植物

W.L.=70°～140°

これは、種類が多いが、*Pinus*、*Alnus*、*Ericaceae*、*Corylus*などを含む。

⑤ South Temperate plants～Subtropical plants

暖温带性～亚热带性植物

W.L.=100°～180°

暖温系の *Podocarpus*、*Cyclobalanopsis* を含む。

各試料から検出された花粉群のうち木本類の花粉について、上述の5つの温量指数帯に区別して、古気候を判定した。

[B] 微地形の解析

微地形解析にあたっては、小河川の辺りの湿地を好む *Salix* と *Alnus*、沼・池の辺りに多い *Nelumbo* と *Nymphaeaceae*、陽地を示すマツ科 (*Pinus*、*Abies*、*Picea*)、塩気を嫌い、高温度の陰地、例えば、谷間を好む好湿性の *Cryptomeria*、*Pterocarya*、*Chamaecyparis* 等の傾度を考慮して、微地形の解析を行う。尚、更に各現微地形上に生育する植物、殊に、灌木や草本類をも参考にして判断した。

(3) 分析結果とその考察

① 古気候

a 織文後期末井口式期

F-1：Ⅵ層は *Nymphaeaceae* (51%)—*Cryptomeria* (15%)—*Salix* (4%) で、Ⅶ層は *Nymphaeaceae* (40%)—*Cryptomeria* (13%) で代表される。寒冷系の *Picea* と *Tsuga* を共伴するが、寒冷～冷涼系の指標属である *Abies*、*Betula*、及び *Fagus* (large) がない。*Machilus* を僅少含む。この結果だけからは、現在位～やや冷涼である。

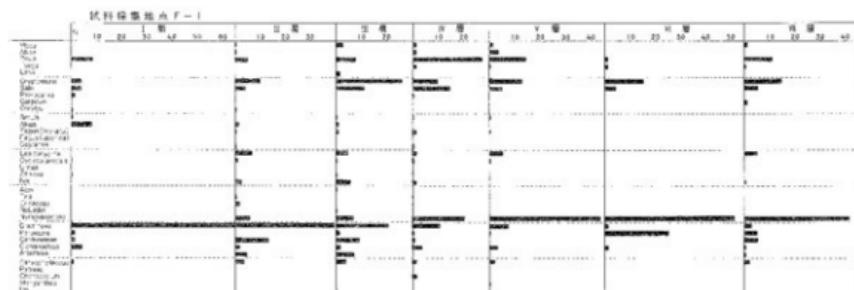
B： 土器下の試料は *Pinus* (33%)—*Cryptomeria* (18%)—*Abies* (14%) で、寒冷～冷涼系の *Picea* (9%)、*Abies* (14%)、*Tsuga* (6%)、*Cryptomeria* (18%) が約 45% も含まれている事、特に、*Cryptomeria* と *Abies* とが高率である事から、当時は冷涼な古気候であった、と推定される。包含層の試料も *Pinus* (31%)—*Cryptomeria* (29%)—*Gramineac* (16%) で、寒冷系の *Picea*、*Abies*、*Tsuga*、*Cryptomeria* が多く、*Machilus* を若干

含む以外温暖系要素が皆無である、と判断される。

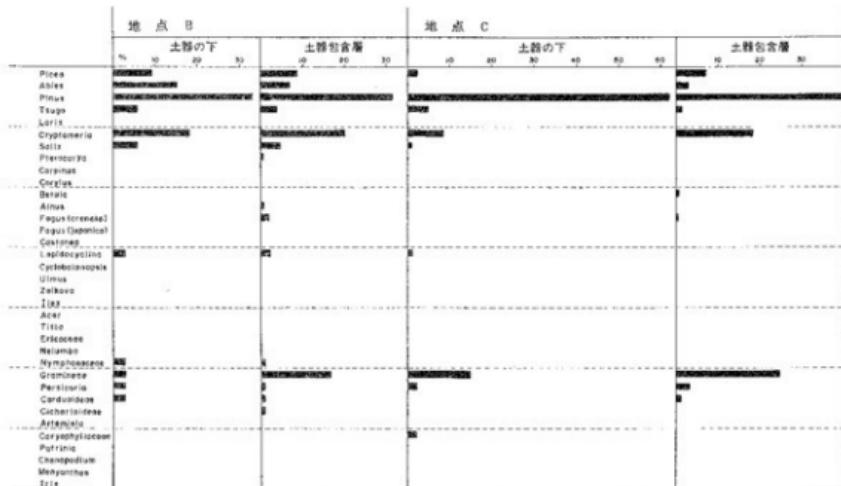
C： 土器下の試料は、*Pinus*(62%)—*Gramineae*(15%)—*Cryptomeria*(8%)で、*Picea*と*Tsuga*を8%含み、当時の気候はやや冷涼である。同包含層からの試料は*Pinus*(40%)—*Gramineac*(36%)—*Cryptomeria*(18%)で、*Picea*、*Abies*、*Cryptomeria*、*Fagus crenata*、*Betula*を含み、明らかに冷涼である。*Machilus*を若干含む。

b 後期～晩期前半

F-1: III層の花粉組成は、*Cryptomeria*(27%)—*Gramineae*(23%)—*Salix*(12%)—*Compositae*(*Carduoideae*+*Cichorioideae*)—*Pinus*で表わされる。*Cryptomeria*が高率で、他



図附1-8 地点F-1の花粉分析(藤ら)



図附1-9 地点B, Cの花粉分析(藤ら)



図附1-10 地点D, E, Fの花粉分析(藤ら)



図附1-11 地点C-2-a, C-2-b, C-2-c, C-2-dの花粉分析(藤ら)



図附1-12 地点Aの花粉分析(藤ら)

に *Picea*、*Betula*、*Fagus crenata* を包含することから、現在よりも冷涼な気候である。Ⅳ層は *Pinus*(27%)—*Nymphaeaceae*(22%)—*Salix*(16%)—*Cryptomeria*(10%) で代表され、*Cryptomeria*、*Betula*、*Fagus crenata*、*Picea*、*Abies*、*Tsuga* を含む事から、現在よりも冷涼な古気候である。V層は *Nymphaeaceae*(42%)—*Pinus*(14%)—*Cryptomeria*(10%) で、*Picea*、*Abies*、*Betula*、*Fagus crenata*、及び *Menyanthes*(2%) を含んでいて、冷涼である。III～V層を通じて、*Machilus* を検出する。

F : *Pinus*(57%)—*Gramineae*(15%) で、井口式期の気候に比してやや温かであるが、現在よりはやや冷涼である。*Gramineae* 花粉中にイネ花粉を含まない。*Machilus* を含む。

c 晩期八日市新保式期

C-2-d : *Salix*(27%)—*Nymphaeaceae*(27%)—*Pinus*(21%) が多産属で、*Machilus*、*Shii* を僅少含み、当時は現在位の気候である。

E-2-d : *Pinus*(40%)—*Salix*(18%) で、現在位の古気候。

D : *Pinus*(54%)—*Gramineae*(20%) で、冷涼～寒涼系の属が約13%含まれ、井口式期の気候よりはやや温かで、現在よりは冷涼である、と推定される。

d 晩期中屋式期

C-2-a : IV層の花粉組成は *Nymphaeaceae*(53%)—*Salix*(19%)—*Pinus*(14%) で、*Abies*、*Cryptomeria*、*Betula*、*Machilus* を僅少ながら含み、且つ *Oryza* の花粉を 1% 含む。当時の気候は現在位か、やや冷涼である。

C-2-b : 本層の花粉組成は、*Pinus*(34%)—*Salix*(18%)—*Cryptomeria*(9%) で、*Picea*、*Abies*、*Betula* など寒涼～冷涼系の属を約10%含み、温帯系の *Cyclobalanopsis*、*Shii*、*Machilus* も 3% 含む事から、当時の気候は殆ど現在位の気候である。

以上に述べた試料の結果は、同一地点の断面における垂直方向の変化一時間的変化一に伴う花粉化石組成の変化に基づく古気候の変遷ではないので、次に、C-2-a と F-1 の 2 地点での、同一地点においての花粉組成の時間的変化について述べる。

繩文後期末井口式期（両地点の VI～VII 層準）：この時期の古気候は冷涼で、現在の新潟県北部～山形県南部の植生と気候に酷似する。

土器を含まない間層（両地点の V 層準）：当時は冷涼な古気候であった。

八日市新保～中屋式期（両地点の IV 層準）：当時はやや冷涼な気候で、現在の新潟県北部に似た植生であった。

繩文晚期当時はやや冷涼な気候であった。（両地点の III 層準）

② 微地形

a 繩文後期末井口式期

F-1 : VI、VII 層ともに *Nymphaeaceae* が最も多く、40～50% を占めている。また、好湿性の *Cryptomeria*、*Salix* もこれらに次ぐ高率を示し、且つ *Machilus* が含まれている事から、沼沢あるいは流れの遅いよどんだ小川に近い微地形にあったと推察される。

B : 2 つの試料とともに草本類を 10～20%、好湿性の *Cryptomeria*、*Salix*、*Alnus*、*Pteroc-*

carya を含む。他方、陽地性を示すマツ科も高率で含まれているが、*Pinus* は花粉生産量が多く、飛揚性の花粉であるので、低湿地に近い事が推察される。

- C : 2つの試料ともに、*Gramineae* を主とする草本類や、*Cryptomeria* を含むが、B と比べるとマツ科が極めて高率である事から、遺跡周辺に小丘のある微地形が推定される。
b 後期～晚期前半

F-1 : III層は井口式期と同傾向を示す。好湿地性の*Cryptomeria*、*Salix*、*Alnus* を約37%、草本も多く含む。また、主として、虫媒花粉であまり風に飛ばされない*Nelumbo* を含む事から、低湿地や沼沢に近い事が推察される。IV層もIII層と同傾向を示す。V層も*Nymphaeaceae* が高率に含まれ、III、IV層と同傾向。

- F : マツ科が約65%の高率で、中間地的傾向を示す。
c 八日市新保期

C-2-d : *Nymphaeaceae*、*Cryptomeria*、*Salix* が高率を占め、沼沢や小川が近くにあるような微地形を示す。

E-2-b : マツ科が高率で、一方 *Salix* や草本も多い事から、やや湿地的傾向を示す。
d 中屋式期

C-2-a : IV層は *Nymphaeaceae* が約53%、*Salix* が20%近くで、沼沢が小川が近い事を示す。

C-2-b : 草本類が約26%、*Salix*、*Cryptomeria* を含み、*Nelumbo* を含む事から沼が近い事を暗示する。

以上の各層準の解析結果を基にして、各時代の微地形を、縦年にまとめるところのようである。

縦文式後期井口式期 (IV～V層準) : やや低湿地～低湿地に近い微地形

土器を含しない間層 (V層準) : やや低湿地～低湿地に近い微地形

縦文八日市新保～中屋式期 (IV層準) : 沼沢地に近く、一部中間地的微地形

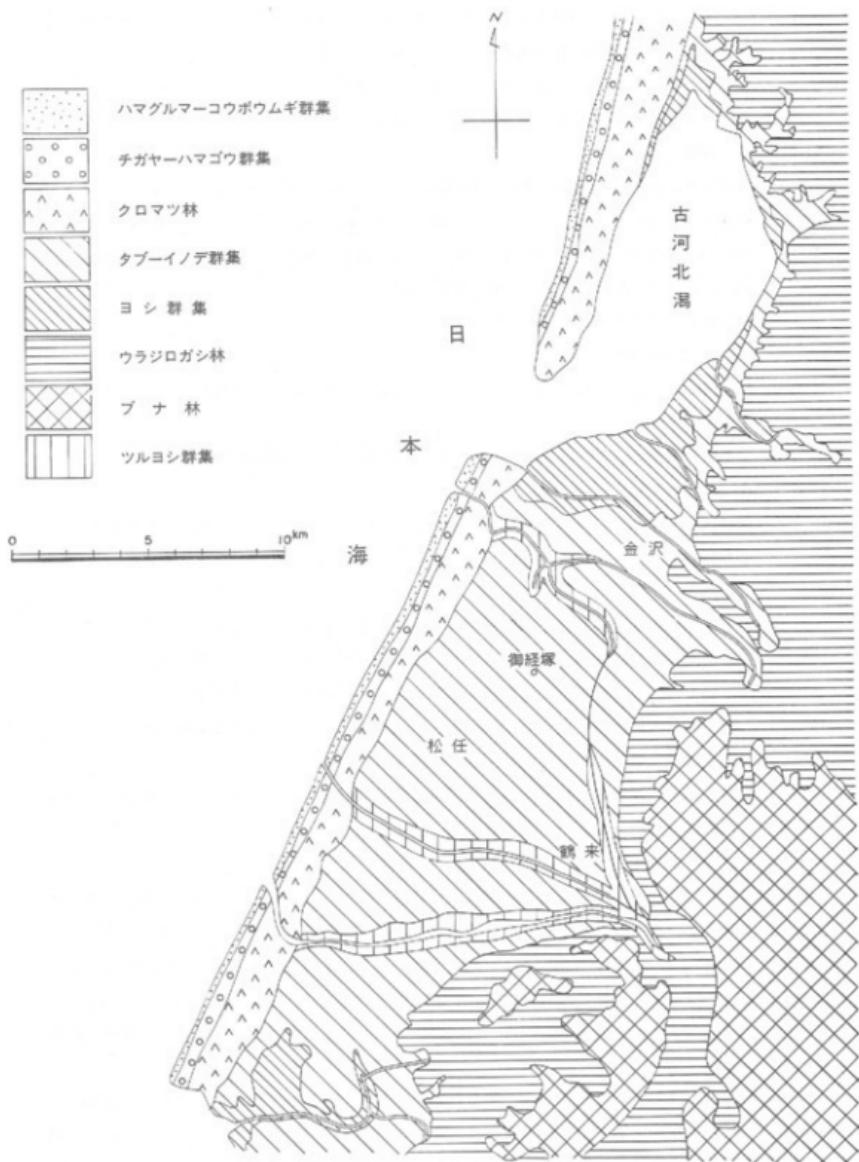
縦文晚期 (III層準) : 沼沢地に近い微地形

以上に述べた如く、遺跡が立地していた期間は全般的に低湿地的で、その間に微高地一比高はせいぜい数m～5m以内をもつた微地形であったと推察される。

③ 以降の古気候

遺跡立地期間以降についての試料で年代が決定されるのは、C-2-a地点のII、III層である。奈良末～平安時代か、あるいは若干さかのぼる時代である。花粉構成は *Salix* - *Cichorioideae* - *Pinus*、*Salix* - *Pinus* - *Nymphaeaceae* - *Machilus* 系で、当時の古気候は、*Pinus* (*Diploxylon*) が多く、寒冷～冷涼系が皆無に等しく、*Machilus* を含む事から現在位である。また、*Salix*、*Nymphaeaceae*、*Gramineae*、*Cichorioideae* の草本類が多く、低地で、小川近くと推察される微地形である。

A地点の試料では、包含されている土器から判断すると、II上～V層までが奈良～平安時代にあたる。しかし、IV～V層では、河道が切りこんでいる様子が認められているので、年代が明確に決定されない。II上層のみで解析するなら、花粉構成は *Cryptomeria* - *Pinus* - *Gramineae* - *Machilus* 系で、現在よりやや冷涼な古気候が推察される。



図附 1-13 野々市町御経塚付近の縄文後一晩期の原植生（藤）

以上の推察とその他の試料（土器が含まれず、年代が決定されていない試料）の花粉構成から判断すると、遺跡立地期間以降、気候は温化し、奈良～平安時代に、現在位かやや冷涼で、現在の気候へ変遷してきた、と判断される。

縄文後～晚期御経塚遺跡周辺の植生

前述の如く、御経塚遺跡の縄文後期～晚期に至る間の各型式土器の包含層を花粉分析した結果、当時は、年平均気温で $1.5^{\circ} \sim 2^{\circ}\text{C}$ 低温であった。金沢の年平均気温が 13.5°C であるから、当時の気温は $12^{\circ}\text{C} \sim 11.5^{\circ}\text{C}$ となる。日本海側で、このような年平均気温を示すのは、山形県酒田～秋田県本荘にかけての地域である。つまり、当時の金沢付近の気候が現在の山形県北部～秋田県南部のそれに酷似していたことになる。



図附 1-14 野々市町御経塚付近の古墳時代の原植生～現在の潜在的植生（藤）

当時の植生図は図附1-13のようになる。当時の気温が2℃も低温であると、単純計算をすれば、自由大気における気温の減温率は $-0.5^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ であるから、当時の森林限界、雪線等は共に現在のそれよりは400mは低下していたことになる。

本遺跡周辺の植生についてみると、ブナ帯は、現在の加賀地区では海拔350mにあるが、地形的特徴をも考慮すると、現海拔200mまでは降下していた、と推定される。このブナ林の中には、ブナの他にスギ、コニネカエデ、オオカメノキ、クロモジ類、リョウブ、マルバマンサク、ヤマウルシ等のいわゆるスギ・ブナ群集、ブナ・オオバクロモジ群集が図附1-13に示すように、中山級は勿論のこと、低山級の山地にも繁茂していたと推定される。

海拔200m以下の低山や丘陵には、ウラジロガシ林が優勢で、アカマツも散在していた。古墳時代以後の現在位の気候になった時には、丘陵端に広く認められるシイ林（スダジィーヤブコウジ群集）は、縄文時代後半には本地域からは完全に姿を消し、その分布の北限は精々、島根県浜田市位であった。このシイ類は排水のよい所でないと生育できないので、現御経塚のいわゆる伏流水の周囲的自噴帶には生育しておらなかった、と判断される。

本遺跡周辺は、タブノイノテ群集によって占められる。タブノキの北限は青森県であるので、年平均気温で2℃の低下があっても、本遺跡付近には分布していたと推定される。

なお、手取川扇状地の地形は、当時、殆んど現在程の地形にまでなっていた。が、現七ヶ用水で代表されるような流路にそって、縄文時代には、流域の定まらない手取川が乱流していたが、このような湿度が高く、水流・伏流水のエイキヨの大きい所では、タブノキが生育していたし、流路に沿っては、ツルヨシ群集・ハンノキ群落が分布し、そして、扇端域の自噴帶の小凹部にはヨシ・コウホネ・タデ・ネコヤナギ等が密集していたと推定される。丘陵・低山に近い扇側・扇頂周辺には、スギも若干分布していたと推定される。

4 遺物包含層中の礫の存在

御経塚遺跡周辺の地形と発掘調査によって確認された遠跡立地時の埋没地形、及び造構の埋積状態等から、土器包含層に含まれる礫の存在意義について述べる。

本遺跡の層序を模式的に示すと、耕土15cm、上部黒褐色包含層15-20cm、下部灰褐色包含層15-20cm、地山の黄褐色の細砂層となる。砂層は60-70cmで、砂礫層に移る。つまり、砂礫層は表土下120cm前後となる。

耕土を除くと、拳大の礫が包含層を被うようになっている。この礫は、下部包含層や地山においても数量を減しながら、しだいにその径が大型化する傾向を示し、遺物と共に同層準に、一面に散在している。

本遺跡の発掘によって確認された礫の含まれ方は、その存在の仕方から2つの型に区分できる。その第一は、礫が黒色土壤中に含まれている場合である。拳大の礫の存在は、扇状地における造構調査の際、ごく普通に遭遇する現象であるが、礫が黒色土壤中に含まれているという一見不自然な事象は、先史時代における古手取川の扇状地上での乱流の際の堆積性砂礫が縄文中期頃から晩期、ないし弥生時代に至る数千年間に、礫を含めて土層が風化作用をうけた。殊に、マトリ

ックスのシルトや砂が風化をうけ、腐植土と混じり、更に、本遺跡一帯での地下水の周年的自噴によって、腐植土化がより一層進展したものと推定される。

他の一つは、器物包含層や遺構面を被る礫薄層の存在である。このような薄層は、本遺跡のみならず、御経塚B遺跡や安養寺遺跡においても認められるところである。

これらの遺跡からの礫の中には、犀川水系では認められない岩石も含まれている。更に、扇端部における礫の含まれ方の一般的傾向、つまり、礫が地山面へ数量を減しながら次第に大型化してゆくという傾向は、この遺跡では認められない。礫は遺物とともに一面に散在していたり、明らかに人為的と認知される礫の遺構が認められたりする。

一般に、河川の氾濫や冠水による礫の自然堆積は、①個々の礫が連続して分布し、②礫の粒径の変化が連続性を示し、③礫の長軸を横にする配列・安定性を保つimbricationを示す性質がある。

晩期前半の遺物と混在する礫は、砂礫というよりは礫が多く、粒径変化に連続性が明確でない事、それらが一部配石遺構をなしている事、一定の配列パターンが見られない事等から、冠水によるものとは認めがたい。これは土塙墓等の遺構を掘った際に、扇状地堆積礫層から掘り上げられた礫である。従って、礫の掘り上げ、そのことは人為的作用ではあるが、遺跡に置かれている礫の配置そのものは無意図的としか解釈できない。

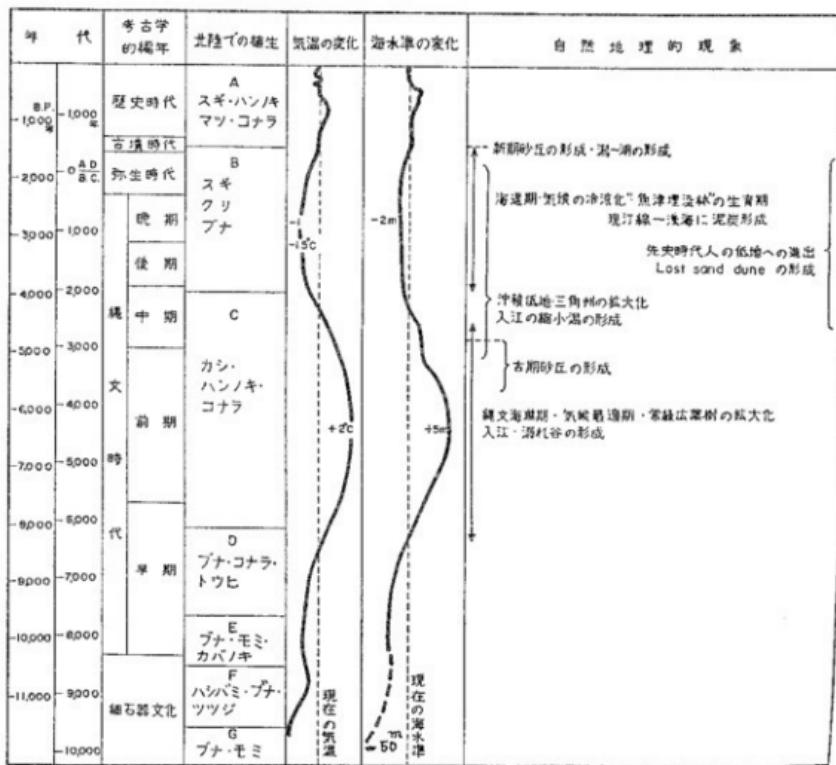
しかしながら、他方では、掘り上げた礫が、意図的に加工され、石器の製作にも利用されている。このことは、別の論文で述べたように、本遺跡出土の石器の中には、本遺跡周辺、なかなか手取川扇状地を構成する礫の多いこととも符合する。すなわち、本遺跡の地下に多産する礫を掘り上げては、これに若干の加工をして、石器に仕上げたものである。その際、石器として利用し難い石材や、一緒に掘り上げた礫が遺構周辺に、あるいは前の時代の遺構や遺物の上を結果的には被るようにして放置されたものが多々あると解釈できる。

5 結 論

I：石川県野々市町御経塚に位置する御経塚遺跡は、縄文後期中葉～晩期末にかけての大集落址である。この遺跡から採集した、考古学的遺物によって年代決定された土壤試料を用いて花粉分析を行い、遺跡が立地していた期間の古気候と微地形の解析を行った。また、遺構の埋積状態から、微地形の推察も行った。その結果、縄文後期中葉井口式期から晩期末における御経塚遺跡周辺の気候は現在の気候よりもやや冷涼で、年平均気温にして2℃位低温であったことがわかった。また、微地形としては、手取川扇状地の扇端の、小河川の乱流によって形成された微高地を利用して、遺構の主体は立地する。その周辺一帯は、伏流水の周年的な自噴帶であるため、飲用水には不自由はなかった。また、周辺の植生は、タブーイノデ群集によって優占され、タブーのような水分に強い高木やハンノキ群落が散在し、小湿地や小川にはツルヨシ群集、ヨシ群集が分布し、コウホネ・タデ・ネコヤナギ類が水辺にあり、時に、スギも植えられていたであろう。

II：本遺跡に分布する礫は、その成因から2つに区別することができる。

(1) 黒色土壤をマトリックスとする礫：



図附 1-15 完新世における気候変化・海水準の相対的变化、および各期における主要な自然地理的現象

先史時代における古手取川の乱流で形成された砂礫層が、その後における数千年間に風化作用をうけて、殊に、マトリックスのシルトや細砂、及び泥が著しく風化され、他方、地表に生育していた植物からの腐植物と混在して、腐植土層の中に礫を包含するという、一見不自然な堆積物のようになった、と解釈される。

(2) 土器や石器と混在しつつ、地山面や遺構を被っている礫：

このような礫には、粒径の連続性が明確でない事、礫の分布に一定の自然的配列が認められない事、一部の礫に配石の状況が認められること等からこれらの礫は扇状地堆積層からの掘り上げるなどの人为的作用による礫がある事などが考えられる。この人为的作用は、住居や土塙を作る際に穴を作るために掘り上げて、地上に放置した場合と石器を作るのに利用した場合等が考えられる。

III：本遺跡のなかで、縄文晩期中屋式期に比定される C-2-a 地点のⅣ層から、僅少ではあるが *Oryza* の花粉が検出された。

(藤 則雄、丹羽千枝子)

附章 2 編布およびカゴ底圧痕について

今回高嶋勝喜先生および山本直人、川端敦子氏等の御好意により、御経塚遺跡出土の底部圧痕のうち、編布（アンギン）圧痕とカゴ底圧痕を有する底部について検討する機会を与えて頂いた。はじめに銘記して謝意を表する次第である。

1 編布（アンギン）圧痕（表附 2-1、図附 2-1、図版附 2-1 参照）

編布圧痕を有する底部破片は、表附 2-1 に示す 6 例である。これら 6 例は拓影（図附 2-1）および写真（図版附 2-1）でも明らかなように、タテ糸はひと目ひと目が圧痕（図版附 2-1 の a）では右上がり、モデリング陽像（図版附 2-1 の b）、つまり原体では左上がりで並行し、そして全体としては直線的に連続している。また、ヨコ糸は等間隔を保っている。このことから鍤具を用いたもじり編み製品の圧痕であることが判明する。

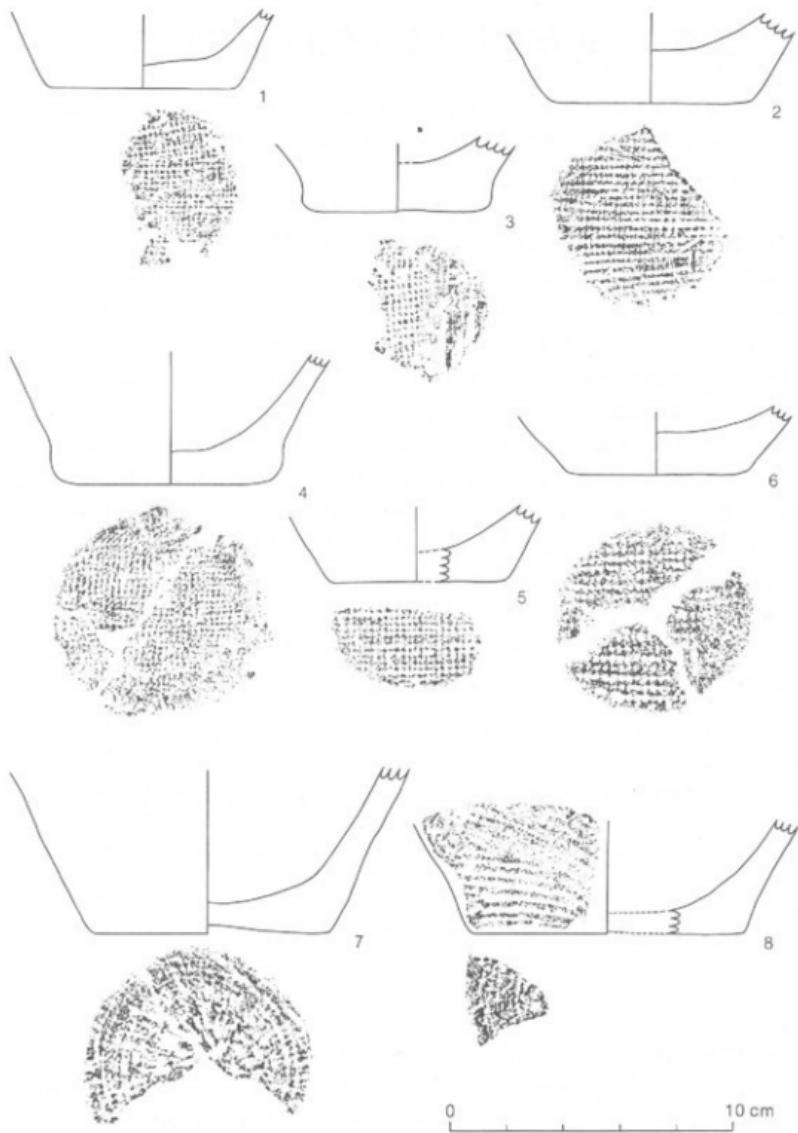
鍤具を用いたもじり編みは、民具のなかに非常に多くみられ、タワラ・各種のス・ムシロ・カゴ・ハバキ・編布等がある。また、縄文土器底部に残るスクレ状圧痕も製品名が特定できないが、鍤具を用いたもじり編みの圧痕である（渡辺 1976）。本遺跡のスクレ状圧痕については、別に川端敦子氏によって報告されているとおりである。これらの資料のなかから、特に上記 6 例を「編布圧痕」として、別に報告させて頂いた次第である。

編布圧痕とみなした理由は、タテ糸・ヨコ糸の間隔が非常に密であり、そのため厳密にはヨコ糸がよく観察できないので若干の問題は残るが、他のスクレ状圧痕と比較すると、タテ糸もヨコ糸も細くて軟質な繊維質のものであるような印象を受けるためである。

表附 2-1 編布圧痕一覧表

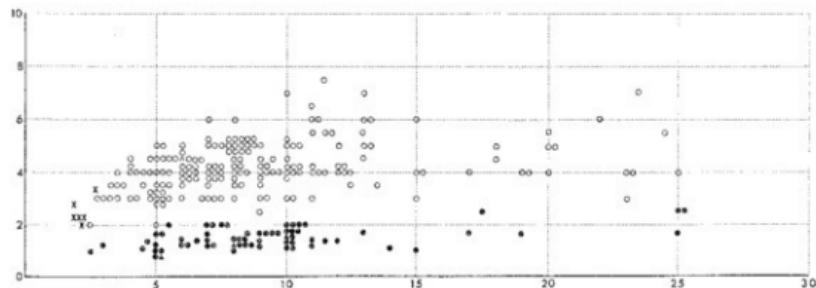
遺物番号	底 徑	残存率	タ テ 糸		ヨ コ 糸		挿図番号	図版番号
			本 数	間 隔	本 数	間 隔		
1	706	6.5	2/3	20	1.9	22	2.3	図附 2-1 の 1
2	9754	7.3	3/4	31	1.9	21	2.8	〃 2
3	8407	6.6	1/3	12	2.0	18	2.3	〃 3
4	996	7.5	完形	32	2.1	29	2.0	〃 4
5	10310	6.0	1/2	21	2.3	11	2.3	〃 5
6	8843	6.4	完形	22	2.7	18	3.4	〃 6

糸の間隔は表附 2-1 に示したように、タテ糸の間隔は 1.9~2.7mm、ヨコ糸の間隔は 2.0~3.4 mm である。このことを他の編布圧痕と比較すると、図附 2-2 のようになる。タテ糸の間隔はもっとも細かいグループになる。民俗例では、新潟県中魚沼郡津南町に編布編機が保存されているが、タテ糸の間隔を示す刻み目の間隔は 9 mm であり、このことからも本遺跡の例は非常に密接した間隔であることがうかがえる（津南町 1963）。タテ糸は鍤具をぶら下げて目盛板に並べられる



図附 2-1 幅布圧痕およびカゴ底圧痕第2類拓影

のであるが、約2mm前後の間隔で整然と糸を準備する作業だけでも非常に手間のかかる仕事であり、本遺跡例は技術水準の高さを示唆している。ヨコ糸の間隔は他の編布圧痕よりやや幅広い値を示しているが、これは縫む作業を考えた場合、タテ糸が上記のように非常に密なので、おのずからヨコ糸の間隔が反比例してやや粗になるものと推定される。



図附2-2 スダレ状圧痕と編布圧痕の糸の間隔 (単位mm、渡辺1976に加筆)

×印は御経塚の編布圧痕、■印は上山遺跡の編布圧痕、▲印は朱円・山王遺跡の編布。

図附2-2に示すスダレ状圧痕の糸等の間隔は渡辺の調査例であるが、編布圧痕の糸の間隔は小笠原好彦氏の調査例から図化させて頂いたものである(小笠原1970)。そして縄文時代における編布の具体例は、北海道斜里郡斜里町朱円遺跡(後期末)と宮城県栗原郡一迫町山王遺跡(晚期中葉)の2遺跡より、わずかに確認されているのみであるが、編布圧痕はさらに遡って出現する。従来の知見では編布圧痕のもっとも古い例は、後期末に属する新潟県山北村上山遺跡出土の足形土製品の背面にみられるものであり、晚期になると九州地方に多くみられるようになるということであった。縄年にみて東日本より西日本に伝播したとみることも可能なのであるが、しかし従来土器の底部圧痕として、編布圧痕が九州地方のように東日本で確認されることはほとんどなかった。本遺跡例の出現によって、この間の形勢がより一層明確になったことになる。また石川県鳳至郡穴水町曾福遺跡でも編布圧痕をもつ底部が出土している(木沢他1980)。各底部と土器型式の対応関係の検討は以下のところ不十分であるが、全体としては中期後半の串田新式期より後期の気屋式期の間に属するもので、上山遺跡よりさらに遡る最古の例と認められるのであり、本遺跡例とともに重視されるのである。

なお東日本において編布圧痕のつく例が少ない原因としては、縄文晚期の小形土器には高台付の例が多いことや、他のスダレ状圧痕・網代圧痕のつく例が多いことなどを指摘できよう。

2 カゴ底圧痕(表附2-2、図附2-1・附2-3、図版附2-2参照)

御経塚遺跡から出土した底部破片には、表附2-2に示すようにカゴ底の圧痕を有する例が7例含まれている。

縫む技法は7例とも基本的にはもじり編みであるが、用いられているヨコ糸の材質の違いから

表附2-2 カゴ底压痕・観察

遺物番号	分類	底径	残存率	挿図番号		図版番号
				cm	図附2-3の1	図附2-2の1
1 9183	第1a類	10.6	完形			
2 11517	"	10.3	完形	" 2	" 2	
3 11096	第1b類	6.8	3/5	" 3	" 3	
4 5556	第1類	9.0	2/5	" 4	" 4	
5 2005	"	8.2	2/5	" 5	" 5	
6 2287	第2類	8.2	2/3	図附2-1の7	" 6	
7 2716	"	9.7	1/10	" 8	" 7	

次の2類に大別できる。

第1類：原体タテ条・ヨコ条ともに蔓材が用いられているとみられる圧痕。

第2類：原体のタテ条は蔓材、ヨコ条には細い糸状の纖維が用いられているとみられる圧痕。

第1類についてはタテ条の組み方より、さらに2類に細分される。第2類の資料については、中央部が欠損しているので判別できなかった。

本項においては、タテ・ヨコの呼称はカゴの形態を考慮し、底中央から放射状に広がる条をタテ条、それに絡みながら同心円を描く条をヨコ条とし、以下統一して呼ぶこととする。

○第1類

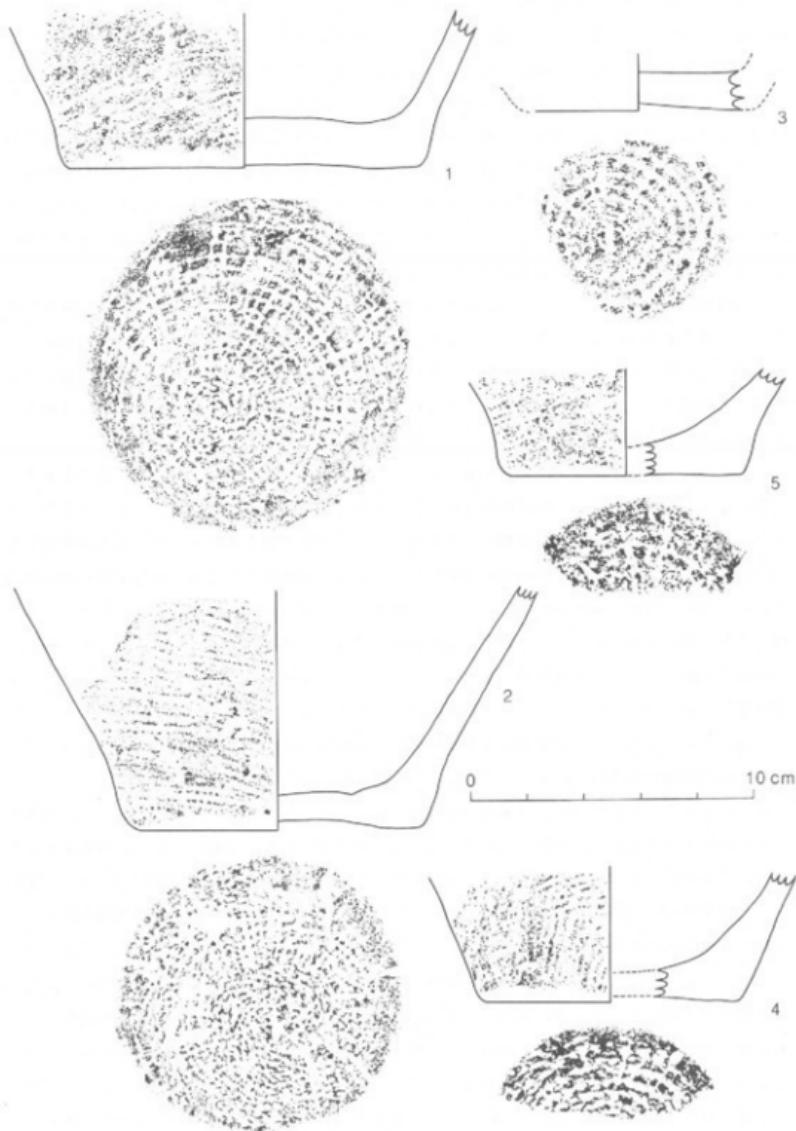
先にも記したように、第1類はタテ条・ヨコ条とも野生の蔓材を利用したカゴ底压痕で、5例みられる。そのうち底中央の組み方の観察可能な例は3例で、さらにa・bの2類に細分される。次に各類について、編み方を具体的にみることにする。

第1a類 2例 (図附2-3の1・2、図版附2-2の1・2)

第1a類の原体の編み方を検討するに際し、韓国製の民芸品のカゴの編み方に酷似していることに注目した。参考資料として、先にこの観察結果を記すことにする。

なおここで韓国製のカゴを用いたのは、現時点でわが国に類似資料を見出しえなかつたため、今後国内の民具資料に同種のカゴが存在するか否かを確認する必要はある。しかし現在用いられているカゴの主流は竹製品・ワラ製品であり、同種の編み方はかたい竹では不可能であり、ワラ製品は鍔具を用いたもじり編みのものが大多数を占めているため、類似資料は決して多いとは思われない。

分解して観察したカゴは直径20.0cm、高さ8.5cmで、袋状の二重仕上げになっている。タテ条には紙ヒゴが用いられ、ヨコ条は蘭草(いぐき)と推定される纖維質の強い植物である。この紙ヒゴははじめ26本で、中央をヨコの条で結束されている。結束の方法は、図版附2-1の7aに示すように、ヨコ条を半分に折り曲げて、タテ条26本をはさみこむように一重に巻く。結束部分は底の中央部に、ヨコ条の材がはっきり直線を呈して現われる(図附2-4のaおよび図版附2-1の7b)。結束から連続して図附2-4のbより1段目が編みはじめられる。カゴのタテ条になる紙ヒゴを13本・13・12本・14本の単位に分け、結束によっておのずから2本になったヨコ条でも



図附 2-3 カゴ底压痕第1類拓影

じり編みを開始する。この編みはじめの方法を用いると、カゴ底の中央にはタテ・ヨコ両条とも材の端はこないことになる。2段目はcよりタテ条を8本単位にして6回もじり編みが行われ、次にdより4本単位のもじり編みになる。13段目のeまでタテ条4本単位のもじり編みを繰り返し、13段日の残りfまでタテ条を2本単位に分ける。24段目gまで続けられ、24段目残りhと25段目ではさらに2分して1本単位で行われる。そして26段目では新たにタテ条をU字型にさし加え、タテがそれぞれ2本になるようにして、32段までタテ条2本単位のもじり編みが行われる。33段目でタテ条は1本単位に分けられ、底編みは終了する。33段目では104目になっている。このようにしてタテ条は放射状に広がっていき、4本単位のもじり編みの1目分であったタテ条e-f-gの各単位は33段目には各8目ずつになる。

34段目から胴編みになる。編み方は変化せず、1本単位で1段につき104目のもじり編みが続けられ、高さ8.5cmになったところで、2本超えのもじり編みを一周行き折り返しの部分、つまり縁となる部分を作り、以後内側になる部分が同様に編まれる。底編みは先の外側と全く逆の要領で、外周から次第にしぶっていくように編まれ、中央まで進んだら端を内側にさして始末し、2本超えのもじり編みの部分で折り返して二重の作りがなされる。

第1a類の2例の圧痕は、この韓国製のカゴと同種の手法によるもじり編みの圧痕であることが明らかである。中央部の比較的明確な第1例（図附2-3の1、図版付2-2の1）の資料のモーテリング陽像を用いて編み方を観察し、中央部についての実測図を図附2-5のように作成した。

図附2-5に示した中央に直線的に現われているaは、韓国製カゴでみられた結束部分に対比される。bは1段目の編み始めであろう。aと並行しているがaより短い。aからbをくぐらず伸びるタテ条cがみられることから、bは結束部分でないと判断した。bに続く中央部の編み目は判別不可能であったためタテ条の単位もわからないが、中央部は韓国製カゴと同様に、ヨコ条は隙間なく密につまっている。しかし韓国製カゴのようには、タテ条は整然とした放射状にはなってはいない。またeからタテ条は1本単位のもじり編みに変わり、同時にヨコ条の各段には、4~5mmの間隔があけられるようになることも、韓国製カゴと異なる点である。

eから始まる1本単位のもじり編みの第1段目では、タテ条は31本と推定できる。この31本をタテ条の基本と考えると、d段とそのすぐ外1段は3本単位のもじり編み、次のeの直前までの2段は2本単位のもじり編みが基本的ななされているが、歪みが生じたのを調整するためか、図附2-5中央部・左上付近ではタテ条をより多くとってもじっている。歪みのため中央部右側のヨコ条はつまり気味であるが、右側の○印は下の○印へ、右側×印は下の×印へつながる段である。

つづいてeよりは、1本単位のもじり編みが繰り返されるようになる。先にも指摘したように、韓国製カゴと異なり、ヨコ条の各段はつまらせずに隙間をあけて編まれている。同心円を描いて編み進んでいくために、タテ条は随時2本に枝分かれされている。eより2周目に6回、3周目に7回、4周目に3回ずつ枝分かれが行われている。枝分かれの部分が実際問題として、1本のタテ条の材が分割されているのか、新しいタテ条をさし加えられているのかどうかという点は、圧痕およびモーテリング陽像からは判別できなかった。

土器の底径は10.6cmであるが、原体のカゴ底の中央はややずれているのでカゴの底径は少なく

とも約15cm以上あったと思われる。ていねいな底部の作り方からみて、概して小形のカゴと推定される。

第2例（図附2-3の2・図版附2-2の2）の圧痕は、第1例よりもさらに細かいもじり編みで、タテ条は太さ2mm前後、ヨコ条は1mm前後の細い材で編まれている。原体のカゴの底径は最低13cmは数えるが、第1例同様小形のものと思われる。

なお韓国製カゴは左回りに編まれているが、上記2例は右回りである。しかし裏返すと逆になるが、利き腕の問題もあり、これ以上は論及しない。

第1b類 1例（図附2-3の3、図版附2-2の3）

第1a類の2例とはタテ条の組み方を異にしている。すなわち本類はa類のようには、タテ条を中心でヨコ条によって結束して組まではおらず、8本のタテ材を放射状に重ね合わせてあり、写真では中央下部に当るそのうちの1本から順に編みはじめている。これは民俗資料の竹細工にみられる菊底編みの底竹（タテ条）の組み方と同じであるが、竹細工の場合にはヨコ条はもじり編みではない点がやや異なる。

モデリング陽像を観察するとタテ条の太さは中央部では約4mmあり、薄い扁平な材を用いられているらしく、結束しないで重ね合わせて底組みすることが可能と思われる。1段目では8本×2=16本のタテ条を、2・2・3・2・3・2・2本の7単位に分け、ヨコ条には太さ1mm前後の材を用いてもじり編みがなされている。この時最初の編みはじめの部分は、タテ条の1単位を1本のヨコ材で折りはさむようにして編みはじめられている。つづいて、2本分になったヨコ条で追いかけ合うようにしてねじりながらもじり編みを行っている。2段目では3本単位だった部分を2本と1本に分け、3段目ではタテ条各1本単位のもじり編みになっている。写真では上半部になっている、圧痕の状態の良いタテ条の9本についてみると、4段目で1カ所、5段目で3カ所、7段目では3カ所で、それぞれタテ条が2分されている。これらのタテ条はそれぞれ別な条なので、7段目まで9本のうち7本のタテ条が2分されていることになる。

底径は最低9.0cm、モデリング陽像は韓国カゴと同じく左回りである。

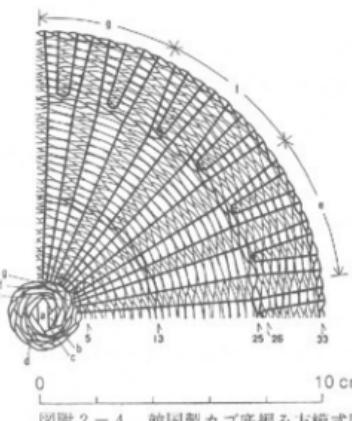
第4・5例（図附2-3の4・5、図版附2-2の4・5）は、底中央部が欠損しているので、タテ条の組み方は確認できなかった。第4例は、タテ条約1mm、ヨコ条は2~4mmの軟質のものが用いられ、底径は少なくとも8.5cm以上、第5例は、タテ条約1~2mmで、底径は少なくとも9.5cm以上と推定される。

○第2類

第2類は、ヨコ条が糸のような細い繊維を用いられていると推察できる2例（図附2-1の7・8、図版附2-2の6・7）である。底径はそれぞれ少なくとも8.5、8.2cm以上と推定されるが、第1類よりもさらに精巧な作りのもので、一層小形なカゴと考えられる。

韓国製カゴは非常に丁寧な作り方をしているが、本遺跡例もかなり丁寧な作品であるとみなされる。実測図は縮尺が異なり、本遺跡例の場合（図附2-5）は、韓国製カゴ（図附2-4）の2倍に拡大して示してある。したがって図ではヨコの各条間には隙間もみられるが、実際には密接していないとはいえ、かなりつまたった間隔といえよう。結論的には非常に丁寧な作りの小形のカ

ゴ底と推定される。



図附2-4 韓国製カゴ底編み方模式図



図附2-5 カゴ底圧痕第1類実測図

從来若干の遺跡で検出されていたカゴ類では、佐賀県西松浦郡有田町坂の下遺跡出土例にのみ類例が認められる（柴元1971）。時期は後期初頭である。しかし圧痕でみると、東日本ではさらに中期まで遡ることができる。富山県高岡市小竹戸遺跡は、中期後半の串田新式の遺跡であり、類例が1例出土しており、もっとも古い例に属す（小島1964）。後期の例は目下のところみられないが、晩期になると本遺跡の他に、金沢市中屋遺跡にもみられる（出越編1981）。ともに第1b類に相当すると思われる。

スダレ状圧痕・網代状圧痕の本来の製品は何であったか不明であるが、その中には少なからずカゴも含まれているということは從来から想定されていなかったわけではない（植松1980）。しかし本遺跡のように、明らかにカゴ底と判断できる例はほとんどみられなかつたのであり、きわめて注目に値する。小竹戸遺跡例も、このような観点から再評価すべき資料といえよう。

最後に、先の編布圧痕とともにこのようなカゴ底圧痕のみられるのは、同じ東日本晩期とはいえ、東北地方の亀ヶ岡式土器にはまったくみられないのであり、北陸地方晩期の一つの特徴であるとみることができる。さらに類例が増加され、縄文時代における編み物の研究が一層推進されることを念願する次第である。

（渡辺 誠〔名古屋大学文学部考古学研究室〕）

参考文献

- 植松なおみ、1980：古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究。物質文化、35、20～35頁。東京。
小笠原好彦、1970：縄文・弥生時代の布。考古学研究、17-3、29～49頁。岡山。
小島 俊彰、1964：高岡公園小竹戸縄文遺跡。高岡。
柴元 静雄、1971：坂の下縄文遺跡第二次発掘調査。佐賀。
津南町教育委員会、1963：越後のアンギン。津南町文化財調査報告、5。新潟県津南町。
出越 茂和・編、1981：金沢市中屋遺跡。金沢。
米沢 義光・他、1980：曾福遺跡。石川県穴水町。
渡辺 誠、1976：スダレ状圧痕の研究。物質文化、26、1～23頁。東京。

第8章 総括

I

石川県における縄文後・晚期遺跡は、手取川とその下流の手取扇状地に集中している。白山に源を発する手取川は、流程約70km、県下最大の河川であり、北方へほとんど一直線に流れる上・中流域区は、途中に峡谷や段丘の発達がみられる。溪口集落の鶴来町で流路を大きく西へ曲げ、下流域にみごとな扇状地を形成している。手取扇状地は、扇開角110度、半径約12km、傾斜は扇央の松任市で約120分の1、扇端では約270分の1の緩傾斜となっている。扇状地の東は、低い急崖に臨み、急崖の北部では泉野扇状地と重なりあっており、さらにその北方は、犀川の支流である伏見川を境に犀川扇状地と複合し、日本海に開く扇状地西側とは著しい対比を示している。

手取川流域の縄文後・晚期遺跡は、上・中流域の段丘に立地する遺跡と、扇状地の微高地を占位する遺跡に大別できる。段丘上のいわゆる山地型遺跡には、上流から数えて支流尾添川の尾口村尾添遺跡、尾口村漸戸遺跡、尾添川と本流の合流点に近い尾口村東二口御所の館遺跡、本流に臨む鳥越村下吉谷遺跡、上野遺跡、晚期下野式土器の標準遺跡である下野遺跡などが連なっている。一方、平地型といえる扇状地の後・晚期遺跡は、本御経塚遺跡にみられたように、扇状地に形成された低湿地を避け、微高地と微高地の肩部に集落を営むが、泉野扇状地の伏流水と関連すると考えられる標高30m線を中心とする松任市長竹遺跡を中心とするグループ、扇端の標高10m線付近の本御経塚遺跡を中心とするグループ、扇状地最末端標高2~3m線付近の金沢市松村遺跡を中心とするものの3グループに分かれる。

本御経塚遺跡の立地要件の一つに、扇状地扇端における自噴水からみて、飲料水の入手が容易であることがあげられることは、繰返し記述した通りである。このことは、上・中流の段丘に立地する後・晚期遺跡が、例えば尾添遺跡における「柱清水」にみられるように、必ず年間を通じて涌水豊かな「清水」と呼ばれる水源を控えた地区を占位していることでも証拠だてられる。また、手取本支流に臨む段丘上における「山地型」後・晚期遺跡については論ずまでもないが、扇状地平地も「野」集落から考えられるように、扇状地の至る所にみられる、かつての河跡から推定できる旧河川や、繰返えされた洪水によって形成された小河川がつくりなした自然堤防は、樹木の繁茂する林野をなしており、植物質食料を主に、動物質食料をも含め、食料資源をかなりの安定度をもって供給する場であったことも、見逃すことのできない要件の一つであった。扇状地末端の標高2~3m付近のグループ形成は、縄文海退と深くかかわりあっていた。このことは、このグループはすべて晚期大洞C1式併行期中心の遺跡であることでも明らかである。

上の如く、手取川流域の縄文後・晚期遺跡は「山地型」の上中流域遺跡と、「平地型」の扇状地遺跡に大別されるが、いわば「山の民」である上中流域集落と「里の民」である扇状地平地の集落は、全く没交渉であったのか、両者の間に密接な交流があったのか、あるいは日常生活を満たす道具・什器、特に儀器に何らかの相違があったかなどの究明は、縄文時代の社会構成、精神生活

の実相にせまる研究方法の一つとしてきわめて有効である。御経塚遺跡の立地条件解明をさらに深めながら、手取川水系全般の原始社会を考究するのは、魅力ある研究課題といえよう。

II

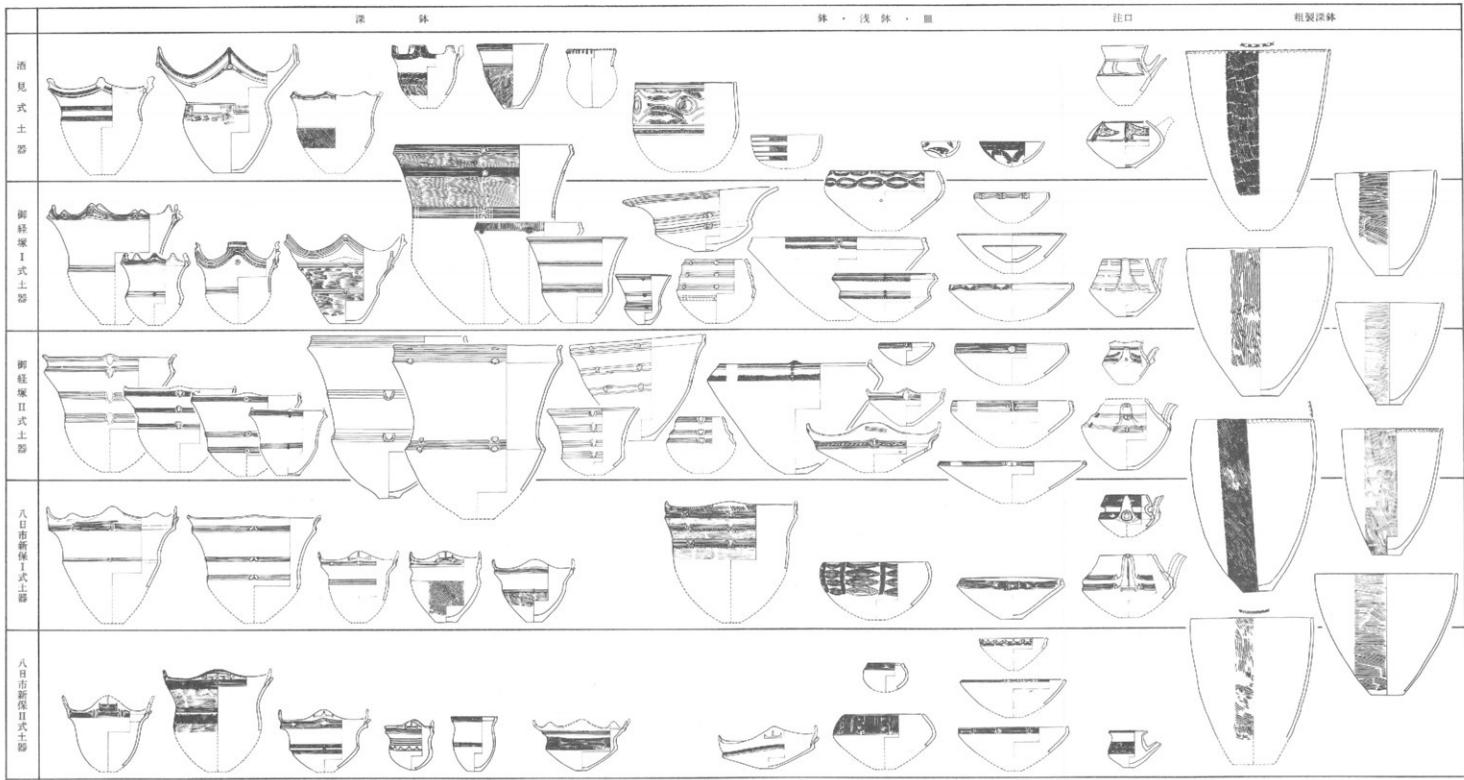
縄文時代の集落は、一方に口を開き、中央に広場をもつ馬蹄形集落であることが多いのは、貝塚集落の調査を通じて確かめられている。本御経塚遺跡は、分布調査により、径約200mの円形集落と考えられ、中央空地にあたる南北方向に走る低地によって、東西の二グループに分かれていると推測されていた。しかし、発掘調査の進行と、繰返し実施された範囲確認の分布調査により、南北方向をなす低地は、古墳時代後期頃に起きた大洪水で、現富樫用水の祖型にあたる本流から分かれ、遺跡内東よりを遺跡内の微地形的変化に沿うて、南北に貫流した旧河道路であることが判明し、遺跡の包含層上部を覆うている挙大の河原石礫群は、この洪水がもたらしたものであることが明らかとなって、中央広場の存在は確実となった。

また、既に発掘された北部地区の住居址・炉址は、北に張り出した円弧をもって連なっており、住居址は、出入口と考えられる「造り出し」と呼んできた張り出し部が南に設けられているから、本集落は、中央広場を開き、円形ないし馬蹄形に近い形態を示す集落であると判断されるに至ったのである。向きを南ないし南東にとるのは、晩秋から冬期にわたり、本地域に卓越する南西風を避けるためである。かかる集落形態は、本遺跡の北東1.2kmに位置する金沢市新保本町チカモリ遺跡（旧八日市新保、八日市新保式土器の標式遺跡）でも認められている。

III

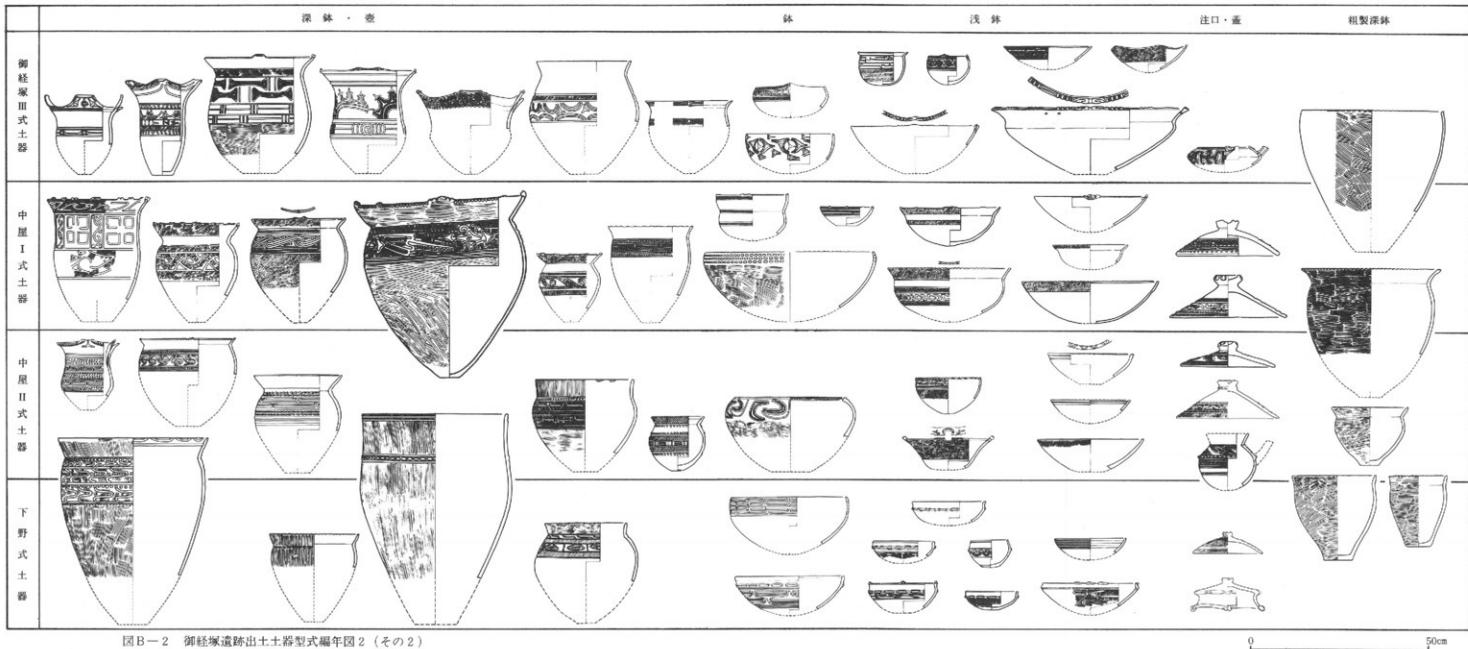
遺跡出土土器を検討し、北陸の後・晩期の上器型式編年として、後期を酒見式土器、御経塚I式土器、御経塚II式土器、八日市新保I式土器とし、晩期を八日市新保II式土器、御経塚III式土器、中屋I式土器、中屋II式土器、下野式土器とした。ここでいう北陸は、手取川以北より神通川以西に及ぶ能登半島基部をさるものであり、後期の酒見式土器は富山县の井口I式土器、御経塚I・II式土器は井口II式土器にあたる。後期の最終末にあたる八日市新保I式土器は在地で成立した北陸型といえる土器型式である。晩期の八日市新保II式土器は從来の八日市新保式、御経塚III式土器は御経塚式、中屋I式土器は從来の中屋式土器群の中から、前半にあたる大洞B-C式併行期のものを抽出したものであり、中屋II式土器は後半の大洞C1式土器併行期のものである。

後期の御経塚I式・II式土器は、関西後期土器文化の波及によって形成されたものである。これに対し、晩期の八日市新保II式土器から中屋I式土器までは、磨消三叉文・玉抱き三叉文・入組三叉文・羊齒状文などの文様意匠に、東北亀ヶ岡式土器文化の影響が認められるが、器形は八日市新保I式以来の在地の伝統によって固く規制されていることに注目したい。しかるに、中屋II式期には大洞C1式土器の模倣品ないしは擬人品が伴う。このことから、中屋I式期まで形成されていた、晩期前半の北陸独自の土器文化圏は、新たに形成された新潟県西部から富山・能登を経て半島基部に及ぶ汎東日本海的な東北亀ヶ岡式土器文化圏の中に包括吸収されるに至ったことが考えられるのである。近時、明らかにされつつある巨大木柱文化は、この土器圏の中で最



図B-1 御経塚遺跡出土土器型式編年図2（その1）

0 50cm



盛期を迎えた可能性が高い。

なお、以上の型式分類にあたっては、器種・器形・文様等を検討し、型式設定を行ったのであるが、なお、主觀的な感性にたよったところも少なくなく、ことに縄文・朱痕文等の原体の推定については、力量不足のために何程の考慮も加えられなかったことが反省されるしだいであり、本型式設定を素材とする縦年研究の深化が望まれるのである。

土器の底部には、網代圧痕・スクレ状圧痕・木葉痕・カゴ底圧痕など、さまざまな圧痕が残されており、原体が特定できる編布圧痕もある。カゴ底圧痕は、金沢市中屋遺跡からも出土しているが、東北亀ヶ岡式土器にはみられないようであるから、現時点では北陸の後・晩期土器だけから検出されていることを注目したい。

土製品では、土偶・土版・土製耳飾・環状土製品・瓢面土製品・スタンプ形土製品・有孔球状土製品・球状土製品・土製円盤など多種多様である。なかでも、入墨・抜歯を表わしているとみられる土偶をはじめとして、北陸では、これ程多数の、しかも表情豊かな土偶を出土している遺跡は少ない。

IV

石器の総数は6,500点に近く、全国的にみてもきわめて多量であることが指摘されよう。なかでも、打製石斧は2700余点でもっとも多いが、これは、手取扇状地の如き扇状地形の自然堤防上の微高地に立地する中期中葉以降の遺跡に顕著にみられる事象であることに、改めて注意を喚起しておきたい。植物質食料の加工用具としての磨石・敲石・石皿の点数も多い。石皿では、中央部は平坦ないしや高まるくらいで、周縁に向けて緩く傾斜している扁平なものが主体をしていている。これに対し、石釜はきわめて少ない。

石器については、個別的な石器研究を進める一方、植物遺体と磨石・敲石・石皿の関係、木製品と磨製石斧の関係、スクレ状圧痕と疊石錘の関係などのように、関連遺物とともに考察する研究の必要性が痛感されるのである。御経塚遺跡では、植物遺体や、木製品は検出されていないため、この点まで論することはできなかったが、本遺跡の北西約1.2kmのところに所在する金沢市新保本町カモリ遺跡では、トチの実やクルミ・クリの皮などの植物遺体や多数の木柱根が検出されている。ことに、木柱根の伐採、加工痕から、木材の伐採、加工工具としての磨製石斧の機能などが明確にされる部分も少くないであろう。

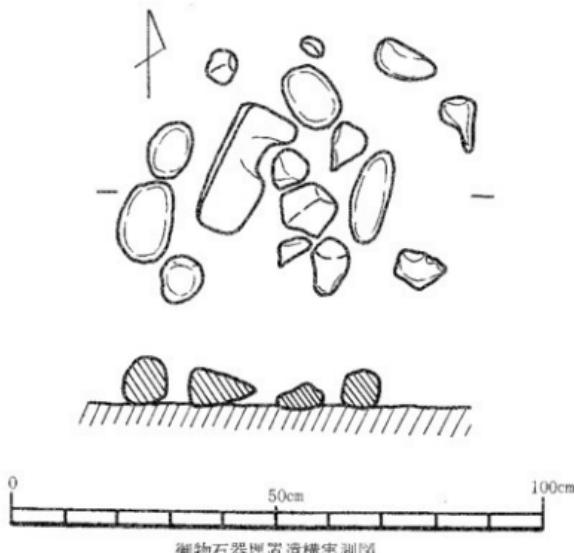
なお、時期・地域は異なるが、前期福井県三方郡鳥浜貝塚からは、多数の木製品が出土しているのであるが、とくに注目をあつめるのは、鉢や盆と命名されている木製品の存在である。土器以外に木製品の容器が存在すること自体に割目があるのであるが、石器時代と汎称される縄文文化において、後・晩期の石器文化の際にも、木器文化があったことを見落としてはならないであろう。

V

石製品では、石棒・石刀・石剣・御物石器・石錐形石製品・錐節形石製品などがあり、これ

また、すこぶる多種多様である。

御物石器は、三点が出土している。既に知られているように、御物石器という名称は、能登・鳳至郡穴水町比良の法榮寺門徒が、本願寺法主の能登巡錫の折に、珍奇な鯉の置物として一对を法主に献納したことにはじまり、明治11年、明治天皇の北陸巡幸に際し、法主から天皇に献上されて帝室御物になったものが、帝室博物館・現東京国立博物館に納められたことによるものであり、北陸とは特別な関係を有する縄文時代遺物である。



御物石器埋置遺構実測図

遺構に結びついて検出されたのは、細池の2例と御経塚遺跡の1例のみである。細池遺跡では、一つは土塙内から、他の一つは住居址内で検出されているが、これに対し、御経塚遺跡では、住居址の一隅に設けられた、大きささまざまの河原石8箇で囲まれた方形に近い石囲い施設に埋置された状況で検出されたことを特筆しておきたい。

御物石器には、御経塚遺跡検出例のような、安山岩・砂岩を敲打整形した粗製ともいえる類と能登・比良出土例のような、粘板岩・泥岩を研磨整形し、三叉文・鍵の手文などを彫去した類がある。後者は、御物石器が晩期の所産であることを示し、御経塚遺跡の石囲い施設は御経塚III式土器を伴出しており、北陸の御物石器の一時点が晩期に属することは確実である。御物石器の出土総数の70%、遺跡の60%以上は、岐阜県飛騨地域に集中するといわれているから、御物石器は飛騨地域で発生したと考えて誤りないと思われるが、その時期が後期にあるのか、晩期初頭にあたるのかは、今後の調査研究にまたねばならないであろう。ただ、北陸への伝播は、八日市新保日式土器の分布が飛騨地域に及んでいることから、晩期初頭と考えたいと思う。

御物石器出土遺跡と個体数は、橋本正氏の研究によれば97遺跡（うち2遺跡は遺跡名が不明）個体数は118、不明2を加えて約120個体であるというが、そのほとんどは表面採集品または伝世品であって、確実に発掘調査で検出されたものはきわめて少なく、管見では御経塚遺跡の3例、能登・鳳至郡都町真脇遺跡の3例、新潟県青海町寺地遺跡の1例および糸魚川市細池遺跡の2例にすぎないようである。そのうち、

なお、御経塚遺跡では、IV区の第6号住居址の北西0.5mに、径約40cmの浅い掘り込みがあり、打製石斧7本が一括集積されていた。住居址内に何本かの打製石斧が一括された状態で検出された事例は、舞鶴市桑洞下遺跡で報告されている。これに対し御経塚遺跡は、1点のみ胸部で二つに折れているものがあるが、これは使用によって折れたのでなく、土圧か何かによる自然折損であると考えられており、7点とも磨耗痕の全く認められない未使用品である。このことから、単なる集積とみるよりは住居址外に一括埋置された如くであり、打製石斧に伴う何らかの祭式が推測され興味をひかれるのである。



打製石斧集積状況

VI

御経塚遺跡の範囲は30,000m²をこえる。縄文時代集落跡としては石川県下最大であり、全国的にみても、これと比べることのできる平地集落跡は、そうはあるまいと考えられる。

金沢市の西に隣接する遺跡周辺は都市化現象が著しい。第2次調査、第3次調査のきっかけとなった現国道8号線・石川広域農道の建設・開通が、それを促進した。ここ数年間における住宅化の急進状況から推して、遺跡周辺が住宅の密集する都市区域となるのは、近い将来のことであろう。

御経塚遺跡は、その広さのおよそ半ばに近い15,000m²余が、昭和52年春、文部省指定史跡として告示され、同年末には指定地域内の民有地全域が公有化された。続いて昭和54年度から史跡公園としての環境整備事業がはじまり、昭和56年度から史跡地南に隣接して埋蔵文化財収蔵庫が建設されることになった。両事業は、昭和58年3月に竣工した。

史跡公園は、西半分を簡易なスポーツを楽しむ場、東半分を復元住居などを中心とする学習区としてほぼ両分されている。学習区は、古墳時代後期に遺跡東よりを貫流した大溝標示地を流れる用水路西側に、復元住居1棟と住居址・炉址・土塙などを設け、水路東側は花粉分析で確かめられた原生林として整備されている。

また、埋蔵文化財収蔵庫は、1階は収蔵室でLII型コンテナバット（パンケース）1200ケースが収蔵でき、二階は収蔵展示室で復元土器約200点・土製品・石器・石製品の主なものが、ガラスケース内に収蔵展示され希望者に公開されている。上の如き史跡公園の整備と収蔵庫の在り方は、史跡を市民に還元する一つの試みとして広く注目されるにちがいない。

御経塚遺跡の指定・公有化と整備、収蔵庫建設の原動力となったのは、昭和50年に市村正規氏が中心となり、地元町民によって結成された御経塚遺跡保存会である。保存会は行政の指導や研究者の働きかけによってつくられたものではなく、地元でじねんに生まれたものであることを特筆



御経塚峠越遺跡（地名由来伝承地）



（史跡（南より）



史跡（北西より）



収蔵庫（1階）



収蔵庫（2階）

したい。われわれは、上からの指示や研究者の希望によってつくられた保存会の例を幾つか知っているが、そのほとんどは有名無実なものになっているか、行政の手によって運営される見せかけのものが多い。これらの中にあって御経塚遺跡保存会は、永く自主的活動を続け、史跡と出土遺物を守り、これを県市民の学習の場として提供してくれることが確信されるのである。

（高堀勝喜）



図版 1

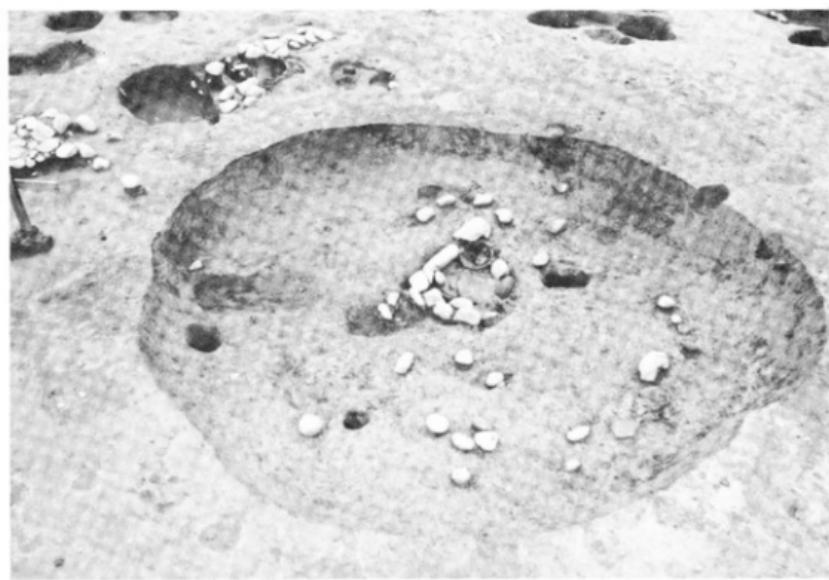
上 遺跡遠景 西から
中 第5次調査区全景 西から
下 第5次調査区近景 南から



図版 2 上 第6次調査区全景 南西から
下 第6次調査区近景 南から



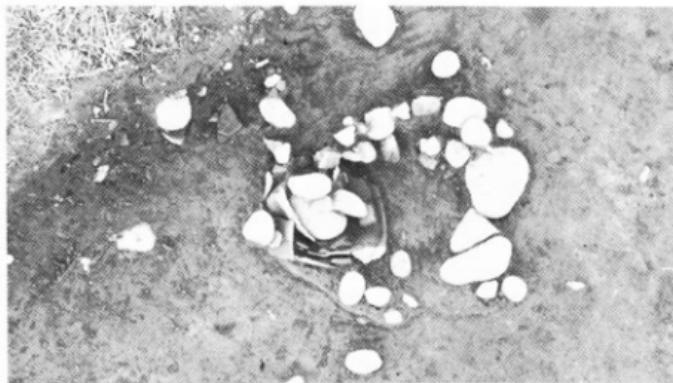
図版3 上 第7次調査区全景 東から
下 第7次調査区全景 南から



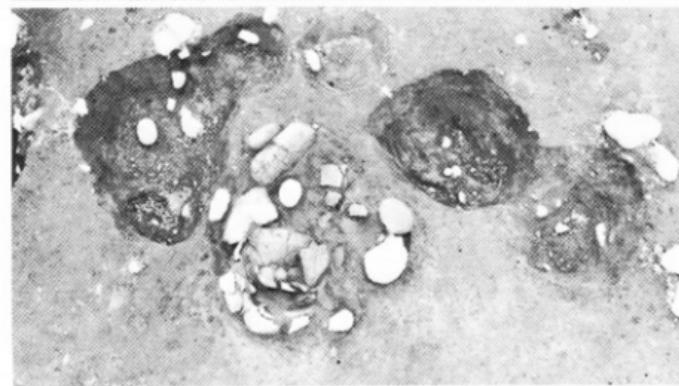
图版4 上 第3·4号住居址
下 第5号住居址



图版 5 上 第2号炉址
 中 第14号炉址
 下 第20号炉址



圖版 6 上 第 6 号 炉 址
 中 B 第 3 号 炉 址
 下 B 第 1 号 炉 址



图版 7

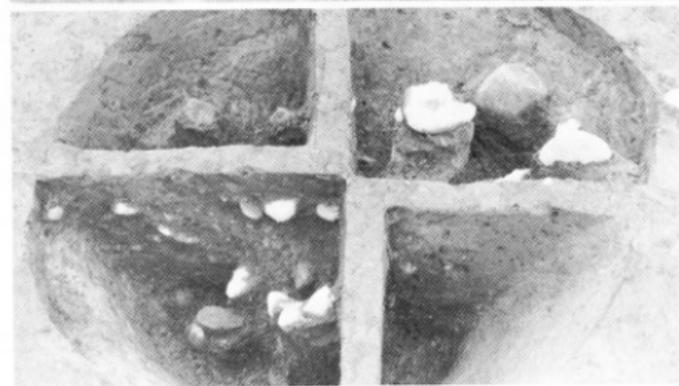
上 第21号炉址

中 第19号炉址

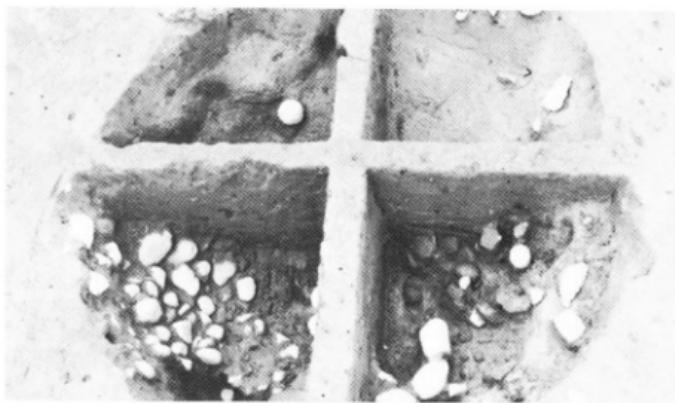
下 B第2号炉址



圖版 8 上 第 5 號住居址爐址
中 第 3 號住居址爐址
下 第 4 號住居址爐址



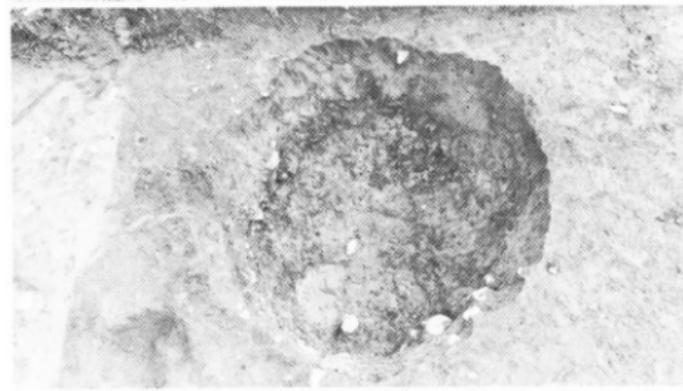
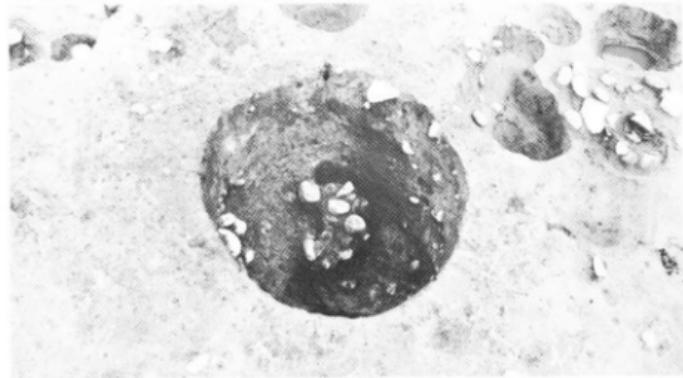
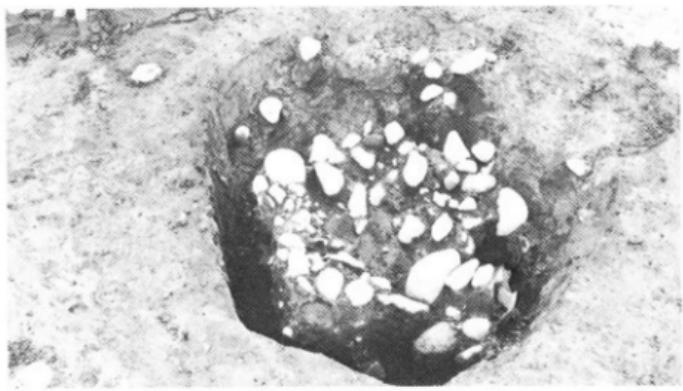
圖版 9 上 第71號土坡
 中 第3號土坡
 下 第1號土坡



图版10

上 第9号土坡

下 第56号土坡

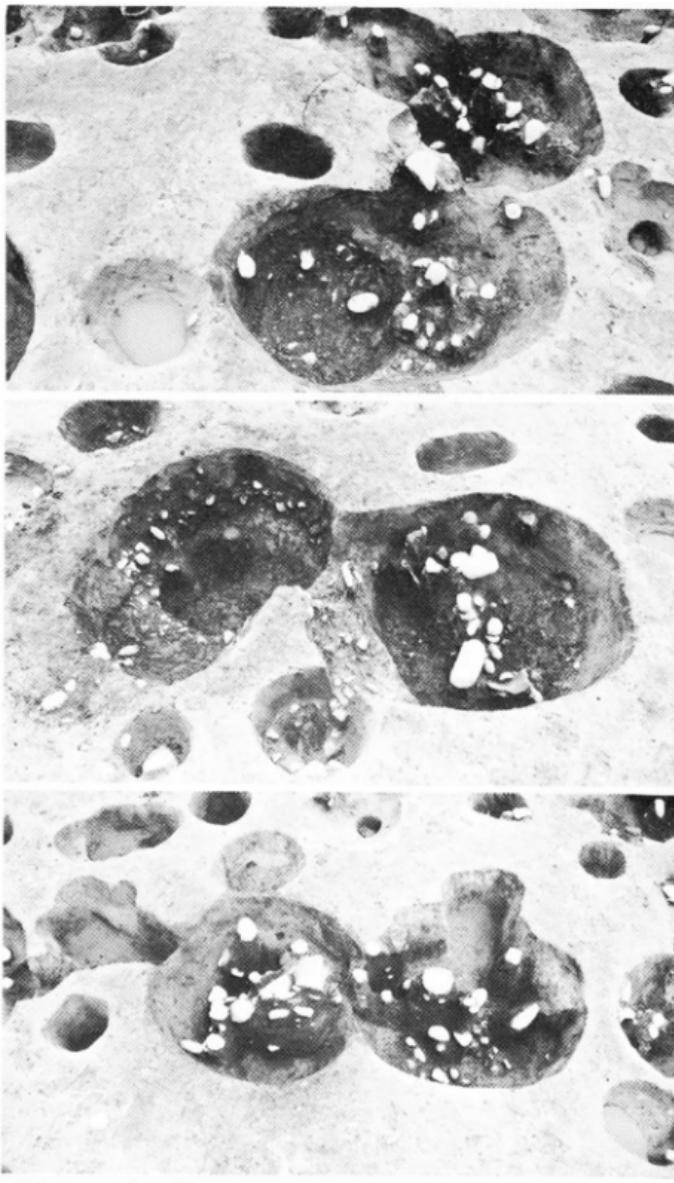


圖版11

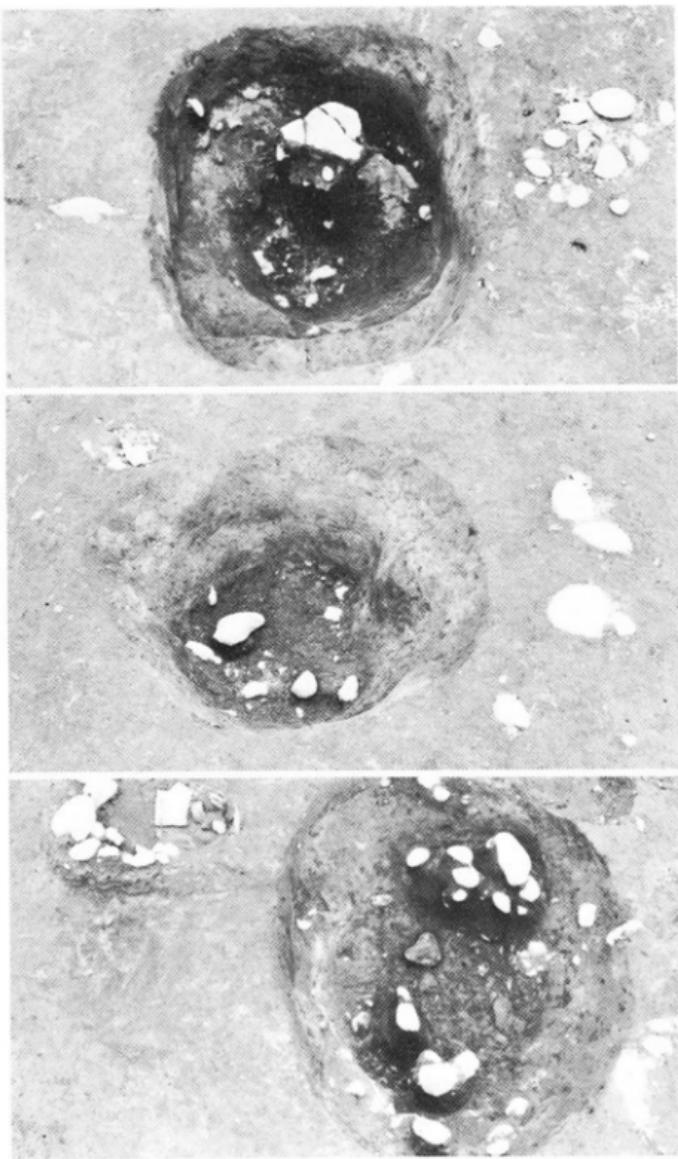
上 B第64號土塚

中 B第14號土塚

下 第63號土塚



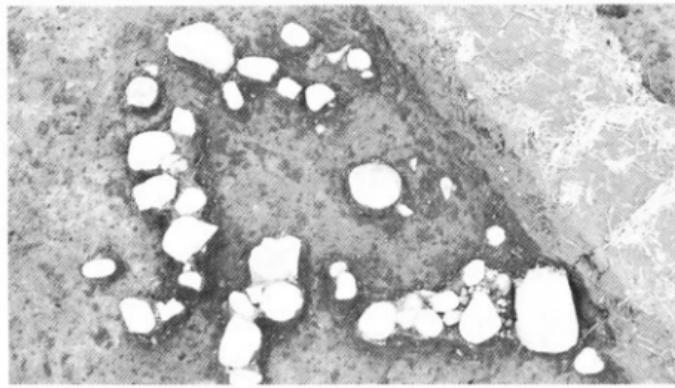
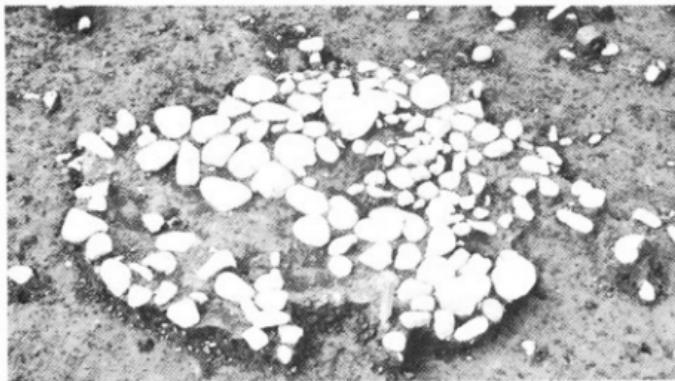
图版12 中 B第9·10号土坛
下 B第17·18号土坛



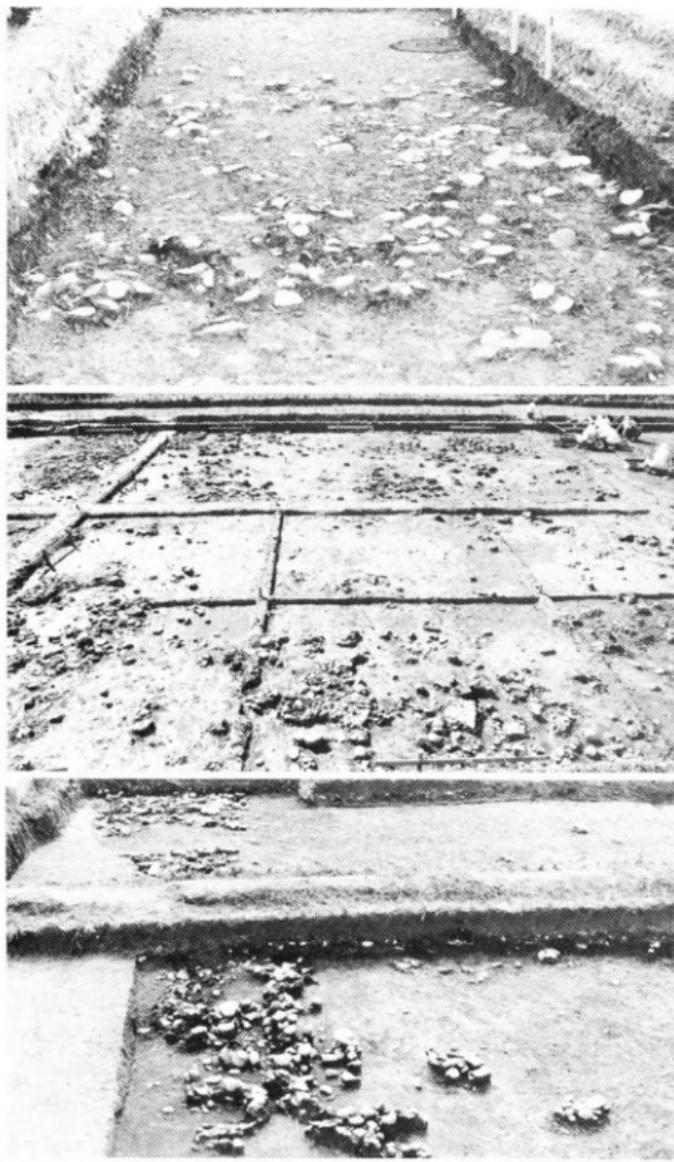
图版13 上 B第13号土坛
中 B第10号土坛
下 B第12号土坛



图版14
上 第216号土坡
中 第205号土坡
下 第202号土坡



图版15 上 土器棺检出状况
中 第1号配石遗構
下 第3号配石遺構



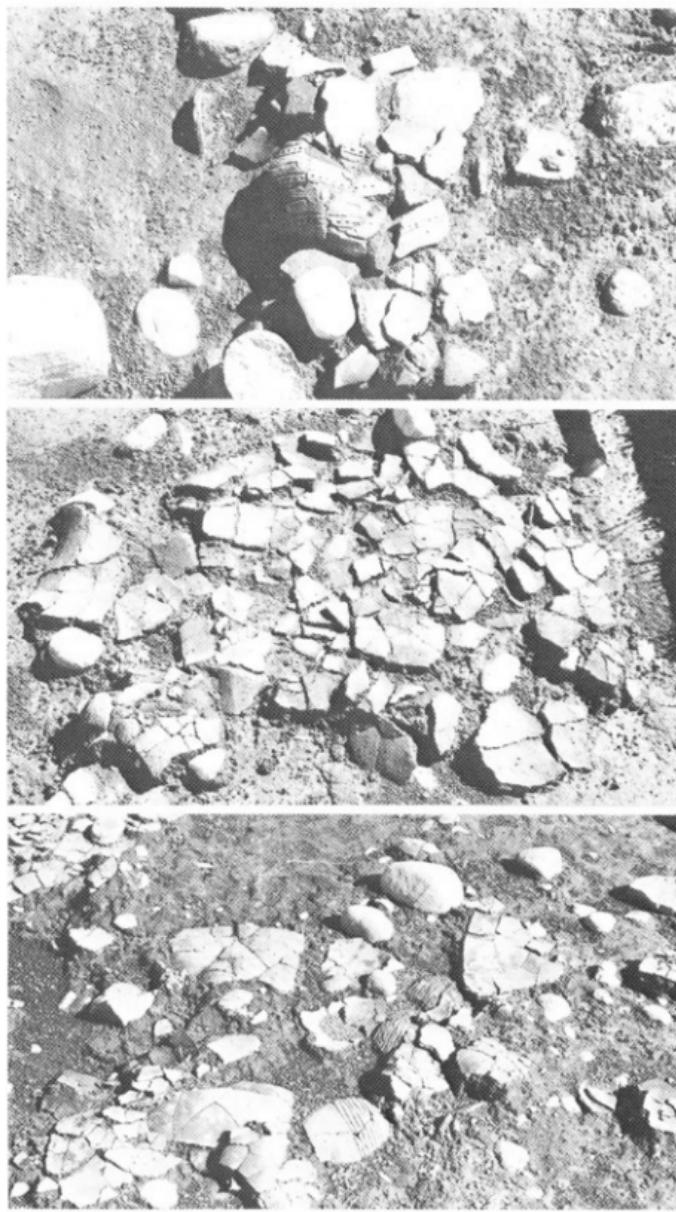
図版16 上 東区大溝土器出土状況（第6次）
中 土器出土状況（第7次）
下 西端晩期土器出土状況（第7次）



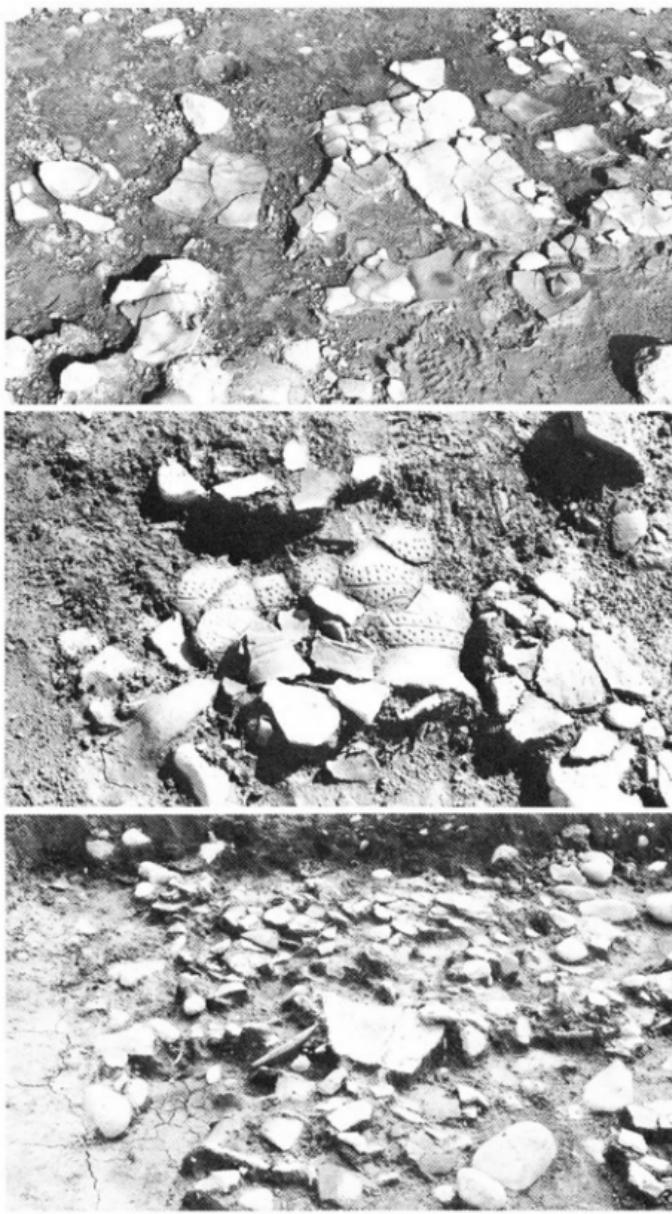
図版17 土器出土状況1（第5次）



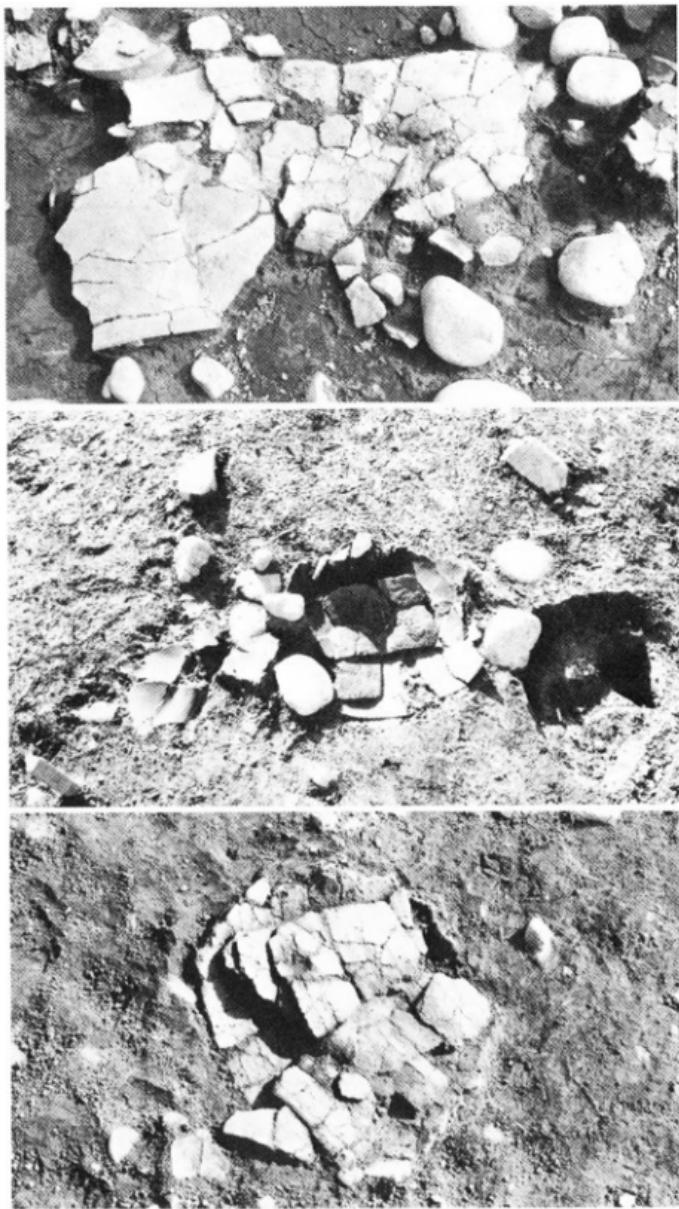
図版18 土器出土状況2 (上 第5次、中・下 第6次)



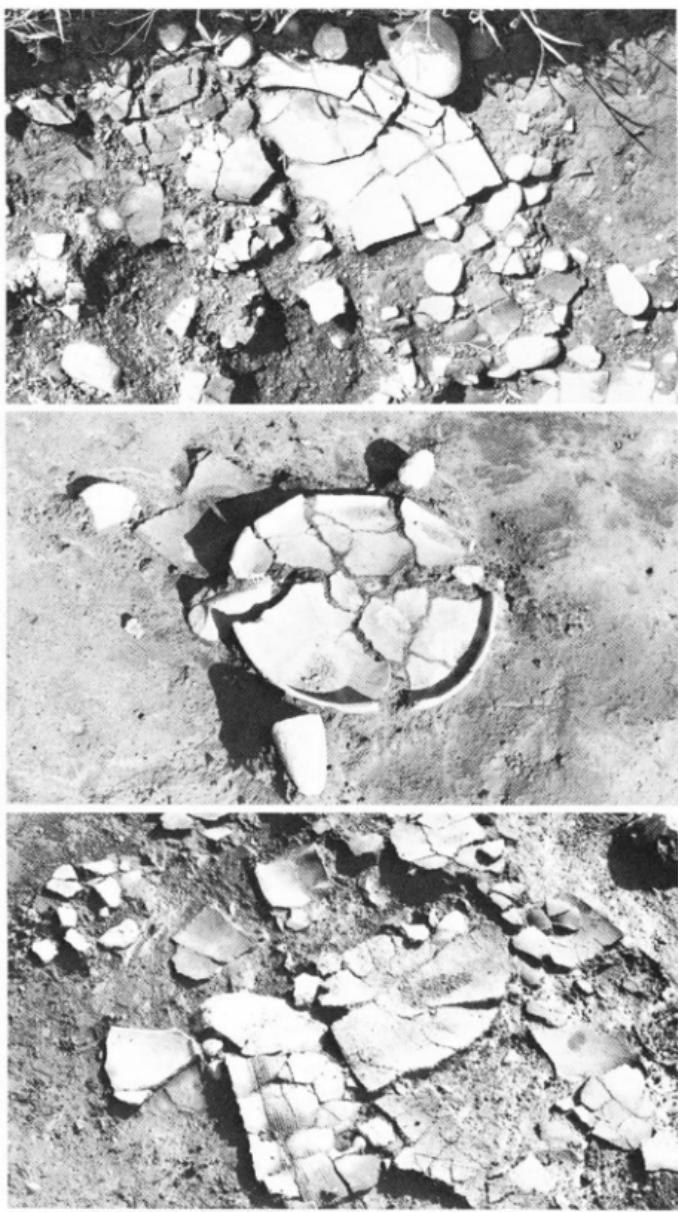
图版19 土器出土状况3（第7次）



図版20 土器出土状況4（第7次）



図版21 土器出土状況5（第7次）



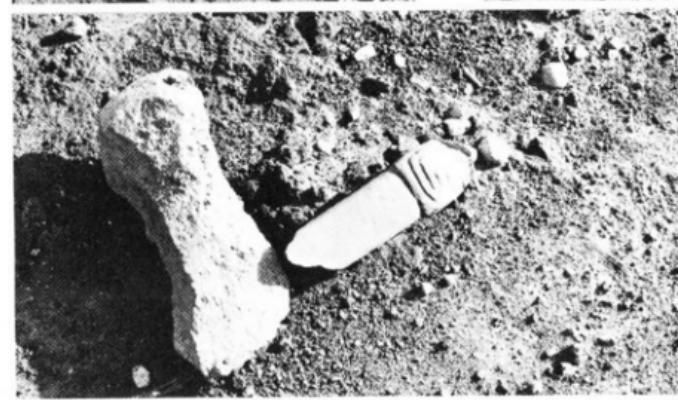
図版22 土器出土状況6（第7次）



図版23 土器出土状況7（第7次）



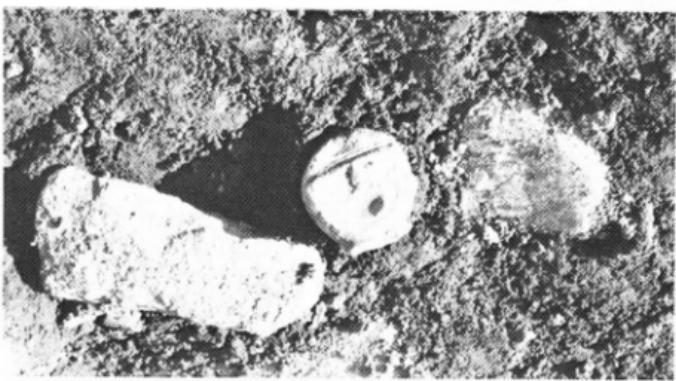
图版24 上 御物石器出土状况
中·下 石棒出土状况



图版25

上 石刺出土状况

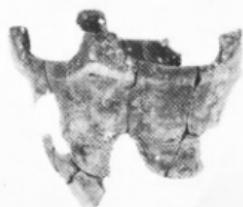
中·下 石刀出土状况



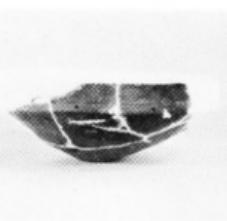
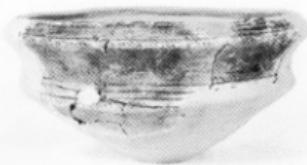
圖版26 上 石鑿形石製品出土狀況

中 石冠出土狀況

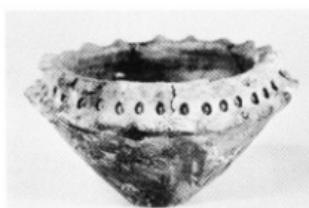
下 土偶出土狀況



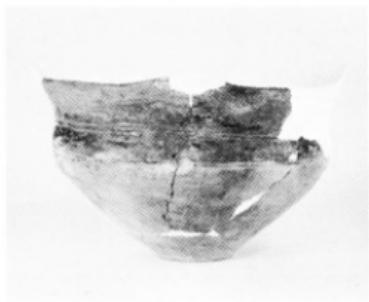
図版27 酒見式土器（縮尺不同）



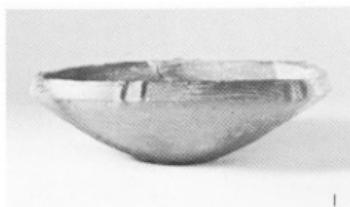
図版28 御経塚 I 式土器 1 (縮尺不同)



图版29 御经冢 I 式土器 2 (缩尺不同)



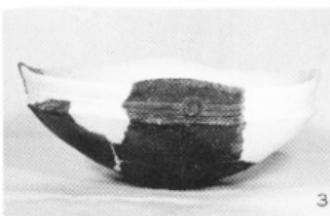
図版30 御経塚II式土器（縮尺不同）



1



2



3



4



5



6



7

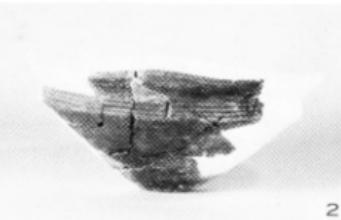
図版31 御経塚II式土器（1～5）・八日市新保I式土器（6・7）(縮尺不同)



图版32 八日市新保I式土器（缩尺不同）



1



2



3



4



5



6



7

图版33 八日市新保I式土器（1~6）・八日市新保II式土器（7）（縮尺不同）



1



2



3



4



5



6



7

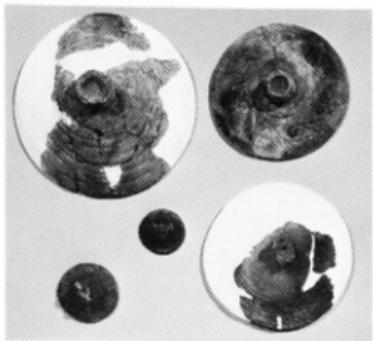
图版34 八日市新保II式土器（1～5）・御脛塚III式土器（6・7）(縮尺不同)



图版35 御经塚III式土器（縮尺不同）



图版36 中星 I 式土器 1 (缩尺不同)



図版37 中屋 I 式土器 2 (縮尺不同)



图版38 中星II式土器 1 (缩尺不同)



1



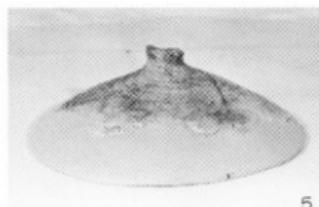
2



4



3



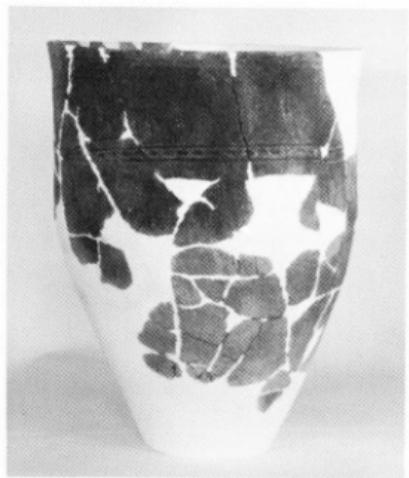
5



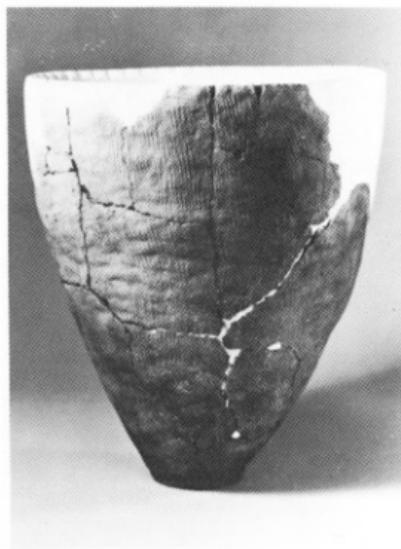
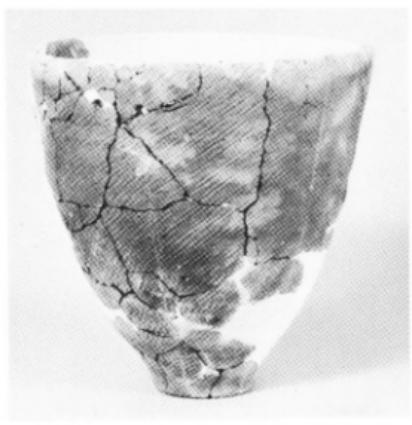
6



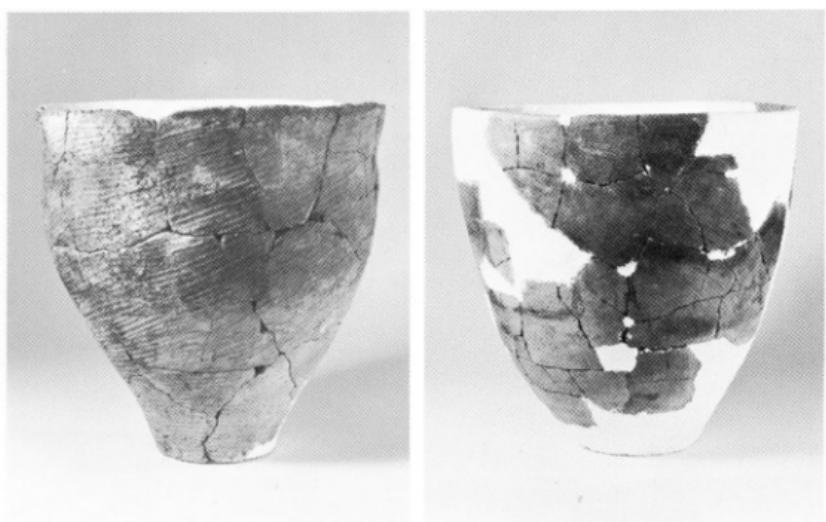
7



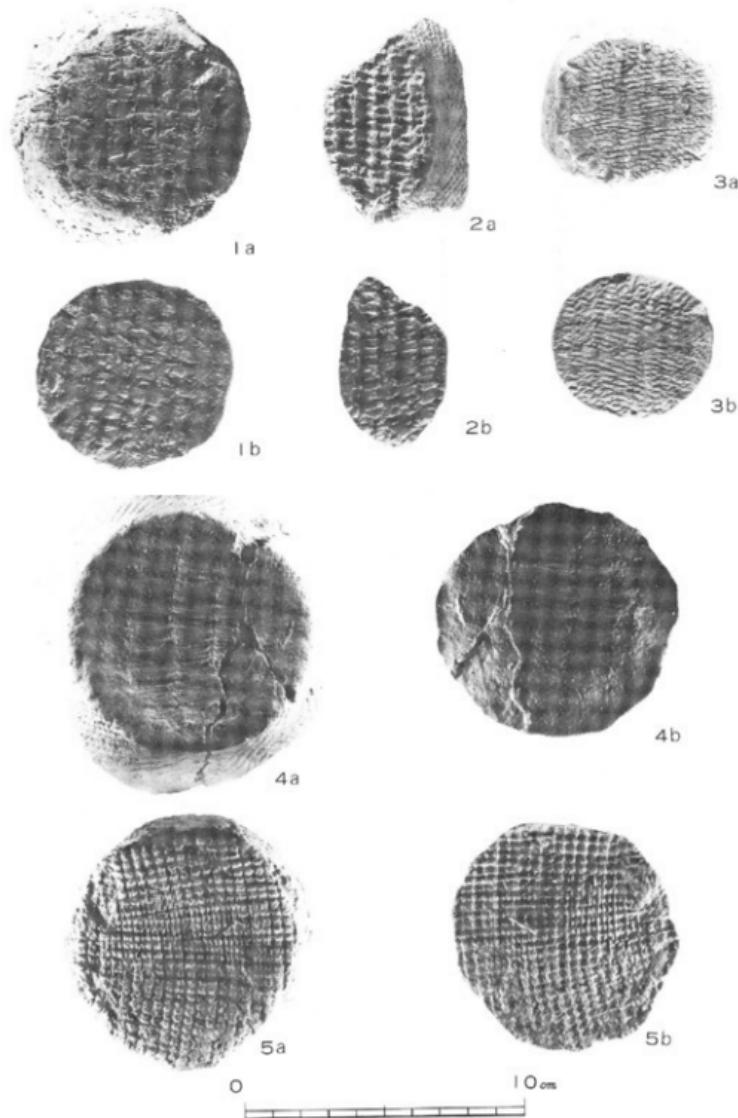
図版40 下野式土器（縮尺不同）



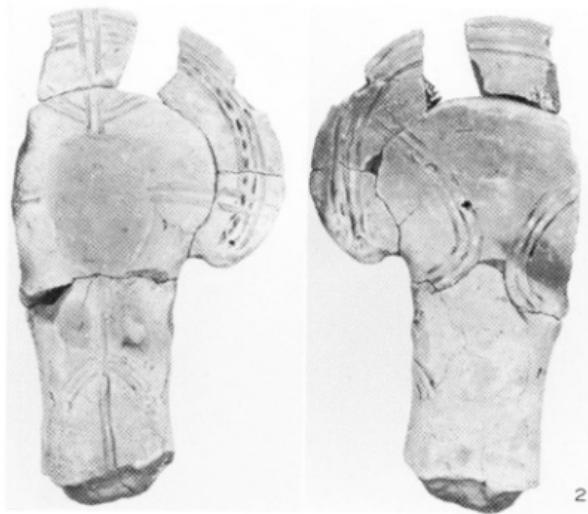
図版41 繩文土器（縮尺不同）



图版42 条痕文土器（缩尺不同）



図版43 底部圧痕(a)と同モデリング陽像(b)



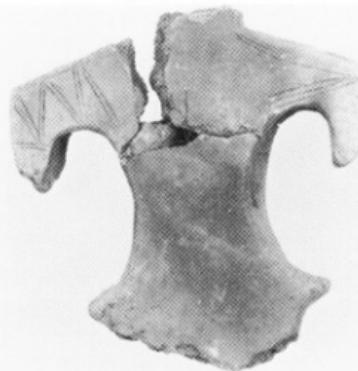
図版44 土偶 1 ($S = \frac{1}{2}$)



1



2



3



4



5



6



8

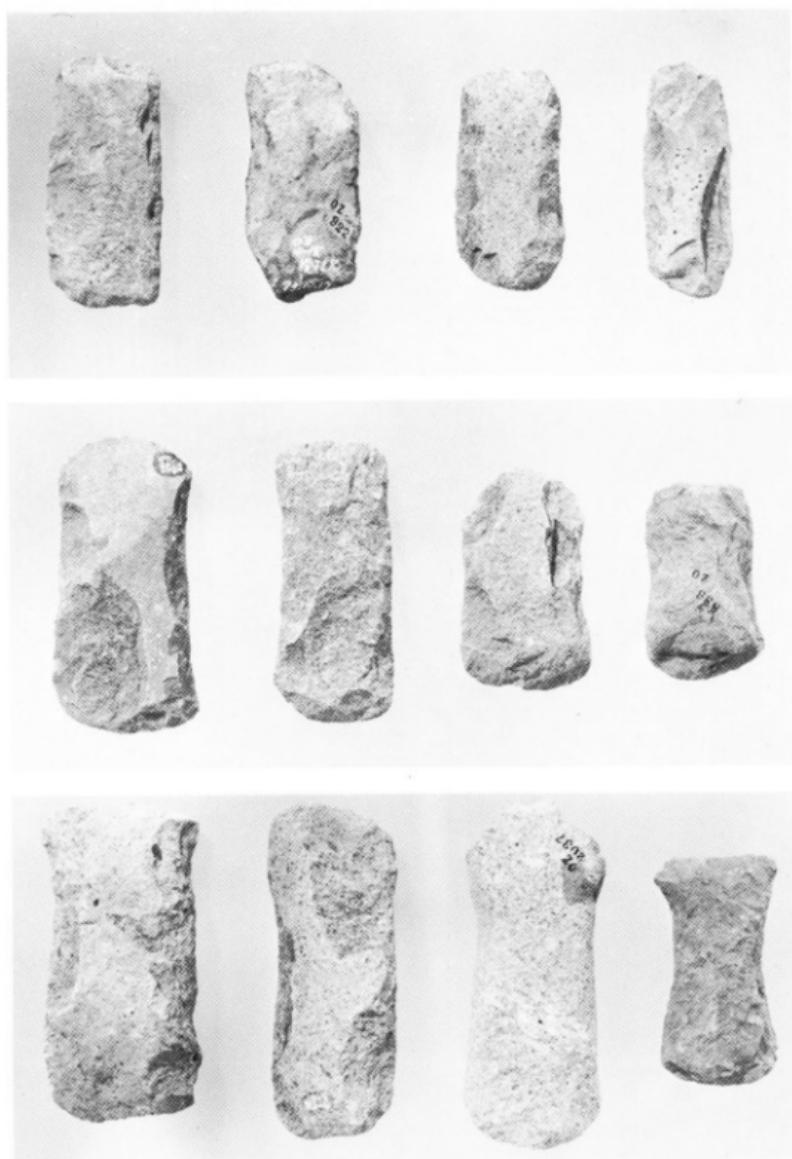


9

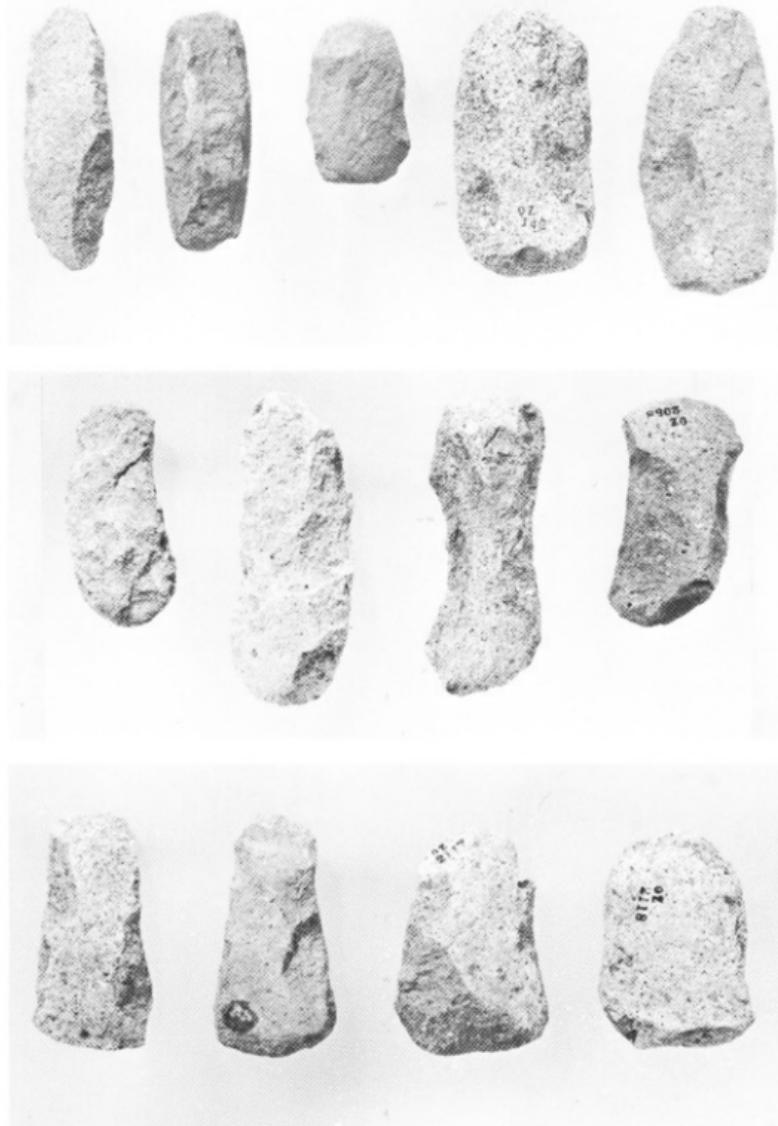
図版45 土偶 2 ($S = \frac{1}{2}$)



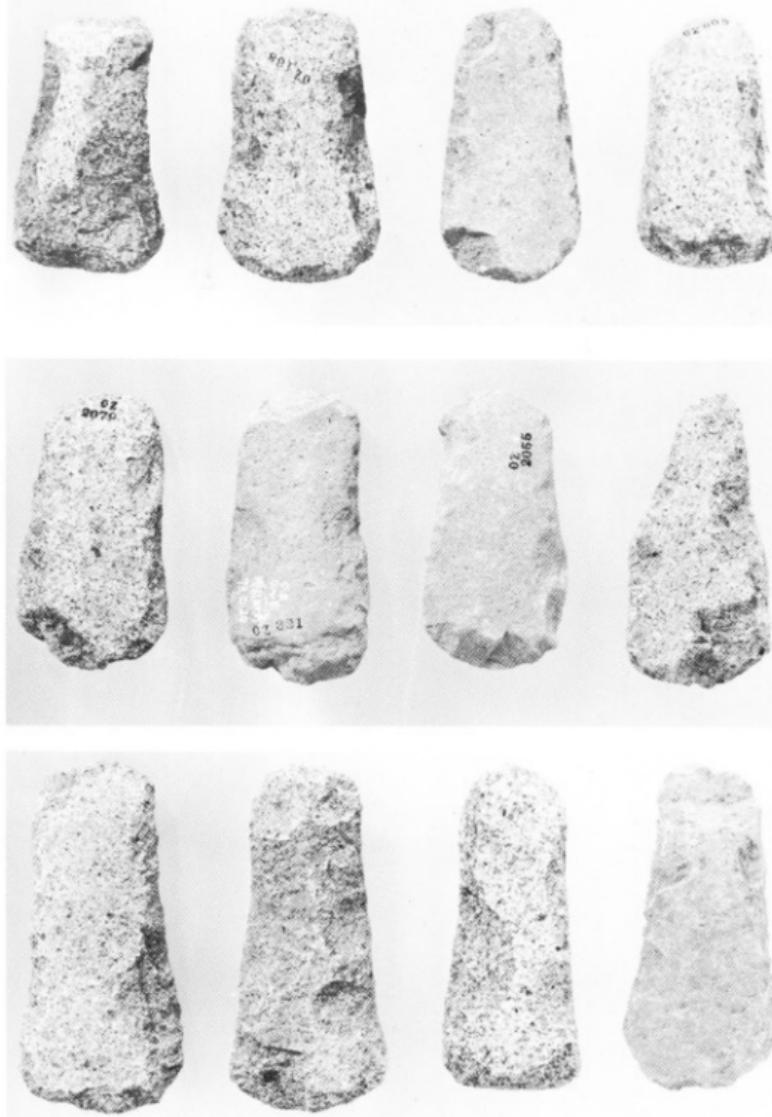
図版46 土製品 ($S = \frac{1}{2}$)



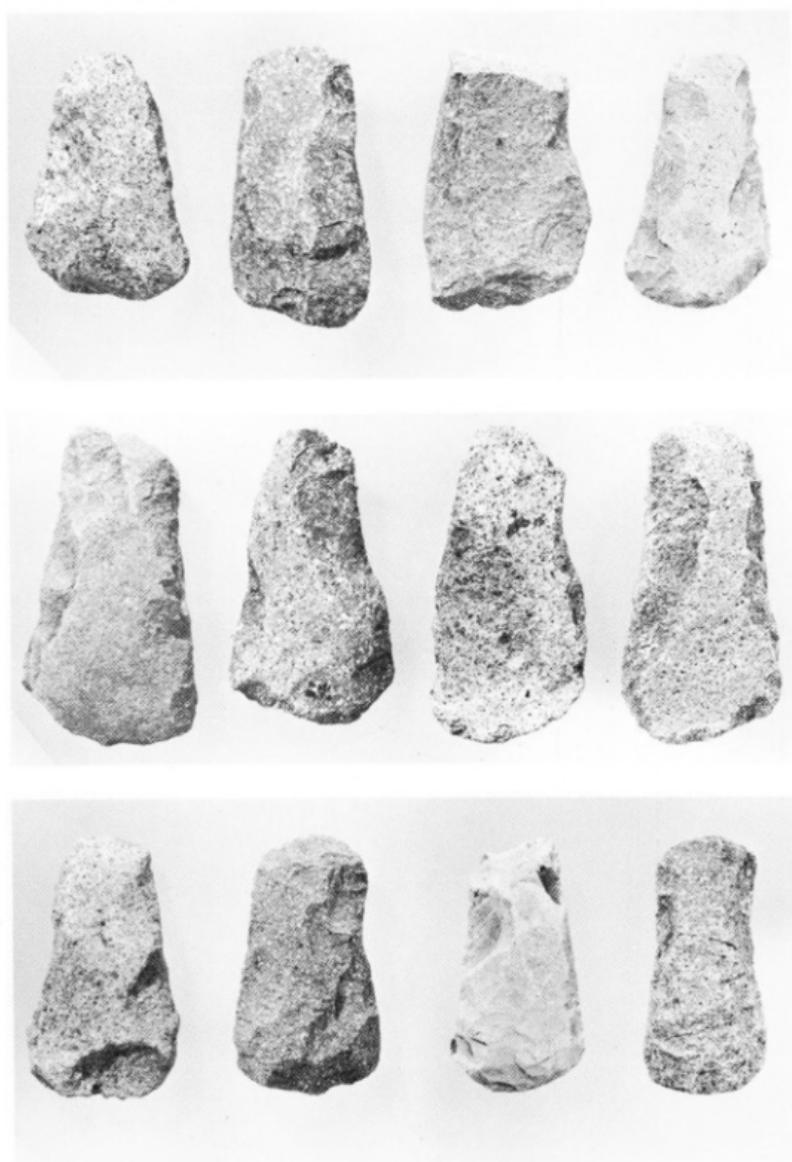
图版47 打制石斧1 (短冊形、 $S = \frac{1}{6}$)



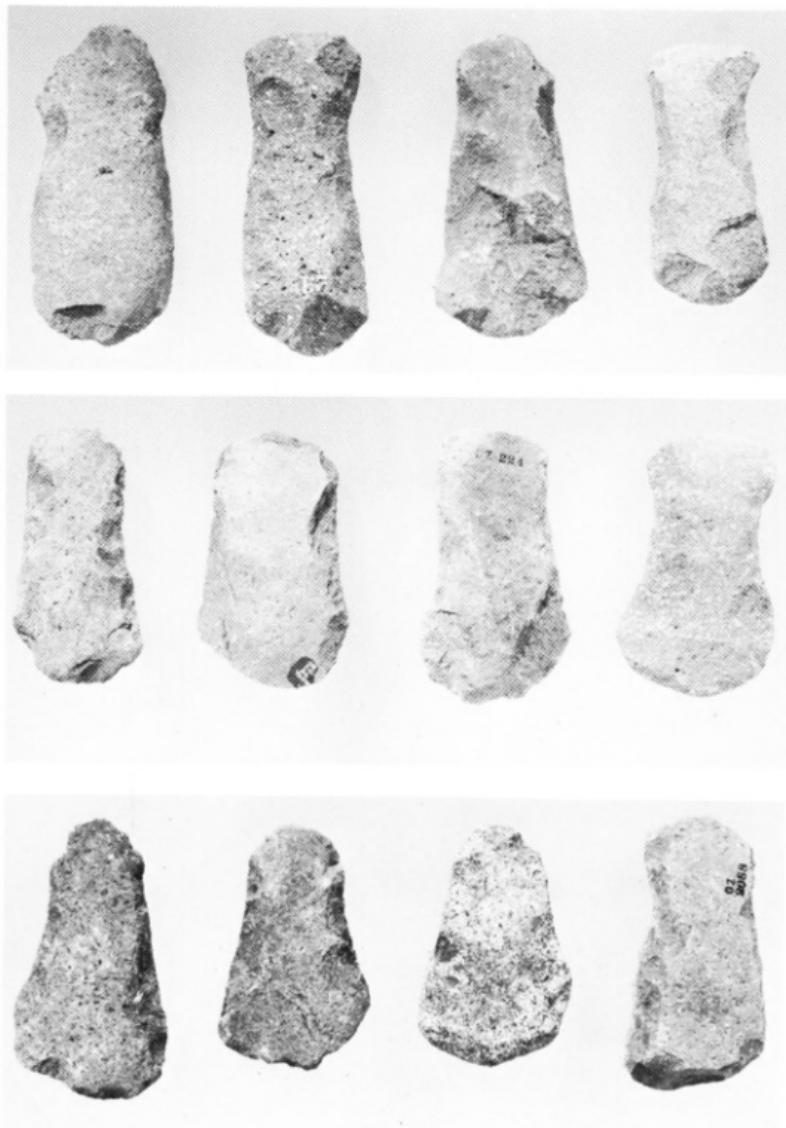
图版48 打製石斧 2 (上·中 短圆形、下 捷形, S = 1/2)



图版49 打製石斧 3 (撮影、S = 1/2)



图版50 打制石斧4 (撮形、 $S = \frac{1}{3}$)



图版51 打製石斧 5 (梭形、 $S = \frac{1}{3}$)



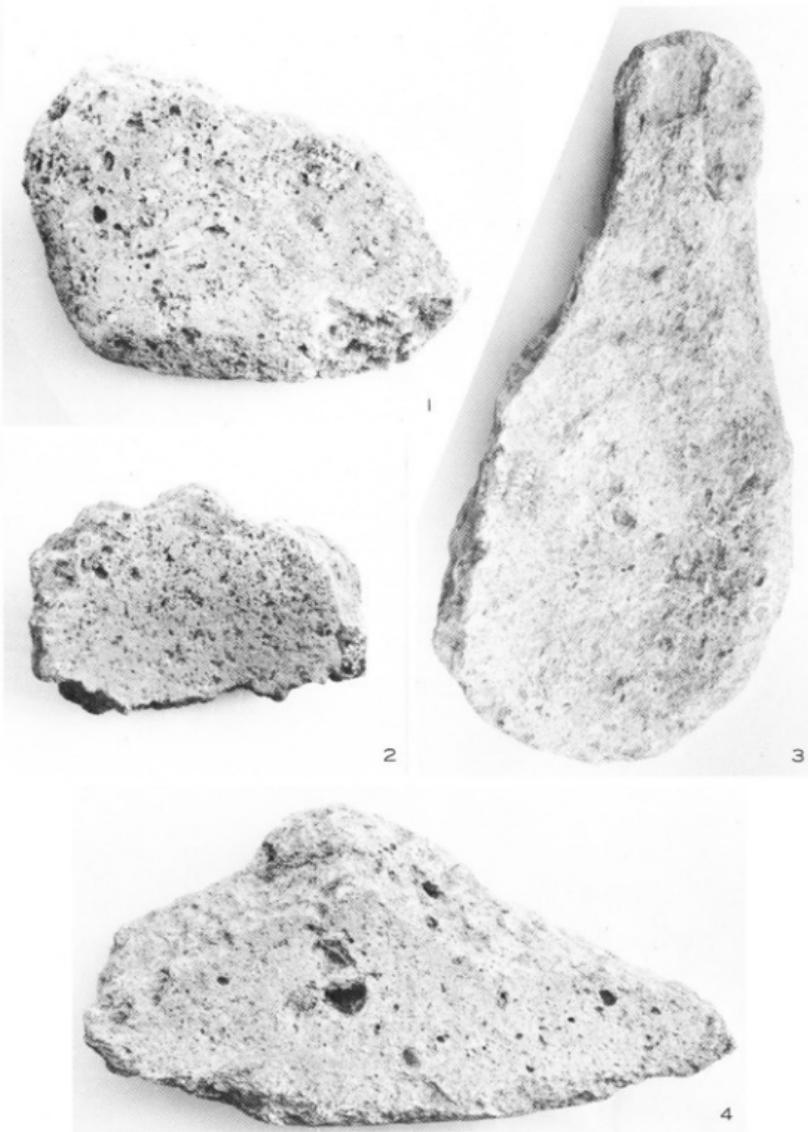
圖版52 打製石斧 6 (撮形、 $S = \frac{1}{3}$)



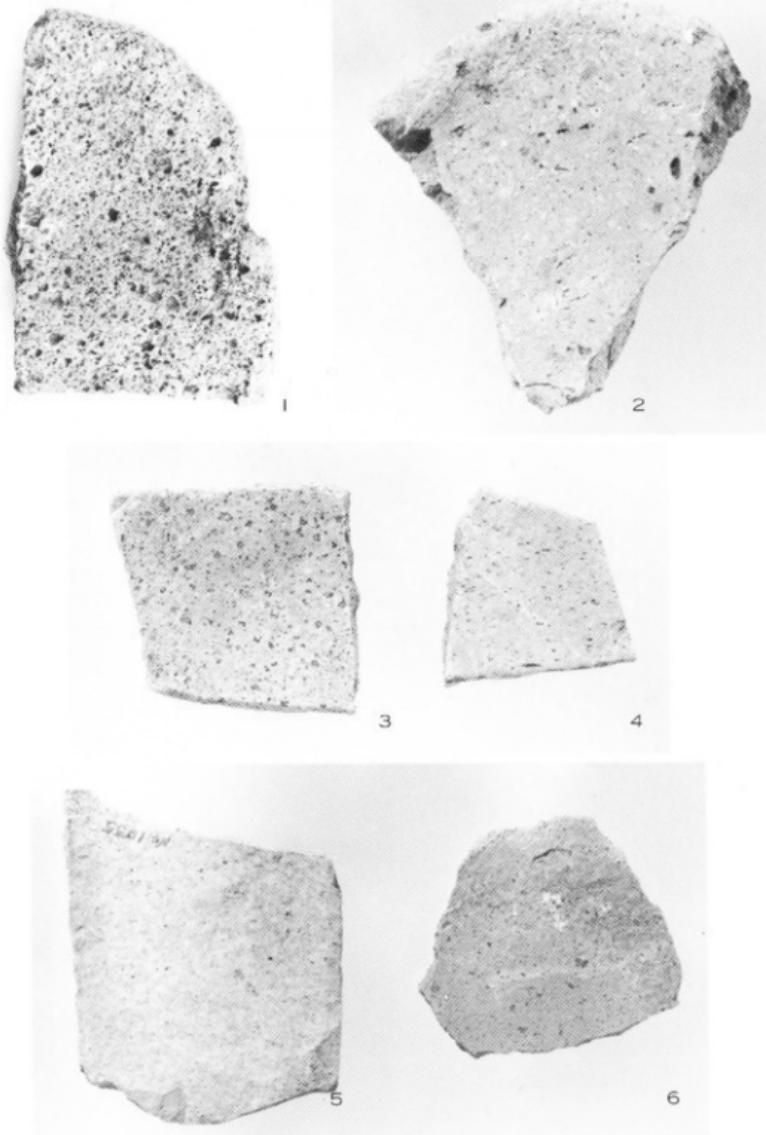
圖版53 打製石斧 7 (楔形、 $S = \frac{1}{2}$)



图版54 打制石斧 8 (上 楔形、中·下 分铜形、S = 1/3)



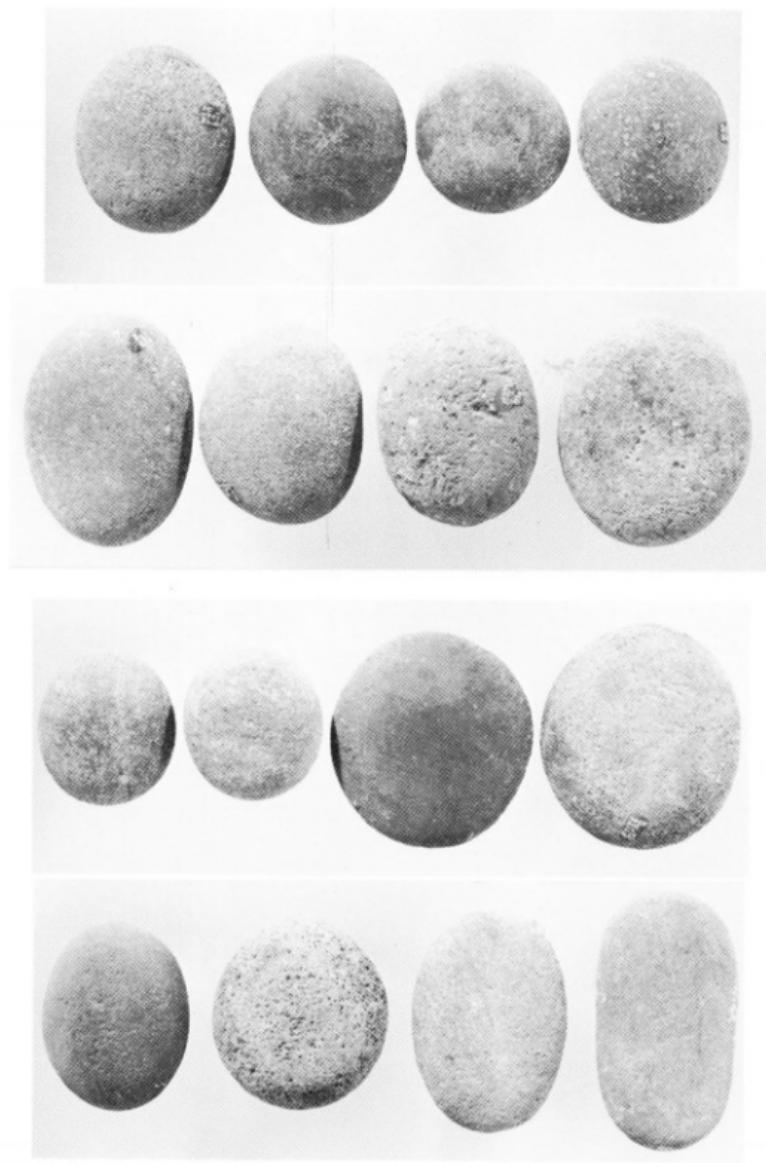
圖版55 石器 I 類 ($S = \frac{1}{4}$)



図版56 石墨 I・II・III類 (1 I類、2 II類、3~6 III類、S=1/2)



図版57 石皿IV類 ($S = \frac{1}{3}$)



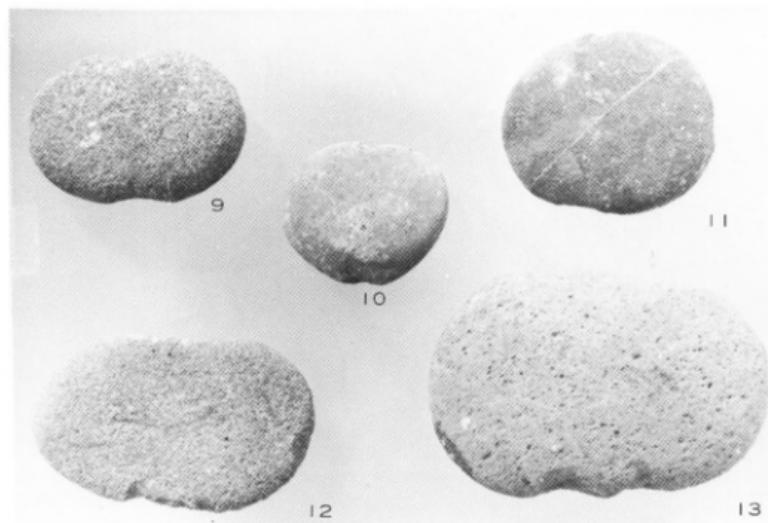
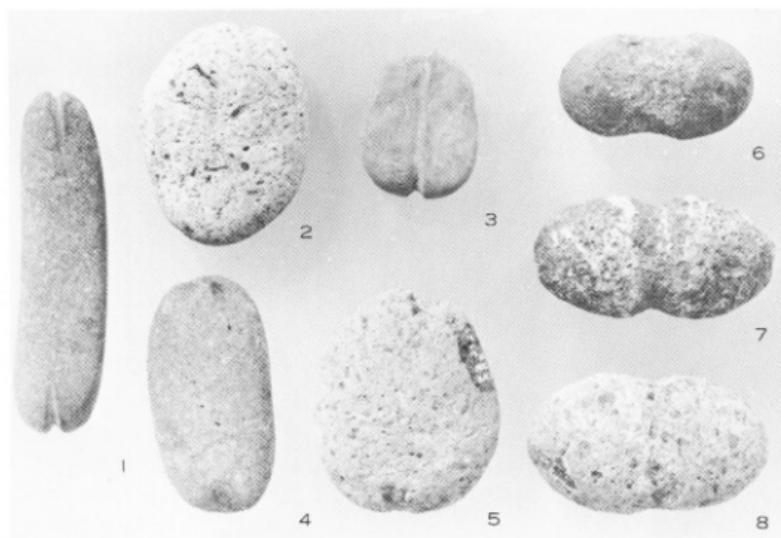
図版58 磨石 ($S = \frac{1}{3}$)



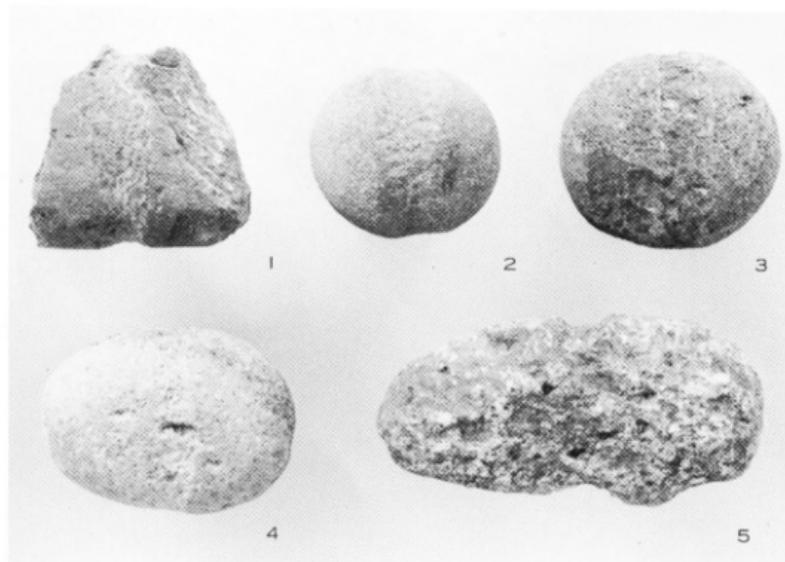
図版59 駁石 1 (上 II類、下 III類、S = ½)



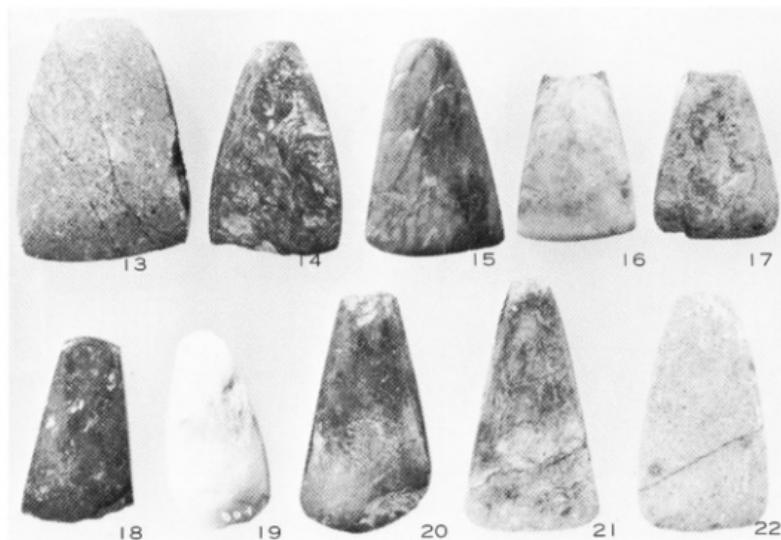
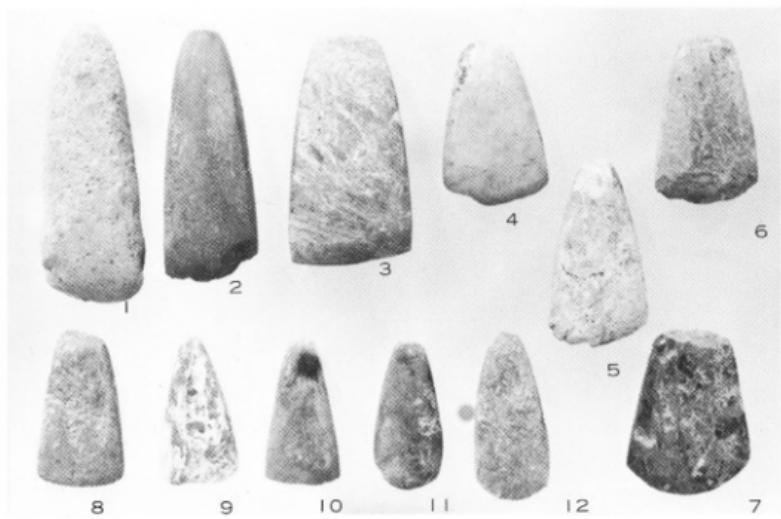
図版60 故石2 (上 タール状付着物、下 面取り石、S=½)



图版61 石锤 (1~2 切目石锤、3 有溝石锤、4~5 磔石锤I類、
6~8 敲打石锤、9~13 磔石锤II類, S = ½)



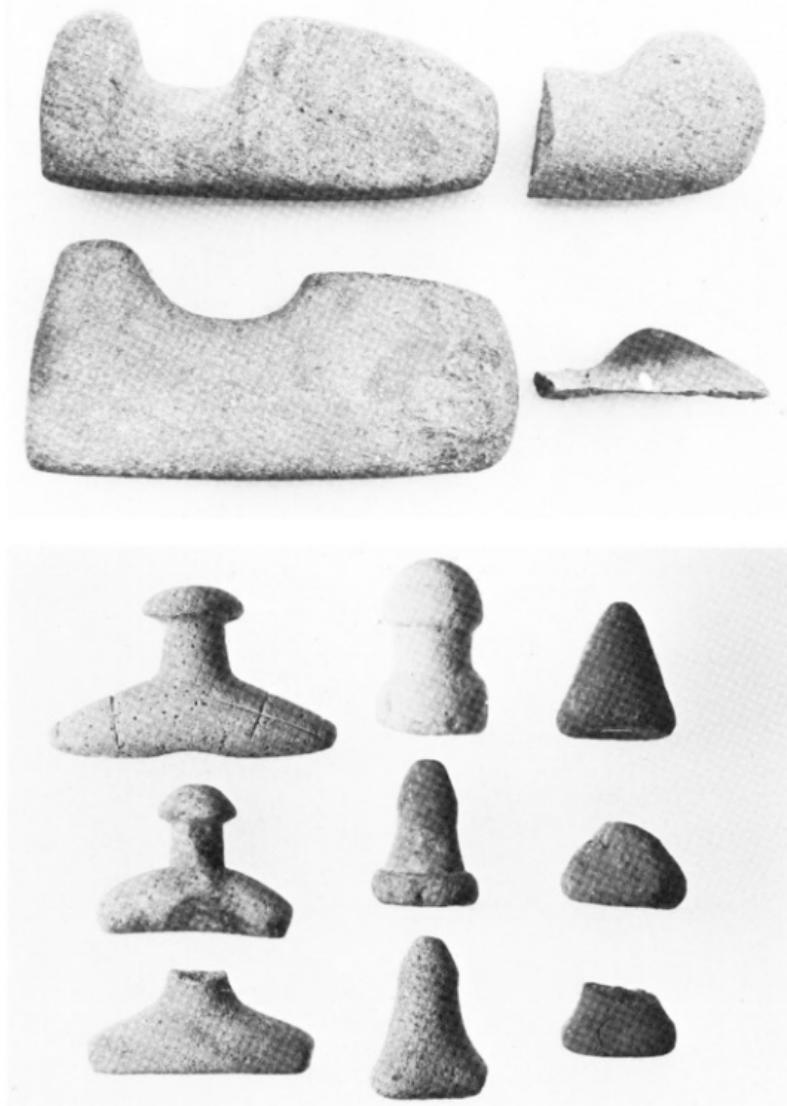
圖版62 上 敲打石錘 ($S = \frac{1}{2}$)
下 円盤狀石器 ($S = \frac{1}{3}$)



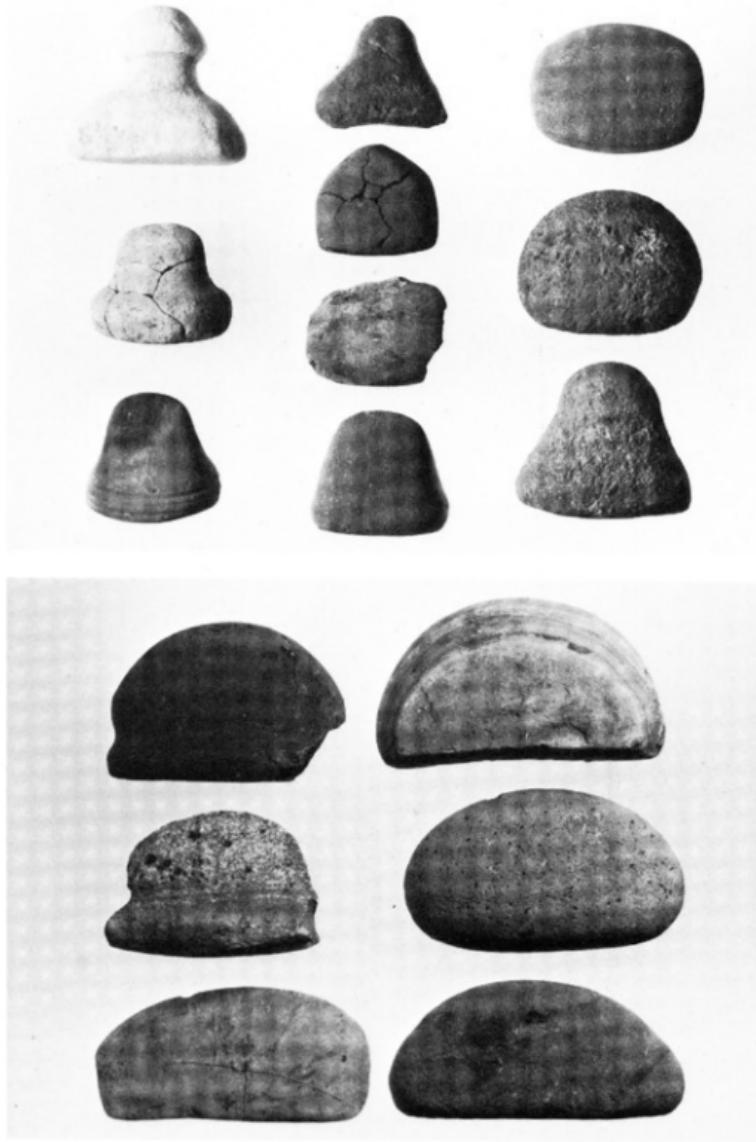
图版63 磨製石斧 (1 乳棒状、2~7 I類、8~15・20~22 II類、16~19 III類、
上 S=1/3、下 (S=2/3)



図版64 上 砥石 ($S = \frac{1}{2}$)
下 砥石状石製品・擦切石器 ($S = \frac{1}{2}$)



图版65 上 御物石器 ($S = \frac{1}{3}$)
下 石冠 ($S = \frac{1}{3}$)



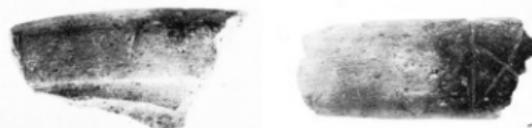
图版66 石冠 ($S = \frac{1}{2}$)



1



2



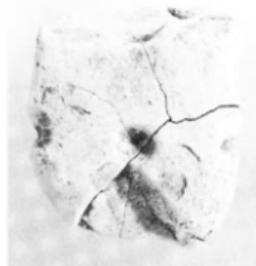
3



4



5

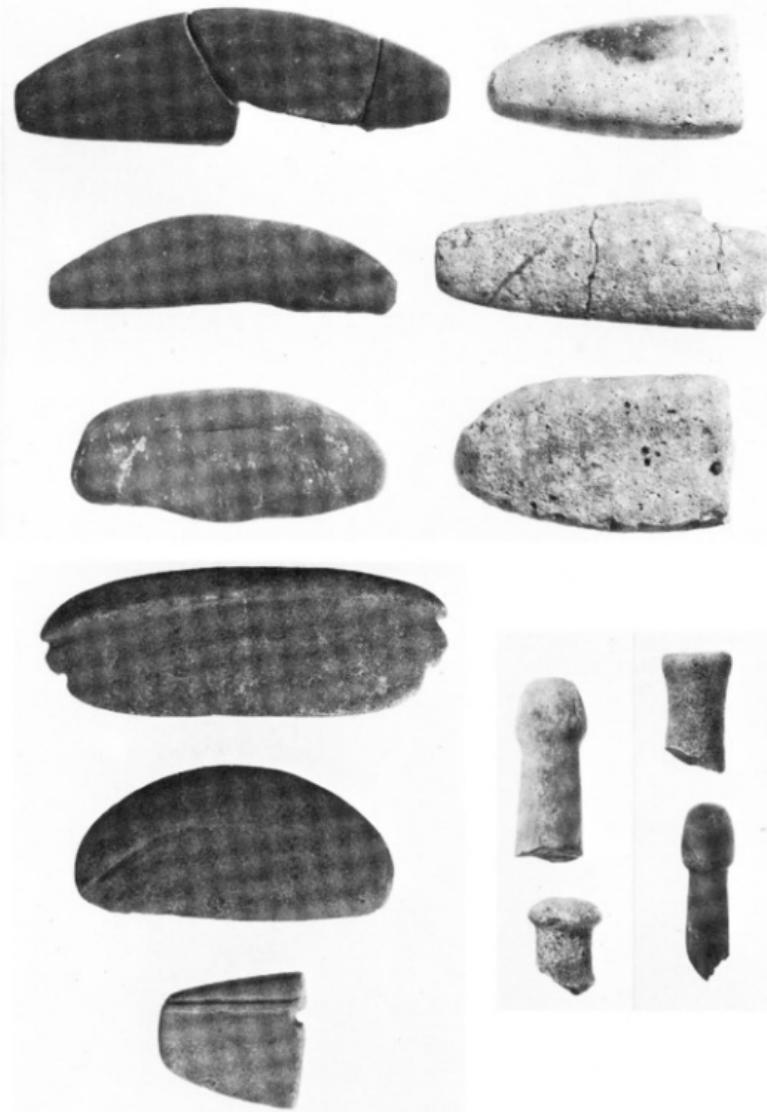


6



7

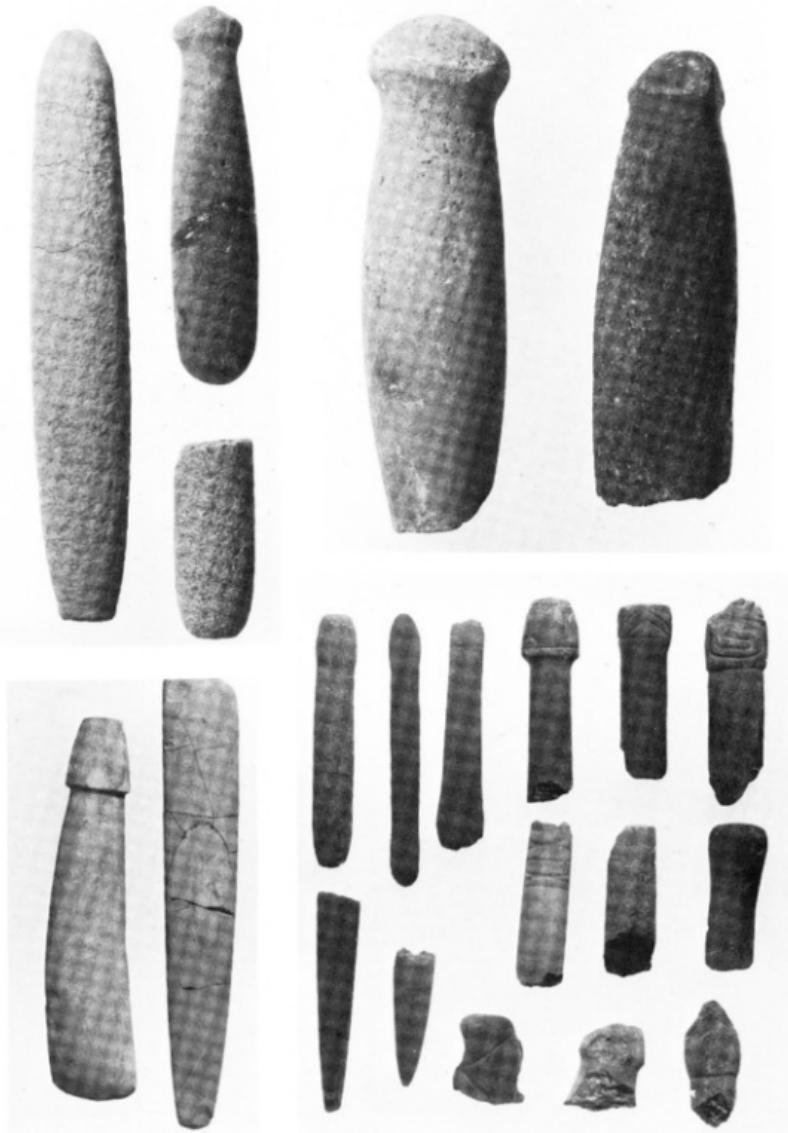
図版67 石製品 (1・2 石冠、3~5 石鋸形石製品、6・7 その他、1~3はS=1%,
4~7はS=3%)



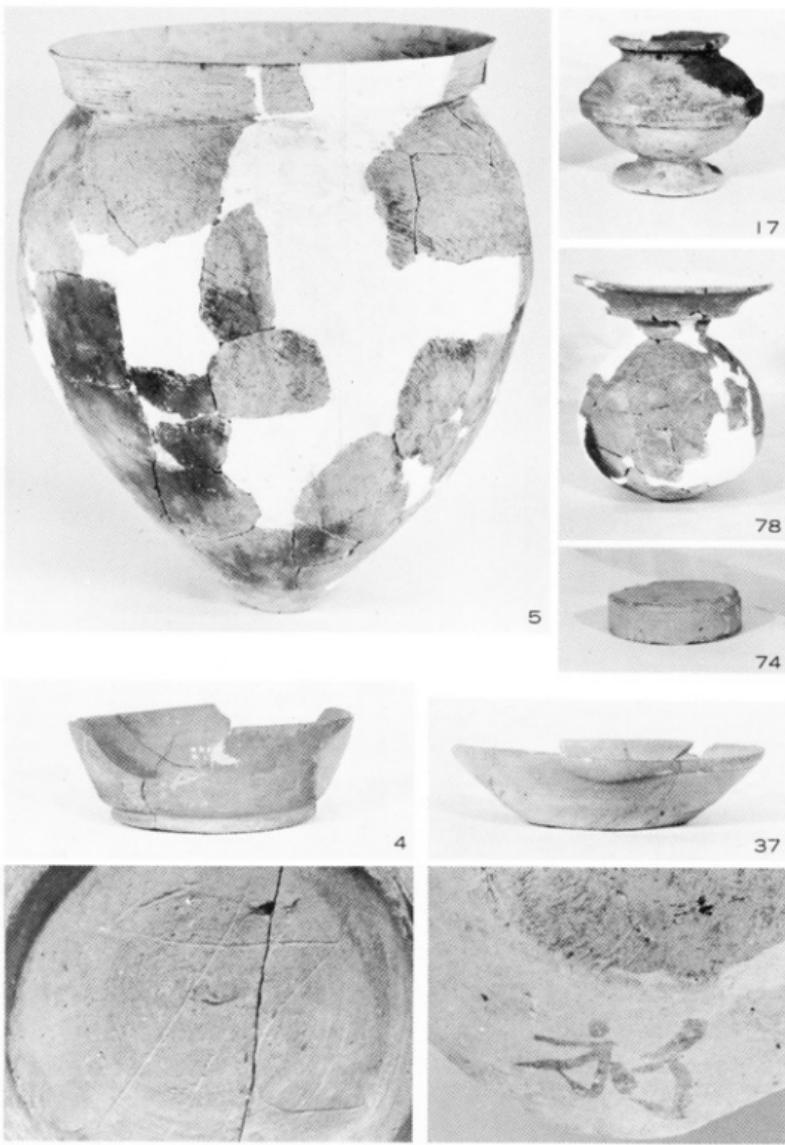
図版68 上 カツオ節形石製品 ($S = \frac{1}{3}$)

下左 石鋸形石製品 ($S = \frac{1}{3}$)

下右 石剣 ($S = \frac{1}{3}$)

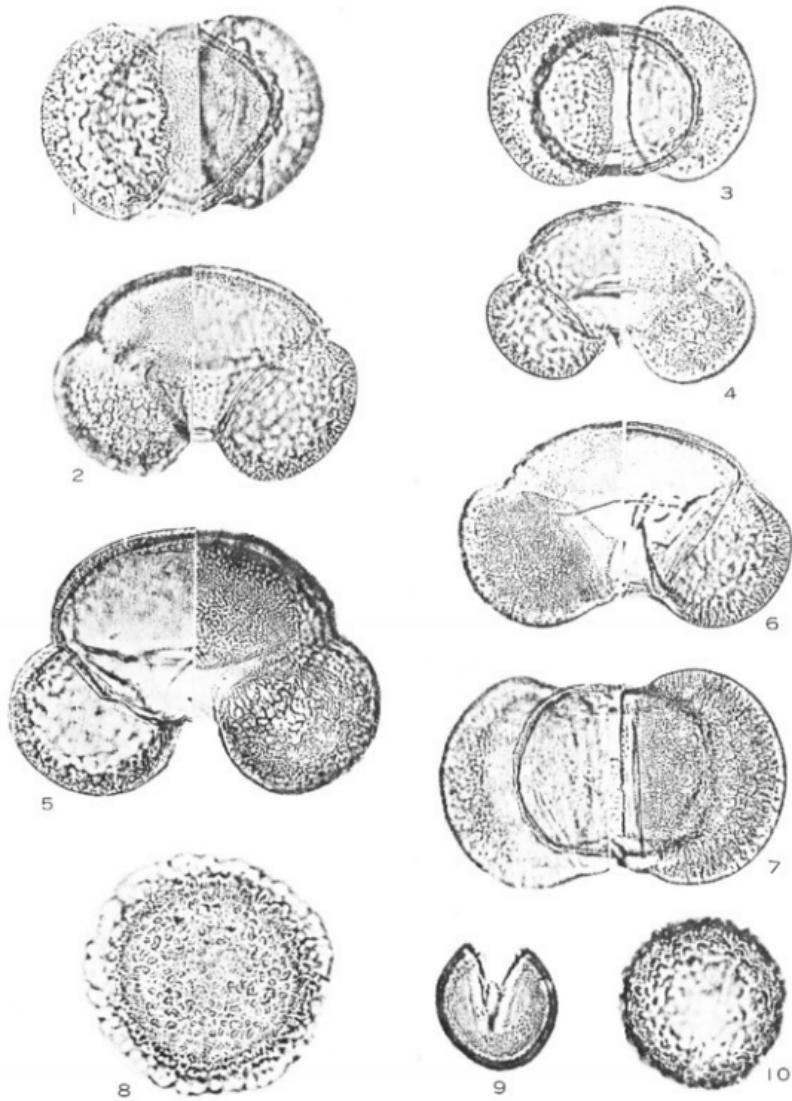


图版69 石棒·石劍·石刀 (S = 1/3)



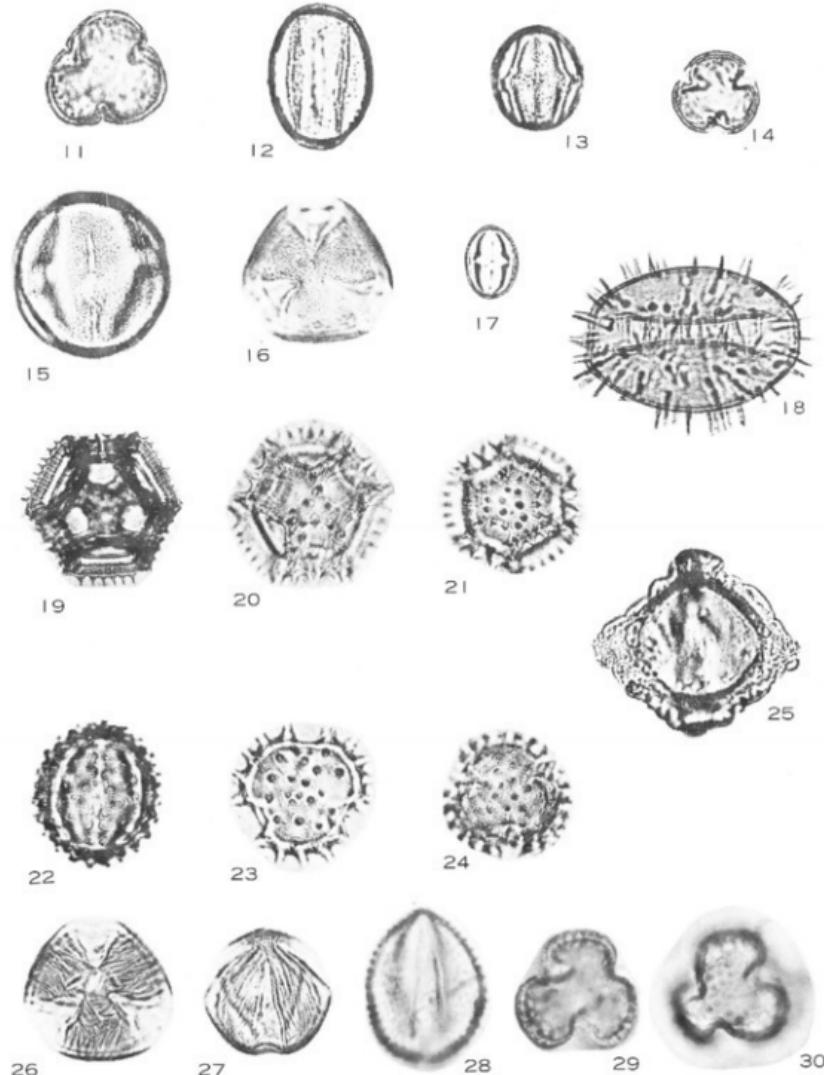
図版70 土師器・須恵器（縮尺不同）

（古墳時代前期の土師器〔5・17・78〕、同石製品〔74〕、
平安時代前期の須恵器4〔下、刻文字〕、同中期の須恵器37
〔下、墨書〕番号は第7章実測図と同じ）



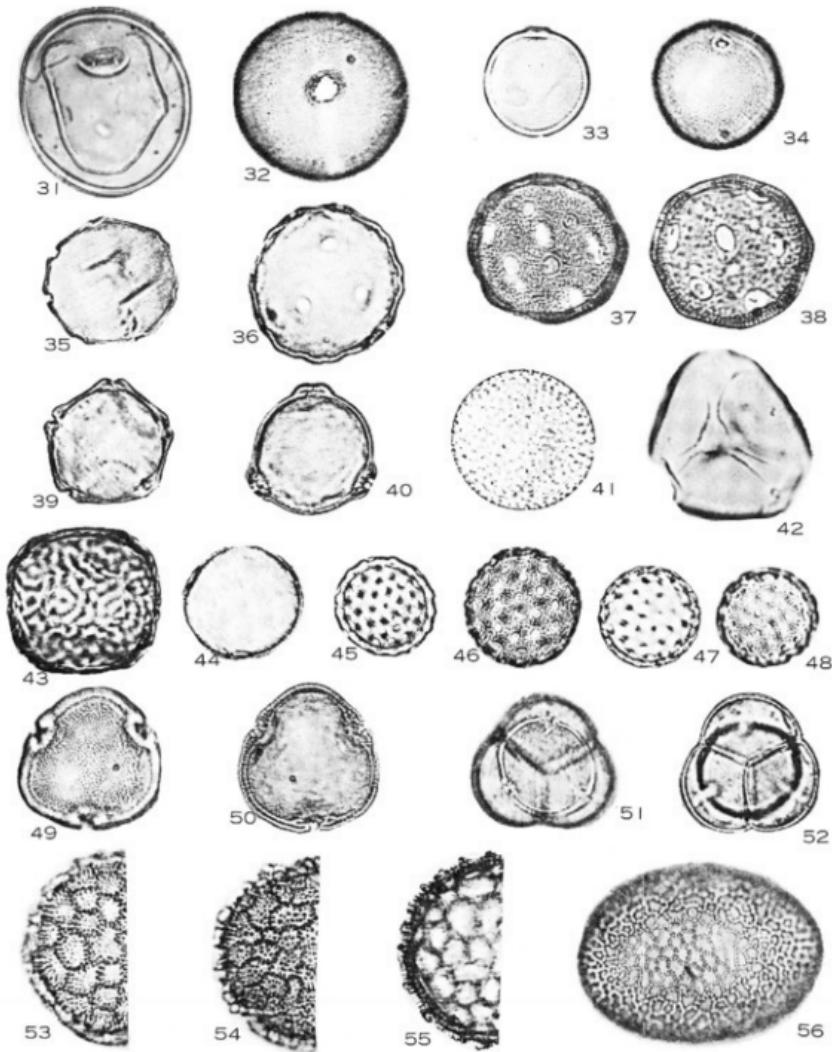
図版附1-1 花粉1(藤)

1-2: *Pinus haploxyton type* (ゴヨウマツ型) 3-4: *Pinus diploxyton type* (ニヨウマツ型)
 5: *Abies* (モミ類) 6-7: *Picea* (トウヒ類) 8-&10: *Tsuga* (ツガ)
 9: *Cryptomeria* (スギ)



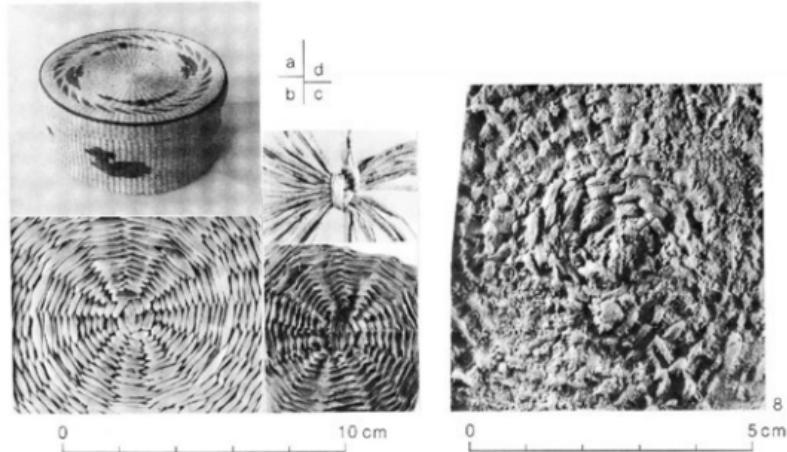
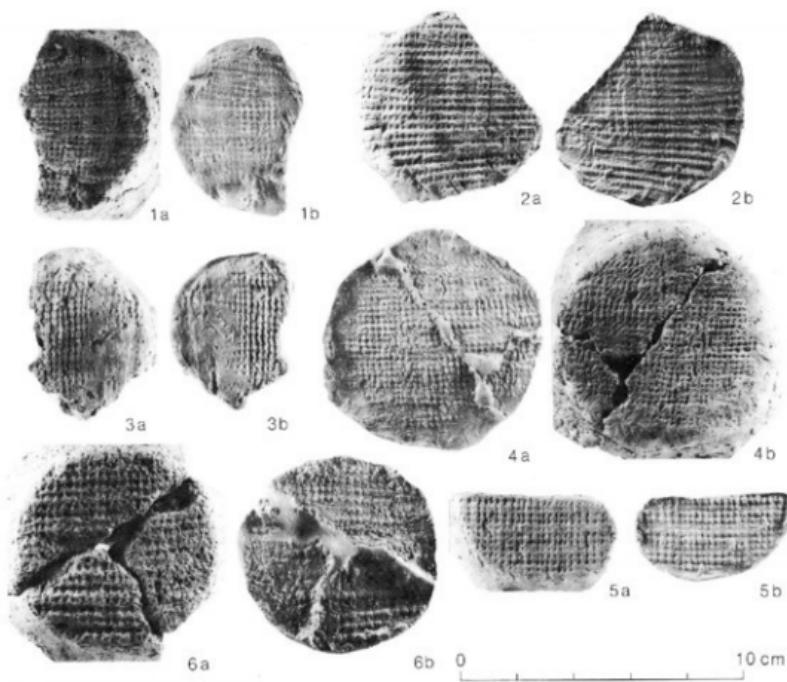
図版附 1 - II 花粉 2 (藤)

11-12 : Lepidobalanus (落葉Quercus、コナラ類) 13-14 : Cyclobalanopsis (常緑Quercus、カシ類)
 15 : Fagus crenata (ブナ) 16 : Styrax 17 : Shiia (シイノキ類) 18 : Nuphar (コウホネ)
 19-21 : Compositae (キク科) Cichorioideae 22-24 : Compositae (キク科) Carduoideae
 25 : Trapa (ヒシ) 26-27 : Menyanthes (ミツガシワ) 28-30 : Salix (ヤナギ類)



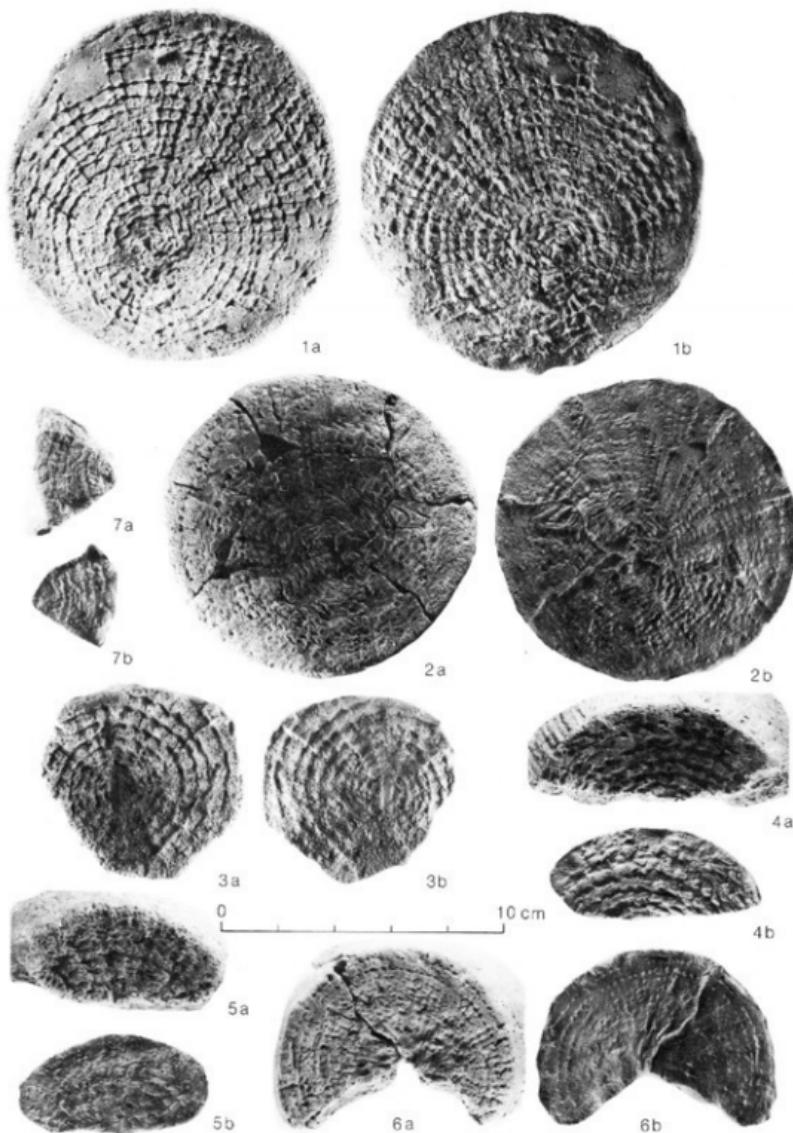
図版附 1-III 花粉 3 (藤)

- 31-32 : *Oryza* (イネ) 33-34 : Gramineae (禾本科) 35 : *Pterocarya* (サワグルミ)
 36 : *Juglans* (クルミ) 37-38 : *Stellaria* (ハコベ) 39 : *Alnus* (ハンノキ)
 40 : *Betula* (シラカンバ類) 41 : *Machilus* (タブ) 42 : *Primula* 43 : *Zelkova* (ケヤキ)
 44 : *Celtis* (エノキ) 45-46 : *Kochia* (ホオキギ) 47-48 : *Chenopodium* (シロザ)
 49-50 : *Tilia* (シナノキ) 51-52 : Ericaceae (ツツジ科) 53-55 : *Persicaria* (タデ類)
 56 : Liliaceae (ユリ科)



図版附 2-1 上、編布圧痕(a)と同モデリング陽像(b)

下、韓国製カゴ(7)とカゴ底圧痕第1類(8) 7 a・全景、7 b・底部中央、
7 c・同圧痕、7 d・同結束状態



図版附2-2

カゴ底圧痕(a)と同モデリング陽像(b)

野々市町御経塚遺跡

発行 昭和58年9月30日

発行者 野々市町教育委員会

編著者 高 堀 勝 喜

印刷所 北国書籍印刷株式会社
